THE CENTRAL REVIEW

中央公論

新年號

第三十年第一號・第三百十三號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



此廣告に依り御申越の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

●經國の大業不朽の盛事とは

四六判特製美裝

大正名

第拾編

文學博士 前田慧雲先生著

活修養

▲裝幀 川村淸雄畫伯

重版亦重版

世評一斑

⊙萬朝報曰く、深奥なる佛教の知識と該博なる先賢の事蹟を引きて吾人の日常生活に必要なる通俗道德を說けり…………

⊙讀賣新聞曰く、一章又一篇靜に讀み終つては卷頭なる博士の肖像に對するに其の高遠なる思想その淸純なる感情の一層鮮明に讀後腦裡に浸透して卓上燈下心身愈よ澄徹し博士が高潔なる人格の前に默然として端座するが如しこれ記者が昨夜の實感なり一度之を繙くもの亦記者と相語つてこの新著の眞價を讃嘆せずんばあらざるべし深邃なる佛教思想を基本として社會百般の事象に穩健なる批判を加へ座談平語の中我が國民性の歸趨を明かにす…………

⊙時事新報曰く、世人何人と雖も或る人世觀或る處世觀を有せざる人とては無かるべし然れども其れを傳へて以て他人の修養に資するは超人の所業にあらざれば甲斐なし著者は單に學識の上に於ても一代の師表と仰がるべき人にして其の自ら修養を積みたる佛陀の思想は物に觸れ折に觸れて穩健質實なる言葉の裡に發露し五一五頁一の閑文字なし世の父兄たるもの子弟の爲めに一本を薦めば其の想像外のもの有るべし……

⊙國民新聞曰く、宗教界の耆宿たる著者の學德一代に高きことは言ふ必要がない本書に載する五十五篇皆新時代の國民が修養工夫の道を說したるもの而して古來佛教が我國民性に浸潤すること深く廣きものなることを思ふ時著者の如き人を得て初めて完全なる敎化指導の人を見出したと言つて好いのである後進子弟は之に依りて赴くべき方面に迷ふことなきを得る……

⊙やまと新聞曰く、新時代には新解釋を要す博士が茲に着眼して新教訓を新民に提示せるは多とすべし敢て江湖に薦む…………

紙數各冊

●讀賣新聞曰く思ふに是れ最近の出版物中萬人の座右欠くべからざる現代の新論語ならんか！

發兌 東京日本橋區本石町二丁目 至誠堂 電話本局(長)三六六六番 振替東京一七四四番

信用なき店舗及び猥りなる賣品の廣告は掲載謝絶す

◉大正名著文庫は讀書界の鍵なり

紙數各册四百頁內外

大正名

◉[illegible]和田垣謙三先生著 ▲[illegible]

第一編

兎糞錄

三拾壹版

好評湧出天下無比批評一斑

◉東京朝日新聞曰く、(折に觸れ時に應じ興來り情湧く毎にポツリポツリポロリポロリ飛び出したるもの即ち是れ)とこれ兎糞錄の名ある所以也所謂和田垣一流の洒落什歌を亂發し得意の英語を應用し詩歌俳諧を自由に雜へて意表外の落を取る等人をして覺えず哄笑を禁ずる能はざらしむ◉萬朝報曰く、時に應じ折に觸れ二ッ三ッ宛飛び〳〵に讀んで見やうと思ひしに一氣呵成に讀んで了ひぬ著者が得意のウイットとユーモアの人を魅するものあればなり◉時事新報曰く、博士の氣焰錄吐噴錄にして例の縱横自在なる滑稽と皮肉はいかなる人をも噴飯せしめ感服せしめずんば止まず其豐富なる學識と遠慮なく吐噴する處博士ならでは見られぬ所也◉二六曰く、洒脫滑稽頤を解くもあれば諷刺辛辣骨に徹するもあり就中英文棄兒行一篇は純文學として妙技神に入る近來の一大快著◉實業之世界曰く、收むる所百卌餘悉く金玉の響きあらざるはなし博士例の輕妙洒脫飄逸奇拔奇想落天外の構想により噴出したるもの一讀再讀三讀尙且つ飽くを知らざらしむ兎に角如何のものにやと一度手にして先づ電車裡に之を讀む然るに我知らずフフンと噴き出して向側の乘客に怪しまるゝこと屢也宅に持ち歸りて讀む又しても家人の怪しむ所となり遂に書中の說明を爲せに一時に笑聲起りてフアン所に非ずキャッキャッと叫ぶ評者は腮を解き腹を抱へ又泣かされたり實に滑稽の奧に涙を藏し諧謔の底に人生の眞理を寓す世を啓發し人を誘導し無限の活教訓を含む今古獨歩なり

◉大正出版界を震動せる破天荒の快著！

(前付の五)

發兌 東京日本橋區本石町三丁目 至誠堂 電話本局長三六六六番 振替東京一七四四番

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

智識修養の大寶庫爲めに開かる可し

著文庫

定價各冊 金壹圓廿錢

◉送料內地

◉大日本

二編

大町桂月先生著

人の運

◉人生の一大福音！ ◉處世活動の指針！

貳拾貳版

◉時事新報曰、著者の觀察と文辭とによりて不動の眞理を作れるも、ノ言々句々著者の人格反映して揃快の見玲瓏の女辭皆味ふべく議者にして反覆玩味せばㄐの人處世上に稗益を受くる甚大

開運座右の寶典

每月一回必ず讀め

内容目次一斑

◉運は運世運轉する也◉獨斷の人を去つて果斷の人に來る◉頑固の人を去つて自信ある人に來る◉酒に溺るゝ人を去つて酒に狂はぬ人に來る◉女に迷ふ人を去つて女に優しき人に來る◉屁理窟云ふ人を去つて才智の動く人に來る◉己に寬大なる人を去つて人に寬大なる人に來る◉自暴を起す人を去つて憤を發する人に來る◉人を怨む人を去つて人を愛する人に來る◉肩先の勇氣の人を去つて腹底の勇氣の人に來る◉自ら侮る人を去つて分を守る人に來る◉慾の多き人を去つて慾ノ大なる人に來る◉傍觀する人を去つて奮鬪する人に來る◉顧慮する人を去つて熱慮する人に來る◉厭き易き人を去つて見切の善き人に來る◉小事に拘泥する人を去つて小事を忽にせざる人に來る◉人を恐るる人を去つて天を恐るゝ人に來る◉過去を思ふ人を去つて現在を思ふ人に來る◉現在を思ふ人を去つて未來を思ふ人に來る：：◉餘論には人相陶宮九星八卦御鬮判斷相性等在來世俗の疑視せる所をも洩らさず警拔人の意表に出づ▲請ふ何人も一本を座右に備へて開運の眞理を自覺あれ

發兌 東京日本橋區本石町三丁目 至誠堂 電話本局長三六六六 振替東京一七四四

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

(前付の六)

◉本文庫は著者各自の特色を發揮せる

大正名

新舊名批
四百頁內外

杉村楚人冠先生著▲

第參編

へちまのかは

重版亦重版

本書は現代文壇の重鎮楚人冠先生の廿餘年の心血を灑がれたる力作なり先生の文才氣煥發行く處として可ならざるなくキビ〳〵と齒切よく**覇氣稜々人**を**凌**ぐの**概**あり然も行文流暢**趣味**深甚蓋し本書の如く個性のよく發揮せられたるもの天下其の比を見ず是れ先生一代の傑作集

世評一班

◉時事新報曰く、著者貳十年間の波瀾ある生活を叙述せしもの氏の事や斷じて他の模範追隨を許さゞるものあり獨特の調子と奇想天外の落想とは必ず讀者を魅し去つて已まざるべし…………

◉萬朝報曰く、リヤンの學生、講師、官吏、新聞記者、渡歐等約二十年間に亘る著者の實生活を抽出したるもの著想奇警加ふるに新らしき圓熟せる筆致を以てす洵に趣味廣き楚人冠の獨得の好著といふべく以て妙筆として「みゝずのたはこと」「兎糞錄」等に對せしむべし…………

◉日本曰く、著者生來の機智と英文脈より來るユーモアとは遺憾なく窺ふを得べく何れも棄て難き小品許りてある……

◉國民新聞曰く、著者各自の特色を發揮したる名文傑作として讀書界の注目を集めつゝあり…………

◉大日本茗溪會より本書を大正三年五月全國學生及び青年の讀物として現代斬新文學の模範として審査選定せらる

發兌 東京日本橋區本石町三丁目 至誠堂 電話本局長三六六六番 振替東京一七四番

名文傑作として讀書界の視線を集む

定價各冊 金壹圓廿錢

著文庫

第四編

浪六先生著 ▲口繪著者自畫自筆

罵倒錄

重版亦重版

世評一斑

◉實業之世界曰く、本書は大正名著文庫第四編であつて其先出姉妹篇として既に和田垣博士の兎糞錄大町桂月氏の人の運杉村楚人冠氏の「へちまのかは」等がある▲其雄健にして圓轉滑脱せる工合なんどは凡筆とは決して云へないのである：：▲本書は氏一流の筆法を鋭くして、片端から小氣味よく罵倒した社會觀人生觀浮世觀で其の世道人心を縱論横議せる所、キビ〳〵として痛快を極めて居る▲精勵刻苦の蟻が午睡を貪つて居る人間を罵倒する春麗かな日翩翻として戯るゝ雄蝶雌蝶が人間の戀は僞りてあると罵倒する上野の森に稽ふ雅共か樹の下を通る氣障なハイカラに糞をひりかけやうと相談する其他色男の解説嘆天下の説解江戸ッ兒と上方贅六等何れも輕妙なそして奇警な文字四十八項の多きに達して居る：：▲讀み去り讀み來り、無量の興味が油然として湧出するのは流石に著者の老熟：：◉二六曰く、浪六氏の隨筆隨想錄也飛ぶが如き筆を以て縱横自在に人生の機微を擒縱したるもの揶揄あり皮肉あり滑稽あり諧謔あり而白き事限りなく天下の珍書

●送料内地●

浪六先生曰くあまり大膽なる露骨なる無遠慮に過ぎ

發兌 東京日本橋區本石町三丁目 至誠堂 電話本局長三六六六 振替東京一七四四

●公明なる各新聞各雜誌は擧つて

四六判　特製美裝

大正名

紙數各冊　四百頁內外

第五篇

法學博士　和田垣謙三先生著

吐雲録

▲挿畫　川村、德永、齋藤三書伯數葉

重版亦重版

世評一斑

●東京朝日新聞曰く、著者前に兎糞録を出して其の滑稽突梯に人の頤を解かしめしが本書は之が姉妹篇とも見做すべきもの就中英語の洒落に至りてはまことに著者の獨得と云ふべし……

●時事新報曰く、機智詼謔は其の人の天才にして作らんとして作り得ず吐かんとして吐き得ず隨時隨所に發現する者博士の滑稽突梯を以て江湖の第一人たるは已に世評あり況んや學識の豐富多方面を加ふるに於て眞に鬼に金棒の觀あり本書は兎糞録以後の藻を集めたる者諷刺警語例によつて秋霜よりも鋭く氣焰の五彩滿紙に燎爛何れにしても痛快淋漓三斗の溜飲一時に下るを覺ゆ……

●實業之世界曰く、博士一流の隨筆録なり古今東西の佳話逸話寓話感話格言金言等手當り次第に取り來つて自家獨得の俎上に調理するもの二百篇に近さの多數に及び才氣横溢して五彩の怪雲將に襲來せんとするの概あり然かも其の間博士一家の把持貫徹して諧謔戯談の裡に時代の弊風を剔抉して完膚なし

●日本新聞曰く、本書の如きは明治から大正へかけての隨筆ものとして後代に必ず興味を持たせるものに違ひない……

●大日本著溪會に於て普通教育振興の爲め大正三年十月本書を全國中學上級生相當の讀物として審査選定せらる

發兌　東京日本橋區本石町一丁目　至誠堂　電話本局三〇六六六番　振替東京一七四四番

此廣告に依り御申込の方は**中央公論**に依る旨御記附を乞ふ

本文庫を讀まずんば書物を說く勿れ

著文庫

▲定價各冊 ▲金壹圓廿錢

郵送料內地 各冊金八錢

第九編

▲竹越三叉先生著

三叉文存

▲裝幀 川村清雄畫伯

華麗の文莊重の辭高邁の見警拔の識常に俗界に先じて進み**社會萬般**の方面に**木鐸**となる昔今の世何人も竹越三叉先生を推すべしての編先生の文の粋を拔けり教訓あり批評あり譬喩あり篇々皆得易からざるの大文字

重版亦重版

世評一斑

⦿時事新報曰く、警拔の議見を清新俊逸なる筆致に載せて社會萬般の方面に指導獎勵を怠らざる著者の如きは蓋し寡かるべし本書は著者が折に觸れ時に隨ひて物せる感想文を蒐む篇々皆得易からざるの大文字字々珠玉の如く觸るゝ所鏘然として聲あり花に濺ぐの涙は直に時を憂ふる志士の思ひと和し政壇と時勢を指示する時代の好指針たるのみならず一讀人を三嘆せしむる文章の好模範

⦿國民新聞曰く、長短いろ〳〵一百篇或は時事に觸れたる膠州灣占領問題を說くあり現代婦人問題論あり教育を論じ軍備を談じ哲學文學さては人物月旦花卉品評等に至り多趣味多方面を極めて居る其の文章に於ては自づから一家を成せるもの或は典雅優婉或は清新洒脫朗誦乂甚だ快なるものがある三叉文粹として傳ふべきが適當である

⦿やまと新聞曰く、竹越三叉の文既に世定評あり輕舸の江を下るが如く水勢の趨くが儘に或は右し或は左し兩岸の風光ゝ常に興を添ふ筆路暢達にして紆餘多變なる方今三叉子に及ぶものなし

⦿太陽曰く、三叉氏の文清効明徹鮮麗の趣に富むは猶ほ清潭に花影の映じ高秋に明月の懸るが如きものあり殊に最も俗惡なるべき筈の政治問題社會問題を提へて之を醇化し美化するの點に至ては正に著者の獨壇場也本書の如きは此意義に於て著者の從來の著書中にありても優に一頭地を拔くものと云ふべし著者は夫れ我現代の蘇東坡なるか

●**軍國の志士**必ず一讀せざる可ず**平和**を**愛**する**者亦之**を**繙**かざるべけんや

（前付の十二）

發兌 東京日本橋區本石町三丁目 **至誠堂** 振替東京一七一四五番 電話本局長三六六六番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告は嚴に謝絕す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

古河家經營

一 當會社の保險料は低廉にして且つ利益金の百分の五十以上を五箇年目毎に契約者に分配す

一 當會社の保險料拂込方法は保險證券訂正の煩を要せず其變更契約者の隨意とす

一 當會社は拂濟保險の便法を設けあり

博愛生命

社長 男爵 中島久萬吉
專務取締役 小原元美
專務取締役 鈴木市之助
常任監査役 安達仁造

本店 東京市日本橋區本町四丁目十五、十六番地
電長本局一八五六、五一五〇、一三八七番
振替貯金口座東京一七一七番
支店 大阪市東區本町一ノ一二(電長本局三三一一番)

一 當會社は低利なる金融機關の設あり

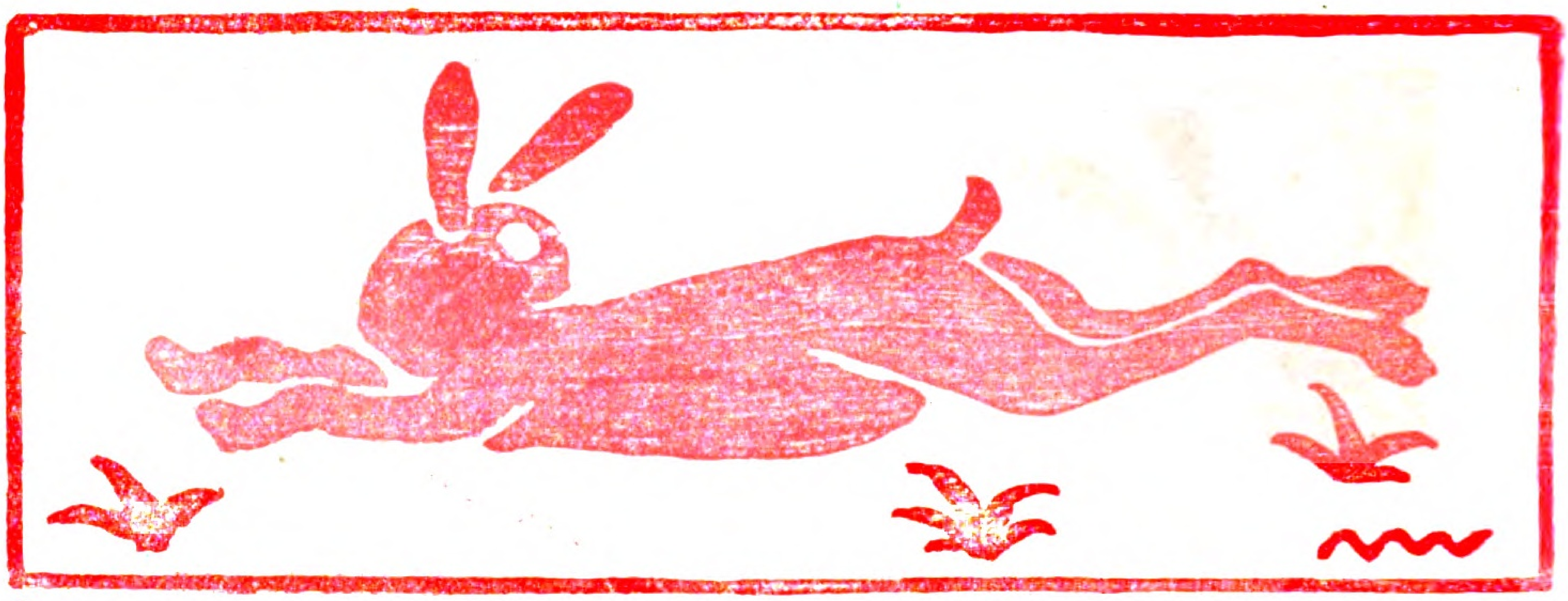
一 當會社は被保險者の年齡範圍最も廣く滿九年七箇月以上滿六十年六箇月迄契約す

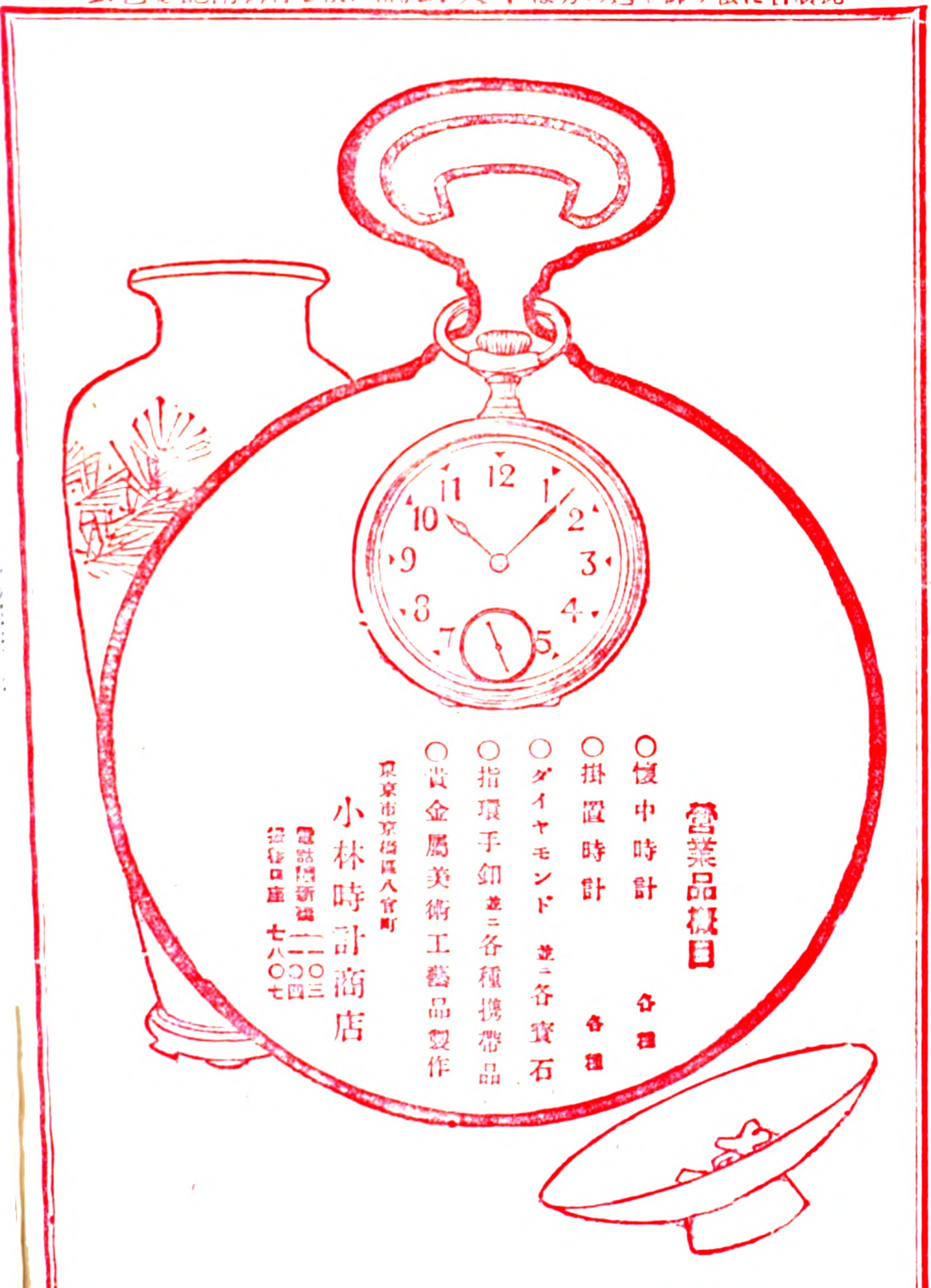
一 當會社の保險金支拂は最も迅速なり是れ保險契約の目的を遂行せんが爲なり

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



中央公論第三十年一月號目次




營業品目
○懷中時計　各種
○掛置時計　各種
○ダイヤモンド並ニ各寶石
○指環手釦並ニ各種携帶品
○貴金屬美術工藝品製作
東京市京橋區八官町
小林時計商店
電話新橋　一一〇三
一一〇四
振替口座　七八〇七

CARDINAUX



Winter Landscape

大正四年を迎ふ

大正四年を迎ふるは國家大に成すあるの新年を迎ふるなり、青島の陥落は戰局の一段落を告げしも山東省處分其後に關しては案件未だ決定せず一に歐洲大戰の終局を待たざるべからずして、必ずや大正四年に於ける外交上の大事件たるべし、其交涉關係は單に獨逸を相手とするに非ず、亦た同盟の英國、協商國たる露佛、更に世界列國中最も不得要領の中華民國を相手にせざるべからず、加ふるに其處分案に對しては開戰當初の言質に甚だしく拘束制限せらるべき恐なき能はずして、至誠巨腕の人局に當り天下一致の後援に支持せらるゝに非ざるよりは到底國家の要望を滿充すべからざるなり、故に今次の對獨事件は戰爭其ものに付ては遠く日露戰役に及ばずと雖も、外交談判の複雜なる其齎らすべき結果の利害關係の大なるに付ては寧ろ彼に優さるも決して劣るものに非ず、是れ實に我國上下が事局の解決に向つて最大の覺悟を要する所以なり、此際內に政局を整理し上下一致の態度を定むる爲めには我政界は或は一時の紛擾を經過せざるを得ざるべし。

大正四年は又た實に芽出度き年なり、去春の御凶變の爲め一時御延期となりし　陛下の御即位式は本年秋を以て擧行せらるべしと拜聞す、吾々臣民は速に內政の整理を遂げ、首尾よく外交の局を收め、帝國が千古未曾有の優位を極東に占むるの秋に於て、列强歡呼の裏に、陛下登極の大典を奉祝せんことを期せずんばあらず。

中央公論社同人

中央公論



一月號
第三十年第一號
第三百十三號

大正政界の大勢を論ず

（一）增師案は爆裂彈

今や青島已に陷落し我出征の將士漸く方に凱旋するあり、獨艦の一部久しく南米西岸外に出沒して日英艦隊の監視を免れつゝありしものも遂に膺懲に服したりしを以て、兎も角我が對獨戰の目的は既に達せられたりと謂ふべく、從つて在野黨各派が戰時の所謂擧國一致を打切り、直正面より大隈內閣反對の態度を宣明せるは勢止むを得ざるなり、蓋し青島既に陷落せりと云ふも歐洲の大局に於て戰亂漸く酣にして人をして轉た前途の遼遠を憶はしむるものあり、殊に山東の處分は方に今後に屬するを以て政府が國

民の後援に待つこと益々多からざるを得ず、故に擧國一致の必要は今後と雖も毫も開戰中に讓らずと云ふを得べく、而して吾人は實に然らざるを得ざる筈のものなりと思ふ、然るに當春以來三回の臨時議會に於て傲然として衆議院の多數黨を睥睨し若し反對するの勇氣あらば反對せよ我れ擧國一致を强ゐすと威迫して憚らざりし大隈首相及その黨與は反對黨に對して最早今日以上擧國一致を要望するの權利なきものと謂はざるべからず、

朝野兩黨の衝突は果して如何なる題目を主とすべきか、國民黨は增師反對の一天張を以て突進せんとし、政友會は增師以外他に問題を求めんとするもの丶如く、原總裁の政友會大會に於ける演說によれば政府の外交不信任を主眼とすべきが如くにも見ゆれど、究竟するに幾多迂餘曲折の末政國兩黨の一致して採る所の問題は必ずや增師延期にあらんか、增師問題の解決方法に關しては兩黨多少見を異にするが如きも一時延期を必要とするに於て其步調を一にする必ずしも難しとせじ、嗚呼二師增設案は實に政界の爆裂彈なるかな、大正元年十二月五日西園寺內閣は增師案の爆發に遭ひ瓦解し、二箇年後の同月同日を以て召集せられし第三十五帝國議會に向つて大隈內閣は同一の爆裂彈を投ぜんとするなり、今や議會開會の始めに當り日比谷原頭を眺むれば戰雲漠々天を蔽ひ光景頗る暗憺たり、雪となるか雨となるか、大風か地震か、隈閣瓦解か議會解散か、久しく山東の天地を蔽ひたりし低氣流は今や來りて我東京の天地を壓せり、我政界は朝となく野となく、一種悽愴の氣に滿ち物情爲めに騷然たる亦止むを得ざるなり、

（二）隈閣のヂレンマ

抑も今日の複雜にして切迫せる政局を產出せし原因に關しては之を八箇月以前の隈閣組織の事情に求めざる可らず、大正三年三月末に山本內閣の斃るゝや、之に代はるべき新內閣は若しも前年來の憲政擁護の主張に基きて考ふれば衆議院の多數黨たる政友會を基礎とする內閣たらざるべからずとは理論の歸着する所何人も否む能はざることなり、現に政友會の幹部に在りては其當時この理論の制裁を脫する能はず、且つ餘りに自家の多數に自惚れて慢然政機を逸し意外の失望を招けり、是蓋し內閣は議會の多數を基礎とすべしと云ふ主張の廢れたるにはあらず、偶々一種の事情の爲め一時の變調を來せるのみ、一種の事情とは他なし、政友會が海軍收賄の責任の一部を世論の前に負はされしことにして、素より寃罪に相違なきも亦た是れ愚直機を見るの明なきより招きし報復のみ、一部の策士は巧みに政友會の此弱點を利用し大隈內閣案を勸說せしが、清浦內閣の組織難と共に、元老會議の納るゝ所となり竟に其成立を見るに至れり、元來衰朽の大隈伯が一躍政權を握ることあるべしとは世間何人も豫期せざりし所、而かも其痴人の夢たりしもの一朝にして事實となりしは以て其場合に於ける政界の甚だしき變調にありしを察すべく、決して憲政主義の常道を以て解說す可らず、大隈伯出廬當時の事情を察するに伯亦た憲政の常道に因りて內閣を組織せしにあらず陽に非政友三派を基礎として陰に長閥と結托して政權を掌握したるが故に、其政綱の如き形式 發表したるものは形式に屬し、眞の目的は自ら他にあり、即ち二個師團

を增設し政友會の絕對多數を打破するは此れ隈閣の眞の存立條件たりしなり、蓋し增師案と隈伯の因緣は一朝一夕のことに非ず前年西園寺內閣の增師問題に困むや世人擧りて非增師を唱へ陸軍の橫暴を咎むるに際し、獨り大隈伯は西園寺內閣を痛罵し之を破壞せし陰謀に同情せり、又た山本內閣を斃し大隈內閣を擁立するに與りて力ありし貴族院中の一派が其山本內閣の立てし豫算を不成立ならしむるに際し「特に海軍に重きを置き偏倚の嫌あり」と云ふを一の理由となせしより見るも隈閣は初より是非とも增師內閣たらざる可らざる運命の下に立ちしなり、而して政友會打破の事に至りては是實に隈閣に取り死活の問題なりと云はざるべからず。平生立憲を標榜する政治家として少數の三派を基礎として內閣を組織すると已に甚だしき矛盾たるのみならず三派中の國民黨は隈伯個人に對して好意を有すと云ふの外初めより內閣の與黨を以て居らず其首領犬養氏は竟に入閣の勸誘を退け全然行動の自由を保留せり、故に隈閣の眞の味方としては事實上同志會と中正會の外なく、此中にも頗る御し難き分子も少なからず、然れば隈閣を眞の立憲內閣ならしめんば是非とも最も早き機會を捉へて衆議院の解散を斷行すべかりしなり、斯の如き機會としては第二臨時議會の結了後を以て最も可なりとせしも、不幸にして隈閣は此の英斷に出でず少數黨內閣として本議會を迎ふるに至れり、若しも隈伯智あらば第三臨時議會に際し大に其態度を改め反對黨をして眞に快よく擧國一致の實を擧げしめべく努力せしなるべけれど、最も老練ならざるべからざる伯は客氣勝心滿々として反對黨の陣笠を相手取り喧嘩を吹き懸け、遂に本議會に入りて殆んと免れ難きヂレムマに逢着せり。ヂレムマとは何ぞ、增師案の撤回か解散か兩者其一を擇ばざる可らざ

る苦境に外ならずして、若しも強ゐて增師案を通過せしめんとせば解散の斷行を餘儀なくせられ增師も亦延期に附せらるべく、若しも反對黨の攻擊を寬和し解散を避けんとせば增師案を撤回せざるべからず、隈閣の脚地よりせば解散は寧ろ其希望する所なりと言ふことを得べきも、此の外交多事に際し內、政界の一大紛擾を惹起するは必ず其頗る迷惑とする所なるべし、又た現在其黨與の狀態を顧みば此際に議會を解散して多數を得んとするに於て果して時機の宜きを得たるものなるか、即ち中正會は依然として結合の中心なく、同志會は表面の總理加藤男と實際の總理大石正已氏との間に氷炭相容れざるの狀態に在り、斯の如き統一なき烏合を率ゐて總選擧に臨み政府黨の多數を制せんと欲するは無謀の擧に非さるなきか、若しも總選擧に對する事實上の內相大浦子の胸中を叩かば或は官權濫用を豫期するなるべきも、近來の地方官は十年前に比し頗る利口になりしを以て果して思切たる撰擧干涉の行はれ得べきや、吾人は官權濫用の效果は意外に見るべきもの少なかるべきを想はずんはあらず、殊に若しも增師延期の問題に對し解散を斷行せんか是れ反對黨に一大鋭刀を振はしむるなり、隈閣與黨の不利此上あるべからず、然らは增師案を撤回して局面を收むるの策に出でんか、陸軍は果して穩かに之を承諾すべきが、彼等一派の脚地よりせは隈閣は增師を斷行するの器械なるのみ。若し隈閣にして增師を實行し能はずとせば突如として內閣破壞計畫の天の一方より現はれ、隈伯の比喩を借りて言へば『飛行器の來る如く天兵の來る如く』にして來り伯が反對黨の破壞に餘念なきに乘して現內閣の背後を突きて之を破壞せんも亦未た知るべからず、

(三) 隈閣の功罪

増師案撤回か議會解散かのヂレムマは隈閣が避けんと欲して竟に避く能はさる所なるべきか、然れとも其より以前隈閣は反對派の質問に苦しめられ、衝突の末或は外交不信任を主眼とする糺彈に接することとあらんも計るべからず、回顧すれは大隈内閣の成立したるは去る四月十六日に在り爾來月を閲みすること八回に及び功罪の論すべきもの少なしとせず、若し其功績を算へんか、吾人は先つ指を海軍廓淸に屈せざるべからず、其手段方法に付ては識者の間多少の異存なきに非ずとするも、海軍要路に在る二三高官の犯罪より帝國海軍の蒙りし絶大の汚名を一掃し高貴なる名聲を回復し得たるは實に一大成功にして國民の感謝に價する所たり、次には對獨軍事行動の成績に指を屈すべく、靑島攻擊に關する陸海の作戰計畫及び其成績は殆んと遺憾なしと云はざるべからず、然れども軍旅の事は内閣以外別に其の責任者あり内閣は寧ろ間接の功に居るを得べきのみ、若夫れ内閣の直接責に任すべき開戰前後の外交に至りては果して機宜を得たりと云ふべきか、又將來の措置必す滿足を期すべしと謂ふを得べきか、或は戰爭の幕は首尾よく演了せりと雖も開戰當初以來の外交に誤られし爲め終局の交渉に向つて恐るべき危險を遺せりと云ふべきに非ざるなきか、其他一般内治の成績に付て檢閱せんに、隈伯は其就職當時頗る美事なる政綱を發表せり、曰く地方行政の弊害を洗除すべし、曰く言論集會結社の自由を尊重すべし、曰く選擧の弊害を除くべし、曰く教育の改善刷新を謀るべし、曰く財政の基礎を堅固にすべし、曰く外交を刷新す

べし、曰く産業を奨勵すべしと、其標榜する處一として美ならざるに非ずと雖も實蹟の其標榜に伴へるもの果して幾許ぞ、外交の刷新に付ては戰時外交の甚だ振はざるは既てに指摘せるか如くなるか、對米問題に關して前當局の米國政府に對する交渉手續を打切りしは頗る果斷の處置と云ふべかりしも、爾來加州土地法の危害より我移住者を保護せん爲め何等の方法を講せしを聞かず、殆んど無能無策に經過し來れるに非ざるなきか、隈閣は又た言論集會結社の自由を尊重すべしと云ふ、然るに先般某々新聞が偶々日支同盟案なるものを掲けて大に北京政府を驚かしたりと云ふに狼狽して突如として新聞社檢閲令を發布し大に言論の自由を拘束せんと圖り、世論の反對に遭ふて遽々然として事實上法令を實施せずと誓へるか如き亦た輕忽の譏を免る能はず、又大隈閣は大に財政の基礎を堅固にすべしと云ふ、然るに其財政運用は果して識者の贊同を博するに足れりや、現に其與黨たる同志會中に於にも現閣の財政非難の聲囂々たり、故桂公の女婿にして壯年代議士中錚々たる永島隆二氏は去る二日同志會評議員會席上論して左の如く言へり、曰く

増師問題の如きは我黨として斷じて唱道し得べきものに非ず、我立憲同志會の創立者たる故桂公の如き其立黨當初の趣旨より考ふるも先づ我國の疲弊せる財政を調理して經濟界の不振を振興するに意を用ゐたり、實に云ふ迄もなき事ながら我國は日露戰役後財政は比年困難に陷り國民の實生活は疾痛惨憺たる狀態にあり、然るに曩に我黨の標榜したる減廢税は勿論、大藏省劵の發行中止、其他税制の整理は時局の突發と共に之を一擲するの止むなきに至れるのみならず、重ねて八千萬圓の大藏省劵を發行するの止むなきに至れり、これ實に驚くべき形勢にして經世家の最も意を致すべき重大問題なり、然るに遽々然として増師を斷行せんとするは何の意ぞやと、

現閣の與黨中尚ほ直言警告する斯の如きを以て見れは世間一般決して隈閣の財政運用に滿足せざる知

るべきのみ、更に隈閣は教育を刷新すべしと云ふも、濫りに學制統一を遂行せんと欲して傳染病研究所を内務省より文部省に移管し爲めに數十年來の慘憺たる苦辛により漸くに築き立てたる世界に誇るべき一大事業を破壞するも顧りみず、更に前車の覆沒にも懲りずして水產講習所を移管せんとし生徒の總退校に威脅され遽かに閣議に於て決定せる移管の實行を一時延期して僅に激昂せる人心を鎭撫するを得たり、此二事件の如きは世の識者が悉く見て以て刷新と做さず教育の破壞と做すものなり、教育に關しては多年高遠の理想を懷くと自負せる大隈伯たるもの豈に深く心に愧つる所なかるべけんや、蓋し大隈伯には高遠の理想の時に其腦裏を往來することあるか如きも、不幸にして其識見は徹底し居らずして其思慮分別亦た條理の之を一貫するなし、其經綸廣大ならさるに非ず其論說高妙ならすとせさるも、其多くは突嗟的にして斷片的なるは最も惜むべきことなり、其身今や最高の權力を握れるも自制の力に乏しく合理的に之を使行し能はざるの恐なきに非す、是れ實に國政上一種危險に非すとせず、隈閣の在職日尙ほ淺きも批政の數ふへきもの旣てに斯の如し以て前途に對す一大危懼を喚起するに足れり、其危懼は外交に關して殊に切なり、吾人は在野黨が果して內閣糺彈に決意せんか必ずしも辭柄に窮することなかるべきを思ふ。

《四》 大正維新の理想

「始め大隈內閣の成るや吾人は誠意之を歡迎したり是れ隈閣が必ずや山本內閣末路に於ける政界の紊亂

を收拾して幾分にても大正維新の理想に近つかせ得べしと信じたればなり、然るに今や頗る露骨に隈閣及び隈伯自身の短所缺點を指摘し其批政を非難せざるを得ざる所以のものは政府の近狀は益々憲政の理想に遠からんとするを見ればなり、世間の非難多き山本內閣ですら其末路に至るまで多數黨を基礎とし形式ながら憲政の體を得たり、今や隈閣は其衆議院に於ける黨與益々減少せんとするに關はらず、擧國一致の名の下に多數黨の贊同を求むることをも敢てせず、然ればとて議會を解散して信任を國民に問ふの英斷に出ること能はず（是れ軍閥と結托して是非とも增師案を通過せしめざるを得ざればなり）、首鼠兩端を持して其勢日々に萎縮せんとするものあり、大隈伯をして若し其所謂高き理想に照らして現內閣を評論するの自由を有せしめば彼れは必ずや吾人と同一の態度に出づるなるべし、否な出でざるべからず、即ち吾人の批評は早稻田の老伯に代りて永田町の首相を評論するものと云ふも可ならんか、

抑も大正維新の理想とは何ぞ、其高調せられしは僅かに一年有餘の以前に在りしも、今や我政界には殆ど忘却せられ、當時を回顧して茫々隔世の感なき能はざるが如きは、即ち我政界の墮落を示すものにして、豈に浩歎に堪へんや、素より大正維新の理想とて世界に耳新らしきものには非ず、一言にして之を蔽へば立憲の常道を我邦に應用すべしと云ふに在りて、姑息の妥協政治を排し、超然主義を排し、元老政治を排し、多數政黨を基礎として內閣を組織すべしと謂ふに外ならず、唯だ之を大正維新の理想と云ふ所以のものは、大正元年及二年の交に於て此理想が直に我邦に應用せらるべく思惟せられ、政界第二維新を見るべく信ぜられたればなり、然るに斯の如く我邦人が始めて執へ得たりと思ひし程に明白に

意識せられしに關はらず、此理想は直に忘失せられ政界は再び以前の光明なき暗夜の狀態に復歸するに至れるは果して誰の罪ぞ、吾人は玆に大正維新の理想が產出開展せし事情を叙述して我政界人士の記臆を新たにし以て今後の政界に於ける理想の復活の爲めに大聲疾呼せざるを得ざるなり、

大正維新の理想を產出せし政界の覺醒は第二次西園寺內閣の瓦解を以て始まれり、西園寺首相及び閣僚等は　先帝の御重患より引續き崩御、御大葬に關し、萬般の措置宜きを得て深く上下の倚賴を厚ふし、前年來の公約たる行政財政の整理も着々大英斷を以て略ぼ前途の目算立ち我一般財政界よりは多大の期待を屬せられしに際し、十一月十日前後より意外にも一種險惡の徵候は政界の一方に現はれ來れり、他なし陸軍當局の二個師團增設提案是なり、當時政府は財政の整理に專にして一切の新事業を中止し、各省とも肉を削り骨を剜くる底の節減を行はんとするの際にしあれば、陸軍として增師案を提議すべき義理合に非ざるべけれど、海軍已に多大の整理を斷行し同時に擴充費を贏ち得たるを目前に眺めつゝ徒らに其經費を整理して却て海軍擴張を補助するの愚を爲さずと云ふの意ありしや否を知らずと雖も、陸軍は二個師團の增設を條件として省內の整理を行ふべしと主張せり、海軍擴充に關しては前議會に於ける貴族院の希望もあり、是非に行なはざる可らざる事情の下に在れども、陸軍增師は自ら之と事情を異にし一般財政の基礎堅固なるを待つて之を行ふ必ずしも遲しとせず、兎に角整理は整理、增師は增師、兩者を切放ちて問題とすべく要求せられしも上原陸相は頑として應せず、增師案の旣に閣議に敗るゝや、彼は常慣に從ひ辭表を總理の手に委せず　闕下に伏奏して親しく之を奉呈せり、斯くて西園寺侯は新陸

相を得るの途なきに窮し十二月五日終に内閣總辭職を爲すに至れり、茲に於て政機の衝點は最も鮮かに最も露骨に世人の前に標示せられたり、即ち國家の急務たる行財兩政の整理遂行と之を妨害し阻止せんとする陸軍長閥の横暴と兩々對照せられ、野に下りし西園寺侯は未曾有の同情を一般に喚起したると同時に軍閥は非常の不人望に陷れり、

西園寺内閣の辭職と共に直に元老會議は開催せられ殆んど十日間に亘り數回の協議を爲せしも、平田子拒み松方侯斷念し、山本伯寺内伯引續き辭したれば遂に桂公を煩はすの外なきに至り、公は優渥なる勅語を拜して悠然内府を出で重ねて我政界の主人公と爲れり、此際に於ける桂公を見るに、元老の一人として終始協議に預かりしは勿論、平田子を訪問して出廬を促す等後任首相を求むるに應分の努力を爲したるには相違なきも、多くは消極の態度を執り、元老會議が遂に策盡き公の起立を求むるの時あるべきを心窃に期せしもの丶如し、此れ公の心事を穿過ぎたるの見たるやも知れざれども、世間一般には斯くの如く推猜して復活後の公に對し大に惜む所あるもの丶如くなりき、別語之を云へば桂公は　先帝崩御の後據なき事情の下に内府に入り、斷然政治を棄て丶宮廷に匪躬の節を盡すべしと誓ひしも、公の資性境遇より察すれば其必ず誓を全ふすべく思ふは愚なり、寧ろ公は或る機會に於て政界に復活し其復案たる新政黨組織に着手すべきは其預定の行動とも云ふべかりしなり、然れども内府に入りてより未だ半歳を出でざるに最も老練巧妙の手段に由り起つて總理大臣と爲れるは世人の甚だ奇異としたる所なりき、世人は公が全力を盡し陸軍の長閥と西園寺内閣との間を調定せざりしを惜みたりしが、今や公内閣

を組織するや陸軍また強ゐて增師を確執せざるを見て公の聲望の大なる思ふと同時に益々其西園寺内閣を見殺しにしたるを遺憾とせり、蓋し是れ無理の注文なりしやも知らず、增師の延期は公の内閣にして始めて爲し得べく、西園寺内閣の下にありては假令公が全力を盡して援助するも到底陸軍側を鎭撫し能はざりしやも知る可らず、然れども世間は斯く思へり、而して公の赫々たる勳功、燦爛たる戈華を仰視しつゝも内心竊に公に慊焉たるの感なき能はざりしなり、果せるかな公の新内閣成りてより未だ一週間を出でざるに十二月廿七日に憲政擁護大會は組織せられ政國兩黨の領袖も列席し大に世間の人氣を博せしが、此運動は燎原の勢を以て天下を風靡せり、同日に開會の第三十帝國議會に於ても始めより頗る險惡の氣分を以て滿ち續々として新内閣に利ならざるの徵候あり、而かも此際桂公にして專心一意時局を收拾するに努め、前内閣の豫算に從ひ國政を料理するを標榜し整理の功を前内閣に歸して齊なることなくんば政友會は必ず反對の口實を得ること能はず竟に西園寺侯の鎭撫に服して其漸く露はさんとせし鋒鋩を收めしなるべし、然れとも覇氣滿々たる壯き大臣等に深き思慮のあるべき様なく或は猥りに前内閣の整理計畫を批評し或は策を弄して西園寺侯の言質を捕へんとせしか如き以て益々世人の反感を買へり、

桂公が第三十議會の解散に意なく何處までも無事平穩に議會の一局を收むるの決心なりしは、幾度か解散を暗示しつゝ最後まで躊躇して敢て斷行せざりしを以て知るべし、而して公にして解散を敢てする覺悟なかりしとせは議會央にして新政黨組織の計畫を發表せしは驚くべき愚擧なりと謂はざるべからず、桂内閣は之に由り政友會と妥協すべく最後の望を絕てり、然らばとて大に政友會を破壞せんと試みし

かと云ふに然る形跡もなく、僅かに國民黨の一角を崩壞し之と中央俱樂部を基礎として同志會を組織するを得たるも、政友會の結束は却て益々堅固にして、最後に西園寺侯に向ひ鎭撫の盡力を頼みしか如き甚たしき自家矛盾なり、何となれは自ら政黨の首領にてありながら反對黨の首領に妥協を申込み調停を依頼すると云ふは超然主義と政黨主義を混同するものなれはなり、更らに勅諚を奏請したる結果自らも亦西園寺侯にも重傷を負はすに至れるは拙の拙なるものならずや、

斯の如く桂公の第三次内閣は始めより終に至るまで失敗に次ぐに失敗を以てし、曾て失敗の何物たるを知らざりし最大光榮ある公の歴史の末尾を斯くも悲劇化了せしは如何にも氣の毒の至なれとも、斯の如き背景の下に大正維新の理想は世に現出するを得たりき、假令西園寺內閣沒落に關する教訓あるも、桂公の態度斯の如く着々世人を激昂せしむることなくは憲政擁護の叫も竟に彼か如く天下に徹底せず立憲の理想も竟に彼か如く世に鮮明ならずして止みしなるべし、故に若しも西園寺侯を以て大正維新の理想を生みし母なりとせは桂公は之を生ませし産婆なりと謂ふべきか、

（五）政界唯一の明星

西園寺を母とし桂を産婆として世に現出せし大正維新の理想は我邦今後の政界を永久に照らすべき唯一の明星なり、此明星の照輝けることが即ち大正政界の特色にして、藩閥に壓せられ元老に指導せられし所の明治政界と對照して自ら異彩を放つ所以なり、明治年間にありては元老に知遇を得るを以て立身出

世の第一條件となせしが今や元老殆んど凋落し盡きて復た賴む可らず、苟も政界に志あるものは其立脚地を政黨の地盤の上に求めざるものはあらず、是れ何よりも最も明かに時勢の變遷を語るものにして、我政界の出來事をして政權爭奪以外更に意義あるものたらしめんとせは立憲非立憲の爭たらしめざるべからず、立憲的方法に由り國民最後の判斷に聽くは政機運用の理想なり、在野黨にして若しも陰險秘密の手段を用ゐ解散を避けつゝ局面轉換を求めば是れ非立憲なり、現內閣にして若しも姦計汚術を弄して反對議員の軟化を圖るか如きことあらば是れ即ち非立憲なり、大隈伯にして若し其內閣の基礎を堅固にして大に抱負を天下に行はんと欲せは須らく在野黨の發意を待たず內閣自ら進んで議會を解散し以て信任を問ふべし、二師團增設の延期の如き亦止むを得ざるなり、原犬養諸氏にして眞に政界の廓清を欲せは斷々乎として政府に迫り解散を斷行せしむべし、今日に於て姑息の平和を說くは政界を益々混濁し無意義ならしむる所以にして、即ち大正維新の理想を滅却する所以なり、政府もし解散を敢てする能はずんば其少數黨を基礎とする不合理を認めて速かに職を辭し他の多數を擁するものを推擧して代らしむべし、然らざるに於ては速に解散を斷行せよ、優柔不斷は益々政府の信用を失墜する所以なるを思はざるべからず、

支那問題の解決とは何ぞ

曾て滿蒙問題の解決を叫びし一派の論者は近時更に其問題の範圍を廣め支那問題の解決を叫ぶに至れり、支那は一衣帶水の隣邦にして東京に於ける密話が直に北京政府に聞へて針小棒大の影響あり況んや密室の談話にあらずして大道に立ち行路の人に大叫怒號するをや、此方に於ては當局の軟腰を鞭韃するの意味にて殊に硬强の說をなすも彼方に在りて支那併合論として眞面目に聽取せらる、老衰國の哀さ頻りに四隣の蠶食に遭ひ每に一種猜眼を以て列强の行動に注意を怠らざる支那の新聞記者、北京の官人等に取りては深き譯もなき豪傑連の慷慨談も支那分割の一大陰謀として會得せらる、素より帝國政府は這般の言議に與らずと云ふも是却て帝國民論の代表として重視せらる、日支間の親善が兎角に形式に屬し未だ信義の兩國間を繫ぐに至らざるもの、其責一部は無責任の放言に在りと云はざるべからず、

論者は支那問題の解決を叫ぶ、所謂支那問題とは果して何ぞ、若しも支那國民の前途如何を意味するものとせば其一朝一夕に解決すべからざる耳ならず、吾々隣邦人が猥りに容喙干涉すべき問題にあらず、支那の前途は支那人自ら主として之を解決せざるべからず、然らば日支兩國の關係を意味すとせんに、目下兩國の關係には果して根本的解決を要するものありや、兩者の關係は今日今後とても尙ほ從來の如く、孰れも獨立せる國家にして互に尊重し親善の關係を保つの外何等別途の關係あるべき樣なし、日支攻守同盟說ありと雖も支那の國情を以てしては假令同盟條約成立すと假定するも果して支那は能く其規

約を履行するの能力ありや否や、我邦亦た同盟の義務を盡すの煩に堪へ得べきや否や、少しく考慮せば同盟說の言ふべくして行ふべからざるものたる多辯を待たずして知るを得べきなり。

吾人の見る所を以てすれば帝國の對支國是は已に確定して動かすべからず、即ち領土保全是れなり、支那が終に獨立自强の基礎成りて、獨力を以て其疆域を保全するを得べきや否やは何人にも一大疑問たらん、故に何人も將來支那が分割の厄に際會すそことの必無を確言し得るものなかるべし、然れども假令支那分割の日來るとするも帝國は決して分割の急先鋒たらんとするものに非ず、若しも列强中支那保全の爲め最後まで努力せんものは何れの國なりと云はゞ、吾人は躊躇することなく答へて云はん是れ他國ならず我日本帝國ならんと、若夫れ青島處分問題に關して吾人は既に屢々言明せし如く重ねて云はん帝國は必ず公約を重んじ青島の主權を支那に還附すべしと、但し居留地の管理、公共建物、棧橋船渠等の條約利用等に關しては帝國は必ず優越なる監督權を保留せざる可らざるは勿論、又た將來獨逸又他の列强の分割的蠶食に對し支那政府が之を承諾するが如きことあらんか、帝國は自ら外に自衛の法を講ぜざる可らざるに至らん、是また還附に聯關して帝國の保留すべき權利なるべし。

蓋し我邦の支那に對する要望は領土の擴張に非ずして經濟的發展に在り、青島を策源地と爲し山東鐵道及支線、殊に淸浦線と京漢線を連絡すべき濟南順德線(約二百五十哩)の建設に由り、中部支那の利源に接觸せんとするに在り、即ち濟南より臨青を經て北京漢陽線の順德に至る豫定線は直に山西の炭山に達するの便ある耳ならず直隷省南部の豐富なる農產物を青島に輸送するの公道たるべく、又順德より南

北に於ける京漢線により大に中央支那の利源開發に資するを得べきなり、斯くての旅客及物資の中部支那より海外に出でんとするもの或は海外より中部支那に入らんとするものは青島を經由すること最も便なるに至るべきは一たび地圖に對せば一目瞭然たるべきなり、知るべし、青島の前途は愈多望にして將に天津と相並んで北支那に於ける二大要港の一とならんとするを、兩者の關係は宛も北獨逸に於けるハムブルク・ブレーメンの關係の如くならんこと期して待つべし、近來芝罘濰縣間鐵道敷設案及び淸浦線北段の處分に關し日英間利害の衝突ありと說くものあり、英人の機敏なる必ずや獨逸遺産の分配に與からんとするは寧ろ當然にして毫も怪むを須ゐず、且つ英人の山東善後策に參加するは我邦に不利ならずと思ふ節なきも非ず、我邦は由來門戸開放を主義とするもの、英人の參加可なり、佛國人亦來り投資すべし、否な更に獨人と雖も個人として止まり事業を經營せんとするものは一視同心之を迎ふるを躊躇せず、要は帝國が青島、山東鐵道、濟順豫定線の公道に實權を握り山東省及中部支那に於ける經濟發展の基礎を築くを得ば足れり、淸浦線北段及芝罘濰縣線二問題の如き必ずや我利益を侵害せざる程度に於て解決の方法あるべし。

之を要するに吾人は今日に際し支那問題の根本解決を叫び徒らに世間を驚騷せしむるの甚だ不得策なるを思ふ、山東處分に付ては當初の宣言に則とり時機を見て主權を支那に還附し、經濟的實權を掌握して平和的侵入の武歩を着々進展せんことを希望するのみ。

公論

新らしき世界將に生れんとす

(政治的經濟的哲學)

茅原華山

A　君は今駒形あたり子規

『君は今駒形あたり子規』とは名妓高尾の句だと傳へられる、少し露骨の嫌ひはあるが、比較の最も當を得たものといふ點からして、私は民族が戰爭本能を縱にするは、個人が性慾本能を縱にするやうなものだといへぬことはあるまいと忍ふ、否、實に最も酷く似てゐる、私は或時錢湯で職人體のものゝ自己告白を聞いた、『湯に入る時は、寒くつて衣物を脱ぐのが、實に否だが、偖て一杯這入つて出た時の氣分といふものは、例へのない程可い、所が遊びに行く時はエライ元氣だが、朝、きぬ〳〵の別を惜しんで、ボンヤリ歸る時のマヅサ加減といつたら御話しに爲らない、湯に入る時と遊びに行く時とは總てが反對だ』歐洲戰爭に闖入した列強の最初の元氣といつたら、恐らく此職人が一杯機嫌で廓に向ふ時の元氣以上であつたらう、各民族は皆戰爭に醉つて了つて、盛んに開戰督促の示威運動を行ひ、愈々開戰と聞いて『ハツト胸撫で下ろした』『最後の一砲を破壞さるゝまで』『最後の一人まで』といふのが彼等の標語であつた、然しながら事實果して彼等は

最後の一砲の破壞さるゝまで戰ひ得るであらうか、最後の一人まで戰ひ得るであらうか、或る厄難に遭遇するや、人は往々一大奮發を起し『土を嚙んでも遣り通します』といふ、支那人ならばいざ知らず、普通の人類に在つて、果して土を嚙んで生存し得らるゝや否や、『最初の元氣は何處へやら』歐洲戰爭は今尙其成行を豫言すべからざるものがあるが、戰爭の長引くに從つて最初の元氣は何處へやらの嘆なきを得ないことに爲るかも知れない。

それ腰纏十萬、鶴に騎つて揚州に遊び、珠簾明月、綠酒紅燈、具さに豪華を極む、去れども歡樂の極まる處は哀情の生ずる處、唐の李華が古戰場を弔ふの文を引用すれば『利鏃骨を穿ち、驚沙面に入る、主客相搏つて山川震眩す、聲は江河を析き、勢は雷電を崩す、窮陰凝閉、海隅に凜冽たるが若きに至つては、積雪脛を沒し、堅氷鬚に在り、鷙鳥巢に休ひ、征馬踟躕す、繒纊溫なくして、指を墮し膚を裂く、此苦寒に當つて、天强胡に假す、憑陵せる殺氣、以て相剪屠す、徑ちに輜重を截り、橫に士卒を攻む、都尉親ら降り、將軍復た沒す、屍は巨港の岸を塡め、血は長城の窟に滿つ、貴となく賤となく、同じく枯骨と爲る、勝げて言ふべけんや』軍士が戰爭の苦、陣亡の悲を說いて、悽愴の情言意の表に溢る。[illegible]門が之を讀んで悲風寒塘より入るあるに似たりと言つたのも無理はない、又曰く『鼓衰へて力盡き、矢竭きて絃絕し、白刃交つて寶刀折れ、兩軍蹙つて生死決す、降らんか身を夷狄に終へん、戰はんか骨を沙礫に曝さん、鳥聲なくして山寂々、夜正に長くして風淅々、魂魄結んで天沉々、鬼神聚つて雲冪々、日光寒くして草短く、月色苦へて霜白し、傷心慘目、是の如きあらん耶』ヴェレスチヤギンの畫筆も決して痛切髓に入ること是の如くならず、そして是れが現に露、獨、墺、佛、白、英、土諸國の實踐しつゝある所であるとすれば、此戰爭の終局に近づくに從ひ、そして又終局した以後に於ける交戰諸民族の心理狀態の變化は容易に推し測られる。

敗れたるもの固より悲哀、勝ちたるもの亦固より悲哀、戰爭は極度にまで自己外現を行ふものだとすれば、戰爭後には極度にまで更に自己內造を遂らねばならなくなる。オヽ、エルサレムよ、此轉換を支配するものは、即ち懊惱、煩悶、怨嗟、悔恨、神に祈る前、先づ自己に祈らねばなるまい、『蒼々烝民、誰か父母なからん、提携捧負、其壽ならざらんとぞ畏る、誰か兄弟なからん、足の如く手の如し、誰か夫婦なからん、賓の如く友の如し、生や何の恩ぞ、之を殺す何の咎ぞ、其存其沒、家聞知するなし、人或は言ふことあれば、將た信じ將た疑ふ、心目に悁々として、寤寐之を見る、奠を布き觴を傾け、哭して天涯を望む、天地も爲めに愁へ、草木も悽悲す、弔祭至らず、精魂何れにか依らん』全世界に喪服した、左なきだに男少くして女多き歐洲には愈々男の少くして女の多きに堪

へざらんとす。

戰爭本能を縱にするに方つては思慮分別を爲すの暇はない、そして戰爭の罷んだ後は則ち深きに臨み薄きを履むの思慮分別を爲す瞬間である、そして思慮分別は勢ひ戰爭といふ新しい經驗を利用するものだとすれば、思想でも、藝術でも、軍備でも、政治でも、經濟でも、一言以て之を盡くせば、人間生活の各分野に大なる變化がなければならない、其處に大なる流轉、創造、局面展開がある、混沌の裡に新世界が鑄り成されて來る。

生殖作用は種の繼續と繁殖とを目的とするものには相違ないが、生殖を目的として生殖作用をするのは洵に寡い、反つて『生活難』は生殖自然の結果を懼れて生殖すると共に避妊をするやうに爲る、『戰爭難』を經驗した民族の間に『平和論』の誘致せらるゝのは數の自然、理の自然、勢の自然である、然しながら平和論の勃興すると共に『これが最後の戰爭』だといふやうな幻影は亦自然に消滅せねばならない。

平和主義は其主張を徹底するに、更に貴重なる材料を得た、去れど露、獨、英が此戰爭を最後として武裝を解除するとは考へられないのみならず、米國の如きも『有効なる軍備』といふ聲が益々高く爲つて來た、そして此大戰爭は一時終局しても、其餘波の及ぶ所、更に幾多大小の戰爭を惹起し來るべしとは、國際政治を學ぶものゝ皆首肯する所、故に私は敢て言はんとす、戰後は平和主義と戰爭主義とが最も色彩を鮮明にして、各其主張と目的とに向つて躍前驀進するの時代なりと、戰爭は戰爭本能の爆發したものだとすれば、戰爭は即ち犧牲運動、犧牲運動は即ち破壞運動、破壞運動は即ち還元運動、還元運動なるが故に其處にニュー、スタート（新なる出立）があらねばならない、私は先づ戰爭の『影響』を如是に大觀して、日本民族を中心として將に生れんとする新しい世界を描寫して見やうと思ふ。要するに是れ纔に地氣の南するを指點する天津橋上杜鵑の一聲。

B　日本と米國

米國に學ぶものは日本を米化せんとし、英國に學ぶものは日本を英化せんとす、獨逸學者は自然に獨化、佛國學者は自然に佛化、而して露國學者は亦日本がスラヴの大國と親善なるを喜ぶの風がある、私は日本民族は何處までも日本民族として其獨創自發的の眞面目を發揮せねばならないと主張する、そして日本民族は其歷史の背景と其特別なる周圍環境があるから、其獨創自發的の眞面目を發揮するより外はあるまいと思ふ、然しながら私の所謂獨創自發の眞面目とは世界の生活と文明とを排斥驅除しての面目ではない、徹始徹終之を同化咀嚼して築き上げた面目である。

米國は餓鬼國ではない「飽鬼國」である、米人の秀でたるもの、曾て躬ら私に語るらく、米人は多く國際の問題には頓着しない、"Let them go."（放つて置け）は米人の外國に對する態度である、米國は國大にして國內の問題解決すべきもの一にして足らず、國外の事に思慮を費すの餘地がない、又其必要もないのだと、こは實に僞らざる米人の告白である、米人は自信の民である、國の大なるを信じ、國の富源窮りなきを信じてゐる、ハーヴアート大學教授ミユンステルブルグ氏は其著に於て說いて曰く「米人は歐洲人の如くに國際の問題を研究せず、彼等は第一に國內の政治を考へ、第二に國內の政治を考へ、而して第三にも亦國內の政治を考ふ、餘程の餘裕がなければ、彼等は考へて國際の問題に到らず」と、私は多くの米人と交際したが、其中には往々にして優容として逼らず、巨大の體軀を運んで、泰然として人に臨むものあるを見る度に、支那人と米人と頗る相類するものあるを想ふを禁ぜられない、色こそ違へ、文明こそ違へ、李鴻章、袁世凱の模型は米國に發見されるが、ルーズヴエルト、タフト、ルートの模型は決して日本には發見されない、勿論和製ルーズとかビリケン將軍とかいふやうなものがないでもないが、米國人は進步的積極的の物質道を步むもの、支那人は墮落的畜生的の物質道を步むもの、そして其肉を主とするに於て一致してゐる、米國の哲學者ウイリヤム、ゼームスが戰爭を人類の本能だと喝破したの

は、如何にも卓見だが、其道德的代用價値を論ずるに於て、竟に功利說に落ちてゐる、米國では哲學者までが功利を忘れない、否、ゼームス自身の語を轉用されば、功利其物が米人の本能である。

米國は自己滿足の國、自己を以て自己に供給するとの可能る國である、米國は太西太平の兩洋に橫はる嶋嶼的大陸國で、總ての氣候は其中に在り、總ての動植物は其中に在り、總ての人類さへ其中に在り、所謂人類の太洋を成してゐるから、宛然一個獨立の世界である、米人の帝國主義とは國外に蔓延するのではない國內に充實するの謂ひだ。

世界に於て若し米人が餓鬼に爲り得ないならば、何處に餓鬼に爲り得る民族があるであらうか、何人にせよ米國に在つて日本人と米人とを比較すれば、實に不可思議な對照を現はしてゐるを發見するであらう、日本人は體軀矮小にして顏色憔悴、形容枯槁、汨羅に身投げしやうとした屈原然たるものが少くはない、常に惶々乎として注意を四方に拂ひ、宛も喪家の犬の食を求むるに似たるものがある、米人は何處までも大きく出來てゐて、日本人は何處までも小さく出來てゐる、米人所謂過度の自信 Happy self-confidence に苦しみつゝある、日本人は確に日の出る處に

國せる餓鬼民族である。

米國は統一力(Unifying forces)の最も强い國である、米國では南北戰爭の記臆尙新なるのみならず、其國民は各民種の展覽會なるを以て、米國の愛國者は專ら重きを、統一力に置き統一力の强弱が即ち米國の將來を決するものだと信じてゐる、例へば米國の敎育が日本に於ては曾て想到だもせざる外來人同化を其主要な眼目としてゐる、然しながら米國は實は其自然と及び空間と時間とを縮小する交通機關とが餘りに統一力を强大ならしめて反つて歐洲の如く不同力(Divercifying forces)に缺乏してゐる國であることに氣附かないやうだ、米國は平原國である、所謂なる大國である、斯かる大陸國が當然統一せらるべき運命を有するは地理哲學者の夙に說く所である露國には五十乃至六十の異人種がある、其領土は滿月の時の月球の表面よりも大なりといふも、一君主の下に立派に統一されてゐる、露國には他の歐亞の諸國が一旦經過した封建制度といふものがなかつた、これ一は露國が新しい國であるのに由るも、一は其土地が浩々乎として平沙垠りなし、餘りに平坦にして群雄の割據に適してゐない爲めである、支那は新聞なく電信なく鐵道なきにも拘らず、黃帝以來四千年、統一が其常態であつて分裂が其變態であつた、長江を以て南北を限りたいといふ日本の策士の希望は竟に現實しないで已んだ、米國は五十に近き自治の國家の聯合なるにも拘らず、地理學上から批判すれば到底統一せらるべき運命を有つてゐる、南北戰爭の結果に徵するも、將た又米國が其土地の續く限り、之を聯邦內に併呑せんとする

自然の勢あるに徴するも、米國の統一せらるべきは決して疑を容るゝ余地がない、不同力が強ければ國家は動もすれば解體せんとし、統一力が強ければ國家は動もすれば保守單調に傾かんとす、そして米國に在つては不同力は外來の力であつて、統一力が本來の眞であるから、米國は駸々乎として進歩して保守の國に入りつゝあるは明かである、これ私が支那は黄色の米國、米國は白色の支那、支那は老ひたる米國、米國は若い支那、支那は消極的の米國、米國は積極的の支那だといふ所以。

支那本土は亞細亞大陸に於ける北方の强が理想とする迦南の樂土である、地上の天國である、北方の强が支那本土を征服し支那本土に定住して、武强が文弱と爲り、頽唐し爛熟し去勢され失神されてデレタントと爲りデカダンと爲り餓鬼道（アニマリズム）に陷ち惡魔道（サタニズム）に陥る米國は乃ち歐羅巴人の理想とする迦南の樂土、地上の天國である、貧弱な歐洲に於て史以前から生活に苦しんだ歐洲人が一たび之を發見して、相率ゐて之に移住した、米國でスリーピング、カーの始めて用ひられた如く、米國は實に歐洲人の安生し安眠し安死する黄金の寢床である。

日本が米國でないのは言ふまでもない、日本を以て米國・爲さんとするの不可なるは言ふまでもないが、米國に爲り得ないのも言ふまでもないではないか、私は長らく米國に在つて米國の青年に交つたが、彼等は奮闘邁往の精神に富んでゐる、彼等が爛熟した歐洲、一石だも歴史を有せざるはなき歐洲から建國二百年、總ての物原始其儘なる米國に移住して、それが自覺せざる轉地療養と爲り、靈も肉も心も身も新に潑溂たる生命力を醱酵して來る所は實に羨ましく感ずるが、彼等には富を造るに對する奮闘邁往の精神があるが、世界的帝國を實現せんとする膨脹精神戰闘精神がない、彼等には自我實現の積極的倫理の半面はあるが、自我犠牲の消極的倫理の他の半面はない、自我實現即自我犠牲、自我犠牲即自我實現の境地へは米人の生活として到り得ない。

○西歐洲の文明は全的にならず

"What is your ite"（汝の黨は何ぞ）ととはれて、私は保守黨であるとか進歩黨であるとかいふは、我れを以て彼れに歸するので、彼れを以て我れに歸するのではないから、個性の權威を認めたものとはいへない、"What is your ism or School"（汝の主義若くは學派は何ぞ）と問はれて、私は某の主義を奉ず、某の學派に屬

すといふのも、我れを以て彼れに歸するので、彼れを以て我れに歸するのではないから、齊しく個性の權威を認めたものではない、黨は我れの黨でなければならない、主義學派は我れの生活、我れの個性、我れの人格、我れの意見經綸から自然に流露し自然に迸出されたるのでなければならない、そんなことを以て總ての日本人に期するのは無理であるといふかも知れないが或米人の指示した如く、歐米に於ては新聞紙は輿論に反射するが、日本に於ては新聞紙が輿論を製造し、國民が之に雷同して行くのだ、歐米人は女小供までが獨立意見(インデペンデント・オピニオン)を立て得らるゝもの、日本人は大臣宰相までが獨立意見を立て得ぬもの、歐米人は自己主張、自己發揮に徹底したもの、日本人は自己打消、自己無視に徹底したもの、彼れは積極的に徹底し、我れは消極的に徹底した、日本人は何人に在つても、大臣宰相に在つても、田夫野人に在つても、山中の樵夫に在つても、海上の漁者に在つても、自己打消、自己無視に徹底してゐるではないが、既に消極的に徹底し得るとすれば、何故に積極的に徹底し得ぬであらうか、新らしい經國の主眼は全く此に在らねばならない、私は日本人が此點に於て迷ふてはならないと忠言せねばならない、日本人は各々獨立意見を有するものと爲らねばならない、然らずんば重きを擔ふは牛に若かず、遠に行くは馬に若かず、到底從順なる家畜にも優ることが可能ない。

私は民本主義(デモクラシー)の先唱者の一人だと信ずるけれども、私は決して西歐及び米國の文明を全的とし又は全體として取るものではない、西歐の生活は人類の半面の生活て、之て兩面を盡くしたものとは言はない、物質的人生觀たる社會主義は歐米人も之に反對し日本人も之に反對するものが、寡くはないが私の如く東西の生活を比較研究するものに在つては、社會主義の危險は何人も未だ道破せざる處に存すといひたい、東洋人を一貫せる精神は服從の精神て從ふて差別的精神である、歐米人を一貫するものは獨立の精神であるが、同時に平等的精神である、若し日本民族にして漢語て言へば、我れより古を爲さんとし、西洋類にいへば獨創の新生

活を展開せんとすれば、服從の精神が獨立の精神と竝び行はれ、差別的精神が平等的精神と竝び行はれたものであらねばならないではないか、そして徹底して思索して見れば、服從精神即獨立精神、差別的精神即平等的精神ではないか、理窟として言ふから六ヶ敷いが、虛心平氣で考へれば、我々は無意識ではあるが、日常の生活に於て日常に實現してゐるではないか。

唯服從、唯差別、東洋は宛も石を積み重ねて城壁を築くが如く、無數の石塊相擁して一寸一厘も動く能はざるに至る、其結果は國家國民の立往生である、印度、朝鮮、波斯、土耳格、支那は皆立往生した、日本も維新革命があつたので、終いに此立往生から復活したのだ、然れども唯獨立、唯平等、而して動ありて靜なき西洋は、猶不斷の地震が城壁を震ひ撼かして、遂には石塊をして一も相重なるものなく、悉く地上に橫陳せしめずんば止まざるが如く、西洋の生活は社會を平等するを目的とする社會主義に歸着せざれば休まない、故に社會主義の危險といふよりも寧ろ西洋生活の危險といふが當つてゐる、社會を平等す、其生活の目的が個人の享樂、幸福を主とするに至るは自然である、東洋が個人を犧牲にして社會的秩序を維持せんとしたのが非なれば、個人の享樂幸福の爲めに社會的解體を辭ぜざるも亦同じく非なりと言はざるを得ない。

東洋生活は生活難のなき生活、西洋の生活は極端なる生活難の洗禮を受けた生活、故に東洋の生活は情を主とした生活、西洋の生活は智を主とした生活、東洋は情意生活、西洋は智意生活、西人は文明が進むに應じ、人間は情的より智的に爲るといふ、それは西洋の生活史より得來りたる議論で、情智同歸、浪漫主義打算主義、理想主義自然主義が渾然として一和するのは、我らが現在に於て理想し得る至極境なのではないか。

三十年前の日本は智の方面に於ては實に原始的であつた、今でも原始的から脫し得たとはいはれない、そして歐米は情の方面に於ては、言或は奇矯であると言はれるかも知れないが、今尙依然として原始的だと斷言する。

歐米の社會組織は極言すれば唯夫婦があるばかりだ、人間は由來有情の物、情を以て産れ情を以て生き情を以て死す、人情は何處も異なる處なし、唯其異なる處は東洋に於ては情を組織し情を整理し情を義理立てし、情の爲めに自ら絞つてしまつた、情は保守的である、情を以て極端に智を制したから、東洋は一齊に保守の國と爲つた譯だ、東洋には時間生活がない唯空間生活あるのみと言はるゝも之が爲めだ、歐米は智を發揮するに急であつて、従ふて驚くべき進歩を爲したが、情に於ては全く其自然に任かし、然らずんば社會生活の必要上多少の修飾を爲したに過ぎない、西洋生活は決して東洋の情的生活を出でゝ更に知的生活に入つたのではない、情に於て自然より人作に入り更に自然に歸したゝなではないから、之を原始的だと言つて何の不可がある。

今は何人でも知つてゐるが、西人は公然相接吻す、停車場でも破止場でも路上でも接吻す、夫婦及び情男情婦(スウイートハート)が相接吻のみならず、父子接吻し兄弟接吻し姉妹接吻す、そして此風は帝王の會見にも及ぶ、獨逸皇帝と英國皇帝とが相抱いて接吻するのだ、故に西洋に於ては接吻を分ちて禮儀上の接吻(コンヴエシシヨナル、キッス)及び情緒的の接吻(エモーシヨナル、キッス)といふ。

然らば何故盛に接吻するかといふに、唯夫婦の愛を擴充したのだ、夫婦相愛して接吻するが故に此接吻を擴充して君と君、君臣、父子、兄弟、姉妹に及び以て愛を表彰するのだ、私をして言はしむれば情の兩分野に愛と敬とである、愛なくんば敬は徹底せず敬なくんば愛は徹底せず、そして愛は平等を代表し、敬は差別を代表し、平等即差別、差別即平等、是れ情の至れるもの、然るに東洋は敬ありて愛なし、西洋は愛ありて敬なし、日本では妻が夫のことを主人といひ所夫といふが皇后は其皇帝をエドワード或はジョージと呼ぶ、愛の至りなりと雖も、知らず敬は安くに在る、そして敬なきが果して敬あるよりも進みたものといふべき歟、男が女に書を送る『我が愛する小なる小兒』といひ女が男に書を送る『我が愛する小さなる娘』といふ。

兒孫にして別に家を爲せば、父母が救貧院にあるも、法律の干渉がなければ、之を救はざるのがある。父母一たび兒孫と別るれば、全く消息を知らないのがある、兄は富に厭き、弟は貧に泣き、姉は金殿の女主人たり、妹は工場の職人たり、私自ら歐米に於て途に半死の餓死人を救ひ、之に與ふるに食を以てし、之に與ふるに一枚の銀貨を以てしたことが珍しくはない、日本に於ては『兄弟は他人の始め』であつて、西洋に於ては『親子は他人の始め』である。

民族の衝突、戰闘、角逐、葛藤は我らに於ては想像し難いものがある、征服した民族は征服された民族を奴隷とせねば休まない、動物の社會に於て然るが如く人間の社會に於ても亦同じことだ、歐洲人にして其

祖先が曾て一たび奴隷の辱を受けなかつたものはあるまい、日本人は人類は定住すべきものとしてゐる、西洋人は人類は移動すべきものとしてゐる、愛蘭人の今の大降雨國に於ける、英人の今の霧濛々たる孤島に於ける、獨逸人の其森林に於ける、佛人の其葡萄の野に於ける、葡萄牙人の其橄欖の國に於けるは畢竟民族が相追ひ相逐はれたる結果であつて、決して任意の選擇ではない、互に他を奴隷にする心を以て互に驅逐し互に追撃す、親も子を慈む暇はない、子も親に孝なるの暇はない、兄弟姉妹オルガン、ピアノ相樂むの暇はない、西洋には祖先崇拜の風がないといふが、崇拜すべき祖先は何處に在るのだか解しないのだ、近世各民族互に調和し、商業工業、以て平和の競爭を主とするに至りたるも、そは唯競爭の形式を變化したまでゞ、西洋の生活は依然として生存競爭の生活である、父母は何處までも父母自ら一生の計をせねばならない、子孫は何處までも子孫自ら一生の計をせねばならない、私は此に個人主義若くは更に深徹なる個性中心主義と個人を主とする習慣とを區別したいと思ふ、個人主義も個性中心主義も詮じ來れば個人を主とする習慣若しくは生活から胚胎脫化したものに相違ないが、個人を主とする習慣は決して我々の理想する習慣若くは生活でないことである、西洋にては神前に於て結婚しながら『死の我らを分つまで』といふに過ぎず、天國に赴くにも個人を主とする習慣を免れ得ない、私は曾て西洋の或國で一少女が母に追はれながら奔るのを觀た、路傍の男兒數輩少女を捕へんとしたが、少女叫びて曰く『汝は汝の事を爲せ、我れは將に結婚せんとするのだ』、男兒は乃ち之を放ち、少女は待合せた情男と共に自動車にて會堂に向つて馳せ去つて母をして茫然自失せしめた、蓋し少女は富家の娘にして一勞役者と結婚せんとしたが爲めに母が之を拒んだのであつた。

私は日本人も一たびは此苦界の生活を經驗して見ては何うかと思ふが、これが我らの理想境である。我らが此境に達すれば即ち吾事就れり矣とは言へないではないが、西洋人こそ自ら覺らされ、西洋の文明には實

に斯かる大缺陷あるのを知らずんば、何故に西洋に於て社會主義だのサンヂカリズムだの無政府主義だのが蔓延しつゝあるかを解することが可能ない、是を以て知るべし、西洋は絕對的平等主義を其核心としたる絕對的個人主義に苦みつゝあるを、所謂惡平等主義の歸着點は社會主義てある。

日本に於ては我々が我々のことを考へるのみならず、父母の事も、妻子の事も、親戚の事も、朋友の事も主人先輩の事も下部雇人の事も考へる心的習慣があるが、西洋に於ては我れを主として考へ、我れの利益は極端にまで攫取するの傾向があるが、其間に殆ど彼我の情狀を酌量するの餘裕がない、東洋は全然犧牲服從の精神、西洋は全然獨立自衛の精神。

東洋生活に於ける本地の風光は、端的我れを以て彼れに歸する處に在る、西洋生活に於ける本地の風光は端的彼れを以て我れに歸する處に存ず、私は『彼れを以て我れに歸し更に我れを以て彼れに及ばねばならない』と主張する、私は此に私の人生觀の基調がある、經世濟民の基礎的觀念があると明言する、此光りに照して見れば、安全に西洋生活が人間の全的生活でないといふ斷案が下される。

D　デモクラシーの批判

人間が到底自然、社會、歷史の制約を免れないのは、個性中心主義を把持する私に於ても亦固より之を認めざるを得ない、人類は本動と反動との間に生活してゐる、本動と反動との不斷の波瀾する社會は動的の生活を爲し、本動の水穩かなれば反動の浪も亦穩かで從ふて靜的の生活と爲る、米國人が何故に自治を主とする乎、彼れの歐洲に於ける祖先が漂泊放浪の生活を營み、自治より外に途がなかつたからだ、米國人が何故に絕對帝王政治を排斥して絕對共和政治に固着する乎、彼れの歐洲に於ける祖先が極端まで帝王政治の弊に苦しんだからである、米國人が何故に平和を愛好し、戰鬪的精神なきやといへば、米國に於ける事情もあるが、一は彼れの歐洲に於ける祖先が史以前から戰鬪に苦しん

だからである、米國人が何故に『自由の郷（ランド、オブ、ゼ、フリー）』の歌を謡ふか、彼れの歐洲に於ける祖先が奴隷として虐使され､專制の下に苦役したからである、米國人が何故に信敎自由を其無二の信條とする乎、彼れの歐洲に於ける祖先が僧侶と寺院との非道に弱はり果てたからである、其好む所を以て其惜む所を知ることが可能る、そして其好むものも必ずしも皆天に出てたのではない、熱時は氷を愛し寒時は火を愛す、其好む所を見て其人の生立、其民族の過去をトすることが可能る。

個性中心主義にそが枝を生じ葉を生じ花を開き實を結んで、自己實現自己完成の過程として新家族主義(私は故らに新の字を加へた)と爲り、新地方自治主義と爲り、新國民政治主義即ち代議政治主義と爲り、新勤王論と爲り、新愛國主義と爲り、世界主義と爲り、眞如即大義の城に臻り得るが、西洋に於ける個人を主とする習慣的生活を爲す民族は何うあつても共和主義に到着するより外はない。

私は西洋に於ては情は原始的であるといつた、縦横上下三千歳、民族

競爭を反撥して來て西洋の生活には人情美の發達がない、天地に俯仰して自己以外一人の賴るべきなく、夫婦も財產を分ち子孫も揺籃を脫するや否や、一片二仙（ペンスセント）の小使錢を貯蓄して早く自立自營の計を爲さゞるべからざる社會に於ては、帝王政治といふも東洋の君父臣子政治（パターナル、ガヴァーメント）とは爲らないで、帝王は神權の名に藉りて、唯壓制せんとす、唯專制せんとす、唯取るだけは取らんとす、唯誅求し得るだけ誅求せんとす、臣民は唯其壓制專制より免れんとす、出來るだけ少しく出さんとす、何故に自由に憧憬するか、奴隷であつたからではないか、何故に權利を主張するか、人權無視の桎梏の下に呻吟したからではないか、近世の歐洲は資本家と勞働者との社會である、政治問題は略々既に解決されて、此に經濟問題、勞働問題の時代が爲つた、資本家と勞働者との關係は全然賣買の關係である、其間些も溫き人情の閃光をだも見ることが可能ない、人情の帶を以て兩者の間を繫ぐものを見ない、資本家は唯最も多くの時間最も多くの勞働を爲さしめんとし、勞働者は唯最も少き時間最も少き勞働を爲さんとす、勞働者は其自衞の策として勞働組合を起し、ストライキを以て其要求を徹底せんとすれば、資本家はロックアウトを以て之に當らんとす、會ま資本家と勞働者との調和を計らんとするものあるも、亦唯利益分配法（プロフィット、シェアリング）を案出し來るに過ぎない、東洋は生活即ち情實なるに苦しむが、西洋は全く情實なきに苦しむ、去れど人は到底機械化せないから西洋の生活では唯不斷の戰鬪、唯不斷の競爭、唯不斷の睨み合ひあるのみ。

戰鬪即平和、葛籐即調和ではなく戰鬪は何處までも戰鬪、葛籐は何處

まで々苛酷なるに於ては、皮を剝いて捨てるが如く政治に於て絕對に帝王政治を排斥せねばならなくなる、專制主義も絕對に排斥せねばならなくなる、軍國主義も絕對に排斥せねばならなくなる、法律を以て總ての人事を規制せねばならなくなる、そして剝いて剝いて共和政治一本槍と爲らなければならなくなる、經濟に於ては資本家を排し富豪を排し、人民を擧げて一齊に勞働者と爲し、或は一齊に資本家と爲し、貧愚、賢、富く同一の賃銀、同一の條件の下に一切平等なる生活を爲さねばならなくなる、故に少くとも歐洲の生活は理論から演繹すれば共和主義に歸着し社會主義に歸着す、私は共和主義は政治上の社會主義、社會主義は經濟上の共和主義だと批判する。

米國は共和政治、唯富を産するに豐なるを以て社會主義は跋扈しない、英國も佛國も獨逸も、西班牙も葡萄牙も伊太利も、南歐北歐の差は心得て從かねばならないが、皆共和主義である、そして社會主義の蔓延は到底人力の能く制し得べき所ではない。

西洋の習慣的生活は個人を主とするのである、東洋のは個人を客とするのである、君臣、父子、夫婦、兄弟、姉妹、主從、上下、親分子分といふやうな譯で、全く個性を認めない、歐洲の歷史と生活との背景のない日本を直ちに歐化するのは勿論可能ない相談ではないか、非歐化論者が歐化に反對するのも取越苦勞ではないか、又歐化して此戰爭に勝つも敗るゝも我運に就かねばならぬ運命を有つてゐる西歐の後を趁ふ必要もない、私は共和主義社會主義を取らない、社會主義を取らないが、若し我々が西洋生活から其眞髓とするものを包容しやうなれば、それは西洋生活の核心たるデモクラシーの思想、精神である。

東洋の心理の最高峰として西洋の學び得ないものは『即』の一字である、『即』は萬法を歸一し、萬物を歸一す、西洋の心理にして東洋に缺如してゐたものは『過程(プローセス)』の一字である(原語は一字)科學はプローセスの産物であるが、其生活過程は即ち剝いて剝いて遂に平板單調に歸着せねばならない、我々は西洋のプローセスを學ばねば、幽を闡き微を顯はし、自然を征服して之を人間の用と爲すことが可能ないが、同時に即を忘れてはならない、君主主義即民本主義、專制主義即自治主義、國家主義即個人主義、軍國主義即産業主義、國家經濟即世界經濟、國家即世界、佛教は此點に於て究竟覺まで行つてゐる、即身成佛、煩惱即菩提、穢土即淨土、大我即眞如、眞如即大我、私は之に加へて絕對即相對、相對即相對といふ、男即女、女即男、人間即動物、動物即植物、有機物即無機物、無機物即有機物、大悟此に至つて山に採つて美なるは喰ふべし水に釣つ

て鮮なるは喫ふべし、日本國民は今古西東何處からでも自在自由に營養を攝取して世界的帝國を建設し得らるゝではないか。

E　組織の中に在る國民

私は現在の日本に在つては智を高調するものであるが、去れども智は情なくんば全からず、情は智なくんば全からずといふことを心得て智を高調したいのだ、私がデモクラシーを高調するも亦此深意の在るあるを看取して戴きたい、深人淺語なしといふ、私は深人を以て自ら許してはゐないが何うか淺語を弄びたくないと勉めてゐる、獨逸が戰に勝つか負けるかは知らないが、世界に於て若し日本と共鳴すべき位置に立つてゐるの國ありとすれば、私は遠慮なくいふ、それは獨逸であると世界の各國民を分類すれば、滅入り込んで行く國と外から内に膨脹しつゝある國と内から外に發展しつゝある國とがある、英、佛、墺などは滅入り込んで行く國である、南米の諸共和國、加奈陀、濠洲、南阿は米國と共に外から人間を招いて内に膨脹しなければならない、日本と獨逸とは内から人と物とを出して外に發展せねばならない國であるのではないか、日本は獨逸のやうに露、英、佛、白、日を引受けて戰ふやうな愚擧をしてはならないが、内から外に出んとするものは、勢、滅入り込む國よりも、外から内に入らんとする國よりも、自然に多くの敵を作らねばならないといふ覺悟をせねばならない、デモクラシー一本槍で人類の運命は共和に在りなどゝは言つて居られる筈のものではない。

既に内より外に出でんとす、その民族の政治は之を基調として割出して、始めて旋乾轉坤の宏謨遠猷があるのではないか、自然に多くの敵を作らねばならないとすれば、我日本は國民の戰爭的天才を時に及んで利用するの用意がなければならないのは言ふまでもない、私は李華の弔古戰場文を讀んで戰爭を濫りに決するは最も避けねばならないといひたひ、十年に一度づゝは多過ぎると言ふものであるが、戰爭は理論上是認

されゐ、國際間には元老國、閥族國を休職する方法はない、特旨に依り位一級を進め休職仰せ付けらる、陸軍大將に任じ豫備仰せ付けらるゝといふ方法がない、新進の國、人才の國が之に代る方法がない、唯戰爭ありて國家の任免黜陟を定める、故に戰爭なくして此任免黜陟の行はれ得るに至れば始めて非戰論の根據が立つ譯だが、此れなき限り、幾多のアンゲル、幾多のプロホ、幾多のカーネギーが輩出しても、戰爭を國際間から一掃することが可能ない、既に滅入りつゝある國は或は努めて戰爭を避けやうとするであらう、ダーピー卿が『英國の最大利益は平和である』といつたのは無理がある、外から内に膨脹しつゝある國に至つては戰爭などは考へる必要もあるまいが、日本に在つては戰爭を利用するのみならず、戰爭權を自認して置く必要がある。

私は日本國民は獨逸と共鳴しつゝありと言つたが、不思議なもので、日露戰爭に於て日本は露國に勝つて反つて思想文藝に於ては露國に征服された迹がある、日獨戰爭に於ても獨逸に勝つて反つて獨逸に懾服してゐる事實がある、私は各地を歷遊して、到處『獨逸がエライ』といふ噂を聞くに驚いた、獨逸がアントワルプを陥れたとの一電は直ちに株式其他に影響するが、聯合軍の勝報は何の感じもないさうだ、獨逸を信じて聯合軍を信じない證據だ、昨日も川越の友人が來たが早速獨逸に感心し始めた『何うも獨逸はエライものです、川越、入間川あたりでは染料を買ふので、獨逸商人が必ず技師通辯を連れて毎年二回調べに來て、他に比して高いものなら廉くし、惡いものなら善くし、益々販路を擴張してゐます日本人の商賣は商賣遊戲ですが、獨逸のは眞劍です、彼の調子ですから縱ひ戰爭に負けても直ぐに恢復しませう。それに負けた〱といふ電報が新聞に出てゐますが、未だ何處でも負けてはゐないではないのですが』三國誌の語でいへば『知己は敵に在り』といふべきもの歟。

日本人にして既に獨逸に共鳴す、日本人を導いて、更に獨逸を凌駕する大帝國を造るの雄心と理想とを鼓吹せねばならない、私は獨逸を學ぶといふ、獨逸を模倣せよとはいはない、獨逸國民が飽くまで科學的組織的であつて少しも天才の閃きが見えないのは、私が常に物足らなく感ずる所だ、米、英は日本と國狀を異にしてゐる、露國は未知數である、世界に於て若し相類似せる國ありとすれば、何といつても獨逸と日本とてあ

る。

獨逸が大陸軍國たるは露國あり佛國あるが爲めだ、然しながら日本は露國とさへ相戰はざるの計を爲せば、何にも大陸軍國となる必要はない、獨逸は世界を敵としてゐるといふが、猶味方があり、日本は黄種の唯一の國として白人の世界に崛起す、窮極に於ては、文字通り白人全體を敵とせねばならなくなるかも知れない、そして白人は露國を除くの外は、皆海から來るのであるから、日本は海軍一元主義を以て立ち、陸軍を權の位に置かねばならない、此れが私の學へといふ所以。

日本既に白人全體を敵とせねばならない運命を有つてゐるとすれば、日本に於ては國家主義の最も强大にいる譯である。

獨逸を單純な軍國主義の國家主義だといふは僻論である、軍國主義の國家主義であるには相違ないが、同時に商買主義（商工農を合せて之を言ふ）の國家主義である、そして英人の眼から觀れば個人主義とはいへないかも知れないが、我々日本人から觀れば、立派な個人主義の國家主義である、維廉二世の盛名には六千萬の獨逸國民が陰打たれてゐるやうであるが、維廉二世はアチラの如くに盲目にして自覺なき慓悍なる蒙古人を率ゆる意味で獨逸國民を率ゐてゐるのではない、維廉二世が國民の理想と大願とを多少なりとも人格化してゐるから其指導に任かせてゐるのだ、現在の獨逸はマンネスマンの獨逸、グッインナーの獨逸、クルップの獨逸で、最早ゲーテ、シラー、ショッペンハワー、ニイチエ、の獨逸ではない、即ち思想人としての獨逸ではなく唯物主義の獨逸であるといふが、最も公平に言へば、ナポレオン侵入を非重なるものとして多年外國の爲めに蹂躪せられ、深い思ひに沈んだのが、哲學者詩人の輩出した所以で、獨逸國民は深刻なる自己內造を造つて、其結果內的生活に充實したから外に向つて爆發して自己外現と爲つたのである、故に獨逸の軍國主義の國家主義、商買主義の國家主義、個人主義の國家主義は即ち獨逸國民が自己內造の結果、

思想と環境との結果であると言へる。

私は決して獨逸を理想國としてはゐないが、兎も角獨逸は劍の國家主義と肉の國家主義と靈の國家主義とが歸一合流してゐるではないか、果して然らば日本にして眞に最新の國家を造り終に世界的帝國を築造せんとすれば、先づ靈の上に、思想の上に國民個々の内部生活の上に世界的帝國を築造せねばならないのではないが、是に於て乎私の個性の自覺、個性中心主義の叫びは實に高遠深沈なる意味があるものとなる。

英國は最早舊式であるが、英國の歴史を觀るも、其劍、適切にいへば戰鬪艦の國家主義と肉、適切にいへば工業の國家主義と個性の國家主義との歸一合流は矢張り英國民の深刻なる自覺から來たことが解かる、去れども、英國に於ては個人を主とする習慣が餘りに行過ぎた、個人主義、不干渉、自由貿易が其標語であつたが、英人自身も獨逸の競爭に會して之ではならないと感じ始めた、バジエホット嘗て曰く『我々は國家の行動を我々自身の行動と視做さず、我は自身の組織された綜合意志と視做さず、之を外來の行動、外部から賦課された專制なりと視做すの風あり』と、英國に於て若し個人を主とする習慣が行過ぎたとすれば、獨逸に於ては餘りに官僚が世話を燒過ぎるが、エルツバツフハー氏の言へる如く『獨逸に於ては國家と國民と國家と社會とは實際上全一であつて、政治に於ても經濟に於ても國家と國民とが一人の如くに活動す』とすれば、我日本國民は國民的生活に於ては Nation in organisation（組織に於ける國民）と爲らねばならない。

それには自覺あり自己完成の元氣に滿ちた個人が其基礎であらねばならない、自己完成の元氣に滿ちた國民が國家的に自覺すれば、始めて、『組織の中に在る國民』と爲る、國家の行動は即ち個人の行動、個人の行動は即ち國家の行動と爲る、ルーズヴェルト氏は嘗て『國民個々の意志の外別に國家の利害あり』と言つたが、私は彼れの小乘禪的にして徹底せざるを笑はざるを得ない。

個人主義、不干渉、自由貿易、個人の活動範圍を成るべく廣くして國家の活動範圍を成るべく小ならしめよとは、ミル、リカード、コブデン、ブライト、スペンサー時代の思想、若し夫れ國家の名を以て政府が個性の自覺を妨げんとするは端的路易十四世時代の思想、共和國に在つては多くの頭はあつても一つの頭がない、舊式の專制國に在つては一つの頭があるが、多くの頭がない。

獨逸は今尚封建の餘習を存し、其政治は貴族的にして封建の特權特典が個人の雄心を壓迫してゐる、そして又官僚政治で名高い處であるが、獨逸の官僚は生活の試煉を經た官僚、國民の理想と大願とを解する官僚、そして獨逸國家の爲めに内務官と爲り外交官と爲り技師と爲つてゐる。官僚が無用なのではない、官僚が其權力を維持するを唯一の目的と爲して、國家の高等政策を弄ぶのが惡いのだ、家に番頭、書記、書生、奴婢がなければならない如く、國家にも亦其番頭、書記、書生、奴婢がなければならない、獨逸は『天貧の國』である、その地理上の位置、其地質地味、其鑛物共に皆英國に劣つてゐる、自然、歴史、傳説、習慣の妨ぐる

ものあるにも拘らず、數十年にして內に於て物質に於て銀に於て海軍に於て英國の塁を摩するに至り、儼然たる『人富の國』と爲つた、日本國民が獨逸に共鳴するのは決して無理ではないと思ふ、唯此上は國民心を一にして獨逸よりも更に大なる更に新なる國家を造らうといふ決心を要すと繰返へして置きたい。

F 世界經濟と國民經濟

英國の郡部を見舞ふて先づ驚くのは田園の荒廢てある、いかに他に幾多の利益を齎らし來たかは別問題として、此田園の荒廢は自由貿易の賜物てあるのは爭はれない、單純に商工といふ上からいへば、自由貿易は我々の首肯すべき眞理がある、然しながら國民の全的生活から研究すれば、我々は自由貿易を以て滿足し得られやうか。

或經濟學者は人類は進化して牧畜農業時代より商工時代に入るといつて商工立國主義を皷吹するものがあるが、人類は如何に進化しても牧畜農業なくして生きては居られないであらう、人類が進化して牧畜農業の時代から商工時代に入つたのてはなく、歐洲は「天貧の國」なれば專ら牧畜農業に賴る能はず、進化して、『人富の國』を造る必要上、牧畜農業を捨てゝ商工に入つたといふ意味でなければならない、そして牧畜農業も漸く天の時に賴るの風を脫し、人力を以て科學を以て能く天を制し得るに至つては、人類は亦原始的だと言はるゝ牧畜農業に於て大なる進化を遂げたのてはないか。

自由貿易は我れに有るものを彼れに賣り、彼れに有るものを我れに買ふといふのであるから世界經濟主義てある、故に自由貿易論者は國を建つるの價値は「若干」と自問自答するに至る、世界に國す、世界經濟の中に生きねばならないのは言ふまでもないが、既に國家あり國民ありとすれば、國民經濟がなければ其處に矛盾が出て來る、世界經濟の上に建てられたる國民經濟、開國主義の上に立てられたる國民自給主義、これが第三の經濟主義である、世界經濟を排して國民經濟を取るのではない、國民經濟を排して世界經濟を取るのではない世界經濟即國民經濟、國民經濟即世界經濟。

コブデン、ブライト時代には自由貿易、平和、各國民間の好意と唱へたものだ、世界の商業を獨占し、世界の海を支配して英國に於ては自由貿易、平和、各國民の好意位その利益であるものはない、私は兵で勝つよりも商で勝つのが日本の主たる目的でなければならないとするのである、けれど世界は常に平和ではない、各國民は必ずしも常に好意を有つてゐない、殊に日本に對して好意を有てる國は世界に一つもあるまい、米でも英でも獨でも支那でも、そして日本は內から外に發展する國柄で從ふて多くの敵を作る、兵の敵ではない、商賣で行つても、商賣敵を作る國柄、英國が獨逸を調伏せんとするは其大海軍ではない、大海軍の擁護を必要とした商業の發展だとすれば、商賣專門でも無論敵を作る。日本は仲々平和と各國民間の好意との中に生きられないとすれば、國民の全的生活の上から見て、世界經濟、自由貿易ばかりで立行くものでないのは言ふまでもない。

故に我々は唯平和の經濟のみを計つては居られない、戰時の經濟をも併せて計らねばならない、平和の經濟は世界經濟、戰時の經濟は國民經濟、平和は開國の時代、戰爭は鎖國の時代若くは鎖國すべく餘儀なくされた時代、斯う考へて見れば我々は果して商工立國を主張して農業を英國化するに甘んずべき乎、西洋は一理に固着す、東人は「即」を以て萬物を綜合す、商・工農立國が當然の國策ではない乎。

獨逸が一面に於ては商工を以て世界を征服しつゝあるにも拘らず、英國を眞似て農業を閑却せざりしは、僅に先見の明ありしを認めねばならない、獨逸農業の發達は、私は決して唯保護政策の賜物とはいはないが、保護政策も亦與つて力ありといふに躊躇しない、私は毫末も日本の關稅政策を謳歌するものではない、又決して所謂國產獎勵を說法せんとするものではないが、戰時經濟からして農業の保護せざるべからざるは自明の理ではあるまいか。

農は國の本なりといふの過れるは猶商工は國の本なりといふの過れるが如しと雖も、私は農民は國の本なりと言ふを憚らない、農民は唯農業を本とするが故に國の本なりと言ふのではない、農民が一國民健康强壯の淵源たるは何人も首肯する所であらう、都會は人を葬る所、田園は人を產む所、商店工場は人間を頹廢せしめ腐爛せしめ若死せしむる底なき谷

谷である、之を不斷に補充するものは國民健康强壯の淵源たる田園である、歐米は外來人を以て之を補充し得るが、日本では日本人を以て補充しなければならない、場合に依りては支那人、朝鮮人を雇入れられないでもなからうが、出來得るならば日本人は日本人を以て補充し得るのが得策である、旣に國民健康の淵源である、海陸强兵の淵源たるは、亦固より論ずるまでもない、國民の全的生活から言つて、農業の獎勵保護せざるべからず、農民の愛護扶養せざるべからざるは徭々明、日本の商工經濟學者（日本の經濟學者は大抵皆然り）よ、私は汝等が經濟學を抽象的に論じないで、日本國民の全的生活に立脚して經濟を論じて貰ひたい。

獨逸の大經濟學者ウイルヘルム、ロッシャーが人類が其政治的國境を撤して一家と爲つた場合に於てのみ世界經濟は庶幾し得べし、希臘がマセドン及び羅馬に征服されたのは最も多く希臘哲學者の世界主義の致す所なりと喝破したのは、少くとも其處に半面の眞理がある、歷史家トライチユゲは『保護は若い產業に必要なるのみならず、古い產業にも亦必要である、此點に於て古伊太利は我らに戰慄すべき敎訓を與へる、若し亞細亞及び阿米利加よりする食料品に對して保護政策を案出し得たならば、伊太利の農民は保存せられ、伊太利の社會狀態は健全なりしなるべし、然るに羅馬の商人は自由に廉價なる阿非利加の穀物を輸入し、爲めに田園は荒廢し、農民は職を失ふて四散し、羅馬を中心とするカムパグナは漠々たる沙漠と爲つた』と言つた、單に『廉價な生活』の要求を滿足せしむるが爲めに農民を亡ぼすは、極めて淺薄なる打算ではないか、英國は此打算の爲めに過まつたのである、英人は餘りに打算に徹底して反つて淺薄なる打算に入つた、何故に英國は過まれたか、私は這回の歐洲戰爭を見よといへば十分である。

ビルマルクは一八八二年に於て言つた『自由貿易は最强者の武器なり』と、私はビスマルクに隨喜するものではないが、何うも此言に力があるやうに覺える、彼れは嘗て議會に於て獨逸の自由貿易論者を罵つて曰く、『彼等は種蒔かず、衣を織らず、而も衣あり食あり』そして居常英國の自由貿易論者を嘲笑して樂しんでゐた、英國の自由貿易論者は皆實際心（プラクチカル、マインド）のないものばかりだ、アダム、スミス・マルサス・ジョン、スチユアー

ト、ミルは坊主だ、リカルドは株屋だ、コブデンは破産した、ブライトは木綿業者で彼れ自身の利益から自由貿易を實施するに努力した、ヴイヤースは辯護士だといふやうな調子であつた、去れど同時にビスマルクは自由貿易は英國に於ては好政策たるも獨逸に於ては惡政策たるを信じてゐたらしい。

自由貿易といひ保護政策といひ要するに一國の政策で、或場合には前者に傾き、或場合には後者に傾く、自由貿易は强者の政策なりといふは、近ごろ英國が獨逸其他の競爭に堪へないで、關税政策を唱へ出したに依つても解る。

英國が自由貿易を實施したのは其の商業の盛大なるに醉つてゐた時代だ、十九世紀の中葉に於ては大英國は世界の商人であり、製造人であり、運送者であり、銀行家であり、技師であつて商賣の世界は全く英國の支配する所と爲つた、英國の鐵路は全歐洲の鐵路よりも長く、全世界を合せたるよりも更に多くの織物と鐵とを産し、その石炭は供給無限にして又最良質なりと信ぜられた、英國は此時代はフリードリッヒ、リストの言つた如く、英國は即ち世界であつた、力に於て富に於て他の世界全體よりも優れた世界であつた、英國も盛に保護政策を行つた時代があつた、然るに英國の商業が全世界の商業を獨占した上、英國が自由貿易國と爲り世界經濟國と爲つたのは即ちこれが實は英國の國民經濟であつたからではないか、コブデン曰く、『大英國は常に世界の工場である、又あるであらう』自由貿易は强者の武器なりとは適確動かすべからざるものがある、英國は嘗て其沿岸を他國の船舶に開放した、他國の爲めに開放したのではない、自國の海運業を信ずるから他國をして開放せしむるが爲めに先づ自ら開放したのだ、そして日本の商船が印度の沿岸貿易に從事すれば、日本は沿岸貿易を禁止しながら保護ある日本の商船を以つて英船と競爭するは不都合だと難じ始めた、强者なりと自覺した時と弱者なりと自覺した時とは其態度は固より變化せねばならない、是の如く自由貿易は英國が强者として自覺した時の態度、關税政策

は英國が弱者として自覺した時の叫喚。

自由貿易論は競爭を無視し得る自信ある人と事業と國とに生じ、保護論は競爭せねばならぬ人と事業とに起る、生産者にして容易に其生産を賣り得るとすれば、最も多く消費者の利益を計るの餘地を生ず、最も多く消費者の利益を計るは適ま最も多く自己の利益を計る所以、英國は先づ自ら自由貿易國と爲せと世界各國をして此自由貿易國たらしめんとした、生産上の最强者として英國に取つて此位の利益はあるまい、佛國に於ては最良の葡萄酒を生ずるジロンデは自由貿易黨であつて、有名なる自由貿易の經濟學者バスシエーは此地の出身である。合衆國に於ては木棉帶と小麥地方は自由貿易を主張し、工業地方は保護を要求す、獨逸にては自然に於ても技倆に於ても一も他をして及ぶ能はずと嘆息せしめたものがない、自由貿易が不人望であるのも當然である、日本に於ても多くの自由貿易を提唱するものあるも、斷えてこれが實現しない又民心を動かさないのも、恐らくは獨逸と同じ理由なのであらう。

政治上に於て鎖國經濟を行はねばならない時に備ふる爲めに必要あらば適當の保護をせねばならない、之は最も明白なる國民經濟である、農民をして四散せしめない爲めには必要あらば農業を保護する必要がある、競爭して勝つべき見込のあるものは必要あらば保護しても差支はない、新に起るべき見込のあるものは必要あらば助長しても差支はない、ビスマルクは三十五年前、『英國は復たび保護に戻らん少くとも内地の市場を擁護するが爲めに』と豫言した、保護政策は分別關税（デスクリミネーチーヴ）で或は彼れを保護し、或は此れを保護せず、然れども生産者は此保護を望み、遂に保護せられざるものなきに至るの弊がある、然しながら國民經濟からいつて内地の市場を擁護せざるべからざる必要あるは言ふまでもない。

我れに有るものを賣り、彼れに有るものを買ふといへば、其處に動かすべからざる世界經濟がある、如何なる國民も苟も無限の慾求を有すれば自足自給で徹底されぬ、我れに有るものを賣り彼れに有るものを買ふは、世界生活を爲す今日に於ては當然であるが、夫れでは創造がない進歩がない、互に無きものを創造し育成して以て奮鬪競進するのが向上の一路である。夫れが爲めに國民が或場合により高い代價を拂ふは即創造の代價である、奮鬪競進の犧牲である、私はアダム、スミスとフレデリツキ、リストが兩立併行すべきものと信ずるものだ。

然しながら米國や獨逸が唯保護政策の爲めに産業の

進歩を遂げたとして、餘りに重きを保護に置くは過であると言ひたい、夫れならば世界に於て保護の國何ぞ限らん、而も國民の潑溂たる生命力のない國は少しも發達しないではないか、世界經濟に於て徹底し、國民經濟に於て徹底する所に經濟の要義はあるが、商工國としては日本が大に興るのは一に國民の生命力の活躍飛舞に待つ、一に國民が民となく官となく技師となく皆商賣精神と科學精神との洗禮を受くるに待つ、そして日本は舊式の保護政策に苦しんでゐる、何よりも先に之を改めて行かねばならないのは論ずるまでもない、

G　外より內に而して內より外に

私の著眼點が專ら個人と國家との關係に在つたから、私は新家族論、新社會生活論、新愛國主義、新勤王論、新地方自治、新代議政治、新人間主義にまでは及ぶの餘裕がなかつた、或は私が好んで「新」の字を用ゆるを以て氣障だといふものがあるやも計られないが、私の努力は唯刹那々々に自ら新にするのである、殊に私は歐洲戰爭を以て人間生活史、世界文明史の一大轉機と爲し、最も眞面目に之を觀察し感激し自ら新にせんとした、故に私は自ら「新」の字を使はねば、私の自己が滿足しないのである。

私は日本國民は內より外へ發展せねばならぬと言ふのである、即ち世界的帝國論者である、帝國主義である、苟も一民族として獨立す、「世界的帝國然らずんば沒落」(World Empire or downfoll) を信ずるものである、そして私は民族として沒落するを願はぬ、私は日本民族が滅入り込んで行く民族たることを願はぬ、又私は日本民族が和蘭や瑞西や瑞典や諾威や丁抹の如く强國の庇蔭の下に平和なる市民的生活を以て甘んずるものとも察せられない、交戰諸國は勝者も敗者も小時は深い悲哀深い悔恨に沈むであらうが、日本や米國の如きは他の經驗を自己の經驗として新らしい出立を爲し得る幸福な位置に在る、然しながら米國と異つて日本は酷い浪漫的帝國主義の爲めに日淸戰爭の爲めに日露戰爭の爲めに滿洲の爲めに朝鮮の爲めに國民生活と遊

離した軍備の爲めに内容が實に空虛である、情けない程に空虛である。

私は二重の意味で『内容空虛』といふ、一は『富の空虛』一は『思想の空虛』これでは日本は如何にして内から外に發展されやう、故に私は富の上から言つても思想の上から言つても、外よりも先づ内に充實し、更に内から外に發展するのが順序だとするのだ、富の充實は何人も異論のない處だが、悲しいことには我々の先輩は『思想』といふことが本當に解つてゐない、外延的一族の大日本主義は到底今日及び今日以後には實現されぬ、實に今日の日本は外延的一方の大日本主義帝國主義の爲めに行詰つて了つたのだ、内的生活に於て新思想あり確實なる個性の自覺あるは、國民生活の基調を樹立せしむることで、日本民族は先づ我れに還つて自己の核心から充實して掛らねばならない、然る後に始めて新なる外的生活の發展がある、眞摯なる質と量とある小日本主義があつて、大日本の大なる影が世界の表に投射せらるゝのだ、日本人は先づ自我の米櫃から出發して新しい政治の實現に取かゝられる、先づ物質に還れ、先づ肉に還れ、先づ我れに還れ、先づ靈に還れ、伸びるが爲めに先づ縮まれ、外を觀る前に先づ内を觀よ。

然るに我々の先輩は相變らず事實伸びられないのに伸びやうとしてゐる、外ばかり觀たがつてゐる、故に益々行詰つて了ふ、日本の人心が日露戰爭以後兎角穩かでなく、動ともすれば爆烈して燒打と爲り玻璃窓破壞運動と爲り國民的大會と爲るのは、全く舊式の大日本主義帝國主義を固執し、時勢境遇と共に變遷するを知らず、行詰りから行詰りへと國家を運んでゐるからである、桂内閣も帝國主義、西園寺内閣も帝國主義、政友會も帝國主義、同志會も帝國主義、國民黨も帝國主義、

私は正直にいふ、戰爭をしないで日英同盟の義務を全くするの途がなかつたのかと、手を擧げて見て、コラ一寸待てと言はれるよりも、戰爭をしないで同盟の義務を全くした方が得策ではなかつたのか、そして一億の剩餘金は燒石に水かも知れないが、之を財政の整理、税制の整理に

向けた方が後日の爲めでなかつたのではあるまいか、そして日本がジツトとしてゐれば、向ふから首を下げて賴みに來たに相異ない、さうすれば或は一兵を殺さないで、伊國のやうに、或は伊國以上に意外の儲物があつたかも知れない、縱し戰爭に投ずるとしても、最う少し遣り樣があつたのではあるまいか、私は補弼の任に在るものに尋ねて見たい。

私は前外務大臣牧野伸顯氏と話しをしたことがある、氏の意見を書かないで私のだけを書けば、何も氏を煩はすことはなからう、私は言つた『日本國民は皆獨逸に感嘆してゐます』、氏はそれでも新聞はさうではない、私は言つた『新聞と國民とは全く態度が異つてゐるのです、田舍の百姓までが獨逸の戰勝は十倍に信じて、聯合軍の戰勝はウント割引してゐるといひます』氏は頗る案外といふやうな面持であつた、私は言つた『日本國民は此戰爭には餘り乘氣がしません』何故かといへば、戰時稅は其儘である、國民の負擔は重い、重い保護關稅と重い租稅との爲めに物價は高い、復た戰爭で增稅され、そしてそれが永久稅と爲らぬとも限らない、國民が戰爭に乘氣がしないのも、多少諒すべき事情がありますと說いて、夫れから『日本の識者の間には、日本が此上戰勝を重ねるは、益々日本を行詰まりに導くのだ、決して願ふ譯ではないが、若し假りに反つて戰爭に負けるやうなことがありとすれば、或は列國に干渉されて大失敗をするやうなことがありとすれば、早く官民をして目醒めしめるかも知れぬ、日本は一度ゲヘンナの谷底に墜落せねば、眞の復活は可能ない、黃金の扉を展開するやうな大なる時は決して來ないと信じてゐるものがある。前外相は所謂先覺の一人なるも、理想を解する人、新しい思想を咀嚼せんとする人、私の此言は多少點頭せられたことであらう。

幕末の運動は日本國民が、若くは日本の武士浪人が皇室中心主義に自覺した時代、王政復古といふのでも解かる、日本外史、日本政記、請献遺言及び神皇正統紀、大日本史が運動者の心の糧であつたのでも解かる、所が王政は復古したが、實は新なる王政であつた、夫れで王政維新と爲つた、明治の時代は日本國民が國家的に自覺した時代、そして大正の時代は日本國民が哲學的に人生觀的に自覺しつゝある時代であることを看取せねば經國濟民の業は可能ない、これ日本國民が向上する自然の過程、自覺に徹底すれば、國家に復り皇室に復るは解かり切つたことであるのに、政治家官吏は百方此自覺を妨げやうとして、反つて人心を益々險惡に導いた、そして自らは白熱せる愛國者、世界的帝國主義者たる微力なる此私までが大分誤解された、彼等の短視淺慮なる、國を誤まるのは彼等ではないか。

自我自覺の運動は即ち或意味に於て日本國民の還元

運動である、日本の青年が還元運動を爲すといふのは、言ふまでもない『新らしい出立』をしたいといふのである、新しい日本、新しい世界、第三帝國に勇進邁往せんとする創造運動、流轉運動であつて、大體からいへば極めて健全なる希望に滿ちた運動である、露國には近ごろアダムイズムとオメイズムといふ文藝上の運動がある、其意はアダムの昔しに歸り、小兒の如き無邪氣、無垢、無色、無彩の心を以て、客觀界を觀照すべしといふのである、日本國民の新なるものの新なる要求は即ち此れである、大正の新政は唯た是の如くにして始めて開かれ得る、神に祈る前に先づ自己に祈らねば、人生觀的自覺を基調とした大正の新政は開かれない。

故に眞成に經國濟民の誠意あるものは、先づ國民をして自由に自己に祈らしめねばならない、自由に自己に祈らしめよといふは、思想の自由を與へよといふことである、そして國民を生活難より救はねばならない、日本國民は世界的生活に參加したから、勢、生活難を經驗し、生活の洗禮を受けねばならない、從つて自然に來る生活難は國民自ら覺悟するより外はないが、人爲の生活難は必ず又人爲を以て之を除くのが、經國家の第一の務めではないか、而して日本國民の生活難は之を自然に歸すべきものではない、寧ろ專ら人爲に歸すべきもの政治に歸すべきものである、此の人爲の生活難は近時に至つて益々甚しきを加へてゐる、就職も亦難し造職も亦難し、田園生活も亦難し、都會生活も亦難し、人爲的生活難の壓迫益々甚しければ、或者は革命を思ひ、或者は自墮落し自暴自棄し、或者はデカダンと爲り、或者はヂレタントと爲り、或者は社會主義と爲り、或者は無政府主義と爲り、國家的精神は蕩然として地を拂ふて空しくなる、現に私は國家などは何うでもよいといふやうな青年に會したことが尠くはない、若し誇張していへば今の青年の間には反國家思潮が橫溢してゐるといつても不可はあるまい、或中學生はエス九〇號は能く遣つたといつて、高千穗の沈沒には餘り深く敵愾の心を沸してゐなかつた。青年少年の

間には日獨戰爭の風は何處を吹くといふやうな仕末であつた、青島陷落の公報の出た其晩或處の宴會に出た人の話しに依れば、市中では提燈行列があつたが、其席では一人として心の底から歡喜したものは無かつたらしいといふ、我々の先輩は夫れだから今の者は困るといつて、昔しに戻さうとする、去れど決して昔しに戻るものではない、進んで之を指導しなければならない。

人爲的生活難は青年をして個人を主とする習慣を生ぜしめる、自分さへ善ければ可いといふ習慣を生ぜしめる、此習慣一たび生ずれば、個性の圓滿なる發展は期せられない、惡平等主義の獨立自衛の精神此に生じて、獨立即服從、男らしき獨立、男らしき服從は遂に發達するに由なく、日本の社會は此に解體せねばならなくなる、情智の歸一合流は六ケ敷くなる、人心の機微を察せよとは此處をいふのだ。

所謂忠君愛國は唯服從を强いんとするのでは、其結果は實に畏るべきものがある、印度人は英國に征服され、そして英國の爲めに無報酬で、自治の植民地と爲る見込もなく、英領植民地に自由に移住し得る報償もなくして戰ふてゐる、古い事は言はず、唐宋元明淸でいふても、唐、宋、明は支那民族の間から出た帝王であるが、元と淸とは外夷である、支那民族は外夷に征服せられて、之に服從すること數百年、受動的服從、自覺なき服從は論理の結果としては征服者にも服從し、征服者の天子にも忠に勇武にして獻身奉公するに至る、我民族の天子、惟此皇帝に忠なるといふのが、所謂忠君を說くものゝ精神であらうが、それには自覺のある自己のある而して自己から發生した服從でなければならない筈だ、盲目的服從を說いた所で、人生觀的に自覺せんとする青年は決してそれには耳を傾けない、反つて之を厭ふて他の方面に趨る、これ服從を求めて反つて無頓着者、無關心者を出す方法ではないか。

新しい世界が既に私の心に生れた、既に一人の心に生れた、遂に千萬人の心に生れねばならない、私は此新しい內部の世界を外部の世界に實現したい、若し世眞に私の所謂デモクラシイ、民本主義の何物たるか

知り、デモクラシーを基礎とせずんば、日本の世界的帝國を建設する能はず、デモクラシーは日本國民をして先づ人生觀的に自覺せしむるに在りといふ口説に同意せられ共鳴せらるゝ人あらば、私は切に小異を捨てゝ私と共に共同動作に出られんことを望みます、日本帝國を救ふの途は此れより外にはありますまい。

旅順と青島

海軍中佐　水野廣德

難攻難落と稱へられたる青島要塞も本攻撃開始後僅に七日にして、脆くも降伏し、今や山東の一角、硝煙絶へて、旭旗翩々皇風に靡いて居る。忠勇なる我が出征將士も、一たび入れたる力瘤の持て行き處に、恐らく困まつて居るであらう。最後の一兵、最後の一彈までもと、傲語したる主將ワルデックは、腹も切り得ず、首も縊り得ず、見苦しくも俘虜となつて、久留米あたりに收容せられ、「日本兵は强い」などゝ、齒の浮く樣な御世辭を云つて居る。最後の四千人は內地各處に分置せられて、此方賄ひの時ならぬ觀光團、ぞろり〳〵と市中の見物でも遊ばして居る。先天的外國人に親切なる國民中には、同胞の癈兵には見向きもせず、所謂名譽の俘虜に對して頻りに同情し、之が慰問慰籍に頭を惱まして居るものもある。俘虜に媚びて文明の名を售らんとするの國の將來も亦賴もしきかなだ。頃日田舍の老人書を寄せて曰く『命長ければ恥多き代りに樂しみも多い。二十年前には南京人を見、十年前には「オロシヤ」人を見、今又獨逸人を見ることが出來た。今時の若い者が、西洋人を見る爲めに高い金を遣つて、態々洋行などする氣が知れない。之も全く聖代

の御陵と思へば誠に有難い譯だが、幼い孫めが一俘虜の方が日本の兵隊さんよりも、御馳走を食べて、毎日遊んで居るのだから餘つ程好いよ」には泣かされた。何れは又眼色の變つた○○兒が澤山出來ることであらう」と。

老人の心配もさることながら、青島陷落の意外に速かにして、我が犧牲の尠なかりしは、帝國の爲め誠に慶賀すべきである。吾人は日本軍人の立場よりしては、敵將ワルデックが假令ひ孤立無援とは云へ、苟くも一城一塞を預りながら、祖國の爲めに守るべきを守らず、盡すべきを盡さず、故意に彈藥を消費して、一たび我が攻擊を受くるや、忽ち旗を捲き、劒を倒にして、降を乞ひたる卑怯の行爲を惡むものである。併しながら更に一層大局より之を觀れば、敵塞降伏の意想外に速かなりしは、軍事上の關係以外により大なる理由の伏在せるやを疑ふものである。獨逸人の剛强勇敢なるは、歐洲に於ける戰鬪に照らして、之を察知することが出來る。開戰以來既に四ヶ月、西には英、佛、白の大兵を佛國に抑へ、東には露の强敵を波蘭に壓し、敵をして一歩も足を自國に踏み入れしめざる、獨逸國と獨逸人とは實に强いと云はねばならぬ。如何に獨逸嫌ひの人間でも、今日獨逸國と獨逸人の勇强を非認することは出來ない。然るに同じゲルマニヤの血系を受けたる獨逸軍人にして、歐洲に於ては驚くべく强く、東洋に在つては驚くべく弱きは是れ何故であらう。若し之を以て、單に日本兵の强さにのみ由るものと思はゞ、己惚れの甚だしきものと云はねばならぬ。

世人は動もすれば、旅順と青島との防戰を比較し、直に獨軍を以て露軍より弱しと爲すものがある。併し斯くの如きは、極めて皮相の見であつて、恰かも體量の大小に依つて、人の健否を判ぜんとするの類である。體量重きの故を以て、直に健康體と斷ずることは出來ない。體量小なるの故を以て、直に病體と云ふことは出來ない。旅順の防戰頑剛なりしに比し、青島の守備脆弱なりしの故を以て、獨兵を露兵より弱しと斷ずることは出來ない。凡そ現代の戰爭なるものは、單

に軍事上の目的と要求とのみを以て進退することは出來ない。其の間に幾多の政略並に政策上の考慮を交へねばならぬ。今旅順に於ける露軍と、青島に於ける獨軍とを較論するに方りても、亦、軍事上並に政策政略上の兩方面より之を考究する必要があると思ふ。

先づ之を軍事上の見地より論ぜんに、抑も旅順と青島とに於ける敵防備の堅度、即ち守兵孰れが多き、堡壘孰れが堅き、備砲孰れが鋭き、軍需孰れが整へる、防城孰れが廣き、等の戰術的問題に關しては、玆に管々しき數字上の比較を爲すの必要がない。唯だ概括的に、旅順に於ける我が兵力は、敵の二倍乃至三倍にして、青島に於ける我が兵力は、敵の五倍乃至七倍なりしことを知れば足れりてある。

扨て旅順の攻圍戰は、何月何日より起算するかは、軍事上の一問題であるが、旅順に對する我が作戰の開始は、奧陸軍大將の率ゐる第二軍が南山の險要を拔きて、旅順背面の交通を遮斷したる、明治三十七年五月二十六日と爲すが至當であらうと思ふ。尋で乃木大將の率ゐる第三軍が、專ら旅順の攻略に從事することゝなつたが、人員軍需の充實と、敵前進陣地の攻奪との爲め、意外の時日を費やし、敵を全く要塞内に壓迫したるは同年八月上旬で、其の愈々總攻擊を開始したるは同月十九日であつた。爾來我が攻圍軍は人間最大最善の限りを盡したるも、我が攻擊愈猛烈にして、敵の抵抗益々頑强を加へ、翌三十八年一月二日に至り、漸く開城を見ることが出來た。即ち旅順に對する我が作戰開始より、開城に至る迄、約七ヶ月、總攻擊開始より約四ヶ月半を要して居る。而して此間に於ける我が將卒の損害は、實に五萬五千の多きに達したのである。

次に青島方面に就きて見るに、我が攻城軍が龍口に上陸を開始したるは九月二日で、當初天候の障害に依り、稍や進軍を妨げられしも、其の後の作戰は豫想以上に進捗し、敵の第一第二防禦線の如きは、殆んど無抵抗に近き狀態を以て突破した。而して其の要塞本廓に對する總攻擊の開始せられたるは、檣端の國旗金風

に翩めく十月卅一日、即ち天長の佳節にして、青島城頭、白旗の掲けられたるは、十一月七日である。即ち我が攻城軍の作戰行動を開始してより二ヶ月餘、本攻撃の初彈を送くりてより僅に七日にして、早くも降伏開城を見るに至つたのである。而かも此間、敵は唯一回として決死的抵抗を試みたることなく、豫定の如く退却して、豫定の如く開城したる形跡が、歴々と認められて居る。從うて我が損害も亦千餘名に過ぎずして、旅順に於ける一前進陣地の奪取に拂ひたる犧牲よりも遙かに尠ないのである。斯くの如く我が損害の比較的輕微なりしは、一は旅順の經驗により、我が作戰の巧妙なりしに因るは勿論であるが、一は又敵の抵抗の微弱なりし證據である。

之を以て單に其の結果のみに依つて觀想すれば、露兵は豪勇にして獨兵は怯弱なりしと認定せられないてもない。併しながら元來、旅順と青島とは、著しく戰略的地位即ち周圍の事情と境遇とを異にして居る。旅順は一たひ我が包圍の中に陷ゐりたとは云へ、之が救援に對しては、未だ全然絶望的ではなかつた。北方滿州に於て露軍若し勝を制せば、我が攻圍より脱することも出來た。婆爾的艦隊若し早く到達せば、我が封鎖を破ぶることも出來た。啻に復活の希望ありしのみならず、尙ほ之を戰略上より見るも、旅順の頑守は、陸には我が第三軍を旅順に牽引して以て、滿州方面に於ける露軍主力の活動を便ならしめ、海には我が聯合艦隊を黃海に引留めて以て、婆爾的艦隊の來航を容易ならしむるの功果があつたのである。反言すれば、旅順の陷落は、一は以て我が第三軍をして北方滿州軍に合同するを得せしめ、一は以て我が艦隊をして婆爾的艦隊に對する作戰を自由ならしむることが出來たのである。之を以て旅順の守り一日長ければ、露國の陸海軍は一日の利を得ると共に、我が陸海軍は一日の害を蒙むるのである。若し旅順の防守をして尙ほ三ヶ月長からしめば、奉天の會戰の如き、其の勝敗の數は、今日之を知ることは出來ないのである。主將ステッセルたるもの、安んぞ最後の一人までも防守せざるを得んや

だ。

之に反して青島は全然孤立無援である。何時迄待つも外より援軍を受くる望みは絶無である。元來外援の途絶へたる要塞は、時日に長短の差こそあれ、早晩必ず陷落すべきものと相場が定まつて居る。左れば青島の獨軍如何に勇戰頑守するも、絶大の資源を有せる我が攻城軍に對しては、龍車に向ふ蟷螂の斧て、到底其の守りを果たすことは出來ない。唯玆に青島を活かす爲め、一縷の望みと爲すべきは、青島陷落に先ち、歐洲方面に於ける戰鬪の終結である。併し是とても、若し歐洲方面に平和の歡風吹き初むるに至れば、我が軍に在ても亦出師の面目上、縱令ひ多大の損害を拂ふとも、疾攻急撃、必ずや之を奪はずには濟ますまい。斯くの如く青島の運命は、何れにしても全く我が軍の手に握られ居るものにして、之が陷落は既定の事實てある。更に戰略方面より見るに、青島の存否は、獨本國の作戰に對して、毫末の影響を與ふるものてない。世上往々、青島の陷落は獨本國軍の士氣に影響を及ぼすこと大なりと說くものがある。併し斯くの如き影響は、必ずしも絶無とは稱し得ざるも、左程大なるものではないと信ずる。由是觀之、青島の頑守は、唯血に依つて獨逸軍人の意氣を飾るの外、戰爭の大局上、他に何等の利する處を見ないのである。極端に之を評せば、所謂無益の殺生に過ぎないのである。無駄の骨折に過ぎないのてある。故に武士道的見地を離れて論ずれば、青島の早降は寧ろ賢こき策と稱すべきものてあらう。

更に飜つて之を政略上より觀察すれば、益々青島防守の不眞面目なりしことが思はれる。回顧すれば明治三十一年、獨逸が僅に二名の宣教師殺害に對する賠償として、殆んど强奪的に膠州灣を租借して以來、玆に正に十五年。其の間獨逸は之が經營の爲め、多大の財と力とを投じ、兵商共に東洋に於ける獨逸唯一の策源地と爲した。從つて青島は今や獨逸東洋通なるもの丶巢窟となりたるのみならず、今回の戰亂勃發するに及びては、東洋及び南洋方面に散在せる豫後備軍人は悉

く此處に集中した。歐洲の戰爭が如何なる結果に終るとも、又折角經營したる一膠州灣を失ふとも、東洋に於ける獨逸の野心は、決して消滅するものでない。獨逸國の在る限り、日耳曼民族の存する限り、彼等は戰後必ずや捲土重來の勢を以て、復び活動を東洋の天地に開始するは明らかである。其の場合に際し、今日青島に集まれる獨逸人は、實に彼等の急先鋒である。水先案內てある。萬卒を作るは易く、一將を得るは難して、彼等と言語、習慣、風俗を全然異にせる東洋通なるものを作るは、誠に一朝一夕のことてはない。之を以て青島要塞に籠れる獨逸人は、獨逸の爲めには所謂大切なる虎の子てある。之を殺すは獨逸の將來に取りて甚大なる打擊てある。

前述べだ如く青島其物の運命は既に定まつて居る。既に運命の定まれる必死の病者を救はんが爲め、愛兒の腑を割くものあらば、是れ愚人にあらざれば狂人である。今青島に就きて之を見るに、物と人と共に全きを得るは、是れ上策である。人を失ふて物を保つは、是れ中策である。物を失ふて人を保つは、是れ下策てある。若し夫れ物と人と共に失ふに至つては、是れ愚策である、狂計てある。然るに上と中とは、今や獨逸に取りては全然望みがない。是に於て獨逸たるもの、厭や／＼ながらも、下策を取らざるを得ない。是れ青島の獨軍が、軍事上最後の手段を盡さずして、脆くも降伏したる所以てあらう。左れば我が國民たるものも、單に青島の早落を以て、獨軍語るに足らずと過言することあらば、是れ大なる謬想てあると信ずる。

斯く言へばとて、吾人は決して我が忠勇なる青島攻城軍の勳功を貶するものではない。抑々戰捷の功果は、攻戰の目的を達成すると否とに依つて決せらるゝもので、敵兵の强弱、抵抗の大小に依つて、左右せるゝものでない。青島攻城軍は、幸か不幸か敵の抵抗比較的頑强ならざりしが爲め、偶々以て旅順攻圍軍の如き神話的武勇を顯はすの機會少なかりしも、其の克く敵塞を拔ゐて、宣戰の大詔に對へ得たる功績に至りては、旅順攻圍軍に比して何等の軒輊はないのである。

國民は當さに滿腔の熱誠を以て、彼等將士に感謝すると同時に、尊とき犧牲者に對しては、最善の處置を執らねばなるまいと信ずる。

若し夫れ降將ワルデックの進退に關しては、吾人日本の軍人として別に大に論ずべきものあるも、彼今や俘虜の身となつて、寂しき冬の月を敵國に眺めて居る。之を責むるは聊か酷と信じ、茲には多くを述べない。唯戰後歸國の日、ステッセルの轍を踏まざれば、彼の爲めに幸福である。併しながら青島の降伏が、若し「カイゼル」の内命に依るものとすれば吾人亦何をか謂はん。

思想、藝術の現在

中澤臨川

一、

今回の歐洲戰爭の原因結果に就ては、見方に由ていろ／＼の解釋が附くことと思ふが、尠くとも之を文明史的に見るとき、償罪または解放の意義が含まれてゐる。西歐過古百年間の文明を想ふに、それは嘗て史上に見たことのないほど偉大な努力と嵐の一世紀であつた。同時にまたそれは試みの歴史であり、罪過の歴史であつた。古い基督教の文明を棄てて、何等か之に代る新しい精神文明を求めながら、偶ま物質文明の捕虜となつて、最近五十年間に民族は得意と失意の頂點を經驗した。その結果は人心の道徳的分裂となつて現はれた。十九世紀の人間は一人殘らずファウストと與に斯う嘆息したであらう、『吁、二つの魂が私の胸に宿る』と。彼等の或る者は僧侶でありながら同時に近代主義者であつた。或者は心理學者でありながら同時に幽靈の信者であつた。また或者は化學者でありながら同時に神秘家であつた。ルナンのディレッタンティズムでも、イブセンの破壞的豪慢でも、ワグナーの肉的厭世

主義でも、トルストイの虛無的憐憫でも、ニーチェの狂醉でも、凡てが斯樣な過渡文明の犧牲であつたのだ。佛蘭西革命の結果は却てビスマークを產み出した。『最大多數の最大幸福』は却て『最大多數の最大怠惰』の理想と變つた。かやうに多くの努力と犧牲と試みと失敗のあとで、漸く新精神文明の曙が明けかけて來た。世界は今舊文明から全く新しい文明に入る橋梁の最後のスパンを越さうとしてゐる。今回の歐洲戰爭は過古一世紀間に於ける物質文明、權力文明の失敗と罪障とを償ふために戰はれたものと見て可い。『今我等の前には新しい時代が來た。あらゆる頭腦の交換とそが無限の寄與とに由て、世界は改變せられつゝある。新道德と新知識と新信仰とが希望の未來に橫はつてゐる。『各國民は今その力を集中し、その決算表を作り上げる切實な必要を感じてゐる。今日は何人も彼の良心を檢め、彼の在る所のもの、彼の持つ所のものを正確に知悉せねばならぬ――彼が他の人々と與に新しい時代に入る前に。人類は今生命の新しい借用證に捺印した。社會は新しい法則を以て新しい活動に入りつゝある。明日は日曜日である。みながその週間の勘定を濟ませ、家を淨めてゐる、伴れ立つて我等に共通の「神」の前に進み、「彼」と新しい確固な同盟を作る爲めに』(ロマン、ロラン)。

私のこの論文の目的は、科學、哲學、藝術の凡てに亘つて、今日現在の傾向を論述し、一種の精神的『決算表』を作らうとするのである。かやうな大膽な企の失敗に終るべきは何人も豫期する所であらう。然し、我等が古い時代の勘定を濟ませ、新しい生命の借用證を取り極める前にはそれが是非とも必要である。今日我等は我等の在るところ、我等の持つ所の物を正確に知悉して置かねばならぬ。かやうな意味に於て、私のこの無謀な企がどれだけ失敗に終らうとも、世間の寬恕を乞ふだけの充分な理由があることと思ふ。殊に現今の如く思想學術の部門が非常に多岐に亘り、研究は次第に微細に入る時代に於て、なるべく專門に囚はれない眼を以て、統一のある大觀をなすといふことは、

徒勞の事業てはあるまい。

二、

過古二三十年間に於て、凡ての學術、思想、藝術は多大の變化を閲みし、殆んどその面目を一新したといつても過言ではない。そのうち物的科學が特に著しい進步否改變を遂げてゐる。方法論上から言へば、「活假説」の説が昔の安泰な『自然則』を壓倒して、凡て確固不拔と思はれた法則さへが、根底から疑惑を以て見られるやうになつた。二百年來その確實と勝利を誇つたニユートンの力學でも、今日の學者は不安の眼で見てゐる、そして最も素造な、やゝ原始的な自然則の表現のやうに思ひ做してゐる。科學の勝利に對する疑ひが次第に深くなるにつれて、その知識論は遠慮勝ちになり、注意深くなり、哲學的になつ來た。その變遷は甚だ隱微の間に行はれたのであるが、之を十八世紀頃の樂天的なのに比べて今日の懷疑的態度を思ふと、殆んど雲壤の感がある。而して斯樣な懷疑派の代表者として、我等は先頃物故した佛蘭西の數學者ポアンカレイを擧げることが能きる。

然し、かやうな根底の態度論から離れて、科學が爲し遂げた具體的研究の範圍に入ると、我等は一層その革命の劇しいのに驚かされるであらう。クルツクスに由て始められた眞空放電の實驗は、その後一八〇五年レントゲンのX線の發見となり、次でジエ、ジエ、タムソン其他の學者が同一研究を續けた結果、所謂陰極線が電子の集合體であることを確むるに到つた。然るに之と前後してベクレルが初めて放射可能體の存在を證明し、續てキユリイ夫人のラヂウム發見となつた。凡そ之等の事實は互に密接な關係を持つてゐて、今まで知られてゐなんだ自然界の新顯象を我等に告げるばかりでなく、科學の據つて立つてゐた重大な法則なり假説なりを根底から覆し、エネルギーの新しい源を提供し、引いては哲學上の世界觀にまで影響を及ぼすこととなつた。次に尠しく其經過を記述して見よう。

善く排氣された眞空管をとり、その兩端に白金の電極を植え、之に或る源から電流を通じて管内放電を行ふと、その陰極から一種の放射線を

飛ばし之に對するグラス面は燐光を發する。所謂陰極線がそれである。陰極線が管の對壁に衝突すると、その有するエネルギーは急に電磁波と變る。之がX線である。X線は一種のエーテル波動で、光線や、熱や、無線電信に使ふヘルツ波と同種類のものであるが、陰極線はそれと全く趣を異にし、或る微粒子の集合であることが知られる。而していろ／＼な實驗の結果、この微粒子は一定量の陰電氣を帶び、非常な速度を以て飛動するばかりか、其質量に於て水素原子の約貳千五百分の一其直徑に於て平均分子の約十萬分の一に當ると謂ふ。我等はかやうな微粒子を『電子』と名ける。電子は今日まで知られてゐる物の中で最微小な物である。オリパー、ロッヂは好く原子内にある電子の有樣を、大寺院の中を飛んでゐる蠅に喩へた。電子の發見はクルックスの豫言した『第四態』の物體を實現したもので、固體でも液體でも氣體でもなく、別に荷電した異樣な一體の存在することを證明してゐる。

最近まで我等の科學は『原子分子說』に堅い信念を拂ひ、凡て宇宙上の物體が八拾有餘の原子から成立するものと思つてゐた。然るに電子の發見はかやうな觀念を根底から覆した。今まで最小原子として知られてゐた水素原子のそれよりも質量に於て數千倍も小さな物の、とに角存在するといふことが先づ科學者を驚嘆させねばならぬ。それのみか、電子が獨り眞空放電の産物でなくて、ウラニウムやラジウムのやうな放射可能體の放射物の中にも存在することが知られた。今日では凡ての物體が必ず電子を含有するといふことが確定義となつた。我等の物質觀は之が爲めに動搖を免れえたであらうか。數百年榮えた物質多元論が最近十年の間に殆んど切り崩されたといふことは無理もないことである。此に於てか、いろ／＼な新しい物質構造論が稱へられるやうになつた。之を說明する爲めには、我等は今一つの驚くべき電子の性質を敍說する必要がある。

今日までの物理學では、物體の質量と重量とは殆んど同一視せられて來た。この考は由々敷誤謬である。我等が一つの物體をとつて、之を凡ての他の物體や星から無限に離れた一地點に置いたと假定するに、その時この物體に働くいかなる重力もないのであるから、この物には重量はないと言ひ得る。然るにこの物の質量は如何なる場所を問はず同じに殘ると言はなければならない。即ち物の重量と質量とは全然別種の性質であることが知れる。物の質量とはその物の有する惰性に由て測られなければならない。翻て、ジエ、ジエ、タムソンが初めて闡明したところに由ると、一の荷電體はその運動により質量を增加する。即ち一の荷電體は若

通の物體の有する質量以外に、電氣に由る質量をも所有してゐる。この理から、一電子の有する質量が其幾何を重量的質量に負ひ、他の幾何を電氣的質量に負ふかを測定するに、驚くべし前者は零にして全部が後者から成ることが知られた。電子とは重量のない物質である。否な、電子は電氣それ自らである。寧ろ電子とは精神と物質との中間に懸る或物であるといふのが妥當であるらしい。

かやうな發見を土臺として、物理學者はいろ〳〵な物質構造論を假想した。或者は陽電子と陰電子との二元論を持出し、一の陽電子のまわりを幾つかの陰電子が回轉しつゝ今迄言ふ原子を構造する如く見做した。また或學者は陰電子即ち單に「電子」の一元論を稱へた。エーテル即物質論なども行はれてゐる。然し、今日まだ我等は物質から遊離された陽電子の如何なるものか、陽電子そのものが實際に存在するのかといふ問題の解決を得てゐない。從て新物質觀の歸趨を定めるわけにいかない。たゞ新しい物質觀が昔の八拾有餘の元素から離れて、もつと根本的究極的の一元論乃至二元論に傾いてゐること、物質の究極構成物が今迄の原子よりは非重量的な何等か潑剌たる元氣の、謂ふべくんば多少精神的なものであることを、その元氣（電氣か？）が中和し睡眠した姿に於て隋性を生じ物體の形を採るのであることは、如何なる學者も一致してゐる。

我等は玆にベルグソンの物質觀を思ひ浮べなんだか。彼の說では物質とは意識の反對運動に過ぎない。意識が不斷に自個を創造し向上するに反し、物質は破壞し下向する。物質はそれ自らに囚はれながら隋性の形で生殘する。それは意識の墮落した姿である。所謂物質は存在しないとも謂へる。些くとも意識と物質とには共通した根源があると言ふのだ。物質を或る力の眠つた隋性と見るところに、ベルグソン哲學と現代科學との觀察が一致してゐる。猶ほ物質が不斷に下向し破壞するといふ說は、之から述べるところの放射可能體の壞散顯象と符合してゐるので面白い。

X線の發見が人の注意を牽いた其翌年、即ち一九〇六年にベクレルがウラニウムと稱ぶ原子の化合物がX線に類似した或る放射を發することを發見した。次でまたウラニウムに次ぐ最高原子量を有するトリウムに

說ても同じことが確められ、キユリイ夫人の忍耐强い研究は更に之等の物よりも數百萬倍能力の大きなラジウム原子の存在を我等に報告するに到つた。我等は之等の物體を總稱して『放射可能體』と言ふ。

なぜ放射可能體と言ふかといふに、之等の物體は今迄の物理學や化學が夢にも知らずにゐた奇妙な物體の性質即ち放射能力を有してゐるからである。之等の物體は斷えず自働的に或る放射物を發散する。そして其放射物は丁度X線のやうに寫眞作用や燐光作用を起したり、また透過作用を持つてゐたりする。然し、詳しい研究の結果によれば、之等の放射は單純なものでなくて、實に三種の違つた種類のものから成立つことが明らかにされた。我等は之に名けてα（アルファ）線、β（ベータ）線、γ（ガンマ）線と稱ぶ。そのうち、β線は陰極線と同じ物で電子の集合體から成り、γ線はX線と同じ電磁波である。電子やX線が獨り眞空放電に附隨した特種の顯象でなく、自然界にも遍く存在するといふことを暗示したのは放射可能體の發見からである。

α線は放射可能體に獨特の顯象である。その性質の闡明は更に我等を盡きざる自然の寶庫に導く。それは物質の壞散または轉化に伴ふのである。ルサーフォルド及びソッディーの研究に由れば、放射能力を有する原子はそれ自ら壞散して放射物を發し、次第に他の原子に轉化する。即ち今日まで不滅不可分と見做されてゐた原子も實は自働的にまたは或る力のもとに、次第に他の原子に變化しうることがわかつた。所謂物質不滅論や原子不可分論は事實といふ爭ふべからざる證據に由て、一擧にして崩されたのである。

今、ラジウムを例にとつて見よう。實驗の結果に由れば、ラジウムはラジウム、エナマチオンなる一種全く違つた原子に轉化しつつあることがわかる。で、普通の場合ラジウムの發散する放射物は、實はそれ自らとそしてエナマチオンとが協同して發散するものの和であるのだ。そのうちβ及びγ線の全部及びα線の約四分の三はエナマチオンの所屬で、後者の四分の一のみがラジウムに屬する。そのまたエナマチオンが他の物體に轉化し、最後にヘリウムと稱する原子に到達する。α線とは實に陽電子を帶びたヘリウム原子にほかならない。

要するに今日知られてゐる範圍に於ては、放射可能體はウラニウムから次第にトリウムとなり、ラジウムとなり、エナマチオンとなり、約三十種の變態を經て、最後にヘリウムに止まるのである。かくてウラニウム

が全部ヘリウムを出し盡した跡に鉛が殘る。で、ウラニウムの平均生命が約七十五億年、ラジウムが二千五百年、エナマチンが五日七時間と算定せられてゐる。

かやうな事實と與に、放射可能體は更に驚くべき事實を我等に告げる。それは物體を構成する原子が、今迄知られなんだ無限のエネルギーを自身所藏してゐて、その壞散とともに之を出すといふことである。物體の有するエネルギーの式はその質量と速度の自乘との積の二分の一、即ち $\frac{1}{2}mv^2$ で現はされる。今陰極線を構成する電子に就て計算するに、假りに二百「ヴォルト」十六燭光の炭素電球を約四晝夜通じて流れる電流内の電子を、各々地球の南極と北極に置くとすると、この間に行はれる反撥力は三十五噸ほどである。また、ギユスターブ、ルボンがいろ〳〵な假定を置いて計算した所に由ると、一グラムの銅貨を分解して得るエネルギーは約六十八億馬力で、一貨物列車を地球の周圍の四倍に相當する距離だけ走らすことが能きるといふことである。

かやうに豐富なエネルギーの源の發見は何を我等に暗示するか。今日放射可能體が自働的に出すやうな力を、他日我等が人爲的に隨意に如何なる物體からでも採取し且つ驅使しうる時代を想ふがよい。かゝるは決して痴人の夢想でない。その時今日の社會問題はその面目を一新しなんだか。我等の前には可能な物質的黃金時代が橫はらなんだか。

更に、放射可能體の有するエネルギーに就ての知識は、地球上の生物に關する古來の科學的運命觀を一變させた。科學は我等生物の存在が早晩來るべき太陽及地球冷却と其最後を一にすべきことを告げた。然るに、放射可能體の發見があつてから、我等の知る範圍に於ける何れの星でも、尠くとも今日と同樣の熱を保つて殆んど無限に持續しうることが證據立てられた。これが亦生命の未來に對する我等の希望を何れだけ煽動し、我等の世界觀に何れだけ大きな影響を及ぼすかわからない。現代の哲學や宗敎は尠くともその步調を科學と合せて行く必要がある。科學の範圍で科學の立證

する事實を無視するならば、我等の世界觀は安全でありえない。昨日まで何れだけ我等は其爲めに苦しんだであらう。メフィストフェレスがファウストの書齋で彼の耳に囁いた「創造」の歴史を讀者は必ず覺えて居られるであらう。彼の詞に由れば、混沌たる雲霧(ネブユラ)の昔から、この世界には何等の目的もない。一小星上の生物がさかしげに神の許しを乞ひ、謙遜と崇拜の德を心得た頃を圖り、神は微笑しながら、他の星を空に送つて人間の太陽と衝突せしめる、そして再び舊(もと)の雲霧に復(かへ)すといふ意味のことが言つてある。然るに在來の科學はこのメフィストフェレスの宣言よりも、猶ほ冷刻な世界觀を我等に強いてゐた。ベルグソンの哲學が何れだけ生命の無限創造を說かうとも、科學が太陽と地球の未來を悲觀する限り、我等は赤心を以て之を信ずるわけにいかない。かうした場合、最新科學の齎した宇宙運命觀に關する福音は、どれだけ我等の希望をそゝるであらう。

要するに、最近に於ける物的科學の發達は、物質の究竟一元論的傾向に於て、物質の要素を活動的精神的に見る點に於て、エネルギーの無限の源を發見した點に於て、我等の世界觀に洋々たる希望の未來を開けてくれた點に於て、最も重大な革命期に入つたものと謂(い)はなければならない。

三、

十九世紀前半までの科學は、殆んど數理科學であつた。數學が凡ての基礎科學となつて、一切の知識を律してゐた觀がある。機械的因果律とニュートンの力學とそして演繹法とが、あらゆる自然顯象を支配する鍵であつた。數學を唯一の科學と思ひ做してゐたカント流の理性よりほかには我等の手頼る知識門はなかつた。然るに、生命に關する科學、即ち生物學や心理學が發達し始めてから、我等の悟性(インテリゼンス)の前に新しい天地が開らかれた。數百年來理智が用ゐ馴れた數學を應用することの能きない廣い經驗界の在るを我等は知り初めた。之は實に人間の思想史上特筆すべき一事實である。

生理學者は生物の行爲と外界の刺戟との間に、

した自働的機械的な反動の存在することを知つてゐる。然し、彼はまた或る程度以上にはこの法則の行はれないことを承認せねばならない。神經中樞を取り去つた蛙は一つの機械のやうに外部の刺戟に反動するが、しかしさうでないものは一種自發的な反動に出る。かやうな自發性(スポンタナイチー)は凡らゆる生物の特徴であつて、各自に特殊で且つ豫知することは能きないが、要するに個性の保存の方へ向ふものである。生命現象が物的現象と異る最も重大な且つ普遍な理由は、いかなる生物體にも斯うした獨立の個性の存在するといふことである。物理學上の分類は全然同一な單位の上に立ち、その單位はまた任意な單位に分つことが能きるが、生物の個性は銘々特殊で且つ不可分である。生物を數學的單位に由て取扱はうとすることは、取も直さずその最重要な個性を沒却することであらねばならぬ。一つの生物體には幾多の複雜を貫き統ぶる單純がある。多にして同時に一である。そして其の複雜の度の増せば増すほど、即ち高等な生物になるほど、益々統一が堅くなり顯著な個性が現はれる。

かやうな經驗界は數學の適用を許すであらうか。機械的因果律を以て貫き得るであらうか。心理學上の聯想說や心身平行論が肯定されえようか。我等は之に對して否と答へざるを得ない。「生長といふ事實は根本的に非論理的である」とは有名な心理學者の嘆聲である。人間の理性が昔から神聖視して來た論理學や數學を無視する世界、apriori の範疇の當てはまらない世界、ウイリアム、ジェームスの所謂『內省』または『根本的經驗』に訴ふべき世界、カントの一の科學に對して全く秩序(オーダー)を異にした他の科學の成立する世界——の闡明は、我等の心的活動に一新路を拓いたものと言はねばならぬ。而して斯樣な功勞者の隨一にジェームスを舉げることが誤つてゐるであらうか。

斯樣にして其道を開拓して來た生命の科學は、心理學に於て更に一飛躍を遂げようとしてゐる。かく私の言ふのは、我等の日常意識の奧に隱れて驚くべき不可思議を演ずる無意識界または潛在意識界に向て投げられた研究の曙光を指すのである。

フレデリック、マイヤースの大著『人間の性格』はこの方面の研究に對する唯一の指南車である。思ふに、我等の「我(エゴー)」は互に相滲透する意識の諸層の渾一體で、謂ふ所の意識は唯だ外界に接觸した表皮の一部に過ぎない。マイヤースの詞を藉りて言へば、我等には「よ

り廣い意識、より深い能力があるが、地上の生活に關する限り、其大部分は潜勢力として睡つてゐる」のである。そして肉體の死と與に自由に解放されるのである。今日までいろ〳〵な方面から集められた幾千に餘る實驗の結果は、必ずしも斯樣な假說の空論でないことを證かしてゐる。丁度、我等の眼に見える太陽の光線が、紫の外にまた赤の外に、幾多の見えざる光線に圍まれてゐるやうに、或は大洋の表面に現はれた孤島がその底では幾多の隱れた島と通じてゐるやうに、我等の普通意識を取圍んで隱れた能力または「我」がある。マイヤースは斯樣な能力に名けて『潜在意識』と稱してゐる。潜在意識はたゞに表面意識に上らない記臆の帳簿であるばかりでなく、時々積極的活動に出て我等の知覺や意識を超越した仕事をする。

凡そ我等の地上の生活は、肉體に對する關心の爲めに束縛せられてゐるものと見てよい。我等の知覺も感情も思想も、すべてが生活の奴隷として功利を目安に働いてゐる。我等の意識の表面は實用の爲めに固まり、その內部まで鮮な印象を採入れる能力を盲目にした。然るに我等の異我即ち潜在意識は死んだのではなくて眠つてゐるのである。或る動機から我等が肉體生活と沒關心になるや否や、意識の深い奧底から異自我が眼を醒ます。この意味から言へば、忘我の瞬間が最も我等の精神の緊張した時である。であるから、潜在意識の働くのは、夢の中とか、催眠狀態（一種の深い夢である）とか、さもなくば少年時代に多い。サッフォルド博士は十歲のとき、一分間にして其積が三十六桁になる乘法を暗算しえたが、歲を取るにつれてその能力を失つたと傳へられてゐる。

とに角、潜在意識の存在を肯定するとして、それが如何なる作用をなすかといふに、第一に廣い意味に於ける透感即ち處を距てての感應と、第二に豫知即ち時を距てての感應とに別つことが能きる。で、之等は或は自發的にまたは人爲的（催眠術、棒寄せ、クリスタルビジョン其他）に、或は覺醒狀態に於てまたは夢に於て、さま〳〵の形を採つて現はれるのであるが、

要するに普通の感官といふ媒介物を經ずして時處を距てた物と感應するの謂である。例へば、透感は同じ部屋の中の二人の人間の間にも行はれれば、英國と濠太利とに離れてゐる者の間にも行はれ、同様にこの地上に生活する者と既に死んで行つた者との間にも行はれる。

透感といひ豫知といひ、かやうに靈妙な事實の發見は宗教や哲學の上に偉大な影響を及ぼさずに濟むだであらうか。或學者はその作用を無線電信のエーテル波動に喩へて「腦波」の說を樹て、ウイリアム、ジエームスは宗教的經驗を論じた中で、普通意識を固定した核に喩へ、之を圍んで圓波の如く擴がつてゐる流動の精神界を假設し前者の自我を固守し他人を區別するに反し、この公開的なホスピタルな領域には何人の意識も相互自由に出入し親和することが能きるのだと見做してゐる。猶ほ彼の說に由れば、聖意識——神——と我等の合することの能きるのも斯様な世界に於てである。要之するに、潛在意識の發見は一種超自然的な靈能を人間に確保したものである。藝術家のインスピレーション、あらゆる宗教的經驗の如きは、この發見から合理的解釋が下される。靈魂不滅說の實證される時代が來るかも知れない。更に進んでは、我等が放射可能體に於て發見した原子的エネルギーを人爲的に自由に使用しうる時代を俟つことの穴勝妄想でないやうに、透感術または豫言術の合理的訓練から自由に靈魂を交通しうる精神的黃金時代の來ることを期待しても差支ない。現にメーテルリンクの如きは斯様な研究の熱心な信者である。また見神學の稱道者として知られた露西亞のブラベッキイ夫人は次のやうな豫言をしてゐる。曰く、「今日の地は廿一世紀の天となるであらう」と。

四、

ベルグソンの直觀哲學は、前節に述べたやうな生命の科學に伴つて起つたものである。あらゆる思想藝術はみな仲の好い同士(コンレード)である。互に手を引きつゝ進むのである。その中でも科學と哲學とは殊に關係が深い。デカルトに始まりカントに到つた近世哲學は數學と堅い握手を交換してゐた。最つと端的に言へば、之等の哲學は數學を土臺にして組立てられ

たものであつた。否な哲學者自身が數學者であつたのだ。ベルグソンがカントを評して斯う言つてゐる。『若しも汝が注意して「純粹理性の批判」を讀むならば、カントの批判してゐる理性とは、實は全般の理性でなくて、カルテシアン機械律またはニユートン式物理學の習慣と要求とに拘束されてゐることが解かる』と。カントに採つては數學は存在の權利を有する唯一つの科學であつた。『何うすれば純粹數學は可能であらうか、何うすれば純粹哲學は可能であらうか』——この問題は彼にとつては二にして實は一であつた。で、この問題に答へるのが彼の畢生の事業であつた。要するにカントに到るまでの近世哲學はその時代の數理科學からあらゆる方法を借りて組立てられてゐた。

然るに前に述べた如く、十九世紀後半から起つた生命の科學は數學の範疇のきかない經驗界を我等の前に曝露した。等質的單一の世界と個性の世界とは、所詮は別秩序の世界である。カントの一つの科學に對して、そこに全く違つた他の科學が起つた。今日の科學は幾何學の鑄型の應用される世界のほかに、別に他の方法と態度とを必要とする世界の存在することを示してゐる。カント哲學の罹つたヂレンマはそれが科學の進歩と歩調を合せるとの能きなんだ爲めである。『あらゆる

模型に龜裂が入つた。我等が盛らうと思ふ物に對して、之等は餘りに狹く、のみならず餘りに堅た過ぎる。我等の理性は無生物の中では確守してゐるが、斯の新しい土地では不安心である。第一に純粹思索に由つた生物學上の發見を指し示すことが困難である。そして、生命が働いて或る結果に到達する順序を經驗すると、それが甚だ屢ば我等の少しも考へ及ばなんだ所であつたとを覺るであらう』、とベルグソンは言つてゐる。斯に彼の哲學の發足點がある今までの哲學者が數理科學を土台としてゐたのに反し、新哲學は生命の科學に則とつて產れた。

彼の知識論は潛在意識能力の一面の闡明であるとも謂へる。大意はかうである。昔、生命の太初に於て意識は混沌たる一種の雲霧であつた。然るに進化の過程に當り、生活の必要上その一部が凝結して理智を造つた。我等の日常の思想行爲は主にこの堅い中心體を支點として動いてゐる。理智は唯だ功利を目的としてゐる。その爲め理智は便宜の爲め物を分折し、切離し、

概念化し、固體化して見ようとする。理智は離れて物の關係の知識をのみ搜る。然し、それが我等の意識の全部ではない。一部が凝結して理智をなした跡に殘つた大部分は、その固形體の周圍に緣暈を作り、次第にぼけて遠くまで達してゐる。之が直觀の領域である。直觀は稀有ではない。卑近な例は我等の本能がその原始的の形である。換言すれば、本能の純化(レファイン)されたものが直觀である。理智の見方が物的であるに反して直觀の見方は生的である。直觀は一種の智的同情である。直觀は生命の本體に跳り込み實質性その儘を把持する。理智が敵視し、分析し、餘りに窮屈に、餘りに殘忍である代り、直觀は親和し感應する。理智は物に囚はれ功利に僻するだけ、認識の能力としては不具である。殊に生命の哲學に於ては直觀が貴ばれねばならぬ。ここで直觀を理智的された一種の透感と見るは非か。

これは餘論であるが、直觀が啻に藝術や哲學の領分に屬するのみならず、科學的發見にしても之に負ふことの尠くないことは、佛蘭西の有名な數學者ポアンカレイが『科學と方法』の中で、自分の經驗から立證してゐる。そしてかう言つてゐる。「凡て之等の事實から、無意識的自我即ち所謂潜在意識が數學上の發見に於て最も重要な部分を働いてゐることがわかる。……て、次のやうな假說が成立つ。潜在的自我は決して意識的自我に劣るものではない。またそれは全然自働的でもない。それには判別能力がある。そは選擇しまた靈現する。要するに潜在的自我は意識的自我より優つてゐる」と。かく潜在意識の働きを自働的でなく、理智的にも盲目でないと見た所はベルグソンの直觀說に裏書したものである。

ベルグソン哲學の根底は自我の內省または直觀にある。彼は內部意識即ち「我」の性質を考察して、その個性、異質性、多的單一性、純粹內質性を明らかにし、特にその持續性及び創造性を力說した。然し之等の事に就ては茲に其說明をはぶくとして、意識がかやうに持續や創造を爲す所以は記憶があるからである。記憶の形に於て我等の全過去は意識內に保存される。かくてその過去が不斷に生長進化しつゝ、現在に挿入し、また一つの衝動力として未來に働きかける。此に於てか意識は活きた持續となり、刻々新しい何物かを創造する。然し、記憶には二種類ある。誤解を避ける爲めに、

我等は我等が日常その名で呼び做すところの記臆と純粹記臆との區別を明らかにせねばならぬ。『過古は二つの明亮な形に於て生存する、第一は自働作用のそれで、第二は獨立記臆のそれで』。前者は表面意識に現はれ、既に行爲の習慣に囚はれてゐる限り、精神要素としての實質を欠いてゐるが、後者は意識の奥深く潜在し、『ちやうど或る壓力を保つ汽罐の中の蒸氣のやうな』活動の姿を呈してゐる。かやうに活きた儘保存されてゐる全過古が即ち我等の意識そのものである。『記臆は根本に於て絶對に物質から獨立した力であらねばならぬ。若し精神が一の實在であるならば、こゝに記臆の顯象に於て我等は之と經驗的に接觸することが能きる』。

ベルグソンの純粹記臆の説は潜在意識の性質に向て一大光明を投げたもので、心理學上、哲學上最も重大な發見と言はねばならぬ。彼はまた之を以て夢の顯象を説明しようとも試みた。

生命の科學に則とり、内部意識の性質(持續)を闡明し、その活動(直觀)を力説したベルグソンの哲學は、精神の自由解放に向て一歩を進めたものと謂はなければならない。彼が生命の哲學者であるからと言つて、普通の行爲主義者と見做すことは誤つてゐる。彼の尊重する行爲とは内的行爲即ち『全的經驗』で、意識の自由に生棲する謂ひである。眞の行爲とは實在と同一生命を生きることゝである。其處では行ふことゝ知ることゝは同じ働きである。我等の日常の思想、感情がいかに功利の爲めに囚はれてゐるか、古來の哲學者がいかに狹い理性の爲めに囚はれて來たか、といふことを彼ほど適切に論難した者はない。或る論者は、彼を理性の敵であるやうに言ふ。然り、彼は思ひ切つて理智を攻撃した。然し、然し彼の攻撃した理智とは因習的、または功利的のそれであつた。『同じ理智主義にも二た通りある、その一つは眞正の理智主義で、そが觀念を生きるもの、他の一つは似而非理智主義で、砥石のやうに弄ぶために、そが流動觀念を固定概念に不動化するものである』と言つた通ほり、彼の攻撃したの

は主として後の似而非理智であつた。幾つかの學派に別れ、『その各が自分の位置を定め、自分の骸丁(さい)を撰び、そして互に終局(きり)のない競爭を始める』知識の遊戯をば彼は最も忌み嫌つた。之を見ても彼が眞の理智の侮蔑者でないことがわかる。世人の想像に反し、彼は誰よりも科學を尊重した。彼ぐらひ、一定の世界を限つての科學の絶對眞理を信じてゐた者はなかつた。要するに、彼は我等の意識即ち精神を因習や功利や物質の桎梏から放ち、更に理智の作用以外新しい天地をも培養して、精神の解放と獨立とを企圖した思想家であると謂へる。彼は昔から世界の持つ眞正の意味での唯一の純粹形而上學者であるのだ。であるから、彼ぐらひ如何なる因はれをも嫌ひ且つ恐れた者はなかつた。『自働作用(オートマチズム)は敵である』とは、彼の繰回し〳〵戒めた所であつた。それ而已ならず、彼は我等の精神の能力及びその未來に對して絶對の信念を有してゐた。彼は直觀の合理的培養に由て、人類の未來が何れ(と)だけ自由で、何れだけ幸福であるかを想像した。この點から言つても彼は嘗て世界が産した最も光明的な世界觀の抱持者であつた。

五、

物理學や心理學のやうな經驗科學ばかりでなく、純粹科學即ち數學や論理學も最近に到つて一大革命を遂げた。ポアンカイが、『古い論理は死んだ』と驚嘆したのは合理(もつとも)なことである。で、かやうな革命の最初の聲は現存する獨逸の數學者ゲオルグ、カントルに由て擧げられた。希臘の昔から思想家を悩ました大きな問題の一つは數學的「無限」に關する解釋であつた。それがまたいろ〳〵な難問題を惹き起した。エレア學派のツエノーンが提出した有名な逆題(パラドックス)の如きはその一つである。それがカントルに到つて漸く正しい解釋をえた。今までの考では無限とは唯だあらゆる極限(リミツト)を超過する空想的な或る量のやうに思はれてゐたものが、彼の證明に由れば無限は他の有限の數の如く明らかに存在する。換言すれば、我等の想像上で would pass するばかりでなく、事實 has passed した所の『具體的無限』がある。で、一見しては何でもないやうな此の發見が、何れだけ科學や哲學に影響を及ぼしたかわからない。

論理學はアリストートル以後最近迄二千年間殆んど何等の進歩も見ないで來た。然るにカントルの思想を受け繼いだ二三の有爲な數學者の研究は、世間の餘り注意しない間に、斯學を根底から改造したかの觀がある。それにはヒルベルトとラッセルの努力が與つて力あつた。彼等は昔か

らの論理學に代ふるに記號的または數學的論理學とも謂ふべきものを樹立てた。アリストートルの論理學が主位と賓位との關係を主とした階級(クラス)の論理學であるならば、ラッセルのは名題(プロポジション)に重きを置いた論理學である。前者の推理式が『ソクラテスは人である、云々』と言ふときに、後者の假說的推理式は『若しもAが眞ならば、Bは眞なり、又Bが眞ならばCは眞なり、云々』と言ふ。『ラッセルは昔の論理學の構成要素たる if や not の外に、and と or とを加へて其領域を擴げた。要するに、彼が在來行はれた根本名題を作り代へたことや、歸納法を擴げたことや、更に廣くはカント哲學の知識論を根底から崩したことなどは著しい事實である。

哲學上の新發見、範疇科學の改造が哲學の上に及ぼした影響を知る爲めには、劍橋の若き哲學者ベルトランド、ラッセルの思想を窺ふに如くはない。ベルグソンの哲學が生命の科學を基礎として、カント哲學に背き、別に新しい直觀と持續の世界を立したやうに、ラッセルの哲學は先天的、範疇的科學の進步を追跡しながら、矢張カント哲學を打崩した。抑も、近世哲學の一大特徵は顯象界の矛盾を力說し、之に由てその眞ならざることを證明するにあつた。殊にカントに到て此傾向の頂點に達した。例へば時間と空間の觀念に就て見るに、我等の先天的知識はこの兩者の無限に可分であることと、そのひろがりの無限であることゝを敎える。空間上の二點または一定の時間は必ずその中間の一點をとつて分つことが能る。その分たれた一部はまた任意に分かたれる。そしてその手續は限りなく行はれる。それ故空間や時間は無限可分性であるといへる。また若し我等が一の直線に沿つて何れの方向に進むも、或は過古なり未來なり時間の上を能ふだけ追跡するも、その窮極點を想像することが能きない。かるが故に時間、空間はまた其ひろがりに於て無限であるといへる。然るに近世哲學者は之等の知識に反對して、實在界には物の無限の集合はあり得ないことを說いた。そこで空間時間の先天的觀念と事物の有限觀との間に一大矛盾が起る。で、彼等はかやうな矛盾を力說しながら、空間時間の具體的存在の不可能を說き、之等の觀念を單に主觀の産物と見做した。そしてそれ等を唯だ心の先天的に持つ空なる範疇に過ぎないとした。然るに、之に反しカントルの數學は我等に、實在界に於て具體的無限の可能であることを敎える。或る事物の集合からその一部を取去る時、剩餘は必ずしも元(もと)の集合より尠くなければならない理由(わけ)はないと云ふ驚くべき事實が闡明された。この事は物の無限集合の決して不可能でないことを證據立てる。そこで永らく昔の哲學者の育(はぐ)くんだ矛盾は一擧にして消されたわけである。

空間及び時間は單に心の造つた主觀的顯象でなくて、實在界の眞の特性である。で、ラッセルは我等の先天的知識と實在との間のかやうな矛盾を解いたあとて、凡ての先天的知識のいかなるものかを究明しつゝ、彼の所謂『普遍』世界の存在に想ひ到つた。

カントは論理學や數學の取扱ふやうな知識を全く心の附屬物と見做してゐるが、我等の心なるものは他の生存物と同じく變化極りないものである。誰が今日の我と明日の我と同一であることを斷言できやう。若し先天的智識が全く我等の心に據るものとすれば、今日2+2=4であるものが、明日は2+2=5であるかも知れない。然るに設へ我等の心が如何やうに變化しやうとも、今日も明日も2+2=4であることは動かすべからざる事實である。物質の世界で二と二と加はつて四となることは、我等の之を考へると考へないとに由らず、恒に眞理であらねばならぬ。數學の教える所に由ればかやうな世界には一種の必然性の感じがある。我等は經驗的知識に由て何れだけ立派な自然則を立てたにしても、その單なる事實として感ぜられる。そして、それが現世界では眞理であらうとも、その方則の行はれない他の世界を想像することが能きる。然るに2+2=4の成立しない世界を想像することが能きるであらうか。この關係は單なる事實でなくて「現存する物も可能な物も、あらゆる物が從はなければならない一の必然である」。かやうな「絶對的必然」性の世界は物質とも心とも全く獨立して存在する。それは我等の先天的智識に上る質及び關係の世界である。ラッセルは斯樣な實在に名けて「普遍」の世界と言つた。物質及び心の存在は斷へず變化し乍ら時間の影響を受け、所謂生存する世界であるが、「普遍」はこの意味では存在しない。それは寧ろ潜在する。その時間を超越した本在である。

茲にベルグソンとラッセルの哲學を比較するに鮮明な對照をなしてゐる。而も、二つながら古來の因習を破つて新しい天地を開拓してゐるのである。前者が生命または生存の世界を力說するに反して、後者は本在または本質の世界を擁立する。前者は流轉または持續の實在を對象とし、後者は不變永久の實在を對象とする。前者の世界をば時間が支配し、後者の世界をば空間が支配する。また方法の上から言つても、前者は直觀に據て居り、後者は理性を土臺としてゐる。

ラッセルの哲學はまた精神の解放に對する努力であるといへる。「數學は世間的の境地から絶對必然の世界へ我等を運ぶ。然かし斯樣な世界にも矢張一種の因習が伴ふ。……で、理性の發見する斯樣な世界に所屬する我等の絶對獨立性を十二分に諒解する時に於て、我等は初めて滿足にその美の深い意味を體得することが能きる」と、彼は言つてゐる。カント的理性の狹い境地から離れ、その矛盾と因習から離れて、自由に理智の翼を延ばすことが彼の哲學の目的であつた。「私的幸福の煩悶を棄て、一時的欲望の熱を冷まし、永遠の事物に向て情を燃やすこと――これが解放である、これが自由人の信仰である」とも言つてゐる。彼の理想は「宇宙の市民」たることにあつた。

六、

讀者は十九世紀の末葉から歐洲殊に佛蘭西に起つた繪畫の新運動を知悉して居らるゝであらう。この運動は新印象派、立體派、そのほかいろ／＼の名で喧傳せられてゐるが、要するにセザンヌから一新期を劃し、昔の再現主義に對して表現主義を採つただけは明らかである。大體論を以てすれば、古來の形像美術は自然の模倣、再現、說明を其目的としてゐた。然るに新藝術は藝術家の觀た自然の本質、彼自身の心靈の表現に重きを置いて、表面の形體に囚はれることを賤んだ。凡ての思想、藝術は原則として絶對、非物質の方へ進みつゝある。この點から言へば、音樂は最も進歩した最も自由な心の產物で、他の藝術の師事せねばならぬところである。音樂はその表現法に於て殆んど自然に束縛された何物をも持たぬ。我等はビートーベンを聞きながら、其の音の詞を解かうとは努めずして、たゞその齎す情緒を汲まうとする。然るに繪畫に於ては我等はこの自由を與へられてゐない。我等は其處に自然の形を求めまた理解を求める。なぜ我等は唯だ美しい形、調和した色その物の中に心の樂みを求めてはならないのか、また求めえないのか。確かに、在來の繪畫は久しく自然の形像に囚はれて來た。今日、繪畫は最も幼稚な藝術であるといへる。で、最近に於ける運動は、實

にかやうな自覺の結果として、畫布の上に心的リズムを探したり、色の複雜なシンホニイを求めたり、絕對的または數學的形像に憧がれたりするやうになつた。現代形像美術の使命は、在來の如き自然再現の道を棄てゝ、音樂の用ゐる表現の精神に依據し、その新しい力と方法とを試めす時期にある。それは外的再現から內的表現へ進まねばならぬ。そして能ふ限りその使用する材料即ち形像と色彩とを自然から超越せしめて、物の囚はれを離脫せねばならぬ。

然し、かやうに同一の內的要求から起つた運動にも、おのづから根本的態度を異にした二派のあることを注意せねばならぬ。一方が建築の精神に傾かうとすれば、他方は音樂の精神に近よらうとする。一方は靜的であり、他方は動的である。一方は數學的であり、他方は心理的である。一方は單律的であり、他方は複律的である。一方は空間的であり、他方は時間的である。若し之を哲學と對照するならば、前者はラッセルの所謂普遍世界に入らうと努めるもので、後者はベルグソンの所謂持續世界に憧憬するものである。で、セザンヌとピカソが第一派を代表して居り、カンディンスキイが第二派を代表してゐる。

セザンヌの捉へようとした當體は物の永久不變な本質である。或る批評家の良く言ひ現はしたやうに、彼は木の『木性』("Treeness")を描いた。彼は建築の眞精神を以て造形の美、即ちクライブ、ベルの所謂『形の本義』を發揮した。幻滅された彼の眼には、圓球は必ずしも丸くなく、立體は必ずしも角でなく、楕圓は必ずしも楕圓的でなかつた。彼は形の內質を觀た。彼は肉眼の見るもろ／＼の平面をたゞその儘に取入れないで、形その物の個性を形造るリズムを觀破らうとした。かやうな傾向は立體派のピカソに到て殆んどその極端に達したといへる。抽象を何處までも推し進めた結果、彼は冷やかな論理學者となり、畫布の上で哲學を戲んだかの觀がある。之等の畫家にとつては形は主で、色は寧ろ副である。セザンヌに於いては陰影を附ける爲めに役立つた彩色も、ピカソに到つてはその

必要さへ無視せられてゐる。

昔の狹い理性から解放された今日の數學者や哲學者は、必ずしもユークリッドの立體の世界ばかりを見ない。それと同じく常習の肉眼から解脫した藝術家は、透視法を無視してより高い「ヂメンション」の空間に住ふことが能きる。ユークリッドの敎えた空間は、便宜の爲めに我等の知覺が採入れる空間であつて、必ずしも先天的論理から必然に剔出された世界ではない。數學者はユークリッドの定理の行はれない世界を心に描きながら、今日我等の住む空間とは或る程度まで違ふ他のいろ〳〵な空間の可能を闡明することに由て、常識の僻見を破つた。況さへ之等の空間は距離の測定などに就てはユークリッド式空間と大差ないので、我等の住む空間が果してユークリッド式か否かさへ、觀察に由て判めるわけに可かない。なほ數學は之等の高「ヂメンション」の空間を解拆的に我等の理智に示すばかりでなく、それが知覺的にも知られうることを證かす爲めに、『位置の幾何學』を發明してゐる。で、この幾何學は全く質的であつて、其定理は之に用ゆる作圖が、正確でなく、小供の描いたやうな疎笨なものである限りに於て行はれる。

リーマンの發見した斯樣な超空間の幾何學は、取も直さず、現代の藝術家がいろ〳〵の線と角と平面とを利用して情緖的に捉へようとする『畫的空間』を理智的に現はしたものではないか。現にグレーズ及びメッツァンジェの著はした立體派の主張の中には、このリーマンの幾何學を引合に出してゐる。

セザンヌやピカソの藝術が狙つた斯樣な天地はラッセルの普遍世界のほか何物であつたか。それはプラトーの所謂『觀念』即ち『形』の宿るところの規則正しい一の超時間的な必然界にほかならぬ。之と思ひ合すべく、例の立體派の主張の中に次のやうな一節がある。曰く、『一の形を鑑識することは一の既存する觀念を證明することで、外面的の救けを借らずに藝術家の成しうる行爲である』と。で、かやうな理想世界には一種超世間的な美と滿足が橫はる。藝術を通ほして情緖から行かうとも、思想を通ほして理性から行かうとも、その到達する法悅境は即ち一である。ラッセルがかう言つてゐる。『まさしく、數學は唯だ眞理ばかりでなく、至上の美――彫刻のそれのやうな冷たく嚴そかな美――を持つてゐる。喜悅、昇天の眞精神、即ち最も高い優越の程度の試金石なる人間以上であるといふ感情は、詩に於ける如く數學に於ても確實に見出される』と。クライブ、ベルも亦その『藝術論』の中で、藝術的精緖と數學者の經驗する感情とが同一のものではな

からうかといふ疑問を起してゐる。

　カンディンスキイの藝術はセザセヌやピカソのそれとは全然違つた方面を代表してゐる。兩者の間には越すことの能きない溝渠がある。我等は我等の二元的な意識活動の當然な表現としてラッセル及びベルグソン哲學の對立を許すであらうか。さうするとピカソの藝術と並んでカンディンスキイの藝術の存在することは不思議ではない。靜的美術としての建築と動的美術としての音樂との間に介在して繪畫がある。繪畫はその形に於て建築に傾き、色に於て音樂に近寄つてゐる。カンディンスキイは最も色彩の律的調和を重ずる畫家で、彼の目的は音樂を描かうとするのである。從て、同じく抽象と絕對を心懸けるにしても、ピカソのは物的であるが、カンディンスキイのは心的である。その内的態度に於て、前者は水に向ひ後者は火に向つてゐる。

　カンディンスキイは繪畫を音樂の領域に持運びながら、その表現の自由を學び、その作曲的技工に倣はうとしてゐる。彼に由れば、色彩の美妙なシンフォニイを現はすのは繪畫の理想である。繪畫は能ふだけ自然界の形から離れて純粹構造に向はねばならぬ。然し、彼の說に由れば、繪畫が自然から獨立しようとする革命の起つたのはつい昨今のことで、我等はまだ形と色との心的意義に對して無自覺の狀態に彷徨してゐる。されば、今日の畫家は肉眼よりも先づ心を修錬して、色彩の內的特徵を讀破するやうに努めねばならぬ。若しその外形ばかりが徒らに自然から離れるだけで、內的諧調の之に伴はない限り、それは無意味な裝飾畫に墮して了ふ。即ち或る畫家の製作が自然の形像色彩を離脫する程度は、彼の精緖をも共に伴ひうる點までに止らねばならぬ。要は『內的要求から作られたもの、心靈から湧き出した物が唯だ美である』、精神の解放が藝術の目的である。

　カンディンスキーの說に由れば、心靈の自由が得られるに從つて、藝術家の感應力は次第に自覺的にならねばならぬ。『私の意見では我等は今日理性的、意識的

蘆花 徳富健次郎著

小説 黒い眼と茶色の目

新刊

世界的に偉大なる大正三年は著者の身上にも古きもの死して新しき生命の自由を得たる大なる年なり。著者は此大なる年を餞る可く、『過去』の煤掃を始めたり。煤掃の箒の先きに先づかゝりたるが此小説なり。著者が青春の懺悔の一片とも見るべし。敢て江湖の一讀を待つ。

定價壹圓廿錢（郵税十錢）

發行所 東京市銀座大通新橋際（電話新橋一九九二）振替口座東京二〇〇番 新橋堂

發賣所 東京市神田區表神保町（振替東京二七〇番）東京堂

發賣所 市内並に全國各地書店

●萬朝報遊技部發兌 □東京かるた會競技用

百人一首 標準かるた

歌かるたは東京かるた會で用ふる標準かるたに限ります東京ではもう何れの家庭何れの學校でも標準かるたを用ふる事になりました、標準かるたは假名文字ばかりで誰にも取れます殊に御婦人お小供達には結構です、取りくせや得手不得手が出來ずこれ程愉快に取れるかるたは外にありません

□定價（讀札 四拾錢 取札 四拾錢）郵税各八錢 同一組十二錢

□發賣所 市内並に全國各地書店及玩具店

東京銀座新橋際 振替東京二〇〇番 新橋堂

蘆花 徳富健次郎著（五版）

訂正縮刷 みゝずのたはこと

武藏野の霜の中から拔け出した白い大根や紅い甘藷が盛に都人士の口に入る季節となりました新漬の澤庵に辛い舌皷を打ち燒芋の甘いけぶりに頰を燒く方々は練馬大根や川越藷と同じく武藏野の土の産物なる『みゝずのたはこと』を身近に備へて時々其一二葉を咀嚼し恒に眞に恒に新なる生活の趣味を嚙み出してください。

定價金壹圓（郵税八錢）

發行所 東京市銀座大通新橋際（振替東京二〇〇番）新橋堂

同 日本橋區呉服町八（同二〇七六番）服部書店

發賣所 同神田區表神保町（同二七〇番）東京堂

●約束違叛豫防器!!

日記兼用 卓上備忘暦

本器は目下歐米諸國にて『デスクカレンダー』又は『メモフワイル』と稱し家庭用事務用として大流行を極めつゝあるものです。既に我邦に於ても内閣大臣の卓上や銀行會社重役のデスク上に實際に使用されて居ります、其特徴は暦であつて日記と備忘録に兼用の出來る點です。

甲 七十錢 乙 七十五錢（郵税各八錢）

發行所 東京市銀座大通新橋際（振替東京二〇〇番）新橋堂

發賣所 東京堂、伊東屋、松屋、白木屋、三越呉服店を始め市内並に全國到る處書店及文房具店

（中付一の一）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

◉我が文藝飜譯界に於ける空前の大出版

泰西名著文庫

第二版 會員募集

苟も書を讀まば世界第一流の書を讀め、濫讀は、濫費と同じく心神の浪費也、損失也、害惡也。本文庫は古今に亘る世界最偉の雄篇傑作を選みて、現文壇斯道の巨匠が刻苦多年飜譯の業を進め來れるもの、坊間濫出の譯書と類を異にすることは既に天下の定評あり。讀書子の書齋必ず一部を缺くべからざる也。

入會申込 一月末日限

飜譯者の氏名

（イロハ順）

馬場孤蝶　戸川秋骨　高橋五郎　平田禿木　森鷗外　森田草平

略規

◉非賣品—計十八冊 菊判一冊平均約八百頁

◉來る三月上旬より毎月一冊づつ刊行し會費は一ヶ月金貳圓とす——但し外に送本料を要す。（東京市内は毎月集金人を差出すべし）

◉申込金金貳圓を要す——但し此申込金は最終の會費に充つ。

（中付一の二）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

◉泰西名著文庫の信用

如何を示すべく、第一版の直接會員(即ち直接購讀者)名簿中に於ける無數の貴紳及び公衙中より若干の芳名を左に掲ぐ。

日本銀行總裁　大審院長　法學博士　總理大臣　東京　議定官　東京市長　法學博士　東京　圖書頭兼諸陵頭　理學博士　貴族院議員　教授醫學博士　貴族院議員　法學博士　海軍軍醫總監　醫學博士　掌典次長　元帥陸軍大將　內大臣　東宮御學問所幹事海軍少將

三島彌太郎子爵家　横田國臣家　大隈重信伯爵家　德大寺實則公爵家　土方久元伯爵家　阪谷芳郎男爵家　渡邊國武子爵家　山口鋭之助家　大澤謙二家　平田東助子爵家　實吉安純子爵家　九條道實公爵家　大山巖公爵家　小笠原長生子爵家

貴族院議員　東京衛戍總督　陸軍大將　朝鮮駐劄軍司令官　陸軍中將　帝國大學醫學博士　教授醫學博士　第一艦隊司令官　海軍中將　東京控訴院長　法學博士　帝國大學教授　理學博士　海軍軍令部次長　海軍中將　皇子傅育官　貴族院議員　海軍中將　住友銀行社長　前大阪商船株式會社長　日本銀行理事　三井銀行、三井物產常務取締役

德川賴倫侯爵家　淺田信興男爵家　安東貞美男爵家　宇野朗家　栃内曾次郎家　富谷鉎太郎家　柴田桂太家　山下源太郎家　松平乘純子爵家　伊藤雋吉男爵家　住友吉左衛門男爵家　中橋德五郎家　渡邊千春伯爵家　早川千吉郎家

貴族院議員　三井合資會社長　三菱合資會社長　三井銀行　常務取締役　日本郵船　株式會社社長　三菱合資會社顧問　東京　東京　東京　東京　山口　鹿兒島

後藤新平男爵家　三井八郎右衛門男爵家　岩崎久彌男爵家　米山梅吉家　近藤廉平男爵家　豐川良平家　大町桂月家　慶應大學　早稻田大學　高等師範學校　高等商業學校　第七高等學校造士館　衆議院　貴族院

規定及見本は御申越次第送呈す

濫買は戒むべく、濫讀は愼むべきである。併しながら良書の價値は絶對である。これより獲らるゝ慰安、反省、向上、發展の効果を思へば、天下の何物も之と廉價を競ふことは出來ぬ。

東京市神田區小川町一番地

國民文庫刊行會

電話本局七三三一番　振替東京一八五七二番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

コンポヂションの時代に近づきつゝある。畫家が彼の製作を構成的(コンストラクチブ)と公言しうる時期がくるであらう。我等は我等の前に意識的創造の時代を望見する。繪畫に於けるこの新精神は、思想界の精神と手を取つて、偉大な精神的英雄の出る時代のかたへ進みつゝあるのである」と。

七、

私は、不完全ながら、思想藝術の現在に對する私の考を述べ終つた。然し、讀者は私から或る結論を待設けてはならぬ。誰がその大膽を敢てしえよう。

唯だ最も顯著な傾向に就て言へば、凡てが精神の自由解放のかたへ向つて急速な進歩をとりつゝあるといふことである。生命の希望と喜悦(よろこび)は常に新しい精神的價値の勝利にあらねばならぬ。」現代の目標は「自由」である、「解放」である、「絶對」である。物理學は物質の非物的性質を教え、心理學は潛在意識の驚くべき力を開き、哲學も藝術も物の囚はれから離脱すべく最善の努力を致してゐる。剩(あまつ)さへ、心と物との障壁は次第に薄らぎ、直觀と理性とは意識の奧深くで握手しようとしてゐる。凡てが一致して新しい「神」の前に進みつゝある。

新文明の正午は近づいた。

中澤臨川氏は本論文の爲めに全力を傾注せられ、期日までに文藝時評を起稿する暇なく、本號丈け時評を休載することゝせるが次號よりは必らず每號執筆せらるべく、外國の文藝思潮の評論と共に、今年は更に本邦文藝の評論にも力を盡さるゝ筈也、

歐洲動亂史論

東京帝國大學法科大學教授　吉野作造

緒言

歐洲動亂の暴發以來、之に對して史的解釋を與へんとの企は、或は雜誌等の論文として、又或は一部の纏つた著書の形に於て、多くの人に依りて試みられた。之を讀んで見ると、概して有益の述作たるを失はず、吾人も之に依つて大に啓發せらるゝ所があつたのである。然し乍ら、其の多くは、最近數十年間の云はゞ陳腐な歐洲外交史の一節を掲げて、戰亂の遠い原因を説明するものでなければ、戰亂暴發前後に現れた新聞の記事を綜合して、交戰各國の掛引を叙するものに過ぎぬやうに見ゆる。之れも無論有益なる研究には相違ない。が、併し之れだけでは戰亂の縁因は十分に分つたとは云へぬだらうと思ふ。今戰亂を一つの疾病に例へて見ると、其疾病に就て苟くも精密なる智識を備へるには、無論當該患者の體格上の素質やら、過去に於ける病歴やらを調べることが必要であり、又發病以後の經過にも念を入れて注意せねばならぬのであるが、發病の直接の原因としては、何よりも先づ患者の最近の生活狀態を明にする事が大事であらう。此大事な點が案外看却されて居ると自分は考ふるのである。要するに予は、今次歐洲の動亂に關しては、既に幾多の著書論文の公刊を見たるに拘らず、なほ未だ研究せられざる部分が

殘つてゐると思ふのである。是れ或は近世の外交史は、既に幾多の參考書に賴るの便あり、戰局現時の經過に付ても亦、多少の注意と勞力とを吝まざれば、日々の新聞等よりその種を拾ふことが出來るのに、其中間の部分に至つては、俄に之を研究査明することが一寸困難であるといふ爲めではあるまいか。

予は現時の戰亂に關し、固より自ら十分の智識を有つて居ると信じて居るものではない。只比較的廣き範圍に亘つて、略ぼ凡ての關係問題について、普ねく多少の研究を試みたことは敢て公言して憚らない。斯くて予は甚だ不完全ではあるが、歐洲動亂に對して稍行き渡つた智識を得たやうな感を抱いて居つた。其後私かに早晩何人か專門の學者に依つて、完全なる說明が與へらるべきを豫期して居つたのであるが、不幸にして今日まで未だ之といふ程のものゝ公刊を見ぬ。於是、去冬以來、一つ自分で此試みをやつて見やうかといふ氣を起したのである。

然るに予は不才公務に追はれ勝で、中々自ら執筆するの餘裕などはない。去れば前述の考はあつても、之が實行は一寸覺束なく見へたのであつたが、偶ゝ舊友瀧田君の、中央公論の爲めに一場の談話を需めらるゝに會した。乃ち吾より進んで予の動亂史論の筆記を請うたのであるが、兩人の意合して遂に生れ來たのは即ち本篇である。力めて通俗を旨としたるは、廣く一般の讀者に了解を得んが爲めであるが、只一場の談話たるが故、十分委細を盡し得ざるは、私に顧みて遺憾とする所である。兎も角も未定稿として不取敢世の叱正に附することになつたのである。

予の考ふる所に依れば、今次の戰亂は二つの史的中心點を有する。一つは墺塞兩國の葛藤で、他は露、佛、英の對獨戰である。從つて史論も亦二段に分れ、第一には何故に墺塞兩國は開戰したか、第二には何故に墺塞の戰爭は惹いて世界の大亂を

誘起したか、この二點を說かねばならぬ。細目の款項は今なほ未定であるが、目下の豫定では、先づ墺洪國皇儲殿下の暗殺のこと、之に附隨する諸種の問題と、墺塞兩國の關係、特に塞耳比亞民族の眞相、之と墺國東方發展との關係等の問題とを詳論して第一段を了り、更に第二段に至りては、露、獨、佛、英が何故に起つに至りしかを根本的に研究して見やうと思ふのである。其中夫々適當の場所に於て爾餘の關係小國にも言及することあるべきは言を待たない。斯くて數號に亘りて講說を進むる積りであるが、其中もし平和の議でも始らば、併せてその事をも論じて見たいと思ふが、判然明言することは避ける。

墺洪國皇儲殿下の暗殺

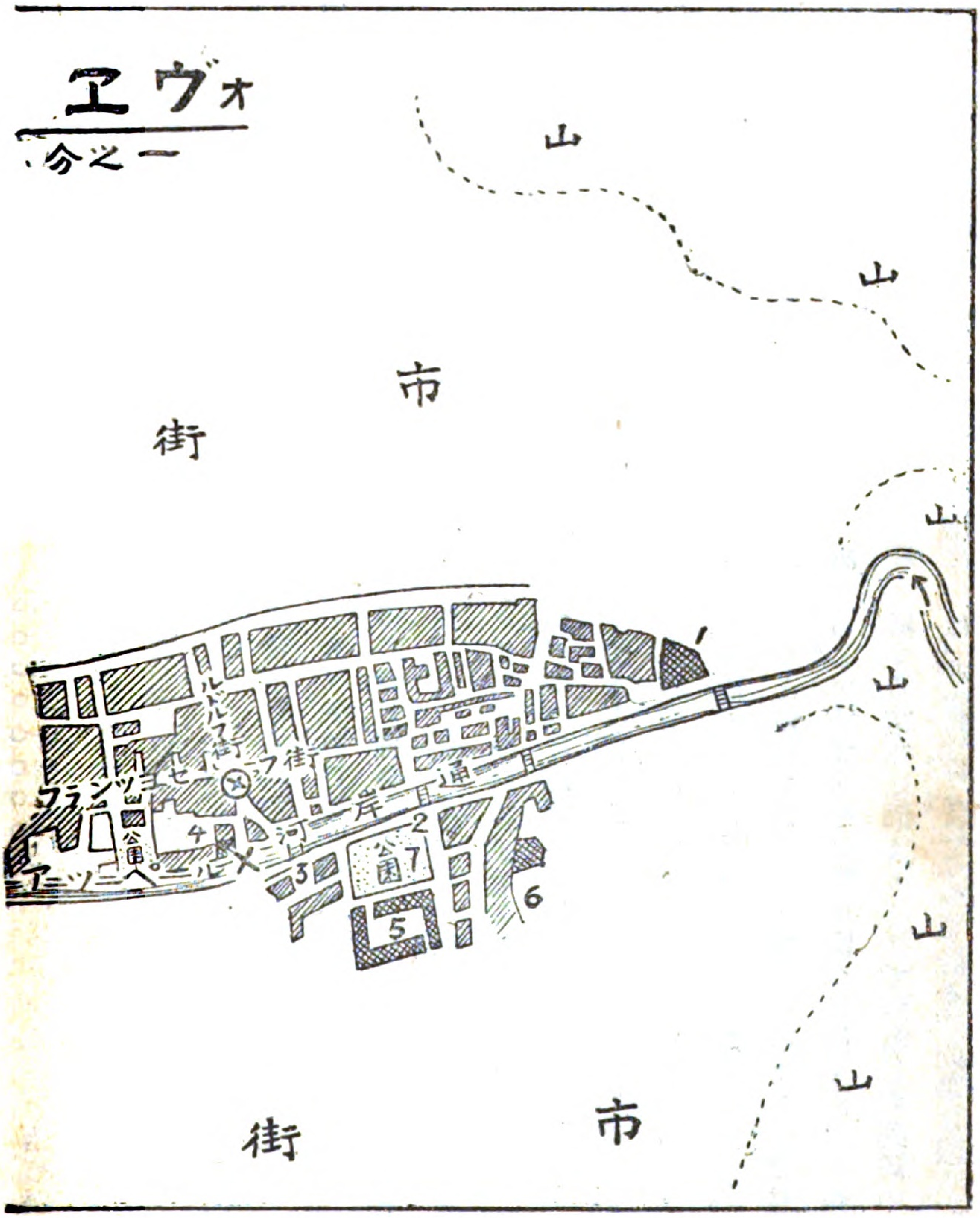
暗殺の光景……兇行者の訊問……人心の動搖……皇位繼承問題……政治上に及ぼす效果

△暗殺の光景

昨年の六月下旬、墺洪國政府はボスニア・ヘルツエゴヴイナに於ける二軍團の演習を行ひ、皇儲殿下は之を統監する爲めに該地方に赴かれた。之は第十五、第十六の二軍團で、塞國、黑山國を想定敵とするものとして知られて居る。さて云ふ迄もなく墺洪國に於ける兵馬の大權は老帝フランツ・ヨセフ陛下の掌り給ふ所であるけれども、七八年以前大患に罹らせられてから、實際の統帥權は皇儲殿下にお任せになつて居る。そこで今度の演習も皇儲殿下フランツ・フエルヂナンド大公が之を統監すべく赴かれたのである。此演習は同月二十七日を以て終つた。殿下は即日イリッツの溫泉場に赴かれた。此地は南の方から汽車で行くと、ボスニア

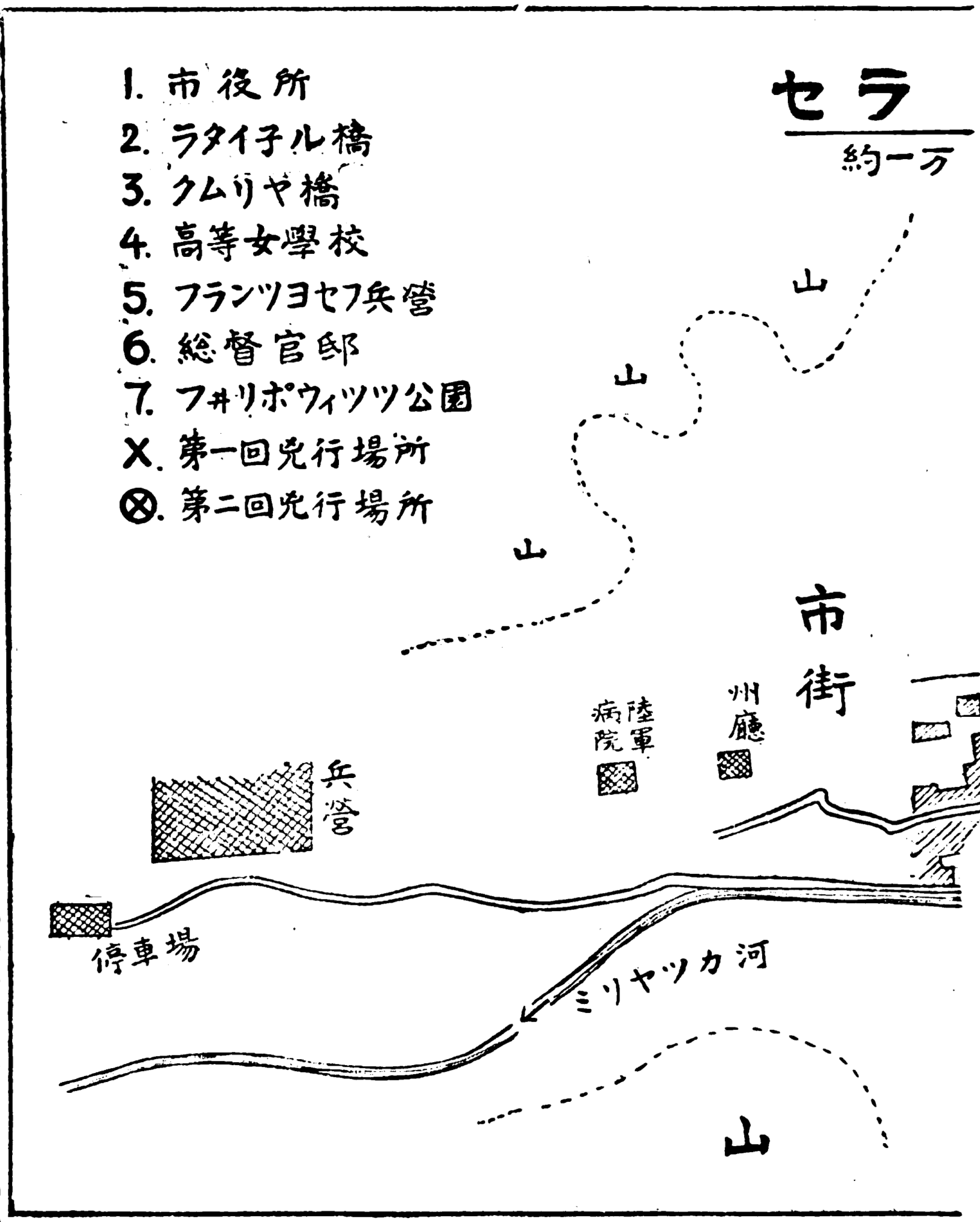
の首府セラエーヴォの一つ手前の停車場のある所で、こゝには維納から一所にやつて來た妃殿下が大公殿下を待ち合はせて二日間滯在せられて居つた。二十七日はこゝでお暮らしになつて、二十八日の朝には豫定のプランに基いて首府セラエーヴォを公式に訪問すべく汽車に乘つて同地を見すてられた。セ市に着いたのは正に九時五十分であつた。同市の停車場は市から日本里程で一里足らずも離れた西の方にあつて、そこから市街の方に來ると途中にすぐ左側に兵營がある。そこへ一寸お立寄りになつて、それから大公殿下の歡迎會場たる市役所に向はれた。停車場と市役所とは一筋の眞直な道であつて、兵營の前を通つて少し行くと、ミリヤツカ河にぶつつかり、其河の岸に沿うて東に走つて市役所に行く。其河の岸の通りはアッペル河岸と云つて、同市では一番道幅も廣く、大きな建物などのある所である。自働車で東の方に奔ること約數分、丁度左側に高等女學校を見る邊、もう少しでクムリヤ橋に出ると云ふ手前の處で。どう云ふハヅミであつたか自働車が一寸留つた。そして再び進行を始め掛けた時に、右側に並んで居つた群衆の中から一人の若者が、黒い小箱を投げ付けた。それが大公殿下の自働車の中に落ちたのであるが、大公殿下は何心なく之を取つて道の上に投げられた。すると其れが非常な音を出して爆發した。それは爆裂彈であつたのである。そして其爆裂彈が恰度爆發した時に、次の自働車が其上にやつて來た。其自働車の中には隨行のボース・フォン・ワルデック伯爵及び侍從武官のメリッチ中佐が乘つて居つたが、中佐は頭部に微傷を負はれた。其外に見物人も極く微かな傷であつたが、若干名怪我をした。新聞の報導の中には、此時犯人は爆裂彈の爆發せざるを見るや、直ちにまた短銃三發を擊つたが、それも中らなかつたと傳へて居るのもあるけれども、之は誤りであるらしい。尤も玆に序に斷つて置くが、此暗殺の光景に關する電報は固より、後で到着した列國の新聞の報導は、非常に區々になつて居る。此事に限らず、何れの新聞の報導が正しいかに迷ふ事が非常に多い。最も

のある倫敦タイムスの記事でも此場の光景を叙して、大公殿下は自働車で以て市役所に向ふ途中、一旦フヰリツポウイツチの公園に於ける閲兵式に臨まれ、それから市役所に向ふ途中で此第一回の兇行にお遭ひになつたとあるけれども、此説



によると、一旦フヰリツポウイツチ公園まで行つて、それから復た橋を渡つて、道を少し戻つて、夫から再び引返して市役所に行つた譯になる。この事が上記の地圖によつて見らるゝ通りである。且つ又フヰ

リツポウイツチの公園は木が澤山植つて居つて閲兵式などの出來る處ではない。我國の或る學者の著書の中にも倫敦タイムスの此記事によつて、右の點を其儘譯して居るのもあるけれども、どうも之は信ぜられぬやうである。予は英・佛・獨の代表的の新聞を併せて見て、其中の共通の點は先づ間違ないものとして取り、三つ皆違ふと云ふ時には、一番關係が近いと云ふ理由から墺國の第一位の新聞たるノイエ・フライエ・プレッセの報導によつて



此記事を作つたのである。それで短銃三發の說は採らぬ。兇行者が兇行後泡を喰つて逃げ出し、逃げ場に困つて川の中に飛び込んだが、理髮屋の職人の某と云ふものに捉まつたと云ふやうな事に照らし合はしても、爆裂彈を投げてから更に短銃を放つと云ふ暇が無かつたらうと思ふ。尙此第一回の兇行者はネデリコ・カブリノヴィッチと云へるヘルツエゴヴィナ生れの人間で、印刷職工であると云ふ事である。

扨此兇行は午前十時十五分の事であるが、此際大公は一寸自働車を留められたが、それから又直ぐ市役所に車を進められて、市長以下の歡迎を受けた。市役所に於て市長が歡迎の辭を述べる時に、之を遮つて市長を詰問したと云ふやうな話も傳はつて居るが、其等の事は改めて委しく述べぬ。此公式の歡迎會は卅分許りで濟んだ。それが濟んで大公殿下は御休憩場になつて居る總督の官舍にお出になる譯てあつたが、先刻第一回の兇行で怪我をしたメリッチ中佐を陸軍病院に見舞に行かうと仰せ出された。其時總督も市長も警察官も萬一の事を慮つて直ぐに總督の官邸にお出なさるやうにと切に勸められ、妃殿下も亦長い市街を通つて行かねばならぬ所の、遙か西の方にある陸軍病院に行くことを好まれなかつた模樣があつたと云ふ事である。それにも拘らず大公殿下はどうでもこうでも病院に行くと云はれ、そこで再び妃殿下と同乘して自働車をかりて元と來たアッペル河岸を引返し、西の方に進まれた。ラタイネル橋の所て右に折れ、フランツ・ヨセフ街に衝き當り、更に左に折れて此街を西に走り、丁度ルドルフ街との交叉點に來た時又第二回目の兇行が行はれたのである。玆處にも亦別說がある。アッペル街を右に曲りてフランツ・ヨセフ街に出たのは、ラタイネル橋の所ではない、クムリヤ橋の所であると報ずるものもある。或は此方が本當かも知れぬ。さて元來東歐の都市は一般に道幅が非常に狹い。が殊に此邊は僅か二間半位しかない。新式の新道たる河岸通てすら五六間位のものである。夫れで自働車も普通の速力では走れなかつたものと見へる。殊に道順に關する第二說によると

河岸から右に折れルドルフ街とフランツ・ヨセフ街との交叉點で又左に曲らうとした譯になるから、恐らく、自働車が非常に徐行したものであらう。之れが偶々兇行者の利用する所となつたので、即ち二度目の兇行は首尾よく其目的を遂したのである。今其光景を述ぶるに、車のル街フ街の交叉點に來るや群衆の中に交じつて居た一人の年若い青年は突如大公及び妃殿下を目懸けて短銃を連發したのである。茲でも一つお斷りをして置くのは、別説に初め兇漢は矢張り爆裂彈を投げたが、此時も爆發しなかつたから、そこで短銃を撃つたといふ者があるが、どうも此時は爆裂彈は無かつたらしい。故にこゝでも予は別説は採らぬ。而して此短銃は非常に敏速に放たれたものと見へる。其證據には果して幾發撃つたかと云ふ事は殆んど誰にも分らない。或は二發といひ、或は三發四發と云ふ。兎に角續け樣に大公と妃殿下とがやられたのであるが、餘り敏速であつたから、どつちが先きにやられたか、それも分らない。當時日本の新聞にあらはれた電報には、短銃の放たるゝや、妃殿下は身を以て大公殿下を掩ひ、爲めに第一發を其腹部に受けて絶命されたとあつたが、短銃を撃たるゝ突嗟の際に、先づ身を以て殿下を掩ふなどゝ云ふ暇のある筈はない。多數の説によると、第二發が大公の頸部に中つて動脈を切斷し、第三發が妃殿下の腹部を貫通して共に殆んど即死せられたと云ふのである。然しながら之も後で分つたので、いろ〳〵其當時の報導について精密に研究して見ると、其當座は短銃の犠牲になつたものは大公丈けと思はれたらしい。さればセラエヴォから維納に發せられた第一回の電報には大公は短銃の犠牲となり、妃殿下は驚愕の餘り失心せられたと傳はつた。第二報には失心の結果落命せられたと傳はつた。妃殿下も亦短銃の犠牲になつたと云ふのは後で軍醫が檢察した上で分つたやうである。要するに大公が短銃を受けらるゝや否や、妃殿下も亦其前に斃れたものらしい。遮莫兇行の行はるゝや自働車は直ちに引返してラタイネル橋を渡つて總督の官舍に奔つたが、兩殿下は其途中に於て全く絶命せられたと云ふ事

である。之が十時四十分の出來事である。尙、兇行者は直ちに其場で以て警官の捕縛する所となつたが、調べて見ると云ふと、ボスニア生れの青年でガヴリロ・プリンチープと呼ぶ、中學校の八年生の學生であつた。

一說によると、此時大公及び妃殿下を殺した短銃はどうも只一ヶ所から來たのではない。二箇所から放たれたやうだと云ふ。之は當時大公殿下に扈従したと云ふ同地の大僧正（アーチビショップ）のスタッドラーの說としてブタペストの新聞に掲げられた所である。殆んど同時に兩殿下を殺し終ふせたので、或はこう云ふ話の起つたのかも知れぬ。其後の報導には、多少たりとも此說を是認すべき材料となるやうの事はサッパリ無いから、一場の浮說であつたかも知れぬ。併し一方から考へると、斯かる說の傳はるにも夫れ相應の理由はある。そは後に述ぶるが如く、此地方は豫て非常に物騷な土地で、皇儲殿下の訪問を機として萬一の兇行必ずしも絶無を期せずと云ふ事は初めから豫期し得ざるとではなかつたからである。一說には當初殿下が維也納を出發せらるゝ時、危險だから行かぬ方がよからうと云ふ說もあつたとさへ傳へられて居る。そこで警察の取締も實は非常に矢釜しかつたのである。例へば大公殿下のお通りの時には、屋根に上つたり、窓の上から覗いたり、窓を明け放して花鉢を置いたりしては不可ぬとか、樹木若くは街柱に上つては不可ぬとか、いろ〳〵の細かい取締の規則が總督の政廳から發せられて居る。（去年七月二日佛國タム新聞による）去れば警戒も頗る嚴重であつたに相違ない。それにも拘らず、而かも二回兇行が行はれ、とゞのつまり兩殿下の暗殺を見たのであるからして、一方には警察の怠慢を責むるの聲もあつたけれども、他の一方には兇行の陰謀につきていろ〳〵の流言蜚語が行はれたやうである。例へば暗殺の陰謀が非常に周到に行き渡つて居つて、自働車の運轉手も亦仲間の一人であると云ふやうな說、或は二度目に、大公殿下が市役所を出られた時に、何とかいふ別の途を通つて行けと命ぜられたのに、運轉手は聽かぬ振りしてわざ〳〵同じ河岸通りに出て、二度目の兇行の所

をわざとゆつくりと行つた、之れ運轉手が怪しい證據なりなど云ふ說も行はれた。而して誰云ふとなく此暗殺は陰謀の結果であるといひ、又其陰謀は所謂セルビア民族の仕業であると云ふ說は甲より乙に言ひ傳へられ殆んど凡ての人に信ぜらるゝ有樣であつた。後にも委しく云ふが、一寸こゝに斷つて置く事は茲にセルビア民族と云ふのは廣い意味のセルビア民族の中で、所謂耶蘇正教を奉じ、此宗教上の點に於て特に塞耳比亞國と密接の關係にあり、又塞耳比亞から使嗾されて常に墺太利排斥運動を企てゝ居る種類の人間を云ふのである。尚兩殿下の遺骸は、一ト先づセラエーヴォの總督の官邸に安置せられ、そこでいろ〳〵の宗教上の儀式が行はれたが、二十九日の夜一切の準備を了つて官邸から運び出された。澤山の花や燭火に前後を圍まれ、下士官に荷はれ大勢の官民に送られて停車場にお着きになり、午後の七時此地を發してメトコヴイッチに向はれた。翌朝の六時こゝに着く。海軍の小艇に移され、ナレンタ河を下り、河口にて軍艦ヴイリブス、ウニチス號に移され、九時出帆、トリエストに向つた。七月二日同港に着き、即日特別汽車で維納に運ばれ、首府の南停車場に御着きになつたのは二日の夜の十時である。三日は宮城内の寺殿に於て正式の葬ひを最も嚴肅に行つて、同日直ちにアルステッテンの墓地に送られ、四日同地で無事御埋葬を終つたのである。尚後にも云ふ事であるが、大公と妃殿下とは所謂卑族結婚で身分が違ふ。此身分上の差を明かにする爲めに葬式の際も妃殿下の靈柩は銀色に塗り、大公のは金色に塗り、教會に安置する時には、大公のは一段上で、妃殿下のは後ろの方の低い處であつた。其他いろ〳〵の點を區別したと云ふ事が新聞に書かれて居る。妃殿下が等族でないと云ふ事は後に述ぶる皇位繼承の問題に大いなる關係のある點である。

十月廿六日のユーナイテッド、プレッス社發の電報によると、兩殿下暗殺の下手人及び共犯者は叛逆罪に處せられ、廿八日を以て刑の言渡がある筈だと云ふ事である。

△兇行者の訊問

兇行者は現場に於て直ちに捕まつたと云ふ事は已に述べた。第一の兇行者はネデリコ、カブリノヴイッチと云ふ青年でヘルツエゴヴイナ生れの人間であること、第二の下手人はガヴリロ、プリンチープと云ふボスニア生れの青年であることも亦已に述べた。而して此等の青年は共に孰れもセルヴイア正教を奉ずる部族に屬すると云ふ事が明かになつた。此セルヴイア正教に屬すると云ふ事が最も注意を要する點である。

序に説明をするが。普通に耶蘇を新教舊教と分つけれども、此舊教の中にも西方舊教と東方舊教との二つある。我々が普通に舊教と云ふのは多くの場合に於て西方舊教即ち羅馬を中心とする羅馬舊教を意味するのである。日本では天主教と云ふ言葉も使はるゝけれども、之は支那人が附けた名前で、神即ちデユースを支那語で天主と譯した事から起つたので西洋語の飜譯ではない。然し舊教は是れ丈けではないので、此外に東方コンスタンチノープルを中心として發達した處のものがある。之を我々は正教と稱するのである。而して正教は羅馬舊教が羅馬法王を中心とする單一の世界的教會であるが如く、之も亦コンスタンチノープルの大僧正を中心とする世界的の單一の教會組織であつたけれども、後に至つて之は分裂して今日は凡そ八つ許りに分れて居る。其分れた譯はいろいろの理由があるけれども、畢竟するに西の方は早くから開けて交通も便であるからして、法王の命令は比較的に到る處に通ずるのに、東の方は之に反して交通が非常に不便で萬事進歩が後れて居るから、コンスタンチノープルの命令は普く教民一般に及ばないといふ事情に歸する。去れは東方教會では初め大僧正の命を奉じて僧侶は熱心に各地方に宣教して教民は段々殖えても、コンスタンチノープルとの連絡は常にまた段々薄くなる。であるから未だ單一教會と云ふ面目を維持して居つた時でも、遠方に居る所の僧正は一々大僧正の命令を受けることが出來ぬので、實際に於ては殆んど獨立して萬事を行つて居つた。只初めて僧正になる時にコンスタンチノープルに行つて大僧正から任命の承認を求むると云ふ位の關係を維持するに過ぎなかつた。こう云ふ風であるからして羅馬舊教のやうに永く中央集權的の教會制度を執ると云ふ事が出來かなつたのである。それでも隋性で長く獨立を計るものがなかつたけれども、一千五百八十九年に至てモスコーの僧正が獨立を企てた。而して後一千七百廿一年、彼得大帝が所謂最高宗務院を設けて教政を之に一任せる際、モスコーの僧正の地位をば自分で取つて自ら露西亞に於ける正教徒の宗教上の首長と云ふ事になつた。今日ニコライ派の舊教の宗教上の首長が露國皇帝であると云ふのは此時から初まつた。此れ以來東方の正教はコンスタンチノープルを中心とするものと、モスコーを中心とするものと二つに

分れたが、十九世紀の半ばに至り、土耳古の領土であつた所のもろ〳〵の耶蘇教地方が獨立して、或は塞耳比亞となり、或は勃牙利となり、或は希臘、或は黒山、或は羅馬尼亞となるに及んで、此等の地方の教民も亦宗教上の獨立を企て、今日では各國は各々其國獨立の教會を維持すると云ふ事になつた。但し露西亞の如く國王が宗教上の首長ではないけれども然し土耳古の教會と別れて、勃牙利の正教あり、塞耳比亞の正教あり、希臘の正教ありと云ふ様になつた。此等の正教を總稱して昔は希臘正教若くは單に希臘教と云つた事もある。それは天主教が羅馬の文明の色彩を帶びて居るのに對して、此東方の正教は希臘文明の色彩を帶びて居るから、こう云ふ名前になつて居るのであるが、然し今日では此名前を用ふると、希臘國丈けの正教會と混同する恐があるからして、成る丈け東方正教と云つて、希臘教と云ふ名を避くるを可とするのである。只茲に注意すべきは此等の各種の正教會は只其教會政治の首腦が獨立して分れて居ると云ふに止つて、教理や儀式等に於ては全然全一である。尚八つに分れて居ると云ふ事を申したが、今それを列擧すると、第一露西亞正教、之は約八千七百萬人の信者を持つて居る。次が土耳古正教、約三百萬人の信者を持つて居る。次が希臘正教及び塞耳比亞正教、之は各々二百萬の信徒を有つて居る。それからルーマニアの正教、之は五百萬。それから勃牙利の正教、之は三百萬。次に黒山國の正教、之は廿五萬。其外に墺洪國内に一つの獨立の正教國あり、約三百五十萬を包含して居る。先達のバルカン戰爭で國境が變り、從つて各派信徒の法律的所屬は著し

き動揺を見たが、併し假令國籍は如何様に變つても、宗教的所屬は大體變動はない事と考へる。

扨此のセルヴィアの正教と云ふものの勢力はセルヴィアの國境と其範圍を同じうして居るかと云ふにさうではない。セルヴィア正教の信徒は實は塞國以外の各地に散在するは勿論であるが、今現に問題となつて居るボスニア・ヘルツエゴヴィナに二は一團となりて非常に澤山居る。而して茲に考へねばならぬことは、セルヴィア正教會に屬すると云ふ事は取りも直さず宗教上塞國の支配の下にあると云ふ事を意味するのである。歐羅巴人にとつて宗教と云ふものは非常に重大なものであると云ふ事は云ふ迄もない。殊に狂熱的なる正教徒に於て此點が最も著しいのであるからボ・ヘ二州に非常に多數の正教徒、而かもセルヴィア正教徒が居ると云ふ事は此二つの地方の間に、單に人種が同じだと云ふ事の外に尚一層密接の關係があり得ると云ふ事を吾人をして想像せしむるのである。勿論セルヴィア正教徒なるものは土耳古領にもあれば勃牙利領にも居る。

然しながらボ・ヘ二州に於けるが如く多數團まつて居る處はない。一九一二年末の調査によると、ボ・ヘ二州の總人口約二百萬の中、其宗教別は次の如くである。

宗教別		人口	百分比例
一、正教を奉ずるもの	セルヴア正教	八五〇、〇〇〇	四三、
	ギリシア正教	八、〇〇〇	
二、天主教を奉ずるもの		四五〇、〇〇〇	二一、
三、回々教を奉ずるもの		六二〇、〇〇〇	三五、
四、新教を奉ずるもの(主として獨逸民族)		六、〇〇〇	〇、二
五、猶太教を奉ずるもの		一二、〇〇〇	〇、五

右の表の中、天主教を奉ずるものは、所謂クロアシア民族(此事後に説く)に屬するもので、セルヴイア民族とは同一種族ではあるけれども、今日では全く別物と見ねばならぬのであるから、之は暫く除く。回々教を奉ずるものは、之は他の正教を奉ずるものと區別する爲めに、時々セルヴイア民族とは云はないで、ボスニア民族と呼ばるゝ事もあるけれども、然し之は所謂セルヴイア民族と全然同一の種族である。回々教を信ずるからといつて土耳古人ではない。土耳古人は此地方には非常に少い。詰り之は昔、土耳古の壓迫を受けた時に、大地主やら其他大財産家が、土耳古の保護を受けんが爲めに金を遣つて其庇護を買ひ、其際土耳古人から强制されて回々教に改宗したものの子孫である。それ丈けの差であるからして之を政治的に見ると云ふと、正教を奉ずるものと先づ同一に見てもよいのである。尤も回々教徒は天主教徒のクロアシア人の方に同情を寄せたと云ふ歴史もあるけれども、天主教徒は教會の教へが排他的であり、從つて他宗に對しては盲目滅法に改宗を强ゆるのであるからして、其爲めに却て反感を促し、爲めに回々教徒の同情が正教徒の方に轉じたと云ふ沿革もある。今日では又多少事情が變つて居るけれども、少くともボ・ヘ二州の合併の當時は正教徒の方に同情があつたのである。

斯く考へて見ると、ボ・ヘ二州に於ては單に正教を奉ずるもののみを數へても全體の人口の四割三分はある。之に回々教を奉ずるものを加ふると、純粹なるセルヴイア民族は、全人口の約八割を占めて居る。而し

て回々教を奉ずるもの丶全部が正教徒の味方でないとしても、兎も角もセルヴィアの正教に屬して居るもの、並びに之と思想感情を同じうするものは全人口の過半數を占めて居ると云ふ事だけは斷言するを妨げない。而して此等の過半數のものが、塞國の使嗾を受けて墺洪國政府に妨害を加へんとして常に働く所の部類である。塞耳比亞と墺太利と仲が惡く、殊に近年塞耳比亞が積極的にボ・ヘ二州方面に發展するの望を絶たれてから、只破壞的の手段を以て墺國の政策を妨害すると云ふ態度になつたと云ふ事は、後に尚委しく説く。而して塞國は此目的を達する爲めに、ボ・ヘ二州に於ける同族の間に、あらゆる手段を取つて運動して居つたのである。されば近年ボ・ヘ二州に於けるセルヴィア正教を奉ずるものが、いろ／＼の政治的犯罪行爲を行つたと云ふ事が一再ならずあつたのである。例へば一九一〇年六月六日にはボ・ヘ二州の州會の開院式があつた。之はボ・ヘ二州が一九〇八年十月正式に合併されたが、一〇年二月廿日に此地に特別の憲法を布くといふことになり、その憲法によつて特別の議會が開かるゝ事になつて、開院式が六月六日にあつたのである。此開院式に臨む爲めに、當時の總督ヴァレカニン將軍が議會に向ふ途中、恰度今回大公殿下が最初の兇行にお逢ひになつた其殆んど同じ場所で、ボクダン・イエライッチと云ふ廿三才の青年に爆裂彈を投ぜられた。之もボスニア生れの正教徒である。之と同樣の事は一九一二年には二度あつたし、一九一三年にも一度あつた。かう云ふ譯であるから、セルヴィア正教を奉ずるボスニア生れのもの若くはヘルツエゴヴィナ生れのものが、政治上有力な人を殺したとか、或は傷けたとか云ふ事があると、世人は其事件の内容を細かに聞くを待たずして、直ちに之を政治的犯罪なりと考ふるやうになつたのである。抑も國家の元首とか或は其他政治上重要なる地位にあるものが、暗殺をされたと云ふやうな事は從來決して各國に其例に乏しくない。けれども其多くは無政府主義者の所爲にあらずんば、突發的狂者の行爲である。米國のマッキンレイの暗殺、佛國のカルノー

暗殺、近くは希臘國王の暗殺の如き皆之れである。然しながらボ・へに於ける今度の暗殺事件は斯くの如きものと全く性質が違ふだらうと云ふ事は、事件の内容の知られない内から人が皆疑つた所である。例へば伊藤公が哈爾賓に於て暗殺されたと云ふ場合の如く、一種の政治的意味のある犯罪行爲であらうと人は悉く疑つた。且つ又之が偶發的の犯罪行爲でなくして、政治的の犯罪だとすれば、前後二人の兇行者の間には連絡があるだらうと疑ふのは當然である。更に進んで此外にも連累者があらう、又塞國との間にも何等かの關係があらうと疑ふのも强ち無理ではない。斯くの如き疑は啻に普通一般の人の間に行はれて居つたのみならず、裁判官も亦此見地から取調を進めたものと見える。

兇行者二人はセラエーヴォの警察及び裁判所に於て次々に取調を受けた。序に申して居くが此當時新聞では、兇行者はブタペストの豫審廷に於て取調を受けたと云ふ報があつたけれども、最近の電報によれば、刑の言渡をセラエーヴォで受けたとあるから、ブタペストの裁判所で取調を受けたと云ふ事は誤であらうと思ふ。予は同地方の裁判組織を精密に知らぬけれども、同地方は洪國の屬領地にあらず、又墺國の屬領地にもあらず、墺洪國と云ふ所謂共同王國の資格に於て有する所の地方であるから、ブタペストの裁判所が同地方を管轄すると云ふ事はありさうでない。尤も洪國はボ・へに近いと云ふ關係はあるけれども、然し墺太利中央政府の立場から云ふと、彼は成る丈け洪國の勢力の膨脹を抑へやうとして居るのであるから、寧ろ地理上の多少の不便を忍んでも、どつちかの裁判管轄の下に置くと云ふなら、維納の方の管轄に附けたであらうと想像する。此等は尙詳密なる研究を待つた上で論斷すべき事であるが、兎に角此事件はセラエーヴォ丈けで濟んだやうに見える。

扨取調の結果どうなつたか。之は總て豫想の通りであつた。第一に此二人のものは初めは互に連絡がないと主張したけれども、此二人のものは久しい間の友人であつたと云ふ事が證明せられて、遂に連絡のある共

謀の事件であると云ふ事を自白した。第二に連累者が他にありや否やと云ふ問題について、之も犯人の自白によつて他に數名のものが關係して居る事が明かになつた。此當時新聞では、兇行の場所の近處の松並木の下から爆裂彈が發見されたと云ふやうな事や、或は兩殿下の御旅館の食堂及び妃殿下の寢室のベッドの下から爆裂彈が發見されたとか云ふやうな事が電報で傳へられたけれども、斯の如きは所謂風聲鶴唳に騷ぐ人の噂に過ぎないので、事實あつたかどうか疑はしい。大公の暗殺された町には松並木が一本もないし（尤も第一の兇行の場所には並木がある）、それから「大公の御旅館」といふけれども、大公は總督の官邸を休憩場に充てられて、而かも即日同地をお立ちになる御豫定であつたから、寢室と云ふやうな問題も起りやうがない。只之れ丈けは確かであつたらう。即ち爆裂彈若くは短銃を持つて居る數名のものが嚴重なる探索の結果捕まつたと云ふ事は事實あつたらう。現に前記十月廿六日のユーナイテッド、プレッス社發の電報にも兇行者及び共犯者廿三名は叛逆罪に問はれ云々とあるから、總計廿餘名の連累者があつたと云ふ事は明かである。又犯人の自白として傳へらるゝ所によつても、彼等兩人は塞都ベルグラードのカフエーで讀んだ新聞により、大公殿下の六月下旬にボスニアに來ると云ふ事を知り、兩人相談の上で暗殺の計を廻らし、之を塞國の參謀本部に勤むる一少佐に相談して此人より六個の爆裂彈と六挺のブラウニング短銃とを得、次でセラエーヴオに來り、廿八日の朝は同志のもの全體で六名各々兇器を分配して部署を定めたとある第三に塞國と關係のあると云ふ事も亦犯人の自白によつて明かになつた。即ち此兩下手人はベルグラードで暗殺の決心をなしたが、扨、如何なる手段でやるかと云ふ事について別に考もなかつたものと見え、先づ此事を參謀本部のミラン・クリピッエヴイッチ少佐に謀つたものらしい。少佐は自分は責任ある政府の役人であるからして、直接に此相談相手になる譯に行かぬものと見えて、此兩人をば或一人の腹心の壯士に紹介したものと見える。而し

て此壯士はクリピッエウイッチ少佐の旨を受けて此兩人に、クラグエヴアッチの兵器廠から、爆裂彈と短銃とを取り出して之を兩人に與へ、且つまた多額の金をも供給したものらしい。之は兩犯人の自白によつて明かになつた點である。而してクリピッエウイッチ少佐が實際ある壯士を使嗾して兵器廠の爆彈短銃を取り出さしめたと云ふ事實のあつた事は、後に塞國の政府が、同少佐を、妄りに官品を盗取横領したと云ふ罪を以て之を處罰したと云ふ報導によつても明かである。之れ丈けの事實では只ク少佐と云ふ一人の塞國政府の重要な役人が、大公暗殺の陰謀に加擔した、或は少し重く見て其陰謀の巨魁であつたと云ふ丈けに止るが、然し此クリピッエウイッチ少佐なるものゝ如何なる人であるかと云ふ事を明かにする時は、此事件は決して簡單な問題でないと云ふ事が分るのである。何故かと云ふと、クリピッエウイッチ少佐は、久しく所謂大セルヴィア主義の熱心なる唱導者で、且つ墺國に反對し、墺國の政策を妨ぐることを以て大セルヴィア主義實現の先決問題であると兼々說いて居る所のナロードナ、オブラーナと稱する秘密團體の頭目なりとして知られて居る人である。最初兇行者兩人がクリピッエウイッチ少佐に相談に行つたのも、彼がナロードナ、オブラーナの頭目であつて、こう云ふ暗殺の計畫には助言と便宜とを與へて呉れるであらうと信じたが爲めてあつたらう。彼は先に墺太利の軍隊に居つた事がある。中尉まで昇つて、一九〇六年に免職された。それから塞國の軍隊に入つた人で、彼の兄のヴアレリアン・クリピッエウイッチは一九〇八年の大セルヴィア主義の一大陰謀に活躍せしを以て名ある人である。兄弟共に狂熱的の大セルヴィア主義者であつて、それ丈け又墺太利排斥熱の强かつた人と見える。予は不幸にしてナロードナ・オブラーナと云ふ秘密團體について多くを知らない。此團體の性質、及び之を組織して居るものが如何なる人々てあるか、現に如何なる勢力を有して居るか等の點を明かにするを得ば、此問題の解釋に更に多くの光明を與ふると思ふけれども、不幸にして今之を詳

に知らない。只此團體は單にクリビッヱウヰッチ少佐が數名の無頼漢や或は二三の偏狹なる狂熱的愛國者などを集めて拵へた普通の秘密團體とは違ふものであらうと想像すべき理由がある。予は一昨年（一千九百十三年）の春、歐洲滯留中、ふと新聞で斯う云ふ記事を讀んだ事がある。一九一二年十二月廿三日新たに墺洪國に赴任して來た所のセルヴヰイア公使ヨヴアノヴヰッチは、墺國老帝陛下に信任狀を捧呈し、正式の謁見を濟ました後、慣例に從つて大公殿下に謁見を願ひ出でた。因に云ふ、同國では前にも申した通りに、軍事外交の事實上の支配は數年來大公の手にある。又其他の方面に於ても大公殿下の意見は政治上頗る勢力があるので、各國の大使公使は老帝陛下に謁見した後は、必らず大公殿下に謁見を求める。故に墺都維納のベルヴヱデーレ宮はホーフブルグと共に外交官の喜んで見舞ふ所である。斯くて塞耳比亞の公使も亦ベルヴヱデーレを訪うて大公殿下に新任の挨拶をせんとしたのであるが、大公殿下は之をお斷りになつた。初めは何の理由と云ふ事が解らぬから、暫く時が經つてから復た謁見を求めた所がまた斷はられた。そこで塞國の公使は密かに他の國の公使に頼んで大公殿下の御内意を窺つて貰つた處が、大公殿下はヨヴアノヴヰッチの謁見は永久に受けないと云ふ事を仰せられたとの事である。無論、殿下は老帝の如く、外國の使臣を儀式上受けねばならぬと云ふ義務がないからして、嫌なら嫌で斷はるのは理屈の上では妨げはないのである。けれども、現實の禮儀の上から云ふと右の如きは、塞國の公使に取つては非常な侮辱である。然らば大公殿下ともあらう賢明な人が、何故斯くの如き頑迷なる態度に出でたかと云ふに、之は後で大公殿下の意志なりとして傳へられたのであるが、ヨヴアノヴヰッチは實にナロードナ、オブラーナの創立者の一人であるからだと云ふ事である。以上の記事を今予は圖らす古い記臆から喚び起すのである。之に由て觀ると、ナロードナ、オブラーナと云ふ團體は、參謀本部の有力な少佐もあれば、外國に全權公使となつて行くやうな有力な政治家も加

つて居る事が分る。之等の點から想像して見ると云ふと、ナロードナ・オブラーナは單に物好きな連中が無事に苦んで作つた團體とか、不平の浪人が脾肉の嘆に勝へずして作つたとか、又無賴漢が事を好んで作つたと云ふやうな團體とは違ふやうである。朝鮮には日本の政策の妨害を目的とし、殊に總督の暗殺などを計畫して居る團體が少からずあるさうだが、此等は事柄の性質が非常に危險で且つ重大な結果を惹き起すものであるからして、割合に重大視せらるゝけれども、團體其物は決して大きなるものでない。然るにナロードナ・オブラーナは此等の團體とは大に其趣を異にするやうである。政府の重要な役人が澤山之に關係して居る。尚又此暗殺當時の新聞の電報には、大公の暗殺は、セルヴィアに於ける文武の官吏、國會議員、辯護士、銀行家、新聞記者等を以て組織する一秘密團體の計畫する陰謀の實行なりと云ふ事を報じて居つたが、若し此の報導する所の團體がナロードナ・オブラーナの事であるとすれば、此團體は朝野の別なく塞國の有力なる階級を普ねく網羅する所の、云はゞ一つの國家的の團體と見て然るべきものであるまいか。政府の役人が關係して居ると云ふから、事に依つたら此團體の運動の爲めに政府の金を使ふ事もあらう。現に陸軍省に屬する兵器廠の爆裂彈、短銃が公然と用ひられて居るではないか。して見ると、ナロードナ・オブラーナは、表向きは有志の人々の組織する私の團體ではあるけれども、事實に於ては國家の陰密なる援助の下に存立し發達する所の半官的運動と見られぬこともない。此點に於て、事柄の性質は違ふけれども、之は恰度赤十字社とか濟生會とか云ふものと似て居る。そこで表向きは公私の別があるけれども、實際上に於てはナロードナ・オブラーナの行爲については、塞耳比亞の國家は、國家として決して其責任を避くることが出來ないとも云へる。恰度日本の赤十字社が外國と關係のある事件に對して例へば或重大な失態をなしたと云ふが如き場合に、日本の國家が國家として全く之を無視すると云ふ事が出來ないのと同樣である。勿論法律上の責任は政府毫も

之を負はぬ、然し少くとも道德上の責任は之を免るゝことは出來ない。予は再々申す通りナロードナ・オブラーナの組織についてはよく之を知らぬのであるけれども、之について予の知つて居る丈けの極く僅かな知識を基としていろ／＼想像して見、又塞洪國が此事件に非常に重きを置いたと云ふ前後の形勢から考へて見て、恐らく予の茲に想像して述べた點は事實を得て居るものであらうと思ふ。そこで塞洪國は塞國政府の責任を糺すべく最も嚴重なる態度に出でたものであらうと思ふ。ナロードナ・オブラーナが單純な普通の少數者の團體に止るならば、如何に此兩國が仲が惡いと云ひながら、あれ程嚴重な態度で最後通牒を發すると云ふ事にはならなかつたらうと思ふ。

△人心の動搖

大公暗殺の悲報に接して最も愕かれたのは、疑もなく老帝陛下である。老帝陛下は恰度六月廿五六日頃バードイシルの離宮に赴かれたばかりであつた。昨年五月初旬、陛下の大患を傳へられた事は讀者の已に知る所である。老帝は本來非常に御健康の方で、隨分艱難苦勞をされたのであるけれども近年まで矍鑠として壯者を凌ぎ、歲七十を超えても馬上にあつてよく七八時間の馳驅に堪へ、演習や觀兵式に臨まれても更らに疲勞の色を見せなかつたと云ふ事である。然るに一九〇六年に圖らず大患に罹られてから、著しく衰弱なされ、夫れ以來時々喘息が起つてお惱みになる。軍事の統帥や閱兵なども物憂くなられて、此頃から軍事は大公にお任せになると云ふ事になつた。近年は外交の事も大公にお任せになるやうになつて居つた。昨年四月の末にフトお風をめしたのが本で、病勢が非常に募り、五月の初め小康を見たが再び重態に陷り、一時は崩御の報をさへ傳へられた位危篤の狀態に陷られた。十日頃から又々御恢復あらせられ、五月の末には御生命には最早や御違變があるまいと云ふ事になり、それより段々快方に向はれ、六月の央頃からは殆んど御全快になつた。そこで同月廿五六日頃に病後の御疲れを御休養

になると云ふので、イシルに御出掛けになつたのである。イシルは墺國内の瑞西と稱せらるゝ所謂ザルツカムマー・グートの山中にある勝地で、風景の絶佳、氣候の溫和を以て鳴り、皇帝の最もお氣に入りの處である。毎年夏は此地に於て數ケ月をお過ごしになると云ふのが例になつて居る。今度も恰度其處へ行かれた許りであつたが、まだ御休養になる間もなく、此大公殿下の悲報に接せられたのである。陛下は大いに驚かれて、三十日維納にお歸りになり、直ちにシヨエンブルンの離宮に入られた。

皇帝を外にしては、墺洪國の人民も亦非常に驚いた。殊にゼルマン民族に至つては、民族發展の中心人物であり、墺洪國將來の希望を一身に集めて居つた大公の事であるから、その暗殺について悲憤交々到ると云ふ非常な人心の動搖を見たのである。而して此等の人心の動搖は自ら二つの方面にあらはれた。一つは大公殿下の暗殺を見るに至つたにつき、政府に對して其辯護を怠つたと云ふ怠慢の罪を責むるの聲となつた。一證

ボヘミア・ヘルツエゴヴィナ地方の物騷なと云ふ事は、今に初まつた事でない。爆裂彈やピストルの騷ぎは一九〇九年以來屢々あつた。假令んば從來さう云ふ事が無くとも、塞國の近來の態度、塞國と墺洪國との近來の關係及びボスニアに於けるセルヴィア民族の態度等を考へ、殊に大公殿下が塞國人より如何に考へられて居るかと云ふやうな事を併せ考ふる時は、非常に警戒を要すると云ふ事は云ふを俟たないのである。且つ又ボスニアに於けるセルヴィア民族の中に、大公殿下の身上に對して危險なる陰謀が計畫されて居ると云ふ事は、實は前から豫知せられてなかつたと云ふ譯には行かない、と見るべき點がある。之も事實有つたか無かつたかと云ふ事は、今明かに保證は出來ないが、當時の新聞の電報によると、即ち廿八日伯林發の電報は「墺洪國政府は、ボスニアに於て大セルヴィア主義者、殊に學生などの不穩の計畫をなし居る旨の警報に接せり」と報じ、又同日のロイテル電報は「當時皇儲殿下に對し、ボスニア行の危險なるべきを說いて之を見合

はすの可なる旨を勧告したものもあつたが、殿下は之を聽かずして斷乎初志を決行せられたのである。只妃殿下は初めより之を好まれなかつた如く見えた」と報じ、又同日伯林發の別電は「露國政府及び塞國官憲は、大公のボスニア行に對して、豫め墺洪國外務省に警告する所あつた。」と報じて居る。尤も此第三の報導は、後に獨逸フランクフルター・ツァイツングの打消す所となつたけれども、要するに大公の此行は、決して人々の初めから安全と目した所でないと云ふ事は疑を容れないやうである。殊に一部の狂熱なるセルヴィア民族が、近年學生の間に危險なる運動をして居ると云ふ事は是れ迄屢政客の話頭に上つた所である。此運動はボスニアのみならず、クロアシア及びダルマシアの方にも及んで居つたといはるる。彼等は從來屢々行はれたる兇行が、愛國的行爲なりと唱へ、又は大セルヴィア主義の運動の進歩は、最もよく政治的暗殺の手段によりて遂せらるゝなどゝ說いて、以て年少學生の無邪氣な心を煽動して居つたと云ふ事である。故大公殿下と親交あるクルメツキーが其主宰する隔週雜誌オイストライヒシユエ・ルンドシヤウの昨年七月十五日號に書いて居る所によれば、ダルマシアに於ては一昨年現に此危險なる運動を取締らんが爲めに、矢釜しい官憲の干渉があつたと云ふ事である。斯う云ふ風に物情の不穩なりと云ふ事は、初めから分つて居つたのであるから、手に手を盡して警護の任に當らねばならぬのである。それにも拘らず兇行はセラエーヴォに行はれ、而かも二度行はれて、遂に大公殿下夫妻の崩御を見たと云ふ事については、責任者の怠慢にあらずして何ぞやと唱ふるのである。尤も當面の責任者のボ・ヘ二州の總督ポチオレクと、共同大藏大臣ビリンスキーの兩名は直ちに辭表を提出した。然し辭表の提出丈けでは國民が滿足しないので、此兩名に對して輿論は激烈なる攻擊を加へて居つた。尤もポチオレクの方には、非常なる失態と云ふものが實は無いやうである。何となれば彼は大公殿下のお出になるについて、全市の警備を軍隊の手に委し、最も嚴重にして周到なる警備の手續

を盡さしめた。又市役所に於ても前日から準備に意を注いて、市民に對していろ〳〵の布告を發した。先きにも述べた通り市役所では、大公殿下の御滯在中は、屋根に上り、窓の上に坐し、バルコニーの欄干(てすり)に捉まり、路上に停留し、若くは橋の欄干に上ることを禁ずるとか、窓の外に花鉢を置くことを禁ずるとか、又は樹木或は街柱に上るべからずとか、何等の物をも路上に放擲すべからすとか、市民は皆人道の上にあるべしなど云ふ細密なる規則をも發したのである。其上市長のフエーヒム・エフ・クルチッチは回々教徒で、セルヴイア民族に同情のない方の人であるからして、萬一の變なかれかしと用意おさ〳〵怠りなかつたと云ふ事は、之も想像するに難くない。之にも拘らず兇行が行はれたと云ふ事については、一方に於てセルヴイヤ民族の計畫が、上に上を超して如何に周到なものであつたかと云ふ事を想像することが出來ると共に、他の一方に於ては斯くの如き危險なる運動をして墺洪國領内なるボ・ヘ二州に行はれしめたと云ふに付ては當局者にも責任があると云はざるを得ない。而して此責任を問ふの聲は主としてビリンスキー一人に向けられたやうである。ビリンスキーは共同大藏大臣としてボ・ヘ二州の統治の方針を決定する責任者である。序に云ふが、ボ・ヘ二州は墺洪國共同の屬領地であるから、從つて墺洪國共同の管轄に屬する。本來墺洪國は軍事と外交とを共同の事務とし、其他は一切兩國獨立てある。從つて共同政務の取扱のためには陸軍省と海軍省とを置き、又此の二つの事務に關係ある範圍内に於て大藏省と云ふものを置いてある。而してボ・ヘ二州が墺洪國に合併せらるゝや、別に之が爲めに共同の内務省を置くまでもないから、大藏省内に一局を設けて二州の行政を掌らしむることにした。そこで大藏大臣が此地方の當局者となる譯てある。

偖此ビリンスキーのボ・ヘ二州に對する政策と云ふものは、從來とは違つて頗る寛大なものであつた。彼は餘りに民族的要求を寛過すると云ふ政策を取るので、此點で兼々獨逸民族などから攻撃されて居つた。

何故彼は寛大な政策を取つたかと云ふと、之は彼が波蘭出身であるからである。墺洪國の民族の複雜な事は尙後に之を說明する機會があらう。而して現今は民族的觀念が著しく勃興して居るけれども、近代まではゼルマン民族が獨り中堅となつて偉大なる勢力を振ひ、他の民族は其制壓を被むつて居つたのである。そこで他の民族は最近頃に至り民族的自覺の勃興と共に、皆中央政府に對していろ／＼の要求を提げて爭ふとになつたのである。さう云ふ沿革からして、ゼルマン民族出身の政治家は、自ら中央集權的の方針を採るやうになり、異民族出身の政治家は概して地方分權的主義を取り、獨り自分の民族ばかりでなく、他の民族についても民族的の要求は原則として之を容れる、此爲めには多少國家としての團結が犧牲に供せらるゝやうな事があつても構はぬと云ふやうな考を抱くやうになつた。されば民族的要求を寛大に遇すると云ふ考は、ゼルマン民族以外の政治家に取つては因襲的に、疑ふべからざる眞理なるかの如くに思はれて居るのである。

此點からしてビリンスキーはボ・ヘ二州に於て危險なる運動が行はれて居つたに拘らず、徒らに之を取締つて民族的要求を抑ふると云ふ事は、豫ての理想に背くと云ふ考からして、先づ放任の方針を採つて居つたのである。之が爲めにビリンスキーの藏相就任以來ボ・ヘ二州に在ては所謂大セルヴィア主義の危險なる運動頗る跳梁を極むるやうになつたといはれて居る。斯う云ふ事からして、ビリンスキーに對する攻擊と云ふものは、非常に激しくなつた。尙之は餘談ではあるが、ビリンスキーは、此批難には毫も屈せざるのみならず、彼は犯人の處分についても、極力寛大なる處置を取るべきことを主張し、爲めに、其後此事の爲めに會合した聯合政府の會議、又は墺洪兩國政府の閣員と聯合政府の閣員との聯合會議に於て、强硬論者の陸軍大臣と激烈に衝突したと云ふ事が傳つて居る。

次に民間に於ける人心の動搖は、セルヴィア民族に對する敵愾心として盛んにあらはれた。當時外國電報の傳ふる所によれば、廿八日初めて悲報の傳はつた時

は、一時は人心が茫然として爲す所を知らざる有樣であつたが、二十九日からは各地に於てボツ／＼塞國並びにセルヴィア民族に對する大示威運動が行はれたと云ふ事である。其最も激しいのは維納及びセラエーヴオに於けるものである。維納に於ては、二十九日三百のゼルマン族學生の一團は一大示威運動を街上に試み、警官の極力制止するにも拘らず、セルヴィアの公使館前に到て侮辱的叫喚を繰り返し、後には館内に闖入して亂暴を働いた。公使館では墺洪國に對して吊意を表する爲め半旗を揭げて居つたが、二三の暴漢は遂に其半旗を引卸ろして之を街上に燒て墺洪國萬歳を唱へた。斯る示威運動は其後每日繰り返され、就中七月二日の夜は大公の遺骸を停車場に迎へたる後、一團の群衆は歸途を塞國公使館方面に取つて頗る不穩の形勢を示した。警官は軍隊の協力によつて辛うじて事無きを得たと云ふ事である。

次にセラエーヴォに於ては廿八日は全市死せるが如く寂然として居つたが、廿九日には何處から集つたともなく、一團の群衆が街を練り步き、國旗を先頭に樹て、國歌を奏して萬歳を叫んだ。そして兇行の現場に來るや、群衆の足並も緩やかになつたと見る間に、一人の壯漢が起つて一場の悲痛なる演說をなした。演說了るや群衆思はず跪いて靜かなる祈禱を捧げたとの事である。一寸序に申すが、セラエーヴォの市には正教を奉ずるセルヴィア民族は實は少い。從つて同市は塞國の勢力の比較的に薄い處で、寧ろ大公殿下を歡迎する側の人間即クロアシア族の多い處である。ボスニア全體は勿論セラエーヴォでも皆墺太利反對のセルヴィア民族が充滿して、大公殿下の如きは何處へ行つても憎まれて居るんだと見る人があるが、之は當推量て、事實には背く。されば同市の一般人民は非常に大公の死を悲み、殊に兇行の行はれた現場である丈け、感慨頗る深いものがあつたと見える。斯く大公の死を悲むの情が深い丈け、又正教を奉ずるセルヴィヤ民族の暴擧を憤るの情も自ら烈しからざるを得ない。此外に同市にては回々教徒も亦セルヴィア正教徒とは頗る

仲がわるい。兼て仲が惡るのであるから、之を好機會としてセルヴイヤ正教徒を虐めてやらうと云ふ感のものもあつたと思はるゝ。そこで此等のいろ〳〵の分子が一所になつて、廿八日の夕方から、セルヴイヤ正教徒の迫害と云ふ事が初まつた。教會堂の破壞せられたるもの、塞耳比亞正教徒の住宅店舖の石などを投げ付られて毀たれたもの頗る多い。維納の新聞によると、破壞家屋二百とある。負傷者が一日丈けで五十を數へ、中には正教の僧侶も加はつて居つたと傳へらるゝ。而して此暴行は兵隊が出動して戒嚴令を布くに及んで初めて鎭靜した。それでも七月の五六日頃まで動搖が靜まらなかつたと云ふ事である。此種の迫害は、以上述ぶる所の維納及びセラエーヴオに止らず、ブタペスト、グラーツ及びアグラムにも行はれ、又ヘルツエゴヴイーナのモスタールにても同樣に激しく、傷を負ふて死んだものもあつた位である。ボ・ヘ二州に於ては其他の小都會にも同樣の運動があつて、新聞の傳ふる所によれば、破壞せられたる民家總計一千に達すると云ふ事である。之に由て觀てもボ・ヘ二州の人民は、人種はセルヴイア國民と同じだけれども、思想感情も亦同一で、常に相通じて墺太利に反對して居るものと許り思ふの誤りなる事が分る。否な墺太利側について居るものも相應に多いことを知らねばならぬ。而して同じセルヴイア民族でありながら、此二つのものが、常に激しく爭うて居ると云ふ事も、略ぼ想像することが出來やう。

扨、此敵愾心は、啻にセルヴイア民族に對してあらはれたのみならず、一轉して露西亞に對してもあらはれた。即ち維納に於ける學生の示威運動は、塞國公使館より轉じて露國大使館に行かうとした。幸に警官の熱心なる盡力の結果、事無きを得たけれども、之を以て觀ても、此事件が直ちに人をして塞國に對する惡感と共に、露國に對する惡感をも挑發せしめたと云ふ事が分る。蓋し塞國と墺洪國と近年甚しく反目するの一つの理由は、露國が常に塞國の後援となつて居るからである。既に塞國の事について露國と墺洪國と將に開

戰を見んとするに立ち至つた事も之れまで屢々あるのである。故に墺洪國では塞國といへば直ちに露國を聯想するのである。されば當時日本の新聞にあらはれた外國電報の中にも、此陰謀には塞國のみならず露國も亦加擔して居ると云ふ風に傳たものもある。此事は固より事實無根であるだらうけれども、然し斯くの如き說が傳はる丈けに露國と墺洪國と云ふものは塞國の事に關して相反目して居つたのである。且つ又露國でも墺洪國並びに大公殿下については同情がない。殊に大公殿下の暗殺に對しても頗る不謹愼な言論を、露國の諸新聞は掲げて居つたのである。ノヴオエ・ヴレミヤは流石にそれ程極端な事は書かなかつたが、それでも同情のある哀悼の辭を述べたとは見られない。若し夫れ聖彼得堡日報の如きは「文明開化の敵にして、武斷主義、狂熱的愛國心、並びにスラヴ排斥主義の頭目たりし皇儲殿下は暗殺せられた。彼の即位の日は、即ち對露宣戰の日にして、從つて歐洲大戰亂の初日たるべかりし大公殿下は遂に暗殺せられた。歐洲の大火災を誘發すべき口火を包藏せし大公は不幸(?)にしてスラヴの手によつて暗殺された云々」と云ふ記事を掲げ、ツエムッチナー新聞は「フランツ・フエルヂナントは自ら國家統治の大任には當らなかつたけれども、然し國政運用の何れの方面にも大いなる勢力を有して居つた事は疑ない。彼は主戰主義の權化である、彼の存る間は、歐羅巴は到底戰爭を免れなかつたのである。彼は巴爾幹戰爭に際して、一九一二年一度び歐洲の大戰亂を誘起せんとし、一九一三年再び勃牙利の私慾を助けて同じく大亂を招がんとした云々」(十月三日のタンに據る)之によつて見ても、當時墺洪國の人民が、如何に露國に對して敵愾心を有したと云ふ事が分り、且つ又一般に露墺兩國民の感情も之によつて分ると思ふ。

斯くの如く墺洪國方面に於ては、人心大いに動搖したのであるが、之に對して塞國の方ではどんな風であつたかと云ふに、初めは頗る平凡であつた。最初の一兩日間は、各新聞が皆誠實に哀悼の辭を述べて居つた。中には斯くの如き行爲はボスニアの同族にとつて何等

のよき結果を來たすものに非ず、我々は却て隣境の同族の爲に斯の行動に出でた事を悲むと云ふやうな說を揭げたものもあつた。然るに兩三日過ぎてから、段々に此事件を政治的に考ふるやうになつた。之は一つには矢張り墺洪國側の新聞が塞國に對して不謹愼な說を揭げ、又墺洪國の各地に於てセルヴィア民族に對する幾多の迫害が行はれたと云ふ事に激せられた爲めであらうと思ふ。斯くて七月の五六日頃から塞國の政府でも、一方に於ては墺洪國の輿論の要求に從つて、今後は大セルヴィア主義者の行動を監視しようと云ふ事を聲明すると共に、多少憤懣の語氣を以て、政府としては潔白である、何も此事件に關係はないと云ふ事を辨ずるやうになつた。斯く初めは塞國の態度は頗る穩やかであつた。故に墺太利の側で政府も民間も今少し冷靜な態度を取つて居つたならば、塞國は決して强いて墺洪國の要求を斥けると云ふ事はしなかつたらうと思ふ。固より國民全體は墺洪國を憎み、墺洪國の從來の態度に憤慨して居るけれども、賢明なるパシッチ政府は決して之を機會として墺洪國と衝突をしようと云ふやうな考はなかつたらうと思ふ。尤も墺洪國の方から云へば、大公の暗殺と云ふ事は非常に重大な事である。而して其事が豫て組織的に計畫されて居る陰謀の一發露であると云ふ以上、決して寬大な態度を以て之に臨むことは出來ないのであらうけれども、然し政府としても又民間としても、多少冷靜を缺いて徒らに塞國々民を刺戟したと云ふ責任は免れないやうに見える。されば墺太利側の輿論が激しく塞國を呪ふや、塞國新聞の論調は段々變つて來た。半官報の如きも大公暗殺の原因は一つには墺洪國の警察制度の腐敗にあり、一つには平素國民の自由を壓迫して却て狂熱的危險人物を養ひたるの致す所なりと論じて、いはゞ「態(さま)を見ろ」と云ふ態度に出づるやうになつた。若し夫れ無智の市民に至つては、墺太利の市民と同じく、輕々しく相手方の處置に憤激し、維納に於ける自國公使館の侮蔑せられたるの報導に接するや、大擧してまたベルグラードに於ける墺洪國公使館前に一大示威運動を試みんと企て

た。只政府が之を嚴禁したから、辛うじて事無きを得たのである。啻に人民許りではない。政府の態度も段々に變つて來た。七月廿一日のタン新聞の記する所によれば、塞國の宰相は、外國新聞通信員を集めて其頃次のやうな聲明を與へたと云ふ事である。曰く

「セルヴイア政府は、固より墺洪國の一大不幸を悲むと云ふ點に於て決して人後に落ちるものではない。只墺洪國の諸新聞の讒謗と、墺洪國内に於ける對セルヴイア民族の迫害と云ふものは、我國の人心を非常に刺戟して遂に常軌を逸せしめんとして居る。我國の新聞の漸く過激となるのは皆其結果である。そこで我國の政府は、屢々此事を以て墺洪國政府に警告を試みたけれども、墺洪國の側はそれにも拘らず益々挑戰的の態度に出て居る。斯くなる上は、我國の政府は、此事件についてそれ〲法の命ずる所は之を行つて居るけれども、其以外は、最早や墺洪國に對てしは何等責任を負ふ所なきを茲に聲言する云々」

斯くの如くにして、さらでだに仲のわるかつた兩國人民の關係と云ふものは、急轉直下非常に險惡な狀態に陷ることになつたのである。

△皇位繼承問題

墺塞の交渉の進行を辿つて、開戰に到る順序を明かにする前に、大公殿下の死によつて墺洪國が其內政外交上に蒙れる所の二三の政治上の效果を說いて見よう。其第一は皇位繼承の問題である。

大公殿下は現老帝陛下の甥であつて、一八九六年以來皇位繼承者となつて居つた。其次第は、現老帝に男の子が無い。只一人あつたけれども一八八九年正月卅日に死なれた。そこで皇位は自然皇弟カール・ルードウイッヒが繼ぐべきであつたが、此人は三男二女を殘して九六年五月十九日に死なれた。そこで其れ以來其長子、即ち今度暗殺の厄に逢つたフランツ・フエルヂナンドに皇位は落ちたのである。

扨てフランツ・フエルヂナンドが暗殺の厄に逢つたとすれば、彼に次いで新たに皇儲となるべきものは誰か。此事は日本などで考ふるやうな簡單な問題ではない。此事を明かにする時は、同時に墺洪國と云ふものゝ極めて複雜なる國柄であると云ふ事が分るのである。依つてこゝに序を以て此點をも明かにしようと思

ふ。

一體墺洪國に於ける皇位と云ふ觀念は、頗る普通と異つて居る。墺洪國の皇位と云ふものは單一なる觀念ではない。墺國にあつては皇位だけれども、洪國にあつては王位である。抑も墺洪國なるものは一八六七年の兩國妥協條約によつて二重王國となつて居る。法律上に於ては墺太利洪牙利王國と稱へられて居る。けれども之を單一の王國と見ることは出來ぬ。即ち墺國並に洪國と云ふ獨立の二ヶ國の或る條件の下に連結して居るものであつて、大體に於ては、墺國は墺國丈けで獨立の政府及び上下兩院より成る獨立の議會を有して居り、洪國も亦洪國丈けで獨立の政府と上下兩院より成る獨立の議會とを有して居る。只此兩國は前記の條約によつて、軍事と外交とを共同にして居るので、そこで共同の政府と云ふものがある。而して共同政府は、前にも述べた通り外務省、陸軍省及び之に關する財政を司る所の大藏省の三省に分れて居る。此中で外務大臣は自ら首班の地位になつて居る。而して歐洲の多數の國の例に從つて外務大臣は宮內大臣を兼ねて居る。よく新聞に名前の出るベルヒトルド伯といふが目下此職に在る。海軍も共同事務であるけれども、同國は本來陸軍國であるからして、海軍については特別の一省を設けず、陸軍省內に一局を設けて其の事務を取扱はしめて居る。大藏省が內務行政の性質を有するボ・ヘ二州の管理を其一局に於て取扱はしめて居る事は已に述べた。次に又此共同事務を審議する特別の立法府もある。之は墺洪兩國の議會が法定の代表者を送つて組織するので、從つてデレガチオン即ち委員と云ふ名稱を有つて居る。兩方から上院は廿人、下院は四十人、即ち六十人づゝの代表者を每年選ぶのである。而して每年交代して維納とブダペストに開いて共同の政務を議するのである。而して墺國議會の代表者の六十人と、洪國議會の代表者の六十人とは、一堂に會するのではない。兩者別々に會合するのだからして、同一の問題について議の纏ると云ふ機會の少いことは之を想像するに難くないが、事實上墺洪兩國互に嫉視反目して議

の合はぬことは極めて多いのである。殊に軍備擴張の問題の如きになると、墺國側は之を賛成するが、洪國側は之に反對すると云ふやうな譯で、なか〳〵纒らない。斯くの如き場合には何時でも老帝陛下が中に入つて何とか便宜な處置をするのである。之に類する事は外にもあるが、要するに同國では、皇帝が其個人的勢力を利用して、政務の解決を計る必要に迫らるゝ事が非常に多い。

扨、墺洪國の關係は大體右の通りであるが、此關係を法律上何と見るべきやと云ふ事は一つの問題である。政治的に見ると墺國側では成る丈け中央集權的の解釋を採らうとして居るに反し、洪國側では出來る丈け地方分權的の解釋を採り、兩者は纒まつて一體をなすにあらず、二個の獨立體の偶然の結合であると主張して居る。されば共同の大臣を呼ぶについても、墺國側では之を帝國大臣(フィヒス・ミニスター)と稱せんと欲し、洪國側では之を共同大臣(ゲマインザーメ・ミニスター)と稱せんと欲して居る。此等の大臣の任免は皇帝の手書によつて行ふのであるが、從來皇帝は帝國大臣と云ふ書き方を採つて居つた。現に一八六七年十二月廿四日時の宰相ボイストに與へた勅書の中には「外務、陸軍、大藏の各大臣は爾後帝國大臣(フィヒス・ミニスター)として憲法に從ひ國務を見るべし」とある。之と同時にフォン・ベツヒ男爵を「帝國大藏大臣(フィヒス・フィナンツ・ミニスター)」に任じ、從來の陸軍大臣フォン・ヨハン男爵と、從來の宰相ボイストとには「從來の職司は帝國陸軍大臣及び帝國外務大臣として繼續施行すべし」と云ふ事を命じ、殊に陸軍大臣に對しては、翌年の一月八日、從來の陸軍大臣(クリーグス・ミニスター)と云ふ稱呼を改めて今後は帝國陸軍大臣(フィヒス・クリーグス・ミニスター)と稱すべしと云ふ事を命ぜられた。其後大臣の交迭は屢々あつたが、何れも「帝國(フィヒス)」と云ふ文字を冠して居る。然るに之に對して洪國は常に初めから反對を唱へて居つた。斯くの如き稱呼は洪國の國法上の地位に適當しないと主張するのである。蓋し彼等は墺洪國は本來獨立の二國であつて、相合して一つの帝國をなすものにあらずとの見解を有して居る。されば洪國の政府では、昔から、皇帝の大臣任免の勅書の文句如何に拘らず、故(ことさ)らに「帝國(フィヒス)」の文字を避けて、公文書の中にも「共同(ゲマインザーム)」と云ふ文字を用ふることにして居る。一八八〇年代からは、明かに「帝國」なる文字を取り除くべき旨の抗議的要請をさへ爲すに至つた。其後も此問題について屢々爭つたのであるが、一九〇三年七月廿一日以後は、公文の通信丈けば「共同(ゲマインザーム)」と云ふ文字を兩方で用ひようと云ふ事になつた。けれども皇帝の勅書は依然として「帝國」の文字を冠して居つた。然るに今より四年前の一九一一年九月十八日、時の陸軍大臣更迭の際に、洪國の強要に屈して皇帝は勅書にも「帝國」の文字を使ふことを罷(や)めた。即ち從來の陸軍大臣の辭職聽許の勅書には、從來通り「帝國陸軍大臣(フィヒス・クリーグス・ミニスター)」と書いたけれども、新大臣の任命の勅書には、單に「陸軍大臣(クリーグス・ミニスター)」とのみ書いて。「共同」の文字をば故らに用ゐなかつたのが一寸面白い。之を要するに

洪國が墺國に對して獨立を主張して居ると云ふ事は右の話によつてもよく分る。矢張り此種類の爭に屬すると云て一寸滑稽に類するとは、會て維納とブダペストとの市役所間の公文書の往復にもあらはれたことがあつた。兩方の市役所では急用の時には相手方の言葉を用ふるが、さうでない時には維納では必らず獨逸語を用ひ、ブダペストでは必らず洪牙利語を用ふる。而かもお互に地名までも自國語で書いてやるから、維納の方では相手方の地名をブダプストといはずしてオーフェン・ペストと叫び、ブダペストの方では相手方を呼ぶに維納と云はずしてベックスと呼ぶ。さうすると兩方で、之は我が市の名稱にあらずと云つて衝き返したものださうだ。それでは餘りに不便だと云ふので、數年前始めて兩方妥協して維納、ブダペストと云ふ名前を用ひても差支がないと云ふ事にした。

斯う云ふ爭は亦實に皇位の上にもあらはれて居る。即ち皇位繼承等の事も、墺國は墺國で勝手に決せんとし、洪國はまた洪國だけで勝手に決める、洪國に於ける王位と云ふ觀念と、墺國に於ける皇位と云ふ觀念は、全く別物であると云ふ事を主張する。そこで墺洪兩國は共にハップスブルグ家の君臨する所ではあるけれども、然し全然同一の條件で此兩國に君臨すると云ふのではない。

今洪國の主張する所によると、同國は元來選擧王國の制を採り、一六八七年までは、國會が王を選擧して、其選に中つたものは選擧條件を承認し、國法の遵守を宣誓し、議會に於て戴冠式を行つて、初めて正式の國王たる事を得たのである。一六八七年に初めてハップスブルグ家の君臨を一定の條件の下に認めたのであるけれども、此條件が充たされざるに至るならば、洪國の議會では何時にても國王の選擧權を回復するのであると說いて居る。して見ると、ハップスブルグ家は、洪國に於ては或一定の條件を承認することを議會に約して、其範圍内に於て洪國の王たることを得るのである。ハップスブルグ家が當然に洪國に君臨するの權利を有するのではないことになる。固より此說はハップスブルグ家に於ては勿論、墺國側一般に於ても、恐らく承認されぬかも知れぬ。少くとも爭のある點であらう。只之によつて我々の認めねばならぬのは、洪國は必らずしもハップスブルグ家を忌避するものではないけ

れども、只無條件で其君臨を迎ふると云ふのではないといふ事である。ハップスブルク家の勢力は、即ち獨逸民族の勢力である。故に之に對抗して洪牙利民族の爲めに一定の自由を留保せんことを念として居るのである。斯くの如く、皇位繼承の事については、墺國と洪國と全然同一ではない。細かい點は暫らく措いて、極く肝要な點に於て兩者の區別のある所を擧ぐると、

(一)洪國では皇位繼承の要件は憲法で規定して居るが、墺國に於ては之に反してハップスブルグ家の家法を以て之を規定して居る。而して皇位繼承の事を規定して居る家法の主なるものは彼の有名なる一七一三年四月十三日カール六世の發布せるプラグマーチシェ・サンクチオンである。其外には其修補たる一八三九年二月三日の家法、一八六七年の同法補充及び修正などもあるが、この最後の二つのものは、公表してゐないから其内容は明かになつてゐない。從つて墺國に於ては皇位繼承の事はハッキリと分らない。其内容は帝室の個々の行爲によつて之を判斷するの外はないのである。

(二)墺國に於てはハップスブルグ家に屬する者は、他の條件を充たせは總て皇位繼承權あるけれども、洪國に於てはハップスブルグ家の中でカール四世の系統、ヨセフ一世の系統、及びレオポルド一世の系統を有するものに限られて居る。故に此等の系統が絶ゆれば墺國にあつては皇位は他の皇族に移るのであるが、洪國にあつては議會が新たに何人を王位に就くべきかを定むるのである。

(三)墺國にあつては規定の條件を充たす所の皇族は當然皇位に即くけれども、洪國に於ては憲法遵守の宣誓と戴冠式と、二つながら皇位繼承の必要條件となつて居る。此二者は洪國に在ては單純な儀式ではないのである。故に墺國に於ては先帝の崩御と共に直ちに新帝の踐祚を見るけれども、洪國に於ては戴冠式の濟むまで若干時日の空位を生ずる譯になる。尤も戴冠式が濟めば、王位は既往に遡つて其の效力を有することに定められて居る。然るに此點は墺國側の大いに爭ふ所であつて、憲法遵守の宣誓と戴冠式とは、王となつてから後の儀式に過ぎない。此等の儀式は王が王となるに何も妨げがないのであると主張するのであるが、洪國は頑として之を聽かぬ。此事は嘗て戴冠式問題として隨分矢釜しかつたので、現老帝の如きも初めは其無用を主張したのであつたけれども、遂に洪國の要求に屈して一八六七年六月八日ブタペストに於て戴冠式を行つたのである。

(四)皇位を繼承するものは長子相續によつて墺太利の大公(エルツヘルツォーグ)たるを要することは兩方同一だけれども、墺國の家法は更らに尊族結婚の出たることを要求し、洪國の憲法は之を要求しない。

以上の如く墺國と洪國とは、それ〲繼承の條件を異にして居る。尚序に申して置くが、洪國の王と云つ

ても、之亦單一な王位でなくして、實は洪國本部の王たると同時に、之に屬する所のクロアシア及びスラヴオニアの王を兼ね併せて居る觀念である。而して洪國の王位繼承の要件は、當然にクロアシア、スラヴオニアの王位繼承にも適用ありや否やと云ふ事は亦一つの問題である。墺國側が其定むる所の法則を以て洪國を律せんと欲するが如く、洪國も亦其自國の規定を以てクロアシア、スラヴオニアを律せんとして居るけれども、洪國が墺國に對して其獨立の規則を主張するが如く、クロアシア、スラヴオニアも亦洪國に其獨立の法律を主張せんとして居る。即ち此地方では、洪國に於ける繼承條件の如何に拘らず、常にハップスブルグ家を無條件で王位に戴いて、之に忠誠を盡さんとして居るのである。尙後に說明する事であるが、クロアシア、スラヴオニアは、實は洪國の壓迫より脫して墺國側に附かんことを希望して居る。更に進んで墺國內に於ける同族並びに墺國南部沿岸諸州に居るスロヴエーネン民族と合體して一新獨立體となさんことを希望するものすらある。斯くてクロアシア、スラヴオニアの人民は近頃は極力運動して絕えず洪國と爭つて居るといふ有樣である。

次に墺國の皇位と云ふものに至ては、之はまた更に一層複雜を極めて居るものである。墺洪國の君主は墺にあつては皇帝と稱し、洪にあつては國王と稱すると云ふけれども、墺洪國中洪を除いた他の部分は、一つの纏つた帝國をなして居るのではない。否な墺太利帝國と云ふものは全く存在しないのである。所謂墺太利と云ふのは委しく云ふと上墺太利及び下墺太利、ザルツブルグ、スタイエルマルク、ケルンテン、クライン、トリエスト、ギヨルツ＝グラヂスカ、エストリエン、チロール、ヴオラールベルグ、ボエーメン、メーレン、シユレジエン、ガリチエン、ブゴヴイナ、ダルマチエンの十七の王國侯國伯國等より成る所の雜然たる集合である。此等の地方が各々代表者を出して一つの議會を作る點からして、此等全體を呼ぶ時の公式の名稱は「帝國議會に於て代表せられたる諸王國及び諸國」と

云ふのである。墺太利と云ふ單一な國家は無いのである。而してハップスブルグ家は、其當然の權利として此等の總ての國に君臨する所のものである。故に所謂墺太利の君主なるものは、或地方に對しては王たり、或地方に對しては侯たり伯たるものである。皇帝ではない。只皇帝と云ふ名稱を存して居るのは、古い家柄であるのと、且つハップスブルグ家が昔のゼルマン帝國の皇帝であつたのと、之等の理由からして名譽的の稱號として稱へられて居るのである。然らば墺國内の之等の國々に於ては、皇位繼承の條件は皆同じきやと云ふに、大體は同一の原則即ちハップスブルグ家の家法の規定する所を其儘認めて居るのであるけれども、中には多少文句を云ふ處もある。例へばボエーメン（ボヘミヤ）の如きは洪國と同じく戴冠式と云ふ事を唱へて居る。即ちハップスブルグ家の世代の變つた時には、新君主は外の地方では其儘君主として認めらるゝであらうけれども、ボエーメンでは一度プラーグに來て戴冠式をせねば國王と認めないといふのである。尤もボエーメンは、洪國の如く有力なものでないから、此要求も從つて認められないのではあるけれども、然し一つの法律問題乃至政治問題としては今日にも殘つて居るのである。斯くの如く墺國の皇位と云ふものは極めて複雜なものであるからして、從つて墺國を一つの帝國と呼ぶのは俗稱に過ぎずして、實は其本來の法律的性質には適合しないのである。從つて例へば墺國全體に亘る役所などを呼ぶには、帝國何々役所とはいはずに、帝國王國と云ふ事を重ねて云つて居る。又例を郵便局に取ると獨逸語でカイザーリッヒ・キヨエニグリッヒ・ポストアムト即ち帝國王國郵便局と云ふのである。詳しく云へば帝國王國侯國伯國と並べねばならぬのであらうけれども、夫迄は略したのであらう。然し帝國王國何々役所といふときは墺洪國全體に亘る役所、例へば陸軍省、外務省などを呼ぶ場合と混同する恐れがある。何となれば之等の官廳は墺帝國及び洪王國共同の事務所であるからである。そこで此二つを區別する爲めに次の如き約束を立てゝ居る。即ち兩國全

體に亘る共同の役所を呼ぶにはカイザーリツヒ・ウント、キヨエニグリツヒ云々と云つて「帝國」と「王國」との間に「及び」といふ字を挿入し、墺國丈けの役所はウント即ち「及び」と云ふ字を略し、單にカイザーリツヒ・キヨエニグリツヒ云々と云ふて居る。而して此稱呼は略字を用ひて次の形に現はさるゝ。即ち兩國共同の役所はK.U.K.の三字を冠し、墺國丈けの役所は單にK.K.の二字を冠する。而して洪國だけの役所は只キヨエニグリツヒの文字のみを用ふることは、固より云ふを俟たない。

扨、以上墺洪國の皇位の事を稍々細密に述べたが、其中で本問題に關係のある點は、墺洪兩國の皇位繼承に關する原則を異にする點の第四番目のものである。即ち墺國に於ては等族結婚の出たることを要し、洪國に於ては必ずしも之を必要としないと云ふ點である。等族結婚とは卑族結婚に對するので、皇族又は之に準すべき者の女と結婚するを謂ふのである。而して墺國では卑族結婚より生れたる子は凡て繼承權がないと云ふのである。尤も此點については墺國内に於ても議論がある。其説に依ると等族結婚の出たるを要すと云ふ事は成る程ハツプスブルグ家の家法の定むる所であらう。然し之は憲法的効力を有するものであらうかどうか。皇室内部の規定は其儘では國民を拘束する法的効力を有するものではあるまい。而して皇位繼承の事はもと純然たる皇室の私事に非ずして、性質上憲法問題たるべきものである。然らば家法の規定は憲法問題としての皇位繼承の大事を終局的に決定する事の出來るものではあるまいと唱ふるのである。併し之は單に議論として唱へらるゝのであつて、一應最もではあるが、事實上墺國に於て此説は容れられない。等族結婚の出でなければならぬものと上下一般に認められて居るやうである。そこで、等族結婚でなければならぬと云ふ事になると、大公の子は皇位繼承權はないのである。

大公には一九〇一年七月生れたソフイと云ふ娘の外に、翌二年九月生れた長男のマキシミリアンと、翌々四年五月に生れたエルンストと云ふ次男とがある。然る

に大公の妃はボヘミアの貴族のショテック伯の娘であつて、所謂臣籍の婦人である。ハップスブルグ家々法の要求する所の等族ではない。そこで其産む所の子女は皇位繼承の權がないと云ふ事になるのである。大公殿下がショテック伯の娘と結婚せられたと云ふ事については一條の物語がある。傳ふる所によると、大公は初めイザベラ大公妃の娘と相許し、皇帝も亦密かに其成立を希望せられたと云ふ事である。イサベラ大公妃と云ふのは

フェルヂナント陛下
- フランツ・カール
  - フランツ・ヨセフ陛下
  - カール・ルードウヰッヒ ― フランツ・フエルヂナンド
- カール ― カール・フエルヂナンド ― フリードリッヒ
  妃イサベラ

別表に示すが如く、老帝陛下の叔父のカールの孫のフリードリッヒの未亡人であつて、六人の娘を有つて居る。平常プレッスブルグの居城に住まはれて居るが、大公は屢々此處に出入されて居つたので、六人の中のどの娘か分らないが、多分其中の一人をお貰ひになるものと世間では考へて居つた。然るに大公は意外にもイサベラ大公妃の侍女たるショテック伯の娘ソフィアを戀ひ慕はれて、一九〇〇年に突然之と結婚せんことを皇帝に願ひ出てられた。序に申すが、ハップスブルグ家の家法によれば、皇族の婚姻は現君主の同意を得なければならぬ。そこで此同意を求められたのであるが、皇帝は之を非常に不快に感ぜられた。若しもこの際大公殿下にソフィアと結婚すると云ふ鐵石の如き固い決心がなかつたならば、皇帝は或は此結婚の成立を極力妨害されたであつたらうと思はるゝ。獨り皇帝ばかりではない。此婚姻については大公の最も尊敬して居つた當時の大僧正のマルシャールも反對した。又當時の外務大臣ゴルホースキーも亦極力反對であつた。當時墺國では英明なる皇太子ルドルフは死に、老帝は段々年を積むといふので一般に國家の前途を悲觀するの者の盛であつた時代である。此時はまだ大公の人格と云ふものが認められてゐなかつた。そこで政治家な

どは皇位の繼承の如きも普通の狀態で進行するやうにと國家の安全の爲めに希望して居つたのである。然るに大公殿下は今や卑族の臣籍のものと結婚するといふのである。其結果として其子供が繼承權がないと云ふ事になり、皇位の傳承は不自然の狀態になる事になる。之れ實に政治上憂ふべき事であると一般に考へられたものと見へ、政治界に於ても此婚姻に對しては有力に反對する者が多かつた。けれども大公の決心が非常に堅いので、遂に老帝も同意を與へねばならぬ事になつた。只後にも述ぶるが如き事情からして、結婚する數日前、大公は老帝の面前に於て、此結婚の卑族結婚なること、及び其子女は等族結婚の出にあらざるが故に、永遠に皇位繼承權がないと云ふ事を、改めて宣誓して、七月一日、ボヘミアの都プラーグに於て、淋しく結婚の式を擧げられた。そこで、婚姻は正當に成立した。けれども、其間に生れた子供は永久に皇位繼承權はないのである。猶ほ序に申すが、此點に就ても一部の人の間には異議がある。其說に曰く、大公殿下とソフィアとの結婚は、皇帝の同意を得たから、法律上正當に成立した。正當なる結婚は、其結婚に附隨して生ずる一切の權利を完全なものにする。然らば普通の法律的原則に依りて、其間に生れたる子の皇位繼承權を有するのは當然ではないか。等族結婚なりや否やの條件は、墺國憲法の認むる所ではない。太公は其子女の爲めに皇位繼承權拋棄の宣誓をしたが、是れ取りも直さず其子女が法律上繼承權を有するといふ理論の證明ではないか。何となれば、本來無い權利を拋棄するといふ事は、理窟に合はぬからである。更に一歩を進めて論ずるときは、大公の繼承權の拋棄の宣誓といふものが、一體憲法上有效なりや否やが問題である。斯く考ふると大公の子は、憲法上の見地から云へば、完全に皇位繼持權を有つて居るのである云々と。予は曾て此種の說の最も明白なる主張をステルンベルグ伯の論文集で讀んだことがある。伯は墺國の名門の貴族で、現に貴族院に議席を有し、殊に故大公殿下と親密の間柄であつた。然じ之も一つの議論に止まつて、實際上は毫も認

められて居らなかつた。少くとも現老帝の生存して居る間は、之等の說は到底通るべくもなく見えたのであつた。扨てソフィアは一八六八年三月一日の生れて、大公よりは四つ年下である。ショテック伯は元、ボヘミアの名門の家柄であつて、ソフィアの生れた時は、父は墺國を代表して獨逸のウヰルテンベルグに公使をして居つた。彼女は實に其都スッツトガルトに生れたのである。而して婚姻と同時に皇帝は彼女をホーヘンベルグ侯に封じた。後一兩回其位を高められたが、最近には一九〇九年十月十四日ホーヘンベルグ公に封じて殿下の尊號を冠し且之を其の子女に傳ふることを許された。然し皇族の列には入ることが出來なかつたので、公式の會合などには一切出席されなかつた。倘序に申して置くが獨り皇位繼承權ばかりではない。皇族の列に入るのも亦等族婚姻の出たるとを要すると云ふのが墺國皇室家法上の規定であるが、此規定は然し洪國には適用がない。洪國の國法によれば、國王の妃は皆皇后であり、皇族の妃は凡て亦皇族である。故に太公の妃は啻に皇族たるのみならず、大公即位の日は彼女は洪國に於ては皇后たることを得たのである。

右の如き次第で、大公の子は大公の宣誓を待つまでもなく、墺國に於ては皇位繼承權がないといふことになつて居たのである。然し洪國に於ては、大公の長子マキシミリアンは實に大公死亡の後には當然其地位を繼ぐべき順序にあつたのである。然し斯くては現皇帝並に大公殿下共に世を去られた後には、墺洪兩國は各々其君主を異にすると云ふ事になる。斯は同國政治家の忍び得る所でない。是に於て彼等は此間の一致を計る爲めに、洪國側をして何等かの手段を取らしめねばならぬといふ必要を見た。斯くて政府は、マキシミリアン兄弟の王位繼承權拋棄に關する法律案なるものを洪國議會に提出した。洪國に於ては王位繼承の事は憲法問題であるから、從つて議會の議に附するを必要とするのである。此法律はやがて議會を通過した。一九〇〇年十二月四日には皇帝の裁可を得た。此手續を取ることによつて、太公の子女は洪國に於ても亦繼承

權がないと云ふ事になつたのである。

茲に父事の序に申すが、大公と妃との結婚に類する自由戀愛の現象は、由來ハップスブルグ家には頗る其例に富むのである。最近では一九一一年皇甥のエルヂナンド・カールの尊號辭退事件と云ふ事があつた。彼は故大公フランツ・フェルヂナンドの末弟である。陸軍の將校としィ長くボヘミアのプラーグに滯在して居つたが、同地大學の化學教授の娘ベルタ・ツーバーと舞踏會で相知り、其中に事實上同棲して已に二人の子供をさへ擧げた。一九一一年の秋、新たに皇帝の勅許を得て正式の結婚を爲さんとした。處が皇帝は斯う云ふ例は之まで屢々あるものだから、又かと云ふので斷然お許しにならなかつた。そこで彼は將校としての職務を辭し、併せて皇族としての特權をも辭退せんことを願ひ出た。皇帝は之をお許しになつた。そこで彼は庶人フェルヂナント・ブルグとなつて、瑞西に赴いて無事に結婚の手續を濟ました。當時此事は所謂尊號辭退事件として墺國で非常に矢釜しかつたのである。然し斯くの如き例は彼一人に止るのではない。從來庶民の女と婚して皇族の尊號を辭退したものに、ヨハン・サルヴアトール大公あり、レオポルト・フォン・トスカーナ大公あり、又尊號辭退の手續には到らなかつたけれども、微賤の女を娶つて物議を醸したヨハン大公、及ハインリッヒ大公の如きがある。事柄は多少の相違はあるけれども現老帝の如きも亦、初め相約のバヷァリア王女と相交通する中に、絕世の美人の稱ある其妹に戀着して、遂に其姉を捨てたのである。而かも現老帝は、年若い間は戀女房たる皇后陛下を袖にして、心を他に寄せられた事がある爲めに、皇后は憤然として維納を去り、絶えず旅行などして別居して居られたと云ふ事もある。であるから老帝も實は餘り大きい顏は出來ないのである。老帝の唯一の男兒たるルドルフの死なれたと云ふ事についても、矢張りハップスブルグ家の此點に關する弱點と云ふものがあらはれて居る。ルドルフは本來非常に英明の資を抱き、前途大いに囑望されて居つたのであるが、白耳義の先王レオポルド二世の第二

女を娶り、愛兒をも擧げられたに拘らず、微賤の女に溺れて隨分放埒の生活を送つた。而して一八八九年マイエルリング城に狩獵に赴いて居る中、一月卅日の朝突然死骸となつて床上に横はつて居つたのを發見されたと云ふ事である。傳ふる所によれば頭部に銃傷を受けて居つたと云ふことであるが、一説には打撲傷を受けて居つたとも云ふのである。皇太子の此悲慘な最後の原因については、今日何人も之を知らない。恐らく永久に分らぬであらう。之に對していろ〳〵の流説が行はれたが、或は自殺だといひ、或は他殺だと云ふ。何故自殺をしたかと云ふ原因については、自分の愛して居つた微賤の女は、父帝の落胤であつたと云ふ事が分つたのに原因すると云ふ説もあるが、然し斯う云ふ兄妹相姦といふやうな次第が分つた爲めに自殺をすると云ふ事は、東洋人にはあらうけれども、西洋人にはなかりさうだ。他殺の説を唱ふる人の間にも、醜業婦の事に關してお附きの武官と爭論した爲めだといひ、或は婦人其者が下手人であると云ふ人もある。兎に角酒食の耽溺して非命の最後を遂げられたと云ふ事丈けは明かである。

扨、本文に歸つて、大公殿下の死後、何人か其後を繼ぐべきかの問題を吟味する。之は云ふ迄もなく其次弟でなければならぬ。次弟はオットー・フランツ・ヨセフと云ふ。之は尊號辭退を以て名あるフェルヂナンド・カールの兄で、此人もなか〳〵エライ人であつたが、不幸にして一九〇六年十一月一日に死なれた。從つて大公の地位は自ら彼の長子に移らねばならぬのである。此長子は即ち新皇儲として世間に傳つて居る所のカール・フランツ・ヨセフである。彼は一八八七年八月十七日の生れであるから、今年恰度廿八才である。彼の母はマリア・ヨセフアといひ、獨逸サキソニーの現王フリードリッヒ・アウグスト三世の二番目の妹である。此のお方は皇后陛下の死後、故大公殿下の妃が日蔭物であつたからして、宮廷に儀式や何かの時には皇后陛下の代理を勤めたので、中々幅が利いたのであつたが、夫の死後は、全く俗界と絶つて全然宗教界に沒

頭して居ると云ふ、賢明を以て名高かつた人である。父母共になか／＼の人物であつたから、新皇儲も亦凡物ではなからうと想像さるゝ。年が若いから前途は只未知數である。彼は一九一一年十月廿一日、ブルボン家の支流たるパルマーの王女チタを娶つた。翌十二年*九月一子フランツ・ヨセフ・オットーを擧げた。所謂等族結婚の出であるから之より墺國の皇室は初めて親子相傳ふと云ふ常徑に復るであらう。之までは不思議にも伯甥相讓るの例であつた。即ち

- フェルヂナンド
- フランツ・カール
  - フランツ・ヨセフ
    - ギゼラ
    - ルドルフ
    - マリア
  - フェルヂナンド（マキシミリアン一世）
  - カール・ルードウキッヒ
    - フランツ・フェルヂナンド
      - ゾフィア
      - マキシミリアン
      - エルンスト
    - オットー・フランツ・ヨセフ
      - カール・フランツ・ヨセフ — フランツ・ヨセフ・オットー
      - マキシミリアン・ルードウキッヒ
    - フェルヂナンド・カール
    - マリア
    - エリサベート
  - ルードウェッヒ・ヴイクトル

別表に示すが如く、多年メッテルニッヒを重用して専制政治を布いた庸君フェルヂナンドは、一八四八年十二月二日國内の紛亂を收拾すること能はずして其位を退くや、皇弟フランツ・カール大公亦其後を襲ふの器にあらずとして辭したからして、皇位は自ら其長子たる現皇帝フランツ・ヨセフに落ちた。帝は一八三〇年八月十八日の生れてあるから當年八十六才になる。バヴアリアの王女エリザベートを娶り、一男二女を擧け

たが、太子ルドルフは八九年一月悲慘の最後を遂げたため皇位は自ら弟に移らねばならなかつた。陛下に三弟あり。長弟フエルヂナンドは、那翁三世の誘ふ所となりてメキシコの帝位に即き、マキシミリアン一世と稱された方である。後那翁三世に捨てられ、メキシコ共和國の大統領フアレツに攻められ、裏切りするものあつてケレタロに於て捕へられ、一八六七年七月十九日從容として銃殺の刑を受けた事は人の知る所てある。妃アントワネツトは初め那翁三世に泣きついて頻りに援けを求めたのであるが、聽かれない。遂に此不幸を見るに至て發狂して最も悲慘なる晩年を送つた。そこて其次の弟のカール・ルードウヰツヒが皇位を繼承すべき地位にあつたのである。然るに彼は三男二女を殘して九六年五月十九日マイクルリングに不慮の横死を遂げたので、皇位は自ら其長子のフランツ・フエルナンドの繼承すべき所となつたのである。然るに今や此人又悲慘の最後を遂げて、其地位は甥のカール・フランツ・ヨセフに繼がれる事になつた。即ち十九世紀の初以來絶えず伯甥相讓つて來たのである。

△大公暗殺の政治上の効果

大公殿下は、一八六三年十二月十八日グラーツて生れた。即ち五十二才の壽命を保たれた。公式のお名前をエルツヘルツオーク、フランツ・フエルヂナンド・フオン、オイステルライヒ＝エステと申し上げるが、此エステと云ふ字を附け加へて居るのは、一八七五年來エステ領を相續されて居るからである。即ち嘗てモデーナに君臨せられたるハツプスブルグ家の支系が、七五年十一月廿日フランツ五世侯の死と共に絶えたからして、其廣大なる財産はフランツ・フエルヂナンドの相續する所となつた。此れ以來大公殿下は墺太利及びエステーの大公と云ふ地位に立たれた譯なのである。

さて大公が偉大なる人物として世間から認められたのは、此十二三年以來の事である。其以前は殆んど知られてゐない。從て其幼時の事柄についても、特別の逸事と云ふものが傳唱されてゐない。暗殺の後に墺國

の新聞などに書いて居る所によつて見ると、若い時は別に才能の見るべきものがなかつたやうである。普通の皇族の如く一と通りの教育を受けてから軍籍に入つた。不幸にして廿の頃から肺患に罹つて、一時は餘程心配されたのである。爲めに暫らく軍務から離れて居られたが、海上生活がよからうと云ふので、世界漫遊の途に上つたは、即ち一八九〇年の頃であつた。之より後約二年ばかりを殆んど海上に於て生活なされ、其間支那、印度や日本にもお出になつた。墺國の新聞ノイエ・フライエ・プレッセの記する所によれば、日本に於て彼は今日の露國皇帝と會見したとある。何處で如何にして會見したかと云ふ事は、當時事に與つた外交官などに聞いて見たいと思つて居る。此旅行の日記と云ふものが後に出版されて居るが、なか／＼面白いので、一時は洛陽の紙價を高からしめたといはれて居る此海上旅行で病氣は餘程恢復した。九三年に歸つた時には、見違へるばかりの體となつて、それから再び軍隊の人となつたのである。最近では身の丈け六尺に近く、筋骨逞しく、顏の色澤もよくて、堂々たる體格を持つて居られた。けれども肺患は全く治したのでないので、最近でも時々惱まれたと洩れ承つて居る。而して全く快癒したのでないに拘らず、あれ程元氣に活動して、而かも疲勞の色を見せなかつたのは、一つには大公の日常の生活が、頗る方正であつた事にも因るが又一つには妃殿下が妻として大公殿下の身上を世話するに至れり盡せるものがあつたからだとの事である。

前にも申した通り、大公殿下は初めは一向世間に聞えてゐなかつた。大公殿下の名が兎も角も世間の問題となつたのは、先づ一八八九年の一月、現老帝の唯一の太子が横死を遂げられた時からであらう。即ち此皇太子の死亡と共に、皇位は圖らずも皇弟即ち大公殿下の父カール、ルードウヰヒに移る事になつた。然るに此時カール・ルードウヰッヒは、前年パレスチンに旅行した際、惡水を飲んだ爲めに不治の病に罹つて、到底大統を繼ぐべき狀態ではなかつた。そこで世間では直ちにカール・ルードウヰッヒは其長子の爲めに繼承權を

辭するであらうと云ふ風に暗示した。そこで初めてフランツ・フエルヂナンドと云ふ名前か世間に傳はるやうになつたのである。尤も此時、カール・ルードウヰッヒは、吾は我父の例に倣はずと宣言して、即ちフランツ・カール太公の如く繼承權を自分の子に讓ると云ふやうな事をせぬと云ふ意思を表示されたけれども、然し彼の健康があの如くであつたから、皇位の繼承者としては世人は悉く眼をフランツ・フエルヂナンドに向けたのである。當時墺太利の國情を見ると、只一人の皇太子は死なれて而かも現老帝は段々に老境に進まるゝ。墺國の將來はどうなるだらうと云つて一般に大變心配して居る際である。元來墺國程君主の如何が國勢の消長に大關係のある國はない。非常に複雜な國情であるから、どうしても國政の圓滿なる進行を見る爲めには君主が實際の政治に干涉せねばならぬと云ふ必要を見る事が多い。日本などのやうに君主は超然として政爭の外に居り、只默して萬機を總攬すべしと云ふ譯には往かぬのである。然るに君主が實際の政治に干涉すると云ふ事は、其國の君主其位に居る場合には非常によい結果を生ずるが、不幸にして凡庸の君が其位にある時には、非常に憂ふべき結果を來たすのである。そこで墺國にとつては、誰が皇位に即くかと云ふ事は、實に特別の意味を以て取扱はるゝ極めて重大なる問題なのである。去れば皇太子は死に、老帝は老い、而かも再び現皇帝の如き德望ある人は將來容易に迎へ難いと考ふるや、墺國の前途は宛かも暗黑の雲に包まれて居るかの如くに考へて、當時墺國の政治家及び操觚者は非常に心を痛めて居つた。中には皇帝百年の後、墺洪國は即ち歐洲禍亂の源とならんなどと申したものもある。現に吾々も中學時代には歷史の本なぞで斯う云ふ事を敎はつた。曰く將來世界には三つの方面に於て大動亂が起るだらう。一つは支那で、一つは土耳其で、一つは墺洪国だと。蓋し今より卅年も昔に在ては、墺洪國安寧の唯一の楔子は老帝であつて、其崩御は即ち國內動亂の始まる時だと考へて居つたのである。さう云ふ時代であるから、フランツ・フエルヂナンドと云ふ

名前は、當時特別の意味を以て墺洪國の人民から迎へられたのである。而してフランツ・フエルヂナンドは、後ち〱は皇儲の地位を繼ぐべき人と極つてからも、別に何の變りも見せなかつた。矢張り平々凡々に軍務に服して居つたのみであつた。そこで世人は別に失望もせぬが、又特別の期待をも彼の上に掛けてゐなかつた。斯くて九六年に至つて父カール・ルードウヰッヒは死んだ。之よりいよ〱フランツ・フエルヂナンドは皇儲と云ふ地位に上つた。それでも彼に對する國民の期待は依然として昔の如く特別のものはなかつた。斯くして年去り年來り、一九〇〇年となつた。此年の春、フランツ・フエルヂナンドは、突然ボヘミアの貴族ショテック伯の娘ソフイアと結婚せんことを皇帝に願ひ出て世間の耳目を聳動した。之は前にも述べた通りに、等族結婚ではないからして、其間に生れた子供は皇位繼承權がないので、爲めに當時さらでも墺洪國の前進を悲觀して居つた政治家に非常な苦勞を與へたのである。我々から考へれば、皇儲殿下の子供が皇位繼承權を有たないとしても、次に皇儲となるべき人の如何は、皇室家法の上に豫めチャンと決まつて居るのだから、何も心配は要らぬやうに思はるゝのである。けれども、前にも申した通り、皇位繼承の條件は墺國と洪國と違つて居る。即ち洪國では卑族結婚から生れた子でも、王位を繼承するに妨ないから、大公に次ぐ繼承權者は彼と此と違ふことになるのである。而して元來洪國は動もすれば墺國との關係を出來るだけ薄くせんと欲して居る。從つて將來時到らば洪國は得たり賢しと墺國と違つた君主を戴くと云ふ事にならぬとも限らない。現に斯う云ふ考を當時明らさまに述べた人も少くないと云ふ事である。されば墺國の政治家は、洪國の斯種の考に少しでも希望を與ふるやうな事は極力避けたいと考ふるのである。是れ大公と、ソフイア・ショテックとの結婚すると云ふ事が墺洪兩國の現狀を其儘に維持せんとする所の政治家にとつて一大打擊であつた所以である。斯くて老帝は勿論反對の意を表し、朝野の政客亦囂々然として起つて之を非議した。議會な

どでも議論が頗る沸騰した。そこでいろ〳〵な方面から壓迫が大公に加はつた。而して世間では凡庸なる大公は、恐らく國論の壓迫に屈して此結婚を思ひ止るだらうと思つた。處が意外にも大公は少しも屈しない。物論の反抗、老帝の激怒の如きは彼の鐵石の如き決心を毫末も動かすことが出來なかつた。是に於て初めて世間は、彼は實に堅き意志の人であると云ふ事を知つた。老帝も亦大公の意志の到底屈すべからざるを見、遂に此結婚に同意を與ふることにした。只この事を政治上の重大事として大に心を痛めたのは當時の墺國側の首相キヨルバーである。前記のステルンベルヒ伯の記する所に依ると、當時洪國側では大公とショテク伯の女との結婚をば、王位繼承の關係上故障あるものとは認むるを欲せず、首相スエルは法相スイラギーの意見により、寧ろ墺國側をすゝめて、大公の子に將來皇位を繼承するの權利を認むるの法律を新定せしめんとした。斯くすれば困難なる問題も解決が出來、洪國との歩調も一致するの便利がある。然るにキヨルバーは此提案を堅く拒んだ。其理由は皇位繼承の事を立法事項とすることは政治上面白くないと云ふに歸する。ハツプスブルグ家の家法であればこそ、同一原則が國内の各州に通用するのであつて、若し之が法律で定まることになると、皇位繼承の大事はやがて各州議會の容喙する所となるの恐れがある。從つて各州は常に同一の君主を戴くといふ現象は或は無くならぬとも限らない。此見地よりして墺國宰相は飽くまで家法規定の權威を立てんとし、且つ洪國に對しても此點に就ては切に其讓歩を懇求したのである。傳ふる所によれば、彼は當時洪國宰相スエルと殆んど夜も日も眠らない程の勢で往復交渉を重ねたとの事である。而して此兩人の間に先づ相談が纏つた事は(第一)大公に迫つて結婚を思ひ止らしむると、(第二)然らずんば大公彼自身をして全く繼承權を抛棄せしむるとであつた。初めは其旨を以て皇帝陛下に奏上せんとしたのであるが、茲に又一つの難問が起つた。それは若しも此際大公殿下をして皇位繼承權を抛棄せしむると、皇位は大公の弟オツ

ト・フランツヨセフの繼承すべき所となる。然るに此人は先きに述べた通り當時病氣でもあつたし。且つ又慣例によつて、兄の地位は弟が直接に之を繼かず、其長子に之を讓ると云ふ事になるだらうから、そこで新らしい皇儲殿下は當時十四才のカール・フランツ・ヨセフに移る譯になる。そこで、萬一新皇儲がまだ未成年で居る間に現皇帝が御他界になると云ふやうな事があれば、攝政を置かなければならぬと云ふ事になる。然るに何人を攝政にするかについては、墺洪兩國國法の上に全く其規定がない。さうすると墺洪國は丸で別の人を攝政にするかも知れない。さうすれば折角心配した甲斐もないといふ事になる。之れでまたいろ／＼頭を惱まし、更に相談をつくした結果、フランツ・フェルヂナンドをば先づ皇儲に立てゝ、其代りに其子供には永久に皇位を繼承せしめぬ事にしやうと云ふ事に話が纏つて扨こそ前項に説明したやうな次第となつたのである。之を要するに此結婚問題の難關に處したる大公の態度と云ふものは、事の善惡は兎も角も、爭ふべからざる堅確なる意志を持つて居る人であることを世間に示して、彼が決して尋常一樣の人間でない事を明かにしたのである。

家庭の人としての大公は、總ての點に於て理想的の夫であり、理想的の父であつたと云はれて居る。大公夫妻は琴瑟相和し、妃も亦頗る賢明であつて、大公の爲め及び其子女の爲めに、心身を勞すること一方ならざるものがあつたと云ふ事である。非常な宗教の熱心な方であつて、從つて個人としての品行も誠に堅い。身皇族の地位にあり、且つハップスブルグ家は由來品行の方面は餘り堅くない、中には先年六人の子供を捨てゝ家庭教師と駈落をした獨逸サキソニーの皇太子（現國王）妃殿下の如きもある（但し傍系なれども）のに大公殿下のみは道德上一點の批難がなかつた。妃殿下が身分上公けの式などに出られなかつたからでもあらうが、大公殿下も亦力めて宴會などへは出られないで常に家庭團欒の樂に沒頭して居られたといふことである。彼は政治家としては軍國主義者として森嚴秋の如

きものがあつたけれども、家庭の人としては和氣靄然宛かも春風の如きものがあつた。服裝なども家にあつては軍服を御召しになられなかつた。朝早く起きて食後二三時間までの間は、毎日のやうに御子供達と遊んで居られた。三度の食事は必らず家族一所に取られたと云ふ事を、多年兩殿下の特別の御眷顧を蒙つたといはるる佛國の僧ルブランが、昨年七月十日のルコレスポンダン誌に書いて居る。而して大公が斯くの如く家庭の人として理想的の夫たり父たりしことは、一つには妃殿下の賢明の結果である。斯くして彼は段々に自然と國民の間に一種の德望を收められて居つたのである。而して大公殿下の人物の凡庸ならざる事が段々に明かになつてからは、彼自ら之を欲すると云ふ譯でもなかつたらうが、不知不識の間に彼は政界の一勢力となつた。何となれば、有力な多くの政治家は期せずして彼の周圍に集るやうになつたからである。斯くて大公の意見と云ふものが段々に政治界の話頭にあらはるゝやうになつて來た。然しながら具體的に彼が政界の表面に出たのは一九〇六年以後である。此年に老帝が大患に罹られた。老帝は元來非常に健康な方であつて年七十を超えられてからも矍鑠として居つたが、大患後はどうも其のやうではない。其結果大公は老帝の委托をうけて事實上兵馬の大權を掌握することゝなつた。即ち彼は斯くして始めて皇儲の身を以て皇帝の事を行ふ事の出來る地位に立つた。此地位に立つて彼の爲した第一着の事業は軍備の整頓である。彼の考では此複雜を極めて居る所の墺洪國の勢力を統一して、歐羅巴の中央に於ける一大勢力となし、以て古來の墺洪國の面目を恢復擁護しようと云ふにはこの統一なき墺洪國と云ふものに、鋭意中央集權的帝國經營を加ふるの必要がある。而して此れが爲めには是非共強大なる陸軍と強大なる海軍がなければならぬ。ソコデ彼は先づ以て軍備の擴張並びに兵制の統一と云ふ事に力を注いだのである。今度の戰爭で墺國の軍隊は他の國に比して頗る劣等だといはれて居るけれども、兎も角もあれ迄にしたのは大公殿下の力である。本來墺洪國の軍

備擴張には非常な困難が伴つて居るのである。それは中央政府が軍備を擴張しようと云ふと、洪國を初め他の異民族諸州は必らず之を嫉視し、折角の軍備も畢竟はゼルマン民族が其勢力を擴張するに利用する所となるに終るだらうと爲し、以て盛に反對する。要するに軍備の擴張には異民族擧つて反對すると云ふ難關が何時でもある。此難關を切り拔けるは實は容易の事ではない。其上に言語の問題と云ふものがある。よしんば軍備の擴張に主義として贊成しても、各民族はレヂヲナリズムス（地方主義）と云ふ事を要求する。即ち自分の地方から出した兵隊は、自分の地方の言語を用ひ、自分の地方の警備に當てるといふことを要求する。然し斯くては統一がつかず、數ばかり殖えても墺洪國の帝國的經營の上には格別の用をなさないことになる。此等の難關を切り拔けると云ふ事は、本當に尋常一樣の事ではない。加之、從來老帝を初めとして中央政府の役人は一般に「事勿れ主義」を取り、萬般の政策が常に平和的、受働的であつた。故に軍備擴張と云ふが如き積極的政策を決行するには、內部に於て[illegible]議論に打ち勝たねばならなかつた。此等の難關を切り拔けて、兎も角も軍備を擴張して從來の面目を改むる事の出來たのは、一に大公殿下の力といはなければならぬ。

更に進んで彼が海軍を擴張したと云ふ事については最も彼の意力の旺盛なるを見るのである。彼が海軍の整備擴張に眼を着けたのは、日露戰爭以後である。一九〇七年彼は初めて墺洪國の海軍は、沿岸防備を以て甘んずべからざるを說き、「國運の決する處は常に公海の上にあり」と唱へて海軍擴張を叫んだ。然るに此提案に對しては、陸軍の場合以上に反對があつた。從來の墺國の海軍は、僅かにアドリアチック海の警備に任ずるを以て程度とし、極めて微々たるものであつた。而かも墺國は海岸線の極く少い國であるから、海軍は之を以て十分だと朝野共に考へて居つた。殊に老帝陛下を中心とする墺國の宮廷に於ては、今日尙海軍非擴張論の勢なか〳〵盛んであると云ふ事である。斯

部に於て朝野擧つて反對である外に、外交上に於ては更に大なる一つの難關がある。それは若しや墺國で海軍を擴張すれば、伊太利は必ず墺の心事を疑ふと云ふ事てある。實の所大公の腹の中ては、海軍擴張の目的をは、伊太利を想定敵とすると云ふ點に置いたかも知れない。其證據には擴張の程度の目安を定めるに伊太利の海軍を標準とした。そこて墺國の海軍擴張は、同盟國たる伊國の怨を買ふの惧があつた。外交上甚だ面白くない。斯う云ふ次第で隨分反對が多かつたのであるが、大公は此等の反對説を悉く斥けて、一方には在野の友人を語らひ、獨逸の例に倣つて海軍協會を作り盛んに海事思想を民間に鼓吹し、一方に於ては、政府をして裝甲戰鬪艦の建設、水雷艇の增築、潜航艇の新設等の案を樹てしめた。斯くして遂に老帝の反對にも拘らずドン／＼海軍擴張の問題を決行したのである。之によつて見ても、如何に彼が一旦斯うと信じた事は之を決行するに餘力を殘さなかつたかと云ふ事が分る序に云ふが此墺國の海軍擴張は豫想の如く伊國の猜忌を招いだ。尤も墺國では我國の海軍擴張は、獨逸の艦隊をして、地中海に顧慮することなく、自由に北海方面に活動せしむる所以であつて、畢竟するに三國同盟全體の利益とする所であると辯明したけれども、伊國は固より此辯解を以て滿足しなかつた。是亦伊國をして益々三國同盟から離れしむる一原因をなしたものである。斯くて大公殿下は、鋭意軍備の整備擴張に盡力せられ、其効果着々として見るべきものがあつた。其結果一昨年の八月皇帝は遂に彼に最高軍務總監と云ふ殆んど陸海軍の大元帥とも云ふべき職名を與へた。尤も斯くの如き公けの職名を持たなくとも、陸軍省と參謀本部とは、已に久しく彼の勢力の下にあつた事は人の知る所である。

獨り軍事の事ばかりではない。外交の事についても近年彼は殆んど皇帝の事を行つて居つた。されば同國に駐在する諸外國の外交官の如きも、彼を皇帝同樣に過して、時々謁見を願ひ出づると云ふ例になつて居つた。外交政策の事實上の決定は、數年來彼と共同外務

大臣との方寸の中にあつた事は明白なる事實である。又外國に對して墺國を代表する際に於ても、近年は老帝に代つて彼が其任に當つて居つた。英國のエドワード七世の葬式に列したのも彼である。ヂョーヂ五世の戴冠式に列したのも彼である。又一九〇五年六月六日獨逸皇太子の結婚式に列したのも亦彼であつた。要するに彼は文武百官の直接任命權の外は、軍事と外交については殆んど全權を握つて居つたと云つてもよい。只純粹の內政上の事は、今日仍ほ老帝が自己獨自の見を以て裁決せられ、容易に人言を用ひ給はなかつた。思ふに老帝は、內政上の事は、民族關係の複雜なるに鑑み。老練なる特別の經驗と技能とを要するので、從つて經驗の乏しき他人には容易に委任せられぬと思はれたのであらう。それでも大事な事柄は常に大公の意見を聞いて決せられたと云ふ事である。

斯く見ると大公殿下は政治上の何れの方面に於ても直接間接に大いなる勢力を振つて居られたものと云つてよい。されば前駐伊大使ハインリッヒ・リッチオは昨年八月の「國民評論」に於て、「大は宣戰講和の問題より小は巡査の任命に至るまで、ベルヴエデーレの見解は帝國の全部に亘つて重んぜられざる事なし」と云つて居る。以上の如き地位を占めて居つたから、彼の死が墺洪國の將來に取つて非常に重大な關係のあることは、今更ら喋々を俟たないのである。近年墺洪國では、大公の非凡の人物たることを見て、先きの國家の將來を悲觀したやうな考は全く消え、却つて帝國の前途は希望の光明に輝いて居ると思ふに至つたのである。然るに今や此人不幸にして毒手に斃れた。是に於て墺洪國の人民は一齊に彼の死に依つて、「墺洪國の帝國的希望は消滅に歸せり」と嘆ずるに至つた。

彼の死によつて損害を受くるものは、墺洪國自身ばかりではない。三國同盟も亦之によつて大いなる打擊を受けざるを得ぬ。墺洪國が一八七九年來、獨逸帝國と攻守同盟を結んで居る事は、今更ら云ふを俟たぬ。同盟國の一方の有力なる大立物が死んだと云ふ事は、他の一方にとつて固より一つの大なる打擊ではある。

然し之れ以外に大公の死と云ふものは、獨逸にとつて特別の損害であるのである。何となれば、大公殿下は獨逸のカイゼルと相許して、相並んで三國同盟の柱石となり、以て歐洲の中央に隱然として一大敵國を形造つて居つたからである。近時伊國の態度が段々怪しくなつて來たに拘らず、兎も角も三國同盟が三國協商と對抗して、天下兩分の勢を張つて居つたのは、主として此二人者の力によると云はなければならぬ。

大公が獨逸皇帝と接近するに至つたのは、十年以來(このかた)である。即ち大公が段々世間から認められ、殊に軍備擴張の事業に成功してから後の事である。此才能を見込んで、逸早くも烱眼のカイゼルは、竪子用ふべしとなして大公に接近したのかどうかはよく分らぬ。けれどもカイゼルの方から進んで大公の弱點に附け入り、巧みに彼を拉して自分に親まざるを得ざらしめたと云ふ事實は之れを認めざるを得ぬ。其譯は、カイゼルは先づ以て妃及び其王子に巧みに取入つたのである。前にも云つた通り、妃殿下は皇族ではないので、ツーリ日陰者になつて居る。それは初めから承知の上ではあるけれども、然し何事が起つても公けの儀式には招待を受けないで、何時も家の中に燻ぶつて居るのであるから、如何に賢明な婦人でも多少不愉快であつたらうと思ふ。殊に彼女は、假令身分が伯爵といふ貴族の出でも、兎も角も一時は落魄して侍女といふ分際にまで落ちたのであるといふ者は、老帝始め、宮中の人々の頭に深く泌み込んで居つた(前記ステルンベルヒ氏の評による)といふから、妃殿下は格別肩身の狭い生活を送られたものと察せらるゝ。かく誰にも顧みられないで、不愉快な月日を送つて居つたものに、例のカイゼルは手を伸ばした。即ちカイセルは一九〇八年に微行して大公殿下夫妻を訪問し、例の辣腕を揮つて談笑の間に此一家と濃き交際を結んだ。そして翌年の九月には正式に殿下夫妻を伯林に招待した。思ふに妃殿下は、今までは日陰者であつたのに、一足飛びに、飛ぶ鳥も落すばかりの獨逸の帝室から、客に招かれたのであるから、如何に之を光榮として喜んだかと云ふ事は之を想

像するに難くはない。殿下夫妻は伯林に客として留ること四日、滿足し切つて墺國に歸つて來た。斯う云ふ次第で、彼女は獨逸帝室の客になつた、而かも大公の妃として堂々と客遇されたと云ふのであるから、此方の老帝も最早默つて居る譯に行かず、遂に翌十月十四日、前にも述べた通り「殿下」の尊稱を許すことになつた。傳ふる所によれば、獨逸皇帝は、折ふし私の會談に於て、屢々老帝に向つて、特別の思召を以て妃殿下を皇族の列に加へよと云ふ事を勸めたと云ふ事である。然し之は誤りであらう。兎も角も獨逸皇帝が、妃殿下の爲めに其出來る丈けの力を盡したと云ふ事は明かである。斯くて大公とカイゼルとの交際は繁くなつた。それは强ち、大公が其妃を携帶して堂々として乘り込み得る處は獨逸の外になかつたからと云ふ許りでもあるまい。思ふに巧みに馬を射落した所のカイゼルは、今や其將をも射止めて、彼と此と大いに默契する所のものがあつたのであらう。兩者の間に訪問が頻繁に繰り返さるゝ中には、天下の問題も無論論せられた事であらう。即ち陸軍擴張の計畫の如き、海軍擴張の問題の如き、皆會話の問題になつた事と察せられる。斯くして此兩個の人格は、三國同盟の二大柱石となるに至つたのである。只玆に一言注意するのは、カイゼルは斯くして大公を利用したと見るのは正當ではなからうと思ふ。大公に進んで接近したのは獨逸皇帝である。カイゼルは大公によつて墺洪國の軍備を立て直し以て獨墺同盟の實力を重からしめようとしたのであらう。よく世間では、獨逸は墺洪國を踏臺として巴爾幹方面に勢力を張らんとして居るなどゝいふ。又バクダット鐵道もやがて完成するのであるが、其曉には漢堡からバクダットまで悉く獨逸の勢力の漲る所となるなどゝ云ふ。けれども、墺洪國は、少くとも大公殿下の墺洪國は、決して獨逸の踏臺となるを甘んずるものではない。利害が一致すればこそ同盟もすれ。利害相反する場合に大公は必ずやカイゼルに對して其獨立の要求を主張したであらうと思ふ。大公は未だ其位に登らなかつたからカイゼルの如き華々しき舞臺には立たな

かつたけれども、然し其人物は決してカイゼルの下風に立つものではないと思ふ。人格の幅に於ては大公殿下或はカイゼルに一籌を輸するだらう。只其の實行に於てはカイゼルは到底大公殿下の敵ではない。一旦意を決して、之に執着し、之を決行するの勇氣に至ては大公は決してカイゼルに劣らない。而かも大公はカイゼルの如き輕薄がない。人格は飽くまでも地味である強いて自ら衒ひ、自ら廣告すると云ふやうな事が無く虛心坦懷、只其信ずる所を行ふに忠なるの態度は、予は之を大公殿下に於て具れるを見る。予は人物としては無論彼を推さんと欲する者である。只彼は不幸にして墺洪國の如き困難の多い國に生れたから、カイゼルの如き花々しき働は見せ得なかつたのである。何れにして予は、彼に天命をかし、帝位に卽けて、縱橫の手腕を揮はしめて見たかつたと思ふ。

要するに大公殿下はカイゼルと共に三國同盟の柱石である。されば大公横死の悲報に接して、墺國の老帝に亞いでは、獨逸のカイゼルが最も落膽されたと云ふ事である。大公殿下が三國同盟の有力なる支持者であつたと云ふ事は、敵國側も亦之を認めて居る。現に暗殺の當時、露國の二流新聞の或者は、大公の死を目して「歐洲平和の危險物の消滅」なりとし、「墺國は今や茲に其政治的進路を再考するの機會に遭遇して居る」と放言したのによつても分る。

以上述ぶるが如く、大公の死は墺洪國にとつても、三國同盟にとつても、一大損失であると云ふ事は疑ない。然しながら、之が爲めに墺洪國は、直ちに從來の如き發展の勢を停め、三國同盟も亦俄かに其力を弱めるものと思ふならば、之は輕卒なる判斷である。之は一に彼の地位に代るものが誰かと云ふ事によつて定まる。今此點を考へて見るに、第一には老帝陛下が再び從來彼に任かしてあつた政務の一部分を親裁なさるだらう。少くとも外交の方面は老帝の親裁に歸するだらう。尤も今は戰亂になつたからして、外交の方面で取り立てゝ云ふべき程の問題も先づ起らぬけれども、假りに戰亂でなかつたとするならば、同國の外交は前後

大した差はなかつたらうと思ふ。內政の問題に至ては南スラヴ民族の間に多少の動搖はあるだらうけれど(此事後に說く)、大體に於ては老帝の德望は十分に內政の紛亂を解決して行くことが出來ると思ふ。從來とても民族間の軋轢は、老帝の介入によつて解決した事は少くない。只問題となるのは軍備の點である。老帝は其老年なる點より見て、又昨年五月の大患の事より見て、假令健康回復したとはいひ、軍務を見ることは出來まい。然らば差當り誰が此任に當るかと云ふに、閱兵等の事は皇叔フリードリッヒ大公をして之に當らしめ、實際の施設は參謀總長コンラッド・フォン・フエッツエンドルフの力に待つであらうとの事である。此人は現に今度の戰爭の中心人物になつて居る。斯くして兎も角も大公の遺業は之を繼ぐことが出來るだらうとの事である。只海軍に至ては、ハンス提督あるが、此人は內外の反對論を說破するの勇氣ありやが疑はれる。從つて大公の遺業を適當に繼くを得るや否やが怪しいといはれて居る。して見ると軍備の事は少くとも海軍の方面に於て多少の蹉跌を來たしはすまいか、とは暗殺の當時一般に疑はれて居つたやうである。然しながら此等の缺陷は、老帝百年の後、新皇儲カール、フランツ・ヨセフによつて或は補はるゝかも知れない。彼は普通敎育を終つてから軍隊に入り、元、騎兵科に屬して居つたが、一昨年來步兵科に移り、現に少佐として維納に居る。軍務に熱心なる好靑年將校として同國の人の愛好する所であると云ふ外、人物力量については別段聞ゆる所がない。世人は一般に大公の遺業を繼承するものとしては、もつと長き修業を要すると云ふ風に見て居るけれども、前にも述べたる如く、彼の父母は共に賢明な人であつたから、彼の將來は恐らく大公を辱かしめないものがあらうとも想像される。

之を要するに、何れの方面から見ても、大公の死は墺洪國の政治上に於て重大なる損害たる事は疑ない。殊に君主の爲人と國勢の消長と最も密接の關係ある墺洪國に於ては、損害の程度が一層甚しいのである。君主の人格の偉大高尙であると云ふ事は、直接に又間

に、國家にとつて非常に利益であると云ふ事は申す迄もない。けれども近世の立憲國に於ては、君主は原則として須らく直接の政爭の圏外に在らせられ、實際政局の指揮については常に超然的態度を取らるべしとなつて居る。君主が其個人的勢力を利用して、實際政治の問題に干與するが如きは、寧ろ不祥の事と認められて居る。然し之は普通の國家に於て云ふのであつて、墺洪國の如く、種族、宗教を同じうせざる幾多の民族が雜然として相混在し、年が年中紛亂を極めて居る國柄にあつては、利害相容れず、感情亦相背き、國論の歸一、政策の統制は容易に之を期し難い。そこで止むなく君主の個人的德望を利用して、僅かに支離滅裂を彌縫するの必要に迫らるゝことが多いのである。此必要は獨逸にもある。けれども墺洪國の方は尙一層激しい。尤も同國今日の民族的紛爭は、政府と民族との衝突ではなくして、異民族同志の衝突である。現老帝も登極の初めには、異民族壓迫の方針を採られたが、一千八百六十六年の戰敗以來、俄然其の態度を變じ、外に對しては平和政策、內に向つては民族優遇主義、只管此上現に有つて居るものを失ふまいと心掛けられたのである。從て中央政府と民族との爭はやゝ收まつたのであつて、中には洪牙利の如く要求するよりも餘分に與へられた形になつて居るものもある。今日異民族にして其要求の政府から拒まれて居る姿となつて居るのは、ルテーネンと南スラヴとイタリア人との三つ位のもので、他は概して民族的要求は政府からは容認されて居る。夫にも拘らず、國歩艱難にして精神的物質的進步の遲々として振はざるは、民族と民族と相衝突して居るからである。民族反目の一つの例として例のステルンベルヒ伯の說する所によると、今墺國の官吏總數は八十萬人に達し、成年の市民二十人につき一人の割合である。從て一般政費の六十五パーセントは行政費として消へて仕舞ふとの事である。是れ畢竟甲民族より一人の官吏を擧ぐれば、乙民族亦一人を出さんと要求する爲めである。かく民族と民族とは非常に衝突して居るのである。尤も之は中央政府で多少助長した

といふ歴史もある。中央政府は一時異民族を衝突せしめて中央權力の安全を圖り得ると考へたこともあつたのである。遮莫今日では異民族の反目嫉視は事毎に現はれて居る。從つて墺洪國では、政府の提案が議會に於ける多數の贊同を纏めるといふことと極めて困難である、又議會内でも各黨派の間に議の纏らぬと云ふことが常で、斯ふ云ふ時には、何時でも皇帝が出掛けて各黨派の人を集めて妥協を試みるのである。それでも應ぜぬと云ふ時には。そんなら俺は位を辭すると云つて、讓位を以て盲從を迫られた事も決して稀ではないのである。尙序に申すが、墺洪國の組織が非常に複雜だと云ふ事は、前にも述べたが、此複雜なる國家を組織する所の一分子たる各州其物が又極めて複雜な民族關係に在つて、其犬牙錯綜して混住して居る其民族間亦絕えず爭があるので居る。一體墺洪國では、國會に於ても、州會に於ても、民族の複雜なる結果、民族の要求を壓迫すると云ふ事を非常に忌み、從つて民族的要求は、假令少數者の意見である場合でも、妄りに之を壓迫してはいけぬと云ふ理論を生じ、其結果國會州會の討論の場合に討論終結と云ふ事を許さない。何となれば、討論終結は動もすれば多數者が少數者の口を緘する道具に利用さるゝからである。處が此制は一轉して少數者が多數者を壓迫する道具となつて仕舞つた。即ち少數者は、いろ／＼の手段を講じて討論を長びかし終局の裁決を妨ぐる。一人の議員が十九時間も長演說をして議事の進行を妨げたと云ふのも、畢竟討論終結を認めざる結果である。さう云ふ風であるからして、少數者が反對して居れば何時まで經つても議が纏らぬ。而かも少數者多數者入り亂れて爭つて居るのは、國會州會普通の現象で、從つて豫算が未だ嘗て一度も通つた事がないとか、一回期間法律案の通過するものは一つか二つに止ると云ふが如きは、墺洪國に於ては普通の現象である。今日墺洪國では、何とかして議事規則を變へて討論終結の制を立てようとして居るが、少數者は其唯一の武器を奪はるゝを恐れ、なか／＼之を承諾しない。要するに、墺洪國に於ては、立憲政治

は尋常に進行してゐないと云ふ事が、之によつて明かであらう。そこでどうしても皇帝が其個人的勢力を利用して、妥協を試みたり、或は自分の責任で以て專斷決行するといふやうな必要がある。而して前にも述べた通り、斯くの如き專斷決行は、君主が幸に有德の人であれば治まるけれども、凡庸の君主であれば、却てより大なる紛亂を來たすの種となる。是に於て墺洪國に於ては誰が君位に即くかゞ最も重大なる問題になるのである。一度皇太子殿下の橫死に際して、現皇帝の如き有德の人は容易に再び之を得難かるべきを思うて前途を悲觀した墺洪國の人民が、今又多大の希望を其前途に掛けられて居つた大公殿下の暗殺によつて、再び國家の前途に對して一大憂愁の情を抱くに至つたのは無理もないのである。況んや暗殺の結果はひいて今次の大戰亂となつたに於てをや、要するに大公の死は、凡ての方面に亘つて、墺洪國の非常なる大損害である。

大隈內閣評判記

無名氏

大隈內閣は其名の示す如く大隈伯の內閣である。伯によつて立つ內閣である。切に言へば大隈伯の一人內閣である。そこで大隈內閣の評判記と云ふのは、精確に云へば大隈伯內閣の評判記と言ふ事になるより外はない。大隈伯は最も政治的生命の長き政治家である。凡そ現代の朝野の政治家を擧げて大隈伯ほど長き政治

上の生活を持續して居るものはない。山縣公の如きも、其前半生は寧ろ軍人的生涯にして、若し單に後生涯を以て論ずれば、或は大隈伯の上に出づるかも知れぬが、政治的生涯としては大隈伯に讓らなければならぬ。井上侯に至ては、元老中のいはゞ張出大關てあつて、電光石火、倏ち政界に入り、忽ち政界を出て、其の純乎として純なる政治的生活は、普通の生活より餘程控除せねばならぬ理由がある。但大隈伯は、御維新當座、長崎に於ける耶蘇敎徒處分の難題を解決して以來、今日に至るまで未だ嘗て一日たりとも政界を離れた事は無いのてある。勿論、前年伯が、進歩黨の首領を罷めて、政黨と關係を絶つてからは、半ば政界を退隱したやうてはあるが、然し伯は一人一黨て、早稻田の一隅に老いたる獅子が横はるが如く、如何なる時節にも一敵國の觀をなして居たのてある。然るに此老政治家も、寄る年波と共に、其勢力を純政治界より寧ろ社會的に發揮し、近年に於ては政治的勢力としてよりも寧ろ社會的勢力として重きをなし、最早や大隈伯の政界の活舞臺に立て、其の手腕を指揮する事は、到底望なしと我も人も、恐らくは大隈伯彼自身も斷念め居たるに、思ひきや政界の洶湧たる波瀾は、遂に玆に大隈内閣なるものを漂し來たつたのは、大隈伯其人の爲めに幸てあるか不幸てあるか、そは何人も容易に斷言の出來ぬ事てある。吾人は先づ何故に此内閣が出て來つたかと云ふ事に就いて、些か研究を試みたく思ふ。

一言にして云へば、誰が大隈内閣を製造したか。誰が、最早政界の活舞臺に望なき大隈伯を御苦勞にも早稻田から引出したか。吾人は遠慮なく、團體て云へば政友會てあり、個人て云へば原敬氏てあると云はねばならぬ。そは別義てない。山本内閣の沒落して淸浦内閣の出産せんとするや、天下は固より之に謳歌せざりしも兎も角も九分九厘迄出來上つたには相違は無い。然るに折角出產したものは生兒に非ずして死兒てあつて、所謂闇から闇に葬られたのてある。之は誰がした事か。天機洩らすべからずてあるが、若し其一片を洩らせば、當時政友會ては否な恐らくは原敬彼自身

も淸浦內閣さへ流產すれば、大勢は必らず逆轉して來るてあらう。然る時には元老等が好むにせよ、好まざるにせよ、原を推薦するの外はあるまい。然らば山本內閣に次いで原內閣が出て來るは是れ當然の次第てある。少くとも斯かる見識からして遂に無慙にも淸浦內閣を生れぬ先に產婆の手にかけて殺したのてある。處が、彼等が逆轉すべく豫想したる政機は更らに順轉して、圓石を千仭の谿に轉ずる如く遂に大隈伯に及んだのてある。大隈伯が出て來たのは隨分容易の事てはなかつた。之には內々盡力した人があつたてあらう。元來元老の中て衷心大隈伯を引出さうと思つたものは恐らく一人も無かつたてあらう。大山公の如きは別に大隈伯と喧嘩をした事もないが、政治上ては大山公は何時も伊藤方てあつた。伊藤方てあつたとすれば大隈方てなかつた事が分る。山縣公は大隈伯とは殆んど政治思想の兩極を代表する人てあつて、大隈伯は平常口を極めて山縣公を罵り、星亨が暗殺された時も、不謹愼なる大隈伯は、罪魁は別に居ると云うて居る。即ち罪魁とは言ふ迄もなく山縣公を指したのてある。彼等は政治上の主義政策のみならず。其日常の趣味性格一として一致したものはない。松方侯に於ては大隈伯の大藏卿時代には其大輔てあつて、又明治二十九年から三十年にかけては聯立內閣を組織した事もあつた。然し餘り近きは却て遠きをなす所以て、表向きの喧嘩こそせざれ、決して親密の仲らひとは云ふ事は出來なかつた。若し日本に大隈伯の缺點を最も能く承知し居る人あらば、其の一人は松方侯て他の一人は犬養毅てあらう。只元老の一人て、徹頭徹尾大隈伯の喧嘩相手てあつた井上侯丈けは眞面目に大隈伯を出して見ようと云ふ考を、他から吹き込まれたか、自ら思ひ附いたかは別問題として、其の當座持つて居たに相違はない。處が、大隈伯の方ては、自ら運動してまて此舞臺に出ゝ見ようと思うて居たか否やは別問題として、形勢が此所に到つた時には、昔取つた杵柄、食指大いに動かざるを得なかつたのてある。

吾人は玆に序ながら一言する事があるが、大隈伯の

特質の一は、變化極りなきと云ふ事である。板垣伯の如きは、時勢の如何に拘らず、一度思ひ込んだ自由民權論は何時までも之を把持し、善く言へば終始一貫とも云ふべく、惡く言へば木伊乃的とも云ふべきだが、大隈伯は恰かも石を坂に轉ばす如く、轉々として止まぬのである。參議大藏卿時代の大隈伯は官僚主義の標本であつたかも知れぬ。自らお大名振りをし勿體らしく、普通の人民は得て近くことが出來ぬ劍幕であつたと云ふ事である。處が何時の間にやら門戸開放的の大隈伯となつて其生活の態度こそ貴族趣味を脫せざれ、何れから見ても、グレート・コムモナーの標本として世に立つたでのあつて、其思想も明治十三四年より三十一二年に至るまでは、殆んど英國自由黨の主義政綱で打ち固められたと云うても可なりであつた。處が爾來大隈伯は何時の間にやら桂公と慇懃を通じ、又少壯なる軍人連中とも交際し、其思想の上にも多大の變化を來したのである。大隈伯の名によつて公けにされたる一卷の「國民讀本」は、大隈伯が英國流の自由主義より、日本流の勤王愛國主義に改宗したる懺悔錄と見ても差支あるまい。世間では大隈伯が內閣を組織してから官僚主義になつたとか、師團增設に賛成したとか、いろ／＼取沙汰するが、實は夙くの昔既に彼の頭は大變化をしたらしく思はるゝ。此變化が大隈伯の晚節を全うせしむるか、又大隈伯は此の以外に新たなる立脚地を見出すか、そは豫言の限りでないが、今日の大隈伯と、進步黨首領の大隈伯とは、單に其周圍の事情が違うて居るのみでなく、伯自身が全く違うて居ると見て大過なかるべしと思はるゝ。そこで桂公の同志會を作る時にも、實は大隈伯に涉りを附けて、大隈伯も少くとも其黑幕の一人と認められて居り、自らも恐らく任じて居たのであらう。處が桂公は逝き、同志會は折角出來てもまだ振はぬ時に於て、廣き世間を見渡せば、所謂武藏野に草は品々多かれど摘菜にすればさても少して彼や此やて、遂に井上侯を除くの外の各元老も自ら其局に當る程の勇氣も決心もなく、そこで不承不承で大隈伯を推薦したのであらう。若くは推薦する事

に同意したのであらう。

大隈伯は如何なる經綸抱負を有つて內閣を組織したのであらうか。此點は更に興味ある問題である。露骨に云へば無經綸、無抱負、何等胸中に成竹なくして乘り出したであらうと思はるゝ。元來大隈伯は臨機應變黨の骨頂であつて、決して經綸家ではない。高遠の理想などゝいはるゝが、大隈伯は未だ嘗て一定の理想經綸を定めて、其に向つて着實に精確に、一分刻みに刻み上げて行くと云ふが如き事は見出さぬのである。彼は只人を見て法を說き、事に當つて策を施すと云ふまであつて、本來彼は應急政治家である。彼の長所も此處にあり短所も此處にあるのである。そこで人が困る時は、一番彼の得意の時である。政治家としての彼の仕事は他人が匙を投げた後を引受くると云ふことである。例へば彼の出身の初めてあつた耶蘇敎處分問題でも、當時の政府が持ちあぐんだものを彼は忽ち處分したのである。又明治五六年の際、井上侯澁澤男等が帝國財政に見込がないとて辭職した後を引受けたのも大隈伯である。明治二十一年井上侯の條約改正の後を引受けたのも大隈伯である。彼は何時も應急の場に於て其手腕をあらはすのである。彼は未だ嘗て其主義主張に囚はれた事はない。彼は自分の意見にさへも囚へられぬのであるから周圍の意見にも囚へられぬのである。只時としては周圍の意見に囚へられたが如き事情もあるが、それは彼に於ては不本意の事と云はねばならぬ。さる場合に於ても彼は勢に囚へられたのであつて意見に囚へられたのではないと云ふ事は今玆に斷言して置く。

そこで彼は今回いよ〳〵山本內閣の後始末をするが爲めに出て來つたのである。即ち阪に於て立ん坊を要し、便所の掃除に汚穢屋を要し、火事に於て鳶の者を要するが如く、大隈伯は山本內閣の後掃除の爲めに出て來つたのである。一言にして云へば、大隈內閣は本來應急內閣である。應急政治家が、應急的に內閣を組織したのが、所謂今回の大隈內閣である。言ひ換ふれば當座內閣である。只一の內閣と他の內閣との間に於ての繫ぎの內閣である。性質が斯くの如きものであるから

には、之に向て多くの事を註文するのは、恰かも舊の者に向て、新らしき家の建築を註文するが如きものである。舊の者は火事場の手當さへすればそれて仕事は濟むのてある。燒け跡に新たなる家を造る事は大工の仕事てなくてはならぬ。大隈內閣に建設的經綸を望むは舊の者に藏を建てよと望む者てある。

吾人は大隈內閣には何等の恩怨はないものてある。然しながら之までの成績によつて考へて見れば、大隈內閣は確かに應急內閣の任務の總てとは云はぬまでも或者をなして居る。其主もなる事は海軍の大掃除及び宮內省の廓淸てある。此二點は事容易てあるやうてあるが頗る困難であつたに相違はない。然るに海軍に於て、寧ろ總ての帝國海軍よりも一人の山本の方が重いとしたる其山本を豫備に押し込んだのてある。之は一言にして云へば其れ丈けであるが、只此事丈けても大隈內閣の存立の意義を全うしたと云うても差支ないのてある。慾を云へば今少し手が屆きたならばよからうと思ふ事もあるが、尙爲さゞるに勝れるのみでなくして、少くとも海軍に對する我國民の信用は之が爲めに回復せられたと云はねばならぬ。普通に云へば八代と云ふ男は豫備編入の第一候補者であつた。然るに彼を引張り出したのは、大隈內閣の大手際である。大隈內閣の海軍掃除番としては彼程適當の者はない。予は改めて云ふ八代は決して適當の海相でない。但だ應急內閣の應急大臣としては尤も適任てあると。宮中の事は申すも畏しであるが、之れ亦大隈內閣の仕事として默過する事は出來ぬ。其他の內治外交については本來大隈伯は何等の抱負もなく、經綸もないのであつて、只出合頭に人に向て其意見を陳述するまゞゝあるからして强いて大なる望を囑するは、囑する人其人の間違てある。或は民力休養とか、或は租稅輕減とか、非募債主義とか、或は官制改革、人材登用とか、多少人氣取りの仕事もしたやうであるし、或は地方官の黜陟とか、隨分思ひ切つたる交迭も行うたやうてあるが、此等は本來大隈內閣成立の目的てもなければ趣意てもないのである。いはゞ大隈內閣は掃除內閣であつて、掃除をすれ

ば其れから後の事は、又他に遣る人が無くてはならぬのである、然るに大隈伯が尙今日まで首相の椅子に執着して去らぬと云ふは如何なる譯であるかと云へば、大隈伯の心中には尙一掃除すべきものが殘つて居ると云ふに相違はない。それは何かと云へば政友會である。大隈伯からいへば腐敗せる政友會の橫暴を打破するを以て大隈内閣の天職と心得て居るであらう、政友會から云へば反對黨たる政友會に打擊を加ふるを以て首相唯一の任務と心得て居ると云ふであらう。何れにしても此一事は間違なき事であると思ふ。

大隈伯は何れかと云へば元老中で寧ろ淡泊なる人である。昨日の味方今日の敵。今日の味方明日の敵。其邊には一向頓着ないのである。然し何故か彼は政友會嫌ひである。大隈伯と政友會とは先天的の合食である。政友會でも餘り大隈伯に感心せぬが、大隈伯は元來政友會嫌ゐである。而かも其久しき隱居より重ねて活舞臺に出でゝ大隈伯の戰鬪的血液を沸騰せしめたるは、夙に政友會と一大會戰を試むるべく、當初より決心したからである。大隈伯を戴いて若し妥協などを夢みることあらばそは政友會の間違である。大隈内閣其物がいはゞ政友會を退治するが爲めに出來したのである。然るに意外にも歐洲戰爭が突發して遂に擧國一致をせねばならぬ事になつた。之は政友會でも不本意であつたらうが、大隈内閣でも不本意であつたに相違はない。大隈伯が此前の議會で反對したければ反對せよ、敢て擧國一致を强ふるものでないと云つたのは彼の正直なる告白である。彼は寧ろ政友會の反對せんことを望んだであらう。彼は戰ふ事については長所ではないが然し好物である。或は下手の橫好きともいつてよからう。彼の生涯は殆んど戰鬪の生涯であつて、未だ嘗て一日たりとも平和の生涯を送つた事はないのである。彼は自ら窮地に陷り、若くは死地に陷つた事さへもある。然し我慢は彼の特色である。彼は遂に未だ嘗て一度も屈托した事はない。彼は維新の當初に於ては已に奸物と云ふ有り難からぬ名稱を頂戴して居たのである。木戸孝允も大隈嫌ひであつた。西郷南洲も大

隈嫌ひであつた。島津久光の如きは廟堂に於て大隈を彈劾して共に立たずと云つた程であつた。其後の事は吾人の知つて居る通りである。然し彼は如何なる敵を引受けても何等敵に向て憐みを乞うた事もなかつた。否、一つの困難ある毎に彼は彈力を以て、之に打勝たぬまでも、少くとも若干の抵抗力を持續してゐたのである。されば政友會退治は彼老後の思出に一戰鬪をなすべく最も快味を感じたる仕事であらう。天下多難の今日に於て、政友會退治を以て總理大臣の天職と心得居るが如き事は果して總理大臣の本分であるや否やなどゝ云ふ鹿爪らしき議論は擱いて、少くとも彼は斯く考へたるに相違はない。彼は今尚内務大臣の椅子を握つて離さぬのも之が爲めてある。彼が大浦の献策を容れて地方官の更迭をしたのも之が爲めてあらう。彼が二箇師團增設問題に贊成したのみでなく、之を今日に提出するのも幾分か其爲めであらう。而して元老共が大隈の施設について甚だ不得心不滿足ならがらも、今尙高見の見物をして居るのは一は自ら大隈に代る丈けの勇氣がないのと、他は大隈の手を藉つて幾らか政界の掃除をして貰はうと思ふからであらう。或は大隈を驅りて政友會を叩かしめ、毒を以て毒を制する積りかも知れぬ。併し元老が何であらうが、本來大隈伯彼自身が政友會を叩く積りである。

大隈内閣は全く一人内閣である。然しながら若し强いて其内閣員について求むれば、全く人物が無いとは云へぬ。然し其中で先づ内部の内閣員と云へば加藤、大浦の二人であらう。若槻は大臣でもあるが、事實は書記官長でもあらう。若槻を加へて三人と云ふ事も出來やう。世間では大浦を誤解し、又は買ひ被つて居るが彼は世間で云ふやうな手腕家でもなく又腹黑き陰謀家でもない。彼は只向ふ行きの强き鬪將である。如何なる大將も彼を側に置けば、何となく賴母しく思はるゝのである。之が桂公が彼を信用した所以であらう。彼は大隈内閣の智囊ではない。何故なれば彼の頭には他人に分けてやる程の澤山の智惠が入つて居る筈はない。然し大隈伯の政友會退治について滿腔の同情と熱

心とを寄する關係を求むれば彼に勝さるものはなからう。彼は一種の闘犬であつて、如何なる處き所にも他の犬の聲を聞けば忽ち滿身の闘氣は四肢の外に迸るのである。然し彼は何人に對しても恭謙て言葉遣も大人しく、如何にも老練なる紳士の態度を備へて居るものであつて、而かも其非常の場合には決して後れを取らぬのである。加藤は政治家とすれば寧ろ大浦とは等級よりぬ類を異にすると云ふ方がよからう。彼は生れ所が其所を得なかつたのである。若し英國に生れて居つたなら彼は立派な政治家として立つことが出來たのであらう。然し彼は日本現時の政治家としては餘りに理屈に囚へられて居るのである。彼は山縣を除くの外、大隈、伊藤、桂、西園寺とあらゆる政治家の門戶に出入し、練磨の効を積んだものであつて、政治家としては一通りの課程は皆優等を以て卒業したものである。し政治課程の優等卒業生必らずしも優等政治家でない。彼は政治家としては尙學ぶべき餘地がある。然し彼は少くとも三つの點に於て長所を有して居る。第一は意志の鞏固であると云ふ事である。第二は正直と云ふ事である。第三は頭腦透明にして、理義精確なる事である。此三點は彼の美點である。然し彼は理屈に囚へられ、遂に自繩自縛に陷つて非常の場合に非常の仕事をすると云ふが如き事は到底彼に向て期待する事が出來ぬのである。外交の急所は外交よりも寧ろ內交である。道理を捉ふるよりも、勢を捉ふる事である。即ち先づ我が足元の意見を固め、有力者をして我意見に賛同せしめ、其力を以て外に當ると云ふ事である。又た機微を洞見し大勢を未發に制し理外の理機中の機を操縦して、我が目的を達せねばならぬのである。內交に成功したのは小村であつた。捉勢に成功したのは陸奥であつた。但た加藤に於ては外交の典型丈は十分に心得居ても變通の妙用には未だしてある。要するに加藤の外交は一切內交拔きの外交であつて、內閣の外交でもなく、國民の外交でもなく、只加藤流儀の型から打出したる損な外交である。加藤の外交上の缺點は單獨外交であると云ふ事と、英國本位の外交である

と云ふ事と更に云へば理屈外交であり川並外交であると云ふ三點である。それさへ除けば彼位の立派なる外務大臣は恐らくは容易に見出す事は難からうと思ふが然し此三個の缺點は決して輕からざる缺點であつて、果して彼が此缺點を去り得るや否やは頗る疑問である今日第二流の政治家で云へば加藤、原、犬養であらう。而かも三人共に三黨の首領であるからして、若し黨派的に政治を見れば、此三人が將來日本の政界の三大立物といはねばなるまい。彼等は何れも一短一長であるが、單に正直で潔白であると云ふ點からすれば恐らくは加藤であらう。若し加藤が今少しく融通が利き、大隈伯のお守役を甲斐〳〵しく勤めたならば此内閣は應急内閣から一變して恒久内閣となり得ぬ事もないのであるが、半ばアングロサキソン化したる加藤では其藝當は六つかしからうと思はるゝ。

慾を云へば加藤に貧乏をさせて見たかつたのである。彼は三菱の婿殿であつて何時でも飯を喰い外さぬと云ふ恃みがあるから、何時までも此の自恃が彼の鼻先にぶら附き、兎角彼の政治家としての神經に邪魔をするのである。併し彼が内輪喧嘩を日常の業務と心得居る同志會の首領として、の一年有半は彼に取りて非常の藥石であつて、今回の議會にては彼が殆んど一人で大隈内閣を背負ふて立て居ると云ふ有樣である。今回の議會は政府側よりすれば大隈の議會でなく加藤の議會である。敵ながらも政友會の連中迄が彼の答辯振には感心して居る。彼は外交家としての成功は未だしであるが議院政治家としては先づ及第したのである。野猪も里に出せば豚となり、山芋も川に流せば鰻となる。加藤も其の上半は山芋でありながら其の下半は既に鰻に化したる樣子である。今二三年も立てば或はニコホンの第二世とならぬとも限るまい。兎も角も今後の修業が肝腎であらう。

日本人は案外に公平である。又案外に義俠心がある。彼等は政友會が薩閥と聯合して橫暴を働いた事をよく知つて居る。彼等は大隈伯が多年逆境に立つて居つた事をよく同情して居る。彼等は大隈内閣が、假令

國民の期待程ではなくも、若干の掃除的任務を盡した事を知つて居る。殊に老人を勞はると云ふ事は我國民性の美質で、大隈伯が一本の脚を以て七十七の老齢に山の如き重荷を背負うて立つた事を見れば彼等は多少の缺點があつても之を恕すると云ふ事は必然である。そこで此八ケ月間には隨分失策もあり、缺點もあるけれども、尙天下の人心は未だ全く大隈内閣を去つたと云ふ事は云はれぬのである。大隈伯後援會などと云ふ前後に比類なき奇妙天烈なる會の出て來たなどは、單に早稻田學派の餘慶と云ふばかりでなく、多少天下人心の歸嚮をトせらるゝであらう。そこで大隈内閣が意外なる理由によつて頓死せざる限りは先づ當分の所は存續するものと見てもよからう。然し大隈内閣の弱點は議會に多數を持たぬ事と外交とにある、更に一步を進めて云へば其の無經綸無政綱である。若し解散があつて總選擧の結果多數を制することが出來ぬと云ふ事であれば其時は總辭職するより外はあるまい。又今日は外交の機務をしつかり加藤が握つて居るからそれで濟むが若し之を開かねばならぬ場合が來たならば、恐らく國論の沸騰を免れまい。若し沸騰せぬ程の立派なる成績があればそれに越したる仕合せがないのである。併し無經綸の政府は久しからずして國民より倦殺せらるゝであらう。

最後に總理大臣としての大隈伯について一言して置かう。政治家に最も大切なる資格は何であるかと言へば勇氣である。廣翁が微伯に何時も感心せなかつたが、只感心した一は微伯の勇氣であつた。廣翁彼自身も亦同様である。彼の缺點は寧ろ勇氣の乏しさにあらずして、多きに過ぎたのであつた。此勇氣にかけては大隈伯は保險附と云つてもよからう。

次に大切なのは經綸である。經綸といへばチヤンと目度を定めて、申すも畏れ多き事であるが、明治天皇の御製に「取る棹の心永くも漕ぎよせん、葦間の小舟の障りありとも」とある如く、如何なる困難をも排して終局の目的に達せしむると云ふ事である。例へば我大久保甲東の如きがそれである。異なつた意味であるが

ビスマルクの如きもそれである。伊藤公の如きは經綸を徹底するの力に於て多少の缺陷はあつたが、經綸其物については大政治家と云ふべきであらう。桂公の如きは徹底するの力に於て頗る豐富であつたが、經綸其物については或は伊藤公に及ばなかつたかも知れぬ。處が大隈伯に至ては頗る貧弱である。伯は意見、議論、智識等は澤山であるけれども、それは只棚曝らしの代物同樣で、それを一貫したるものがないのである。わるくいへば手から口の政治家である。よく云へば臨機應變の政治家である。要するに其の日暮らしの政治家である。

第三は人物統御力である。此點については大隈伯は頗る遺憾がある。即ち其の自ら養成したる改進黨さへも之を自らよく收拾する事は出來なかつたのである。大隈伯は寧ろ人々と云ふ事を了解するも人と云ふ事を解して居らぬ。即ち十人なり百人なりの人に向つて其人心を收攬する事は出來るが、我相手とする一人一人の心を己れに深く結び着くると云ふ事が出來ぬ。之は山縣公などに比して頗る大なる缺點である。

第四は徹底力である。一度考へた事を、必らず之を行ひ通すと云ふ事である。此點に於て大隈伯の中年時代は隨分素晴らしき力を持つて居た。然しながら彼は徹底せんとする力はあるが、其術に於て粗なるが爲めに常に失敗したのである。彼の仕事は何時も足元から鳥が立つたのである。十四年の國會開設建白の失敗も、二十二年條約改正の失敗も、三十一年憲政黨內閣の失敗も、皆足元から鳥が立つたのである。所謂勇餘りあつて略足らず、力を恃んで計に疎なりと云ふべきであらう。彼は到底粗大の政治家たるを免れぬのである。只斯かる粗大の人として珍らしきは、數字の頭腦と理財の趣味とである。數字は彼の先天的の長所で、理財は彼の一生を始終する嗜好である。此點に於ては彼は伊藤公よりも數着を抽んでゝ居るのである。彼が出身の當初より惡評を受けたのも此理財の趣味であり、又彼が今日まで逆境の中になつて黨々お大名の門戸を張り續けたるのも亦此趣味あるが爲めである。此等は一

短一長と云つてよからう。

只最後に最も感心する事に、彼は如何なる場合でも樂天的であると云ふ事である。恐らくは彼は一生の間人に向て泣言などを云つた事は、全くないてないにせよ、澤山はあるまい。此樂天的であると云ふ事は、彼が一生の得てあるのみならず、彼の周圍に向つても少からざる好感化を與へたであらう。然し其裏面には、彼に政治家として見逃がす能はざる一大缺點が伏在して居る事を認めねばならぬ。そは何であるかと云へば彼が無責任であると云ふ事である。政治家として無責任なる言行をなすものは、恐らく後藤伯を除けば彼の如きもの他に比類あるまい。殊に彼が廣長舌はいよいよ彼の無責任を曝露して餘りあるのである、伊藤公なども大隈の無責任には困ると常に云うて居つたのである。彼が其同輩より信用せられず、其乾兒より愛着せられず、政治家として終に大いなる器を持ちながら、大いなる仕事を成就し得なかつたのは此無責任と云ふ一つの持病が彼に附き纒うて居た爲めであらう。然し彼が七十七の老齡を以て朝から晩迄自働車で乘り廻はし、相手を構はず、場所も構はず、遠慮會釋なく切り廻り、飛び廻る所を見れば、如何にも大和民族には斯くの如き精力家もあると思うて、大和民族の爲めに頗る意を强うすることが出來る。いはゞ彼も亦日本に於ては生ける國寶の一と謂はねばならぬ。國寶と云へば、何時までも之を使用する譯には行くまい。何れ遠からず、之を何處かに祭り込むか、仕舞ひ込むの外はなからうと思ふ。(十二月十一日)

中澤臨川氏著

破壞と建設

特製美本
定價九拾錢
郵送料八錢

臨川氏は奔放なる詩人的熱情と緻密なる科學的頭腦とを併せ有し、豫言者の俤ある論客として夙に文藝思想界の一角に雄視す。本書は其**第一論集**にして、讀書界の渇望久しくして漸く出づるを得たるもの也。載するところ何れも心血を濺げる雄篇のみにして、中に**「ニーチエ論」**の如き長く斯壇の權威たるべし、久しく氏の集に憧るゝ人々は速に求めて、此の新しき世紀の曙に輝く星の光を仰げ。

東京市牛込區矢來町中の丸　**新潮社**　電話番町二二二三番　振替東京一四七二番

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

大正四年暮王の正月先づ畫報界の魁雜誌界の勝者を迎へよ

本誌一冊を讀めば世界大戰の開始より十一月に至る一切の始末は「寫眞と文と併せて手に取るやうに分る　眞に傳家の至寶不朽の記念

大戰寫眞畫報改題

東京畫報新年號

元旦發行

口繪 菊二倍大 日英同盟兩陛下御肖像（三色版二頁大額面用）青島凱旋花の日の賑（着色石版光澤寫眞四十面）

定價 本號に限り 卅錢 郵税貳錢

▲交戰列强軍人、政治家、外交家、肖像數十種

▲交戰國首都、要塞、舊蹟、風景

他に得難き珍什の數々

▲最近新著歐洲戰地實撮寫眞

▲占領後の青島及山東風物■世界大戰時局移動地圖及要塞圖

壯觀 美觀

讀物

一九一四年世界大戰始末 外交戰に始まり肉彈戰に終る半年間の大戰史

▲獨逸の軍備及作戰▲聯合軍列强の軍備及作戰▲英獨の海軍力と作戰▲白佛兩國の要塞その他凡て詳細精確を極めたる權威的大文字……軍事專門記者

附錄

無敵艦隊降伏物語 英將ドレエク武勇の動

現今倫敦陛下座に於て英國人の愛國心を沸騰せしめつゝある名脚本

初號より全部取揃高需に應ず 九月號（舊新本別刊）定價廿五錢 十月號定價廿五錢 十一月號定價廿五錢 十二月號定價三十錢 郵税各二錢

發行所 東京神田

（振替 五〇一番 一〇三六 電本 四一三〇）

合資會社 富山房

信用なき店舗及ひ卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

（中付二の二）

大町桂月先生最近の快著

忽ち三版

伯爵後藤象二郎

菊判 極美装 八百册頁 口繪 三色版一 揮毫 寫眞版 コロタイプ三 二百有餘 特價金貳圓 正價金貳圓五拾錢 郵稅内地金十二錢

◉國民新聞 曰、……開卷第一章の伯少時を繙くに既に早く我等は著者が玲瓏として雅に過ぎず俗に流れざる名文に魅せられて了ふ以下章を重ぬること四十具さに伯が一代を敍し偉容を傳へ勳績を說いて餘す所がない……喜ばしきは史家に非ざる著者が觀察批評の却つて透徹明瞭を極めて何人にとりても快適なることである……

◉時事新聞 曰、「福澤諭吉先生曰く「……余は後藤伯が天の最負なり朝に立たせて其思ふ儘に手腕を揮はせて見たき者也」と實に後藤伯は男惚れのする人物なり……桂月氏の事は之を敍するに遒勁直截の言辭を以てし卑俗の理解を逸したる英雄の心緒及行を曝露して遺憾なく就中亂世に在りて彼を圍繞せる群星を描きて彼が人と爲りの輪廓を髣髴せしめたるは珍とすべし……

◉讀賣新聞 曰「伯後藤象二郎は政事の雄、桂月大町先氏は文章の雄、吾人この新著に對して先づ異常の引力を感ぜざる能はざる所以なり。……曠古の關雄、偉大の勳功其少時より晩年に至る迄の大人物の面目は情理兼到れる暢達明快の大文章によりて、さながらこゝに髣髴し來らんとす……

◉報知新聞 曰、……章を分つこと四十、桂月一流の雄渾の筆は史傳界の舊套を破りて幕末の史實を背景として矢丸論爭の活舞臺上の伯を最も明に描出せる余が多年の渴望は全く本書に由つて治癒せられしの感あり、余は常に史書を好み殊に史傳を耽讀するも未だ曾て本書の如く豐富の材料に充ちると文章の雄麗なると且つ傳者其人の人格の偉大なるとの三者の完備せる著書に接せず……

最新刊

日本男兒論

袖珍美本全一册▼定價金四十五錢▼郵稅金六錢

文壇の雄將大町桂月先生、青年の軟弱に慨する所あり、國家百年の長計の爲に健腕を揮つて本書を編せらる。言々句々血涙の團塊ならざるはなし。國家多事の時、青年學生たるもの、本書を繙いて覺醒せざるべけんや。附錄美文、隨筆文は先生獨特の麗筆、兩者併せ讀まば壯士月下に劍を舞はすが如きを見ん。

新學生訓 十一版 定價四拾錢 郵稅六錢

すゞりの水 六版 定價四拾錢 郵稅六錢

筆のすさび 七版 定價四拾錢 郵稅六錢

發行所 東京神田 合資會社 富山房 （振替五〇一一番 電本一四一三〇番 一〇三六番）

新日本

百頁増

本號に限り定價四十錢郵税三錢

通常號郵税共廿八錢五厘三月八十四錢
半年分一圓六十五錢一年分三圓十八錢

光輝ある新年號の壯觀！偉觀！！

一九一四年の世界の大戰爭は有史以來の最大事件にして、廿世紀の文明は人文史と最も偉大なる時代の產物として永久に紀念せられざるべからず。今、世界歷史の一新紀元、人間文明の一大回轉機に際して、現代文明の由來を繹ね、其意義を論ずるは最も急切なる時勢の要求なるを信ず。新日本新年號は特に當代各方面の權威たる碩學名家十數氏に乞ひて得たる

廿世紀十五年史

を以て主なる讀物とせり。要目次の如し切に江湖の愛讀を强要す。



回轉時代　大隈伯爵

明治天皇を中心として**日本人**の民族的發展を論ず　茅原華山

獨逸皇帝を中心として**獨逸人**の民族的發展を論ず　阿部秀助

二十世紀

▼文明の主潮……浮田博士
▼歐洲外交史……立田博士
▼列强財政膨脹史……田中博士
▼思想發達史……三並良
▼植民發達史……山内博士
▼工業發達史……中村庸助
▼政治史……佐藤博士
▼極東外交史……煙山專太郎
▼商業發達史……河津博士
▼文藝史……馬場孤蝶
▼科學發達史……中澤臨川
▼社會運動史……安部磯雄

文藝附錄

▼長篇小說　岩野泡鳴
▼小說 かくれ家　田村俊子
▼脚本 生靈　吉井勇

每號大隈伯が權威的の**卓論**に接せんと欲する者は必本誌に來れ

發行所　東京神田（振替五〇一番 四一三〇 電本一〇三六）合資會社 **富山房**

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

家庭の至寶萬人の相談役

文學博士 芳賀矢一先生
文學士 下田次郎先生 合編

【見本進呈】往復葉書申込

改訂増補

日本家庭百科事彙

四六倍判背革極上装釘全三冊千七百六十餘頁精巧木版挿圖約千三百
石版彩色及三色版寫眞圖畫十七枚詳密地圖十四枚光澤寫眞版四枚 **定價金拾壹圓**

金錢の善用

元日より大晦日まで、座敷、臺所に、主人に主婦に老人に子供に常に利用せられ、永久の重寶とし、一家の控柱ともなるべき本書の爲に、此少の金錢を投ずるは善用中の善用なり。見よ。大小三萬の項目は悉く實際的知識の結晶にして萬家萬人の相談相手たらざるはなし。本邦百科辭典の嚆矢嫁入、調度の隨一として有ゆる家庭に歡迎せられ、發行以來激甚の申込常に絶ゆる事なきは本書なり。茲に弊社は更に愛顧諸君の便宜を計り、月賦特賣を提供して。一層本書の普及を企圖するものなり。發表以來各方面の申込旺盛にして提供部數剩す所甚だ僅少なれ共**本誌讀者**に限り**本月廿二日**迄申込に應じ爾後斷然原價に復す。

月賦特價提供

月賦特價金八圓

拂込規定

本月より**毎月金**貳圓拂込四ヶ月 第二回御拂込の時一冊送本▲送料一冊に付内地廿錢

東京神田 合資會社 **冨山房**

振替五〇一番
電本四一三〇
一〇三六

(中付二の六)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御[illegible]記を乞ふ

現下の問題は僅少の部數が誰が手に落つるかに在り

文學博士 吉田東伍先生著 【見本・進呈】 往復葉書申込次第

大日本地名辭書

四六倍判 全七冊 六千二百餘頁 詳密地圖十八枚・正價金四拾圓

申込期限本誌讀者に限本月廿日迄特價金參拾圓

「規定」毎月貳圓五拾錢宛拂込十二回にて完了、二回目拂込の時一冊送本以後四回目六回目八回目十回目の時一冊宛送本十二回目拂込の時二冊送本す、外に送料一冊につき金廿四錢づゝ申受く。

月賦特賣提供

「振古未曾有の大著述」といはれ「世界に誇るべき雄篇」と稱せられ、其他「近代學界の偉觀」「永世不朽の文献」「超人的不可思議の精力」「驚くべき大頭腦」「精神界の教訓」など、有ゆる最高級の讃評を以て闡せらるゝ本書の價値と著者の名聲とは既に問題に非ず、現下の問題は此貴重なる大著が手に入るか入らざるかに在り。本書發行以來天下の需要激甚なる爲め、改植補修を施し、百方手を盡して僅かに五百部を調製したるも、今や剩すところ二百部に滿たず、弊社玆に篤志家の便宜を計り、前記月賦特賣を提供す。此際即決直ちに申込まずんば、此世界的不朽の文献を、永久手に備ふることあらざるべし。

東京 神田 合資會社 冨山房

振替五一〇番
電本四一三〇
一〇三六

（中付二の八）

東隣西隣の元首に與ふる書

米國大統領ウイルソンに與ふ

マスター、オブ、アーツ　米田　實

一

米國大統領ウツドロー、ウイルソン閣下、閣下は是れ當代の諸葛亮也、劉備を待たずして起ちたる諸葛亮也、プリンストン大學の奧深く、道を講じ書に親み、教授として、總長として政界の風塵を超絕すること二十年、是時に當つて誰か其今日あるを想はんや、左もあらばあれ、一九一一年ニエゼルシー政治の腐敗其極に達し、民主黨の頹勢亦た漢室のそれに彷彿たるものあるや、閣下慨然として半生の草廬を出て、一戰ニユゼルシー州知事となり、地方の腐敗を改革し、次て一昨年六月バルチモア市民主黨大會が閣下を擧げて大統領候補とするや、閣下は四方に馳驅して、奮戰猛闘、タフト、ロオスエルト兩氏を擊破して、遂に白館（ホワイト、ハウス）の人とはなりたりき、要するに閣下は政界の「一飛び入り」也、新參者也、然かも「飛び入り」をして新參者をして、能く此成功を收めしめたる所以のもの、果して孰くにか在る。

ウイルソン閣下、予は之を思ふて之を得たり、閣下が政界の新人にして舊人ならざるの一事は、則ち閣下をして勝利を得せしめたる所以の重因なることを、蓋しリンコーン以來六十餘年、廟堂に立ち雲湧き風生ずるの經綸を行ふの機會を得たるもの、一クリーブランド氏を除けば、皆共和黨員にあらざる無し、從つ　民心

漸く共和黨を離れ、民主黨に傾きたるは事實なり雖とも、然かも其趨向する所は民主黨の舊人にあらずして新人にありたりき、何故ぞ、他無し、舊人は多年政界の汚習に染み、譎詐多く權變多く、一旦善美なる政綱を提げて國民に說くも、當選後之を放棄すること弊履の如し、此點に於ては共和黨も民主黨も多く相異る所あるを見ざるなり、而して閣下は新人なり、人民以爲らく、彼や學德嶄然として高く、聲望衆庶を壓す、而して政界狡猾の弊風に感染せず、必らずや毀譽褒貶の外に脫出して、堅く其主張主義を決行し、一時の權宜の爲めに國家百年の計を謬ることは無かる可しと、斯くの如くにして閣下は遂に一昨年十一月の凱歌を耳にするを得たりし也。

然らば則ち就職後の閣下は、果して能く此國民の期待に辜負せざるを得たりし乎、予は少くとも其大部分に於て「然り」と斷言するを憚らず、試みに多年來國の懸案たりし關稅改革を見よ、前大統領タフト君は一九〇八年選擧に際し、關稅低減を公約し乍ら、翌年ペイン關稅法制定に當りて、却て之を引上げ、以て國民をして反覆變遷の甚しきに驚かしめき、是れ恰かも野に在りては私學勃興を稱え、軍備擴張に反對し、朝に起ちては俄然豹變官學擁護、軍備擴張に隨喜する日本の輕薄政治家と相肖たりと謂つ可き也、然るに閣下は如何、昨年三月大任に就くや、臨時議會召集の令を發し、富豪、財政家、農工業者の熱烈なる運動と巧妙なる誘惑とを排し、僅々半歲以内に平均三割減てふ大關稅改革を斷行し、遺憾無く其主張を實現したるにあらずや、又た幣制及銀行制改革は一九〇七年恐慌以來の宿題にして、オルドリッチ、ブリーランド等の應急策、講ずるものありたるに係らず、私利私益を根據とする一部金融業者の反對は、久しく之が根本的解決を阻止したりき、然るに閣下は能く萬難を排し、俗論を斥け、年昨末遂に同制改革を斷行し得たるにあらずや、次ぎにツラスト問題は如何、共和黨政府は陽にツラスト排斥を稱導し乍ら、陰に往々之を保護するの形跡あり、首鼠兩端の誚を免れざりしに、閣下一たび顯職に上りて以

來、誠意之が征伐策を講じ、三個の排トラスト法案を定め、一方に於て常置的會社調査委員を設け之に內情調査に關する至大の權限を與へ、以て其眞相を闡明するに力むると共に他方に於て現行シャーマン排トラスト法を修正し、以て其商業自由束縛的行動を嚴重に處分する法策を建てたるにあらずや、其他閣下が民、共進三黨員間に激烈なる反對ありたるに係らず、正義公道の本として、巴奈馬運河通航料問題に關し、米國の前非を改めたるが如き、南米の弱邦、コロムビヤと間に謝罪條約を締結したるが如き、孰れが閣下の主義に忠實に、良心に忠實なるの政事家たるを示すものにあらざらんや。

然り、閣下は順風に帆を舉げ、逆風に帆を卷く御都合主義の小政治家にあらず、困難の前に屈服し、毀譽の爲めに其言動を二三にするの輕薄才子にあらず、予は多くの事例を引用せざれども、此點に於て閣下を信ずること深且つ大也、否な閣下を舉げたる米國人民も、世界の友國民も、共に此點に於て閣下を信ずること太だ篤し、然らば則ち今後の閣下は如何、必らずや其內外の施政に於て此高尙にして公明なる態度を發揚し、米國の爲め、世界の親和と文明のために大に貢献する所ある可きを疑はず、是れ豈予一人の期待と言はんや。

二

ウィルソン閣下、予は殊に閣下が米國國民の信賴を博せる所以の此美質、則ち公正不偏の想と剛毅勇往の資とが、外交問題就中日米問題に於て發揮せられんことを切望せずんばあらず、何を以て乎之を言ふ、他無し、日米問題こそは兩國の盛衰隆替之に繫り、國家的運命に繫るのみならず、太平洋の平和、世界の平和皆な之に繫る所たるを以て也。

閣下夙に知らん、太平洋の東西の二大强國は日本と米國なることを、兩國不和ならんには、太平洋の風波は決して其名の如く「太平」なるを得ざる可し、夫れ閣下と國務卿ブライアン君とは、共に平和に眷々たり、一昨年四月世人の嘲笑を顧みず、所謂戰爭廢止計畫を

發表し、其第一次計畫として戰爭一年延期を目的とする所謂平和委員條約を中米サルヴドル、ニカラグア、南米ブラジルと締結し、最近更らに、英佛瑞蘭及び那と締結したるにあらずや、又た昨年八月歐洲大戰切迫するや、調停に力め、平和に力めたるは、中外の共に熟知する所にあらずや、然かも閣下眞に平和を思はゞ、最も力を致す可きは、日米關係ならざるを得じ、誤解する勿れ、予は敢て容易に日米戰爭を叫ぶ街頭の狂熱兒にあらず、左れど今日米國が最も多く難問題を有するは日本たり、日本が衝突の機會多しと思惟せざるを得ざるも、亦米國に在るを奈何せんや、世事顚倒し易く、人生豫じめ期し難し、人若し今日に於て日米衝突を說かば、識者必らず其不倫を笑はん、唯だそれ千丈の堤、往々蟻穴に崩るゝの譬あるにあらざる乎。

閣下よ、予は昂々然として衆愚に阿らず、良心を重しとして浮名を輕しとする閣下が、速かに日米間の二大問題を解決し、以て兩國の爲め、東洋の爲め、世界の爲め、永遠の平和を確保せんことを熱望す、二大問題とは他無し、曰く排日問題其一、曰く太平洋問題殊に支那問題其二。

先づ排日問題より說かん。

閣下よ、排日問題を如何にか見る、予輩をして忌憚無く批評せしめん乎、同問題の發生は、米國の國本たる自由、平等、博愛の主義に背反し、所謂ヤンキー文明に拭ふ可からざる一大汚點を印したるものならずんばあらず、試みに日本人の加洲移民の濫觴は明治二年松平スネール（歸化和蘭人にして幕臣たり）が邦人二十餘名と共に渡米せるに在り、爾來久しく振はず、十有五年前に至つて漸く農業界に勢力を得來り、其所有地の如きも、一九〇五年には二千四百四十二英町となり、一九一〇年には一萬六千九百八十英町となり、一昨年には二萬六千七百〇七英町となり、其他借地、請負、步合耕作等邦人農作區域を合計すれば、一九〇五年には六萬一千八百五十八英町、一九一〇年には十九萬四千七百四十二英町、一昨年には二十八萬一千六百八十七英町に達したりき、此進步發達を見るまでに於ける邦人の刻苦經營、それ如何許りなりしぞや。

然かも世上好事魔多きの譬へに洩れず、日本人の成功は忽ち白人の嫉妬を誘ひき、排日運動の勃興是也、一九〇五年日韓人排斥會の組織成り、一九〇六年桑港日本學童排斥起り、一九〇七年日本人土地所有權剝奪案は端なくも加州議會に現れたりき、而して此土地所有權禁止は一昨年五月に至り、加洲々法として成立し、邦人農業の發展は、之が爲めに一大

打撃を蒙りたりき。

左れど予は茲に過去を追懐して悲嘆の涙に咽ばんとするものにあらず、最も憂ふる所は今後に在り、閣下知らずや、排日派の一連は、今春の加州議會に於て日本人三箇年借地權の剝奪を始めとし、隔離學校設置、日本人各營業禁止若くは制限の策を講ぜんとしつゝあることを、何が故に茲に至りたる、是れ或は米人の人種的感情が根本的原因として存在するに加へ、在米一千二百萬の獨逸人が、日本の今回對獨開戰の爲めに激昂し、益排日熱を助長しつゝあるに依らん、然かも其原因は何くに在るにもせよ、目下十五萬町の多きに達せる日本人農業借地を危うし、日本學童の教育を危うし、其他各種營業を危うするもの、誰か在米邦人が之が爲めに多大の厄難を蒙むる可きを否認せんや。

閣下よ、閣下は本問題を如何にか見る、人或は曰く現大統領は移民制限論者也と、然り我日本の求むる所も日本人の米國新移住にあらざる也、是れ一九一一年日米條約關係往復公文書に於て移民制限繼續を聲明せるに徴して知る可きにあらずや、否々、小心翼々たる我外務省は、米國行移民制限に汲々たるの極、隣國墨西哥への移民をさへも制限するの滑稽をさへ演じつゝあるにあらざる乎、然れども既に已に米國領土に在る日本國民に至ては、親善關係の一友國民として、公平正當の待遇を受くるの權利あること、何ぞ日本在留米人と異る所ある可けんや、換言すれば我官民は在米邦人の不迫害を交換條件として移民自制を斷行したり、其後移民自制は行はるゝも、邦人迫害は依然たり、何等の偏利不均衡なる取引なりしぞや。

殊に予は思を本問題に及ぼす毎に、深く閣下に對して遺憾の念無きを得ず、何ぞや、閣下は其執政下に於て始めて排日法を成立せしめたる當事者なれば也、蓋し一九〇七年二月排日土地所有權剝奪法案加州々會を通過するや、大統領ロオスエルト君、州知事ジレット君に訓電し之が議事中止を命じ、一九〇九年再び提出せらるゝやロオスエルト君更らに之を制止し、一九一一年三度提出せらるゝや、大統領タフト君之を制止し

たり、然るに一昨年同案出づるに及び、閣下ブライアン君を西行せしめたりと雖も、其功無く遂に酷烈なる排日法は成立を見るに至りし也、然かも舊事は追はず、今年の加州々會若くは其以後に於ける排日運動に對し、閣下は宜しく其内政問題に於て發現したる公正の情、剛毅の質を茲に發揮し、以て其罪を償ふ可し、知らず閣下、猶利名の間に迷ひ、得喪の裡に漂ひ、平素の本色を傷けて恬然たらんと欲する乎。

(備考、今年米國の排日運動の爲めに危險の運に瀕せる加利福尼亞洲日本人借地の大勢は下の如し、借地面積オークランド地方二千九百八十五英町、ヴアカウイル地方四千百五十一英町、サクラメント地方四一英町、スタツクトン地方二萬八千英町、南加洲地方五萬四千英町、ワツソンビル地方九千百九十二英町、其他サンノゼ以下諸地方の分をも合せて總計十五萬五千四百八十八英町たり、而して現在日本人耕作區域は所有地二萬六千七百〇七英町、歩合耕作九萬〇四百九十九英町、賃借耕作四萬八千九百九十七英町、借地十五萬五千四百八十八英町、合計二十八萬一千六百八十七英町たり即ち借地の分その過半數に上るを知る可し、從つて借地權の剝奪が大影響を同胞農業に及ぼす可きや論を俟たざる也)。

三

ウイルソン閣下、予は次ぎに閣下に訴ふ可きこと一あり、曰く米國膨脹の進路を南方に執り、極東方面に到ては、純粹なる經濟的發展を以て滿足することゝし、之を以て米國百年の根本策となさんこと是なり、閣下能く行つて斯くの如くならん乎、太平洋の水は長へに坦々として、日米の交情依然濃密なる可きを疑はざるなり。

人或は米國の膨脹策を非難し、又た閣下が非帝國主義を唱道し乍ら猶膨脹策に貢獻するの色あるを攻撃するものあり、然かも予は之を與みせず、一八〇〇年僅々九十萬哩に過ぎざりし同國領土は如何にして今日三百萬方哩の大を成すに至りたる乎、要するに膨脹は米國過去百年の大勢也、況んや國民、正さに新進の鋭氣を以て事に當り、國富の如き過去一世紀間に八十五倍の増加を示し、活躍の精神、外に溢れ今更ら人力を以て制し難きに於てをや。

然れども米國の爲めに圖るに、此膨脹の大勢を物理

學の所謂最小抵抗の路に誘くこそ得策たるにはあらざる乎、最小抵抗の路とは他無し、中米及南米是也。

顧みろに、米國は往々近きを捨てゝ、遠きに出でんとするの風あり、一八九九年國務卿故ジヨン、ヘイ君が英露佛獨日伊六國に支那門戶開放、機會均等の公文を交附し、以て米國自身が將來支那問題に發言する機會を造りたる以來、特に此傾向を見る、殊に一昨年末銀行法、幣制法修正を試み、米國銀行海外支店設置を定め以て對支投資を便にせるが如き、昨年我が對獨開戰に際し、將來日本が「膠洲灣以外に活動する場合には米國と協議するものと了解す」と宣明したるが如き、將た其他各種問題に於ける態度の如き、漸く米國の活動が貿易一點張りを離れて、政治的勢力を扶植せんとするを示して餘りあり、然るに閣下之を記せよ、極東には日本を始めとし、米國以上に適切の利害關係を有する列國あり、米國にして膨脹の志を成さんとせば、血川漲り劍山聳ゆ慘禍を見ずんば止まざることを、換言すれば、米國政界こそ閣下の如き新人の出現を歡迎すれ、極東の國際政局は決して米國の如き新客の侵入を歡迎するを得ざる也。

之に反し米國の發展地として中南米を見は如何、見渡す所、强國の末班に列し得可き邦國ある無し、誰か能くヤンキーの星旗に反抗せんや、從つて米國は其志を成すに於て何等の障礙あるを見ざる可し、殊に米國は一八二三年モンロー宣言以來、不知不識、米大陸諸國の保護者となりたり、一八六七年奈翁三世に、墨西哥撤兵を要求し、マキシミラン帝を失脚せしめ、同國共和政府を復活したるが如き、一八七〇年歐洲のサンドミンゴ干涉を制止したるが如き、一八九五年クリーブランド大統領がウエネジユエラを助けて英國と爭ひたるが如き、一々其例を列擧せば、洲砂夏星も啻ならざるべし、又た米國は七億五千萬圓を投じて巴奈馬運河を開鑿したり、列强が英國の蘇士運河所有を目して、其埃及領有を正當とするものなりと解釋せるに照せば、米國が亦た該運河を本とし、中米を自由の勢力下に置かんことを主張するも、誰か一言の非難を加ふるものぞや。

唯た南米に於ける米國の權力扶殖に至ては、中米程に自由と根據とを有するものにあらずと雖も、米國は已にモンロー主義に依りて歐洲大陸の勢力扶殖を阻止すること九十年の長きに達しぬ、歐洲の勢力以て防止し得可しとせば、何ぞ將來米國自身の勢力を振張するに困難ある可けん哉、殊に南米行米國輸出品の如き、十年以前に在りては八千二百萬圓に

過ぎざりしが、五年以前に至り一億六千六百萬圓に増加し、一年以前に至り約三億圓に激增したるを見よ、南米方面の發展は、經濟的にも決して不利なりと言ふことを得ざる也、又た閣下先きにアラバマ洲モビールに於て演說して曰く南米に於ける歐洲の投資はモンロー主義を危險にし、南米を危險にすと、然り然かも英國が阿爾然丁に五十億圓を投資し、獨逸が數億圓を投資せるもの、皆な南米が資本投下の土地としても有利なるに依る、閣下何ぞ進んで東洋に向はんとする米國資本を一轉し、此有利なる南米に投下せしむるの策を定めざるや。

國祖華盛頓一七九六年將さに退隱せんとするや、米國の地位が歐洲と離隔せると共に、舊世界の政治に干與す可からざるを述べて曰く何れ此特殊的地位を捨てんや、何ぞ吾人自身の土地を捨てゝ、外土に立たんやと、此第一世大統領をして此言をなさしめたる理由と事情とは少焉らく問はず、少くとも此箴言自身に至ては、洵に米國萬代の安寧と盛榮とを保障する所以の名策にあらざる無き乎、閣下よ、呼嗟米國は新土に生れたる超絕的邦家也、宜しく新大陸の國として、大陸と共に終始し大陸と共運命を共にす可き也。

四

ウイルソン閣下、短文委曲を盡さずと雖も、所思略ぼ上述の如し、冀くば閣下浩海の量を以て之を容れんことを、顧みるにペルリ來朝以來玆に六十年、日米の親交兄弟の如く、情誼骨肉に似たり、今日俄かに加州排日問題の爲めに、將た太平洋問題の爲めに此干繫を廢滅するに忍びん哉、況んやこれ獨り日本の不利たるのみならず、亦た米國の不利たるに於てをや。

閣下幸ひに其衆愚に阿らず、褒貶を意とせず、良心に從つて敢行する資質を本問題にも發揮し、能く日米兩國の爲めに百年の平和策を決し、以て人民をして歸趣する所を知らしめん乎、閣下は則ち是れ兩國民の恩人也、太平洋平和の恩人也、將た世界人道の恩人也。

中華民國總統袁世凱に與ふ

石川半山

中華民國大總統袁君閣下

一別以來早くも三年を經過したが、閣下益々壯健、支那大陸の運命を其の双肩に荷ふて居られる所は、先づ以て賀すべき事だ、僕は明治四十五年、中華民國第一年の三月十日、大總統府に於て閣下の大總統就任式に列し、親しく閣下と握手して、祝意を表したる後、間もなく行李を整へて、日本へ歸つた、歸るの前にも僕は閣下に告別の禮を致して置いたが、日本へ歸て見ると、我邦政界の事情は、座視傍觀す可らざる者あり、僕の舊友等亦僕を拉して、此の政界廓清の事に從はしめ、爾來東奔西走、殆んど寧日なく、覺えず三年の歲月を空過した、其の間僕の夢は屢々北京へ回へりしと雖も、終に復た大陸に赴きて、親しく閣下と再會を得るの機會が無かつた、然かしながら僕の念頭、未だ曾て一日も支那大陸を忘れたることなく、更らに復た閣下の事を想はざるの日は無かつた、支那に於て發行せる和漢洋各種の新聞雜誌は、常に閣下の消息を報じた、支那に在る僕の各種の友人は、私信を以て支那の情勢を報ずる每に、必ず閣下に付て或る者を報じて來た、僕の友人にして、過ぐる三年間支那に遊歷して、親しく閣下に面謁して歸り來りし者も少からず、又支那人にして我邦に來遊せし者で僕の親しく面會した者も多い、現に閣下の政府に於て外交總長の重任に膺れる孫君の如きも、來遊の際、久し振りで逢ふて歡談を交へた、孫君は山東巡撫の時代からして、僕の相知る所で有るから、胸襟を開て語つたが、其時にも閣下の元氣旺盛なることを聞いた此等の報告や談話に依て、僕は閣下の情勢を知るに於て、多く人後に落ちないことを自信して居るが、僕をして忌憚なく言はしむれば、閣下が今日の境遇は、依然として同情に値ひすべき者で、決して世界の或る者の想像するが如く、羨望すべき者では有るまいと思ふ。

大陸統一の大業

曩に宣統の末年、革命亂が起て、滿洲朝廷は之に處する道を知らず、周章狼狽の末、閣下を河南より召

喚して大局收拾の任に當らしめ、閣下は内閣總理大臣となつて北京に入るや、僕は一日閣下を錫拉胡同の邸に訪問したことが有る、それは雪の降つた寒い日の午後で有つた、閣下は僕に向て、大陸統一の必要と其の困難を說かれた。

今や彼所に一國あり、此所に一國あり、各々獨立を宣言して、一政府を作り、都督を置て以て復た中央政府の指令を受けざるに至れり、現在我が清國政府に隷屬する所の者は、唯僅かに直隷、河南、山東の三省あるのみ、此の如き不統一は、誠に國家の大患にして、危險之に過ぐる者あらず、我れ今大命を拝して、内閣總理の重任に膺る、其の爲さんと欲する第一義は、此の四分五裂せる大陸を統一して、以て壞亂せる秩序を恢復するに在り、唯自ら微力にして果して克く之を成し得るや否やを危ぶむのみ。

僕が北京に於て學びたたる支那語は、閣下と談論を戰はずには足らなかつたけれど、閣下の語る所は未だ通譯を經ざる内に、其の大意を知ることが出來た、而して通譯の任に當りたる蔡廷幹君の流暢なる英語に依て、僕の既に諒解したる所を、更らに確實にすることが出來たが、閣下が此の大陸統一の困難を語れる時は、其の一面に如何にも沈痛なる色が漲ぎつて居た、閣下は閣下の前に置きたるシャンパンのコップを取り上げつゝ、大陸統一の爲めには、或る犠牲を惜しまざるの言を發した。

例せば我が國家は此のコップの如し、此の中に盛れる所の酒にして、若し腐敗混濁せんには、務めて之を醇化するの法を執る可し、又若し到底飲む可らずとせば、其の中なる酒を拋棄して、新らしき芳醇の酒を盛るも不可あるなし、唯夫れ此の腐敗混濁せる酒あるを厭忌するが爲めに、此のコップを執て、石に投下し、之を粉碎して顧みざるに至ては輕擧なり愚擧なり、抑も亦暴擧なり、識者の取らざる所、苟くも愛國の士の賛す可らざる所なり、一たび石に投下して之を粉碎する時は、復た之を收拾するに由なからん、故に我れ今此の理を說て、革命黨に諭すにコップ保存の必要を以てしつゝあり。

滿洲朝廷を以て腐敗混濁の酒となし、止むを得ずんば之を廢して、自ら之に代るべきの意は、閣下が覺えず僕の前に漏らした所であつた、然かしながら僕が特に此の事を指摘するや、閣下は忽ち呵々一笑し、其の緞子の袖より出せる大なる手を以て、白き鬚を撫でながら、自家が立憲君主制論者なることを說きたる後、

我が大隈伯爵の事に話頭を一轉した。

大隈伯爵は近來如何の情ぞや、我れ伯爵を敬慕すること于茲年あり、屢々音信を通じたりと雖も、不幸にして未だ拜謁の光榮を得ず、唯伯爵が維新の大業を成功し、新日本を建設し、今日の模範的立憲君主國を作り出されたる偉大なる勳業に至ては、我が深く感佩する所なり、我れ今此の難局に膺り、伯爵が日本帝國に致されたる忠誠の意に倣ひて、以て此の帝國統一の事を行はんと期せるも、如何せん鈍才にして容易に企て及ぶ可らず、是れ我が甚だ遺憾とする所なり、足下願くば我が伯爵を模範として日夜君國の爲めに力を致せる事を伯爵に傳達せよ。

閣下は僕との對談中、コップ保存論に於て、誤て其の眞意を漏らしたるも、尚大隈伯爵を假り來て、其の立憲君主制論者たる假面を維持した、然かしながら此時よりして僕は最早や閣下が立憲君主制論者に非る事を知つた、固より閣下が突然軍機大臣を罷められて、河南に退隱したる時から、三年間隱忍して風雲を待て居たことは、僕の能く知る所で有る、其の三年間に於て閣下が如何なる暗中飛躍をなしつゝ有つたかも、大略僕は知て居た、而して閣下が決して滿洲朝廷に忠實なる人でないことも、僕は知つて居たから、閣下の立憲君主論を聞いた時にも、僕は決して其の眞面目に非ることを想ふた一人で有るが、親しく閣下の口から、コップの酒を取り換へることを聞くに及んで、閣下が天下を取らんとする希望は、此の機會に於て、最も露骨に發動すべきを期待した、果然、時勢は急轉直下した、閣下は右手に革命黨を操縱し、左手に滿洲朝廷を飜弄し、外は列國の外交官を利用し、內は直隸、河南山東の各軍を手足の如く動かして、以て或は恫喝、或は懷柔其他あらゆる手段を盡して、滿洲朝廷を退任せしめ、孫黃革命黨を同意せしめて、遂に自ら大總統の位に即いたが、それから更らに第二次革命を壓迫して、今日に至る迄兎に角其の權勢を維持して居る所は、眞にエラい者だ、僕は決して閣下の謳歌者ではないが、其の技倆は確かに之を認める、世界の人は往々にして閣下を稱して、グレート、メンと言て居るが、僕は閣下が果してグレートで有るや否やは知らない、然かし兎に角レマーケブル、メンとして其手腕の尋常

でない事は認める、唯閣下の謳歌者が讃美する如く、閣下が今日迄の事業を以て、一大成功となし、閣下の現状を以て得意の時代となすことは同意することは出來ない、僕を以て之を見れば、閣下が果して成功したるや否やは、今日を以て斷定することは出來ない、恐らくは閣下自ら又今日迄の事功を以て滿足する者では有るまい、閣下は大陸統一の大業を目的として居る者だが、今日の情態は未だ決して此の大業を成功し得たりと謂ふことは出來ない、閣下はコップの酒を取り換へて、國民に向て「此の袁世凱と云ふ酒を飲んで見ろ」と宣して居る、之れは事實だ、或る一部の者が「芳醇でない」と非認したるを怒り、或る者は之を殺し、或る者は之を國外に放逐した、之れは事實だ、然かし支那大陸に於ける大多數の國民は、未だ閣下を以て「芳醇無比の酒と認めて居ない、而して一たびコップの面上に受けたる缺陷は、未だ立派に修理されて居ない、閣下の大目的なりし大陸統一の大業は、前途尙遼遠ではないか、之を以て閣下が大得意の時代となすは、餘りに閣下の志望を小に見た話で、閣下の謳歌者は寧ろ閣下を輕蔑して居りはしまいかと疑はれる位だ。

内治と財政の困難

閣下は中華民國の大總統として、大陸を統治すべき權力を持て居るが内地の叛亂は依然として治定して居ない、平均一日四件以上、暴動が起て居る、滿洲朝廷の時代にも、王化遍ねく僻陬に及ばずして、地方の土匪の叛亂は、頻々たる者で有つたが、然かし閣下の治世に至て、其の數は一層多くなつた、特に大總統閣下が勢力範圍として知られたる直隷河南、山東の三省に於てすらも、頻々として匪亂の報を聞くに至ては、閣下の威厳を損ずることの夥しい者だ、閣下は其の幕下の將軍をして、南方の重鎭たらしめつゝ有るが、其の威力は決して地方を靖撫するに足らない、此の如くにして糊塗彌縫を事として居た所が、ソレは支那の文化を進め得る所以とも思はれない。

閣下は内地の匪亂に苦しめるのみならず、想ふに又財政の一點に於て至大の苦痛を感じて居るで有らふ、滿洲朝廷の時代に於てさへも、收入は支出を償はなかつた、革命後地方の各省から中央政府へ送くる額は著るしく減少した、閣下の政府は正當なる租稅の收入に依て、其の必要なる支出を辨じて往く事は困難で有る、幸ひに列國が爭ふて閣下に借款を申出てゝ居た間は、閣下も財政の枯渇を醫し得たが、歐洲の戰亂は歐洲列強に取て大打撃で有ると同時に、閣下に取つても大打撃で有る、閣下は今後歐洲よりの借款を得るに困難を感ぜざるを得まいが、閣下は果して其の財政の前途を如何にして支へて往く覺悟で有る乎、勿論政府の大小官吏の俸給其他必要の支出も、財政窮細に際しては、之を支拂はざる

ことの慣例ある支那政府に於ては、國庫に餘裕を存せざる時は、其の一部若くは全部を拂はずして數月を經過することも出來るが、唯兵士の給發に至ては何を措いても拂はなくてはならぬ、若し兵士の給發にして、之を怠らんか、彼等は民家の掠奪を開始すべく、或は戈を倒まにして、閣下の大總統府に侵入するやも知る可らず兵を募るは易く、兵を解くの難き支那に在ては、兵士は實に閣下に取て財政上に於ては眞に厄介な物件で有る、閣下は如何に國庫の乏しき時代と雖も、之を給養しなくてはならぬ、然らば租税を得る能はず　內地の公債を募る能はず、海外の借款を募る能はざる閣下は、果して如何にして其の財政を維持し得べき乎、單に財政上から見ると閣下の前途は、誠に不安なりと謂はなくてはならぬ。

二大政策の斷行

閣下の大膽なる、想ふに此の窮境に在て、尙平然として微笑を含み、天下泰平の如き風采を裝ふて居るで有らふが、僕は閣下の胸中の如何にも苦しき者あるを察せざるを得ない、ソコで僕は茲に閣下が執るべき二大方策を指摘して、敢て閣下の參考に供したいと思ふ、それは外でもない。

第一　支那の治安警察を日本へ一任する事

第二　支那大陸を經濟的に列國に開放する事

日本には現に十九個師團の兵が有る、現內閣は更らに二個師團を增加せんとして居るが、實は日本の如き小島を守るに此の兵力は無用の長物で有る、閣下今若し日本に向て十個師團を借らんことを申込むに於ては、日本は欣然として之を應諾するで有らふ、而して支那大陸の治安警察を我が日本に一任するに於ては、我が十個師團の兵は、四百餘州到る所の土匪を鎭壓平定して、此の大陸の秩序を恢復し、平和を維持するで有らふ、我が帝國の海軍は又支那の沿岸を警戒し、楊子江の兩岸を鎭撫するに十分で有る、然かしながら此の如く日本兵が大陸の鎭撫を引受ける事は或は猜疑深い列國をして日本が支那を併呑するの野心あるが如く誤解せしむる虞れも有るから、之を防ぐが爲めには、列强に向て支那の富源を開放するの外はない、列强は富力を以て支那を補助し、日本は兵力を以て支那を補助するのだ、かくて大陸の秩序恢復し、平和なる光明の新天地が開かれて、產業起り、人民富むに於ては、支那の幸福は勿論、日本も大幸を享受するワケだ。

永久の名譽を思へよ

閣下外交の術に長じ、列國の外交官を操縦する巧妙を極めて居るが、目前の小問題に對して、單にソンな小策を弄して、日を送くつて居ても、それは到底無駄な事だ、閣下をして大陸統一の大業を成功せしめ、四億の民衆をして其の慶に賴らしむるの道は、唯日本の兵力と列强の資力を利用するの外はない、而して若し此の大策を斷行することが出來ないほどならば、閣下が永く現任に在るは、誠に閣下の爲めに不利である、閣下が永久の名譽の爲めに不利で有る。

王莽董卓か否か

閣下を惜む所の者は、往々にして閣下を評して王莽、董卓の徒となして居るが、僕は閣下と面識あるが故に、今日に於て閣下を王莽、董卓に比することを望まない、今日迄の行動では、閣下の眞の志操は未だ能く分らない、閣下にして若し今日僕が獻ずる所の大策を採用して、四億の民衆を塗炭の苦しみより救ひ出し、東洋の平和を確立して、世界の大局に貢獻するに於ては、閣下は決して王莽、董卓の比ではない、又自ら此の大策を斷行し得ないにしても、閣下が今日に於て、僕の此の大策を實行し得べき相當の人物を推選して、快よく其の最高の地位を去るに於ては、閣下の高風は永く青史の上に輝き、米國の最初の大統領ワシントンと其の名を均ふすることも出來るで有らふ、然しながら閣下にして徒らに權勢を貪ぼり、猥りに小術策を弄し、人を殺し、人を欺き、一身の榮華を誇て、民衆の艱苦を思はず、私黨の利益を謀りて、天下の公益を企てず終に國內の不平黨の爲めに、其の悽慘たる末路を取るが如き事あらば、閣下は自ら招いて王莽、董卓と同類に落つる者で、僕と雖も最早や之を回護すべき辭を知らない。

中華民國の爲なり

僕は中華民國を愛し、四億の民衆を憐れみ、其の平和を進め、其の開發を圖るの誠意に至ては、決して支那に於ける愛國者に一歩を讓らない者だ、又閣下に對する敬意に至ては、閣下の謳歌者に過ぐる者あるも決して劣る者でない、而して深思熟慮、東洋の平和の爲め、支那大陸の繁榮の爲め、四億民衆の福利の爲め、同時に閣下が永久の名譽の爲めに、此の大策を實行するの外なきを思ひ、茲に此の書を草した次第で有る、閣下胸襟磊落、能く大局を達觀し、僕が言辭の粗蕪禮を失するを咎めず、其の意を取て以て之を用ふる有らば、是れ獨り閣下の永久の名譽を全ふするのみではない誠に東洋の幸ひで有る。

文學博士桑木嚴翼先生
文學士天野貞祐先生 共譯

カント 哲學序說
プロレゴメナ

新式美裝約三百頁
一圓五十錢
小包料十二錢

新刊

近代哲學の源頭を成せる世界の寶籍

カントに還れ！とは近時識者の異口同音に叫べる所。カントを知らずして近代哲學を論ずるは、猶太陽を知らずして光線を論ずるが如し。今日此際、カント哲學の概論として定評ある不朽の名著プロレゴメナの全譯あるは偶然に非ず。譯文の精亦原著の妙相煥發して眞に近時の一偉觀たり

好評重版

文學博士桑木嚴翼先生著
増訂六版 **哲學綱要**
美本四三〇 一圓八十錢 送費十二錢

文學士安倍能成先生著
オイケン大思想家の人生觀
美本七五〇 三圓五十錢 送費十六錢

發行所 東京牛込見付 振替東京一七一 **東亞堂**

(中付三の二)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

（中付三の二）

浪六先生著 最新刊

縮刷 いたづらもの

三五版天金 美装箱入 定價金壹圓卅錢 郵送料十二錢

小説の主人公がいたづらものか著著がいたづらものか讀者の判斷乞ひ—天下の奇書なり。

浪六先生著（縮刷忽三版）

日蓮と豐太閤

◉三五判天金 美裝箱入 定價金壹圓貳拾錢 郵送料十二錢

古今一人の英雄僧と古今一人の英雄人と兩々相對して浪六先生の筆に上る、讀んで趣味と修養の兼備せるもの本書以外になし。

浪六先生著（縮刷・忽三版）

馬鹿野郎 稲田一作

合本 三五版天金 美裝箱入 定價金壹圓卅錢 郵送料十二錢

智者と才子の多き今日は却て馬鹿野郎を讀むの必要あるべし

發兌 東京市日本橋區數寄屋町三番地

明文館書店

振替東京四五五四番
電話本局六八四四番

（中付三の四）



年始狀

黑頭巾

其一

◉諒闇の中なれば、新年の賀儀を擧げさせ玉はず。九重、雲深き處、寂しく寶算を加へさせ玉ふをば、萬民齊しく、深く恐察し奉る。

◉大正の新政に當りて、重ねて、皇太后の諒闇に逢ひ玉ひ、天下、恰も、天磐戸を閉させる如くなりき。然れども御稜威の影、自から寰宇に敷き、上下一致、國勢此の間にも、いよいよ發展して、今年ほど、大なる新年は、吾が國勢の發達史に未だ見ず。やがて雄鶏、曉光を報じ、諒闇の明けなん時、國光、一時に煥發す可きは、今年ならずんばあらず。

其二

◉一昨年の春は諒闇に來り、今年も亦た然り。回顧すれば去年の春こそ思出多き正月となりぬ。

◉去年の新年葉書を點檢して、『天皇陛下の、大嘗祭らせたまふべき年のはじめを、つゝしみてことほぎ奉る』の一葉に至つて、感慨に堪へざるものあり。此の葉書の主は山田孝雄、敬虔なる國學者なり。

◉這般の情緒は、ひとり山田のみならず、六千萬の同胞、齊しく共に懷抱せざるは無かりき。蓋し諒闇の後の新春に逢へること、長かりし霖雨の後、一天清明の朝光を見るが如きものあり。計らざりき、忽ち、重ねて、皇太后の諒闇に逢ひ、此の好晴の、日、未だ午ならざるに、雲湧き、雨また來れりし感無くんばあらず

●吾輩は、此の春に逢ひて、今年の極めて多幸にして、御卽位式、大嘗祭の行はせられ、春風、春水、一時に來るの、賑やかなる一年ならん事を祈り、以て、此の春を迎ふるの詞に換ふ。

其三

●年頃年末の花木は、山茶花と南天燭となり。山茶花の野趣津々たる、南天燭の生采英々たる、これに對して、共に詩興を發すべし。此の二者は、切り花となして花瓶に挿みたるも風情あれども、鉢植となしたるは更に可なり。殊に山茶花の小木の、多く花を著けたるは、限り無く可愛らし。

●吾が書齋に、山茶花と南天燭とを置き、會心の友二人と共に、小盃を以て淺酌して、靜かなる新年を語り暮らす。去年の春の事なりき。

●春の花といへば、由來、梅花と水仙花となり。梅花と水仙花とは、春に適はしき氣分あり。殊に、近年は支那の水仙花多く、稍、新味を添ふ。然れども春に梅花水仙花といふは、恰も、風景を語りて、直ちに三景を言ふが如し。三景の必ずしも佳ならざるに非ず。新らしき感興は、無名の好風景に對して生ずるなり。

●客は、迎年の詞をば、すべて郵便に托して、同町の中と雖も、悉く集配人を煩はし、純然、新春の一散人となり得て、吾が書齋を訪へるなりといふ。卽ち主客、閑散、暦日に關せざること、山野の花木と異なること無く、陶然として、山茶花、南天燭と同心の友となる。而して山茶花、南天燭は、また人の如く、笑を帶びて、吾が三人を看つゝあり。

其四

●新年に、新年葉書を點檢するは、一種の興味あり。近ごろ新年に名刺を郵送し來ること流行す。名刺は訪問に換ふるの意、葉書に比すれば、一層、緊切なるが如く、葉書よりも、其の手數と郵稅との繁なるを以てして、敬意を表することも、亦た一層の丁重を加ふるの形無きに非ず。然れども趣味は、名刺よりも葉書に在り。

●蓋し新年の郵便に於て、封送の名刺は訪問の意を現はせども、叩扉の音を聞きて、其の人を見ざるが如く、夜、水鷄を叩くの思無きにしも非ず。葉書は、其の面を見ずと雖も、簾を隔てゝ相語るが如く、心胸面目、吾が眼前に躍如たらずんばあらず。

●古へより謦咳に接するの語あり。葉書は、其の本來の効用は、單に、謦咳に接するのみの感想に過ぎざる

ものなり。殊に、未知の人より始めて一片の葉書を得たる時は、汽車の中にて、偶然、隣客と、數語を交換せるの思を爲すに止まる可し。

◉新年葉書は、自から別種の興味を有す。新年葉書は概ね既知の人より來れるに非るは無く、其の名と、人さま〴〵の賀正の一句を見れば、其の人に對する、あらゆる平生の感想湧く。則ち新年葉書は、其の人を象徵するものならずんばあらず。

◉新年葉書は、他の往復書信と異なる所以は、知人間に限れる一種の公開狀なるに在り。唯だ一樣の文章を以て、すべての知人に對するに在り。而して之を接手する知人は、千差萬別の情緒を以て、此の一樣の文章に對するなるべし。

◉這般の意義よりすれば、新年葉書は、力めて意匠を凝らし、以て、自家の性格と趣味とを表現せん事を要す。表現の鮮明なれば、なるほど、受信者の享受する感動は、的確なるを致すべし。故に、新年葉書は、筆墨の巧拙を問ふに非ざるを以て、他人に、意匠を托するは、斷じて不可なり。

◉他人に托して意匠を凝らせる新年葉書は、必ずしも不可なりといふには非ず。其の巧妙なるものは新春、屠蘇の前に、一粲を博するに足るべし。他人の意匠なりといふとも、また是れ本人の趣味を表現せるたるを失はず。然れども此の如きは、到底、言に訥なる者、他の辯に雄なる者を傭ひ來つて、己に代つて、新年の辭を述べしむるが如し。假令、絕妙なりとも、訥辯なる本人の自から言ふの情味あるに若かず。

其五

◉世間、極めて忙なるの時、吾ひとり書樓に據つて、閑かに、茶鼎の松聲を生ずるを聽くは、吾に、一箇、別天地あるを自覺して、斯心、また大に伸ぶるものあるを思ふ。

◉人去り、燈、孤にして、火鉢の活火、ひとり生氣を縱まゝにす。此の時、席を排つて、茶を喫み、烟草を吹かし、案頭の新年葉書を檢し來れば、知人の面目、書くが如く、一々、吾が眼前に在り。其の人とともに靜境に細語しつゝあるに似て、情緒、纒綿として盡きず。

◉新年葉書は、謹賀新年の四字を以て、尤も普通なるものとす。或は、更に簡明を求めて、約して賀正の二字となせるものもあり。而して多數の人が、口頭の賀詞の一致するが如く、葉書に於ても、此の四字、或は

二字を用ふるを普通なりとす。

◉新年葉書は、其の實用よりすれば、唯だ新年の意味を、的切に、發表するを得れば足れりとすべし。謹賀新年、賀正の四字、二字は、まさに、此の意義に適應するものなり。然れども、新年の賀客、同じく賀正の一語を言ふも、其の服裝の一様ならず、脫帽、叩頭の一動、一線に至るまで、萬人萬様なると等しく、僅かに、這般の四字、二字を手書すれば勿論の事、假令、印刷すればとて、活字の大小、異同、インキの色彩、種々様々の變化あるを見るなり。

其六

◉今、年始狀といへば、殆んど其の大數は新年葉書なるをつねとし、書面となせるは甚だ稀なり。世務いよいよ繁にして、禮意ますます簡に流る。名刺を封送するは、丁重の主意に出でたるべけれども、簡を求めて已まざる者も亦た名刺を封送するを致す。其の簡の窮まれるものは、單に、普通名刺を郵送し來れる者もあり。幸に、新春の時機に來れるを以て、受くる者、以て、賀正の意なりと解釋せざるはあらず。此の場合に於て、此の普通名刺は、尤も分り易き一種の謎たるを失はず。

◉禮は簡を嫌はず、意の深きを貴ぶ。賀正の文は如何に短かきも差支無し。唯だ紙面、字畫、すべて整齊なるを要すること、禮服は絹衣のダラシ無きよりも、木綿のキチンとしたるを心地可しとするが如くならざる可らず。

◉新年の禮裝の上に、人格趣味の表現せらるゝと同じく、新年葉書の表に、其の人格、趣味、素養、漢學的、ハイカラ的、蠻カラ的、すべて流露せざるは無し。

◉單に、謹賀新年の四字と、其の姓名とを記するに留まるのみ。然れども之を記するに、二箇の石印を以て、朱肉を以て、紙面に押すこと落欵に於ける如くす。彼は、菊池謙二郎、仙湖と號す。吾輩の舊師の一人也。今、水戶の中學校長、而して巍然として、水戶學の古壘を堅守しつゝある唯一の水戶學者なり。

◉杉浦重剛先生のは、自署して石版とせしが、去年は、全部、活字を用ふ。文は唯だ謹賀新年の四字に止まると雖も、大正三年年首と記し、すべて明朝體の活字を用ひ、配置の整齊、紙面の高尙なる、如何にも、壯剛、森嚴なる彼の風貌を想見するに足るものあり。彼は、靑年の木鐸にして、東宮御用掛なり。

●謹賀新年の四字を、種々の書體を以て印刷する者、珍らしからず。這般の趣味を有せる者、學者、教育家の中に少からざるが如し。而して奇異の書體を用ふるものは、殊に地方よりの新年葉書等に多しとするなり。

●恭賀新年、江木翼と、一直線に、清朝體の二號活字を以て、葉書の眞中に、黒々と推し出せるは今の内閣翰長、其の人を見るの感無くんばあらず。唯だ此の簡明なる一行の文字、「人物を象徴するの趣味あること此の如し。

●同じく賀といへども、之に冠するに、或は、謹、或は恭、或は奉、必ずしも一樣ならず。新といふも亦た然り、或は新年、新正、新禧、人に依つて異なるを致す。吾輩は、奉賀新年の四字を以て、種々の意味に於て尤も簡明、平正にして丁重なるものと思ふ也。而して、謹奉賀新年の五號を用ひて、恭敬の態度を表現する者を、稀に見ることあり。

其　七

●同窓の友人にして、共に、學校を出でゝ、雲の如く四方に分れ散ぜし者、年々、唯だ一片の新年葉書に依つて、音信を通ずる者少しとせず。若し、相逢はず情緒疎隔、渝背するも計り難さゞるものあるべし。而して僅に謹賀新年の四字、則ち能く舊情を蘇せしむるに足るものあり。此の時、一言、萬言に勝さるの味無くんばあらず。

●諺に、遠きものは日に疎し、遠き親族は近き他人に及ばずといへり。友情の一半は、交通に依つて涵養せらる。若し、交通の斷絶、多年に渉りて、其の志業、趣味、全然、相背馳するに至らば、青年の親交は、知らず識らず時効に罹するを致すや、測られず。此の意味に於て、新年葉書は、「時効の中斷」を為すものならずんばあらず。

●社交の理想的には、寒暑、相存問するを得ば、また人生の樂事たるを失はざるべし。舊藩時代の侍の交游は、概ね、此の如く為すを常とせり。然れども世變、屢到り、人事、世務と共に太だ多忙、人々、自家頭上の蠅を逐ふに急にして、當面の人と握手するに專らに、舊交に及ぶに遑あらず、舊交を暖むる唯だ一片の新年葉書あり。

●世情、既に此の如し。今の人の、新年葉書を見ること太だ重し。隨つて新年葉書の、効用を為すことも、亦た的切なるを致す。新年葉書に意匠を凝らすの動

も、亦た、一には此の見地より來る。

◉新年葉書を發信するの見解、種々あり。新年葉書を以て、吾が脚に換ふると爲す者は、年頭禮訪を爲すほどの深交的關係に非る人には、發送するに及ばずと爲す。新年葉書を以て、吾が口に換ふると爲す者は、互に迎春の敬意を發表するほどの知人には、悉く、之を發送す可きものと爲す。前者に在つては、發信太だ少く後者は太だ多し。而して二者ともに一理あり。新年葉書を以て、廣告に併用するものは、則ち第三種に屬す。

其八

◉新年葉書は新年に發送す可きものなりや、將た新年に配達す可きものなりやの問題は、近年郵便局が新年葉書の特別取扱の一法を案出したるに依つて、便宜的に解決せられたり。然れども、情理の上に於て、尙ほ此の問題は保留せられて存するなり。

◉意思を當日に發表せんとせば、電報の外無し。然れども、電報には感興無し。本人の筆蹟も聲音も傳達せられず。譬へば、新知の人に托せられたる傳言を聞くが如きもの無くんばならず。

◉新年の試筆といふもの、甚だ趣味あり。父母、兄第、舊師、先輩、親友には、宜しく試筆を送るべし。新年葉書は、特別郵便に依つて既に配達されたりとも、其は唯だ禮意を通ずるのみ。新年の感興を寫して以て、親愛の情緒を傳へずんばある可らず。

◉新年には、生醉（ナマヨヒ）の禮者、甚だ愛す可きが如く、醉墨淋漓たる新年葉書を接手するは、興趣爛熳として、また人を醉はしむるに足る。

其九

◉新年の儀式は所謂紋切型（モンキリ）のものなり。およそ紋切型といへば、新年ほど紋切型なるはあらず。賀詞、酒肴、禮法、遊戲、すべて是れ年々歲々、紋切型ならざるは無し。極めて紋切型にして、極めて新たらしく、極めて嬉しきは新年なり。而して新年葉書は、這般の情趣を象徵するものならずんばあらず。

◉新年も亦た世態と共に變遷す。紋切型にも亦た不斷の變革あるなり。新年葉書は、本來、紋切型のものなる可く、紋切型といふ中に、自から淸新の機軸を帶ぶるを要す。

◉吾繪葉書の進步、發達は顯著なるものあり。然れども尤も趣味を凝らせるものは、「趣味の人」の「趣味の新年葉書」なるべし。昔の錦繪は、一變して、今の

繪葉書となり、配り繪は則ち「趣味の新年葉書」となりたるなり。

◉東京には「趣味の人」多し。凝りたる「趣味の人」は、「趣味の葉書」を鬪はさんが爲に、新年には、互に、往來して禮意を交換することと無きやも知れず。然れども彼等に取りては、「趣味の葉書」を鬪はすこそ、互に、無上の親愛と尊敬とを表示するものならずんばあらず。

◉極めて無性（ブシヤウ）なる者は、一片の新年葉書を飛ばして、自宅に籠城するものあり。概ね葉書に記するに旅行中といふを以てす。

◉或は、旅行を好める者は、年頭年末の閑暇を利用して、新年の禮意を果し、自由の天地に行くを得る。小島烏水は、本職を正金銀行に奉じ、一年、僅に、三週日の休暇を活用して、日本アルプスの研究に沒頭す。彼の如きは、尤も新年葉書に寄謝すべき者なるべし。

◉年頭年末に、近縣旅行を爲すこと、又た近年の流行なり、是等の人は、概ね新年の禮を煩として、去つて閑地に就かんとするものなり。新年は人生の大禮なり、大禮を、一片の葉書に托して、自由の天地を求めんとするは、兎も角も、一の我儘に外ならず。また以て、維新前、新年の大禮を重んじたると、世風の全く一變するを見る。

◉唯だ一片の新年葉書と雖も、人格、趣味、世情、文明及び世相等、種々の意義を語るものなり。吾輩は、今年の靜かなる新年に際し、徐ろに所藏の新年葉書を點檢するを以て、深き興味を感ぜずんばあらず。

其十

◉今、吾が卓上に一葉の葉書あり。絕頂に旭日を描き、下に新年の家族と題して、家長及び全家族の名と年齡と、子女には特に學籍を明記す。すべて紅刷（ベニズリ）なり。葉書の主人は、唐津の青木共三郎、彼は、年々、此の意匠に依り、曆年と共に、其の年齡を新にするのみ。

◉昔は、元旦には、女と僧とは賀正の客とはならざりき。今は、新春と共に、女も僧も、新年葉書と名刺とを送り來つて、少しも怪む者あらず。世相の上に於ては、女權は擴張せられたり。新年葉書の表に、女の獨立人格は、認められたる也。

◉新年葉書に、夫婦の名を列記し、或は家族を列記し、或は、家庭の情況を報道するは、近年の流行の一なり。一には、主人の趣味にも依る可く、一には教育

上に、家庭の語を鼓吹し來れる影響として見る可し。

●吾輩の蓄藏せる家族列記の新年葉書の中に、嶄然として一特色を爲す者は、青木の葉書なり。其三郎の名、既に奇なり。彼の兄は峰是三郎、老教育家なり。是、其の虚字ばかりを擇びて其の兒に命名したるを見れば、彼の父は、「趣味の人」なりしなるべし。

●青木の葉書には、彼の母のみ存す。吾輩も、彼の父を見たる事無し。母は竹子、妻は琴子。姑嫁の名、太だ雅なり。而して彼に四女あり。彼が、其の女に命名する所以、頗る奇彩あり。富士、初瀬、香取、利根、ともに悉く同名の帝國軍艦の進水の年を記念するの名なりと聞く。

●彼れは海軍に趣味を有するか。唐津は松浦潟に在り。風景絶佳なる貿易港、軍艦も亦屢々來り、檣影、佐用媛の領巾(ヒレフル)麾山に映ず。彼は、之に由つて特に海軍を印象するなる乎。彼には一男をも有せず、今の嗣子は長女富士に配するなるべし。軍艦創建費は續々計上せられつゝあれば、彼も尚ほ女兒を擧ぐるにやあらん。而して二箇師團増設の頃、彼の二女、三女、續々、佳婿を得るの時なるべし。

●彼は眼科醫にして、才人なり。吾輩嘗て、「眼は靈魂の窓なるの説」を擧げて、彼の病院新建を祝し、頓に、知友となる。一別、相逢はざる既に十數年ならんとす。年々、彼が紅刷(ベニズリ)の葉書來る毎に、彼の涼しき眼、毿々たる鬚髯、恍として吾が眼中に浮び來る。併せて、白沙青松の松浦潟、吾が眼前に展開し來る。

其十一

●夜は、次第に深し。まさに五更なるべし。卓上、電燈ひとり煌々として、天地、萬籟寂たり。東北線の貨物列車の笛聲なるべし。田端の邱を越えて響く。一年三百六十五日、毎日、同一日課を正しく繰返しつゝあるものは、時計と汽車とならずんばあらず。

●吾輩は、筆蹟に拙なれども、殊に、葉書に書くことを、尤も難しとす。新年葉書の自署の見事なるものは、年々、藏めて吾が葉書庫に在り。

●新年葉書は、活字よりは筆蹟の石版なるが、速記よりも蓄音器に近きだけの情味あり。若し石版を用うるまでも無く、直ちに筆蹟を送り來るは尤も嬉し。

●吾輩を以て見れば、筆蹟を送るは、非常の努力を要す。新年葉書は、本人の筆蹟なれば、則ち絶對に可なりといふの理由無し。新年葉書は、法律的のものに非ずして、情趣のものに屬す。故に其の筆蹟は、法律上

の自署と等しく、眞蹟、疑はしき事無ければ可なりとは爲す可らず。筆蹟に、謹厚なる委致と情趣とを帶ぶるを貴ぶ。亂筆なるは宜しからず、或は、亂筆は、活字の整齊なるに若かざる事もあり。然れども亂筆と雖も、其の風貌面目を表現し得て、興味津々たる事あり。代人をして亂筆せしむ可らず。

◉新年葉書の作字は必ずしも巧拙を論ぜず。巧、固より可なり。拙なりと雖も、眞摯にして眞面目なるは、太だ可なり。

◉ペンにて書せる新年葉書は、近年漸く多きを加へつゝあり。筆墨を用ひたるよりも、禮意の粗略なるやに見ゆる事、譬へば、鳥打帽を戴きて先輩の新年宴會に參列したるにも似たり。新年葉書は、單に通信に非らず、禮意なり。此の頃の世間は、禮式には未だペンを用ひず、專ら筆墨を用ふればなり。

◉然れどもペンの新年葉書も亦た必ずしも禮意として受取られざるには非ず。禮裝を尤も嚴重に考へつゝある官衙に在っては、洋服また羽織、袴の語を用ふること珍らしからず。洋服ならば脊廣にして羽織袴に對抗す。變態なりといふと雖も、變態は行はれつゝあり。此の意味に於て、ペンの新年葉書は、脊廣を以て、羽織袴に對抗せしむるものなるべし。

◉禮意の表現は、多くの場合に於て、慣習を重んずるは、人情の自然に發す。强ち輕便ばかりを主とす可きには非ず。吾輩、平生の文章は鉛筆を主張す、然れども新年葉書には、尙ほ筆墨を用ひたるを、自分から快しとするの情あり。

◉新年葉書は、一般に、筆墨、ペン、鉛筆、各種各樣、人の思ひ〳〵に、錯雜して用ひらるゝの期甚だ遠き乎。或は無き乎。吾輩は、其の甚だ遠からざる可きを思ふ。

◉電報の賴信紙に、毛筆を强用せしめたるも、既に一夢となりぬ。而して平生の書信及び新聞社の原稿などに、鉛筆を常用するに至れるも、また近年の事なり。世人は漸く鉛筆の文章に見馴て怪しまざるを致す。今ま、萬年筆、盛んに流行す。吾輩を以て見れば、遠からずして、鉛筆全盛の時期來らん。其の時は、鉛筆の年賀狀、續々として現はるゝならん。

◉鉛筆は毛筆よりも、ペンよりも、輕便にして有力なり。然れども其の形式の尤も低級にして、簡素なるが爲に、其の全盛の來るは、尙ほ多少の歲月を要すべし。然れども其の全盛の來りて、人々萬年筆を措て、

鉛筆を携帯するを常とするの時、勢、鉛筆を以て、新年葉书を執筆するに至らずんばあらざる可し。

其十二

◉吾輩、繪葉書を好み、經歷、見聞するところの人物、山川、名所、故蹟、或は世事、各種の記念に至るまで、繪葉書を以て、網羅するを期す。而して新年葉書は、字と書たるとを問はず、別種の繪葉書として、いろ〳〵の意味に於て、其の粹を抜きて、年々、これを蓄藏し、人の友情と趣味とを樂しみつゝあり。

◉「趣味の人」と見えて、更に趣味を凝らすと無く、極めて簡單なる新年葉書を、年々、送り來る者あり。小川未明、松居松葉の如き、共に、何等の趣向ある可くして、唯だ尋常の賀詞を活刷するのみ。然れども紙質を擇べると、宛名を自記せるに於て、隱約の間に其趣味を見ること、手に取つて見れば『無地と見へて、遠く見れば縞を見する織物地』の如きものあり。

◉野上臼川は書に巧なるに、新年葉書には、唯だ謹賀新年を細字を以て、高く右の隅に掲げ、姓名を低く左の隅に置く。一の書を用ひずして、紙面を新ならしむるところに、彼の趣味見ゆ。

◉何等の趣向を凝らさゞるも、賀の一字、特に「愛たく」の字を用ひたるは、博士吉田東伍を、吾輩の知れる唯だ一人とす。「新春之吉慶不可有盡期候」といふを冒頭として、俗用文の賀詞七十一字、其の間、更に一字の平假名を交へず、紙面の中央に、小さき活字の漢字ばかりを以て、恰好能く記したるは、博文館の横田地巴、これも亦た珍らし。

◉年々同形式を用ひて、暦年の一字を變更するばかりの人も亦た、「趣味の人」の中に少しとせず。高島平三郎の如きも、何等一句を著く可くして更に著けず。

◉凝りに凝つて、通の通、大通なるものは、內田魯庵なるべし。粹の極、無粹に似たるものあるが如く、時には彼の新年葉書は、趣味淺き人には、彼の趣味を味はしめざるやも知れず。織田信長は、足利將軍の厨人を用ひて、料理を試み、第一等、第二等を過ぎて、第三等に至りて、舌を音さして賞玩したりと傳ふ。世界には信長少しとせず。魯庵の葉書は、第一等に屬す。信長には通用せざるものなるべし。

◉年始狀に、自作の詩歌を附記する者また一體とすべし。博士江木冷灰の如き、豫め新年の詩を賦する者は活刷し、時には興に任かせて、紙に臨んで一首を記し、或は一句を著けたるも興味あり。鷲尾順敬の去年

の口吟を記せるに、往く年を、行くに任かせて、來ん年に、また爲すべきを爲さんとぞ思ふ」

●新年葉書に、自己の寫眞を載せたる、或は、自己の家屋、會社等を寫眞し、或は過去一年の事業を報告したる、いづれも、消息に併せて自己を表現したるもの、此の種の葉書は、意匠、一番の工夫無かる可らず。

●雜誌「ニコ〳〵」の經營者桑門澡太郎の寫眞葉書を見れば、殊に、新年なるに、聊かも笑はず、大眞面目なるは如何に。而して猛烈果敢を口にする吉岡將軍の賀詞は、文章、恭々肅々、其の平生、禮讓の丁寧なるを見るが如きなり。

●高島米峰が、本名を以て、圓と自署したるに丁重の意なる可けれども、圓は彼の人物を表現せず。吾輩は、米峰の名を聞く時に、氣燄萬丈の彼と、彼れの故郷、越後の米山の峰巒なると、莽蒼たる日本海の波濤と、吾が眼前に浮び來るを覺ゆるなり。

●人物論者久津見蕨村が、息忠の本名を記して、左隅に二三本の蕨を描き、村の一字を廣く輪廓と爲したるは、蕨村と利かせたるなるべし。新年に蕨は因縁無し。因縁無きが故に、人をして、蕨を描ける所以を考へしむならん乎。

●飄忽として、奇想、天外より落つるの感を爲さしむるものは、大町桂月なり。彼は、其の小兒の描ける、突梯なる繪葉書に、賀詞の一句を書して送り來る。彼は、自から奇を求めずして奇を致す。彼は、此の如き人物なり。

●吾輩も亦た小兒の新年葉書を愛看す。偏ねくこれを保全して他日に傳へ、其の自傳に換へしめ、以て、成長の後に、其の變遷、發達を卜せんとするなり。此の意味に於て、新年葉書は、曆となす可く、寫眞とも見るべし。

●世の所謂大官貴人は、年始狀は紋切型をなすのみ、特筆するを要せず。年始狀の特筆す可きは、自から「趣味の人」に屬す。

●男石黑忠悳は軍醫總監にして、柴田家門は前文部大臣なり。前者は、一年間の信書を調査、統計し、後者は、數年の新年葉書を悉く自書すと傳へらる。或はいふ、柴田は書し畢りて、一々、禮を爲すこと、目前、賀詞を述ぶるが如くすと。此の事、新聞に見ゆ。彼が一々、一枚毎に、禮を爲すやは知らず、一々、自書するは事實なり。

●講道館長の名を以てする嘉納治五郎先生の新年葉書も亦一異彩を有するものなり。謹賀新年に次ぐに十一日に於ける講道館鏡開き式の次第書を以てす。過去一年の事業、或は、此の年の豫程を記するものは有り。此の如く、新年に於ける始業式を記して、生々活潑の氣分を催さしむるものは稀なり。

◉貴人にして、往々、新年賀詞に答禮せざるものあるは宜しからず、新年葉書は年頭の敬禮なり。元帥といへども、二等卒の擧手注目の禮に答へざるは無きなり。

其十三

●吾輩、旅行を好み、北馬南船、閑日少し。時には、東西南北の人を以て自から任ずる事もあり。新年に及んで、客游中の知人、或ひは旅館の葉書を得る毎に、一年の游踪、悉く心頭に來る。一室の中、忽ち萬里の思を爲す。

◉十年前、或は、綠樹の蔭のテニスコートに握手したるのみにして、年々、新年葉書を交換する者あり。爾後、亦互に相逢はず。然れどもこれに依つて當年の感興、年々、春と共に新なり。仙臺の古川邦彦は其の人なり。

●吾輩、一昨秋、病を霞浦の須田方塘、及び高安綠風の家に養ひし時、一日、秋晴に乘じ、方塘、綠風と共に、舟を艤して、魚屋に游ぶ。魚屋の主人は、宮本平助、撲々たる田舍翁なりと雖、其の生の、自から風流爛漫たる、また天地一沙鷗ならずんばあらず。彼は、屢々、再游を促がせども、未だ機を得ず。彼の樸訥なる新年葉書に對すれば、枯蘆茫々、巨帆山の如くなるが往來し、鯉魚、潑溂として網を出でんとして、夕陽に映ずるの光景、歷々として眼に在り。游意の勃々として動くに禁へず。

◉京都の島文次郎は、「趣味の人」なるべし。彼の葉書には、唯だ、尋常一様の謹賀新年を記するのみ。然れども京都銀閣寺畔と記せるは、東山の秀色を思はしめ、自から彼の生活の閑雅なるに想到せしむ。

◉大阪の本山彦一、眞に東西南北の人といふべし。彼ほど職務に精勵し、また併せて旅行に力むる者を見ず。四年前、彼が、羈旅述懷を附記せるの新年葉書は、彼の平生を象徴す。其の詩にいはく、三抵ニ朝鮮一再滿州、嘗作ニ清國汗漫遊一。非レ官非レ商又非レ僧、所到隨地儘淹留。今夏避レ暑入ニ威府一、一轉歷覽ニ沿海洲一。長白山陰積ニ朔雪一、黑龍江樹生ニ涼秋一。飈車廿日無人地、足溫

萬里滄溟流。老來耽樂君休ㇾ笑、一片猶存㆓天下憂㆒。

◉今、繪葉書の發達の非常なるを以てして、地方色を象徴するに足るの逸品、亦た少からず。例へば日光の紅葉及び高山植物、或は、濱名湖の水藻、靜岡の漆葉書の如し。新年に、地方色を象徴す可き繪葉書を送り來る時は、其の人と背景と、趣味と精彩とを以て、悉く人の眼前に躍如たるべし。

◉吾輩、地方色及び游踪を象徴すべき新年葉書を蓄積せば、以て、興趣多き、新年の「旅行歌留多」となすに足るを思ふ。歌留多は新年の興味なり。而して美なる葉書はカルタの兩絡を表現するに足らずんばあらず。

其十四

◉年始狀といへども趣味を凝らすは、新年葉書にあり。新年葉書は、今に於て、世界的色彩を帶ぶ。先づ其の文體の、或は、漢文、國文、國語文、俗用文、擬古文、いろ〳〵さま〳〵の古今の文體を含有せる、或は漢字ばかり、假名ばかり、或は、羅馬字を用ひたる、書體も亦た眞行草、一致すること無き。新年葉書に對すれば、人をして、自から『世界の日本人』たるを感ぜしめずんばあらず。唯だエスペラントは未だ多く用ひられず、エスペラントは世界語と稱すれども、今に於ては、未だ專門語なればなるべし。

◉新年葉書の文字、文體の世界的なると共に、これに依つて表現せらるゝ趣味も亦た世界的にして、古今、東西を網羅せざるは無し。古雅あり、ハイカラあり、或は學術的、或は藝術的、其粹なるものに至つては、直ちに、今日の文明と世相とを象徴するに足らずんばあらず。

◉趣味の人は「趣味の葉書」を作る。書家、考古家とばかり言はず、書趣詩趣を解する者、最も「趣味の葉書」に沒頭せざるは無し。「趣味の新年葉書」は、則ち趣味の人の、年頭の試作ならずんばあらず。

◉趣味の新年葉書は、年々、進んで窮まるところを知らず。歲の干支をいふは、今、一切の學術、實用に適切ならず、唯だ「趣味の葉書」の兼題として、勅題と共に、年々、活氣を生じて、趣味の新年を涵養しつゝあり。而して此の風潮は、「趣味の人」の間に局限せらるゝこと無く、やがて社會の各方面に浸漸して、終に、家庭の年中行事の一となるに至らずんば已まざるべきなり。

◉「趣味の新年葉書」の製作、印刷の技術も亦た、漸々

進境を發揮しつゝあり。或は漆、或は大根、或は木材、石材、今に於ては、畫筆の妙あるに非ずんば、尋常印刷術は、其の意匠を誇るには足らず。

◉今、吾輩の卓上に在るものばかりを以てするも、「趣味の葉書」は、すべての意味に於て、意匠百出、光彩陸離、一々これを記するに堪へず。偏へに之を愛玩して、以て、吾が新年の氣分を活潑ならしむべし。

◉吾輩を以て見れば、「趣味の新年葉書」は、其前途、やがて、西洋の『クリスマス、カード』に該當するに至らずんば已まざるべし。基督教は將來、如何に發展すべきやを知らず。然れどもクリスマス、カードの趣味は、知らず識らず、日本の全面を蔽ふに至るべし。

其十五

◉吾輩は、年々、必らず歲晚の中に、必ず、逸早く、新年葉書の二三葉を落手するを常とす。此の如きは、發信者の氣早きに過ぐる乎、郵便局の過失に屬する乎。兎に角、昔に無くして、今に見る新年趣味の一たらずんばあらず。

◉今年は諒闇の春なれば、賀詞を交換す可らず。吾輩は、則ち、年始狀の趣味を論じて、年始狀と爲す。

◉今、吾輩は、未だ舊年なるに、「年始狀」を稿しつゝあり。此の稿、印刷せられて、讀者に見ゆるは、まさに舊年の中に在るべし。是れまた一種、歲晚に、新年葉書を配達したるに類せずとせんや。

十二月五日稿了。此の日、吾輩の誕辰に當る。幸に、土曜日に當り、兒女亦た早く學校より歸り來る。園中の紅葉樹二三本、小木なれども、まさに爛紅を呈し、絶好の午晴に映發して、色彩の明美、言ふ可らず。筆を留めて、靜に愛看すれば、閑雅の氣分、すべて年始年末を忘れしむるものあり。

黑頭巾記

名古屋私論

青柳有美

熱田を有名にしたものに、草薙の御劒がある。尾張を有名にしたものに、太閤秀吉がある。而して名古屋を有名にするものに金の鯱鉾がある。更に近年に至り名古屋を有名にしたものは、明治四十三年の關西聯合共進會であるが、以來既う一ト昔も半分過ぎて五年になつた。最近に於て、最も名古屋を有名にしたものを擧げると、七十五萬圓の三井物產支店手形不正事件と稻永新田遊廓地疑獄事件と、それに、頗る最近に起つた電車燒打事件とである。

名古屋からは、加藤外相も出て居る。權兵衞內閣の跡に海相となつた八代中將も名古屋の人であるが、世間は爾んな事を餘り氣に留めずに、名古屋を一大伏魔殿ででもあるかの如くにのみ云ふてる。然し名古屋は決して罪惡の養成に格好した土地柄であるんでも何んでも無い。人口は明治四十三年以來、一年約一萬四千六百乃至一萬五千八百宛を大正元年までに增加してるが、犯罪件數は却て減少し、明治四十三年に一萬一千九百十六件なりしもの、同四十四年には九千六百二十三件となり、更に大正元年には八千九百六十四件にまて減少して居る。名古屋が若し犯罪の誘發に好適の土地柄ならば、此く犯罪件數が人口の增加と逆比例を示しそうな筈がないては無いか。

一　何故に來る耶汚名

名古屋の人口は、明治四十一年以來之を他の都市に比較すると、遙に急激の增加を遂げつゝあるものである。京都は同年に於て一〇〇に付八・三を增加せしを一例外とし、其他每年僅に二・五乃至三・五宛を大正元年までに增加し來れるのみなるに、名古屋は三十五年

より四十年まで漸く一〇〇に付毎年二・七乃至三・四五宛を增加せる形勢なりしを、四十一年以來俄然一變し同年よりは殆んど從來に倍する增殖率を示し、毎年一〇〇に付三・四七乃至五・四七宛を增加して大正元年に及び、明治四十一年より大正元年に至る平均增殖率は一年人口一〇〇に付四・一七となるのである。産業發展の大に見るべきものありとせらるゝ大阪の人口增殖率さへ、明治四十一年より大正元年に至る每一年の平均一〇〇に付漸く二・六なるに過ぎざるを思へば、同期間に於ける名古屋一年の人口增殖率平均一〇〇に付四・一七を示す計數は、名古屋が如何に急激の進步を遂げ來れるかを談るものと云ふべきだ。

此の點から云へば、名古屋は、都市の成り上り者である。成り上り者の噂は兎角世間の口の端にのぼり易い。若しも三井物產支店の不正手形七十五萬圓事件が假りに東京、大阪、京都乃至は橫濱、神戶あたりに發生したものとすれば、事件だけは、假令、天下を驚かしたにせよ、之により世人をして都市そのものに注意せしむるやうな事は無かつたらう。遊廓疑獄事件亦然りである。成り上り者の鈴久に何か一寸した不正行爲があると、それが僅に指輪一つの問題でも、忽ち世人の耳目をして聳動せしめるでは無いか。

古い西洋の諺に、リツトル、ポツト、スーン、ホツトといふ語がある。小さな釜は早く煮え立つものだとの意である。場面が廣ろいと、少しばかりの事件で容易に煮え立たぬが、小さな場面の土地は、一寸した事件があつても、直ぐに煮え立つて來る。稻永新田遊廓事件なんか、東京のやうな大場面の土地では、到底、疑獄呼ばはりをして騷ぎ立て得られる性質のもので無い。唯、名古屋が狹い場面の土地柄だけに、那んなものを問題にし、檢事局も之に檢擧の手を下す氣になつたのである。然し、場面が更に一層下つて頗る狹い小都會になると、如何ほど煮えくりかへつたところて、その騷ぎの程度が又頗る小さいから、他に大きな波動を與へ得ぬが、名古屋は不幸にして中都會である。一旦煮え立つて騷げば相應に大きい騷ぎになる。東西兩

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記をふ

澁川玄耳先生著

藪野椋十

日本見物

間拔文學!!
本書を讀むで腹の皮をよりつゝ、椋十の痴思痴想愚案愚考を憐みて、讀者諸君は如何に御自分の利口で發明で且エライかを感謝したまへ
阿呆文學!!

一は著者が日本漫遊一は著者が世界漫遊の紀行文にて滑稽諷刺觀察の警と輕妙なる筆致とは未だ此の二書の如き者を見ず、と各新聞の筆を揃へて賞賛せられたる稀世の名著實に是れ現下の文壇に缺如せる唯一の諷刺文學なり

春陽百穗柏亭三畫伯の挿畫
三六版洋裝
箱入頗美本
紙數五百頁
定價壹圓
送料八錢

藪野椋十

世界見物

增補 縮刷七版發賣

▲內容
英國見物 米國見物 獨逸見物 佛國見物 伊國見物 露國見物 瑞國見物 支那見物

不折春儀未醒孟郎樂天五大畫伯の挿畫外寫眞版澤山
特製箱入美本
紙數六百餘頁
特價壹圓拾錢
送料八錢

紅燈の下

新聞記者としては奇才縱横、一葉茶屋の女將としては怪腕無比、斯くて嬌名を天下に馳せたる著者は今や起つて劇壇に新旗幟を樹てり、女史の運命は數奇なるかな、女史嚢に『一葉草紙』を著すや洛陽の紙價爲めに高し。今又舞妓寺島家夢子と共に『紅燈の下』に筆を接じて此書成る。編中收むる所、小說あり、紀行文あり、日記あり、社會人生觀あり、婉麗の筆致、奇警の觀察、近來稀に見る快著也。

內容
有愛の行脚◎氣まぐれ日記◎小說溫泉宿◎戀と女◎男衣裳の事◎以上京子
金春日記(夢子)

四六版特製函入
天金三百餘頁
定價金壹圓
送料內地八錢

…京子…夢子共著
特製…
定價九拾五錢
送料內地八錢

恒川陽一郎氏著

自敍傳小說 旧道

自敍傳「舊道」は言ふ迄もなく著者が戀の曲想錄也著者が名妓萬龍との同棲は實に天下の貴公子をして尻へに瞠若たらしめたり。彼の箱根洪水以來醸されたる著者夫妻の白熱的感情は深刻なる情緒の運び、行一行思はず肺腑を刺すの快あり。現文藝の新潮之を措いて他に何をか求めんや。

內藤千代子著

生ひ立ちの記

好評五版
定價七拾錢
送八錢

泉鏡花先生著

小說 袖垣

定價金七拾五錢
送料六錢

(中付四の一)

發行所 東京神田區錦町一丁目十九番地 小川誠文堂 振替貯金口座東京六二…

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告は掲載謝絕す

獨國ベルンハルディ將軍の

世界を驚倒せる怪著！

早稻田大學教授 法學博士 浮田和民監修
早稻田大學教授 文學士 煙山専太郎校訂
早稻田大學編輯部譯述

皇國を誤り 萬人を殺す

獨逸の主戰論

▲最新刊▼

▲附 英國諸名士の駁論▼

菊版五百餘頁

正價金九拾錢

郵税金拾貳錢

嗚呼此著、有史以來大戰亂の張本たる獨國**戰略の筋書**なり。人或は戰爭の餘りに突飛的なるに驚駭して獨逸の眞意を疑ひ或は其擧措の甚だ狂暴なるを見て文明國の面目の爲に悲む。而かも本著を見れば今回の擧は獨逸の宿論にして豫定の行動たり。其故何ぞや。開戰以來獨逸の爲すところ殆ど全く本著の告白に吻合すれば也。是れ豈獨軍の樞機に參せる本著者が**豫定の敵國及び交戰方法**を赤裸々に告白せし者に非ずや。是れ世界の耳目翕然として本著に集注し苟も文字ある者の之を手にせざる無き所以なり。本著は有名の政學者兼史學者トライチユケの軍國主義を根本論據と爲して巧に開戰の必要及び其手段を絶叫し、立論堂々、考據該博、殆ど讀者を魅するの概あり。獨國の誤まられたる豈其故なしとせんや。今や我國は獨逸と戰を交へ過般青島を攻陷せりと雖も**戰局の前途**は遼遠なり。獨逸開戰の目的及び眞意を知るの緊要なる多言を要せず。愛國の士の三讀を切望す。

發兌 東京市牛込早稻田 振替一一二三番 **早稻田大學出版部**

（賣捌）神田 東京堂 京橋 北隆館 日本橋 至誠堂 大阪 盛文館 其他

（中付四の二）

新春文壇の代表者

文章世界

新年大附錄

- ▼紛擾（長篇） 中村星湖
- ▼地獄へ（脚本） 吉井勇
- ▼刻々の思ひ 正宗白鳥
- ▼櫻の實の熟する時 島崎藤村
- ▼泥沼（クウプリン） 昇曙夢
- ▼憎み（長篇） 田村俊子
- ▼南の國 田山花袋

其他の執筆諸家

高村光太郎　生方敏郎　土岐哀果　前田晁　三木露風　高田蝶衣　武田鶯塘　福士幸次郎　加能作次郎　西村渚山

東京本町 博文館

新年倍大號

本號限り金四十錢 郵税三錢五厘

- ▼現代作家評論……中村孤月
- ▼碎かれざる心……阿部次郎
- ▼時評 長谷川天溪
- □ケルト復興の新運動 厨川白村
- ●新詩社當時の回顧……江南文三
- ▽春の目ざめ（抒情書）……齋藤與里
- ▽テンペル夫人……有島生馬
- ●俳句らしからぬ俳句……荻原井泉水
- □大正四年文壇の觀測 岩野泡鳴、西出潮風、德田秋江、三井甲　大須賀乙子、…其

(中付四の三)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

十二月廿日出來
本誌二倍大廿二錢

新年號

前金郵税共
半年分 一圓七十錢
一年分 三圓二十錢

實業之日本

決死的に奮闘する歐米人活動の源泉……實業之日本社長 增田義一

▲現代學生の缺點……一木文相

▲現代青年論……澤柳政太郎

▲人心歡體論……後藤男爵

▲愛兒教育法……髙木兼寬

男一匹（二十世紀の「男一匹」として必要なる處世上の大教訓）法農學博士 新渡戸稲造

◎**世界大戰の前途と我國民の覺悟**……早稻田大學長 高田早苗

實力の福音……法相 尾崎行雄　德富猪一郎　前農相 仲小路廉　堀越善重郎

▲愚人に支配さるゝ今の我社會……第一生命保險専務 矢野恒太

▲同化する國民と同化さるゝ國民……法學博士 蜷川新

樂しき生活法……森村市左衛門　前田慧雲　大倉喜八郎　山室軍平

◎**小僧より取引年額七千萬圓となつた大貿易商**……薮柑子

科學的人物採用法（歐米最新の大勢たる能力發揮法の應用）……貯金局長 下村宏

▲廿名家逆境時代……記者

▲好きな店員……名流婦人

▲對支貿易家評論……楚水生

▲實行簡易日光浴……田代博士

日本富豪の解剖（我實業界に活動せる中心的名士が本誌の爲に我現代富豪を縦横論評も、十頁餘に渉る大論文）

發行所 東京京橋南紺屋町 實業之日本社　振替口座三二六番　賣捌 全國各地書店

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

（中公四の四）

■雜誌界新年號の壯觀■

新評論

■本號に限り
定價參拾錢（郵稅三錢）

■半年分倍號共 金壹圓〇五錢
■壹年分倍號共 金壹圓八十錢

■大正三年の人及び文明……記者
■現象と人及び感想（現代思想界の中心人物）……

■現代青年の氣風と國家の運命……高須芳次郎
■現今の評論家……石坂養平
■文藝に於ける普遍價值……山田檳榔

■先月の主要なる創作…
■新聞劇評家の態度…
■大正三年劇壇の印象 石川辛三郎
■鶴屋南十郎君へ…湯鶴
■最近歌壇の傾向…小川水明
■美術界時評…河野桐谷

□新年號附錄□

▼霧……豊島與志雄
▼小梅の母…吉田絃太郎
▼戯曲邪宗……林和
▼妹……ボリス、ザイツエフ作 尾瀬哀歌
▼ねがひ…中谷德太郎
▼狂氣の日 江馬修
▼夕闇…藤原秀雄
▼又兵衛の夢…河野ゆづる

■女流作家の運命判斷 豊子
●平塚明子 ●岩野淸子 ●田村俊子
●與謝野晶子 ●岡田八千代 ●長谷川時雨

■實行し易き中流生活の改造（四十餘名家）

●三面記事を透して見た社會…（松內冷羊 千葉龜雄）
■永代靜雄 ■松本雲舟

▼新年の女……横山黑頭巾
▼擁書山莊隨筆……千葉鑛藏

□新しき寢しき心…金子薰園
□相婦哀曲……富田碎花
□プシユキンと運命の戀…浩次
□疲れを求むる心…尾上柴舟
□裏日本の自然と人…藤島源藏
□生のなやみ……小野小峽

浮萍の如くに（檜屋おせん） 高須梅溪

▶小說 犬……エッレンベツハ
▶小說 帽子……大谷德太郎
▶小說 永遠の夜 堀幸壽
▶小說 雪……菊地武一

■東京淺草區下平右衛門町 岡村書店 ■電話下谷四二〇四 振替東京一九〇六五

（中付四の五）

岩村透男爵序文
薄井秀一先生跋

好評
三版

朝倉文雄先生装幀
名取先生畫伯口繪

船ト人

太刀雄著

東京朝日新聞連載

新著「船と人」は「海に住む人々の現實の曝露」である其マドロス生活を披瀝したる哀史である弱者の心理の偽らざる告白」である其の愈圓熟し來れる著者の筆致は其豐かなる趣味情藻を充溢せしめ若き著者が思想理智、觀照を飾らず偽らず表現せり。蓋し新年の好讀物ならむ

■函入クロース製美本紙數四百二十餘頁
挿口繪三色版圖及寫眞版十二葉入
定價壹圓三拾錢 ■郵稅金十二錢■

發兌■ 東京神田錦町 振替東京六二一九 中興館

誓言す
ナポレオン傳中の
最大雄篇
千古不朽の傑作!!

大帝那翁

訂馬劒禪 五來素川著 第一卷出來

菊判特製最美本全四冊 第一卷 精麗口繪二葉挿入
總頁數一千五百餘頁 圖版地圖五十餘圖入
正價金壹圓拾錢 郵送料十二錢

著者滯歐正に十年、專ら意を那翁の研究に注ぎ、歸朝漸くにして本書を成す。筆を悽愴たる血の革命に起し悲喜交々迫る生立より立身の經路、性格德行、熱血の戀愛、壯烈の戰鬪等全卷血と淚の結晶品たり。新春の快風を起すもの只此一卷あるのみ

東京市日本橋區本石町一丁目 養賢堂發兌

■發賣所 東京市神田區錦町一の十九 振替口座東京六二一九四番 小川誠文堂■

新聞社の完備せる通信機關は、忽ち此の波動を天下に傳へて了ふ。名古屋が今日までに天下に博した汚名は發展的の中都會たるの故に受けた煩らひである。小さな室は四壁が餘り近かいので反響を起し得ぬ、大きな空漠たる處には反響がない。たゞ、ニコライ會堂とか帝國議會議事堂とか位な大きさの中くらゐな室のうちにのみ最も激しい反響が起り、ガヤ／＼騷々しくなるものである。名古屋の汚名は、名古屋が中都會たるの故に起す反響であるとも觀るべきだらう。

二　不正手形と疑獄事件

名古屋が、斯く中都會たるの位置を占め、本邦の人文進歩に伴ひ、急激なる發達を遂げ得るに至つたのは全く地理の賜である。今更ら、事新らしく云ふまでもなく、表日本の要部には、關東平野と尾濃平野と畿内平野との三大平野がある。就中、畿内平野は最も早く開發せられ、次て關東平野の開發を見るに至り、この兩平野に於ける人口は漸次稠密を致し、人をして生活難を覺えしむるまでとなり、此の兩平野の代表的地點たる關東の東京、畿内の大阪京都等の都會には、爾後新に多くの人口を詰め込む事が容易でなくなつた。是に於てか、生活の向上を欲する者は、大阪、京都、東京以外に於て優等生活を營むに適する地を求め、之に入り込むのだが、尾濃平野は表日本三大平野の中にあつても秀逸の沃野で、畿内平野や關東平野に比し、優るとも劣らぬものがある。然るに、この平野のみは久しく閑却せられて開發が遲れた結果、人口が稀薄で是處に優等生活を營まうとすれば、それは關東畿内兩平野に於けるよりも頗る容易である。水の低きに就く如く、人口は生活の容易にして併も優等に之を營み得る土地に向つて注ぐのが法である。生活向上の渇仰者が、近年交通機關の整備すると共に、この久しく閑却せられたる尾濃平野の代表地點たる名古屋に翕然として集り、名古屋をして急激の發展を遂ぐるに至らしめたるもの、豈に偶然ならんやである。況んや、名古屋は現時の交通系統から觀察すると、海上は伊勢灣によつて四方八面に通じ、又陸上交通機關の整備によつ

て日本の中部を經濟的に制し、更に關東平野と幾內平野との中央に介在する地理的位置を利用し、尾濃平野の生產を提げ、其經濟的威力を、關東平野及び幾內平野の東西兩方面に揮ひ得るの便あるに於てをやだ。是れ猶ほ、テウトン民族の獨逸が、露西亞と佛蘭西との間に介在し、東スラヴ民族と西ラテン民族とを威嚇し得る地の利にあるが如しだ。統計によれば、明治四十一年には名古屋市本籍人口二十四萬八千二十人に對する現住人口三十七萬四千一百四十六人で、現住人口は本籍人口を凌駕する僅に十二萬六千一百二十人に過ぎなかつたが、大正元年には本籍人口二十一萬〇五百八十八人に對する現住人口四十三萬五千二百十九人となり、本籍人口の倍以上に現住人口が上つて居る。以て名古屋近年の發展なるものが、如何に外來人口によつて致されつゝあるかを知るに足るべしてある。

人は少し調子づいて來ると、兎角、成功を急ぐ傾を生じ易いものである。近年の名古屋には其の傾がある又多く勞せずし早く成功を收めんとする念を萠すものてある。近年の名古屋には其の念がある。名古屋に居住する個人も亦、此の傾と此の念との感化を都市そのものの氣分から受けて、手ッ取り早く無雜作に富を作りたいとの氣分になる。旭遊廓を稻永新田に移轉すべく發せられたる縣令に其端を發する疑獄事件は、努力を要する事少なくして併も發展を求むるに急なる氣分が、名古屋に磅礴たるを明に表白したもので、遊廓移轉は或る階級の論者により誤まり傳へらるゝ如く或る一部の人々の懷を肥さんとして必ずしも目論まれたもので無い。然し、之を利用して築港方面に急激なる人爲的發達を遂げしめんとしたのは事實である。これに個人の致富を急ぐ念が、横から手傳つたものだから、遂に疑獄とまで稱せらるゝに至つたのである。又、三井物産の七十五萬圓不正手形事件にしたところで、矢張、名古屋が調子に乘つて急激の發展を一氣に遂げんとして悶きつゝあるのを見、之に釣り込まれて一氣に富を作らんとして個人が悶がいた結果に外ならぬ。

三　猿眞似の電鐵燒打事件

名古屋は重に近年に於て急速の發展を遂げ、同市の人口が著しく增加すると共に、商工業の發展も亦素より驚くべきものあり、大正二年度に於ける主なる物品販賣業並に製造業の營業人員を明治三十八年度に比較すると、この八ヶ年間に、販賣業は一倍六、製造業は一倍四、更に卸賣並に小賣金額に於ても同八年間に、卸賣は二倍八、小賣は約二倍に增加し、手形交換等の如きも、明治四十一年に一億七千五百四十三萬圓なりしもの大正元年には二億八千三百六十二萬一千圓に增加し、其枚數の逐年增進して行く比率は、遙に東京及び大阪を淩駕するほどて、如何にも其發展は目醒ましいが、如何せむ、名古屋は都市としての成り上り者てある。成り上り者には、之を個人に就て觀ると直ぐ解るやうに、兎角、舊家の眞似をして、之と傲奢を競ひたがる癖のあるものだ。華族の家ては主人を『御前』と稱ばせると聞けば、成り上り者の癖に急に家内に令して、『御前』と稱ばせて見たり、某公爵家の別莊が雲を突くばかり某の避暑地に聳へてるのを觀ては、之と輪奐の美を爭ふ如き一大別莊を其附近に建てゝ見たがりなぞする。都市としての成り上りものなる名古屋は恰度それてある。東京に燒打事件があつて頗る痛快の沙汰だつたと聞けば、名古屋でも燒打を一つやつて見ねば何となく東京に對して幅が利かぬやうな感じになる、憲政運動騷ぎの頃に、名古屋にも燒打が初まるだらうと問ふ者があれば、誰でも皆な『名古屋人は東京の人間と違つて意氣地が無いから、能く燒打なんかやるものか』と答へられるが例だつた。これが、餘程、其當時名古屋を刺戟し、殊に名古屋に在る不良少年の心を甚しく刺戟して、この刺戟により萌した或る一念が、最近の電車賃問題運動の開始せらるるまて、全市の懷中に抱かれて潜在して居たものらしい。『名古屋だからとて東京に敗けて堪るもんか。先方が江戸ッ子なら、憚んながら、此方徒は中京ッ子だナモ、燒打ぐらゐて遲れを取るキャモ』と、成り上り者のお大盡が、華族の別莊に向ふを張つて一大別莊の建築に取りかゝつたやうに、不良少年が先頭て、あんな騷動を惹き起すに至

つたものである。大阪くらゐの普代都市になつてしまへば、つまらぬ事に力んで東京の向ふを張らふなぞとの氣には、馬鹿々々しくつて成れぬから、却て焼打事件など云ふものは起らぬのてある。名古屋に最近に於て、電鐵焼打事件の起つたのは、東京の猿眞似をしさへすれば、それて大都市たる面目を維持する事が能きるとの淺ましい成り上り者根性があるからて、これは名古屋人に意氣地のある證據と云ふよりも、寧ろ意氣地の無い證據で、都市として名古屋には大阪ほどの自信に乏しいのを立證するものと云ふべしだ。

都市としての名古屋に、自信の無い如く、名古屋の新聞紙にも亦自信がない。東京の新聞紙が、社會を指導するのが新聞紙の本務なるを忘れ記者の多くが社會の輿論を指導せずに社會の愚論に指導せられて盲動するのを見、エライ新聞記者は總て東京の記者の如く社會の愚論に指導せられて活潑に運動せざるべからざるものと心得、僕も六年間此の心得で社會の愚論に指導せられ恰も日獨郵報及びヂヤパン・ヘラルドのオストワルド氏が獨逸の新聞記者たる悲しさには心にも無き排日論を稱道せざるべからざりし如く、心にも無き硫安撤廢演説なんかをやらかしたるが僕は名古屋市民は化學工業奬勵の爲め硫安加工の惡臭を忍び同社を成功せしむべきもの也と信ずる」社會の愚論に歡迎せらるゝ如き言論を試み愚論を煽動したものだから、愚論は愈々勢力となり、不良少年は之に元氣を得て、遂に、かの電鐵焼打事件を惹き起すに至つたものである。之に、今太閤を以て任じてた奥田正香翁の退隱後、その勢力の後繼者たらんとし、明治銀行或は電鐵より奥田系の正統後繼者たる神野系の勢力を驅逐せんとして悶く一派の連中が、隱然、手傳つたものだから、愈よ騷ぎは大きくなつたものである。

四　努力せざる都市

名古屋が近年に於て急激なる發展を遂げたのは、尾濃平野が畿内平野及び關東平野よりも遲く開發せられた爲めで、今日までの發展は主として天然の恩惠豐なるの致す處である。然し、昨今の如く人口が箆棒に增殖して來ては、一人當りの天惠が日と共に減じて行くわけになる。從て、今後の名古屋は、天然の恩惠を餌にし交通機關の便を利用し人口を四方八方より吸收して、之により自然的の急激なる發展を遂げ得難くなる。是に於てか、今後の名古屋は、自ら大に努力せねば、決して發展を期し得られぬのであるが、現在のところでは、假令、多大の努力を注がずとも猶ほ依然發展しつゝある。これば、名古屋をしてお調子に乘り、無爲にして早く急足の進歩を遂げ得たしとの念を萠さしむる所以だ。『お調子に乘る』とは、換言すれば『惰力に依頼する』との意である。天然の恩惠で急激の發展を遂げた名古屋には、その恩惠が漸く薄らぐに至れる今日でも未だに從來の惰力が殘つてるので依然發展して行くのだが、惰力は惰力

である。永久に續くもので無い。新らしい力を新に加へぬ限りは、そのうちに運動は止つてしまふ。一寸も動けなくなる。お調子に乘らうにも乘れなくなる。お調子に乘つて努力するを知らざる名古屋の危機は實に玆に潜んでるのだ。名古屋の進歩實に驚くべく、忽ちに京都を凌駕するものあるべしなどゝ稱へ得々たるは、日本が維新以來長足の進歩を爲せるのみを知つて、歐米が最近五十年間に日本よりも更に長足の進歩をしてるのに氣が付か無いでる輩と同じてある。

表日本の三大平野のうちで最も早く開發せられし畿内平野のうちでも又更に最も早く開發せられた京都は、不朽の好風景を天より賦與せられあるに拘らず、天然の恩惠にのみ依賴してたんでは、最早や今後の發展覺束かざるに氣が付いたものだから、最近兩三年以來決然として努力により發展すべく心懸け、爲に其進歩は、既に豐なる天然の恩惠に浴する能はざるに至れる今日なほ努力せざるべからざるを知らざる名古屋に比し、目醒ましいほど著しいものがある。京都の商業建築も店頭装飾も數年前に比すれば、今や殆んと全く一變せるかの觀がある。市區改正は到る處に行はれ、市營電鐵又到る處に敷かれ、四通八達の便驚くべしだ。商店の構造や店頭装飾が如何に美々しくなつても、それは外觀の問題である。市區改正や市營電鐵の完備なんか徒に市費を増すのみだと論ずるものもあらうが、商業建築と店頭装飾との改善は、京都の市民が個人として如何に努力しつゝあるかを示すもので、市區改正と市營電鐵の完全せる設備とは、京都が都市として如何に努力しつゝあるかを談るものである。名古屋には京都に今ある如き努力が無い。商業建築と店頭装飾とは依然として昔の如く、市區改正行はれず電鐵のノロノロ然として物議の種を播くなど、名古屋が個人としても將た都市としても、毫も努力する處なきを示す證據なりと觀るべきではないか。名古屋が猶ほ此の儘で個人としても將た都市としても努力せぬのを今後久しく續けたら、名古屋は亡びるより他に道が無からう。

五　何故の淫風滔々耶

大正元年の統計に據ると、名古屋市に於ける現住人の出産は、男が五千九百五十九人で女が五千八百八十二人、女の方が男よりも少數である。之に反し死亡に於ては、男が三千四百六十八人で女が三千六百六人、女の方が男よりも多數である。又、同年中名古屋市に本籍を有する人口で出寄留をしたものは、男が二萬九千二百九十一人で女が三萬五百五十三人、女の方が多數であるが、入寄留は之に反し、男が十一萬七千五百八十九人で女が九萬六千十人、男の方が多數である。名古屋では、生れる女が男よりも少なく、死ぬ女が男よりも多く、他地方に出る女は男よりも多いのに、入り込んで來る男が女よりも多いことになつてるから、

女は追々減るばかりて男は追々殖るばかりである。爲に、女と男との指數の間に漸次に大なる差が生じて來ることになる。その上、名古屋に入込む旅行者の多くは男てなる。是等の男も旅の恥は搔き棄てて、何れも其性慾を充實せしむるための女を要する。然し、女は男の增加するに反し、名古屋ては減る一方てある。此う男の數が殖るばかりて女が減ることになれば、名古屋にある男は、妻を選擇して之を迎へるに非常な困難を覺えねばならぬわけのものだ。勢ひ正當なる合法の結婚によつてのみ性慾を充實して行けなくなる。

名古屋に、何故淫風が盛だらうとは、世間の人々の往々發する質問であるが、此く統計に顯れた計數が、最も能くこの原因を說明するものと云ふべしだ。女が少ない、殊に入寄留をするものて、性慾の最も旺盛なる二十六歲より三十五歲に至る時期の男が、大正元年に於て二萬七千五百九十五人なるに對し、之が配遇者たるに格好の年齡にある二十一歲より三十歲までの女は、一萬八千九百四十二人だけしか入寄留をなさず、其間に八千六百五十三人の差があり、それ丈けの女の數が男に對して不足なのてある。さればとて、女よりも約二倍の數になる入寄留の男が要する是れ丈けの女の不足を補ふに足る女の過剩が本籍人口にあるかと云へば素より無い。即ち、二十六歲より三十五歲に至る男二萬三千二百三十九人に對する二十一歲より三十歲に至る女の數二萬三千三百五人て、女の過剩は僅に六十六人に過ぎぬ。然し、實際に於ては、その僅に六十六人より女の數の多からぬ本籍人口の內からさへ男よりも多數の女が他地方に出寄留してるので本籍人口に於ても、結局は矢張、女の數が男よりも少ない事になる。然らば、名古屋に在る性慾旺盛時期の二十六歲より三十五歲に至る年齡の男は、之に適應する二十一歲より三十歲に至る年齡の女を約半數だけしか持たぬことになるわけのものだ。何うして、一人の男が完全に一人の女を專有し之によつてのみ性慾の充實を遂げて行けるか。爾んな事は、統計上能き得ぬ相談てある。是に於てか、男は女に其節操を切賣りさせねばな

らなくなる。女も又需要者が多數てあるから、其節操を切り賣りせねば、男の需要に應じ切れなくなる。名古屋に淫風の滔々たるものあるは、即ち是れが爲めだ。

六 骨拔きの西川流舞踊

今より約六年前、まだ帝國劇場が設立せられず、有樂座が出來たばかりで新時代向の舞臺として嘖々たる評判の頃に、名古屋藝妓の一隊が乘込んで來て西川流舞踊を演じたものだから、以來、名古屋踊なるものは、意外に廣く人口に膾炙し、之も亦近年、名古屋の名を世間に傳へる一つの材料を以て目し得らるべきまでに至つたが、西川流名古屋踊の、此く評判になつたのは、踊そのものに、藤間だとか花柳だとかの他の各流より優れた長所がある爲めと云ふよりも、現在に於ける西川流舞踊の家元、西川石松といふ婆サンが、箆棒に喧嘩腰の女で競爭心強く、自ら小女カイゼルを以て任ずるに因るのだ。此婆サンの行動たるや傍若無人少しでも其勢力を侵害し其牙塁にケチを附けやうとするものあれば、有らゆる機會を捉らへて復讐する、併も其復讐の方法が頗る緊い。輿論を指導せずに愚論に指導せらるゝを本務とする新聞記者御連中なんか『石松は怪しからん』と、蔭に廻つて口の端ばかりでは元氣よく罵るが、筆の端では石松を貶めるとも罵りなぞし得られたもので無い(僕も六年の名古屋記者生活中二回石松の逆鱗に觸れ二回共僕の雇主たる新聞社長め上に損害を招致せんとし遂に屛息した)。何れも復讐を恐れるからである石松は此の復讐心に富んだ荒らい鼻息で、競爭者を倒し遂に今日の獨舞臺になつたのであるが、或る競爭者の如きは、石松に苦しめられて發狂したとさへ傳へらるゝほどである。名古屋は場面が狹い、小さな釜は早く煑え立つ(リツトル・ポツト・ストン・ホツト)原理は、又此處にも現出せられて、鼻息の荒い石松の如き女に少し荒ばれ廻られると、忽ちに掻き亂されて騷ぎ立ち、石松の評判を凄じい高いものにする。名古屋が小都會ならば、その評判は市內だけで納まり他に波及もせぬが、例の中都會であるために、七十五萬圓不正手形事件や遊廓疑獄事件と同じ原理で、他の地方にまで石松の評判を傳へ、それが名古屋を有名にする緣になつたのである。

石松に飽くまで競爭者を倒さずんば止まざる復讐心の強い性根がある爲に、名古屋踊も今日までに發達を遂げ、今日の評判を得るに至つたもの故、此點に於ては石松の功を全然沒するわけにゆかぬが、又一方より云へば、此の石松あるが故に、名古屋踊は今日以上に發達し今日以上の評判を博し得ぬのである。總して鎖國主義は、或る程度までの利益幸福を國民に享有せしめ得ること遙に開國主義に優るも、其の程度以上に國民の利益幸福を增進し得ず、或は時に國家の存在をさへ危ふするものである。石松によつて取らるゝ鎖國主義の名古屋踊は、矢張、國家の鎖國主義と同一の運命を招き、又將來招かんとする傾向がある。名古屋踊をして今日よりも更に發達せしめんとせば、石松をして其得意のカイゼル

式儀學政略を棄てしめ、名古屋舞踊界の門戸を開放し、他より有力なる師匠を迎え得るやうにせねばならぬ。石松により傳へらるゝ西川流名古屋踊には、氣魄がない、骨がない。舞踊の眞精神は堅固な强い力を優佳な軟かい形式で展開して行くのにあるを全然閑却し、舞踊の形骸のみが普及せられて、其眞髓は漸次に沒却せられて行く事になつてる。これは、畢竟、石松が智慮淺薄な女師匠たるの致す處だ。この一事だけでも、他より男の名師匠を招かねばならぬ必要が名古屋にある。更に又最近に於て長谷川時雨女史の談る處に據れば、石松によつて目下傳へらるゝ西川流舞踊なるものは、型に於てすら名古屋踊として特に觀るべき特得の價値少なく、多くは藤間或は花柳の流をくんだものが多いとの事である。何れにしても、石松の薫陶を受けた踊子には何れも骨拔きで舞踊の眞髓を解せざる者ばかりが多く、其名手と稱せらるゝものゝ踊つてる樣は、宛として酢を飲んで骨を軟くした越後の角兵衞獅子である。軟かいばかりで噛みしめるに足る味が無い。又、實際に於ても、其道の古老に聞くと、西川流舞踊の開祖三郎は、角兵衞獅子の型を大分取り込んで西川流舞踊の型にしてあるとの事だ。此の角兵獅子式踊子の間に於て目下名古屋の舞踊界に異彩を放ち眞髓ある舞踊を踊り得るものは、柳界藝者丸家淺子校書先生たゞ一人だけだらう。

七　名古屋城に電燈飾

何が何んても、城て持つのが尾張名古屋てある。名古屋を眞に有名にするものは、何うしても五重櫓の金の鯱鉾城てある。德川家康が名古屋城の大土木を起したのは、豐臣家恩顧の重臣に重税を課し、其財力を涸らして德川幕府の力に反抗し得ざるに至らしめる魂膽てあつたかの如くに、多くの史家は云ふてるが、これは餘りに家康の人物を見くびり過ぎた觀察である。家康は、畿內平野が神武天皇以來既に早く開發に着手せられて、この上之れに富源を求めて國家の進步を謀らふとしても、容易の業に非るを覺り、未だ充分に開發せられあらざる關東平野の方面を開發し、之に新たる富源を求めて國家の進運に貢献せんとし、覇府を關東平野の代表地點たる江戶に移したのてあるが、此く、政治の中心地點が關東平野に遷つた爲に、統治權の實力が、從前の如く畿內平原方面に及ばなくなり、國內が分裂するやうにてもなれば、必ず東西の二つに分れ、矢張、兩軍の雌雄を決する大戰場には、兩平野の中央に位し曩に天下分目の決戰が行はれた關ヶ原のある尾濃平原が充てられるに相違無いのて、家康は尾濃平原の代表地點たる名古屋に、一大城廓を築き西國

諸侯をして、金鯱燦然たる名古屋の大城廓を望んだ丈けても、軍資軍器共に充實せる關東の威力には到底敵し難く、之を冒すは絶對に不可能なりとの念を懷かしめ、依て以て國内の統一を謀り亂を見る事なきを期したのである。西國の諸侯とても自分等が血を絞るやうな苦みをして出した金錢で自分等が築きあげたのが、あの名古屋城だと思へば、そこは人情の自然で、自づと之に矢や鐵砲を向けるに忍びなくなり、また、名古屋城は自分等が築きあげたのだから、他より説明を聞いて初めて知るまでも無く、名古屋城の難攻不落の堅塞たるを充分に承知して居るので、關東の幕府に反いて攻め寄せやうとしても、兩軍の決戰地に適した尾濃平原にあの堅塞が頑張つてるかと思へば、軍を東に進めたくも進める氣になれ無くなつてしまふ。その結果は勿論國内の統一、德川天下の安泰となるから、家康は是れを見込んで西國諸侯に名古屋の築城を命じたものである。然し實際に於て、名古屋城が今日に至るまで天下に其名を轟かしてるのは、必ずしも、それが尾濃平野に於ける難攻不落の堅塞であつた爲めではない。寧ろ、五重櫓の絶頂にキラ〳〵輝く金の鯱鉾によつてであるが、如何に百獸の王たるライオンでも、動物園の檻の中に押し込められては、頓と其威嚴を失つてしまふやうに、流石名代の金の鯱鉾も、昨今の如く金網を張られては、全く威嚴の無い憐れ憫然なものになつてしまふ。元來、この鯱鉾なるものは、英語でシャークと稱せらるゝ鱶の形を摸つたもので、シャークの發音に近かい外國語が訛つてシャチ乃ち鯱となつたものと思はれるが、單に名古屋城のみならず總て天主閣の構造は印度の築城法の新羅時代に朝鮮に傳へられものを更に朝鮮の築城法として日本に傳へたものゆゑ、その昔、印度洋あたりの沿海に現れ人命に危害を加へた鱶を捕獲した酋長などが、之を其住宅屋上の棟に曝し我が武功を誇りとした遺習が鯱鉾の形となつて傳へられ、印度の築城法を起原とする天主閣の構造を飾るものになつたのであるらしく思はれる。

名古屋城の五層樓閣は、今や名古屋離宮の一部であ

る。然るに、名古屋を代表するものとして天下に持て囃さるゝ金の鯱鉾が今日の如く金網に囲まれてるのは如何にも名古屋市民の心がさもしく没趣味であるかのやうに見へて、甚しい遺憾と云はねばならぬ。此際、名古屋市より金鯱の五層樓閣だけを離宮より分離して市に御下賜の恩典あらむ事を其筋に請願し、市に御下賜を得たところで眞に金網の撤去を斷行し、金鯱をして其燦然たる光輝を自由に放つを得せしめ、猶ほ之に毎夜イルミネーションを照し得る裝置を施したら、夜に入るも燦然たる光輝を通過の汽車中よりも旅人をして望ましむることを得、金鯱の名の更に高まると共に、名古屋の美名も更に一段と高まるに至り、是までに博した種々の汚名は全く消え去るに至るだらうと信ずる。

角通角狂評判記

生駒翶翔

（一）緒言

我國の興行物で、相撲程普遍的で、興味の多い物はなからう。上は皇族大臣より、下は津々浦々の庶民迄、等しく相撲を愛好せざるなく、小は三尺の童子より、古稀の老人に至る迄、相撲に熱中せざるはない、換言すれば、平面的には貴賤を通じ、立體的には老幼を貫き、立派なナシヨナル、ゲームと稱するも失當であるまい。芝居が都會的なるに反して相撲の代表的强者が、各地方出身者に依りて占められ、春夏二場所を終れば、直ちに數組に分れて、全國を巡業するのも、相撲趣味普遍の一源因であらう。從つて角通、角狂の如きも、之を地方に求むれば、寧ろ其多きに苦む程であるが、眞正の相撲は本場所十日以外には絶對に見られないのは原則であるから、玆には春夏二場所に於ける、回向院内本場所を中心として、見聞せる所を記さん。

（二）相撲記者

所謂劇通なる者が、各新聞社の劇評家の演藝記者に依つて、代表せらるゝが如く、一口に角通と云へば、矢張り第一に各社の相撲記者を算せざるを得ない。蓋し相撲記者は何れも十年乃至二十年位は、缺かさず

本場所の相撲を見、其手捌きや之に伴ふ色々の出來事を、精通するの驗實があるから、常に是れが研究を怠らざると共に、慰みに相撲を見る、一般見物と見方が違ふからである。今其重なる人々二三を擧ぐれば、萬朝の黒岩氏などは、新聞角通の元老である。氏は何の遊戯でも研究的に試みるのが癖で、碁でも、聯珠でも、玉突でも、花合でも飽くまで研究して、或る理法(セオリー)を自得せねば止まぬ人で、相撲も一時はなか〳〵凝つた者であるが、贔負の荒岩が廢業してから、段々其足が遠ざかり、今でも毎場所二三度は觀覽されるが、以前の樣に毎日は見えなくなつた。同社の三木氏は、黒岩社長に劣らぬ角通で、萬朝の相撲手捌きは氏の口述を、他の社員が筆記するのであるが、見方は概して精確で、且つ大切な變化や、成敗の竅所は、必ず見落さないのは、流石多年經驗の賜物であらう。之に對して流麗なる筆致で、取口の評論を試みるのが、朝日の栗島氏である。氏の本職は神戸聚樂館附俳優であるが、朝日在社中からの相撲記者だつた緣故上、客夏二期に十日間づゝ、特に朝日から招聘されて上京するのである。氏の『相撲評話』は、三國史や太平記や、其他の軍書類から、面白き文句を各取口に當篏めて、手捌を文學的に書く所に特色がある。土州山の如き贔屓力士に稍や厚き傾きあると、往々主觀的に流れる弊があるが、相撲の見方は巧者である。夫れは氏の厳君が斯道のプロフヱッショナルであるのと、氏自身も江見水蔭等と共に、文士相撲の大關として、斯道に精通せる關係もあらう。同社の手捌きを專門に書いて居る建田氏も、なか〳〵角通で、其記事の正確にして簡潔なる、萬朝の三木氏と共に、手捌きの双璧である。東京日々の松内氏は、多く見て少く書く方であるが、微細なる變化まで看破して、勝敗得失の原因を論斷する所、屢々肯綮に當らざるなく、之を栗島氏に比して、毫も遜色を見ない。其外國民の石谷氏、時事の左師氏も斯道の精通家である。やまとの木村氏は手捌きよりも相撲界の消息通として鳴つて居る。夫れから各新聞の手捌きや揷畫が、千差萬別なのは、固より見方の巧拙にも依るであらうが、其重なる原因は見る場所の相違にある。今各社の棧敷を列擧すると、正面最も形勝の地には萬朝あり、時事あり、東棧敷には東京朝日東京日々やまとの各社あり、行司溜り後方棧敷には國民新聞あり、西棧敷には報知新聞あり。棧敷を有せぬ社は行司背後の記者席に雜居す、是等各社の最も見易き位地に、力士が縺れて來て倒れた時は、其手捌きが明瞭に分るが、其反對の方に轉げて行くか、或は行司や親柱の陰になつたときは、肝心の手を見落すことがある。例せば同じ下手を差したにしても、廻しを持つて投げれば下手投げになり、廻しを持たずに投げれば掬投げになる、上手廻しを持つて投げれば上手投げ、廻しを持たず、敵の差手を上から抱へて投げれば、小手投げになる。是れが其力士の後方から見れば、廻しを持つて居るか、居ないかゞエッキス光線でも利用せねば分らない。從つて極り手に狂ひを生ずる譯である。

(三) 角通

新聞社以外の角通としては、先年物故した丸上老人など隨一であらう。此人は立派な店の主人であつたが、晩年家道衰へて、村越と云ふ論家

あ所へ寄食した事もあつたが、文化頃から五六年前迄數十年間、本場所の相撲を殘らず見たと云ふ大角通で、番附の如きも何百枚と所持し、常に相撲記者の顧問と云つた者だ。之に次では待合綾瀬の主人、講談師の貞水なども木戸御免の角通だが、近來あまり顔を見せなくなつた。本阿彌光賀氏も數年前迄は、東京日々に犀利なる角評を揭げ、最も理想を得意としたが、近來トント見受けなくなつた。學者では岡野敬次郎、美濃部達吉、土方寧、穗積陳重の四博士、毎場所正面に陣取つて、角評に花を咲かせる。華族では德川家達公、板垣、津輕の兩伯、秋元子など最も知られ、中に就て秋元子は常陸山を贔負にし、板垣伯が友綱を贔負にして海山、國見山、太刀山。土州山、黑瀨川などの好力士を友綱門下に輩出せしめたのは、人の知る所であるが、津輕家も亦た夙に力士奬勵に努められ、現に津輕領から出でた力士で、先には大關一の矢あり、關脇淵氏山あり、今尙幕内に綾浪、千年川、雲龍、八甲山、櫻川、小野ヶ崎あり幕下に浪の音、立汐あり、小野ヶ崎を除くの外は、皆高砂部屋に屬する。斯く華族が力士養成に努力する中に、獨り德川公は廿餘年來、本場所に出入して、未だ一人の贔負力士を有せない。之は公爵の特色で、曾て公爵と會して談此事に及ぶや、公爵曰く『私は相撲を見るのが本意で、土俵以外力士に用はない。是れ古往今來力士で私の棧敷へ來た者が、一人もない所以である。私は個人としての力士に贔負がない のみ ならず、團體的に西方へも、東方へも好惡がない。唯だ望む所は、東西勢力の均衡と、大力士の對立である。太刀山獨り覇を稱するよりも、梅、常陸の對立時代の方が、相撲が面白かつた。今後もドウか勢力が一方に偏しない樣、東西双方に好力士の輩出せんことを望む』と。是れ亦た一種の相撲觀にして、屑々たる贔負論者の上に卓出せる、前將軍家の見識と稱するに足であるらう。

(四) 女常連

婦人の角通としては新橋のおしほの如き木戸御免もあり、好角藝妓としては何地松よしの米花、桝八の如き名物女もあり、大鳴門熱心の靜江、浦の濱贔負の森律子、其他黑瀨川、土州山などの後援藝妓を擧ぐれば數十人に上るであらうが、是等は何れも贔負の力士を見に行くので、素より手捌きなど分る筈もなく、肝心贔負の力士が登場すると、一心不亂に見て居るが、軈て立上ると土俵はお留守で、俯して神佛に祈念し、勝負が付て初めて顏を上げる連中で、到底相撲を語るに足らず、寧ろ力士の精力を消耗させる相撲道の惡魔である。然し婦人連の中でも、眞面目に相撲を見る常連もある。三井銀行理事波多野承五郎氏夫人なども、熱心家の一人で、過去數年來殆んど本場所見物を缺かしたことがない。良君も一寸〱來るが、夫人の熱心には及ばない。夫人は斯く場所通であるが、果してドレ程迄相撲が分るかは、疑問である。曾て十兩の俊秀が恰かも土俵に上つたとき、夫人は場所入りをされたが、取組表を出して『今ドコ迄濟みましたか』と尋ねられたことがある。之で見ると幕下以下には餘り注意を拂はないと見える。從つて斯道の智識程度も推知される。玆に相撲に就て一隻眼を有する女性がある。新橋花月の女將、主人て

ある。女將に玉椛を贔負にし、每場所數名の妓を携へて、西桟敷に陣取り洋行不在中を除けば、殆んど一日も欠勤した事のない好角家であるが、前場所に偶然の機會から、女將の相撲眼の侮るべからざるを知つた。夫れは五月場所の七日目に綾川が玉手山と分けた時の事である。双方隨分活潑に動き、汗もしとゞに引下つたのを見て、見物は大喝采であつたが、其取口に合點の行かぬ節があつたので、八百長だなと考へた。元來八百長にも種々あり、四ツに渡つて動かず引分けもあれば、盛んに土俵を跳ね廻つて無駄力を費やし、取疲れ引合けもあり、或は土俵際の投げの打合ひで巧みに同體預りとなるもあるが、活動する方が素人受けが善いので、多く其方針を取り、ジツと動かない引分けに、存外眞劒で双方手が出せないのがある。然らば何を標準に八百長を鑑別するかと云へば、一寸言說に困るが、(一)双方の體に隙があるかないかを見て、一方に著しき隙が出來たのに、他が之に乘じて攻勢を取らぬ場合(二)若くは左程利くべき投げでもないのに、態と之に懸つた風をして、土俵際迄縺れて行つたり(三)土俵の眞中で釣り合つたりするのは、明かな八百長である。此内(二)と(三)とは比較的看破し易いが、(一)は少し見分けるに困難である。然るに綾川對玉手山の一番は、(二)(三)の兩點は比較的巧みに取つたが、(一)の點に於て綾川の方より攻むれば必ず勝つべき隙が二回あつた。綾か此弱點に乘ぜず、敵の防勢全く成るまで待つて居つて、空しく勝機を逸したので、此相撲臭いと見た所が隣りの棧敷に來て居た花月の女將は、此勝機を逸した瞬間早くも之を看破したと見え、兩力士が盛んに活動を開始し、見物熱狂して居るに拘らず、拙劣なる八百長だと私に耳語した。僕はアレが分つたかと、不覺感心して、翌日の新聞に「猶女子にすら看破される様な八百長は駄目だ」と書いた所、綾川を始め贔負連中が、大分花月へ抗議を申込み、一問題を捲起したさうで、朝日などにも傳へられた。然し此相撲を臭いと見たは、私計りでなく朝日、萬朝其他二三あつた樣に記憶する。私は此一番に依りて女將の觀角眼が通り一遍の女流好角家と、選を異にせるを認めた。然し婦人は感情の方が理智よりも鋭く働くから、女將の眼識も贔負の玉椛や、太刀山の相撲に對しては、幾分の曇りは免れまい。

(五) 角狂の變遷

昔時は有名な力士は、皆各藩侯のお抱へになつて居たから、藩士中の角狂連中は、棧敷から盛んに聲援する內は善いが、贔負力士が負けるか、六かしい勝負でも出來ると、長刀を振り廻して、迫害を加へるので、危險一方でなかつたさうだが、今は斯かる武士が無くなつた代りに野次馬の熱狂で、時々大事件を惹起する事がある。四十一年一月場所七日目に梅ケ谷と加州山(後高見山と改名)との取組みで、左四ツ梅西土俵に寄り切つたとき、加州右足を踏切りながら、ウンと左りに下手投を打つた所梅力を緩めた所なので、見事に懸つて四十餘貫の巨體、筋斗打つて西溜りに落ちた。然し行司は其以前加州に踏切りあるを見たので、梅に軍配を擧げた所、多數の見物は此踏切りが分らず、梅が立派に轉倒したのを見て、大番狂せを驚喜して迎へた所だから、行司の間違ひを怒罵し

騒動が起つた。此時分の梅は未だ相撲も強く、殊に此場所の元氣は非常なもので初日以來全勝の勢ひであつたから、一層騒ぎが大きくなり、初めは座布團が雨の樣に降つて來たが、次には煙草盆や、下駄や、正宗のビンなどが落ちて來て、多數の負傷者を生じた。其後四十二年五月今の國技館が出來てからも、二場所程は大苦情の場合、三階四階から、麥酒や正宗のビンを投げて怪我人を生じたので、爾來二階以上の見物席へ、ビン詰め酒類を持込むことを禁じた。夫れから斯ゝる亂暴以外、昔の角狂では滑稽談があつたさうだ、即ち明治十七年頃相撲小屋の立派なのを建てた以前は、隨分殺風景な掛小屋で、土俵の周圍に土間を廣く取り、四方を棧敷にしたが、此棧敷の前へ下駄や酒德利などを繩でブラ下げたものだから、愈々相撲に熱して來ると、不識不知其繩を摑んで引張るので繩が切れて前の客が、下駄を頂いたり、酒を浴びたりした。頭の上へ吹殻を落されて、「今日の相撲は熱い」などゝ云つたのは、落語家の苦言に非ず、明治初年頃には、屢々あつた實例だと云ふ。

（六）　赤褌と赤羽織

昔の本場所には赤褌を〆めた連子があつて、裸體で方々の棧敷を飛び廻り、内氣なお客や、お俠な婦人が、贔負に聲援したい樣子を見ると、之に代つて其贔負力士に聲援し、酒や祝儀に有り付いた者で、其聲援力士は時と場合で、東西無差別お客次第であつた。然るに其後裸體が禁止された結果、赤羽織を着し、棧敷を廻る者が出來た、柳橋の三案や、曉坊遊樂などは夫れで、近比では遊樂の獨占に歸したが、此遊樂は常陸崇拜熱が昂じて、遂に常陸のお抱への樣になり、常陸山付のお先棒になつて、常陸や小常陸の棧敷廻りの露拂ひを勤め、其他は棧敷に來て居る旦那を漁つて廻る位のもので、何等相撲に興味を添へない計りでなく、時には眼障りになるともある。現時の聲援係りは、團體は別として赤阪の汁粉屋のんべ、早稻田の洋服屋高島屋などが、巾を利かして居る。のんべは汁粉屋の癖に年中酒氣を斷たず、綾川應援隊指揮官を以て任じ、味方の有無に拘はらず、綾川が登場すると紫の小旗を振り翳して、「フレー〱」を連呼し、四方の棧敷に身を容れる餘地さへあれば、誰の席へでも闖入して、手を振り唾を飛ばして聲援最も努め、場内至る所空しく彼れの跳躑に委する有樣である。其傍若無人の態度は敵方の贔負連中に惡感を抱かせるであらうが、彼れ粗豪なるが如くにして、却々細心の要意あり、滿腹の稚氣を暴露して他の嬉笑を買ふ所、善く處世觀に悟入せるものと云ふべし。尙此男は常陸部屋や高砂部屋の力士には、概して聲援を與へるが、綾川以外には決して紫の旗を用ひず、白い紙旗や帽子を振つて聲援するのである。

（七）　投纏頭の衰滅

昔は投纏頭か盛んであつたさうだが、四十年から四十二年頃迄も、大きな勝負には、凄い程纏頭が降つた。四十一年一月場所六日目に東の關脇太刀山と西の關脇錦洋（今の西の海）と顏の合つた時は、滿場の好角家を唸らはせた、夫れは四十年一月に錦が勝ち、仝年五月に顏が合はなかつたので、特に萬人の注意を惹いたのである。此時双方の待つた十數回

に及んだお、正面桟敷の後の方に陣取つた中婆さんお、太刀山勝負と見えて、待つた度毎に盛んに聲援すると共に、煙草入れ、羽織などを投げ、次には帶を解いて投げる、上着、下着とドシ／＼投げ出し、恥かしい女の着物が、譲り／＼と、正面桟敷の殿樣連中の頭を撫でながら、土俵迄選送せられ、滿場此の狂熱に誘はれて、一層歡呼の聲を盛んにしたが、婆さん終には長襦袢一枚となり、投げる物が無くなつたので、連れて來た若き嫁の着物迄脱がせて投げ出し、トド太刀山が引落して苦もなく勝つたとき、長襦袢の女二人、正面に立つて踊つたのは、前代未聞の奇觀であつた。所が其翌日太刀山と兩國（前代今の入間川）と組が合つて、兩者早く飛込み、擦に抜けんとし、太刀驚きながら身を引いて之を防がんとする所を、兩飛鳥の如く身を翻すと見れば、太刀の右手を取つて得意の一本背負ひに掛け、行司溜りに投げ飛ばし、六尺一寸の巨漢、双脚天に冲して撞と落ちた時の光景、見物洶湧の聲轟然として、土俵は瞬時にして、投纏頭の山を築いた。此時件の纏頭の中に一枚の印袢天があつたが、弟子が之を集めるのを見ると、夫れはお召の伴天であつた。多分消防の頭か、大きな請負師でもあつたらう。斯の如く昔からの相撲の氣分は、此投纏頭に依りて、保存されたが、國技館建設後、物品を投げることを禁じた結果、近來衰滅に歸したのは、惜むべき事である、尤も今でも帽子や伴天位は、時に投ける事もあり、警官も穴勝制裁を加へない樣であるが、見物の態度が冷靜になつたのと、不景氣續きで浪費を愼む結果、如何なる大番狂せにも、喝采丈けで投纏頭が無くなつたのは物寂しい心地がする。

（八）應援と其弊害

力士全體の奨勵の爲めに、先年廣凌會が組織されて以來、各力士個々の爲めに贔負の紳縉が、後援會を組織すること一種の流行となり、年々增加の傾向あり、常陸山會、太刀山會、鳳會、朝潮會、角友會（友綱の爲め）伊勢の濱會、井筒會、（西の海の爲め）梅ケ谷會、大蛇潟會、庄之助會、綾浪會、綾川會等擧指に遑あらず。此の外駒ケ嶽會、二十山會などの如き目的の力士や年寄りが死んで、消滅したのもあるが、將來宇都宮會、兩國會、大錦會などが續出するであらうから、會の數は殖える一方であらう。是等の後援會は、各力士の生活を保證し、有爲の弟子を養成し、後顧の憂を絶ちて、專念技術を練磨せしむる點に於て、非常に有益であるが、利弊は相伴ふ者で、近來往々其弊害を見る樣になつた。即ち是等の會が盛んに會員を募集して、數百人の見連を拵へ、力士に聲援を與へることに依りて、大に相撲場の活氣を添へるのは結構であるが、斯く盛大に後援團體が來て居ると、其力士が負けては總見連中に申譯がない、何でも勝たなければならぬと考へる結果、土俵が畏くなつて自然に堅くなり、從つて平素程の活動が出來ずして敗衄を招く傾きがある。常陸門下に稻葉と云ふ力士がある。地位はズツと下だが妙に人氣があつて、屢々總見が催されるが、其時に限つて、體格も力も相應にある彼れが、コロリ／＼と倒れるのは、一種悲慘な感じを與へる。前場所に大蛇潟會の見が二三度あつたが、何時も彼れが敗れて、後援者を失望せしめた

其一例である。然し之は未だ善いとして、更らに大なる弊害がある。それは後援隊が、力士の勝負に容喙する事である。此俑を作つた者は、吉原の鐵砲菊などで、彼れは今の東方贔負だが、少し氣に喰はぬ勝負があると、控力士を指嗾して苦情を付けさせ、甚たしきは、檢査役の云分にまで干渉して、自説を通さうとする。而して周圍も彼れの興業物に對する勢力に恐れて、一歩を讓るので、自然局外者干渉の風を造つた。近來綾川が明治大學の相撲指南をなす關係上、全大學生の總見が、屢々綾川の爲めに催され、例の野球流の聲援が大に、場内の景氣を添へるのは善いとして、其幹部の人々が、綾川を私有物の如く振舞ひ、色々の干渉を試みる爲め、一般觀客に、甚しく迷惑を與へることがある。前場所綾川か控えの時、朝潮と金の花との勝負に苦情が付いて、大物云ひとなり、土俵を空けること二時間以上に及んだが、容易に解決が付かず、檢査役は打出後協會で評議することゝし、一先づ次の取組に移らうと主張したが、綾川は斷然之を斥け、是非共是場で解決すると云ひ張り、果ては友綱や雷なども土俵へ出て賴むのも聞かず、結果檢査役も、力士も全部引上げてしまひ、あはや入れ掛けにならうとしたのを、三宅磧夫氏等の盡力で、漸くヅブ預りとなり、殘りの相撲を取進んだ事もあつたか、其爲め三時間以上も見物を待たせ、打出しが九時頃になつたので、迷惑を蒙つた人が非常に多かつた。而して綾川が何故に斯く强情を張つたかと云へば、無論彼れ自身の人氣に多少驕つた例もあつたが、主として彼れの聲援者等が、彼れを牽制して、不當の云分を通さしめ、二には彼れの勢力を示し、一には自己等の意見を貫徹しやうとしたからで、綾川は寧しろ某々二三氏の傀儡となつた摸樣である。ドウカ力士の後援會は益々盛大にならんことを望むが、力士を私有物視せず、勝負の苦情に干渉して裁決の神聖を瀆さゞる樣、一般の角狂諸君に切望すると共に、力士夫れ自身も或る點迄は常識を働かして貰ひたいものである。

戰場の運命

陸軍步兵大尉　櫻井忠温

○

二三日前から頭が割れるやうに痛むので、とても筆を取る氣になれぬ。しかし此の雜誌に書く約束だけは果さねばならぬので、今夜何の考案もなしに筆を取つ

てみたが、頭の方では遠慮なしにガン〳〵とやるので、とても堪へられぬ。頸を壓へるとドキン〳〵と大い脈を搏つてゐる。「自分の家は腦充血で死ぬる遺傳がある。」とある友達のいつたことを思ひ出し、私の弟もこれで死んだことなどを思ひ出して、今にも倒れさうになつた。

隣りの家の時計は今澤山打つた。多分十二時ごろだらう。私はこんな不安な情態で筆を握つたまゝ、机の上にうつ伏してゐた。

十分ほどたつと、私は不意に立つて玄關へ出た。さうして掛金を外して外へ出た。何だか氣違ひ染みてゐたが、私は十六七の時、とき〴〵フイと外へ飛び出して、井戸端へ行つて、井戸框へ手をかけて中を覗いたりしたことがある。今夜も何だかそんな變な氣持でゐた。

私は家の周りを歩いた。空は月で明るく、地面はモウ石のやうに凍つてゐる。崖下の質屋ではまだ起きてゐると見えて、「アーア」と親爺が大きな生欠びをしてゐる。この家の親爺は、柿でも、無花果でも、賣りもせず、人にも呉れないで、腐らしてしまふ。落ち殘つた五つ六つの柿の實が、私の手に屆くところに生つてゐる。この家には枯枝のやうな瘦せた、鷄が一二羽ヒヨロ〳〵としてゐるのをよく晝間見受ける。

冷たい風に當つたので、少し氣分がよくなつた。私は家の中へ這入つて、今又筆をとつて書き始めた。

しかし、何の考案も浮ばない。頭が痛いのと、寒いので傷が痛むばかりだ。

負傷後モウ十年になるが、寒くなると傷が痛む。傷の痛まぬ時は戰爭のことなどは忘れてゐるが、傷の痛む頃になると、さすがに思ひ出す。

戰場を離れて十年になる。大抵のことは忘れてしまつた。何もこれといふ深く印象されたものもない。「予の驒馬は既に十回の遠征に從事したり。而も何等得るところなし。」と露國の一老兵の述懷のやうに、何もこれといつて頭に殘つてゐるものもない。

しかし、いつでも思ひ出すのは、私が一回死んだこ

とがあるといふことだ。これは忘れない。

確かに私は死んだことがある。戰死者として取扱はれてゐたことは事實だ。亡父の日記にも「九月七日、補充隊より名譽の戰死を遂げたる旨内報ありたり。」と記してある。當時親の身になつてみれば、この數句を書きながら千萬無量の感があつたらう。

私は私の死んだ場所を明かに覺えてゐる。突撃の夜は、薄明るい光りを背にして、露兵が砲臺の上に一列に立並んでゐるのを見たが、私等の進路は暗かつたので、全體の地形はさほどよく覺えてゐないが、私が倒れて死んだ場所だけは忘れないでゐる。それは敵の塹壕の側で、小高い、さうして砲彈に掬ひ取られて、少し凹みになつてゐるところだといふ明かな記憶がある。

私は四年前に墓場のやうな旅順の殘壘を訪ねて行つたことがある。「血のやうに赤い撫子や、萩の花の咲き亂れたる中に立つて、驢馬の嘶く聲を聞きながら、當年のことを思ひ出して涙を落したが、この長い月日の間には、石が轉げて谷に落ち、上から石が落ちて來、草が生へ、枯れ、雨が降り雪が散りしたであつたらうが、私が絶命の地――何の風情もない、たゞの石原野原の中の小高いところは、不思議に忘れずにゐた。

私は死んだ場所を知つてゐるだけでない。私は死んだ模樣をよく知つてゐる。

私は何も苦まないで死んで行つた。無論傷の痛みもなかつた。棒で打たれたやうに撃たれて倒れてからは、まだ痛みを覺えるほど氣が弛んでゐなかつた。――尤も私は其の時敵の圍みの中にゐたのではあつたが。

しかし、私の意識は追々に遠かつて行くやうに思つた。私の左の手に抱いてゐた――眼と脇腹とを打たれてゐた兵は、とき〴〵私の名を呼んだ。私はウト〴〵と眠りを催すやうであつたが、名を呼ばれるたびにハッと我れに還つた。しかし追々に氣が遠くなつて行くことをよく知つてゐた。

私は何の苦痛もなかつた。たゞ八九箇所の傷口から、鰻の口からでも出るやうに流れ出る血のために、私は

死んで行くのだから、何も別に苦しみといふものはなかつた。しかし、碎けてゐる右の手はしつかりと布で縛つてあり、首にも吊してあつたが、脚は脚袢を着けたまゝ折れてゐたので、少し體が動いても、骨と骨とが擦れ合ふので、痛いよりも、何だか氣味が惡かつた。

その內私の抱いてゐた兵は、私と離れて山の下に降りて行つたので、私を圍んでゐる最も近い兵は、顏がメチャ〱に碎けて唸つてゐるのと、胸を押へて小さい聲で念佛を唱へてゐるのと、何だか大きな聲を出して狂つてゐるのとであつたが、それも私よりは前に、皆何ともいはなくなつてしまつた。

私は此の經驗を話すことの出來る一人だと思つてゐる。私は死んで行く順序をよく知つてゐた。そんなことをこゝで書いてみたところでツマラヌことだが、私は體が一節づゝに切れて行くやうに思つた。右手が覺えなくなると、左手が覺えなくなる。脚の尖からだん〱に知覺を失つて腰の方へ移つて來る。腰から下全體と、兩手とはモウ命がなくなつたと思つてゐると、又それが解けて脚の方へ水の流れるやうに次第に我物になつたやうな氣がする。又體が護謨玉のやうに膨れたり、袋のやうに平たくなるやうにも思つた。

私は何者かに搖られるやうな氣がした時、眼を開いた。そこは死んだ場所とは違つてゐた。私の體を膀いて銃が組み合せて、それにハンケチを掛けて、私の顏に日蔭を作つてあつた。側にうつ伏しになつて動かないでゐる兵がゐた。多分死んでゐたのであつたらう。

私は死につゝあることを平氣に知つてゐたが、その時私はある不思議な現象を見た。それは私の眼に明かに私の家が映つた。さうして母が裁縫をしてゐる姿を見た。それは私の夢であつたか何であつたか分らぬ。しかし母は戰場で死につゝある私に姿を見せた。私は五年前に世を去つた母を思ひ出す度に、戰場の死期に母の姿を見たことを思ひ出す。

死んだのが生き還つた人は私の知己にも一人ある。其の人の話に、死ぬる時は、いゝ氣持で、深い〱ところへ落ちて行くやうに思つた。さうして自分は死ん

だのではなかつたといふことを知つたときは反對に厭な氣がした、といつてゐた。死ぬる時はグイ〳〵と咽喉がつまるやうに窮屈な風に見えるが、存外さうでもないと見える。

これも生き還つた人の話に、錦襴の袈裟をかけた若い坊さんが、御堂の中から招くので、その方へ行かうとすると、白い着物を着た大勢の子供が出て來て、手を取つたり、脚につかまつたり、袖を引いたりして、後ろへ引戻すので、どうしても其の方へ行くことが出來ぬ。その內氣がついてみると、自分の耳に人のすゝり泣く聲を聞いたといつてゐた。

私は母の膝もとで死ぬるやうな氣でゐた。裁縫をしてゐた母の姿は、實際其時に圖て母がさうしてゐたのかも知れぬ。

私は、戰死者の顏の上に微かな笑ひを含んでゐるのを屢々見た。

錦襴の守袋を石の上に置いて、それに合掌して死んでゐるのを見たことがある。彼が命の非なるを知つて、靜かに上衣の胸を開いて、內隱しから守袋を出した光景が目に映るやうだ。私は彼の體を引起して其の顏を見ると、私の中隊の兵で、顏にニッコリと笑を含んでゐた。

私は其の尊さに覺えず、頭が下がつたが、實に立派な死樣であると思つた。

戰死者の行くべき天國の一部があつて、そこから多くの女神が戰場へ降りて、戰死者の手を取つて連れて行くといふことを、獨逸の軍人は信じてゐるさうだ。彼等は美しい女神に連れられて行くべき美しい世界のあることを信じてゐる。

戰死者は死に當つて、彼等を天國へ導く天使の姿を見るであらうと思ふ。

○

人生苦樂するところ多しと雖、死に過ぎたる大變はない。この極所に立つて惑はず僞らず、畏るゝ所なきか、どうか。

戰場は實に人を眞面目にするものだ。「死」の命令の

前には何人も眞面目な考へが起らずには居られぬ。生死の境に入つて始めて懺悔が始まる。過去の罪惡史が眼の前に繪卷物のやうに展開して、良心の苛責も起り、懺悔も起つて、眞面目に未來などいふことも考へ出す。

さうして淸い心で死にたいといふ宗教的の考へも起す。そこで念佛なども唱へたくなる。

今砲彈が飛んで來て頭を刎ね飛ばさぬとも限らぬ。無常以上迅速以上といはねばならぬ。この境遇にあつては如何な人も心靜かに人生を思ふて、寂莫を感ぜぬものはない。

夜深うして塹壕を徘徊するの時、月淸き露營の枕に凭るゝ時、そゞろに故郷などの思はれて涙をしぼる。私は宗教といふものはどんなものか知らぬ。しかしこんなときに、そんな考へになるものかと思ふ。「死」といふ嚴重な、眞面目な問題などは私には分らぬ。しかし安樂往生が出來ればいゝのなら、私は決して恥しくないと思つてゐる。「死ぬる」ことは決して六ケ敷しくはないもの、さうして何人も決して難いものてはないと思つてゐる。なまじか八ケ間しい理窟などを知らぬほうが安樂かもしれぬ。

戰場の運命の支配者はいふまでもなく彈丸である。急行列車の通るやうな恐ろしい音響を發するのもあり、ドーン、ヒユー／＼などゝいふのもあり、シユツ、プリツなどゝやさしいのもある。いろ／＼な音響を發して飛ぶ彈丸が、一つ一つ不思議な約束を以て、「死」の命令に働いてゐる。

A中尉が腕を組んで、それへ頭を凭しかけて居眠りしてゐるところへ、眞上から砲彈の破片が落ちて來て首を切り落した。首は咽喉の皮一枚でブラ下つてゐたが、その光景は今に忘れぬ。

M少尉が大きな口をあけて笑つたところへ、彈が口へ飛び込んで來て、それが頭へ拔けて死んだ。笑ひどころでない。彼が口をあけたとき、モウ彈が二三間さきへ來てゐたのかも知れぬ。口をあけて彈を呑み込んだやうなものだ。

隣り合つてゐる一人には彈が矢鱈に中つても、一人には何も中らぬといふこともある。體を遮蔽してゐるから中らぬとは限らぬ。突立つてゐるから中るとも限らぬ。露兵君がよく塹壕から飛び出して來て、こちらへ尻を向けて大便をやつてゐるのを見ることがある。そこを射場でやるやうに狙ひをすまして撃つがなかなか中らぬ。露兵君悠々たるもので、呑乎として歸つて行く。こんな時には存外中らぬものだ。

敵の砲彈が破裂しても、中りが惡いと大きな聲で「まづいなア、もつとよく狙つて撃て！」などゝ冷かしてゐる人がある。死を恐れるどころか戰鬪の激烈なのを歡迎してゐるくらゐのものだ。彈丸にも眼があるか、こんな男には存外避けて通るものだ。

死骸を收容して、後方へ持つて歸ると、又た砲彈が來て、死骸を打ち碎くなどゝいふことがある。追つかけて來るやうなものだ。

彈運のいゝ人になると、引つつくやうに中る。不思議な運命の鍵を持つてゐる魔物は實に彈丸だ。

一人で五十發の彈を受けたのは、私の知つてゐる範圍での最大の數だが、實に彈に縁の深い人だ。これを五十人に分配して五十人を傷すよりも、一人で彈丸引受所となつただけに、先づ人助けといふべしだ。彈からいへば餘程働きのない彈に違ひない。

○

白耳義軍の前進する時、其の隊の先頭に、僧侶が十字架をさゝげて、信仰のために最後まで戰へ、と軍人を勵ましながら進んだ、といふことが、倫敦のある雜誌に書いてあつたが、これが如何に死地に向つて前進する兵士に强い感動を與へたことであらう?。日露戰爭にも露軍の軍僧が戰死してゐたのを見たことがある。軍僧は軍の退却を見ると、前に立ちはだかつて「前へ、前へ」と號令する。すると退却隊が又々振り返つて進んだといふことだ。

追はれて歸る退却隊の前に立つて、錦襴の袈裟をかけた軍僧が十字架を振つてゐるといふのは繪を見るやうだが、露兵は十字架の光りを見ると、その尊嚴に打

たれて再び踵を返さずには居られなかつたであらう。十字架の命令、軍僧の號令が、將校の命令よりも如何に嚴粛であつたか。露兵は其の背後より精神的指揮者によつて如何に力付けられてあつたか。

八幡樣、水天宮樣、金毘羅樣、稻荷樣の御守が日本兵の一つの力となつたことも爭はれぬと思ふ。それはたとひ「彈除け」の守であらうと、「後生願ひ」の守であらうと、それが非常な時の偉大な力となり、勇氣もために加はつたらうと思ふのである。

我々凡夫は一個の守札にもなほ强い力のあることを思つた。激戰になると、頭も熱し、感情も高まつてゐるのではあらうが、皆彈の降る中、火の中に飛び込んで死ぬることが愉快なくらゐてゐる。一人が死ぬると、こんどは自分の番だといつて出て死ぬくらゐだ。

何者か目に見えぬ支配者の杖の指すところに動いてゐるやうだ。

御守札にも力があり、軍人を戰場て喜んで死せしむるものとすれば、決してこれを粗末にすべきものでない、と勿體をつけて置く。

無邪氣な露兵はよく祈る兵隊である。何かといふとすぐ跪いてアイコンを抱いて祈る。又彼等は頻りに占ひをやる。トランプは遊戲に用ゐるばかりてない。占ひの一つの道具だ。トランプを振つて吉凶判斷をやる。クラブが出たから凶だ、などといつて悄げたり、ダイヤが出たから大吉上々などゝ嬉しがつてゐる。

緣起をかつぐ、禁厭をやる。嚔びをしても、すぐに口へ十字を切る。惡魔が口から這入らぬまじなひだ。寢るにも寢臺の下から、枕から、足もとから、一々十字を切つて、惡魔拂ひをしてゞなければ寢つかれぬ厄介な兵隊だ。彼等はとき〳〵左を向いて唾を吐く、右には神樣がゐるが、左には惡魔が覗つてゐるといふのだ。

可憐なる露兵は塹壕で、胸から小さい十字架を下ろして、手を組んで祈禱してゐると、こちらでは、水天宮の御守を水に浮かして飲んだり、八幡樣の御札を目八分に捧げて默禱したりしてゐる。可愛いゝものだ。

B少尉が國元の母から送つて來た「御供へ物」を勿體らしく頂いてゐるのを見たが、私は今に少尉の顔が見えるやうだ。少尉はそれから一時間とたゝぬ内に戰死した。

○

戰さのあとは實に靜かなものだ。

暗い中に默つて死骸の取形付をしてゐる。天幕へ入れて引づつて來る。二三人でかゝへて來るのもある。それを一所に集める。死骸番がそこでツクネンと坐つて夜を明す。

死骸を見て氣味の惡いのは、其の數の少ない時で、何百何千と死者があつては、一々感心もしてゐられなくなるから、存外感じが鈍るものだ。戰鬪中は無論死骸などの感じが少ない。しかし頭が冷へて來ると、ソロ〳〵死骸のことを考へ出す。戰場掃除隊となつて、死骸の捜索方はあまり氣持のいゝものでもない。この男は生きてゐる筈だと思ふのが、死骸となつてゐたりする。この男は前に死んだ筈だと思ふのが、生々しい死骸でゐたりする。

眞暗な中を、あちらこちらと彷徨うて、死骸を捜して歩く内に、思はず、グザッと何者か蹈む。飛のいてみると、血まみれの顔が草の中から突き出てゐたりする。全く化物のやうだ。

緣起を擔ぐ、禁厭をやる兵隊君は又化物を振り出すことに甚だ巧みだ。

今そこに死んだ男がボンヤリ立つてゐたなどゝさも見たやうに話す男がゐる。兵隊の幽靈などは、あまり巾が利かぬが、死んだと思ふのが、隊列の中にゐたりするやうに思ふことがよくあるものだ。そんな時には全く幽靈でないかと思つたりする。

戰場だから幽靈が出たからといつて、目珍しいわけではない。ブリキ箱や、蜜柑箱や、古バケツを提げたり、筵や炭俵を引づつて、髮の延びた、垢まみれの、戰場生殘りの老兵の一隊が、一つの露營地から、他の露營地へ移つて行く光景は、全く化物の大縱隊が通るかと思ふほどだ。

ある歩哨が、夜中に自分の前にカラコラと駒下駄の音がするので、滿洲で下駄の音は變だと思つて、耳を澄ましてゐると、不意に大きな黑いのが、突つかゝつて來て、氣絶したなどといふ、講談にでもありさうな化物談を聞いたことがある。

露兵は奇拔に化物を振り出す兵隊と見える。死隊に惡魔の手が觸れると、死體が甦つて、側にゐるものを引裂くなどゝいふ迷信が彼等を惱ましてゐるさうだ。塹壕の前に二人連れの幽靈が立つ。それが毎晩のやうに出るなどゝいふ書き物を見たことがある。

一體西洋の幽靈には月が添物になつてゐる。多少陽氣なほうだ。日本物は月では映りが惡いので鬼火を添へて大に凄味を見せてゐる。幽靈でも暗くては出にくいと見えるが、「光り」といふものが幽靈と離れぬ關係を持つてゐると思ふと實に面白いものだ。

幽靈の活動時も、西洋物と日本物とは多少の違ひがある。日本物は丑滿の頃―二時か三時だが、西洋物は十一時から二時までの間に出る。この時刻が總ての死物が活力を得て活動を始める時で、古樹でも、椅子でも箒でも、何でも躍り出す。幽靈はソロ〳〵巣を出て、のさばり出る。

西洋物は一體に陽氣な奴が多いが、日本物は馬鹿に物凄く構へてゐる。亡者の大縱隊が街道を進軍するの、亡者の部隊が現はれて幻の大砲で打ち合ふの、といふのは西洋物によくある奴だが、物凄い中にも陽氣だ。日本物は髮をさばいたり、目をむいたりして、殊更柳の下などから出て、大に怨めしくやる。

私はこゝまで書くと、隣りの時計が二時を打つた。ソロ〳〵化物の活動時だ。私はモウ引下がつてもいゝ時だ。

流轉一如

支那浙江省△□城にて　舊亡命客

東京を發つてから、下の關に來るまでに、私達の汽車旅行は、全く自由であつた。私達の環界に、抵觸する何物も、私達は享けることは無かつた。神戸で一泊した西村旅館の夜にも、新橋から乘車以來の悠舒な氣分を、持續けることが出來た。主要な停車場で、交代する刑事達も、隣りの二等列車にばかり離隔して居て、私達の感觸には、全く何の交渉も齎さなかつた。

神戸から同乘した西洋人達の組とは、菓子や果物などを交換しながら睦みあつた。彼等の組の中心に成つてゐた五歳ばかりの少女を李烈鈞が抱きとつては、下の關に著くまで、毎も興じあつてゐた。夏薬瑞は毎も默り續けてゐた。然し、それは彼の常習であり、そこに今何の[illegible]徴も彼は有つてゐなつた。私達が連れて來た使僮は、腕を慇懃によく掛けて、日本に對する印象を成るべく深く疊み込みたいと努めてゐるのか、常に外ばかりを眺めてゐた。彼の生涯には日本に來たのは今度が最初であり、また恐らく終りで有らう。彼は長崎から夏と一所に、歸國する筈に成つてゐる。私は自分が支那人であり現在異國に來てゐるのを、全く忘れてゐたほどに、其の客車の中の自由な境心に私の全部が自然に浸つてゐた。何うかすると感覺が鋭く成りがちな亡命といふ第二意識が、最う悉く放散してゐたやうであつた。

下の關に著いて、川卯旅館に泊つたときに、夜になつて、始めて三名の新聞記者達に訪ねられた。また九州線の列車の中にも、數名の記者達に停車場ごとに交る〳〵訪ねられた。暫く忘れてゐた、亡命を亡命してゐる國の人から、現在當面に復びつきつけられるの

は亡命人自身にとつて、決して快いものでは無かつた。

長崎の上野屋旅館の三階に、私達は暫く旅装を解いた。舊知の新聞記者達と刑事などに、私は再會した。それ等と應對しながら、彼等の同業者間の暗鬪を感受することとが、私に生葡萄を飲むやうな興味を齎した。然し、今然うした事々を書くために、私は又中央公論の頁を割いて貰はうとするのでは無い。

夏と使僮とは二日たつて、春日丸に乘つて歸國した私は夏が上海から發した諜報的の書簡を受領して、李と相談した結果、一度復た歸國することに定めた。

長崎の柏文蔚の家で、李と柏と白逾桓（從來から長崎に居た）と黃郛（同上）と方聲濤（私達よりは三日遲れて東京から急行してきた）と私とが、夕食に集まつて、夜を徹して會談した。其の結果、翌日の夜に、長崎を解纜するインプレス、オブ、ジャパン號に方と私は乘つた。二人は亡命の名をインプレス、オブ、ジャパン號の甲板の上で振り棄てた。

切符のうへの243といふ番號に相當する客室を漸く探しあてた二人は、その中の長椅子に並むで腰を卸した。

上海で二人が上陸するのには、日本船は甚だ危險が多かつた。政府派の警戒は日本船の乘客に對して、最も嚴重であつた。また長崎にゐる探偵も日本船の乘客に注目してゐた。二人が此のイムプレス、オブ、ジャパン號のを選むだは此の二つの危險を虞れたからであつた。さうして二人は切符の購買にも、またランチに乘る時にも、極めて巧みに吾等の影を殘さなかつたと自信してゐた。此のほかに、生來の年數から言ふならば、日本で生活した方が多かつた私には、今度の亡命生活を併せて、日本の雰圍氣が私の胸に飽滿してゐたので、別の國の船に乘つてみるはうが、私だけには竊かに嬉しくもあつは。併し、日本語は極めて巧みに使へても、英語には全く沒交涉な履を有つてゐる方自身には、白人の此の船に二日間を送らうとするのは、決して愉快なものでは無かつたらしい。船僮の多くには、廣東人らしいのが傭はれてゐたけれども、私達が最初から日

本人として、日本の上流紳士として、また日本名を僞稱しゐるうへは、御互が支那語を洩らすことは、絶對に過めなければ成らなかつた。然うして、二人は食堂にも喫煙室にも、甲板にも、每に紋の有る羽織を著けて、恭しく鷹揚に振舞つてゐた。私達自身にしても、周圍に對しても、凡てがそれ等は著しい矛盾であつた。

それにまた、此の二人の日本上流の紳士は、船の第一夜に、寢床に就いてから、各自の所有金額を調べ合はせてみると、加算してそれが漸く日本金の三圓に滿たない額であることを、始めて知つた。

「驚いたなあ、僕は君が非常に有つてゐるんだと思つてゐた」と、○方が上層の寢床から言つた。

「僕等の旅費を拂つてしまつたら、僕は零だ。君も零か。驚いたなあ」と、私が言つた。さうして、二人は笑和した。

上海には、二人の家などは從來から無い。けれども二人が若し無事に上陸し終るならば、最うそこに何の不自由も全く無いばかりでなく、日本の上流ぐらゐの生活は、優に保有され得べき緣故が、二人の爲に隨所に備へられてゐる。

斯うした消息は、日本人の多くのせゝこましい生活してゐる人達には、或は不思議のことであるかも知れない。然し、北京からの逮捕狀の一つに、昨日まで名を載せられてゐた純革命黨員の一人が、明日は官費留學に依つて、佛蘭西に出發するなどの事が、決して珍しくは無いやうな、不可思議な私達の身の上には、今、○方と私とは政府を絕對に除外してゐるのであつても、別の緣故に因つて生活費に窮するなどのことは常に必ず無い。私達の懷中の增減は著しく容易に變化する。

無論そこに政府とは直接にも間接にも何の關係も無い。私達自身にしても滑稽な斯うした消息の根抵から、私達の悠舒の氣分が培養されてゐる。けれども今此の根抵の若干をも具體的に書き述べることは、能きない。たゞ是は亡命――革命黨などゝ言へば、さながら流離し落魄してゐるものゝやうに、すぐ會得してしまひさうな、感じのある日本人の專斷に對して、從來

から自分を辯護したかつた私の徒らな希望を書き添へたのに過ぎない。

船體の大きかつたのと、海の全く靜かであつたのと、周圍が白人ばかりで有つたのと、方と私とが日本語で話さなければ成らないのが如何にも莫迦々々しかつたのと、それ等は二日間の航海中に、私に靜かに物を思はせる時間を、十分に與へてくれた。甲板の腕椅子に凭れて、懐手をしたまゝ、私は唯だ默つて海を眺めてゐた。

故國の土を踏むでみるのにしても、自分は公然と自由に呼吸し得られるものでは決して無い。人爲的の死の手は常に背後に襲つてくるのであらう。日本に所謂亡命して去く時分には、私にとつて第二の故郷を復た觀光にでも行くかのやうに思はれて、寧ろ淡々しい娛みばかりに掩はれてゐた。然し、現在反對に自分の國に歸航の途中に、國と自分との干繫に思ひあたつてみると、自身を依托すべき土が、斯の天地に失はれて了つたやうな孤獨の感覺が、微かに胸に薄く滲みわたる。

私は歸航の途中に、それが決して事實の上からは歸航と謂ふことの能きないのに思ひついて、始めて「亡命」の意義を、自身に引き當てゝ觀る機會を、インプレス、オブ、ジャパン號の甲板の上に得た。さうして、寂しい苦笑を味はつた。

船は黄浦江の河口で投錨した。

蓆をかけたやうな帆を立てゝゐる船や、小船などの群を、方と私とは甲板の上から瞰下しながら、二人とも默つて肩を並べて欄干に凭れてゐた。

『來たね。到頭』と、方が獨言のやうに呟いた。

『あゝ』と私は長崎と上海とを繫ぐ海底電線の長さを、胸に描いてゐた。

私達二人が、二日以前に長崎を、此の船で出發したことを、長崎に派遣されて居る政府派の者が探知したとするならば、海底電信は、私達二人を上海の税關で逮捕する爲に、最も神速に確實に役立つものでなければ成らない。然し、私は此の配慮が、私達の安全を保證する爲には、全く無効なものであることを知悉して

ゐた。そこに私達として今更何の手段も有りやうは無い。私は方の横貌を竊かに眺めた。彼は默つて、揚子江の濁りを眺めてゐた。

そこに、兩替商賣の、幾多の低級な支那人が甲板の上に、爭ふて昇つてきた。彼等の幾種の服の色と、各種の容貌とを、私はつく〴〵と視た。彼等は白人の群の中を縫ひながら、且つ白人達と應對しながら、金貨や紙幣や銀貨や銅貨を、手迅く交換してゐる。それが私には何うしても「同胞」と謂ふ觀念を、全く喚び起さない。其の一人が私の胸前にも佇むで、覺束ない英語を操りながら、兩替を勸めた。私は只だ首を掉つた。

『煩い奴ぢやないか』と、方が聲をかけた。

『あゝ』と、私が言つた。

彼等と私とは、當然「支那人」なる名稱に概括されなければ成らないのにしても、彼等とは絶對に懸絶した心を、私自身が有つてゐた。

猶、然しながら、方と私とは日本留學の時からの親友であるのに、現在の方その人をさへ、私は「同胞」なる觀念を伴つて、彼を從來から會得して來なかつたことに氣がついた。勿論、親友として、また機會によつては同死の友として、方と私とは許しあつてゐることは、切實な共鳴を抱きあはせて居るのにしても、そこに「同胞」と謂ふ感覺を添えては、私は全く考へてゐなかつた。今、兩替屋の姿態を、全く離れて眺めながら、偶々方と短い會話を交へた刹那に、私は親友に對する斯うした觀念の缺陷を始めて自省して、俄かに獨りで愕いた。

兼てから、支那人と日本人とを對照してみることに、興味を有つてきた私は、然うした愕きを覺えるのと共に、其の「同胞觀念」の强弱が、支那人と日本人との相違の一つとして、確かに數へ得ることを感じあはせた。日本に生活したことの方が多かつた私すらも、尙斯の觀念の稀薄であることを知らなければ成らぬとすれば、一般の支那人が國家的團結心に乏しいと言はれるのは、私としては、最う十分に甘受しなければ成らない。さうして、比較的高級な敎育を受けた支那人

の多くが、容易に國家的觀念を離れて、弱ら世界の人として自任し、或は輕忽に無政府主義を標榜するなどの風潮も、彼等が徒らに新奇を衒ふほかに、やはり私と同じやうに、同胞といふ觀念が、最う先天的に缺如してゐる消息から起生する傾向であらう。一方には、世界的思潮の普遍する推移が、國の差異と謂ふものに對して、舊來のやうには重い權威を認識しないやうな色彩を、帶びてきてゐることが、眞實であるとするならば、全く古い支那人は、其の意味に於いて、却つて新時代と抽象的に相通ずる先天性を有つてゐると、言つても差支は無いやうに思はれる。然かして、そこに、支那人の反語の一つが有る。

甲板のうへを、倉皇と左右に雜駁に徂徠する兩替屋が、却つて新時代と共鳴してゐる——其の穢れた支那服、低級な表情、何といふ反語であらう、私は海底電線に對する不安を暫く忘れて、斯んなことを思ひなが白人と黃人とが縺れあふ甲板上の光景を眺めてゐた。

軈て、ランチが黃浦江の上流から、乘客を迎へに來た。一等船客は悉く夫に乘り移つた。方と私とは、ランチの中央邊の椅子に腰を卸して、吳淞の方の岸を眺めながら運ばれて行つた。『砲臺らしい形はしてゐないね』と、私が言つた。然し、低く連亘して行く岸の形が、私に吳淞砲臺の內部を思出させてゐた。吳淞砲臺が比較的長く、討袁と書いた白旗を翻してゐた。その司令官であつた鈕永建は東京にゐて、私達二人の情報を待つてゐるのであらう。

『然うだけれども、此處まで砲彈は來る』と、方が復た獨言のやうに言つた。彼は先刻から何かを考へ始めてゐるのらしい。但し、要するに吾等は總ての土を奪はれてしまつた。復び其の舊い土を取り返さないうちは、吾等の生に根本の安定は全く認められない。斯の種の不安は、幸なる日本人には決して理解されるものでは無い。同時に日本人は自身の幸を、絕對的には自覺してゐない。猶さうして「國」の難有さをも徹底して知つても居ない。吳淞の岸を眺めながら、私は破調的に緊張した。何うしても吾等の土を有たなければな

らぬ。言ひ換へるならば、所謂第三革命を何うしても、成し立てなければならない。

斯うした緊張のうちに、海底電信に對する不安は忽然と消滅してしまつた。そこに、私の方に歩いてくる佝僂の白人があつた。彼は私の左横に腰を架けた。さうして、

「貴方は上海に上陸してしまうのか、それとも未だ前までインプレス、オブ、ジャパンに乗つて旅行するのか」と、私に訊ね始めた。

「今夜上海で泊つて、更にインプレス、オブ、ジャパンでシンガポールまで行くつもりだ」と、私は虚を言つた。彼は私の日本裝を眺め下して、雪駄を見ると珍しさうに暫く瞶めてゐた。更に左掌に支那の二十銀貨を載せて私に差出しながら、

「これは通用するのだらうか」と、言ひかけた。

「私は全く知らない。私達は始めて支那に來たのだから」と、私は彼の顔色を窺ひながら、極めて淡々しく答へた。

彼は默つて、私を瞶めた。私は彼の不規則な曲線を作つてゐる背の輪廓を眺めた。さうして、彼は悠然と起立して、其のまゝ彼方に往つてしまつた。

『何を言ひに來た』と、方が訊ねた。

私は會話のとほりを答へた。

「彼奴は僕等を矢張り支那人と思つたらうか」

「然うだらう」と、私は方の氣配を察しやうとした。

「をかしいな。二人とも日本の服を着てゐるんぢやないか」方は慌てたやうな語氣を洩らした。

「何か僕等の噂が西洋人の間に有るのかも知れない」と、私が言つた。

「ボーイが長崎で何か聞いて來てゐるのかも知れないよ」と、方が同時に言つた。

「然うかも知れない。何でも好いぢやないか」私は最う然うした不安を殘してゐなかつた。

「好くても惡くても、最う仕方が無い。然し此の米國船が僕等を捕へて引渡すやうなことは有るまい」と、方は苦笑しながら、俯向いたまゝ言つた。

大粒な雨が、疎らに降ちてきた。厚いデッキカバーの下に、船客達が興じあつてゐた。直ぐに血と肉とを考へさせるやうな、體格の好い高軀な白婦人が、大きな潑溂とした淺緑の踵を据ゑて、私の襟もとを眺めてゐた。その腮の二重になつている微紅色の柔い曲線美に見いりながら、私は少時く不安も緊張も忘れてゐた。一時間ばかりして、私達は、次第に上海の甍と、軍艦や商船の檣を認めた。前に居る婦人のスカートと、その陰に尖端を出してゐる靴さきの邊を、私は復た屢々瞰下してゐた。ランチと機關の響に引きづられるやうに、私の感覺が沈むで行つた。頭の上の邊に、カバーを撲つ雨の疎らな重い音が、時々耳に卽いた。方は岸の方の煉瓦壁を眺めわたしてゐた。

ランチはバンドの稅關を指して、一直線に進むで行つた。稅關の屋蓋の下に、樣々の人影が、黒く入り亂れてゐた。

私の沈滯してゐた感覺が、稅關の人影を眺めて、徐かに鈍く動搖した。然し、復た自然に平均を保ちながら、而して低く濁つて靜まつて行つた。

「大分居るよ」と、方も稅關の方を眺めてゐた。

私は默つてゐた。私の根柢には、必然に動搖を來してゐるのであつても、それを表面の感覺に上すまでには成らなかつた。さうして、其處に淡薄な矛盾だけは、幽かに胸側に萠しながら、唯だ夫れだけで、運ばれて行つた。

稅關の前に、私達が乘つてゐるランチよりも先に、上流から一つのランチが下りてきた。それの舳の方に樹てゝゐる旗の色模樣を認めて、私は

「東洋汽船會社のランチが來た」と、方に單純に言ひかけた。

「うゝ」と、方が脣を締めたまゝ應對した。

私は東洋汽船會社の社旗を認めて、其の時に始めて私達が後にして來た日本を省みた。其處に異國の懷しさと、異國の平安とを、同時に感享した。また、其の平安のうちから、國の力とも謂ふべき觀念を抽象的に抱きあはせた。それに聯關して、我等の弱さ——特に

現實の自身の弱さを、更に想はなければ成らなかつた。個人主義、主我主義などゝ言つても、思つても、信じても、夫等が絶對的に存在することは、事實の上から決して許されない。理論としては容れられ、若しくは、自分勝手には信ずることが能きても、そこに必ず幾重の現實上の背景あることを知らなければ成らない。さうして、私は其の背景の一つである國の存在を、的確に把握することが能きたやうに思つた。國の存在に思ひつきながら、前面の白い女と、私とを對照してみて、その裡に支那人としての弱みを、私自身が第二意識的に有つてゐたことに、更に氣が著いた。而して、斯うした氣著きが、私にとつて眞實に意外であつた。凡そが普く私を裏切つたものばかりであつた。

ランチは徐行して、稅關の岸に近づいて行つた。稅關に接近して行くのに連れて、更に私は自身一個の不安が、反動的に漲つてくるのを覺えた。そして、最う國も何も其處に全く無かつた。稅關のアスフワルトの床のうへを、極度に鋭く物色する視覺に、私の全部が集中した。少時くして、稅關のうへの氣配が、聊かも異常の空氣を有つてゐないらしいのを直覺して、緊張してゐる感觸が纔かに柔らげられた。

ランチが稅關の岸に繫つた。總てが悉く何でも無いのだつた。方と私とは悠々と稅關を離れて、バンドの街上に出ることが能きた。雨が二重廻しのうへに、滴を造つた。

『何處に往かう』と、方が後から言つた。

『さうだね』と、私は公園橋の穹窿を隔てゝ、アストルホテルの甍を仰いでゐた。兩人が斯うして、何の支障も無しに、上海の土を踏むでゐることが、私の豫想を全く裏切つて了つたのと同時に、溫い愉悅が、しみ〳〵と胸に瀰漫した。雨に濡れながら私は街上を更に見直した。そこに、幾種の服色が過ぎて往く。其の多くの支那人の表情が、先づ私の胸に即いた。夫等を東京の數寄屋橋あたりで善く出會した幾趣の表情に、私は偶々對照してみた。而して、何れもが困憊の色に共通してゐるのを認めた。

「東洋人は憊れてゐるね」と、私が方に言つた。
「餘裕が無いからだらう」と、方が私の横に出てきた。
南京路の角で、私達は俥を傭つた。幌の中で、私は是からの時日と事象とを想ひながら、前方に方が乘つてゐる俥の臺が、搖られて往くのを眺めてゐた。

支那人も日本人も憊れてゐる。然し、支那人は最う憊れに制せられきつてゐる。困憊しながら、唯だ其のまゝに、殆ど無意識に肉ばかりが生きてゐる。其の表情は困憊の氣に掩はれて、而も愴然として又晏如としてゐる面影が眺められる。日本人は困憊しながら不滿を有つてゐる。彼等の表情は此の不滿の爲に緊縮してゐる。懊惱しつゝ鬪つてゐる氣配が窺はれる。私達謂はゞ純革命派に屬すべき者は、然うして同國人よりは日本人の方に共鳴する氣分を抱いてゐる。私達は斯うした氣分の爲に自身を鞭韃して、猶何事かを企畫しやうとする。何うしても現在の政府に自身を讓ることが能きないのも、斯の氣分が許さないからであり、また縱ひ政府が私達を全く無條件の下に赦すのにしても、それに安ずることも、私達は決して爲し得ない。根柢に、唯だ袁政府に對する反感や、若しくは、自身の不安定に驅られて、私達は餘儀なく事を起すものでは無い。自國に對する不滿＝國と自分との矛盾＝是が私達に不斷の衝動を萌生する。さうして更に冷靜に言へば、是はまた愛國心と謂ふべきものでも無い。無愛國の革命と謂ふべきが、私達の最も嚴正な內省であらう。自身と對象との矛盾を調へる爲に、其の對象を撥亂させてみたいのに過ぎない。私達が政權を手に入れるならば、或は矢張り現在の袁政府と同じ形式の手段を取ることかも知れない。それとも、袁政府よりも猶一層に拙劣な、若しくは猶一層に高壓な政策を施すかも知れない。國民の無自覺な極度の困憊、而して夫を搖さませやうとする私達の斯うした氣分——

『第三革命の國家的意義は全く無價値だ。加之、吾等は寧ろ國を危くするのだ。』と、私は幌のなかで考へた。然し、夫が何んなに無價値であるのにしても、或は猶國家の安定に危惧を齎すのにしても、夫が無ければ、

私達は生きて行かれない。全く單純に、生存して行くばかりの爲にも、私達は革命の軍を起さなければ成らない。然うしてそれに全部を傾注して、生を營み、生の發展を期待しなければならない。『自我が第一義だ。國は第二義だ』と、私は苦笑した。

多くの人は、革命派などゝ言へば、自分を犧牲にしてまでも、愛國の熱情の爲に、血を流すものゝやうに想像してゐる。然しながら、私達は其の結果が縱ひ非愛國な狀況を現出するのにしても、先づ自身の爲に、革命軍を起さうとしてゐる。

――私は此處まで考へてきて、搔痒の感に摶たれた。それ等が如何にも矛盾で滑稽である。何といふ莫迦げたアイロニーであらう。

『國を利用して、生きて行かうといふのだ』と、私は更に聯想した。さうして、此の點に、私達自身に絕對の强味が存在する。同時に弱みが有る。また、支那人の多くが國を利用して、自身の生を豐潤にしやうとしてゐる。支那人の强さと弱さが、斯うした消息の裡にも胚胎されてゐる。

私は俥に搖られながら、吃々と笑聲を洩らした。また、私は或る朋友の白耳義に行つてゐることを思出した。彼は生涯中、革命運動と無關係であるべき約束を、袁世凱と結むで、同時に彼の生涯を過し得べき金額の全部を、袁の手から受領して、國を出て去つた。私は自身の生を、國と連繫させて考へなければならぬ。彼は既に國と離れて自適してゐる。私に拘束が有り、彼に自由が有る。猶私が有する凡百の交涉と影響とは、國を對象に置いてゐる爲に決して私に安息を與へるものでは無い。國が不安定で有るだけに、私も事の成否に關はらず不安定である。彼は政府に從ひ國に背き、何れとも離脫して、殆ど絕對の安息を得てゐる。私は何れにも背き、何れにも交涉を具へて、殆ど常に不安を抱いてゐる。猶、國の安定が、私の生涯の間に、決して斷案を見ないとするならば、私達が自分の政府を編み、政府を有つことにしても、私達自身の不安定は、生涯を通じて除かれるものでは無い。あの私の朋

友は賢こかつた。國と政府とから離脱するならば、私も彼と同じ過程を踏むことが能きる。私は彼が見るならば愚物であらう。

私は更に猶太人の心理を想つてみたりした。

俥は西華徳路を過ぎて往つた。やゝ狹い其處の街上には、電車軌道が單線に成つてゐる。方は俥を日本の旅館の入口で停めた。その旅館は私達の舊知であつた。而して、よく私達を庇護してくれた。

「此處で今夜は泊らう」と、方が俥賃を拂ひながら、大きな聲を出した。

兩人は、其の『萬歳館』の二階に通されて、始めて悠閑と坐を占めた。然し、やはり不安な意識を、絶對に除くことは能きなかつた。

私は未だ白耳義にゐる友のうへを思つてゐた。

『自分も世界の人とならうか』と、私は突然口外した。

『何だ』と、疊のうへに仰臥してゐた方が訊ねた。

『哀に金を出さして、世界を徘徊しやうかと思つてゐる』と、私が答へた。

『何處へ行つても、何うしても同じだらう』と、方が淡々しく言つた。

新刊批評と紹介

△懷疑と沈默との傍より　島村抱月著　新潮社發行

明晰なる頭腦と新しい見解とでもつて人生問題藝術問題乃至社會問題に明快な解釋と痛烈な論結とを與ふる所、抱月氏を措いて他に多く望む事が出來ない。氏は近頃事業の陰に隱れて筆硯と親まるゝの機會に乏しいやうであるのは殘念であるが、軈て氏が再び本來の立場に歸へらるゝの日こそ今から刮目して待つべきである。それ迄の間は此書の如き量に於いてこそ尠いが貴重なる收穫として、我讀書子の珍重すべき物たるは言ふまでもない。(定價金七拾錢)

△現代叢書オイケン　民友社發行

△現代叢書巴奈馬　民友社發行

△現代叢書新支那　民友社發行

此兩書は民友社長德富蘇峰氏の監修の下に毎月一册(全部十二册)を豫約發行の計畫に成れるものにして、現代に處するに最も必要なる世界的知識を一般に普及せんとする目的の下に、オイケン、ベルグソン等の思想問題より文學、政治、軍事、國防、科學等あらゆる國民必須の知識を提供せるは最も時宜を得たるものと言ふべく、本文亦平易にて明快、紙質製本裝幀の細微に至るまで、讀者に對する編者の親切を偲ばしむるものあるは大に德とする所也。此書がいかに歡迎せられ、いかに國民敎育に益する所あるべきかは今より想像せらるゝ所なりとす。(定價各册金壹圓)

△心　夏目漱石著　岩波書店發行

本書は東京朝日に連載せられて例に依つて讀者の歡迎を買へりしもの漱石氏の心理的描寫に於て遺憾なく氏の特長を發揮し、我文壇獨歩の觀あるは今更ながら此書を推奬する所以なり。(定價金壹圓五拾錢)

△毒藥の壺　相馬御風著　早稻田文學社發行

著者は「僕はたゞ平凡なる自己の生活の僞らざる表白を以て眞實に生きようとする人々とのいき〳〵した接觸感を味はうとするに過ぎない」と言つてをる。であるから、眞に生きんとする者との間には自らそこに接觸してある。然り氏は實に眞實の生を生きんとして悶え苦しむ所の人である。此書が氏の所謂思想宣傳の具に供する共鳴するものがあるわけである。此書が氏の所謂思想宣傳の具に供するものではなからうが、自己の生活の僞らざる表白そのものが、己に偉いなる力を以て吾々に臨んで來る。それが自らにして生きた權威のある觀察となり批評となつて表れるのである。此書を讀んでその中に自己の片影だにも見出し得ないものがありとするならば、その人は眞に自己を生きんとする人でないといふ事も出來る。（定價金六拾五錢）

△歐米我觀　蜷川新著　淸水書店發行

著者は常に各國國民性の研究に思を潜め「凡そ大國民たらんと欲せば他國民を同化す可く他國民に同化せらるべからず」との歸結に逵せりと言ふ。今本書は氏が歐米視察の結果、殊に現時の戰亂に關し邦人の參考となるべき地方の視察、例へば列强の國民的大覺醒、歐洲各國の文化と日本の文化、同じく教育等より日本國民の大自覺を促し、歐化主義を排したるの所見、現在我國民の最傾聽すべき論議にして、後篇としては歐米各國の紀行文を載す。（定價金壹圓七拾錢）

△婦人性學（全）　秋元洗二著　甲寅出版社發行

著者は婦人科醫にして、親しく接診したる婦人病の實際的問題を選んで「性」に關する研究に資せんとするものなりと言へり。されば好奇的に理論から這入れるものとは自ら選を異にし、幾多の實例を擧げ、學者の理論に聽き眞面目なる意味に於いて各人に必要なる性的知識を提供せるものなれど、まゝ挑發的言辭のなきにもあらず。（定價金二圓三十錢）

△快馬一鞭　坪野平太郎著　日東堂書店發行

著者が側面的處世訓也。默法螺もあり、屁理屈もあり、愚にも附かぬ事もあれど、又時に時弊を穿ち、膝をして案からしむる底の名論卓說のなきにもあらず。要するに靑年訓也。現代の汚流に泣き叫ぶ風流才子にとつて好き活教訓たるべし。（定價金壹圓二十錢）

△演劇評論　小宮豐隆著　日月社發行

一方劇評壇の權威としての豐隆氏の劇評を集めたもので、新劇舊劇の何れもに對して、理解ある批評と、解釋と、そして紹介とが隨所に見られる。劇研究家の一讀すべき書たり。（定價金壹圓）

△堺事件　森林太郎著　鈴木三重吉發行

本書は鈴木三重吉氏の編に成れる現代名作集の第二册にして、鷗外氏の所謂傳說史實物語等に新しい生命を盛つた氏一流の作物である。堺事件と共に安井夫人を載す。本篇は第一册に比し紙質も改良されたれば好個の袖珍本として世の歡迎を受くるや必せり。（定價金拾五錢）

△西洋大著物語叢書第五編カラマーゾフの兄弟　米川正夫譯編　新潮社發行

本書はドスタエフスキーが永眠一年前に完成したもので、トルストイの「戰爭と平和」と平行せしめようと企てた『偉大なる罪人』の第一部の梗概である。著者此一稿を殘し、遂に豫定の脫稿を見るに至らずして逝つたのであるが、氏が畢生の事業として如何に其心血を濺がれたか、何人も窺ふべきであらう。（定價五拾八錢）

△社會廓淸論　山室軍平著　警醒社發行

公娼、私娼及海外醜業婦の實際研究と、これが救濟の必要並に其方法を事實的に論究したるもの也。憂世家必讀の文字たるは勿論、何人も一讀して社會の暗黑面に對する一隻眼を養ふべく、文章平易にして、闇に巢くふ陰慘なる實例をも擧げたれば社會研究家、改良家の好參考たるべきを信ず。（定價壹圓）

△泰西雄辯集　大日本雄辯會發行

本書は、泰西古今の殆ど總ての大政治家の有名なる演説五十を網譯したるものにして、演説を通じて大政治家の面目を彷髴せんとする者にとつて重寶なる物也。（定價九拾錢）

△青巒禪話　大内青巒著　丙午出版社發行

著者の禪に關する談叢を集めたるものにして、第一語篇に於て石頭大師の『參同契』を講述し、第二默篇に於て二十餘章を設け、第三禪篇に於て約六十章に亙つて禪に關する古來の實例と理論を說き、第四解篇に於て結制安居の法を示せり。斯學研究の好參考書たるべし。（定價壹圓廿錢）

△達磨と陽明　忽滑谷快天著　丙午出版社發行

著者は禪學の造詣深き人にして我國近代の風潮を慨し、禪學の興隆を以て、之を救濟せんとするの意氣を有す。本書は如上の目的を以て王學と禪學を比較論究したるものにして、新精神生活の曙光を見る今日、禪學の研究も亦新しき意義を有するや勿論也。（定價壹圓拾錢）

△生きる日に　前田夕暮作　白日社發行

最近二年間の方作から撰拔した生活の歌六百餘首を集めたものである。著者はその一卷が、今までの孰れの歌集よりも一番強く自己の生命の流動を感ずるといふて居る。生活から流れ出たそれらの歌の中にわれらの心持とぴつたり觸れ合ふものが多い。（定價九拾錢）

△海外生活談　柿西藤一郎著　大成堂發行

本書は國民的發展の爲め、著者多年間の海外生活より得來りたる經驗を披瀝したるもの也。殖民政策の研究者、海外に事業を企てんとする人の好參考書也。（定價五拾錢）

△將來に於ける大問題 太平洋の爭覇戰　今西嘉藏譯　大同館發行

文明の中心は既に地中海より大西洋に至り、今や將に太平洋に向ひつゝあり。かゝる意味に於て本書は最も時代の要求を滿すものといふべき也。原作者は英國のフランクフォックス也。（定價八拾錢）

△貧の研究　日吉明助著　佐藤出版部發行

『貧を除外せば世にサタンなし』と自從せる著者が、何等學問上の形式に倚賴せずして、著者自らの識見を以て縱橫に之を論議せる痛快なる書也。（定價八拾錢）

△歐州の傳說　松村武雄著　金尾文淵堂發行

傳說がいかに其國國民敎育の上に其基礎を持つてをるかは實に驚くべき程であつて、傳說の據つて存する所を知らずんば近代の文學に於てさへも解し得られざるものがある。此書は通俗的に面白く書かれたるもので、それ自身單なる讀物としても亦興味あるものである。（定價金壹圓八拾錢）

△活修養　前田慧雲著　至誠堂發行

本書は古の聖賢君子並に高僧の逸話敎訓を取材として今日處世の修養に資せんとせるものにして、讀過するに從ひ不知不識の間に偉人の感化を體得して自ら本然の性に復歸するを得べし。此種の書物は著者の人格と共に讀者に影響する所大なれば記者は敢て健全なる家庭の好讀物として推奬するに吝なるものに非ざるなり。（定價壹圓廿錢）

△修學旅行 帝都案内　武藤忠義著　中興館發行

本書は著者が多年間の地理歷史の敎授より得たる結果にして『敎師が推薦する東京案内』としては最も理想的のもの也。寫眞あり、繪畫あり、和歌ありて學生にあらずとも興味を以て讀み得らるゝ好著也。（定價九拾錢）

△短歌日記　東雲堂發行

四六版の日記帖で、二日一頁に各一首づゝ、昔や今の有名なる歌人の、その季節に適した短歌が載せてある。青年詩人には趣味ある恰好な日記である。（定價四拾錢）

△有美式　青柳有美著　實業之世界社發行

有美氏の書いたものは時には餘りに奇矯に失したるやうに見えることもあるが、其れは只言ひあらはし方が奇矯過ぎるのであつて、其中には確かに著者の研究したる智識と、著者の直覺によつて得たる眞理とを幾分かづゝ含んで居る。偶には「又か」と思うやうな箇所もないではないが「流石は有美式だ」とほゝえまれるものもある。有美宗たるとアンチ有美宗たるとを問はず一讀すべき價値はある。(定價九十錢)

△生の闘爭　大杉榮著　新潮社發行

文章が生硬で、ゴツ〳〵して居る爲めに讀みづらいが、著者のラヂカルな思想は全篇を貫通して居る。(定價一圓)

△臺灣農業植民論　東郷實著　富山房發行

植民學の見地より臺灣の農業及び農業政策を論述せるものにして、斯界に於ける權威たるの價値あり。(定價二圓五十錢)

△膠州灣の占領と樺太の占領　蜷川新著　清水書店發行

國際法の專門家たる蜷川博士の新著にして膠州灣の處分については當局の參考となる節多かるべし。(定價一圓五十錢)

△歐洲大戰史(前記)　赤堀又二郎監輯　國民書院藏版

「サラエヴオの血烟」より說き起して今回の大亂の起るまでの列國の民情政情等を記せり。敍述に隔靴搔痒の嘆あれども參考となる節多し。(定價二圓五十錢)

△美術辭典　日本美術學院發行

「美術上の須要語と認むるもの五千餘を集め、之を繪畫、彫刻、建築、工藝美術、裝飾及び圖案、服飾、彫版、題材、人名の各部に分ち」叮嚀懇切なる解說を附したれば、至極便利なる書也。定價金四圓、特價金參圓貳拾錢)

△リラの花　よさのひろし譯　東雲堂書店發行

佛國現代の詩百餘篇を緝譯したるものにして、とり〳〵の新らしき詩人の新らしき思想感情、眞面目に研究すべき價値あり、又讀んでなか〳〵面白きものも少からず。(定價一圓三十錢)

△三叉文存　竹越三叉著　至誠堂發行

三叉先生今や多く政論壇上の人として知らるゝも其風流を好み、典雅を愛するの情と、其流麗にして暢達の筆とは、時に先生を籍つて、又再び詩界騷壇の客たるを禁ずる能はざらしむ。此篇即ち眼に政界の風雲を望み、足未だ文藝の花園を離れざる先生の眞面目を窺ふに足るの好者にして、政治と文藝と、時勢と思想と、經綸と趣味と手綱染の如く、綯まぜに交錯せる處面白し。(定價一圓廿錢)

△歐洲現代政治史(上下二卷)　大日本文明協會譯　文明書院發行

セーニヨボー氏の歐洲現代史を譯したるもの也。原著は一八一四年の維納會議より一八七〇年の普佛戰爭に至るまでを教科書流に書きたるものゝ中にては、最も詳細にして且つ最も傑れたるものなれば何人と雖も之を一讀するの價値あり。(定價各册二圓二十錢)

△當世策士傳　鵜崎鷺城著　東亞堂發行

書かれた當人からいはしたら不服もあらうし、書かれた人の友人などから見たら誤りもあるかも知れないが、一般の人には讀んで面白く、又相當の知識が得られる。氏の近來の人物評論の中で傑れたるものである(定價一圓二十錢)

△新譯平家物語(上卷)　澁川玄耳著　金尾文淵堂發行

「平家物語」は「源氏物語」などゝ違つて、普通の讀書力あるものには分り易いものだから、新譯するの必要は大してあるまいと考へる。然し玄耳氏の事だから、そこの處は拔目なく、譯文は又譯文丈けの價値があるやうにしてあるのは流石だ。挿畫の木版の凝つて居るのは文淵堂でなければ出來ぬ藝當だ(定價三圓)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

■頒布部數八拾餘萬に達せる■

アカギ叢書

【主張】古今東西の科學藝文中吾人の知るを要するもの豈甚だ妙からんや一々探究せんに生涯を盡すも得べからず
一、精髓の結晶を提供せんとするアカギ叢書の出現は寔にその所也加ふるに文化普及の途上に於る一切の障碍は悉く之を除去せん事を期し
一、價格を最廉の拾錢に竟め
一、叙事を簡潔にし
一、解釋を平明にす
その實際的價値に到りては乞ふ之を既往の頒布部數に問へ

各冊 內容百頁內外 字數一頁四百字
定價拾錢 郵稅每冊各金貳錢
書肆
東京麹町三番町 赤城正藏 發行
振替東京一〇四三二
電話番町二八〇番

【特待】金貳圓四拾錢御送附の方に限り御附錄の叢書貳拾冊及百冊納書架壹個全部送料當方負擔にて送附す
何書架御不用の方には御隨意の叢書五冊無代進呈す
一書架單獨御入用の方は實價一個金五拾錢送料金拾貳錢

【歐洲文藝】
■人形の家（一名ノラ） ■海の夫人 ■鴨 ■幽靈 ■ブランド ■廢都 ■ヂョバンニ（上） ■同（下） ■死の勝利 ■フランチェスカ物語 □犠牲 ■サロメ ■新聞記者 ■靈の曲 ■復活 ■アンナカレニナ ■活ける骸 ■女の一生 ■ピエルとジャン ■モンナヴンナ ■ワンダーブック ■父 ■絆 ■結婚生活 ■ハムレット ■ヴェニスの商人 ■ロミオとジュリエット ■神曲 ■ユーデット ■マリアマグダレース ■マグダ（一名故郷） ■ウオーレ夫人 ■皇帝ネロ ■武器ト人 ■名譽 ■初戀 ■虐げられし人々 ■同下
■痴人（上） ■同（下） □罪と罰 ■サランボオ ■何處へ行く ■サフオ ■日の出前 ■沈鐘 ■エレクトラ ■ヘルマンとドロテア ■女優生活 ■幻の海 □春の目ざめ □ウヰルヘルム・テル □第二タンカレー夫人 ■假分限 ■イリアット ■ハーディの小說 ■神話と傳說

【國文學】
■古事記 ■源氏物語（上） ■同（下） ■平家物語

【演劇】
■西洋演劇史 ■日本淨瑠璃史 ■女歌舞伎

【美術】
■奈良の美術 ■支那の美術 ■日本建築史要 ■日本の彫刻 ■日本の浮世繪

【歷史及傳記】
■金閣と銀閣 ■江戸の世態 ■鎌倉の史話 ■新文明の源流
■バルカンの風雲 ■最近の歐州 ■マキシムゴオルキー ■ヴェニスとフロレンス ■シルレル ■ドストイエフスキー ■シーザー ■フレデリック大王 □エマーソン

【地理】
■膠洲灣 ■最近獨逸の發展 ■東方見聞錄

【哲學】
■プラグマチズム ■オイケンの哲學 ■ベルグソンの哲學 ■オイケンの宗教思想

【社會學】
■群衆心理（上） ■同（下） ■近世社會運動 ■マルクスとエンゲルス ■ゴムトの社會學 ■スペンサーの社會學 ■富國論

【政治】
■マキァヴェリズム ■都市改良問題

【教育】
■エミール

【各國禮法】
■歐洲禮節

【博物】
□ダーウインの進化論

【理化】
■飛行機講話

■は既刊 □は近刊
□以下每月十篇內外刊行

最新刊

文學士 後藤末雄氏著

近代佛蘭西文學

工學士 大倉直介裝幀
佛蘭西式頗る美本

定價一圓廿錢
郵稅金十二錢

佛蘭西文學の我文壇に紹介せらるゝこと既に年あり。之に關するの著書又尠なからざるにあらずと雖も、多くは作品の飜譯にあらずんば僅に斷片的のものに止まり、未だ系統的に研究批評せられたるは一もあるなし。本書は實に此の失を補はんが爲に現はれたるものにして、著者は新進作家として文名嘖々たると共に、又佛文學專攻の學士たるは人の知る處。今や年來の薀蓄を傾け半歲の努力を費して初めて此書を成す、我國文壇に於ける唯一の權威ある著たるや論を俟たず。而して其の內容に至りては、彼の心理小說の鼻祖スタンダルを說き、寫實主義の開祖バルザックを論じ、自然主義の主唱者たるフローベル・ゾラ・モオパスサンを品隲し、印象派の巨匠たるゴンクール・ピエール・ロチを說き、最近佛文壇の泰斗たるアナトール・フランス・アンリー・ド・レニー・及びロマン・ローラン等に至るまで評隲解說すること詳細切實を極む。若夫れダカダンスの意義を論じ、美術と文學の交涉を說くの點は本書の誇りとする處にして、苟くも藝術に志ある者の必ず一讀を要すべき文字たり。殊に著者は青年作家中隨一の文章家を以て鳴る者、其の優婉流麗の筆致は最も能く佛文學の精髓を語るに適し、以て讀者を魅するに足らん。佛蘭西文學は實に泰西文學の淵源にして、佛蘭西文學を語るは本書を以て唯一無二のものとなす。即ち本書を讀まざる者は共に泰西文學を語るに足らざる者といふべきなり。

發行元 東京市本鄉區元富士町二 振替東京二五二〇〇番 石川文榮堂

(中付五の四)

中央公論新年號創作

何處までも……正宗白鳥

兵隊の宿……上司小劍

山椒大夫……森鷗外

お艶殺し……谷崎潤一郎

現代男……坪內逍遙

舞鶴心中……近松秋江

大河のほとり……田山花袋

大日本

第貳巻第一號

- 本號特に二百頁餘
- 内容寫眞六十餘葉
- 何れも皆最新鮮明
- 定價三十錢稅二錢

口繪 長原畫伯拜寫 **宮城全景**（三色精版）

二重橋の畫は多けれど宮城の全景を拜寫せるは本畫を嚆矢とす眞に天下の絕品 日本一の老木

■大正の大御代 ■日本人論……■來るべき世界の新形勢……以上社說

▲偉哉日出之邦大日本……辻村楠造
▲我陸海軍の國際的地位……蘭陵將軍
▲ミリタリズム……稻田周之助

▲國是より見たる支那保全論……寺尾博士
▲英領的日本……遠藤博士
▲戰後の世界的禍根……阿部學士

■世界大勢（外交界…歐米、露國、支那 軍事界…陸戰、海上）

■帝國刻下の大務と急務……（仲小路廉、犬養毅、田中博士、井上準之助、眞田鶴松、新渡戶博士）

▲大戰と飛行機……日野少佐
▲滿蒙の俗論を排す……觀潮樓客

▲戰時救急の施設……白石吹城
▲廣告禁制論……中島信虎

■東歐戰局西歐戰局……高塚少佐

●國防縱談

●忙中有閑

●大才の庸物大隈重信……豫章學人

●酒さま〳〵物語

日本は外國博覽會に參同の必要ありや……（人牛山人）

●將來の大日本……肝付男爵
●日本三大風景論……本多博士
●ツエペリン飛行船失敗日誌
●高千穗峯と瓊々杵尊……無庵

●時代と茶の湯……附日庵長遊子
●劇界今何の狀……岡野紫水
●戰役と詩人……二邑生
●漢詩、和歌、俳句、要報、新刊評

●喜劇脚本 **親ごゝろ**……松居松葉

●軍事小說 **海賊**……塚原澁柿園

■**日露兩國勢圏圖** 石版四色刷 本號附錄

好評嘖々甚だ圧行十餘を迫られたる地圖出來至急御申込を乞ふ

■**列强支那利權獲得圖**（各一部定價金十錢郵稅）

■**太平洋一般兵要圖**（五部迄二錢）

前者は陸に於る列國勢力の浸潤と識別し後者は太平洋上に於る列强の兵略機宜を明にす他に得べからざるもの也

發行所 東京市牛込區東五軒町一 **大日本社** 電話番町五三三一 振替東京二九三〇二

大賣捌所 東京堂 東海堂 北隆館 上田屋 至誠堂 良明堂

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

文學士 後藤末雄氏著

最新刊

近代佛蘭西文學

工學士 大倉直介裝幀
佛蘭西式頗る美本

定價 一圓廿錢
郵稅金十二錢

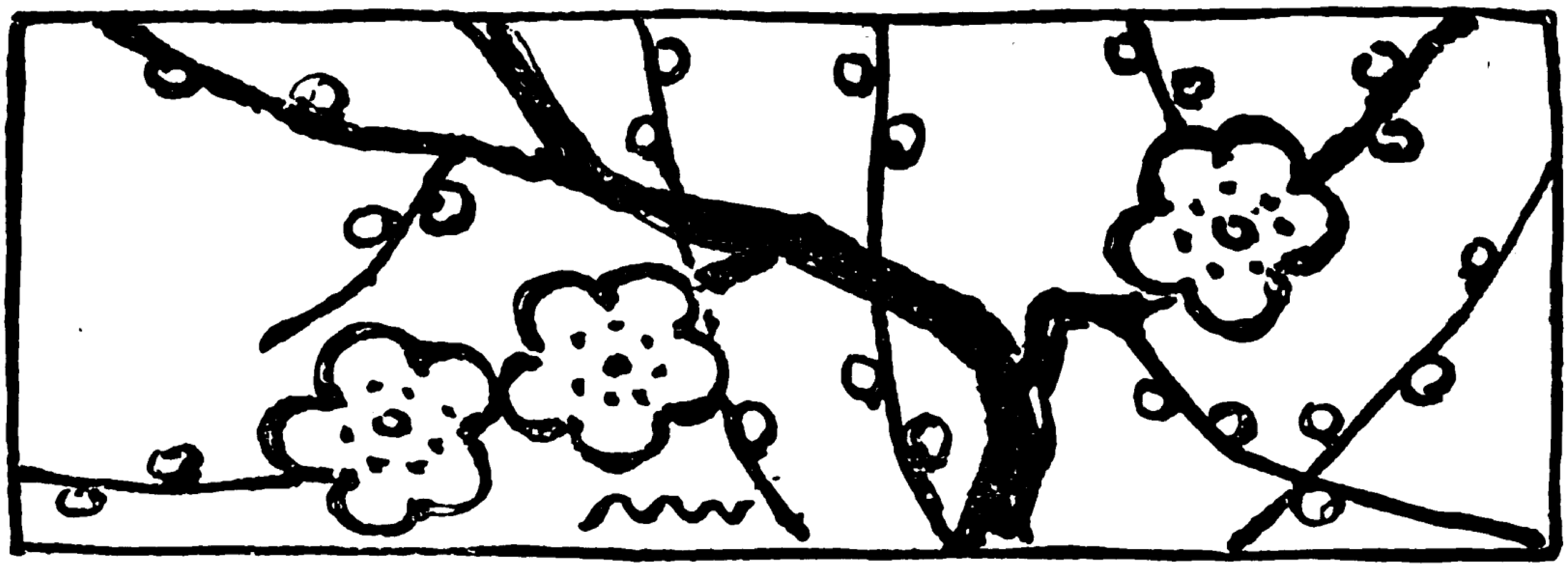
（中付五の四）

佛蘭西文學の我文壇に紹介せらるゝこと既に年あり。之に關するの著書又尠なからざるにあらずと雖も、多くは作品の飜譯にあらずんば僅に斷片的のものに止まり、未だ系統的に研究批評せられたるは一もあるなし。本書は實に此の失を補はんが爲に現はれたるものにして、著者は新進作家として文名嘖々たると共に、又佛文學專攻の學士たるは人の知る處。今や年來の蘊蓄を傾け半歳の努力を費して初めて此書を成す、我國文壇に於ける唯一の權威ある著たるや論を俟たず。而して其の内容に至りては、彼の心理小說の鼻祖スタンダルを說き、寫實主義の開祖バルザックを論じ、自然主義の主唱者たるフローベル・ゾラ・モオパスサンを品隲し、印象派の巨匠たるゴンクール・ピエール・ロチを說き、最近佛文壇の泰斗たるアナトール・フランス・アンリー・ド・レニー・及びロマン・ローラン等に至るまで評隲解說すること詳細切實を極む。若夫れダカダンスの意義を論じ、美術と文學の交涉を說くの點は本書の誇りとする處にして、苟くも藝術に志ある者の必ず一讀を要すべき文字たり。殊に著者は靑年作家中隨一の文章家を以て鳴る者、其の優婉流麗の筆致は最も能く佛文學の精髓を語るに適し、以て讀者を魅するに足らん。佛蘭西文學は實に泰西文學の淵源にして、佛蘭西文學を語るは本書を以て唯一無二のものとなす。即ち本書を讀まざる者は共に泰西文學を語るに足らざる者といふべきなり。

發行元 東京市本郷區元富士町二 振替東京二五〇〇二番 石川文榮堂

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絶す

中央公論新年號創作



何處までも

正宗白鳥

（一）

不快な夢に襲はれてゐた川島は、ふと目を醒ますと、立上つて、盲目捜しに蚊帳の上に垂れてゐる電球を捻つた。光は正體なく眠つてゐるおふくの顔を青白く照らした。川島は女の眠りを亂さぬやうにそつと蚊帳を出て、茶簞笥の上の枕時計を見た。夜の明けるのにはまだ少し間があつた。便所へ入つて、宵の雨に破られた窓から外を覗くと、星が燦めいて風は鎮まつてゐた。濕つぽい冷たい夜氣の頰に觸れるのがいゝ氣持だつた。で、彼れは雨戸を開けて庭へ下りて、風に倒された草花の側に蹲んで、暫く蟲の音のみしてゐる夜を見詰めてゐた。

雨水の臭ひや、地を匍つてゐる白粉花の匂ひに、をり／＼神經が刺激された。そして、そんな臭ひが心の底に潜んでゐる厭な記憶を誘出すやうだつた。

彼れはつと立つて、その厭な記憶を押潰すやうな氣持で、草花を踏躙りながら

彼方此方と狹い庭を歩いた。目は次第に冴えて來た。星のキラ〳〵してゐる碧空を仰いだり、幽かな物音に耳を澄ましたりしてゐると、妙に物悲しくなり出した。流星が具上を掠めて向うの森の方へ隕ちた。大きな蟲がむづ〳〵彼れの足を匐つてゐた。

かうして一人靜かに戸外の夜を見詰めることは彼れには嘗て例のないことだつた。見詰めてゐると、隣の庭の高い栗の木の幹や枝が化物のやうに見え出した。枝の間から黑い者が覘いてゐて、それが人間であるやうにも思はれ出した。垣根を蔽うて枝を出した石榴の葉蔭にも何やらうごめいてゐるやうだつた。

何處からか何かの囁きが聞える。彼れは自分の耳を疑つたが、疑へば疑ふほどその囁きが心に染込んだ。葉末を動かすほどの風も吹いてゐないのに、黑い枝と枝とが互ひに話合つてゐるやうに思はれた。

ふと鷄の聲が闇を破つて朗らかに聞えた。

「あなた何して入らつしやるの。私吃驚しちやつた」雨戸の隙間からおふくが顏を出した。

「お前も目が醒めたのかい。ぢや此處へお出でな。」川島は二三歩側へ寄つて差招いた。

「厭なこと。今時分庭へ下りてどうするの。今夜はあなたは變だわ。」おふくはさう云つて欠伸をした。そして、閾の上に蹲んで、男の黑い影の動くのを夢のやうに見てゐたが、二三度男に招かれると、玄關から履物を持つて來て、何の氣なしに庭へ下りて、男に寄添つて蹲んだ。

「まあじつとして見とゐでよ」と川島が云ふと、

「何を見るの」と、おふくは問返したが、答へがないので、相手の見てゐる方へ目を留めながら暫く默

つてゐた。

鷄はまた勢ひよく鳴いた。車の音がはつきり耳につき出した。あたりはまだ暗闇に鎖されて夜明けらしい氣色は空に見えなかつたが、川島の心は今まで引込まれてゐた夜から離れた。

「あなた何を見てるの？」

「おれはもう寢られやしない。」

「私風邪を引きさうだわよ」おふくは袖を掻合せて、生欠伸を漏らした。

「今時分散歩したつて詰らないわ。それよりもお茶でも沸かすから、家へお入りなさいな」

「ぢや、おれ一人で行つて來ようか。お前は寢るなり火を熾すなり、自分の好きなやうにするさ」

川島がさう云つて行きかけると、おふくは慌てゝ、「ぢや、私も隨いて行く」と縋りつくやうにした。

「おれはこのまゝでいゝけど、お前は羽織でも引掛けてお出でよ」

「えゝ。先へ行かないで表で待つてゝ頂戴」

おふくが手早く身仕度して玄關から出て來る間に、川島は庭の垣根に添つて、門の方へ出た。この境内には小さい家が四五軒建つてゐるので、表門は夜中開放されてゐる。川島はその門の外に立つて、角の新屋の軒燈の光に顏を照らされてゐたが、やがて騷々しく驅けて來たおふくの顏形が妖怪のやうに彼れの目に映つた。

「まだ何處でも起きてゐないね」

「さうね。……今時分歩くよりや寢た方がいゝぢやないの」

川島は暫く女の顏を見ぬやうにして、口も利かなかつた。二人の下駄は砂利の上に軋つてゐた。坂を

下りると、片側には軒燈のない小さい家が並び、片側の長い垣根には樹木が蔽被さつてゐて、道はますます暗かつた。

「私怖いわ。早く歸りませう」と、女は男に寄添つて、手を觸れた。

「も少しゝたら夜が明けるさ。早稻田へ出て久振りに田圃を見て歸らう。もう稻に穗が出てるだらうな」

川島は煩さい重苦しい氣持から離れて、初秋の田舍景色を懷しく思浮べた。……鳴子が風に鳴つてゐる。色づいた田の上を蜻蜓が飛んでゐる。朝日の光や夕日の光が靜かに人に親んでゐる。……と彼れはおふくなど突飛ばして、獨りで田舍へ驅けて行つて、自由にすが〳〵しい空氣を吸つて、身を休めたくなつた。

春から夏、夏から秋と、彼れは最早五六ヶ月の間この女に關はつてゐたので、生れて以來味はつたことのなかつた樂みやら苦しみやらに、身體も頭も疲らし切つてゐた。寢ても起きても女が五體に絡みついてゐた。たとへ獨り歩いてゐても、芝居など觀たり音樂など聽いたりしてゐても、彼れの耳目の奥には女が潜んでゐて、絶えず彼れの神經を刺激してゐた。それが悅しかつたのだつたが、この頃は云ひやうのない惱みを覺えるのみとなつた。聲も臭ひも肌の色も、女の名さへ彼れを苛む責道具となつてゐた。怨靈に取付かれてゐるやうな恐ろしさが感ぜられてゐた。

「少し明るくなつたね」と、川島は東の空を見上げて云つた。川を隔てゝ田圃や森の見渡される廣々とした所へ來た。川には水嵩が增して濁つて勢ひよく押流れてゐた。川緣に佇んで水面を見詰めてゐるとふと後に立つてゐる女を突落したいやうな考へが彼れの心を掠めた。そのひよろ〳〵した脊を足の先で

一度蹴りさへすればいゝのだ。……と、さう思ひながらわれ知らず振返つて、女の姿を見て驚いたが、薄暗いために女は何とも氣がつかなかつた。
「私、やつと目が醒めてよ。今まで夢のやうだつたの。さあ早く歩いて早く歸りませう」と、おふくは男の肩に手を掛けて搖り動かした。
「危いぢやないか」川島は後退りして、「落ちたらどうする。おれは泳ぎを知らないんだからね」
「さうしたら私も飛込みますさ。誰れも見てる者がないからいゝわ」
「お前も馬鹿に度胸が据はつて來たね。何時もびく〳〵してる癖に」
「だつて生きてればこそいろんな心配があつてびく〳〵してゐなけきやならんけど、死んぢまへばそれつ切りぢやないの」
おふくは微笑しながら氣輕にかう云つて、わざと水面を見詰め〳〵川緣を傳つて、男が危がるのを悦しがつてゐた。橋を渡つて當てもなくぶら〳〵してゐる間に、遠くの森や人家が朧ろに浮んで、影のやうだつた二人の顔が互ひの目にはつきり映り出した。寢卷に細帶を捲付けて雨に朽ちた汚い庭下駄を穿いて、裾から足へ泥を蹴上げてゐる男の姿に初めて氣の付いたおふくは、「狐に抓まれたやうだわね」と笑つた。
「お前だつてさうぢやないか。髮が亂れてるし、足が汚れてるし」と云つたが、川島は女の神經を害ふやうなことは口に出さなかつた。
車を挽いて來た牛乳配達は二人の姿を顧み〳〵行過ぎた。一度づゝ剝いで行くやうに明るくなつてゐ

る朝景色は、女の目にさへ美しかつたけれど、それにつれて自分のしどけない身裝も目立つて來るのが極りが惡かつた。で、男を促して今來た道を後戻りした。朝日に追付かれぬやうに、せか〳〵息を吐きながら足早に歩いた。そして、家の中へ入ると、蒲團の上に首伏して、「近所ぢや變に思つてるでせうね。誰れも見なかつたか知ら」と云つて、「あなたが私を困らせやうと思つてあんな所へ連れて行くんだもの」と、甘へた聲を出した。

川島は聞えぬ振りして、雨戸を繰開けたり、顔を洗つたり衣服を着替えたりした。煙草盆を縁側へ持出して、快く煙草を二三服吸つた。庭は嵐に亂されてゐる上に、自分の踏躙つた跟がついてゐたが、奇麗にしようとも思はなかつた。どうせ此處に永居をするんぢやないから、荒れたまゝに打遣つて置いて、落葉さへ掃出す氣はしなかつた。闇の中では化物のやうに見えて脅かされてゐた高い栗の樹の頂には、冴えた朝日が映つた。

「おい、もう床を片付けて火を熾しちやどうだい。腹が減つたよ」

聲を掛けても、おふくが返事をしなかつたので、川島は女の側へ寄つて、「あれつぱかりでそんなに疲れたのかね」と云つて、耳朶を弄びながら抱起した。が、ぐにやりとした身體を起して凭れかゝつた女の褪せた顔色を見ると、長い間の癖で浮かと戯れかゝつた自分の所作が後悔された。女の手足の溫か味が無氣味な感じを彼れの皮膚に傳へた。

「私、どうしてもあなたの量見が分らないの。昨夕はあんな話をして、今朝は私の知らない間に外へ出てるんだもの。乾度私を打つちやらかしといて、何處へか行かうと思つてゐたんだわ。さうでせう。」

一馬鹿なことと云ふものぢやない。昨夕あゝ云つたのはお前のためを思つたからだよ。どうしてもそれがお前に分らないだらう」川島はさも情けなさゝうに云つて、一湯治にでも行つて身體を直したいつて、お前はよく云つてゐたぢやないか。だからおれが無理な工面をしてまで行かせる氣になつたのさ。本鄕の叔母さんが隨いて行つて呉れると云ふから、おれも安心してたのに」

「だつて此間はお母さんなんかにやる金はないつて、ぷり〳〵怒つてたぢやないの。それが昨夕になつて急にお大盡さん見たいなことを云ふのは、私變に思ふわ。浮つかり話に乘つて喜んでたのは、私が馬鹿だつたのね。あなたは親切ごかしで人を突放さうとするんだわ。この頃はよく詰らなさゝうな顔をしたり、私に內所で何か考込んだりしてるんですもの」

「お前のやうに氣を廻しちや果てしがないよ。惡く見る氣になりやどんな人間にだつて難癖がつけられるからね」

川島は不斷聞飽いてゐる執拗な女の口說を避けやうとして、座を立つて北窓の格子の間から狹い空を仰いでゐた。そして出鱈目に節をつけて、小聲で何か知ら口すさんでゐたが、すると、次第にセンチメンタルになつて、自分の唄に引込まれて、おのれを憐れむやうな氣持になつた。後は見ないやうにしたが、女が寢床を片付けたり掃除をしたりしてゐるのが、一々頭に響いて、自分の家の中は針の莚のやうだつた。

どの男も皆かうなのか知ら。おればかりが女一人を持餘してゐるのか知らんと、知人の誰れ彼れを思浮べたが、こんな無氣味な痛ましい思ひをしてゐる男は外に一人もなさゝうだつた。人に嗤はれて親兄

弟に心配を掛けて、勤め先までも爲損つて關はり合つて來た女の正體が、こんなだらうとは夢にも思はなかつたのだつた。…………何時か讀んだ昔の物語に、ある男の寢室へ何處からともなく夜な〳〵美しい女が忍んで來て、互ひに契りを結んで、明け方までひそ〳〵睦じい話をしてゐるのを、家の者が氣付いて、襖の隙間から覗いて見ると、女は恐ろしい妖怪だつた。男は日に〳〵病衰れて今日明日の命さへ危まれてゐながら、その女を離れることが出來なかつたといふ話が書いてあつたが、それが無稽な話ではないやうに、今の彼れには思はれ出した。……

川島の頭には、おふくの姿形を醜惡怪奇に描かうとすれば、いくらでも描かれた。その癖、外の女をばさうは思はれなかつた。おとくさんにしてもおそでにしても、以前懇意だつた女がどれも懐かしかつた。おふくとは聲も色も全で種類の違つた人のやうに思はれた。

「お早う御座います」隣の妻君が何時ものやうに快活な聲を掛けて通過ぎた。それに答へたおふくの聲は、末枯れて力も艶もなかつた。

(二)

茶漬を掻込んだ後で、川島は昨夕の眠不足を補はうとして、直ぐに枕を出して横になつた。おふくもざつと食事の跡片付を濟ますと、がつかりして、雑巾掛けをしたり。午餐の献立を考へたりする氣はしなくて、長火鉢の傍に縮こまつて假睡をはじめた。客や郵便は滅多に來る氣遣ひはないが、御用聞に呼起されるのが煩いので、臺所の戸は堅く鎖して置いた。息の通ふほどの近くに男がゐさへすれば、おふ

くは安んじてすや／＼眠入られるのだつた。

鐵瓶に湯氣を噴出してゐた。日は緣側深く差して眞夏に劣らぬほど暑さは激しくなつた。蝿は汗ばんだ二人の額や首のあたりを吻めてゐた。庭には蟬が囂ましく聲を立て丶、近所の子供達が袋のついた長い竿を垣根越に突出して騷ぎ出した。隣の下女は洗濯物を物干竿へ掛けた後で、例のやうに垣根の隙間から此方の家を覗いてゐた。二人の睦まじさうな樣子や言合ひや、日々の暮し振りが、自から下女の注意を惹いてゐたのだつた。

一しきり經つて川島が目を醒まして、身體の汗を洗ひに臺所へ出ると、その足音におふくは聽くも目を醒まして、きよろ／＼あたりを見廻した。時計の針は止つてゐた。

「誰れも來なくつて？」と訊いて、「髮を結つてお湯に入つて來たい」と呟いた。

「ぢや行つてお出で。飯はおれが炊いとくから。お菜は佃煮か牛肉の罐詰でも歸りに買つて來るとい丶」

「え丶」おふくは一寸その氣になつたが、直ぐに厭になつて、「あんなに日が照つてるのに、外へ出るのは怖いわ。髮結ひさんへは涼しい日に行くことにして、今日は自分で捲きつけて置きませう」

「奇麗にして俥にでも乘つて、久振りにお母さんに會つて來たらい丶だらうに。あの銘仙の着物だつて拵らえたきり碌に着ないぢやないか。もう秋だから今の中にせつせと着とかなきや詰らないぜ」

「私何のつもりてあんな着物を拵らえたのだらう。着て行く所もないのにね。誰れかにやるか賣つちまつてもい丶わ」

「お前は慾がなくなつたね。だけど、若い間は小奇麗にした方がよささうだが」川島は臺所の戸を開け

て、風通しのいゝ板の間の柱に凭れて、今朝からまだ手に執らなかつた新聞を見てゐたが、その中の記事で思出したやうに「おれは晝から出て來なきやならんよ。今日は九月の二度目の日曜だから」
「何か用事があるの」おふくは不安らしい目付をして、「あなたはそんなに外へ出歩きたいの」
「遊びに行くんぢやないよ。おれだつて毎日家にばかりごろ〳〵しちやゐられないぢやないか。この日曜には毎年昔の同級生が寄合ふことになつてるんだ」
「だけど、あなたは昔のお友達なんぞにどう思はれても構はないから往來はしないと云つてたぢやないの。それにこの頃はよくいろんな所へ出掛けたくなつたのね」
「滅多に出掛けやしないぢやないか。しかし、涼しくなつたら、おれも少し世間へ出る工面をしなきやなるまいよ。」
「お勤めに出たり、いろんな人と交際したくなつたの。何故あなたはさうだらう？ 私が厭になつたから、そんなことを考へ出したんだわね。初の間はあなたはさうぢやなかつたのに」
川島は頭がむづ〳〵して來て眉を顰めたが、強いて柔しい調子を裝つて、「お前は病氣だから變に考へられるんだよ。男が一日外で働いて、夕方家へ歸つて來て、氣持よく世間噺でもしながら一緒に晩餐を食べるのが、本當の家庭の樂みぢやないか。お隣りの家だつてさうだらう。十日や二十日は兎に角、年中おれ達のやうに不規則に暮してる家はありやしないぜ。第一饑え死するより外仕方がなくならあ。」
「饑え死したつていゝわ。私、お隣りの家なんかちつとも羨ましかないの。あんな高慢ちきな奥樣風を吹かす奴は大嫌ひさ。」おふくはいら〳〵した調子で言放つて、「お隣りはどうだつて構はない、私達は私

達で好きなやうにしてたらいゝぢやないの。あなたがうか〳〵外へ出歩くと私怖いよ。途中で[illegible]こして轉んでやしないかと思つたり、川へ落こちやしないかと思つたり。そりや心配なの。私を置去りにして遠方へ行きたさうにも思はれるんだから尚更だわ。どうせ私は永生はしないんだから、私の生きてる間だけじつとしてゐて貰ひたいの。是非あなたが遊びに入らつしやるんなら、私隨いて行つてよ」

「遊びに行く時は無論一緒に行くさ。これまでだつてさうだつたらう。その中凉しい日に髮を結つて、百花園へ秋草でも見に行くさ。この春のやうに言問で團子を食べて、歸りに電氣館の活動でも見て來るといゝね。」川島は新聞の遊覽案内を見て話の種にした。が、女は物見遊山については殆んど興味を持つてゐなかつた。

川島にしても、この女を連れて日の照るところを遊び歩く氣はなかつた。そして、女を慰めるつもりて、口では普通の人間の云ひさうなことを云つてゐたが、彼れの心には周圍が陰欝に映つて、二人の身の上を世間並につくり直して、健全に日々の生活を立てやうとする考へなど更に起らなかつた。實際女よりも自分の方が變になりさうで、この女からのがれこの家から飛出さなければ、氣が狂ひはしないかと氣遣はれた。……て、「これではいけない」と、自分で自分に力を付けて、胸を擴げてどしん〳〵と家の中を彼方此方と歩廻つた。

その樣子が可笑しいと云つて、おふくは出拔けに笑ひ崩れたが、すると、川島も釣込まれて笑出した。おふくは稍々元氣づいて、鏡臺を持出して髮を梳らうとしたが、窶れた顏は自分の目にも際立つて映つたので、身震ひして思はず顏を背けた。

「今日は何故こんなになつたんだらう。私厭だわ」と涙ぐんで、「私は幽靈のやうになつたわね。あなたにはさう見えなくつて?。」

「お前は自分の事をも惡く〳〵思ふからいけないんだよ。おれの云ふ通りにしさへすれば、身體も丈夫になつて色艶がよくなるんだ。今だつて髮を結つてお化粧をして御覧な。綺麗になつて氣持がせい〳〵して來らあ」

「さうか知らん」おふくは怖いものを見るやうにそつと鏡に顏を映したが、男に力を添へられたゝめか、今度は前ほどに醜くは見えなかつたので、稍々心を鎭めて、「あなたに愛相を盡かされさへしなければ、どうだつていゝけど」と、男の思惑を索るやうな目を向けた。

が、川島は相手の望んでゐるやうな誓ひの言葉は口から出し得なかつた。上邊だけの愛情を寄せかけるのさへ躊躇されて、擽つたい滑稽な氣持がしてゐた。

(三)

さま〴〵に女を說賺かして、川島は午過ぎに家を出た。行先は極つてゐなかつたが、先づ床屋て髯を剃つて、目白坂を下つた。電車の終點の雜沓は目まぐろしくて、濁つた川水や眞晝の光は彼れの頭を乾かすばかりて、望んでゐたやうな淸新な氣は何處にも漂つてゐなかつた。

彼れは電車に乘つて下町へ出て、ついに新橋の停車場へ入つた。時間表など見てから待合室へ入つて、空いた席へ腰を掛けた。鞄や信玄袋を側に置いて發車時刻を待つてゐる他所行の身裝をした男女を見廻

しながら、自分の紙入を出して見ると、可成りの旅費はないではなかつた。……「あの女を打やらかして、このまゝ行ける所まで行つて見やうか。後はどうにでも收りのつかないことはあるまい。誰れかに頼んで口を利いて貰へば、こんなことは譯もなく解決するものだ。世間にはいくらも例のあることだから」と、無雜作に考へたが、すると、おふくの怨めしそうな顔付が目の前にちらついた。其處等にゐる世間の女とは違つて、おふくの執念深い毒々しい氣質は、生きてゐる限り自分に祟らないで無事に見のがして吳れさうではなかつた。て、先日のやうに決心の甲斐もなく愚圖々々あの家へ歸つて行く自分を見窄らしく想像してゐた。

歸るにしても成べく時を遲らせたかつたが、友人を訪ねると、屹度今の自分の生活の有樣を訊かれるだらうから、わざ〳〵痛い所に觸られに行くやうで心が進まないし、と云つて、暑さを冒して町を歩いてばかりはゐられなかつた。

彼れはこの頃の自分については何も知らない緣の淺い知人を搜してゐたが、と、ふと、學生時代からをり〳〵遊びに行つてゐた神樂坂のある家を搜し當てた。三味線の音を聞いたり女を相手に陽氣な話をする氣はないが、氣の置けないその家でせめて伸々と寢ころんでゐたくなつた。て、彼れは銀座でおふくへの土産の甘い物や。海苔などを買つて、神樂坂へ戾つて久振りて×の家の閾を跨いだ。

家の中はひつそりとしてゐた。狹いながらよく拭磨かれて、見るから涼しさうで住みよささうだつた。外に客はないので、好きな部屋を撰んで、冷たい物を飮食ひしながら、外の人通りを見下したり知合ひの女中と只の世間話をしたりして時を過ごしてゐたが、女中は昔馴染の藝者の名を擧げて、誰れか

を呼ばせたさうに話を向けて來た。その時々の浮いた興味に驅られて女から女へ移つて行つた經驗のない川島は、深い馴染でもない女を呼んで、その場限りの惡巫山戲をしたり、唄つたり騷いだりしたことは嘗てなかつたので、友人と一緒でゞもなければ、金のために媚を寄せる藝者などを近づける氣は更になかつたのだが、只自分一人飮食ひして歸るだけではこの家へ氣の毒なやうに思はれて、女中の勸めを無下に斥け得なかつた。「ぢや、誰れでもいゝから、一人呼んで來るさ」と、女中任かせにした。そして、どうせ藝者を呼ぶほどなら、人の眞似をして、無理にも快活に騷いて、鬱陶しい氣持を紛らせるやうにと考へてゐた。新たに酒や肴をも誂えて、頻りに杯を重ねて、人並に遊んでゐるつもりになつてゐた。醉ひが廻るにつれて頭は次第に興奮した。

興奮した頭には女中が連れて來た藝者が、夢の中に浮んだ女のやうに見えた。先方では顏も名前も覺えてゐると云つたが、川島の方では全で記憶が辿れなかつた。女中と藝者とが仲間内の噂をして笑ひ興じたり、謎見たいなことを言合つたりしてゐるのを聞いてゐると、暫く耳にしなかつた生々した女の言葉が思出された。……毎日自分が聞いてゐるプロゼイックなダルな言葉に比べると、何といふ明るい美しい響きを持つてゐるのだらう。

川島は肱枕で横になつて、紅らんだ目で微笑の漂つた二人の顏を見ながら、自分はあまり口を利かないでゐたが、やがて女中が階下へ下りると、藝者は三味線を執つて、何か唄へと勸めた。

「僕は何も知らないよ。元から唄なんか一度も唄つたことはなかつた。市村と來た時だつてさうだつたらう」

「さうでしたかね。でも、あの後お覺えなすつたでせう」

藝者はお愛相を云つて、膝を直して伏目勝でお座付をつけた。音曲に親しみの薄い川島には、かねて彈手の巧拙を區別する力はないのだつたが、今耳に觸れる音色は腸に染み渡つた。女を強いて二つ三つ續けざまに唄はせて、目を瞑つて聞惚れてゐると、われ知らず涙が頰を傳つてゐた。女は訝しげに見守りながら、

「あなたどうなすつて？。」と、三味線を置いて銚子を執つて、「お一ついかゞ」

川島は無言で起直つて、くら／＼する目を据ゑて猪口を持つた。そして、二三杯がぶ呑みしてから女に差して、「さうだつたかな。市村に誘はれて來た時にお前に會つたのかね。……あの時分の僕と今の僕とは全で人間が違ふぜ。違つて見えないかい」

「さうね。少しお痩せなすつたか知ら。……あれから些とも此方へは入らつしやらないの」

「あゝ。僕は半年の餘も世間の風に吹かれなかつた」川島は見界ひなく相手に訴へる氣になつて、「僕は今年初めて女といふ者に關係したよ」と急に打解けて話の糸口をひらいた。

「おや、御馳走樣」意外にも藝者は頓興な聲を出した。

「あんまり身分のいゝ女ぢやないけど、僕に對しちや情愛が深かつたから、僕の方でも後先見ずに深入りしたのさ。女は母親の家を拔出して來たし、僕も下宿を出て、當分人に知れんやうな所に家を持つてゐたのだがね。……」

「へえ……」藝者は今までとは打つて變つた卑しい笑ひを口元に浮べた。

「外の人達はどうだか知らないが、僕等は將來のことを話し合つたりなんか些ともしなかつたね。永い日數が立たん中に二人は自然に壽命が切れてしまひそうに僕には思はれてたよ。長い一生を添遂げて、どうして世を渡つて行かうなんて、僕は考へても見なかつたよ。しかし人間はさう手易くは死ねないものだ。……」

「そんないゝ方があるのに死にたいなんて、あなたは詰らないことを考へるわね」藝者は浮ずつた聲を出して、其處へ銚子の代りを持つて來た女中に見上げて、「姉さん、今此方のお惚氣を聞いてるのよ」

「さう？。…ぢや後でどつさり奢つて頂くといゝわ」女中は人を馬鹿にしたやうな目付をして座つて、

「私にもお聞かせなさいな」

「何だ。僕は眞面目で話してるのに。」

「だから眞面目に承つてるぢやないの」藝者はさう云つて、女中と意味ありげな笑ひを取交はした。するど、川島は大事な心の底を披いて、こんな女の冷笑の種にしかけたことが口惜くて、いきり立つてさんざ相手を罵りながら、涙を落した。

「僕を此處へ一人で居らして呉れ。お前はもう歸れよ、邪魔だから」

「あなたどうしたんです。温いのを一つ召上つて機嫌をお直しなさいな」女中は子供を綾すやうにいろいろに取做したが、川島はどうしても聞かなかつた。藝者の生白い顏が輕薄で下品に見えて、その小間しやくれた鼻へ何をか打つゝけてやりたくなつた。

藝者は極りが惡さうにして次の間へ逃げて、女中を呼んで何か囁いて階下へ下りて行つた。その後で

川島は手酌で二三杯呑んでから、ころりと打倒れて、燃えるやうな熱氣に包まれながら、苦しい眠りに落ちた。

(四)

二三度様子を見に來た女中の足音にも、彼れは目を醒まさなかつた。やがて、電氣が點いて涼しい夕風が寢顔に觸れたが、彼れはまだ目を醒まさなかつた。次の間へは二人連れの客が來て高い話聲は彼れの夢を亂し出したが、彼れはまだはつきり目を見開き得なかつた。誰れか來て背をぶつてでも醒まして呉れゝばいゝのにと、暫く身悶えしながら、あたりの騷ぎは心に留めてゐた

二階から飛下りたやうに感じて、驚いてやう〳〵目を醒ましたが、口の内は粘つて、五體の節々は砕けさうな氣がした。家へ歸つて言譯をしたり機嫌を取つたりする煩はしさが胸に迫つて、酔醒めの不快な氣持が一層激しくなつた。手を叩いて女中を呼んで、時刻を訊いて、

「日が短かくなつたのだね。僕はもう夜中かと思つてた」と稍々安心した。

「まあ御緩くりなさいまし。……××さんをも一度呼んでおやんなさいな。あなたがあんまり意地めなさるから泣いてたわ」

「さうだつたかね。僕は女を意地めたことはない筈だが……また出直して來るからよく云つといてお呉れよ」

川島には此家の閾を跨いでからのことが夢とも現ともはつきりしなかつた。藝者の面差しや言葉付は

心の中に殆んど跟を留めてゐなかつたので、今一度改めて側へ寄せて遊んで行かうとする興は起らなかつた。で、お茶を飲んで煙草を吸つて、多少頭に力がつくと、其處を出た。人で埋まつた神樂坂の大通りを横ぎつて、淋しい方へ／＼と足を向けた。あの穴のやうな家へ一歩々々近づいてゐるので、自分の踏んでゐる道は棘の道だつた。行違ふ人々は皆んな佗しい色をしてゐた。目白坂を登り／＼空を仰ぐと、霜に包まれた宵月の影は淡かつた。

と、ふと道の端を首垂れて通つてゐる一人の女に目がついて、彼れはぎよつとした。少し行過ぎて顧みると、疑ひもなくおふくだつた。「何時かのやうにおれを搜しに出たのだな」と、直ぐに感づいて、聲を掛けやうとしたが、また途々泣言を聞かされるのが厭さに、躊躇してる間に、道は隔つて、女の後姿は物蔭に消失せた。

川島はそれからは傍目も觸らずに自分の家へ急いだ。玄關も緣側も開けつ放したまゝで、電燈に照らされた部屋の中は、泥棒でも入つた跡のやうに、いろんな物が散亂れてゐた。丼や小皿には喰餘しの煮茄子や澤庵の切れが汚らしい臭ひを放つてゐた。川島は空腹を感じてゐたので、自分で膳立てして、鹽をかけて湯漬を搔込んだ。

何かに急立てられるやうに心が動搖して、尻を据ゑてゐられなかつた。……つと立つて押入を開けて、支那鞄から一束の大事な手紙や印行を取出したり、葛籠の中から二三枚の着物を引出したりして、さながら空巣ねらひでもしてゐるやうに、外の足音に耳を留めながらそれ等を風呂敷に包んだ。そして、家の中を見廻したが、さして金目のありさうな物も見當らなかつた。

彼れは胸をどき／＼させながら、彼方此方歩いた。……この機會を失つて明日も明後日も此處にじつとしてゐたつて、自分の身の上に些ともいゝ事のあらう筈はなかつた。煩はしさと汚らしさと恐ろしさの外には、この家で何も望み得られるものはなかつた。……彼れは風呂敷包を抱へて、まだ迷ひながらも、兎も角外へ出て、昨夕通つた坂の方へ足を向けた。そして、ふら／＼と昨夕の道を辿つて、川端へ出て橋を渡つた。これからの行先を考へるつもりで、土手に蹲んで煙草を吸つてゐた。

が、行先を靜かに考へるよりも、この後のおふくの行動が絶えず彼れの頭を苦めてゐた。……從姉の家とか友人の津崎の家とか、彼れの懇意な家は女にも知られてゐる。其處へ訪ねて行つて人騷がせをするかも知れない。女自身に好いてゐない母親に會つてどんなことを目論むかも知れない。……しかし、それよりも、おふくの頭が狂つてどんな變な眞似を爲出すかと思はれて恐ろしかつた。首をくゝるとか川の中へ身を投げるとか、あるひは眞晝間に髮を亂してだらしのない身裝をして、ふら／＼外を歩いて男を捜廻るとかしてゐる女の淺間しい樣子などが、彼れの目の前にちら／＼した。

川島はまた當てもなく歩出して、電車の終點まで來ると、明るい方を避けて俥に乘つた。行先を俥夫に訊かれて、「九段まで」と出鱈目を云つた

人通りを分けて威勢よく驅けてゐる間にも、直ぐ後に追手が來てゐるやうな氣がしてゐた。

一時間後には川島は小川町の下宿屋の三階に横はつてゐた。かねて汐風の吹いてゐる海岸か稻の實つてゐる田舍へ行つて、壞れた健康を回復しやうと思つてゐたのに、東京を遠く離れる決心はつかないで、一先づこんな所に落着くことになつてしまつた。そして、居所を全く晦ましては置かれなくて、從

姉と津崎へは手紙をやつて、「誰れにも知らさないやうにして呉れ。おふくの處置もいゝやうにして呉れ」と頼んだ。

跡の處置は人任かせにして、强いて不安な思ひを拂つたつもりになつて、電氣を消して寢床へ入つたが、まだ氣掛りになるので、起上つておふくへ宛てゝ、「急に田舍へ歸らねばならぬことが出來たから、今夜の急行で立つ。家の道具はお母さんの家へ預けるなり、賣るなりして、お前も當分好きなやうにして遊んでゐなさい。委しいことは後より。……停車場にて」と、簡單な端書を書いて出させた。

今夜からは半年前の生活に返つて、のび〳〵と手足を伸して、健かな睡りが得られると、昨夕までの寢苦しさを忘れやうとした。廊下や階子段には草履の音がして騷々しいが、女の息はしてゐない。隣室から洩れて來る學生らしい若い男の話聲は、まだ女を知らなかつた頃の自分を思出させて懷かしかつた。

（五）

あくる朝久振りで下宿屋の膳に向つた。寄集めの飯に生ぬるい味噌汁を掛けて食べた。そして、食事が濟むと、彼れは借物の古机の側で膝を抱いて、氣拔けのした顏をして鐵格子の間から外を眺めてゐた。細い道を隔てて病院の病室の窓が見下されて、白衣の女の後姿が見え隱れした。高い煙突から吐出された淡い煙が、緩やかに澄んだ空に漂つた。鳥は羽を伸して飛んでゐる。電車や自働車の音やいろんな音が下からごた〳〵した響きを傳へた。

ぼんやりしてゐた彼れの頭にも、晴々とした世界が染込んだ。停滯してゐた若い血汐が再び勢ひよく脈管に流れ出したやうに、彼れは市街の何處へでも飛出して驅廻りたくなつた。どんな人間でも捉まへて打解けた話をしたくなつた。……で、もつと早くあんな家を飛出さなかつたことを後悔しながら、自分の手首の太さを指で計つたり、丸々としてゐた膝頭の骨つぽくなつてゐるのを、自から憐れんだりしてゐた。

「誰か訪ねて來たらよく名前を聞いといてお呉れよ」と、宿の者に言置いて、やがて氣輕に外へ出た。清爽たる秋の氣は都の街上にも流れてゐた。日はよく照つてゐても、昨日のやうな毒々しい力はなくて、柔しく人の皮膚に觸れた。川島はすが〱しい光が全身の毛穴々々から泌入るやうに感じた。左右の商店の陳列品はどれも〱物珍らしかつた。

川島は旅に出てゐるやうな氣持で暫く町から町を見物して足を疲らせた。知らず〱ある知人の家の近所まで來たので、立寄らうかと足を向けたが、まだ極りのつかないおふくの處置を話題に上されるのが厭さに、只垣根の外から明るい二階を見上げたゞけで通り過ぎた。

彼れは電車にも乘つた。雷門で下りて向島の土手を傳つた。言問の團子屋で休んでから百花園まで行つて秋草を見た。この春埃風の渦卷いてゐる日に、おふくを連れて花見に來たのだつたが、そんなことをして悅しがつてゐた過去の自分が、今では滑稽に見えた。渡舟で淺草へ歸つて、食事をしたり活動寫眞を見たりした。長い牢屋住ひから出たばかりの人間のやうに、耳目に觸れる者が皆んな目新しかつた。動物園や博物館へも入つて時を過して、日暮れ近くなつて宿へ歸つた。

「屹度従姉と津崎とが留守中に訪ねて來たゞらう。不斷何かにつけておれの事を案じて呉れてゐたのだから、今度のおれの決心を知つたら、喜んで樣子を見に來るだらう。そして、おふくの方も甘く形をつけて呉れるだらう」と、途々考へてゐたので、玄關へ入ると、直ぐに女中に訊いた。「誰れか來なかつたかい」

「どうですか」女中は朋輩や帳場で訊糺して、「何方も入らつしやらないさうです」ときつぱり答へた。端書一枚來てゐなかつた。川島は當てが外れたが、まだ失望はしないで、遲くも今夜中には音信があるに違ひないと待設けながら、湯に入つて疲れを柔らげて、部屋の中に打倒れてゐた。廊下を通つてゐる女中を見てゐると、その中に一人可愛らしい女があつた。おふくとの經驗から押して、こんな女を手馴付けるのは如何にも雜作がなさゝうに彼れには思はれたので、一種の誇りを覺えた。色女の一人二人は直ぐにも出來るのだが、今は煩い思ひに飽いたから自から好んで避けるのだと、一廉の色男氣取りになつたりした。

その夜は詳しい改悛の事情を故鄕へ知らせるための手紙を長々と認めながら、來る人を待つてゐたが、つひに誰れも顏を見せなかつた。

(六)

翌日の川島も前日の彼れと同じやうに日を送つた。市街をうろついて足を疲らせた。芝居の立見などもした。さうして電車の込合ふ時分に宿へ歸つたが、矢張誰れからの消息もなかつた。がらんとした部

屋の中に一人ぽちでゐるのが多少心元なくなり出した。で、最早悠長に待つてはゐられなくて、座る間もなく宿を出て、津崎の門口に立つた。臺所の方では煙が煙つてゐた。子供の泣聲と細君の聲とが聞えた。細君に顔を見られるのを氣にしながら、玄關の格子戸を靜かに開けた。三度も案内を乞ふた後で、取次に出て來た下女は見馴れない女だつた。名前を云ふと、細君は子供を抱いたまゝ驅出して來て、

「まあお珍しい。どうなすつたんです？。津崎は今日は少し遲くなるさうですけど、もう歸つて來るでせう。まあお上んなさいましな」と、懷かしげに云つた。

川島は細君に立入つたことを訊かれるのが厭だつたが、兎に角座敷へ通つた。細君は無樣に胸を擴げて子供に乳を飲ませながら、客に應對したり、振向いて忙がしげに下女を差圖してゐたが、ふと思出したやうに、「昨日でしたかあなたのお手紙を頂いたとか云つてゐましたよ」

「轉居しましたから」と、川島は何氣なく云つて、相手の顔付に目をつけたが、感情の微動も見えなかつた。

「何方へお越しなすつたの。……私も一度目白のお宅へお伺ひしやうと思つてゐたんですけど、つい御無沙汰いたしました。この頃は何處へか御出勤なすつて入つしやるんですか」

「いゝえ。相變らず遊んでゐますよ。津崎君は毎晩こんなに遲いんですかね」

「何だかこの頃は大變社の仕事が忙いんですつて。暑中にも滿足に休暇はないし、詰らない〳〵つてよく零してますの。時々あなたのお噂をして、川島君のやうな氣樂な身分になりたいつて云つてましたよ」

「何が氣樂なものですか」川島は苦笑した。こんなお座なりを言合つてゐるのが牴牾しくて、主人の歸

るのが待遠しかつた。で、細君に立入つた話をするのを厭がつてゐた癖に、此方から進んで、
「お宅へ私の事を訊きに來たものはありませんでしたかね」と話を向けた。
「いゝえ……」細君は子供が頰に垂れた髮の毛を膨るのを拂ひのけながら、「そんな譯がありますの」
「譯と云つて別にないんですけど、私は今の居所は當分人に知らせないやうにするつもりですから」
「どうしてです。……今度もお二人でゐらつしやるの」
「いえ。もう一人ですよ。津崎君には手紙で知らせといた筈ですが」
川島が女を離れたとか離れんとかいふ事が細君の心にさして刺激を與へないらしいのが川島にはむしろ意外だつた。去年の大晦日にはこの家で夜明かしして、一緒に元日を迎へて屠蘇を汲んだほどで、殆んど親類同樣にしてゐたのだから、あの手紙が津崎の目に輕く見過ごされてしまう筈はないと思ひながら、「津崎君にもいろ〳〵心配を掛けましたが、今度こそ私も量見を變へて昔のやうにやりますよ。それについて津崎君の智慧を借りる必要があつて、今夜伺つたのです。何處かに仕事の口があれば周旋して貰はうかとも思つてゐます。不平は云はないでどんな事でもやる氣になつてるんですから」
「結構ですわね。本當にさうなさいましな。あなたは御自身で取つたお金は好きなことにお使ひなさるんだからよう御座んすわね」
「私が遊んでた間津崎君は毎日出勤してゐたんですね」
話は何時までも肝心な所へ觸れないで遠廻りしてゐた。川島は歸らうとして腰を浮かせては時刻を訊いてゐたが、また思返して、主人の歸宅を待たうとした。そして、表の靴の音に耳を留めたり、あたり

をきよと〳〵見渡したりしてゐた。去年の此の頃藥師の緣日に、此處の夫婦に連れられて散步した時細君が夜店で買つた鉢植の蘐袴は、庭の花壇に移栽ゑられて、人の脊ほどに高く伸びて可愛らしい白い花をつけてゐた。座敷には電氣が點いたが、庭には淋しい夕闇が迫つてゐる。細君が臺所へ立つて行つて、川島一人取殘されてゐると、ます〳〵腰が落着かなくなつた。今まで記臆に薄らいでゐたおふくの顏や目白の家がまざ〳〵と目の前に浮んだ。恐ろしい變事が起つてゐさうにも思はれ出した。次第に暗くなつて來る庭の木立や草花は目白の家の荒れた庭の淋しい夜を思出させた。下女の聲だか細君の聲だかあるひは外の女の聲だか分らないが、臺所の話聲の中にはおふくと紛らうやうな聲が交つてゐる。

「奥さん、もうお暇しますよ」川島はふと立つて襖を開けて、そつと首だけ出した。

「まあ御緩くりなさいましな。何なら杜へ電話を掛けて聞かせませう」煮物の鹽加減を見てゐた細君は、明るい方から薄暗い襖の方を顧みて、「久振りで御飯を差上げたいと思つてるんですよ。お急ぎの御用がおありなさるの」

「外に用事はないんですが……津崎君は私の下宿へ寄つて呉れたんぢやないでせうか」

「どうですか。そんな事は云つてゐませんでしたよ」

川島は緣側へ出て、西の空に高山の形をして渦卷いてゐる淡黑い夕雲を仰ぎ見てゐたが、また襖の間から顏を出して、「奥さん。昨日私が津崎君に寄越した手紙を一寸見せて頂けますまいか」

「あなたのお手紙?」細君は變な顏して、「それをどうなさるの。……何處へ仕舞つてるのか私には分りませんよ」

「私はどう書いたか、丸つ切り思出せなくなつちやつた」

川島は獨言のやうに云つて、座蒲團の上に戻つた。そこへ、下女が今投込まれた夕刊や菓子皿を持つて來たので、突如に、「姉さんは何時頃から此處へ來ました？」と訊くと、下女は極り惡げに默つて引込んだが、やがて臺所の方で皆んながくすくす笑つた。俥が止まつて門のベルが鳴つたが、それは津崎ではなかつた。玄關で細君と何か話してゐた客は、座敷へ上つて來た。でつぷり肥つた髯の濃い四十格好の男で、羽織袴や金鎖で身體を光らせてゐる。川島は居住ひを直して挨拶したが、向合つてゐると洗ひさらしの浴衣一枚着けた自分の痩せた見窄らしい姿が痛ましかつた。津崎と懇意だと云つて客の出した大形な名刺には、××會主事と肩書がついてゐた。「何時の間に津崎はこんな人と親しくしてゐるんだらう。自分の聞いたこともない名前だが」と、彼れは津崎の交つてゐる廣い世間を想像しながら、客が新聞にある時事問題について話掛けるのに二言三言打應へしてゐたが、かうして愚圖々々してゐる場合ではないやうに思はれ出したので、ふいと座を立つて、玄關へ出て細君に暇を告げた。

「都合によつたら、今夜遲くお邪魔に上るかも知れませんが、若し來ませんでしたら、明日あたり私の下宿へ一寸でも寄つて吳れるやうに津崎君に賴んで下さいな」と言置いて、あたふた外へ出て行つた。細君は呆氣に取られて門の側まで驅出して後姿を見送つてゐた。

川島は江戸川の終點で電車を下りて、其處から暗い道を撰んだ。不快な記憶を呼起させるこの界隈へはこの後決して近寄らないと自から戒めながら、亡靈に手繰り寄せられるやうに一歩々々あの家へ近づいた。新屋の軒燈は家の前を照らしたが、幸はひにあたりに人はゐなかつた。蟲の音のみして人間の聲

は耳に入らなかつた。と、見ると、かし家札が門の側の塀に貼つけられてあつた。それを朶んでゐながら、川島は變事のなかつたらしいのを意外に感じた。そして坂の方へ下りかけて後を見詰めて、雜草の茂つた庭や疊建具の汚れた部屋を闇の中に描いた。何時引越したのだらう?どんな風にして出て行つたのであらう?と、腑に落ちるまで疑ひを晴らしたかつたが、顏を知られてゐるのに隣近所で聞く譯には行かないし、門から隔つてゐる空家へ入り込んで見る譯にも行かなかつた。……でも、思切つて立去らうとはしないで、暫く坂のほとりに佇んでゐた。門を入つて行く人も門から出て來る人もあつたが、顏の見分けはつかなかつた。

終日歩み通したので、疲れと饑ゑとに激しく苛まれ出した。川島は力が拔けて、その空家へでも轉げ込んで、氣儘に手足を伸して休息したくなつたほどで、足を引摺つてとぼ〳〵今來た道を歸る氣はしなかつた。

「不規則に寢て不規則に起きて、碌に戶締りもしないで二人で外へ出たり、笑つたり泣いたり怒つたりして、當前の生活をしてゐる近所の人からは、奇怪に思はれてゐたのだから、出拔けに移轉したことが噂に上つてゐるに違ひない」と、それが聞きたくて溜らなかつた。「ほんの一言引越しの際の女の樣子さへ聞けば、おれには何もかも推察がつくんだ。そして、事情さへ知れたら安心して、明日から天下晴れて自分の好きなことをして自由に日が送れるんだ」

自問自答してゐた川島は、坂を上つて來る空俥を見つけると、側へ來るのを待ちかねて、此方から出掛けて呼留めた。ふと思付いて、俥に乘る前に俥夫に言含めて、隣の家へ引越先を聞かせにやつた。

「今朝暗い間に越したやうですよ。越した先は何處だか私の家ぢや分りませんね」と、聞馴れた主婦の聲が高く響いて來た。

（七）

川島は下宿の三階で昏睡して、また新なる日を迎へた。暑さは盛返して、差込んだ朝日はきら〳〵目を惱ました。市中見物も二日續けたので、最早飽いてゐるし、目的のない外出をする氣はしなかつた。て、終日三階に留まつて、ころび寢に飽くと、廊下に立つたり窓際に寄つたりして、雲の動くのや人の歩いてゐるのを見て暮らした。用事を持つて急がしさうに歩いてゐる人々の境遇が羨ましく思はれるにつけて、早く津崎に會つて、世間へ出る道をつけて貰ひたくなつて、社の退ける時刻を見計らつて電話を掛けた。

二三度お話中で待たされた後で、受話器に響いて來る舊友の聲を聞いた時には、川島は震ひつくほど悅しかつた。

「君歸りに此處へ寄つて呉れませんか。僕は毎日君を待つてゐるんだよ。久振りで話したいことが溜つてるんだからね」と、急込んで云つた。

「さうだね。僕はこの頃馬鹿に忙しくつて困つてるんだが。……これから一軒訪ねて行く所があるんだしね」と、津崎はあやふやな返事をしてゐたが、此方から執念く賴むと、「ぢや、一寸寄ることにしやう。六時前後に……」と云つて電話を切つた。

川島は女中に麥酒を冷させたり、洋食を誂へさせたりして、只管珍客を待つてゐた。風呂に入つて手足の爪も切り頭の髮も梳削づつたが、二三日着つゞけた浴衣はべた〳〵してゐて氣持が惡かつた。入らないつもりで先の家に殘して置いた古浴衣や兵子帶など自分の持物が一つ〳〵思出されて惜しくなつた。押入の奥へ突込んだまゝ嘗て手に取つたこともない學生時代の記念の漢詩集や教課書が、古新聞と一緒にむざ〳〵屑屋へ賣拂はれてはゐないかと、今まで丸で忘れてゐたことが念頭に浮んだり、がらくた道具でも二束三文に賣飛すのが惜しまれ出した。どうせ永く下宿住ひは出來まいから、自分の身の極り次第、老婢でも雇つて家を持たねばならぬが、それにはあんな者でも保存しといた方がよかつたと、自分ながら不思議なほど吝臭いことがいろ〳〵と考へられ出した。

六時の打つ音が聞えると間もなく、津崎が蝙蝠傘を握つて階子段を上つて來た。川島は廊下へ飛出して、手を執らぬばかりにして迎へた。

「昨夕は失敬したよ。何時此處へ移つたんだい。大きな下宿だね」津崎は相手の顏に注意するよりも、周圍に目を放つた。

「僕は今は無一物だよ。」川島は身一つで偶然この下宿へ移つて來た道筋を口早に話しながら、風通しのいゝ所へ座蒲團を持つて行つたり、呼鈴を鳴らしたりした。そして、座に落着いてから、更に同じ話を繰返した。相手が眞面目な顏付をして神妙に聞いてゐるのに甘へて、おふくとの關係をこま〳〵と述べ立てたが、話してゐる間に、その場〳〵の女の素振りがあり〳〵と浮んで來て、自分自身に感動した。興奮して目は潤み手は震へた。口元を曲げて力を入れたり、眉を上げたかと思ふと眉を蹙めたりした。

「君だから云ふんだがね」と、屡々前置きしては、閨房の事までも喋舌つた。

「君がさう云ふ氣になつたのなら別れた方がいゝだらう」津崎は重々しく云つて、「どうせ君の女房に出來る女ぢやなさゝうだから」

「初め君が云つた通りだよ。……何しろ泣いたり笑つたり、始終感情を恣まゝにしてゐなくちや二人で時が送くれなかつたのだよ。平穩無事に世帶を持つことはとてもあの女にや出來ないんだ。僕も一時はそれが面白かつたけれど、二三ヶ月前から堪へ切れなくなつたね。あの女だつて感情も根氣も浪費してしまつて頭は滅茶になつてるんさ。しかし、女は馬鹿だ、何時まで經つても氣がつきやしないんだから」

「それできつぱり形がついたのかい。何だかあまり無造作過ぎるやうだが……」

「僕の方は決心が堅いんだが、女は穩かに承知すりやすまいよ。僕の居所が分りでもしたら僕はどんな目に會ふかも知れない」

　今にも女が此處へ上つて來りやしないかといふ恐怖をさへ感じながら、川島は津崎に先方の樣子を索つて來て呉れるやうに賴んだ。「明日か明後日、成べく早く知りたいんだがね。金錢づくで話がつくんなら雜作はない。僕の鄕家(くに)では僕が新生涯に入るための金なら惜みはしないよ。只僕が今恐れてるのはあの女の僕に對する執着心だけなのだ」

「あんまり女に思はれ過ぎるのも厄介なものだね」と津崎は微笑して、「こんな事件で先方へ掛合つたりするのは僕の柄にないよ。もつと世間馴れた口の上手な人に賴みたまへ。」

「だつて君の外にこんな事を遠慮なく打明けられる人はないんだもの。本當にお願ひだよ。さうして頭

を洗ひ直して、これから君のやうに毎日勤めたいね。君の會社ぢや缺員はないかい」

「一寸なさゝうだね。それよりや君は當分故鄕(くに)へ歸るか、あるひは旅行でもしたらどうだ。氣分が變つて身體のためにもいゝだらう。仕事はぼつ〳〵見付けることにして」

「僕もかねてさう思つてゐたのだが、君なんかがさうやつて活動してるのを見ると、僕も早く仲間入りをしたいよ。第一過去の厭な記憶を消すのには急しい仕事をするに限るやうだ」

川島は頻りに麥酒を飮んで客にも勸めた。友人には饑ゑてゐたので、醉ひが廻るにつれて、相手の受答へをまどろかしがつて、一人で調子づいて同じやうなことを留度なく話した。

津崎は屢々時計を見て立たうとしては引留められてゐたが、ついに振切つて帽子を取つて廊下へ出た。おふくのその後の樣子を訊いて知らせやうと約束して、川島の心を宥めて外へ飛出した。

川島は殘肴を貪りながら、有りたけの酒を無理に呑干して寢倒れた。そして、寒さを覺えて目を醒ました時は、最早眞夜中過ぎだつた。秋らしい風がざわついて、窓には雨がばら〳〵降りかゝつてゐた。彼方此方から犬の遠吠ゑが聞えた。彼れは夜具の中へ入つて、風雨の音をしみ〳〵耳に留めてゐたが、すると、先日の嵐の夜目白の家でおふくが荒れ狂ふのをいろ〳〵に説慰めるために苦んだことが思出された。あばれた後では首垂れて指を喰へて悄然(しよんぼり)してゐるのを、喉を操つて無理に笑はせて、はては脊に負(お)んぶしてやつたり、自分で動物園の猿のやうな戯(たは)けた眞似をして機嫌を取つたのだつた。……好きな衣服を着て外へ出歩くとか、三味線を彈いておあれの聲に聞馴れるとか、あの女も最初の間は女らしい素直な樂みを感じてゐたのに、何時の間にか、男の血を啜り肉をしやぶつて、男の魂をも搔廻さなけれ

ば日が送れないやうになつてしまつた。……「おれが惡かつたのかな。いゝ氣になつて女のするまゝになつた上に、女の愚かな感情を煽つて喜んでゐた」

川島は右へ左へ寢返り打つたが、女の頭の先から足の爪までの褪せた粗い皮膚が闇の中にもまざ〳〵と見えて仕方がなかつた。……「おれが一人でゐると、彼奴が影のやうに隨いて來る。誰れか側に寢てゐて呉れるといゝのだが」

て、彼れは一人寢の寢苦しさに倦んじた。雨戸の風に軋るのが、ともすると、人が其處にゐるのかと疑はれた。

（八）

翌日は秋雨が降頻つた。川島は傘や足駄を買ひに出た次手に、いろんな日用品を買集めた。卷紙や筆や石鹼やナイフなどの外に風景や美人の繪端書を幾組も買揃へて机の上に置いた。よく選んで買つたナイフは刃先が鋭くて人間の首ぐらゐ切れさうだつた。彼れは雨の日を垂籠めて暮らすために、新しい筆の穗を碎いて卷紙に無駄書をしたり、繪端書を眺めて空想に耽つたりしてゐたが、ついにはナイフの切れ味を試めすために、二三の繪端書をずた〳〵に裂いた。寺院の塔が微塵になり、山が壞れて川が割れた。生けるが如き美人が首を斷たれ胸を裂かれ目を抉られた。さうして見るのが面白くなつて、彼れは一つ殘さず刃を加へて、殘骸を机の上に散らかせた。

津崎に電話を掛けると、取次の奴が暫く待たせた後て、今はゐないと卒氣ない返事をした。歸つたら

知らせて呉れと頼んで置いたが、日が暮れるまで何のたよりもなかつた。愚圖々々してゐる場合ぢやないのにと、夕餐後に津崎の家へ出掛けたが、「お留守で御座います」と、下女は膠もなく云つた。今に細君が出て來るかと上り口に足を留めてゐたが、奥で聲はしてゐても玄關へ出ては來なかつた。

「旦那様は今夜もお歸りが遅くなるんかね」と訊くと、

「今夜はお歸りにならないかも分りません」と下女は答へた。

川島は押して座敷へ上る譯にも行かないで、淋しさうに外へ出たが、振返ると、下女が玄關の障子の隙間から變な顔をして此方を見てゐた。

おふくが津崎の家へ行かないばかりではない、從姉の家へも郷里の家へも事情を訴へてゐないらしいのが川島には奇怪に考へられた。五六日も經つてゐるのに、男の行衞を捜さうとさへしないのが却つて薄氣味が惡くなつた。このまゝ手を切つて諦める譯はないが……彼れはこの疑惑を釋かなければ一刻も安んじてゐられない氣がした。そして、生中人まかせにして悠長に搆えてゐるよりも、自分から危險な所へ飛込んで善か惡かの極まりを見たくなるのを、自分で引留めて、智慧を絞つてとくと方法を考へた上でする事にして、一寸伸しに下宿へ歸つた。

濡れた足袋を指の先でぶら提げて、何氣なく部屋へ入ると、從姉が机の側に座つて、裂けた繪端書を弄んでゐた。微笑を含んで見上げた從姉の目は何の異狀をも豫報しなかつたので、川島の驚いた胸も稍々鎮まつた。二人は三月も四月も會はなかつたのだから、他人行儀に恭々しい挨拶をした。

「この頃はあなたどうしてゐるの?。些つとも顔を見せないのね」

「えゝ。……長く待つてゐたんですが」川島は相手の顏色を讀みながら、何か言出されるかと心に力を籠めて待構へた。

「今來たところなの。」從姉は厭に事もなげに云つて、「この繪端書はどうしたの？」

「見飽いたから惡戲をしたのさ」

「可笑しな人ね。勿體ないぢやないの。」從姉は細い青白い指を動かして、中の切端を繼合せて、「ペールを被つて。藝者か知ら。いゝ鼻ね」

「手紙は屆いたでせうね」川島は話の爲易いやうに煙草に火を點けた。

「あの手紙の文句が私にはよく分らなかつたけど、忙しいもつだから、今日までつい返事を出せなかつたの」

「でも、よく來て呉れましたね。僕の方からは行憎くつて……」

「何故？」從姉の目はふと鋭くなつた。机から手を離して、「今日、お夕飯を食べてる所へ津崎さんがひよつくりやつて來たのよ。滅多に來たことのない人だから、何事か知らと私の方で間誤付いちやつてね」

川島は目を落したが心は聳てゝゐた。どうせおふくのことで從姉にも面倒を掛けるのは覺悟してゐるけれど、身内の者とだらしのない女話をするのは厭だつた。五體が痺れるやうだつた。で、默つてゐると、

「津崎さんはあなたが氣が觸れやしないかつて心配してるのよ。私驚いちやつたわ。よく譯を聞くと、馬鹿々々しくて眞に受けられなかつたけど、さう聞いて打放つては置かれないから、直ぐに樣子を見に

來たの」從姉は最早そんな疑ひは持つてゐないやうな晴々した顏付して、「あなたのすることが突飛だから變に思はれるんだわね」

「突飛ぢやない、よく考へた上でしたことだが……」

「嘘を仰有い。半年の餘も私達には音信不通で何をしてゐて？。そして、急にこんな下宿へ移つて、元の通りにやるんだなんて獨りで威張つたりなんかしてさ。呑氣だわね。」

「僕がそんなに呑氣に見えるか知ら」

「津崎さんは頻りにあなたが詰らないことを煩悶してるから、私に行つて慰めてやれ、女の事なんぞ思切つて一時田舍で氣保養をして來るやうに勸めるといゝつて、さう云つてたわ。津崎さんの奥さんもあなたとお話してると氣味が惡いと云つてるんですつて。……少し變れるには變れたけど、以前と些とも異つてやしないのにね。」

「津崎は僕が賴んだことを話しましたか」

「あなたの好きな女の樣子を索つて吳れつて云ふこと？」從姉は嘲けるやうな笑ひを微かに浮べて、「津崎さんは御自分はそんなことに馴れないから、話に角が立つていけないから、私に行つて圓滿に話をつけろと云ふの。私に押付けやうとするんだけども、私だつてそんなお役目は御免蒙りたいわよ。…あなたが勝手に好いたり嫌つたりした女のことだから、今更傍からおせつかいをしない方がいゝぢやないの。私にはその女の顏さへ見せもしなかつた癖に」

川島は默つてゐた。自分のしたことや考へてゐることが皆んな戲談として見られるのが案外だつた。

そして、この平氣な顏してゐる從姉に向つて、頭にむづ〳〵してゐる自分の厭な思ひを分らせる言葉は見付からなかつた。浮つかりした事を云へば只冷かされるだけだと思ふと、一刻も早く傍を離れて貰ひたかつた。

「その女の人からはあなたに些とも音信をしなくつて？」

「……だつて居所を知らないんだから音信の仕樣もないさ」川島は尖つた聲を出した。

「あなたも薄情ね。……私、また市さんは何時までもその女とゐるつもりかと思つてた。……で、もう本當に別れる氣になつたの。何故さう急に厭になつたらう。津崎さんはあなたが氣紛れにいろんなことして騷ぐだけで本氣で別れる氣はないんだと云つてるの」

「あんな薄ぼんやりに人の腹の中なんぞ分るものですか」

あなたゞつてさうだと云つてやりたかつた。從姉が次第に親切らしく事情を訊かうとしても、川島は空々しい答へのみしてゐた。

從姉は近日是非遊びに來いと云つて、遲くならぬ中にと暇を告げた。歸り際に、「久振りで市さんとお喋舌をして面白かつた」と、ニコ〳〵して、三階の廊下から珍らしさうに、燈火の點いた左右の部屋々々を眺めながら下りて行つた。

「馬鹿にしてやがらあ。」

川島は從姉を見送つて部屋へ歸ると、舌打ちした。そして、今まで壓へてゐた憎惡の念に驅られて、從姉の言つたことを一々思出してゐたが、終には冷淡な從姉の態度を憎むよりも、自分の樣子が以前と

は丸で違つて來て、昔馴染の人の目には親しみを覺えられなくなつたのではないかと疑はれ出した。津崎夫婦に對して云つたことも、自分では昔の調子のまゝだつた筈なのに、先方の耳には別人のやうに響いたのだらうか。……「おれはそんなに人に嫌はれたり笑はれたりするやうな人間になつたのか知らん」で、彼れは鏡を出して自分の顔を映した。一寸見ると元の通りで、自信を失ふほどの醜い影は見えなかつた。が、鏡を棄てゝ目を瞑ると、惡相を帶びた自分の面影が想像に浮上つた。「おれがしてゐることが突飛で普通の人間には變に思はれるのか知らん」と、自から省みると、何がなしにそんな氣もし出した。

「津崎は平生おれの云ふことはよく聞入れて、智慧を貸して與れる男なのだが」と、その男の目にさへ自分が變に見えるのが心細く思はれたので、川島は津崎に宛てて訴へるための長い手紙を書出した。

「……君達には僕がそれほど腑甲斐ない人間になつてゐると思はれるのか。僕は實に情けない。唯一人の親友として信頼してゐる君に蔑まれるのが無念でならない。若し僕に唾棄すべき點があるならば、遠慮なく指摘して與れたまへ。君の忠告ならどんなことでも聞くつもりだ。僕は賢い道を取つたつもりでゐながら、絶えず物に襲はれてゐるやうに氣迷ひがしてゐる。あの厭ふべき女と一緒にゐるために頭が壞れて生々した力も衰へたのかと思つてゐたのに、一人になつた今も同じことだ。でも、君が僕のために盡して與れて、昔のやうな生活に返れて、あの時のやうな氣分になつて、働いたり樂んだり出來ることゝ待設けてゐたが、君に突放されると、僕は遣瀨がない。……何故君は僕をぶん毆つてでも力を付けて與れないんだらう。かうしろあゝしろと指圖をして與れないんだらう。從姉は女だから何も分らな

のに、君は何故あの人に僕の秘密の穢はしいことを打明けたのだい。昨夕醉つたまぎれにどんな事を喋舌つたか知れないが、從姉など女の前に僕の押かくしてゐる狂態を曝らけ出して見せるのは思つても身震ひがする。從姉め僕を蔑んで行きやがつた。おふくのために膿汁や瘡蓋で汚れてゐる僕の臓腑を見透したかのやうに、冷笑の目で僕を見やあがつた。君の細君もさうなのだらうか。しかし少くも君だけは細君や從姉とは違つて僕の魂を認めて呉れてゐるんだらう。さうだと云つて呉れ玉へ。さうでないと僕は自分で自分の淺間しい記憶に押潰されてしまうよ。……」

川島はこんな手紙を書きながら、津崎がおふくの心に宿つてゐる自分の影をも奇麗に拭つて呉れるやうにと望んだ。あの女の心から自分の記憶を消し、自分の心からあの女の記憶を消すのにはどうしても津崎の力を借らなければならないと、津崎に甘へつくやうな氣になつた。……突飛ばして逃げかくれてゐても、おふくを思はせるやうな臭ひが、自分の身體の毛穴々々から煮染み出て、ともすると自分の息を詰らせるやうだつた。

川島は拳に力を籠めて元氣をつけたが、直ぐにへなへなと萎けてしまつた。

（九）

津崎から直ぐには返事が來なかつた。川島は會社まで出掛けて面會を求めたが、受付の給仕は名刺を持つて行つたのに、やがて、「留守です」と云つて突返した。そして、迂散臭い目付で此方の顏をじろじろ見詰めた。川島は疑ひを寄せて階子段の方を見上げてから外へ出て、日蔭をつくつてゐる會社の壁に

沿つて足を休めながら、電車に乘降りする人々や、風に煽られる埃を夢のやうに見てゐたが、さうしてゐる中に、ふと自分の身體を支へかねて、近所の醫者に助けを乞ひに行く氣になつた。

「おれよりも賢くて、學生時代から尊敬してゐた津崎に疎外されてゐるとすると、おれはいよ〳〵迷な人間になつてゐるのだ。考へなくつてもいゝ事ばかり考へられて、順當な道が心に浮んで來ないのはおれの頭の心が弱り切つてゐるためかも知れない」

彼れはさう思ひながらます〳〵滅入つて、醫師の玄關へ入つた。藥の臭ひは彼れを脅かして尻込みさせた。診察室へ呼ばれた時には胸騷ぎがしたが、頰の豐かな目付の柔しい醫師の顏を見ると、俄に懷かしい氣持がして、この人の口から慰めの言葉を待設けた。

「何處がお惡いんです？」と、醫師に椅子を擦寄せて訊かれると、彼れは返事に躊躇した。何處が惡いと云つていゝのか、自分ながら見當がつかなかつた。

「腦がよくないやうです」と、あやふやに答へて、醫師の命ずるまゝに手を伸ばしたり、肌を脫いだり、突立つたりした。脈が少し早くなつたのに自分でも氣がついた。「此處は痛くはないか」と水落を壓へられると、何だか痛いやうな氣がした。「寢汗は出ませんか」と訊かれると、何だかそんな氣がした。眠れないかと訊かれると、成程眠足らないのかも知れないと思はれ出した。で、彼れは相手の問ひに一々同意した。

「何處もさう惡かありません。少し疲勞してるやうだから、呑氣に遊んでゐたらいゝでせう」

「ぢや、私の腦も丈夫なのですかね」

「今の所別條はありません。心配するほどのことはない」

醫師は事もなげにさう云つて、處方を書いた。川島は腦の力を試めすためにいろんな事を考へて見たが、確信を持つて一つの事を思詰められなかつた。

「私の身體も外の丈夫な人の身體と同じいんですね」と、念を押して、醫師が微笑しながら斷言するのに稍々安心して、水藥と散藥とを貰つて表へ出た。

留守の中に、津崎の手紙でも屆いてはゐないかと思つて、自働電話を掛けて宿で訊くと、手紙は來てゐなかつたが、先つきからお客が來て待つてゐるさうだつた。「どんな人だ」と訊くと、「女の方です」と云つた。「ぢや、直ぐ歸る」と答へて、川島は宿の方へ行く電車に乘つた。

客が誰れであらうとも、自分を待つてゐる人のあることが、彼れに力を添へた。たとへおふくであつても、もう負けてはゐない。命掛けでも關係を切つてしまつてやると、二人が爭ふ場合を大袈裟に想像しながら下宿へ歸つた。

玄關に脫いであつた女下駄は見馴れたおふくの下駄ではなかつた。女中に訊くと待つてゐるのは若い女ではなかつた。川島は張詰めた氣がゆるむと共に稍々物足らぬ思ひがした。部屋へ近づくと、內から煙管をはたく音が聞えた。

「どうなさいました？」挨拶した後で、かう云つて此方を見た女の顏には少しも毒氣を帶びてゐなかつた。この女はおふくに叔母さんと呼ばれてゐて、一二度遊びに來たことがあつた。

「今朝やつと此方に入らつしやることが分つたのですよ。」と、女は靜かに言葉をつゞけた。「あなたが不

意に何處へか行つちやつたつて、あの女が泡を喰つて飛込んで來るんですもの、その樣子が可笑しくつて、私吹出しましたよ。あんまりあなたの戯談が過ぎるから、あの女が本氣で心配し出して、いくら賺しても泣いてばかりゐて手がつけられませんてすの。惡戯をなさるにしてもあまり酷う御座んすよ、三日經つても四日經つても居所さへ知らして下さらないんですもの。……隱れん坊にももうお厭きなすつたでせう。これから一緒に私の家へ入らつしやいませんか。可愛相に、ふうちやん青い顏して鬱ぎ込んでゐますよ。」

「ぢや、あなたの家に御厄介になつてゐるんですか」

「自分の家へ行くと、いろんな面倒な事を持出されるから厭だつて、私の側にばかりゐますのてす」

「どうするつもりか知らん」

川島はさう呟いて、何とも判斷がつかないでけろりとしてゐた。豫想とは異つて、「叔母さん」は些とも非難がましい事は云はうとはしないし、おふくにしても恨んでも怒つてもゐないらしかつた。此方では餘程の覺悟を極めて出て來たことを、叔母さんは只一時の座興のやうに見做して、此方の樣子を訊くにもおふくの今の有樣を傳へるにも、只笑話にしてしまつた。そして、眞面目な話を此方から持出す餘地は與へられなかつた。

「今日は是が非でもあなたをお連れ申して來るつて、私ふうちやんに受合つてゐるんですから、私と一緒に來て下さらなきや困りますよ」と、叔母さんはお茶を一杯飮むと、直ぐに座を立たうとした。「ふうちやんにお夕飯の仕度をするやうに云つといたんてすから、あの女がどんな御馳走をして待つてるか樂

みにして入らつしやいましな。今日は私の外に家の者は誰れもゐませんから、些とも煩いことはないんですよ」

「さうですか」川島は相手の勸めを拒み得なかつた。が、あまり輕々しく隨いて行くのは多少氣が咎めたので、「僕は少し加減が惡いんです」と云つて、手巾に包んでゐる藥瓶を出して見せた。

叔母さんはよくは見ないで、「御病氣なら尙更こんな下宿に一人ぽつちで入らしつちやよくないぢやありませんか。召上り物だつて御不自由でせうに」

「下宿屋の物も一寸は珍らしくつて甘かつたけれど、矢張駄目ですね」

「さうでせうとも。だからお身體に障るんですわね。……私の所では二階を片付けて、何時あなたが入らしつてもいゝやうにして居ります。あなたのお召物もふうちやんが撰分けて、洗張りにやつたりつくろつたりしてゐましたよ」

「あの女が縫物なんかしてゐるんですかね」

川島はまだ知らない叔母さんの家の樣子や、おふくが其處で素直に働いてゐる有樣に好奇心を惹起した。……汚いだらしのない生活をしてゐた目白の家へ歸つて行くのとは違つて、よく拭磨かれた日當りのいゝ叔母さんの家で自分がちやほや持てなされるといふことが、この二三日滅入つてゐた彼れの心を惹立てた。

「さあ、入らつしやいませんか」

「えゝ。……」

「何を考へてらつしやるの」

「兎に角彼方へ行つてから話しませう」

川島は藥罐を提げて、叔母さんの後に隨いて出た。電車に乘つてゐる間も降りてからも、叔母さんは川島とおふくとの今後の關係については一口も話を仕向けなかつた。川島の量見についても訊かうとはしなかつた。川島の方でも立入つたことを云出すのを怖がつてゐた。その角を曲つたら直ぐだと云はれると、思はず足が縮んで、其處の閾を跨ぐまでには是非聞いて置かなければならぬ事があるやうな氣がしたが、ついに浮々その家の前に來てしまつた。

「ふうちやん。……入らつしやつたよ」叔母さんの高い聲が川島の耳には鋭く響いた。

「私の云つたことに間違ひはないだらう」と、叔母さんは奥へ向つて云つて、「さあ二階へお上んなさいまし」と、玄關でまご／＼してゐる川島を急立てた。

川島は默つて階子段を上つたが、二階の疊はじめ／＼してゐた。入日の影が黄ばんだ障子に細く差して、障子の破れ目が冷たい風に動いてゐた。マッチも持つてゐないので、火を點けぬ煙草を啣へたまゝ、彼方此方部屋の中を歩いてゐたが、暫くは誰れも上つて來る氣色がしなかつた。刻々に彼れは鬱陶しい氣持に鎖されて、叔母さんと云ふえたいの知れない女に騙されたのぢやないかと疑はれ出した。

おふくが來ないのみか。聲もしない。煙草の火やお茶をさへ持つて來ない。て、彼れは階子段の上から首を出して下を覗きながら耳を澄ました。臺所では物音がしてゐて、ひそ／＼話をしてゐるのも聞えた。……「おれを此處へ押込めといて、何を相談してゐやがるんだらう?」と、一寸無氣味に感ぜられ

た。話聲の一つは確かにおふくの聲であつた。不斷聞馴れてゐたその聲が耳に入ると、川島の頭には別れた前の女の態度が重苦しく迫つて來た。「今にやつて來るんだな」と思ふと共に、ぼんやりしてゐられない氣がした。うんと自分の心を引締めて身構へして、力をつけるつもりで水藥をも呑んだ。苦いだけそれだけ直ぐにも身體に利目がありさうだつた。

やがて階子段に足音がしたが、それはおふくらしくはなかつた。果して叔母さんが上つて來て、「ふうちやんが髮を結つてゐましたから失禮しました」と言譯をしながら、座蒲團を出したり茶を入れたりした。

「鬱陶しいぢやありませんか」と云つて、障子を開放つて、川島の前に座ると、階下から慌ただしい呼聲がした。

「はい、今行きますよ」と叫んでから、叔母さんは生眞面目な顔をして稍々聲を潜めて、「あなたのお家の物はすつかりあの押入の中に仕舞つてありますから後でお調べなすつて下さいまし。あの女の家ぢや今度の騷ぎを些とも知らないんですよ。私の方からも成べく知らさないやうにと思つて、ふうちやんにもよく云聞かせて置きました。だからあなたもそのおつもりで彼方へは何にも仰有らないやうにして下さいまし。あのお袋は役分曉漢で仕樣がないのですから」

「へえ。ぢやお袋は何にも知らんでのすかね。僕はあの婆さんが怒つてるだらうと思つてゐたのに」

「あなたが旅行なすつたから、お留守の間ふうちやんが四五日此家へ遊びに來てることにしてゐるんです。さうしないと、あの女がどんな目に會はされるか知れませんもの。あなたにも屹度御迷惑を掛ける

やうな事を云出して、私どもがお氣の毒な思ひをしなきやなりませんから」

「そりや僕も覺悟して居ります」

川島はおふくの母親や兄弟に難題を持掛けられるのを恐れるよりも、おふく自身の執念の方を餘程無氣味に思つてゐた。そして、自分が浮々此處へやつて來た愚かさを後悔しながら、僕が今日あなたに隨いて來なかつたらだうなつたでせう」

「私がお目に掛つた以上、否でも應でもお連れ申さないで置くものですか。ふうちやんは私の實の子供同様に可愛がつてたのですもの。實はね、これまでにもあなたとの間にあの女の家ぢや面倒な文句をつけやう〳〵としてゐたのを、私がいろ〳〵に取做してゐたのですよ」

「面倒な文句と云つて何です?。私はあのお袋には隨分生活の補助をしてるんですがね。そして、會ふとひよこ〳〵してお世辭なんか使つてゐましたよ。あんな人に何を云はれたつて構やしませんがね」と、川島はわざと相手を呑んでゐるやうに裝つた。叔母さんは頻りに薄氣味惡く微見かしても、相手が動じないで煩さゝうにしてゐるのに張合ひが拔けた。階下では二度三度呼立てた。

「今ふうちやんを寄越しますから、仲よくなさらなきやいけませんよ。後で御飯の時には私もお仲間入りさせて頂きませう」

さう云つて叔母さんが下りて行つても、おふくは直ぐには來なかつた。誰れが來てゐるのか、階下では男の笑ひ聲などして陽氣だつたが、二階は夕闇が迫つて來て淋しかつた。川島は所在なさに窓に兩肱を掛けて、見馴れない界隈を見渡してゐた。本郷の場末だが、方角の知れるやうな建物も道筋も自分の

記臆には浮ばなかつた。……狐に化かされてゐるやうだつた。

ふと、後から燈火が差したので顧みると、おふくはランプを持つて入口に立つてゐた。川島は思はず目を外らしたが、ちらと見たおふくの姿形には艶があつて見違へるほど生々としてゐた。元のやうに窓際に立つて、黙つて脊を向けてゐると、おふくも黙つてランプを眞中に置いてその前に坐つた。

川島は言葉を掛けるにも接穂なき思ひをして身動ぎしかねたが、女の様子が豫想してゐたやうに化物染みてゐなかつたので稍々安心した。周圍が今騒々しいので、此處で少々高い聲を出したつて、泣いたつて笑つたつて、外へ洩れて怪まれる氣遣ひはなかつた。

「ふうちやん。どうしたい」川島は果てしがないので、元氣よくかう云つて、笑ひを含んで側へ寄つて肩に手を當てた。女は目を潤ませてゐた。

「僕が惡かつた。謝るよ。……あの日僕が少し用事が手間取つて日が暮れたから、俥で急いで家へ歸ると、お前は家を空けて外へ出てゐたぢやないか。一人でじつとしてると、あの汚い目白の家が化物屋敷のやうでつくづく厭になつたよ。だから、前後見ずに飛出したのだが、魔が差したんだね。暫く當てなしに歩いてる中に夜は更けるし、つい歸り損なつて、こんなことになつたんだ……しかし、何處へ行つたつていゝことはなかつたよ。お前のことは氣に掛るし、誰れも親身で取合つて呉れる者はなかつたしさ。お前の家へ訪ねて行かうと思つても、お母さんが恐ろしいからね。今日此處の叔母さんが來て呉れた時には蘇生つたやうに悦しかつたよ。……この髪は自分で結つたのかい」

嘘ともつかず誠ともつかぬ言譯をしながら、手の先で女を綾してゐたが、おふくは出抜けにその手首

を捕へて首伏して、嚙付かんばかりにいじ〳〵した齒を手の甲へ壓當てた。……「不人情だ」……「打やつとけば私が首でも縊つて死ぬるだらうから、厄介拂ひが出來て丁度幸ひだと思つてゐたのだわ」……「口惜しい」……「死んでよけりや、あなたの目の前で死んでやるからいゝ」

女が泣吃逆しながら止切れ〳〵に云つてゐるこんな言葉は一つ〳〵川島を突いて衰へた心を興奮させた。先日まで毎日のやうに口にしてゐた甘へた言葉など混ぜて、いろ〳〵に女を宥めながら、目を据ゑて見下してゐると、よく磨立てた上に薄化粧をもしてゐる女の横顔が、次第に不斷の通りの萎びた色に見え出した。襟元のザラ〳〵した皮膚は、荒れた堅い素裸を思浮べさせた。

川島はやう〳〵女を抱起して顔を上げさせて、自分は少し離れてじめ〳〵した疊の上に横はつた。さうして初めてこの部屋に居付いてから新たに左右を見廻すと、目白の家を思起させるやうな安普請で、住荒されて埃臭かつた。身裝の小瀟洒してゐる叔母さんの家とは思はれなかつた。て、

「お前はこの二階に寢泊りしてゐたのかい」と、訊くと、

「えゝ。……だつて私には家がないんですもの。こんな所にゐちやいけないの」と、おふくは先つきの意氣込みとは打つて變つて、早くもしほ〳〵して、男の思惑を憚かつてゐた。

「誰れもいけないつて云やあしないさ。」川島はあまり立入つて訊糺して女の神經を亂すのを恐れて、「お母さんには會はないんだつてね」とそつと訊いた。

「えゝ。私我慢して叔母さんの云ふやうにしてゐたの。だけど、叔母さんはお母さんに會ひに行つたでせう。いくら内所にしてゝも様子で私には分つてるわ」

「さうかねえ……」
「私がお母さんに會つて譯を話したら、お母さんは屹度あなたを惡く思つて、酷いことをするでせう。叔母さんがさう云つたから、私も成程さうだと思つたの。此處にゐたつてよくはないけどね」
「此處ぢやどうして日を暮してゐたの?。馬鹿に粧飾込んだりして」
「叔母さんが煩く云つて仕様がないのよ。私厭なんだけど」
「何故?。何時もさうして小奇麗にしてゐる方がいゝぢやないか。……これで最少し肥つたら昔のふうちやんになるんだがね」
「さう?」おふくはニッと笑つた。それが如何にも無邪氣らしかつた。
「此處には僕も泊つてもいゝのかい」
「そりやいゝんですけど。……叔母さんもそのつもりにしてゐるんだけど」と云つて、おふくは聲を潜めて、「私何時までもこんな家にはゐたかないの。あなたの下宿屋へ行きたい。今夜でも」
「下宿なんか駄目だよ」
　川島はたとへおふくとの關係が絶えても、續いてあの下宿屋に住む氣はなかつたので、居られるものなら當分この二階に寢泊りしてゐやうかと思つて、「僕も今は宿無しだからね。お前には此處の叔母さんのやうな親切に世話をして呉れる人があるだけでもいゝが、僕には親身に話相手になつて呉れる人がないんだよ」
　物靜かに興もなげな話をしてゐる所へ叔母さんは上つて來て、意外な感じをして二人を見比べた。

「さあ、ようちやん手傳つて頂戴。御飯にしますから」

（十）

三人はいろ〳〵甘さうな物の載つてゐる食卓を圍んだ。麥酒罐も出てゐた。川島は叔母さんの快活な世間話を興がつて、久振りで家庭らしい溫かい晩餐を味はつた。醉つて頭を害はぬやうにと注意しながら、叔母さんの巧みなお相手振りに誘はれて、つい二本の麥酒を平らげた。頰や目元に紅味が差して、自分ながら稍々生々した氣持になつた。「叔母さん〳〵」と、さも懷かしげに呼んで、自分の故鄕の事情をもおふくとの關係をも、獨り合點で口から出任かせに話したが、相手の目付や受答への調子は此方の言葉に耳を傾けて、しみ〳〵と感じてゐる風だつた。冷かしたり笑つたり、愚物あつかひしてゐる樣子は些とも見えなかつた。

「叔母さん、僕等は世間の事は何にも知らないんだから、間違つた事があつたら注意して下さい。おふくと飽きも飽かれもしないで日を送る方法はないものかね。朝から晩まで顏を見合はせてると、何方も變な氣になつちやつてね」と、川島は今目の前に座つてゐるおふくの顏を見詰めてゐると泣出したいやうな氣持になつた。二口か三口か飮んだ麥酒に紅らんだおふくの目は卑らしい色氣を含んでゐた。

「まだ宵の口でせう。夜が長くなつたからな。かうしてゐても退屈だから、叔母さん何處かへ遊びに行きませんか」

「私がお伴するよりや、お二人だけで行つて入らつしやいな。……その方がいゝだらう。ようちやん」

「私、歩くのは大儀だ」叔母さんが來てからはあまり口數を利かなかつたおふくは懶さうに云つた。

「二人きりぢや面白くないよ。叔母さんの好きな物を見に行つてもいゝし、買ひたい物があるのなら買つて上げてもいゝから、一緒に行つてお呉れよ」

「それはまあ結構なことだけど、今夜はとても駄目なの。明日か明後日なら是非お伴いたしますよ。二階へは誰れも上らせませんから、あなたのお家のつもりで御自由になさいましな」

叔母さんはお給仕をおふくに任かせて階下へ行つた。すると、おふくは居住ひを崩して、「あなたは何故あの人がゐると面白さうにお喋舌をするの。私だけだと口を利くのも大儀さうにしてゐる癖に」

「僕は何を喋舌つたかね。……」

川島がわざと頓興な顔付をして、飯を含んだ口をもぐ〳〵させると、曇つたおふくの眉もひらいた。小鼻に皺を寄せて唇の褪せた口をあけて、見惚れたやうに男の顔を見上げてゐたが、

「私も御飯が食べたくなつたよ」と、伏せてゐた茶碗を取上げた。

「僕はこれから湯に入つて來よう。この家へもお前の世話になつたお禮に何か買つてやらにやなるまいし」

「そんなことはお止しなさい。私がこれまで叔母さんにはよくしてるんだから。あなたが今餘分なお金を持つてるんなら私に頂戴。私もう一文なしよ」

「僕だつて同じことさ」

「でも、お金のありさうなことを叔母さんに云つてたぢやないの。叔母さんはあなたのお國の家はお金

丼だつてよく知つてゐてよ」

「さうかい……」

川島が階下へ下りかけると、おふくは箸を棄てゝ隨いて行つた。茶の間では叔母さんの亭主らしい男が晩酌をやつてゐた。川島は輕く會釋してその前を通つて便所へ行つて、手拭と石鹼を叔母さんに借りて外へ出た。おふくは湯屋を案內すると云つて隨いて出た。

「あの三角の顏をしてるお爺さんが彼處の亭主なのか。何をしてるんだい」

「本所の鑵詰の會社へ通つてるの。今あなたが召上つた牛肉は會社から持つて來たのよ。鑵詰ならあの人に買つて來て貰へば大變廉いんですつて。……お酒が好きで給金は大抵飲んぢまうしね。酔うと少し癖が惡いんだけど、不斷はお人よしで、叔母さんによく叱られてるわ。朝早くからお辨當を持つて出て今時分歸つて來るんだから、好きなお酒ぐらゐ飲まなけや詰らないわね」

「僕もその鑵詰會社へでも入れて貰はうかな」

「馬鹿々々しくて勤まるものですか。日給がたつた八十錢よ」

「それだつていゝぢやないか。辨當を持つて出て、歸つて來るとあんなに甘さうに晩酌をやつて……」

明るい瓦斯の下で、女房の酌でチビ〳〵やつてゐた額の皺の太い銅色をした手丈夫な男の姿を空に描いて、「僕は津崎のやうな仕事をするよりや、あの爺さんのお仲間になりたいね」

「私、叔父さんを氣の毒に思ふことがあつてよ。一日家にゐないものだから、叔父さんは些とも知らないのだらうけど、時々變な男が遊びに來るの。今日もあなたが入つしやる時に來てたわ」

「へえ、そんな事があるんかい」川島は意外に感じて、ふと足を留めて詳しく訊かうとしたが、最早湯屋の前に來たゐたので、おふくを離れて内へ入つた。

醉つた後の入浴だから頭はくら／＼して、とてもゆつくり洗つたりしてはゐられなくて、湯槽に漬つたゞけで飛出した。いゝ氣持で冷かな外の風に吹かれて、珍らしい町の樣子を見廻しながら道の角まで來ると、其處に蹲んでゐたおふくがふと目の先に突立つて、「あなた何をきよろ／＼見てゐたの」と笑つた。

「お前こそ此處で何をしてゐた」川島は湯に入つてゐる間も女に見張つてゐられたやうな氣がして、折角のび／＼しかけた氣持がまた萎けて、おふくがその邊を散歩しながら遠廻りして家へ歸らうと云ふのをも斥けて、自分が先に立つて足を早めて眞直に歸つた。

亭主はまだ酒を飲んでゐて、女房も食卓の前に座つてゐたが、川島は最早以前のやうに何の氣なしに二人を見てはゐられなかつた。階子段の下に立留つて、茶の間を顧みてゐると、「まあ話して入つしやい」と、亭主は聲を掛て、くど／＼女房に指圖して待遇(もてな)させやうとした。おふくは「早く二階へお上んなさい」と川島に囁いて急立てたが、川島は女に隨いてランプの光の細く差してゐる二階へ急いで上つて行きたくはなくて、二三言受答へしてゐる中に知らず／＼茶の間の閾を跨いだ。叔母さんが出した座蒲團の上に座つた。

「まあ一つ」と、亭主は猪口を差して、「以前からあなたのお噂はよく聞いてゐましたつけ。俺等(こちとら)とは違つてお若いから面白いことがたんとおあんなさるでせう」

「なあに」川島は相手の嚴い顔をも憚らないで、無雜作に猪口を受けて、醉どれ氣焔を聞いてやつた。罐詰の製造法や賣捌などの講釋をしたり、若い頃放蕩をやつた懺悔やら自慢やらをしたりするのを聞きながら、此處の夫婦の生活(くらし)の様子を想像しては不思議に感じてゐた。

(十一)

「あなたは何故なんな人の話なんか落着いて聞いてゐるの。自烈體ぢやないの、あんまり飲ませると素(すつ)裸(はだか)になつて往來へ出やうとしたりして叔母さんが困ることがあるのよ」と、おふくはやつと川島を二階へ連れて上つてから云つた。

「僕は話は碌に聞いてもゐなかつたが、あの爺さんの留守をねらつて毎日來る男のことを考へてゐたよ。あの夫婦が差向ひで笑ひ話をしてゐるのを見ながら、その男の事を考へてると厭なものだね」

「明日でも來るかも知れないから、あなた知らん顔して會つて御覧なさい。脊が低くつて色の黒い馬面(うまづら)の些ともいゝ男ぢやないのよ。稼業と云つちや小間物を田舍へ賣りに廻つてるんださうだけど、何だか喰込(くひこ)んでばかりゐるらしいの。叔母さんは私が氣が付かんと思つて白ばくれてるけど、話の様子や素振りで、私には分り過ぎるぐらゐ分つてるわ。……あの歳で厭だわね」

「さう云へば、成程目白へ遊びに來た時よりや、叔母さんもお粧飾(めかし)をしてるやうだね」

「昨日は私をお留守番にして、二人で遊びに出掛けたのよ。あなたの居所も永坂さんがあなたの從姉(ねえさん)に會つて聞いて來て呉れたの。」

「そんな男を使ひにやつたりしちや困るね。」川島は目を瞠てた「そして從姉とどんな話をして來たのだい。お前達は今まで僕に何にも云はなかつたぢやないか。その男が僕の事にまで關係してるとは驚いた」

「私はよく知らないわ。叔母さんが一人で勝手にしたことだから」おふくは調子に乘つて浮かり口に出したことを後悔しながら、「だつていゝぢやないの。あなたが此處へ來て呉れてかうして二人が一緒にゐられゝば、外の事は私どうでもいゝと思つてよ」

川島は默つて考込んだ。女は直ぐに涙ぐんだ。階下では亭主がごろ寢して高鼾を掻いてゐた。「ふうちやん、お茶を入れやうかね」と、叔母さんは階子段の下から聲を掛けたが、返事がないので、遠慮して上つては來なかつた。

「だからこんな煩い所にはゐないで、知つた人のゐないやうな所に隱れて暮したらいゝと思ふわ」と、おふくはやがて涙聲で云つた。

「さうだねえ。……」

「今夜だつていゝわ。もう此處の人に構つて貰はなくつてもいゝんだから、大事な物だけ持つて他所へ行つちやどう？」

「行先の當てがありもしないのに」

川島は醉後の入浴で怠るくなつてゐる身體を動かすのも大儀になつて、吸差しの煙草を投げて、おふくに脊を向けて寢倒れた。

おふくは戸締りをして寢床を延べて、燈火を消した。

一しきり昏睡に陷つてゐた川島は、眞夜中時分に醉ひが醒めて目を醒ました。喉の渇きを覺えたし便所へ行きたくなつて、ランプを點けやうとしたが、マッチの置場所が分らなかつた。手索りで寢床のまはりを捜しながら女の髮の毛に觸れたり手足に觸れたりしてゐると、醉つてゐた間の事が忌はしい夢のやうに心に浮んだ。この二階もおふくのザラ〳〵した皮膚の毛穴々々から染み出る臭ひに汚れてしまつたやうだつた。で、彼れは自分とおふくとの夜の姿をまざ〳〵と目で見るのが無氣味になつて、折角索り當てたマッチを擦らないで、壁を傳つて索り足で窓際へ寄つた。そして、雨戸を開けて高い窓の上に足を掛けて、廂の上へ尿をした。

　周圍は死んだやうに寢鎭まつて、空には止切れ〳〵に淡い雲が浮んでゐた。川島は何處ともなく目を据えて容易に窓際を離れなかつた。が、さうしてゐると、いつそ一思ひに窓から下へ飛んで、自分の身體を粉微塵にしたいやうな氣がし出した。後を見ると、月の光で部屋の中が微かに見えた。すや〳〵眠つてゐるおふくは黒い塊となつて片隅に横はつてゐた。川島は雨戸を鎖して、じめ〳〵した疊の上に腹匍ひになつた煙草を吸つてゐたが、自分の骨の髓まで腐らせるこの女の側をどうしても逃げられないほどなら、いつそこの女を肌の柔かい色艶の美しい聲柄の澄んだ女につくり上げて、女いするがまに〳〵なつてゐやうと思つて見た。が、しかし自信の乏しい彼れも、おふくの肉體の醜を疑ひ得なかつた。外の女にも勝つて男を傷ける力を持つてゐるのを疑ひ得なかつた。……そして、夜が明けるまで女が目を醒まさぬやうにと願つてゐた。

　闇の中に煙草の火の動いてゐるのを見付けたおふくが、出拔けに吃驚した聲を立てたのは暫く立つて

からだつた。

「お冷を汲んで來て呉れないかね」と、川島は靜かに云つて、手を伸してランプを點けて、長襦袢一つで起きて來たおふくに渡した。

「あなた寢呆けたの。そんな所にごろ〳〵して、風邪を引くぢやないの」

さう云つて階下へ下りたおふくが、コップを盆に載せて戻つて來るまでに、川嶋は蒲團の上に胡座を搔いて夜着を頭から被つてゐた。その樣子が可笑しいと云つておふくは笑つた。男がコップの水を息をも吐かず呑干すのに目を留めながら、

「もう叔母さんの起きる時分よ。時計を見たら目醒しの鳴る時分だから。私も此處へ來てから早起をするやうになつたよ」

「おや、戶を開けて床も上げたらいゝだらう。今日は奇麗に此處を掃除してお置きよ。僕は下宿屋の仕末をつけて來なきやならない」

川嶋はコップを下へ置くと、素早く着物を着替えてキチンと帶を締めて、愚圖々々してゐる女を促して、戶を開けさせて冷やかな朝風を入れた。目醒し時計が鳴つて階下でも物音がし出した。

「まだお星樣が出てゐるのに。東もまだ白らんでもゐないよ」と、おふくは長襦袢の袖を搔合はせて窓に寄つて、「もう秋になつたのだわね」

感歎したやうなその言葉の調子が妙に川島の胸に染んで、「お前も秋の哀れを感じてゐるのかい」

「今はいゝけど、これから次第に寒くなるんだから厭だわね。……この頃頭を解かすたんびに髮の毛が

脱けてよ。昨日なんか髪を結つてると氣味の惡いほど脱けちやつた」
「秋になつたら誰れだつて脱けるんだらう。お前の髪は薄い方ぢやないよ」
「さうか知ら。あなたにはさう見えて？」
「あゝ」川島は自分の頭の髪を摑んだが幸ひに一本の毛も脱けなかつた。煙突の方を指差しながら、「今彼處によく光つた星が見えなくなつたね。今朝は靄もかゝつてゐないし、よく澄んでる。今日あたり田舍へ行つたら秋景色はいゝだらう」
「田舍々々と、あなたは時々獨言のやうに云ふのね。それほど田舍へ行たければ、思切つて入らつしやいな。私も隨いて一緒に行くわ。私もあなたが傳染つたのだか急に田舍へ行きたくなつてよ。今日に今日行つたつていゝの。さうすればお母さんのことやこの家のことは氣に掛けなくつてもいゝの。あなたも今のやうだと、東京に用はないし、思ひの殘ることは何もないんでせう」
「ある筈はないんだがね」……自分が英雄豪傑ではないにしろ、有振れた健全な人間だつたなら、こんな下らない事に關はらないで、今時分野山の爽かな曙を仰見てゐたかも知れないのにと、川島は次第に明るくなる外を眺めてゐた。湯屋か何かの煙突からは淡い煙が噴出された。

（十二）

亭主が辯當を持つて出掛けた後で、叔母さんは二階の二人を招いて茶の間で食事をさせた。そして、下宿屋の跡片付には叔母さんが川島の代理で行くことになつた。次手におふくの家へも寄つて來ると云

つて、二人の考へは碌に聞糺さないで、獨り合點で極めて、留守はおふくに頼んで出て行つた。

川島は煙草盆を持つて二階へ上つて、一人で喜んでゐたが、おふくも洗ひ物や拭掃除はいゝ加減にして置いて、隣りの八百屋で梨と林檎を買つて來て、玄關の戸を紐で縛つて二階へ上つた。

「叔母さんが歸つて來るまでは私達の天下だわね。何時でも此處を出て行けるやうに、大事な物だけ一纏めにして置いちやどう？。叔母さんに内所で今の中に他所へ預けといてもいゝわ」

「お前も隨分勝手な人間だね。今まで世話になつときながら」

「だつてあの人の仕打が氣に喰はないもの。私からお金を取る算段ばかりしてるのよ」おふくは不人情と思はれないための言譯にかう云つて、「永坂といふ人と一緒になつて私を冷かしたり嬲つたりしてさ。あなたと別れるつもりなら、あなたからどつさりお金を取つてやるし、身の振方もいゝやうにつけてやるつて、そんなことも云つたのよ。私が怒つたものだから、後で叔母さんは謝つたけど。……謝らした時は本當にいゝ氣味だつたわ」

「身の振方をどう極めてやらうと云ふのだい。叔母さんは」川島は女の言葉に動ずる風もなく、「僕やお前よりや叔母さんの方が智慧があるんだから、一つ任かせてしまつたらどうだらう？」と、笑ひ〳〵云つた。

「今日からあなたがゐるから大丈夫だけどもね。私は此間中時々怖いやうな氣がしたよ。……でも、よかつたよ」

おふくは菓物の皮を剝きながら、思出し〳〵してゐた。そして、媚を含んだ目付で男を見ては、過去

の不安を忘れてゐた。
裏口で御用聞の聲がすると、階子段の方へ顔を出しては斷つてゐたが、ふと、表の方で聲がした。「ようちやんぢやないの。開けてお呉れよ。私だよ」
「お用聞ぢやなかつた」と、おふくは顔を引込めてどぎまぎして、「永坂さんよ。厭になつちまう。あなた戸を開けに行つて頂戴な」と、男に囁いた。
「僕が出るのは變だよ」
「さう云はないでさ。あなたになら何も云はないでせうから、只茶の間へ上げて叔母さんの歸るまで待たせとけばいゝのよ。私が會ふとまた煩いことを云つて困るの」
表から續け樣に聲が掛ると、おふくはます〳〵行惱んだので、川島は爲樣事なしに下りて行つた。どんな男かと玄關の障子を開けるまで考へ〳〵靜かに出て行くと、
「眞晝間戸を締つて置いてどうしたのだい。皆んなゐないのかと思つたら」と、表から出拔けにキビキビした聲がした。
川島は思はず足を竦めた。咳拂ひして暫く間を置いて障子を開けた。頤に腫物のある色の淺黑い面長な男が格子戸に兩手を掛けてゐた。笑ひを殺してゐるやうな顔付して此方を見た。堅く縛つてある紐を爪先でほぐしてゐる中、「濟みません〳〵」とペコ〳〵頭を下げた。
「主婦さんはゐないのですか」と云つて、永坂は茶の間へ入つた。角帶に煙草入を挾んで羽織は着てゐなかつた。四十にはまだ間のありさうな年輩で、見たところ豫想したやうな變な男とは思はれなかつた。

「今日はちと暑過ぎますね」と話しかけられるのを聞流して、川島は二階へ上つた。おふくは菓物や煙草盆をも持つて、片隅へ座を移してゐた。

「永坂さん何か云つて？」と訊いた。

「お前がお相手をしたらいゝぢやないか、林檎でも持つてゝ」

「厭なこつた。…あの人は來たら容易に歸らないし、邪魔つけだわね」とおふくは悄さげに云つた。

「ぢや、此處へ呼んで來るか。僕はお前に紹介して貰つて、あの人と話をしやうかね。どうせ一度は聞かなきやならんこともあるんだから」

「あの人の云ふことは當てにならないわ。…先日叔母さんのゐない時に、私を捉へていやらしいことを云つたりするのよ。」

「さうかい。…そして、お前はどうだつた」

「突飛ばしちやつたの。…睨みつけてやつたの」

「少しの間僕と離れてゐる間にいろんなことがあつたんだね」

「叔母さんに言付けてやると云つたら、あの人手を合せて私を拜んで謝つてたよ。その樣子の可笑しさと云つたら、あなたに見せたかつたわ。…ふうちやんは感心だつて、後になつて眞顏でいろんな事を云つて私を褒めるの。…いくら何でも私は叔母さんのやうな不品行な女ぢやないからね」と、おふくは自慢さうに云つた。

川島は苦笑した。この女が五日も六日も獨り寢に甘んじてゐられたか知らんと疑はれたりした。

「お前も叔母さんの不品行な樣を見てたら、愛相が盡きやしないかい。……さう云ふ他人の事を考へるにつけても、僕達も暫く別れて、お前は當分溫泉へでも保養がてら出掛けるし、僕も何處かの海岸か山かへ旅行することにしたらいゝと思ふがね。無論手紙もやるし費用も送つてやるよ」

「またあなたの十八番が始まつた」おふくは最早眞面目には受取らないで、「そんなことして私を追拂はないでもいゝぢやないの。私達は些とも不品行なことはないわ。永坂さんさへ私に感心して、あなたの從姉さんを訪ねたりあなたの下宿も搜して呉れたのだわ」

「そりや永坂さんは感心したかも知れないが、僕はこの部屋にかうして五日も十日も續けてゐたら氣が狂ふかも知れないよ。」

「どうして？。」おふくは男の氣色ばんだ顏を氣遣はしげに見守つて、「叔母さん達がいけないから？。」

「なに。永坂さんや叔母さんは僕よりやえらいんだよ。……そして、僕はそんな人が僕に對してたとへどんな事を企んでたつて何とも思はない。僕は裸にされたつて構はないが、只自分の生命が惜いよ。魂が惜いよ。僕は普通の人間にさへ劣つたへな〱した愚かな男だけれど、……」

川島は興奮してから云ひかけてふと口籠つた。心の中に何か尊げな考へが燥めいたが、自分にもはつきりしない間に消えてしまつた。そして、呆氣に取られてゐる女の顏が邪念の化身のやうに見えた。

「あなたの仰有ることは私なんかにはよく分らないけど、あなたの目が怖いわ。何故そんな目をして私を見るんです？。」おふくは直ぐに淚を浮べた。「……私は永坂さんとどうもしたのぢやないんだわ。この家の厄介になつてゐたのが惡ければ、堪忍して頂戴。どんなにしてゞも謝るから」

二人は暫く無言でゐた。茶の間にゐる永坂は茶を飲んだり煙草を吸つたり生欠伸を洩らしたりして待ちあぐんでゐたが、ふと階子段の下へ來て、「ふうちやん、新聞が空いてれば貸して呉れませんか」と聲を掛けた。が、返事がなかつたので、二階を見上げて耳を澄ました。そして、ニヤリと笑つて元の座へ戻つて、口の中で浪花節など唄つてゐた。

（十三）

叔母さんが容易に歸つて來ないので、永坂は「私は午過ぎにまた寄りますからね」と二階へ向つて言置いて外へ出た。

冴えた日は、差向ひでだらしなく座つてゐる二人の姿形を互ひ〳〵の目に鮮かに映じた。疊の汚染や壁の壊れや窓の鬩の歪んでゐるのが、この家の貧乏臭い内幕をあり〳〵と示した。永坂がゐなくなると、おふくは階下へ下りて自分の着替えや化粧道具を持つて來た。押入から行李を出して、入る物と不用の物とを川島に撰分けさせて、「入らない物は屑屋へでも賣つちまつたら何處へ行くにも手輕になつていい」と云つた。

荷物の中には鍵のかゝつた小さい手文庫があつた。その中には川島が面倒な思ひをして需めて來たいやな繪の本が入つてゐる筈だが、外に何か女が秘密に仕舞つてゐる物があるに違ひないと川島はかねて思つてゐた。

「そんな物こそ屑屋へでも賣つちまつたらどうだい」と云ふと、おふくは慌てゝ文庫を後へやつて、

「これが賣れるもんですか。……あなたは今日はどうかしてるよ」

「賣られなければ文庫のまゝで燒いてしまうか。何だか僕には目障りになつていけないね」

川島は先つきから、この女と自分との關係の紀念になりさうな物を不用品として除けさせるやうにと、自分ひとり竊かに企てゝゐたのだつた。で、「その繪は一つ〳〵二人の目の前で燒きたいな。片つ端から灰になるのを見てゐたら、氣持がいくらか晴々するだらう。誰れもゐないのを幸ひに、階下へ行つて長火鉢の火で燃さうぢやないか。……どれ此方へ出して御覽。鍵は何處へ仕舞つてる？」と鋭く云つて、強い決心を目顏に微目かした。

「あなたどうした 。……些つと別れてゐた間に人間が全で變つたやうに私思ふわ」おふくはこれまでにない怖い影を今日はをり〳〵男の顏に認めた。不斷のやうに纏はりついて甘へられなかつた。

「津崎なんかでも從姉でもさう云つて笑つてるが、お前でさへさう思ふのかい。僕が本氣になつたのが變なのかね……」川島はしほ〳〵した女の方から目を外らして、「文庫には外に何を入れてゐるんだ？」

「あなたの寫眞や私の寫眞や、あなたの手紙があるだけだわ」

「それつきりかい」

「えゝ。……私、外の男の手紙なんか隱してやしなくてよ。何なら見せて上げたつていゝの。私のお友達の手紙は二つ三つあつたかも知れないけれど」

「お前が外の男の寫眞や手紙を持つてゐやうとゐまいと、そんなことは僕は爪の垢ほども氣にしてやしないんだぜ。僕の寫眞がその手文庫の中へ入つてるのがむしろ厭なくらゐだ。……僕も寫眞も一緒に燒

いて貰ひたいね。‥‥それから外には何もないのかい」

「ぢや、あなた自身で開けて見るといゝわ」おふくは針箱の引出から小さい鍵を出して前へ付つけた。

「強いて見たくはないさ」

川島は一時興奮した心の鎮まると共に、枕を出して横になつて、怠い身體を休めやうとしたが、そこへ叔母さんが俥に乗つて歸つて來た。一くるみにした荷物を二階へ上げて、「よく改めて下さいましな」と、宿料の受取や殘つた金をも一緒に前に置いた。今宿へ着いたばかりの郷里からの手紙も持つて來て呉れた。

「今日から此方にゐらつしやることにして、所番地を下宿屋へ書いて置きました」と云つて、叔母はおふくの方へ向いて、「お母さんは何時もの通り話が長くつてね」などゝ云つてゐたが、何か混入つた話があるらしく、おふくを引立てゝ階下へ行つた。

川島は手紙をザッと讀終ると、叔母さんが持つて來た自分の荷物を引寄せたが、それよりも手文庫の方へふと心が惹かれた、女はゐないし、鍵は側にあるし、こんないゝ機會はまたと得られない氣がしたので、かねての疑ひを晴らすために、手文庫の錠を外してこつそり中を索つた。手紙の反古などは誰れからのであらうと、さして見る氣はしなかつたが、見覺えのある縮緬の袱紗で何やら大事さうに包んであるのを反古の下から捜出すと、「屹度これだ、彼奴が秘密にしてゐたのは」と思はれた。

袱紗には飴か砂糖かがべた〳〵付いてゐた。結び目を解いて見ると、中には貯金帳と神符とが入つてゐた。神符はおふくが田舍にゐた時分から一生の災難除けに大切に持つてゐると云つて一度見せたこと

があつたが、貯金帳は女の口から一度も洩らしたことがなかつた。

「あの女が何時からこんな氣になつたのだらう?。おれがやつた生活の費用や小使錢の中から殘したのだらうが、あの女が將來を案じて貯金を考へてゐたとは不思議でならない。やゝもすると死ぬるだの何だのと云つてゐた癖に」

川島は手文庫の錠を卸して、枕に就いて目を瞑つてからも、女の大切にしてゐる貯金帳と神符とそれから繪の本とのことを、暫くは思詰めてゐた。これまで蔽はれてゐたおふくの心の中を覗いたやうな氣がした。そして、女のこんな秘密はしほらしいやうでもあつた。

やがておふくが上つて來たが、川島は眠入つてゐる眞似をしてゐた。おふくも手文庫を押入に藏つてから枕を出して横になつたが、目は見開いてゐた。二人の顏や手足はをり〳〵蚋に舐められてゐた。その間に階下では永坂と主婦とが差向ひでひそ〳〵話に耽つてゐた。二階の二人の事が重な話の種になつてゐた。晝飯には永坂の好みで天どんを取つたが、二つだけ二階へ持つて行つて、上と下とで別々に食事をすることにした。永坂には銚子を一本つけてやつた。

「ふうちやん、一つお酌をしてお呉れよ」などゝ湯を差しに下りた時に揶揄はれたおふくは、川島の側に歸つて來ると、「眞晝間あんな男にお酒を飮ましたりして、叔母さんは面白いのか知らん。叔父さんが今歸つて見たらどう思ふだらう。卅間は私癪に觸つたから叔父さんに知らせてやらうかと思つたのよ」と云つた。

「そんなことをして見ろ恨まれるぜ。餘計なお世話ぢやないか」

「たつて、私、叔母さんが怖いもの。今日私の家へ寄つて見たら、お母さんが加減が惡いやうだつたから、二三日泊掛けで介抱に行つて來いつて云ふのよ。あなたのことは此處に預つて置くから大丈夫だつて云ふんだけどね」

「行つたらいゝぢやないか。僕は此處を動きやしないよ」

「屹度?。……あなたの事も不安心だけれど、それよりも叔母さんが永坂さんと共謀になつて、あなたにどんなことを云出すか知れないから怖いよ」

「そりやお前がゐてもゐなくつても同じことぢやないか」川島は尋常にこの女に離れられるのを喜びながら、「兎に角お母さんの病氣を打やつとく譯には行くまいね。」

「あなたが行けつて云へば行つてよ。だけど、どんなことがあつても、日に一度づゝは様子を見に來るわ。それからあなたは永坂さんとは懇意にしない方がいゝのよ。あの人のやうになつても困るから」

（十四）

叔母さんが勸める傍から川島も口添へして、やう〳〵夕方までにおふくを家へ歸らせた。着替えと手文庫とはおふくは持つて行つた。

川島は今まで絶えず自分を刺激してゐた女がゐなくなつた後で、氣樂に郷里（くに）への返事を書いたり、津崎などへも轉居の通知を書いたりした。自分でポストへ入れに行つて、腹こなしに近所を歩いて來ると、叔母さんは茶の間へ招いて瓦斯を點けた。

「お一人でお寂しいでせう」と云つて、叔母さんは長煙管を持つて、川島の前に座つた。川島は改つてお相手をされるのを氣詰りに思つて、膝を崩して此方から努めて馴々しい口調で、今見て來た近所の商店の樣子や、この邊の住ひの便利不便利などを話の種にした。

「私共は昨年の末に二長町から越して來たのですが、馴れるまでは何だか不便で御座んしたよ。この頃ももつと小奇麗な家へ越して行くつてたび〳〵話が出るんですけど、つい憶劫で愚圖々々してゐますよ。居心地がお惡いでせう、二階は不斷は使はないもんですから、汚れ次第に汚れてゐて」

「私達だつてこれまで埃だらけの家にごろ〳〵してゐたんですから同じことですよ。私は質素でいゝから奇麗な氣持になりたいと思ひながら、服裝からこんな風ですからねえ」と、川島は洗ひさらしの無意氣な浴衣に薄い銘仙の單衣羽織を重ねたさして襞でもない服裝を身窄らしく思つて見た。

「あの女は氣が利きませんからね。綻ろび一つ縫ふのさへ面倒臭がるんですもの。あなたがよく半歲もあの女を家に置いてやつて下すつたと感心してゐましたよ。此方へ來てからは、側で私が口八釜しく云つて、小じやんとさせてゐるんですけれど、默つてゐやうなら、髮はぐしや〳〵にして、足の裏は眞黑にしてぞろ〳〵してゐるんですからね」

「さうでせうね。元はあゝでもなかつたんですが、私と一緒にゐたゝめかも知れませんよ。叔母さんの側にゐてみつしり使はれでもしたら一人前の女になれるかも知れませんがね」

「あの女の母親もあの女の身の振方は一切私に任せるつて、今日もさう申してましたよ」叔母さんは相手の顏付に氣を付けながらかう云つて、「あなたはどうなさるおつもりです?。」

「どうするつて何です。僕は叔母さんに隨いて浮々此方へ來たゞけです」

「あの女に何時までも付纒はれては迷惑だと仰有るのなら、私がお引受申してどうにかして上げますよ」

「ぢやいゝやうにして下さい。僕は手切金か何かで片がつくものなら、少々の金は故鄕から出して吳れるから構ひませんよ。……實はあの女のためには長い間一人で困つてゐたんです。氣味が惡くつてね」

川島は相手の親切さうな言葉に釣られて、日頃取留めもなく胸に浮んでゐることを不用意に喋舌つた。

「私共に子供がないから、ふうちやんを養女に貰はうなんて、以前そんな話があつたんで御座いますよ。私の從兄の男の子供を一人貰つて夫婦にしたら丁度いゝと心當てにしてゐましたのに、知らぬ間にあの女があなたと家を持つたつて、あの時は寢耳に水で吃驚しましたよ。自分の子のつもりで隨分面倒を見てやつてゐたのですもの」

「私が惡かつたんですね。私はふいとしたことから理由もなしに一緒になつたんですよ」

「そりやお若い時分にはね」

「私も若い中にこんなぢや駄目ですね。相手がもつと奇麗でゞもあればだが……」

「あなたにはどんな顏立の女がお氣に召すんでせう。意氣なのがお好き? これまでにも方々のお茶屋なんぞへ入らしつて、いろんな奇麗な藝者衆にお馴染があるんでせう」

「なに。私はおふくの外にはあまり女を知りませんよ。あの女一人でへたへたになつて、女の臭ひも厭になつたのですもの」

「それはどうですかね。あなたはあんまり女に騒がれ過ぎてお厭になつたんでせう」

こんな話をしてゐる間に、叔母さんは遠慮氣のない戯談を云出した。隣近所の娘の噂をしたり、自分の知つてゐる若いいゝ女を見せてやらうかと唆かしたり、頻りに色めいた話をした。川島の耳には叔母さんの言葉が皆んないゝ氣持に響いた。むしろおふくを遠ざかつて一人でこの家に泊つてゐたら面白いことがあるかも知れないと、おふくから聞いた時には不快に感じた叔母さんの不品行な所行をも興ありげに感じ出した。

叔母さんが襷を掛けて臺所へ立つと、川島は二階へ上つたが、其處は何時の間にか掃除されて、新しい座蒲團が出されてあつた。古い食卓が机の代りに備へられて、その上には講談本の「野狐三次」や、怪傑××傳や、實業雜誌が載せられてゐた。川島は昨夕とは部屋の様子が異つたやうな氣がして座心地がよかつた。……「叔母さんはおれの云ふことをよく呑込んで呉れた。おれを馬鹿扱ひはしてゐやあしない。おれの顔が若々しくつて艶がいゝと云つてた」

川島は自分の身體に急に力が湧いたやうな樂みを覺えた。「叔母さんのすることは只金のためであらうともそれはどうでもいゝ。あの人によつて素直におふくに別れられて思ひを殘さぬやうに出來ればいゝではないか。……彼女に會ふと自から人間として恥かしいやうなことを口にしたりして醜い様をしたりするのが最早堪へられない。半年の餘もよくあゝしてゐられたものだ」

で、彼れは叔母さんと永坂との關係がたとへおふくが云つたやうな事實であつたにしても、自分達よりも醜さが薄いやうに思はれた。他人の男女關係はみんな自分達よりも美くしつて單調でないやうに

か想像されなかつた。醜くつて執念が强くつて男を傷つけるばかりのおふくといふ女は憎かつた。

暫く一人で座つてゐると、またさう云ふことが考へられ出したが、其處へ叔母さんが膳を運んで來た。主人も歸つて來てゐるやうだつた。「明日から階下へ行つて御一緒に頂きますよ」と云つて、川島はむしろそれを望んだ。一人で食事をしてゐると、何となく物足らなかつたので、ふと主人を誘つて酒でも飮みに行かうかと思つて、中途で箸を措いて階下へ下りた。

（十五）

「おちやお伴しますかな」

主人の助造爺さんは直樣同意して、顏や手足を洗つて浴衣に着替えて、手拭を懷に入れて、自分で極めた行先を女房に言置いて出掛けた。「あんまり飮まさないやうにして下さいまし」と叔母が格子戸まで出で聲を掛けるのを聞流して、川島は向ふまかせで隨いて歩いて、「てん松」と軒燈に印のついてゐる小さい料理屋へ入つた。

「午餐に食べた天どんはこの家のでせうね」と、川島は四つの一つは永坂の口に入つたことを妙に考出した。

「私の家では大抵此處から取りますよ。大して甘いつてことはないが、何でも出來るから調寶でさあ」

何にしますかなと、助造は一應相手に訊きながら、獨り極めで三品ばかり注文した。家では日本酒ばかり飮んでゐる癖に、麥酒をも遠慮なく吩咐けた。川島は今さして口腹の慾は起らないので、相手のす

るまゝに任せて、窓に凭れて煙草を吸つてゐた。晝間は時候外れに暑かつたが、夕風は流石に秋らしかつた。

爺さんがぽつ〳〵持出す話は、叔母さんのほど快く聞かれなかつた。素面でゐる間は、爺さんの口調はぎごちなくて、云ふ事も川島自身には何の關係も興味もないことだつた。此方を物識りのつもりにして、新聞で見た支那問題や海軍事件や大學總長の事件などに對する意見を訊糾すのが煩さかつた。仕様事なしにいゝ加減な答へをすると、それを眞に受けては、根掘り葉掘り熱心に訊返して留め度がなかつた。屢々「こんな事は日本國の大問題ですからな」と云つてゐた。

「しかし新聞の記事は必しも確實ぢやないから眞相は解りませんよ」川島は屢々懶さうに云つてこんな話から逃げやうとして、膳が出ると頻りに相手に酒を勸めて、自分も知らず〳〵杯を重ねた。

「僕もあなたの紹介で罐詰の會社へでも入れて貰ふ譯に行きませんかね。帳面付けでも使ひ歩きでも何でもやりますよ」

「どうして。あなたなんぞに勤まりやしませんや」爺さんは無愛相にかう云つて、「私も若い時分に學問なり何なり、みつしり身に藝をつけといたら、もつと氣の利いた生活が立てられるのでしたらうが、自慢ぢやないが、二十歳の年齢に驅落をして生きる死ぬるの騷ぎをやらかしたぐらゐでね」

「僕は娯み半分あなたの會社へ入らうてんぢやないのですよ。さうしたら身内の者も安心するでせうし、私の精神にも力がついて來ると思ふからです。實はおふくとも別れることになつてるんです。叔母さんが甘く極りをつけて呉れるさうだから、今度こそ僕も潔白な身になれるでせう」

「家内が何か云つてあなたにお勧めしましたかい。また例の差出た小細工を初めやがつたかな」と、爺さんは手拭で額を摩り〳〵目を瞠めた。可成飲んでゐるのに、些とも色には出てゐなかつた。刺身を挾んだ手はぶる〳〵震へてゐた。「家内の云ふことはお聞きなさるな」とやがて生眞面目に云つた。

「いや、僕がかねてあの女にや愛相が盡きてるんです。叔母さんは同情して呉れたのですよ」

「ぢや、あなたがあの女を棄てる氣になりなすつたのかい。」爺さんは意外にも不機嫌らしく、麥酒のコップを置いて顏を上げて、「そりやよくない。おふくさんの方であなたといふ人をあれほど慕つてゐるのに、無理無體に手を切らうなんて、あるまじきことだ。私はね、これまで道樂はさんざやつたが、薄情なことは些ともしてゐませんぜ。女郎に馴染が出來りや年が明けるまで通つてやつたし、驅落をした女には早く死なれちやつたが、今でも時々墓參りぐらゐしてやりまさあ。……今の家内はやくざな奴だが、それでも貧乏所帶を切盛りして呉れてゐるんだから、大抵の事は大目に見て一生睦じく暮すつもりで居りますよ。……おふくさんの何處があなたのお氣に入らないのでせう。私にや惡氣のない女に見えるんだがねえ」

「何處か惡いつて明ら樣に云へやしませんがね」川島は相手の意氣込みに怖けて、「この話は止しませう」と云つて、一杯に注がれてゐるコップを呑干した。

「そりや、毎日女と顏を突合せてりや誰れしも厭なことがあるでせう。しかし、女つていふものは調寳なものさ。私共のやうに歳を取つて見ると、つく〳〵有難味が分りませすぜ」爺さんは機嫌を直して、三角な顏ににや〳〵した笑ひを浮べた。

「あなたのやうな御亭主を持つた女は仕合はせですね」
「さう思つて呉れるとようがすがね。こんな働きのない野郎は嬶あどんの鍋突を喰ひ通しでさあ。……あなたは俺等とは異つて學者だから、おふくさんのやうな無教育な貧乏人の娘は不釣合かも知れないが、縁があればこそ一緒になりなすつたんだ。末始終可愛がつておやんなさい。何も不都合な事をしないのに、此方で厭いたからつて、犬か猫を棄てるやうに棄てるのは罪ですぜ。……私の家内が餘計なおせつかいをしやうとお取上げにならん方がようがさあ。彼奴の惡い癖で、私も時々見兼ねることもありますよ。成べく默つて知らん顔をして居りますが、人樣にお氣の毒でね」
川島にはこの爺さんが馬鹿だか腹の据つた人間だか分らなかつた。で、逆らはぬやうに氣焔を聞きながら、料理を荒してゐたが、二三本の銚子や麥酒を空にした時分には、自分の頭もくら／＼し出したので、女中を呼んで、茶漬を一杯食べて歸らうとした。
「まあ、お少し御辛抱なさい。あなたにばかり奢らしやしませんや」爺さんは女中に新たに酒や肴を吩附けて、「私は行掛けと歸り掛けに途中で一杯やるんだが、この頃はバーといふ奴が出來て大變調寶だ。西洋の酒もちよい／＼やつて見たが、あなたはお好きですかい。西洋酒は？」
「おや、此處を出てバーへでも行つちやどうです」
「それもようがすな。家へ歸つても寢るばかりだから。……あなたと御一緒なら何處へ行かうと又何なしさ」爺さんは調子に乘つたが、ふと思出したやうに、「しかし、あの女が來て待つてゐやしませんかな」
「少しは待たしとくのもいゝでせう」

「へゝゝ。それもさうさ」

川島は爺さんが愚圖々々するのを強いて切上げさせて表へ出た。川島はます〳〵醉ひが發して、足許のひよろ〳〵してゐる爺さんを助けて歩くのが煩しくなつた。が、早く家へ歸らうとすると、爺さんは纒はりついて離れなかつた。そして爺さんの逞ましい腕力にはとても敵はなかつた。電車の終點の近くに新らしく出來たカッフエーへやうやく連込むと、其處にゐた幾組もの學生が一度に此方を怪しげに顧みた。

川島は隅つこへ腰掛けた。爺さんにはウヰスキーを與へて、自分は紅茶を啜りながら、若い客の飲んだり食つたりしてゐる樣子に目を留めてゐた。そして、傍で爺さんが何か管々しく云つてゐるのに耳を貸さなかつたが、暫くしてふと入口から顏を出して直ぐに引込んだ女がおふくらしかつたので、川島は思はず立上つた。まさかと思ひながら氣になるので、椅子を離れて窓越しに薄暗い外を見ると、入口近くに立つてゐる女の後姿が矢張それらしかつた。

「どうなすつたい、川島さん。君もきよと〳〵して些とも落着いてゐない人だ」爺さんは外へも聞えるやう大きな聲で呼んで、頻りに頓興な聲で笑つた。胸をはだけて銅色の肌を出してゐた。

川島は默つて座に返つたが、此處へおふくのやうな女が入つて來て、爺さんに無遠慮な口を利かれでもしたら、自分が周圍の客から見す〳〵侮辱を受けねばならぬと、じつとしてゐるのが不安だつた。二三の客が出て行くと、また新たな客が入つて來た。

「長いことは云はない。これを一本飲む間突合つてお呉んなさい。若しあの女が家で待つてゐたら、私

が手を突いて詫まるから」と、爺さんは川島の手を握締めて、「君は賭事がお好きかね。花牌を引く術を知つてゐますかい。賭事はよくない。やらん方がようがすぜ」

「僕は花牌なんぞ持つたこともありませんよ。そんな氣の利いた遊び事は些とも知りませんね」

「それや結構だ。いくら家内が勸めても仲間に入つちやいけませんぜ。私は一家の主人でありながら監督が行屆かないのはお恥かしい譯だが、時々惡い友達がやつて來るんでね……」爺さんはかう歎息して、目を瞑つて頭を微動させてゐたが、俄かに言葉を强めて、「あなたは私の家には長くゐないで、小さい家でも持つてあの女と一緒にお暮らしなさい。さうすれば二人とも仕合せになるんだ。君だの其處にゐる若い書生さん達を見ると、惡い奴に誑らかされて惡智慧をつけられにやいゝがと心配になるんでさあ」

「ぢや、叔母さんは花牌を引くんですか」

「……その話はもう止しさ」爺さんは手で壓へた。そして、目を顰めて柱時計を見やつたが、針の先はよく分らなかつた。

九時になつたと聞くと、爺さんは慌てゝ立上つた。外へ出ると足を踏締めて眞直に家の方へ急いだ。

「あなたに窘らせて濟まなかつた。しかし私は腹の中であなたの爲を思つてゐるんだから、私の云つたことはよく考へて見てお呉んなさい」と、途中で二度も三度も正氣で云つた。

先つき見たのは人違ひだつたのか、確かに來てゐると思つたおふくは來てゐなかつた。川島は爺さんが女房に叱られながら茶の間へ入るのを顧みながら二階へ上つた。寢床が延べられて、枕許には煙草盆

と湯沸かしとが置かれてゐた。醉ひどれの相手をしてがつかりした身體を蒲團の上に横たへて、爺さんの云つたことなど思出してゐると、叔母さんよりもむしろ爺さんに對して嫌惡の感じが起つて來た。

……「あの人にはおれの心持は些とも分らないのだ。女房の不埒な身持に氣が付かぬやうなお人よしの馬鹿に、何で他人を戒める資格があるものか。……叔母さんの方が人情が分つてゐる、智慧があるやうだ」

川島は稍々もすると氣に掛かる爺さんの言葉を押潰しては、只管叔母さんに縋りついて、あの執拗なおふくから自由になつて、廣々とした世界へ出やうと思つた。そして、この部屋が鬪花場になつてゐるのかも知れないと思つたりして、黴臭い二階を夢のやうに見ながら眠りに落ちた。

（續いて筆を執つてこの後篇を翌月の誌上に掲げるつもりである）



兵隊の宿

上司小劍

一

坂の上の、大きな松の樹のある村總代の家で、あるきを呼ぶ太皷の音が、ドーン、ドーン、ドン、ドン〱〱〱と響いてゐたのは、ツイ先刻のことであつたが、あるきの猪之介は今のツそりと店へ入つて來て、薄暗い臺所の方を覗き込みながら、ヒヨロ高い身體を棒杭のやうに土間の眞ん中に突ッ立てゝゐる。

店には誰れもゐないで、大きな眞鍮の火鉢が、人々の手摺れで磨きあげられたやうに、縁のところをピカ〱光らして、人間ならば大胡座をかいたといふ風に、ドッシリと疊を凹ましてゐる。

『猪のはん何んぞ用だッか。』と、若女將のお光は、煮物の香や酒の香の染み込んだらしい、醤油のやうな色をした竹格子の奥の板場から聲をかけた。

『あゝお光つあん、其處だッか。……お母んが留守で忙しおまッしやろ。』

鼻をひこつかせるやうにして、猪之介は竹格子の間に白く浮き出してゐるお光の顔らしいものを、目脂の一杯に溜つた眼で見詰めた。

「お母ァはんの居やはれへんとこへ、役場からあんなこといふて來やはるよつて、ほんまに難儀や。」

晝食の客に出した二人前の膳部の喰べ殼の半ば片付いた殘りを、丁ど下の川端の洗ひ場で茎漬けにする菜を洗ひ上げて來た下女に讓つて、お光は板場からクルリと臺所へ廻はり、其處の岩乘な緣の廣い長火鉢の前に腰をかけた。

一番ではあるが、際立つて小振りの丸髷に裏葉色の手絡をかけて、ジミな縞物の袷せのコブ〳〵した黒繻子の襟の間から、白く細い頸筋が、引ッ張れば拔け出しさうなお女郎人形のやうに、優しく婀娜かしかつた。

すらりとした撫で肩を一寸搖つて、青い襷を外してから、何心なく火鉢に手をやつて、赤味の勝つた細い比翼指輪の光る、華奢な指に握らせるには痛々しいと思はれるほどの、太い鐵作りの火箸を取り上げた。

かういふ時にタバコを呑まぬのは、彼女の態度風采を調へる上の一つの大きな疵とも思はれた。襷を外してから、長火鉢の前で、輕く長煙管を取り上げて貰ひたいと思はれた。

「お前、タバコ呑んだら何うやな。キセロと煙草入れをわしが一つ大阪で買うて來てやるがな。」

二三年前に聟養子を離緣してから、お光の一身と一家とを引き受けて世話してゐる旦那は、よくこんなことを言つた。

若い時にカメオだとかオールドゴールドとかいふやうな舶來タバコを吸つて、村の人々を感心さした旦那は、今でも敷島や朝日を吸はずに、金口の高いのをこれ見よがしに吸ひながら、お光にもタバコを呑めと口癖のやうに勸めてゐる。

『明後日郡參事會へ行くさかいな、大阪へ廻はつて煙草入れ買うて來てやろ。』なぞと、切羽詰まつたやうにいふ折もあつた。お光はさういふ時、タバコのことよりも、郡參事會なぞを鼻にかけて、土地の勢力家顏をする旦那の淺果敢な容子が厭やで厭やでならなかつた。

今は東京に住んで、三四年に一度づゝすら村へは歸つて來ない小池といふ畫を描く男の、縣だとか郡だとかいふことには一切頓着してゐない容子が奥床しく思はれてならなかつた。大臣だとか議會だとかいふ話が出ても、豚小屋か蜂の巣の噂さほどにも思つてゐないらしいのも、お光には耐らないほど小池をえらく思はせた。

東京に展覽會なぞが開かれて、小池の描いた畫の評判が新聞や雜誌に出ると、お光は眼を皿のやうにして一々讀んだ。小池の評判がだん〳〵高くなるのが嬉しくてならなかつた。

『小池はんちう人はえらいんだすな、東京や大阪の新聞に、しよつちう名が出てまんがな。』なぞと、店へ來て話す人でもあると、お光はいよ〳〵嬉しくて、其の人を無理に引き留めて、一本漬けて出したりした。さうして田舍の新聞へ偶に自分の名が出ると、鬼の首でも取つたやうにして、持つて來て見せびらかす旦那の仕業が、ます〳〵淺ましく思はれて來た。

『村で一番出世をしたのは、小池はんと、新田の五郎作やがな。すもん(角力)でもあつてみい、五郎作

の名は毎日〱新聞に出んことあれへん。」なぞといふ人もあつた。
學校を落第ばかりしてゐた新田の五郎作といふ馬鹿息子が、小池の後を追ふて東京へ行つて、小池にたよらうとして跳ね付けられ、角力になつて××川と名乘り、此頃では新聞の勝負附けにも出るやうになつたのを、お光も面白いことの一つに思つてゐたが、そんなものと小池とを並べて話されるのが殘念にもあつた。
「わたへ、タバコ嫌ひだんがな、臭うて臭うて胸がわるうなる。……三十越したらまた呑む稽古して見ますわ、もう二三年だす、それまで待つとくなはれ。」
小さな黒子の眼立つて愛くるしい口元に微笑を浮べつゝ、かう言つてお光は常に旦那をあしらつてゐた。
「こないだ、指輪拵へるさかい十圓呉れいふたが、今さしてる其の指輪それか。……一寸見せてみい。」
旦那はタバコの脂の黒く染み込んだ反齒の口を大きく開いて、さも恩に着せるやうな調子でこんなことを言つた。
環の二つ繫がつた其の比翼指輪の一つの環には、Koike、他の一つの環にはMitsuと細く刻つてあるが、こんな字の一つも讀めぬ旦那には、金の性でも書いてあるのかと思つて、指輪の裏を覗き込んでゐるより外はなかつた。
「これ十圓、高いな。二匁かゝろまい。」
かう言つて旦那は、お光に外させた比翼指輪を自分の節くれ立つた太い指に篏めかけてみたり、掌

に載せてふわ〳〵と目方を考へてみたりした。

「そやよつて、十圓はしえへんいふてますがな。……殘りであんたの下駄買うて來てあげましたやないか。……きらひ」と、お光は媚を含んだ眼をして、旦那を睨むやうにした。

「金の性はわるいて、見い銅の色がしてるやないか。」

世の中に金ほど尊いものはないと信じて、黄色く光るものに、靈魂を打ち込んでゐる旦那は、細い比翼指輪の弱々しい金色にも凄いやうな白味の勝つた眼の光を溜せて、自分の幅の廣い白縮緬の兵兒帶に毒々しく絡んでゐる太い金鎖の色と比べなぞした。

「知りやはらんのやなア、この人は。……今時そないに黄色い金流行らしまへんがな。かういふやうに赤味の勝つたのか、また白ういのが流行りまんのや。……時計の鎖かて、東京あたりから來やはる人見なはれ、白味の勝つた金の細い粹なのをしてはりまんがな。……そやなけれや白金だす、あんたの金鎖みたいに山吹色をした太いのは、これ金鎖で候と書いたるやうで、いきまへん。」

お光が嘲弄半分の積りでこんなことを言ふと、旦那は躍起となつて、

「お前は何んでも東京や、そないに東京が好いのんなら、東京へいたらえゝ。……わしは在所もんや、在所にゐて百里も先きの町の人の眞似したて何んにもなれへん。……混ぜもんした色のわるい金より、わしは矢つ張り二十金か十八金がえゝ、二十二金から純金ならなほえゝな、値打ちが違うんやもん。」

旦那はお光の比翼指輪を其處へ放り出して、自分の左の指に嵌めた認印の刻り込んである太い指輪を外して見せたり、帶の間から脫け落ちさうになつてゐた、兩蓋に七子を切つた虎屋の最中のやうな大き

な金時計を出して見せたりした。

「お醫者はんの時計見たいな。……」と笑ひながら、お光は比翼指輪を取つて、元の通り右の紅さし指に篏めた。

其の比翼指輪が、今長火鉢の側に腰をかけて、鐵作りの太い火箸を取り上げたお光の細い指に光つてゐるのが、眼を病むあるきの猪之介にもよく見えた。

二

「こなひだは御ッつおう（御馳走）はんだした。」と、猪之介は物を喰べた後のやうな舌舐りをして、尖つた鼻をひこつかせつゝ、お光の側に寄つて來た。

板場の方に近寄るほと、煮物の匂ひや酒の香がいよ／＼濃くなつて、薄暗く重苦しい空氣の中に漂ふてゐるやうであつた。板場の棚の上に大きな皿や鉢が、物を盛られて並んでゐるのも鋭く猪之介の眼を刺すやうであつた。薄い銅の早鍋は蓋の隙間から白い湯氣を吹き立たしてゐた。横の方に据えた四斗樽は杉の香がまだ新らしくて、呑口からは芳ばしい滴がしたゝりさうであつた。

「此家へ來ると女護の島へ來たやうな氣がしまんな。」と、猪之介はお光の丸髷を見下ろすやうな位置に突ッ立つて、にやりと笑つた。

「さうだッか、猪のはんは女護の島ちうとこへ行きなはつたことあるんやな、えらい運のえゝ人や。」と、

お光は相變らず細い指で太い火箸を弄りながら、嘲るやうにして言つた。

「猪のはん、女護の島へ行きなはつた折の話しとくなはれ、猪のはんみたいな男でも、女子はんが大勢で引ッ張らはりましたやろ。……皆餓えてゐやはるさかい。おほゝゝゝ。」と、屋根裏から煤の落ちさうな内井戸で、轆轤の水を吸み上げてゐた赭ら顔の眼の大きい下女お梅は、背後を振り向いて笑つた。猪之介はにや〳〵笑ひ續けてゐるだけで、何と言つていゝかを知らぬ風であつた。

「お光つあん、物は何んでも拵へるより潰す方が樂やいふけど、井戸ばッかりは掘るより埋める方が手間がかゝりますてな。在所の井戸はまだえゝが、町の井戸になると、第一土がおまへんさかいな、埋めるのは掘るよりお錢がたんと要りますんやて。」

棕櫚繩の太いのを握つてゐるお梅の脂肥りの赤い手を見ながら、猪之介はこんなことを言つた。

「何言ふてんのや猪のはん、籔から棒に、誰れも井戸を埋めえへんし。……それより何ぞ用だッかいな、いんま總代さんとこの太鼓が鳴つてたやおまへんか、あんたがおいなはると、碌なこと言ふて來やはれへん。」と、お光は太い火箸でコン〳〵と五徳を突いてゐた。

「違ひない、碌なことやおまへんで。……今夜あんたんとこへ、もう三人兵隊さんを泊めて貰うんだすて。」

「うだ〳〵言ひなはるな、猪のはん。女護の島へ十人も荒くれ男を泊めるんで、今朝から二人がテンテコ舞をしてるやおまへんか。……お母あはんは居やはれへんし。……」

「そら分つてまんがな。けんど總代さんも弱つてはりまんのや、今日の今になつて手違ひが出けたんで、

役場へ打ち合はせに行く閑もあれへん、仕様がないさかい大黒屋へいてお光つあんに押し付けて來いて言やはりますのや。」

「押し付けられて耐りまッかいな。……何んぼ人を泊めるのが商賣やかて、一人前二十錢やそこらでお辨まで拵へて、……大黒屋は商賣やさかいよいわで、毎も家へばッかりドッさり割り付けやはるんだすやろけど、商賣やさかい餘計難儀だすがな。……他のお客さんは斷はらんならんし、たとへ一晩でも商賣の方は上つたりだす。」

短刀でも拔いたやうな風に、太い火箸を逆手に握つて、お光は猪之介の顏を見詰めた。

「そらよう分つてます。けれど俄の手違ひだしてな、總代さんも弱つてはりまんのや、三人だけだッさかい、總代さんとこへ泊めよかいふてはりますんやけど、總代さんとこは、大將の……本部やたらいふんで、えらい人ばッかり泊りやはりますんで、三人でもたゞの兵隊さんは泊められんのやさうだす。」と、猪之介はこの薄寒い初秋に額の汗を拭き〱した。

「俄の手違ひて、一體何うしやはつたんだすのや。」と、お光の色は稍和ぎかけた。

「それが聽いとくなはれ、かうや。……」

猪之介は漸く上り框の端の方へ腰を掛けて、腰の煙草入れの叺の破れかゝつたのを探りながら、

「……あの白髮頭の畫工なア、小池はんの家を借つてよる、……彼奴んとこへ三人泊まるやうになつてましたんや。……尤も初めさういふていた時、ゴテ〱言ふてよつたんだすが、他の事と違うさかい、無理往生に往生さしたりましたんや、さうすると何うだす、今日になつて宿替へや。東村の方へな。東

の仙蔵はんの隠居が空いてますのや、彼家へ宿替へしよつたんや、今日の正午頃になつてなア。……土地ごく仕様がおまへんがな、兵隊を泊めることを無理に断はると、役場から警察へさういふて、罰することが出けますさうなが、宿替へを止める権利は村長はんにも郡長はんにも署長さんにもおまへんねやてな、えらい不自由なこッちやおまへんか。」と、猪之介は口惜しさうな顔をした。

「そいで、其の投げ足がわたへんとこへ來たんだすかいな。……悪いきやなア。」と、お光は笑つた。

「けんどなア。……」と、猪之介は水彩書のやうに明るい店の間から、トンネルの出口に似た裏口の方をズッと見廻はしてから、

「……これには小池はんも係り合ひがおますのやで。……」と聲を密めて言つた。

「え〻、ほんまに。……」

　小池と聞いて、お光の胸は波打つたやうであつた。

「あの畫工、頭は白髪だらけだすが、年はまだ小池はんと同い年だすてな。……同い年でも畫が下手で、名前だけ小池はんの弟子にしてもろても、薩張りあきまへんのやな。けんど相談事があると、小池はんとこへ手紙で知らしてやりよるんで、今度も兵隊を泊めるのが厭や〻が何うしたらよろしおまッしやろ、て小池はんとこへ言ふてやりよると、小池はんの返事がよんべ來て、宿替へしてやれちう手紙だしたんやて。……」

「また郵便局で他人の手紙讀んだんやなア、あの郵便局は閑やよつて、何んでも讀みやはるさかい安心が出けん。」と、お光は眉を顰めた。

「郵便局で他人の手紙讀んだら惡いのだへうか。……わたへんとこへ町の質屋から流れの知らしが來たら、郵便局で面白がつて、葉書や印紙買ひに來た人に皆見せて笑てはりましたてな。」と、猪之介は話を横道へ引き込んだ。

「信書の秘密ていふやないか。何んぼ郵便局かて、他人の手紙偸み見するちうことあれへん。……小池はんの手紙ちうと餘計見るらしいんだすな。」と、お光は霑ひを帶びた眼を光らして、小ひさな欠伸を一つした。

「けんど小池はんも小池はんだすな。そんな惡いことを教て。……總代さんも怒つてはりまッせ。疊は自分に入れたんやさかい、上げて持つていて了ひよるし。……疊があると晩だけのことだすさかい、總代さんとこからおなごし(下女の事)でもやつて、一晩のことだすもん、どないにでもしますんやが、疊なしではあんた、だい／＼ごく仕様がおまへん。……そいでまアお氣の毒だすが内方へお賴みしに來ましたんや。總代さんもいづれ後から來やはりまッしやろ。」

猪之介はお光の横顔を見い／＼、これだけのことを言つて、ほつと息を吐いた。

この村では自分一人だけが小池の氣質を吞み込んでゐると思つてゐるお光は、兵隊の宿をするのが厭やさに、わざ／＼宿替へをするといふことが、如何にも小池といふ人間をよく現はしてゐると考へた。さうして、もと／＼小池の流した水が自分の家へ流れ込んで來たのだとすれば、迷惑も迷惑とは感じられずに、或る嬉れしさをさへ覺えて來た。

「よろしおま、三人が五人でも、かうなつたら引き受けます。……惡いきついでや。」

元氣よく言ふと、お光はついと立ち上つて、板場へ入つたが、やがて鰊の煮漬しに燒豆腐を添へた小皿と、燗德利を一本持つて來て、

「猪のはん、藥罐は溫いやろか、勝手に漬けてやりなはれ。」と、猪之介の尖つた鼻ッ先きに置いた。

「氣の毒だすなア、これア。」

猪之介はぼんやりして、酒肴を眺めてゐたが、

「お辭儀なしに頂きます。……冷の方がよろしおますわい。」と、眞鍮の金具の光る長火鉢の廣い框に載つてゐた茶呑茶碗の呑み殘つた出がらしを土間へ棄て、二三度水ぶるひをしてから、德利の酒を波々と注ぎ、瘦せた頸の咽喉佛をビク／＼動かして、可味さうに舌皷を打つた。

大道の砂埃りを蹴立てゝ、新らしい小倉の袴を穿いた村役場の給仕が、風のやうに飛び込んで來た。

「大黑屋さん、信玄辨當二つ、……上等だッせ。……お梅どんに直ぐ持たしておこしとくなはれ。郡役所の兵事係が二人腹減らして待つてはるんや。……報告終りッ。」と、鈴のやうな聲で叫ぶと、兵隊のするやうな廻はれ右前へをして、クルリと土間から大道へ、また塵埃りを蹴立てゝ一散に駈け去つた。

「今時分そんなこと言ふて來たかて、御膳もあれへんがな。……お梅、其の飯櫃持つて來て見い。」と、お光は銀足に翡翠の玉の簪を拔いて痒さうに丸髷の根を搔きながら、お梅の持つて來た大きな飯櫃の中を覗いたが、

「あゝ面倒臭い。」と、友染の湯もじの下から、細い脹脛の折れかゝみの邊りまでを見せて、土間から直ぐに納戸への近道をして、高い上り口を一跨ぎにした。

「七段目のおかるを逆さまに行くやうだッせ。……船玉さんが、……」と、猪之介は眞赤くなつた顏一面に、にやにやとした笑ひの波を湛へた。

一寸背後を振り返つて、お光もにやりと笑つたが、納戸の神棚や佛壇から、朝供へた茶椀や金椀に盛り上げてある供物の飯を持つてきて、お梅に渡すと、お梅はそれを飯櫃へあけ、杓子でほぐして瀬戸物の丸い辨當へ詰め込んだ。

「御膳も二度の勤めをするんや。商賣やよつて、これも仕樣がない。……猪のはんこんなこと人さんに言ふんやないで。」

納戸から長火鉢の側へ來て、お光は猪之介に對ひ合つて坐つた。

「誰れが言ひますかいな、假しんばいふたかて、これが猫や犬の飯詰めたんやなし、神佛のお下りなら腐ふても頂く人がおますがな。勿體ないく。」と、猪之介は底の一滴をもと、徳利を逆さにして、茶椀の上で振つてゐた。

「何んしよまア言ふんやないで。」と、お光は改つた顏をして念を押した。

二つの信玄辨當を風呂敷に包んで、お梅が赤い襷を掛けたまゝ大急ぎで村役場の方へ行つた後から、

「毎度大けに。……賴んだことは間違ひおまへんな、お光つあん。」と、猪之介は入つて來た時とは別の人のやうになつて、ヒヨロ付きながら歸つて行つた。

店の時計が午後の三時を打つと間もなく、馬に乘つた身體の大きい兵隊が二人、蹄鐵の音を砂利道に立てゝ駈けて來た。さうして役場の人や村總代と連れ立つて、宿をする家々へ貼紙をして廻はつた。

お光の店頭の左の方の柱には、「第〇中隊將校室」と筆太に書かれた長い紙札が貼られ、右の方の柱には「風紀衞兵所」とした札が貼られた。

兵隊の珍らしい村の子供等は、わい／＼騷ぎながら二人の大きな兵隊の後から隨いて歩いた。學校歸への子供等も皆それに混つてゐた。兵隊の乘り棄てた馬は大黑屋の前の廣場の松の樹に繫いであつた。肥えた尻に短く切つた尾の凛々しく垂れてゐる栗毛と鹿毛とを怖さうに遠くから取り圍んで、わいわい囃してゐる子供等の中には、大人もだいぶゐた。其の一群れの中からお光は今年始めて學校へ通ひ出した娘のお勝を見出して、お梅に連れ戻らした。

「學校の戻りに遊んでるんやおまへん、ちやんと家へ戻つて、「只今」をしてから遊びに行きなはらんかいな。」と、お光は小ひさい娘の顏を見詰めつゝ窘めた。

お勝は行儀よく膝の上へ手を置いて、母の言ふことを聽いてゐた。在所で育てゝも娘を在所者臭くはしないといふことが、三代續いて聟養子を取つては、それが皆娘一人を殘して緣を切つて出て行つて了うこの家の家風のやうになつた。自分もさうして母に育てられた。母もさうして母の母に育てられた。自分もさうしてこの娘を育てなければならぬ。

お光は、お勝の下膨れの顏から、小ひさな膝の上へ眼を移しつゝ、何んとはなしにほろりとした。

「お光つあんの子、あら養子の子かいな、いきり玉かいな。」

『あの子だけは、養子の子に相違これなく候や。……眼元なら口元なら、似たとは愚か、チンツンシャン、瓜二つ……やないか。』

無遠慮な村人共が、浄瑠璃の文句までもじつて、こんなことを言ふのが、度々お光の耳へも入るが、言はるゝ通り、この子は三年前に縁を切つたこの子の父に酷く似てゐる。とお光はまた今更にそんなことを思つた。

木綿ながらも、茜色と紺と萌黄との太い大名縞の、大芝居の引幕のやうな新らしい柄で、こんな片田舎に自分の娘より外には、そんなものを身に着けてゐるものはない。よそいきにはもとより、常の時でも、着物なら子振りなら、自分の娘に追ひ付くものがないのみか、足元へ寄りつくものもない。

學校の若い代用教員は、源氏物語とかの中から、『おなじ目鼻ともおぼえず』といふ一句を抜き出して、お勝と他の女の兒たちとを比べ、お勝がお月さんで他の兒たちは泥龜だと言つて、ひどい依怙贔屓をしたとかで、校長に叱られたさうな。自分の幼い頃にもよくそんなことがあつた。六つ年上の小池が其の頃この村に居て、舐めるやうにして自分を可愛がつて呉れた。其の頃から畫が上手で、美濃紙へ一杯に大きく描いて呉れた野崎の道行の繪は、今でも鏡臺の抽斗の一番下に納してある。

この娘が小池の兒であつたら、小池の種であつたら。――

お光は突然こんなことを考へた。

一昨年の秋、ゆくりなくも梅田のステーションの薄暗い待合室で、鞄の荷札から手がゝりが付いて、幾年振りかに小池の姿を見出し、夢のやうにフラ〳〵と二人で用もない河内の國を彷徨つて、落ちつき

の惡い田舍町の商人宿で一夜を明かした其の朝は、互ひに狐にでもつまゝれたやうであつたが、數へて見れば片手の指には折り餘る男の數の中でも、小池とのたゞの一夜の、そゝけく果敢ない逢瀬が身に染みて忘れられぬのは、幼馴染といふ強い糸に繰られてゐるのであらうか、東京の美術家といふ名に壓されてゐるのであらうか。自分ながらに言ひ甲斐のないやうな氣もする。

　其の頃から係り合つてゐた今の旦那のことが、だん〳〵表向きになつて來て、離緣にはなつてゐても、まだ戸籍の拔けてゐなかつたお勝の父の名も、旦那の骨折りて裁判にもならずに刪り去られて、お勝が戸主、自分が後見といふことになつてからは、旦那が殆んど入り漬りに長火鉢の前へ坐るので、さま〴〵に囃し立てる村の評判が、何うしたはずみに東京まで聞えぬものでもあるまいと、旦那の隙を見て書いた長手紙。

　それも氣の置けぬ大阪の知り合ひの許へ送つて、其處から男の手で表書をして、男の名で小池へ宛てゝ出さねばならぬのであつたが、其の長手紙には、

『……おほかたはお聞き及びでもありませうし、さぞ〳〵光は淺ましい人間とあいそもこそも盡きはてたやうにお思ひなされておいでのことゝ存じます。淺ましい光はもう二度とこの世であなたさまにお目にかゝりません。一思ひに死んでお詫びがしたいのでありますが、年寄りの嘆きと幼いものゝ不憫さに、死んだ氣になつて、ぢつと辛抱して居ります。光は恥を恥とも思はぬほど墮落した人間になりました。……』などと書いて、何うしたのか其の時は、掘り拔き井戸のやうに下から〳〵込み上げて來た淚に、長手紙が濡れて、『光は恥を恥とも』と書いたところなぞは、墨が染んで、ぼかしたやうに、ぱッと

散つた。

この長手紙を見た小池は、賢女の如き自分に親しんだことを悔いて、返事などはよこさぬことゝ、お光は獨りで決めてゐた。さうして、「小池はんかて、奥さんがあるやないか、惡いといへば二人とも惡いのや。わたへだけが遠慮することもあれへんやないか」とも思はれ、「光は淺ましい人間」などと手紙に書いたことも殘念になつて、淺ましいのは男も同じであるのに、女だけが淺ましいものになつてゐなければならぬ世間體といふものが、馬鹿々々しくなつて來た。

ところが、小池からは返事が來た。――氣の置けぬ大阪の知り合ひの許へ廻はつて、知り合ひの名で村の郵便局に知れないやうにして送られて來た、三錢の切手を二枚貼つた封書――それを旦那の來ない時、二階の三番の座敷へ入つて、内部から掛金をかけて披ひて見ると、大阪の知り合ひが、「御馳走さま」と東京語に大きく書いた包み紙の中から、例もの西洋風の狀袋に、ペンで素直に「お光さま」と書いてあるのも床しかつた。

破るのが惜しいやうな綺麗な狀袋の鮮かな封じ目を簪の先きで突ついて、取り出したのは、ハート形の透かしの入つた美しい紙であつた。五枚の裏表へこま〳〵と書いてあるのは、例もの「人間は自由でなければならぬ。」とか何んとかいふ難かしいことが多くて、お光にはよく呑み込めなかつたけれど、「……淺ましい人間になつたとは、何ういふことですか。私なんぞは初めから淺ましい人間です、初めから終りまで淺ましいのです……」と書いてある一節を讀んで、ほッと安心した。

それから、「……恥を恥とも思はぬほど墮落した人間とは、一體何を仕出かしたのです。一つ目小僧が、

頭は人間で身體は犬の兒でも生んだといふんですか。それも面白いぢやありませんか。そんなことを決して彼れ是れいふ小池ではありません……』とあるのを讀んで、お光は一時嘲弄はれてゐるのではないかと思つたが、あとさきの文句より推すと、眞面目であることが窺はれる。

小池は自分の近頃の身の上を一から十まで知つてゐて、別に變る心もなく、遠方ながらに幾久しく自分を可愛がらうとするのである。それに違ひない。——

かう思ふと、お光は身柱元がぞく〳〵するやうであつた。そこで早速返事を書いて、其の終りへ一際力を入れて、『光は決して孕みません』と確信の籠つた字を書いた。

先夫の種の一人娘を傍へ引き付けておいたなりで、お光はさま〴〵のことを、あれからこれへと考へてばかりゐた。小ひさいお勝は母の顏色を見て、自分が怒られてゐるものと思ひ込み、張り裂けるやうな聲を立てゝ、わッと泣き出した。

膝元に兒のゐることも忘れて、怖い顏をしてゐたお光は、はッとして、

『何んだすのや、お勝ちやん。何泣いてなはる。』と俄に優しい顏をして見せた。

四

昨日は今日と違つて、空がどんよりと曇つて、暖かい南風が吹いてゐたので、一里南を通る汽車の笛がよく聞えた。久し振りで大阪の午砲も、船場邊で聞くよりはハツキリと響いた。其の時直ぐに店の時

計も自分の懐中時計も午砲に合はしておいたから、今日の自分の家の時間は確かである。

お光はかう思ひながら納戸へ入つて、用箪笥の小抽斗の手匣の中から、短かい鎖の付いた豆のやうな金時計を出して見た。文字盤までが金色をしてゐて、小ひさい針はもう八分で四時にならうとしてゐる。三四日前にわざ〳〵町から取り寄せた旅行案内を出して披いて見ると、今朝小池が東京から乗つた特別急行列車は、名古屋の近くまで來てゐるらしく、名古屋着が四、〇八となつてゐる。自分も三四年前に一度乗つたことのあるあの汽車は、今大府か大高のあたりを走つてゐるであらう。

熱田の宮のこんもりとした森を左に、夕日の輝く金の鯱を右に眺めて、名古屋のステーションに近づいて來る汽車の窓に凭りかゝつてゐる小池の姿が、眼の前に見えるやうである。

『六日の朝の急行で立つ、大阪着は夜の八時二十五分、來られるなら其の時刻に梅田のステーションへ來て、去年の薄暗い待合室で待つてゐて下さい。』

これだけのことをペンで走り書きした例のハートの透かしのある小池の手紙が、大阪の知り合ひから例の手續きで自分の手に渡されたのは、一週間前である。

『どんなに都合をしても、六日には屹と梅田で待つて居ります。だましては厭やですよ。』と、小說本で覺えた東京語の返事を、自分も近頃使ひ始めたペンで書いて、直ぐ大阪の知り合ひの方へ送つておくと、一昨々日の朝また知り合ひの取り次ぎで、

『行くといへば必ず行く、火が降つても槍が降つても行く。午後八時二十五分といふ時刻を間違へないやうに。若しすッぽぬかすと一生恨む。』とペンで走り書きしたのが來た。

『一度お目にかゝつて、是非々々お話いたしたく、村までお歸りなされては都合あしく候につき、大阪までおこし下されたく、ぜひ〳〵お目にかゝつてお話し申した上、私も一生の覺悟をきめたく、手紙では兎ても書けませんゆゑ、なつかしいお顏を拜した上、いろ〳〵申上げます。ぜひ〳〵大阪まで御越しのほど願ひ上げ候。――』といふやうな手紙は、去年の秋の事があつてから、幾度書いて送つたか知れぬ。それに動かされて小池は到頭一年振りに大阪まで來ることになつたのであらう。

かう思つて、お光は其の『行くといへば必ず行く、火が降つても、槍が降つても……』と書いてある手紙を、内懷の肌に付けて、其の日はいそ〳〵と家の事を働いてゐると、お正午少し前にあるきの猪之介が來て、寢耳に水のやうに、其の大事の〳〵六日の晩には兵隊が來て泊るといふことを知らした。

六日には是非大阪へ買物に行かねばならぬ。其の日は四里南の海邊の町の親類へ留守番がてら手傳ひに行つてゐる耳の遠い老母に一寸家へ歸つて貰うて、自分が買物をした歸りに其の海邊の親類へ寄つて、手傳ひながら一晩泊つて來るといふことにして、旦那の前は首尾よく取り繕つてあるのに、總べてがもう駄目である。

小池はんがまた何故に、選りに選つて六日といふ惡い日を選んだのであらう。七日なら好かつたし、五日でも何うにかして會へるのに、六日の午後八時二十五分では何うにもならぬ。今から中二日では、大阪の知り合ひを經て、七日か八日に延ばして下さいといふことを小池に知らす餘裕がない。下手なことをして、小池の家の人にでも秘密の手紙を見られてはそれまでゝある。○野○○とやらいふ人は、秘密の便りをする時、新聞を擴げて、上の欄から下の欄へ順々に入用な字だけへ鉛筆で印しを付けた

上、其の新聞を相手に送つて、相手が鉛筆の印しを辿りつゝそれを讀んで意味を取ることにしたげな。

さう思ふと、お光は有り合はした新聞を取つて、若い男と女とが立つて話をしてゐる挿繪のある小説の初めの行から、入用な字だけに鉛筆で○を付けて行つたが、『六日は差支へます七日にして下さい』といふ字は、小説の終りまでに樂々と得られた。しかしこの新聞を突然小池に送つたところで、如何な小池でも何んのことやら分るまい。寧そ赤いインキで○を付けると、少し目立ち過ぎはするが、目的を遂げることは出來るかも知れぬと思つたけれど、さういふ風にしていよ〳〵新聞を送るといふ決心も、お光には付き兼ねた。

小池かて、子供ぢやなし、六日の午後八時二十五分に自分の姿が梅田の何處にも見えぬからとて、其のまゝ鳩の使のやうに歸つて了ふこともあるまい。何處ぞへ宿を取つて、例の知り合ひの手を經て、多少は違約を責めた恨みの文句が混らうとも、屹と嬉れしい手紙が來るに違ひない。滯留する宿さへ分れば分別はまた何うにでも付く。八時二十五分を違約して、男を焦らしておいた方が口説の種にもなつて好いかも知れぬ。

お光は一時こんなにも思つて諦めてみたが、いや〳〵あの氣の短い小池がそんな悠長なことをする氣遣ひはない。一わたりステーションを見渡して、自分の姿が眼にとまらなければ、碌々隅々まで探すといふこともせずに、何處ぞの溫泉場へでも行つて了つて、自分よりも若い美しい女を見付けるかも知れぬ。幼馴染といふことは、自分が小池に引き付けられる五色の糸であるやうに、小池が自分に引付けられて、百六十里も手繰られて來る力があるに違ひないけれど、糸が餘りに長いので、何うかすると脆く

切れさうである。

美しい女が掃いて棄てるほどありさうな東京から、小池が遙々と自分のやうなものに引つ張られて來るのは、たゞ幼馴染の懷かしみを慕ふ爲めであらうか、ほん氣であらうか、戯れであらうか。執方でもよい、自分はさう〳〵そんなことを考へたくはない。自分はたゞ織女星さまのやうに一年に一度づゝ、牽牛星のやうな小池に逢つてゐればよい。乃で今年の七夕は天の川が不意の洪水て、待ちに待つた逢瀨を妨げられるのであらうか。織女星さまは唯一人の男を守つて、一年に一度の嬉しい夜を樂むのであるが、自分には旦那といふ腋臭のする人があつて、一年中附き纏はれてゐる。旦那の前には聟養子といふものがあつて、子まで生した中であつた。其の他にも誰れ、……彼れ。……思へば恥かしい。

お光はぼんやりとこんなことばかり考へ續けながら、納戸の障子の腰硝子から河原の多い山川を距てて南の村の一面に黃ばみかけた野面を眺めてゐた。十六七年も前の七夕に、自分が九歳か十歳で、小池が十五六で、あの南の村から自分の村に通ずる細路をば、笹に五色の紙片の附いたのを一本づゝ持つて、二人で走り歩いたことなぞも思ひ出されて來た。

店の時計が五時を打つた。旅行案内の披かれたまゝになつてゐるのを取り上げて見ると、もうそろそろ小池の汽車が大垣へ來る時刻である。大垣から米原、大津、京都、それから大阪、八時二十五分までには三時間あまりしかない。小池はだん〳〵自分に近寄つて來るのに、自分は半丁も小池の方へ足を踏み出すことが出來ぬ。

お光は立つて居ても、ゐられぬやうな氣がして來た。小ひさい懷中時計を見るともう五時五分、汽車

は丁ど大垣に停つてゐるのである。窓から首を出して柿羊羹でも買つてゐるらしい小池の姿が、目の前に浮んだ。

人に手紙でも持たして、梅田のステーションへ遣らうにも、お梅を始め村の人々は皆旦那の隠し目付のやうなもので、少しも氣が許せぬ。大阪の知り合ひへは眞逆そんな新造のやうな用事を頼まれもせねば、殊にまたそれは自分の親しい知り合ひで、小池は逢つたことがない。

何うしたら好からうかと、お光は今更氣が氣でなくなつて、小ひさな懐中時計の細い金鎖を握つたまゝ立ち上つて、納戸の中を急ぎ足で歩き廻はつたが、またベタリと崩れるやうに元の處へ坐つて、金時計を前に放り出した。

「何してんのや。」

あの聲は旦那であると思ふ間もなく、反齒に突き出た唇を尖がらして、小皺の多い旦那の顔は、頭の上から覆つ被さるやうにして、お光の眞上に現はれた。長く伸ばした頭髪を分けたのでもなく、分けぬのでもなく、馬のやうに額に垂れてゐるのも陰氣臭かつた。お光は周章てゝ金時計と旅行案内とを押し隠した。――腋臭のにほひがプンとした。

五

「風紀衛兵て何んや。」と、旦那は突然大きな聲を出した。

「何んッだしやろ、何處に居ますのや。……」

「惚けてるんかいな。お前んとこへ泊るんや。……かどに書いて貼つたるやないか。」

旦那は手に持つてゐた二重廻はしのまだ少し時候には早過ぎる煖かさうなのに、見事な裏地の付いたのを、これ見よがしにばッと擴げて放り出し、お光の背後からクルリと用箪笥の前へ廻つて、黑の山高帽子を被つたまゝ、ドカリと胡座をかいた。お光は茶の地へ紺で大きく寛永通寶と裏の波とを一つおきに散らしておいたメリンスの厚い座蒲團――旦那の爲めに拵へてあるの――を戸棚から出して進めた。

『お光、何かい。……お前んとこは確か十人が三人殖えたんやなア。總代がわしんとこへ來て、ひよこひよこしてあやまつてよつた。……もうよッぽど準備が出けたかなア。何んなら誰れぞおこさうか、手が足らんことないか。』

かう言ひ〳〵、旦那は着物と對の細い龜甲形の大島の羽織の裾の皺になるのを氣にする風で、大事さうに背後へ撥ねた。百姓大盡の徽章とも見ゆるゴリ〳〵した白縮緬の兵兒帶には、お光の嫌ひな山吹色の太い金鎖が、羽識の紐の直ぐ下のところへ絡み付いて、磁石や水晶の認印と一所にだらりと垂れてゐた。

『何處ぞへ行きなはるんだすか。』と、お光は旦那の問ひには答へずに、此方から問ひをかけた。

『わしんとこも十人泊めるんやが、將校ばつかりで、たゞの兵隊は三人や。』

右の手の指を三本屈めて輕くお光の前に突き出してから、其の手を直ぐ帶のところへやつて金鎖を弄りつゝ、

『今朝から淸助に鷄を十羽つぶさしといたさかいあれでえゝやろ、酒は白鹿の四斗樽がまだ何んぼも手

え付けへんよつて、何んぼ何んでも飲み切れまい。‥‥魚も常ならお前に賴むんやが、今日のこッちやさかい、朝から榮吉が町へいて、鯛五枚に鰻五本、蒲鉾と厚燒十枚づゝ買うて來よつた。」と、旦那は反齒の口から唾液を飛ばして喋舌つた。

　また大けなことばッかり言やはる。とお光は心の裡で思ひながら、

「そいで、あんたは何處へ行きはるん。」と、お光はまた問ふた。

「わしかいな、わしが居ると、お客さんが遠慮しやはるさかい、却つてわるいとおもて、わしは好いとこへ行くんや、常ならお前を連れて行くんやけど、今夜は仕様がない。‥‥兵隊の身になると、議員なんどしてる勢力家の家へ泊ると窮屈なもんやげな、そやさかい、わしは氣い利かして一人で外へ泊りに行くんや。‥‥ぼつ／＼行かうかなア。」と、旦那は早や押ッ立て尻をしかけた。

「一人やら二人やら、分れへん。」

　お光は厭味らしく言つて、例もの滴るやうな笑ひを眼元に見せつゝ、ツンとした風で對岸の方を向いた。

「やいや一人や、二人で行かうにも相手があれへんがな。‥‥わしの好きやんこれ一人や。」

　變な聲を出してかういふと、旦那はツイと立ち上つたが、立ち際に毒々しいほど幅の廣い金指輪の光る節くれ立つた手を伸ばして、お光の孱弱い膝を抓つた。

　黒繻子の襟の中へ腮を埋めるやうにして、旦那の立つて行くのを見向きもしないでゐたお光は、旦那が直ぐ下駄を穿かずに、長火鉢の前へ坐つたらしい氣色を知ると、俄に濟まぬやうな氣がして、自分も

後からノッソリ立ち上つた。スルト長火鉢の側から、
『お光、……お光。』と呼ぶ猫撫聲が聞えた。この男に『お光』と呼び棄てにされるのが心外でならなかつたのも、一二年から前のことで、今はもうそれを當然と思ふよりは、何んとも氣にとまらなくなつた。この男を自分の旦那にしたお蔭で、老いた母親と幼い娘と、自分と、それから先祖代々持ち傳へて來たこの大黒屋の店とを、飢ゑも朽ちもさせずに、やつて行かれるのであると思ふと、厭やな男に身を委して、子供の命を助け、家の名を完ふした昔物語の女の名も一つ二つ浮び出て來るとゝもに、旦那を粗末にするのが勿體なく思はれて、お光は急にいそ〱として、旦那に寄り添ふ風に長火鉢の横手へペタリと坐つた。旦那は思ひ出したやうに、袂をもぐ〱と探ぐつて、この邊では他に誰れ一人吸ふものゝない金口の紙卷タバコを一本大事氣に取り出して火を點けてゐた。
『お前、今日買物に行くいふてたんやなア、これでは行かれよまい。……明日にしたんかい。』
旦那はかう言つて、タバコの煙をプッと細長くお光のツンと高い鼻の上あたりを目かけて吐き付けた。タバコの嫌ひなお光は襦袢の赤い袖口の長く食み出たので、其の煙を拂ひ退けながら、
『厭やだんがな。』と、溢るゝ色氣を全身に漲らせて、甘へ切つた聲で言つてから、
『明日ももう止めましたんや。……また今度……。』と、旦那の顏をヂーッと見つめた。
『先程は御ッつおうはんだした。……お光つあん、兵隊さんはなア、今夜八時過ぎに着くんだすて、先き走りが言ふてますわい。ゆッくりでよろしおまッせ。』
あるきの猪之介がまた入つて來て、店の土間から大聲でかう叫んだ。さうしてツカ〱と長火鉢の傍

へ來て突ッ立つたが、先刻の酒にまだ醉を樂んでゐるのか、それともまた他で御馳走になつたのか、顔が薄赤くて息に熟柿の香が殘つてゐた。

「お光つあん、先程は御ッつぉうはんだした。」

また同じことを繰り返へして、猪之介は馬鹿丁寧に小腰を屈めつゝお光に挨拶してから、旦那に尻を向けて上り口に腰をかけた。

「おい猪の、俺がゐるのが貴さんには見えんのか。」と、旦那は猪之介の背中から怒りの聲を浴せかけた。

「あゝ、淺川はん、お越しなはれ。」

猪之介は喫驚した顔をして、かう言ひながら背後を振り向いた。旦那は尖つた口をいよ〳〵尖らして、

「今になつて「淺川はん」もよう出けてけつかる。……おいこのお光は俺が世話してるちうことは村は勿論、郡でも知らんもんあれへん。言はゞ女房同然や。……それに貴さん何んちやい、お光にばッかりいよこ〳〵お辭儀しやがつて、この大黒屋の亭主も同様な俺に、「お寒なりました」の一言も言やがらん。……俺の了簡一つでな、村長でも郡長でも自由にするんぢや。あるきの貴さんなんぞ生かさうと殺さうと……。」

だん〳〵威猛高になつて、旦那がやり出すのを、お光が見るに見兼ねるといつた顔をして、

「あんた、もうよろしいがな。……猪のはんかて、何も惡氣があつてしたんやあれへん。あんたのえらいことは皆んな知つてまんがな。……猪のはんには失禮やけど、何もあんたあるきさんなぞに、あんたそないに威張りなはつたかて仕樣がおまへんがな。」と、旦那には分らぬほどの輕侮を混ぜて取り做し

た。

『さうだすのや、淺川のだなはんのお越しなはつてるのは知つてましたけんど、うツかりして御挨拶もしまへなんだんや。……お光つあん、……お家はん、……奥さん、……あんたから謝罪つとくなはれ、だなはんに。……』と、猪之介はどぎまぎして慄へ出しさうにしながら言つた。旦那は默つて猪之介の顏を見詰めてゐた。

『厭やゝし、猪のはん、旦那の奥さんはお家に居やはるやおまへんか。……わたへ奥さんと言はれる身分やあれへん。』

厭やな心持ちになつて、かう言ひながら、お光は、もう四十に間のない旦那の本妻が始終半分ほど口を開きながら、人の好さゝうな顏をして、四人の子供を育てつゝ、多くの下男下女と一所になつて農事に勵んでゐる狀を思ひ浮べてゐた。

火の乏しい長火鉢を眞ん中にして、三人の男女は白け渡つた樣子で、稍暫く沈默に陷つた。

『……お光は俺が世話してるちうことは、知らんもんあれへん。言はゞ女房も同じこと。……』と言つた旦那の今の言葉によく似た臺詞が、何やらの芝居にあつたやうにお光は考へ込んだ末、

『あゝさう〳〵。』と膝を叩いたので、旦那も猪之介も、何事が始まつたかといつたやうな顏をした。

梅川忠兵衛の封印切りの場で、槌屋治右衛門が、井筒屋のおゑんをば、『……言はゞ女房も同じこと。……』といふのであるとお光は、あの花やかな舞臺面を思ひ出して、下手長火鉢の側には、おゑんに治右衛門、背中を見せた判人由兵衛、眞ん中には美しい梅川に忠兵衛、上手には憎々しい丹波屋八右衛門、

丁どこの家のやうに長火鉢の横手から二階へ通ふ階子段があつて、……なぞと、お光は花とした心地になつて、おゑんや梅川が金故に苦勞するのを人事ではないやうに思はれ、何かは知らず眼には一杯涙が溜つて來た。さうして自分はおゑんよりも梅川が美しくなつて、忠兵衛のやうな優しい美い男と手に手を取り合つて思ふ存分泣いてみたいやうな氣になつた。

何時の間にか娘のお勝がかどから戻つて來て、母と旦那との間にキチンと坐り、秋の夕風に冷たくなつた小ひさな手を長火鉢に翳した。

「お勝ちやん、賢おまんな。……お勝ちやんのお父つあんは、……」と、猪之介は沈默のテレ隱しに言ひかけて、またハッと四邊の氣色に考へ付いた風で、口を噤んだ。お勝はこまちやくれた樣子をして、チラと旦那の顏を見たなり俯伏いて了つた。

お光はたゞ舞臺の上に花やかな新町の井筒屋の光景と、今此處の我が家の陰氣臭い有樣とを思ひ比べて、後から後から込み上げて來さうな涙を呑みこまうとした。

「俺行かう。」と、旦那は口を尖がらして立ち上つた。猪之介は急いで、納戸に近い上り口にあつた旦那の神戸下駄を持つて來て、此方の上り口に揃へた。旦那は下駄を突ッかけると、猫背を出しつゝ表へ出やうとした。

「外套……外套。……」と、この時始めて二重廻はしの忘れてあるのに氣のついたお光は、納戸へ飛んで行つて綿の入つた駱駝を引き摺るやうにして持つて來た。表へ踏み出しかけた足を、一大事でも起つたやうにして引つ返へして來た旦那は、長火鉢の横手の土間まで戻つて突ッ立ちつゝ、圓い背中をお光

の方に向けた。お光は器用な手つきで、ふわりと二重廻はしを旦那に着せて、

「確乎しなはらんかいな。……今夜のお娯みで、心こゝにあらずや。」と、微笑みながら言つて、白い手でポンと肩を叩いた。其の手の指に比翼指輪がきらりと光つた。

「お前んとこへ、小池はんから便りがあるかいな。」

二重廻はしの鈕をかけながら、旦那は向ふをむいたまゝでかう言つた。お光はぎよッとしたが

「いゝえ。」と、簡單に答へて、覺えずペロリと舌を出しかけたのを周章てゝ引つ込めて、二重廻はしの襟の心持ち下がり過ぎてゐるのを輕く引き上げた。

「あの人にも困つたもんや、あんな家を建て腐りにしといて、熟んだとも潰れたともいふて來んのやもん、家屋稅は毎でもわしが立て替へやないか。……其の揚句にあんな畫工を入れて、それが爲め兵隊の宿でこんな手違ひが出けるんやもん。……わしやあんなづぼらもん嫌ひや。」

「好きも嫌ひもあれしまへんがな、あんな遠いとこへいて了うた人。……あかの他人や。」と、お光は突ッ立つたまゝ旦那の盆の窪を見下ろしてゐた。

「それもそやなア。」

旦那はかう言つて、首を傾けつゝ足早に出て行つた。一ケ月ほど前にこの村へも通じた、旦那が取締役をしてゐる水力電氣會社の電燈が、店へも臺所へも板場へも一時にパッと點いた。

お光は旦那の後姿を見送つてから、急いで納戸へ入つた。日は西の山に沈んで、夕闇は早や南の森の中から湧き出しさうになつてゐる。鴉の群が山川を越えて啼き聲を立てながら塒に歸つて行く。

先刻隠した懐中時計を取り出して見ると、六時を十分過ぎてゐる。小池の汽車はあの可愛らしい城の見える彦根の邉りを、湖水に沿ふて走つてゐるであらう。

臺所の方では、猪之介が何やら言つて下女を嘲弄つてゐるのが聞えた。

六

東村の方から、喇叭の音が風に傳はつて聞えて來た。

『そら兵隊さんや。』と、猪之介はあたふた表へ駈け出した。近所の人々もおひ〳〵往來へ出て、兩側に堵を造つた。村役場の兵事係や村總代も提灯を振り照らしつゝ出て來た。

喇叭の音は朗かに聞えてゐるだけで、近付いて來る様子が見えない。巧みなマーチは何時までも東村邉りに止まつてゐる。人々は互ひに顔を見合はせた。

『阿呆らしい、兵隊さんやあれへん。』

東村まで駈けて行つて來た猪之介は、スウ〳〵息を切らしながら、路傍の力石の上へ倒れるやうに腰を下ろした。

「あの喇叭何んや。」と口々に言つて、人々は猪之介を取り卷いた。

「今日東村へ宿替へしよつた畫工が、手遊品の喇叭吹いてよりますのや。」

猪之介はさも〳〵馬鹿らしいといつたやうな顔をして、兩手で頭を抱へつゝ差し俯伏いた。

「わるさやなア、彼奴は。……」

「可笑しいおもたんや。八時過ぎといふ通知やのに、まだ七時にもならんもんなア。……畫工、彼奴は喇叭が上手やよつて、欺されたんも無理はないわい。」

こんなことを言ひ〳〵、人々は四散した。お光はまた納戸へ入つて、懷中時計と旅行案内とを見比べつゝ、何んとも知れぬ悲しさに涙を拭いてゐたが、八時に近づくと、簞笥から着物を取り出して、亂れ箱へ入れた。

それから、今朝結つたばかりの丸髷を壞はして了つて、廂の出た束髮に取り上げ、金足に枝珊瑚の簪を挿し、小走りに風呂場へ行くと、お梅の沸かした湯が上加減であつたので、十分に顏を洗つて納戸へ戻り、鏡臺の前に稍暫く坐つてから、亂れ箱の着物に着更へた。伊達卷きを締めてゐる時、お勝が側へ來て不思議さうに母を見上げながら、

「母アちやん、何處へ行きなはるの。」と言つたので、

「いゝえ、何處へも行けしまへんがな。」と言ひ〳〵、帶を締めて、黑縮緬の羽織を引ッかけ、指輪も、よそいきの石の入つたのを一つ比翼指輪の上から箝め足し、もう一つ平ッたいのを左の指に箝め、簞笥の別の抽斗からコートとビロードショールとを取り出し、底に籠の附いた四季袋に持ち添へ、長押の釘に掛けてあつた洋傘をも取り下ろして、ツカ〳〵と歩きかけた。

「そーれ見なはれ、何處やらへ行かはる。」と、お勝は眼を圓くして、立派になつた母の姿に見入つた。お光は廣くもない納戸の中をクル〳〵と三四度も歩き廻はつた上、其處にあつた踏臺の上に腰をかけた。

「母アちやん芝居してはるのや。」と、お勝は寂しく笑つた。

「さうだす、母アちやん芝居してまんのや。……もッと見せたげまへうか。」

お光は立つて、また一二度納戸の中を歩き廻はつた。さうして洋傘や四季袋やコートやショールやを皆元のところへ納つて、

「何うだす、母アちやん芝居したら、河合みたいだすやろ。……喜多村だすかなア。」と、お勝の顔を見詰めた。お勝は呆氣に取られてゐた。

この長襦袢に、この着物、この羽織を着て、あのコート、あのショールを纏ふて、今夜の八時二十五分に小池を梅田のステーションに迎へやうと思つてゐたのである。それが爲めに羽織の仕立てを急がして、三度も催促に行つた。髮も束髮にして行かうと思つてゐたのであるが、兵隊の爲めに家を出らなくなつたので、今朝丸髷に結つて見たが、何うしても束髮にしなくては氣が濟まぬやうになつたのである。

お光はかう思ひながら、ちやんと帶の間に挾んで恰好よく鎖を垂れた懷中時計を出して見ると、八時二十三分になつてゐる、もう二分のことである。小池の汽車は梅田ステーションの構内に入つてゐるに違ひない。

あの廣いプラットフォームへ、怪蛇の眼玉のやうな燈火を光らした大きな汽關車が、威勢よく入つて來て、列車が横付けになると、いろ〳〵の人の急ぎ足にバラ〳〵と下りて來る光景が想像される。「大阪ッ、……大阪ッ、……八分間停車ッ」と叫びつゝ、急がし氣に歩く驛夫の姿も眼に浮ぶ。小池は大方例もの鞄を下げてゐるであらう。洋服であらうか、和服であらうか。ノッソリと車室を出て來るところへ、自分がこの姿で駈け寄ると、別に會釋もしないで、

『よく來られたね。』とさういふであらう、屹とさういふであらう。

胸に動悸を打たせつゝ、お光はこんなことを考へて、耐まらなくなつた。また懐中時計を出して見ると、八時半になつてゐる。

『今夜歸へらなけや、叱られやしないか。大丈夫か。』と、小池はまたかう自分に言ひさうである。けれどもそんなことをいふべき相手が見付からぬので、方々を探しあぐんで、今頃はあの穴藏のやうな待合室で、何うしたものかと考へてゐるであらう。いや〳〵自分がちやんとプラットフォームまで迎へに出てゐても、此方から聲をかけねば氣が付かずに、何處か別のところへ行つて了ひさうな人だから、もう電車にでも乘るか、上り汽車に乘る都合にしてゐるかも知れぬ。

懐中時計の針は容赦なく進んで、三十五分から四十分にならうとしてゐる。

お光は焦々した揚句に、またコートを取り出し、それを着て、ショールを掛けて、四季袋を提げて、洋傘を持つて、柱にかけてある麥酒の廣告附きの細長い鏡の前に進み、それに映つた自分の全身に飽かず眺め入つた。

『兵隊さんや、兵隊さんや。……』と叫ぶ聲が聞えて、表の方が俄に騷がしくなつた。

七

喇叭の音は聞えないが、ゴト〳〵と重さうな車の軋りが、地響きをさせて來た。幾輛かの眞ッ黒な砲車は、馬に曳かれてお光の家の前を通つて鎮守の廣場の方へ行つた。村の人々のわい〳〵立ち騷ぐ聲は、

祭りの夜よりも賑かである。

お光はショールをとりコートを脱いで、お召の着物に黒縮緬の羽織、博多の帶の間に金鎖を煌めかしたまゝ、長火鉢の側まで出て來た。店頭には何時の間にか山形に日の丸の高張提灯が輝いてゐる。其の高張提灯の傍で兵隊の通るのを見てゐた下女が、長火鉢の横手まで戻つて來て、驚きの眼を瞠りつゝ、お光の盛装を見上げた。

將校の朗かな號令の聲が、鎭守の方に聞えてから暫くすると、ドヤ／＼ガチヤ／＼と、靴の音、サーベルの音を立てゝ、一群れの子供等に附き纏はれつゝ十人あまりの兵隊がお光の店へ入つて來た。お光は下女に案内させて。將校五人を二階の一番と二番とを打ち通した室に案内させ、下士卒八人を階下の五番と六番とに入れさせた。兵隊さんの服や帽子は連日の演習に皆よれ／＼になつてゐた。

お光は二階へ上つた行く人、階下に居る人の姿を眺めて、この人達が自分と小池との逢瀬を妨げたのだなア、と染々思つた。

下女の手で火鉢に火が入つたので、お光は茶と菓子とを持つて二階へ挨拶に行つた。「人の戀路の邪魔する奴は……」と心の裡でさう思ひながら、如才なく愛嬌を見せて茶菓を進めた。

お客樣は皆お光の身なりの立派なのを見て、眩しさうな顏をした。中には胡座を解いて坐り直す人もあつた。

「奥さん、今晩は御厄介になります。」と、圓顏のデップリ肥つた上座の人は、無邪氣な聲を出した。お光は去年の秋小池と田舍町の宿屋に泊つた時、下女や主婦から「奥さん」と呼ばれたのが生れて初めで、

先刻猪之介が「奥さん」と言つたのが二度目、今將校に言はれたのが三度目なので、ハッとして顔を赧らめた。

階下へ下りて見ると、兵卒たちはまだ靴も脫かずに、上官の長靴を磨いてゐた。お光は下女に言ひ付けて用意の酒肴を先づ二階へ運ばせた。二階からは聽て面白さうな高笑ひが聞えた。

旦那の家の丁稚が入つて來て、土間に突ッ立ちながら、

「お家はんがさう言やはりましたんだすがなア、お取り込み中を氣の毒だすが、造身を十人前出けまへんやろかて。」と、おど〳〵する風で言つた。先刻旦那があんなにお魚を買ひ込んだと言つてゐたが、話半分にも當らぬ例の大風呂敷であつたのかと、お光は微笑みながら、

「畏まりました。後でお梅に持たしてやります。……けどなア貞やん、家もお魚が足らんので、あんたんとこへ借りに行かうかおもてましたんやで。」と言つた。丁稚は直ぐ飛ぶやうにして歸つて行つた。

お光は羽織を脫ぎ、お召の上から前垂れを締め、襷をかけて板場へ下り立つた。其處へあるきの猪之介が何處で飮まされたか、眞赤な顏をしながら、ひよろ〳〵して入つて來て、長火鉢の側へ腰をおろすと、

「今、地内で淺川の旦那が、大砲の番してる兵隊さんにぼろくそに叱られやはりましたで。」と、大聲で言つた。何處かへ泊りに行くといつてゐたのも噓であつたかとお光は思ひながら、氣にかゝるので、

「猪のはん、何んで叱られはつたんや。」と、眉を顰めで問ふた。

「大砲の車のねき(傍)で卷煙草呑みやはりましたんやが。……初めに叱られた時、素直にタバコを放つ

て了ひやはれやよかつたんやが、袂から名刺出して、「俺こんなもんや」なんてえらさうに言やはつたさかい、ぼろくそに言はれはりましたんやが。……あきまへんわい、議員さんでも郡長はんでも、兵隊さんにかゝるとなア。』と、猪之介は感心した狀で言つた。

お光はほと〳〵と、旦那の淺ましさが厭やになつた。

其の夜、お光は床の中で寢返へりばかりして、まんじりともしなかつた。小池は何處で寢てゐるであらうかと、それぱかりを考へてゐる中に、早や天明に近くなつた。旦那の泊りに來なかつたことが、迫めてもの有り難さであつたけれど、偖今こゝで旦那に棄てられたら、この家は何うなるであらうかと、二番鷄の歌ふ頃には、そんなことをもちら〳〵考へて來た。小池といふ惡足に逢へなかつたのは、家の爲めに幸福であつたのかも知れぬとさへ、遂には思はれて來た。——して見ると、昨晩から泊つてゐる兵隊さんは、一生の恩人かも知れぬ。——

朝早く兵隊さんは立つて行つた。馬の膝までを浸す淸らかな山川の水を濁して、幾輛かの砲車が對岸の縣道へ進むのが、お光の家の納戸の緣側からよく見られた。フト前日の新聞を取り上げて見ると、この一隊の演習行軍の記事が出てゐて、『宛然一幅の繪卷物の如し』と書いてあつた。

あれが繪卷物かなア。と思つて、お光はまた對岸を見やつた。

それから三日ほどの間、饅頭笠を被つた郵便配達の姿の見えるのが、待ち遠しくてならなかつた。（完）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

世間には賣行きの善き書物あり。賣行きは惡しけれども價値の多き書物もあり。廣く讀まるゝ書物、並に廣く讀まれねばならぬ書物を擇びて、先づ其梗概を說き更に其内容を評論し、其長所と短所とを明かにし、讀書界の火柱たらんとするは本書刊行の目的なり。而して評論の爲に筆を執る人々は、孰れも當代知名の文士にして識見・學殖少くとも著者と相等しきもの〻ならざるなし、評論とは價値を定むることなり。本書一たび出で、思想界始めて群書の價値を解し、些か帝國興國の氣運に貢献するを得ん歟。本書の向て進まんとする理想は實に此の如し。

毎月數冊刊行

名著梗概及評論

ポケツト新形 長五寸一分 幅三寸四分
紙數各冊二百餘頁
價各冊廿五錢 送料各冊四錢

新刊 三宅雪嶺氏の世〃の中 山路愛山氏著
新刊 島崎藤村氏の藤村詩集 川路柳虹氏著
新刊 高山博士の樗牛全集から 三井甲之氏著
新刊 國木田氏の獨歩集 福永渙氏著
新刊 トルストイの戰爭と平和 相馬御風氏著
新刊 バーネット夫人の小公子 平山訓氏著
新刊 大西博士の西洋哲學史 三木露風氏著
新刊 尾崎紅葉氏の多情多恨 中村星湖氏著
新刊 筧博士の古神道大義 岩野泡鳴氏著
新刊 和泉式部の和泉式部歌集 與謝野寛氏 與謝野晶子著

近刊 ダンヌンツイホの死の勝利 西宮藤朝氏著
近刊 茅原華山氏の人間生活論 安成貞雄氏著
近刊 ツルゲネフの浮草 本間久雄氏著
近刊 德富蘆花氏のみゝずのたはこと 生田長江氏著
近刊 正岡子規氏の子規隨筆 坂本雪鳥氏著
近刊 樋口一葉女史の一葉全集 馬場孤蝶氏著
近刊 新渡戶博士の修養 西川光次郎氏著
近刊 頼山陽の外史論纂 大町桂月氏著
近刊 綱島梁川氏の病間錄 生方敏郎氏著
近刊 福澤翁の福翁百話 田中王堂氏著

發賣所 東京神田區小川町 敬文館 振替口座東京一二三六番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

「新年と本紙」

東京日日新聞

青島は陥落して、東洋の天地に旭日旗の勢威洽しとは云へ、歐洲の戰局は何時收拾さるべしとも見えず。世界的大通信機關を完備せる我社の活動は猶一日も忽にすべからざるなり。青島向後の處置如何も亦歐洲の戰局と離れて觀る可からず、一日讀まざれば一日を後る、是れ東京日日新聞を離れて時局を談ずる能はざる所以

我國は勝てり。出征軍は凱旋せり。戰勝國の新年は、のどけくして國運興隆の氣宇内に溢る。我社は曠古に記念すべき此新年を迎ふるに際し、皇軍凱旋記念として大元帥陛下御馬上の尊影を大繪附錄として頒たんとす。筆者は洋畫界の泰斗岡田三郎助畫伯、御英姿颯爽、崇高にして燦爛たり、眞に家庭の重寶。

（三ヶ月分前金郵税共一圓二十錢）

東京丸の内

東京日日新聞發行所

振替口座二八二〇〇番

（中付六の二）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

議論に權威あり記事に生魂あり新聞事業として機關の整備せるは夙に東洋第一の公評あり編輯事務兩局を通じて二千の社員は晝夜區別なく活動して休止せず。

朝刊 夕刊 報知新聞

八臺の輪轉機は毎日午後三時より翌日午前四時迄轟々輪轉の聲を絶たず發行部數實に四十五萬部を超ゆ廣告機關として拔群の偉功を奏するは多言を要せず。

▲定價 夕朝刊一部二錢 一ヶ月
▲一ヶ月 卅八錢 郵税共金五拾錢
▲三ヶ月分拂に限り 郵税共一圓廿錢
▲郵券代用一割増

東京丸の内
報知社
振替口座東京七三八代理部
振替口座東京三七九會計部

電話

本局長 本局長 浪花 本局特長 本局長 本局 本局 本局 本局 長 長 長 長 長 長

五〇六〇 五〇六一 五〇六二 三六五一 五〇六五 五〇六三 五〇六六 五〇六四 一二〇九 一四三〇 二六四九 一四二七 五六五 五七 一五三一 二二一

編輯局 兜町出張所 販賣部 廣告部 監理部 代理部 安信所 大坂支局 神戸支局 名古屋支局 京都支局 靜岡支局 横濱支局 横須賀支局

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告は掲載謝絶す

(中付六の三)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

「新年と本紙」

東京日日新聞

青島は陥落して、東洋の天地に旭日旗の勢威洽しとは云へ、歐洲の戰局は何時收拾さるべしとも見えず。世界的大通信機關を完備せる我社の活動は猶一日も忽にすべからざるなり。青島向後の處置如何も亦歐洲の戰局と離れて觀る可からず、一日讀まざれば一日を後る、是れ東京日日新聞を離れて時局を談ずる能はざる所以

我國は勝てり。出征軍は凱旋せり。戰勝國の新年は、のどけくして國運興隆の氣宇内に溢る。我社は曠古に記念すべき此新年を迎ふるに際し、皇軍凱旋記念として大元帥陛下御馬上の御尊影を大繪附錄として頒たんとす。筆者は洋畫界の泰斗岡田三郎助畫伯、御英姿颯爽、崇高にして燦爛たり、眞に家庭の重寶。

（三ヶ月分前金郵税共一圓二十錢）

東京丸の内

東京日日新聞發行所

振替口座二八〇〇番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

（中付六の二）

議論に權威あり記事に生魂あり新聞事業として機關の整備せるは夙に東洋第一の公評あり編輯事務兩局を通じて二千の社員は晝夜區別なく活動して休止せず。

朝刊 夕刊 報知新聞

八臺の輪轉機は毎日午後三時より翌日午前四時迄轟々輪轉の聲を絶たず發行部數實に四十五萬部を超ゆ廣告機關として拔群の偉功を奏するは多言を要せず。

▲定價 夕朝刊一部二錢 一ヶ月 卅八錢
▲一ヶ月 郵税共金五拾錢
▲三ヶ月分拂に限り 郵税共一圓廿錢
▲郵券代用一割增

東京丸の内
報知社
振替口座東京七三八代理部
振替口座東京三七九會計部

電話

本局長　本局長　浪花　本局特長　本局長　本局　本局　本局　本局　長　長　長　長　長　長

五〇六〇　五〇六一　五〇六二　三六五一　五〇六五　五〇六三　五〇六六　五〇六四　一二〇九　一四三〇　二六四九　一四二七　五六五　五七　五三一　一二二一

編輯局　兜町出張所　販賣部　廣告部　監理部　代理部　安信所　大坂支局　神戶支局　名古屋支局　京都支局　靜岡支局　橫濱支局　橫須賀支局

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

明治七年創刊

年中無休刊 毎號八頁



（東京銀座）



大正三年四月三日新設

（定價一枚貳錢、一ヶ月前金三十五錢、三ヶ月同壹圓、六ヶ月金一圓九十錢、一ヶ年同三圓八十錢▲地方は特に一ヶ月郵税共前金四十錢三ヶ月郵税共前金壹圓十五錢、六ヶ月同金貳圓貳十八錢▲郵税代用一割増▲振替東京六一二）

（中付六の四）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

國民新聞

國民新聞は絶對的不偏不黨にして其の立場は國家本位、國民本位なり、主筆德富蘇峰氏の嘗て本紙に發表せる『時務一家言』現に發表しつゝある『日本より見たる世界の變局』は共に近來無比の經世的大文章にして國民の嚮ふ所を道破して餘蘊なし

昨年の國民新聞は**リヒテル**、**プーレー**事件、海軍收賄問題に於て其の敏速精確の本領を發揮し其他昭憲皇太后の御寫眞の如き議會に於ける**スケッチ**の如き歐洲大戰並に青島攻圍戰に關する號外發行の大勉强の如き實に我が國民新聞の活動は天下の耳目を驚倒せしめたり

昨年既に然り、以て本年を推すべし

（中村六の九）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

最新刊 英和 和英 諺語辭典

東京高等商業學校教授 神田乃武先生序
青山學院長 高木壬太郎先生序
東京外國語學校長 村上直次郎先生序
東京外國語學校教授 ドクトルフィロソフィ 淺田榮次先生遺著

淺田先生は東京外國語學校に亦た青山學院に敎鞭を執らるゝこと二十年實に英學界のオーソリチーたり本書は先生が該博の學識と多年の經驗とを以て、東西兩洋の諺語格言約三千餘を網羅し、對照比較し、何人も容易に和英の兩語より自由自在に檢索し得るやう編述せられたるものその解說の親切を極むるただに**和文英譯英文和譯の秘鍵**を示せるのみならず、以て東西國民性を瞭然たらしめたる破天荒の快著にして、實に先生最後の絶筆たり、著述家、演說家の好伴侶、受驗者、作文者の良師友としてこれを江湖に薦む。

四六判全一冊紙數五百
定價金壹圓五十錢
二萬部限り
特價金壹圓二十錢
送料十二錢 清朝卅錢

最新刊 講談 ナポレオン

文學博士 箕作元八先生
文學博士 黑板勝美先生序
松林伯知講演

本書は講談界の飛將軍松林伯知が得意の快辯を振つて、英雄ナポレオンの一代記を講述せるもの、平易通俗の實史たると同時に高尚勇壯なる講談たり『**世界的の新太閤記**として世に推薦す』壯絶快絶骨鳴り血湧く。黑板博士の序に曰くと、眞に是れ最も趣味ある軍國民絶好の讀物にして、講談界の偉觀たらずんばあらず、世界的大英雄の眞面目に接せんと欲する大方の諸君請ふ劉覽の榮を賜へ。

ポケット入
美本全一冊紙數六百頁
並製金八拾五錢
上製金一圓
送料內地八錢其他二十錢

發行所 東京神田小川町一 **文會堂書店** 電話本局一四二一 振替東京三五一三

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

(中付六の八)

山椒大夫

森林太郎

越後の春日を經て今津へ出る道を、珍らしい旅人の一群が歩いてゐる。母は三十歳を踰えたばかりの女で、二人の子供を連れてゐる。姉は十四、弟は十二である。それに四十位の女中が一人附いて、草臥れた同胞二人を「もうぢきにお宿にお着なさいます」と云つて勵まして歩かせようとする。二人の中で、姉娘は足を引き摩るやうにして歩いてゐるが、それでも氣が勝つてゐて、疲れたのを母や弟に知らせまいとして、折々思ひ出したやうに彈力のある歩附をして見せる。近い道を物詣にでも歩くのなら、ふさはしくも見えさうな一群であるが、笠やら杖やら甲斐々々しい出立をしてゐるのが、誰の目にも珍らしく、又氣の毒に感ぜられるのである。

道は百姓家の斷えたり續いたりする間を通つてゐる。砂や小石は多いが、秋日和に好く乾いて、しかも粘土が雜つてゐるために、好く固まつてゐて、海の傍のやうに踝を埋めて人を惱ますことはない。

藁葺の家が何軒も立ち並んだ一構が柞(ははそ)の林に圍まれて、それに夕日がかつと差してゐる處に通り掛かつた。

「まあの美しい紅葉を御覽」と、先に立つてゐた母が指さして子供に言つた。

子供は母の指さす方を見たが、なんとも云はぬので、女中が云つた。「木の葉があんなに染まるのでございますから、朝晩お寒くなりましたのも無理はございませんね。」

姉娘が突然弟を顧みて云つた。「早くお父う樣の入らつしやる處へ往きたいわね。」

「姉えさん。まだなか／＼往かれはしないよ。」弟は賢しげに答へた。

母が諭すやうに云つた。「さうですとも。今まで越して來たやうな山を澤山越して、河や海をお舟で度々渡らなくては往かれないのだよ。毎日精出して大人(おとな)しく歩かなくては。」

「でも早く往きたいのですもの」と、姉娘は云つた。

一群は暫く默つて歩いた。

向うから空桶(からをけ)を擔いで來る女がある。濱から歸る潮汲女である。

それに女中が聲を掛けた。「申し／＼。此邊に旅の人の宿をする家はありませんか。」

潮汲女は足を駐(と)めて、主從四人の群を見渡した。そしてから云つた。「まあ、お氣の毒な。生憎な所で日が暮れますね。此土地には旅の人を留めて上げる所は一軒もありません。」

女中が云つた。「それは本當ですか。どうしてそんなに人氣が惡いのでせう。」

二人の子供は、はずんで來る對話の調子を氣にして、潮汲女の傍へ寄つたので、女中と三人で女を取

り巻いた形になつた。

潮汲女は云つた。「いゝえ。信者が多くて人氣の好い土地ですが、國守の掟だから爲方がありません。もうあそこに」と言ひさして、女は今來た道を指さした。「もうあそこに見えてゐますが、あの橋までお出なさると、高札が立つてゐます。それに精しく書いてあるさうですが、近頃惡い人買が此邊を立ち廻ります。それで旅人に宿を貸して足を留めさせたものにはお咎があります。あたり七軒巻添になるさうです。」

「それは困りますね。子供衆もお出なさるし、もうさう遠くまでは行かれません。どうにか爲樣はありますまいか。」

「さうですね。わたしの通ふ鹽濱のあるあたりまで、あなた方がお出なさると、夜になつてしまひませう。どうもそこらで好い所を見附けて、野宿をなさるより外、爲方がありますまい。わたしの思案では、あそこの橋の下にお休なさるが好いでせう。岸の石垣にぴつたり寄せて、河原に大きい材木が澤山立ててあります。荒川の上から流して來た材木です。晝間は其下で子供が遊んでゐますが、奥の方には日も差さず、暗くなつてゐる所があります。そこなら風も通しますまい。わたしはかうして毎日通ふ鹽濱の持主の所にゐます。つひそこの柞の森の中です。夜になつたら、藁や薦を持つて往つてあげませう。」

子供等の母は一人離れて立つて、此話を聞いてゐたが、此時潮汲女の傍に進み寄つて云つた。「好い方に出逢ひましたのは、わたし共の爲合せでございます。そこへ往つて休みませう。どうぞ藁や薦をお借申したうございます。せめて子供達にでも敷かせたり被せたりいたしたうございます。」

潮汲女は受け合つて、柞の林の方へ歸つて行く。主從四人は橋のある方へ急いだ。

荒川に掛け渡した應化橋の袂に一群は來た。潮汲女の云つた通に、新しい高札が立つてゐる。書いてある國守の掟も、女の詞に違はない。

人買が立ち廻るなら、其人買の詮議をしたら好ささうなものである。旅人に足を留めさせまいとして、行き暮れたものを路頭に迷はせるやうな掟を、國守はなぜ定めたものか。不束な世話の燒きやうである。併し昔の人の目には掟はどこまでも掟である。子供等の母は只さう云ふ掟のある土地に來合せた運命を歎くだけで、掟の善惡は思はない。

橋の袂に、河原へ洗濯に降りるものの通ふ道がある。そこから一群は河原に降りた。なる程大層な材木が石垣に立て掛けてある。一群は石垣に沿うて材木の下へ潛つて這入つた。男の子は面白がつて、先に立つて勇んで這入つた。

奧深く潛つて這入ると、洞穴のやうになつた所がある。下には大きい材木が横になつてゐるので、床を張つたやうである。

男の子が先に立つて、横になつてゐる材木の上に乘つて、一番隅へ這入つて、「姉えさん、早くお出なさい」と呼ぶ。

姉娘はおそる／＼弟の傍へ往つた。

「まあ、お待遊ばせ」と女中が云つて、背に負つてゐた包を卸した。そして着換の衣類を出して、子供

を脇へ寄らせて、門の處に敷いた。そこへ親子をすわらせた。

母親がすわると、二人の子供が右左から縋り附いた。岩代の信夫郡の住家を出て、親子はここまで來るうちに、家の中ではあつても、此材木の蔭より外らしい所に寢たことがある。不自由にも次第に慣れて、もうさ程苦にはしない。

女中の包から出したのは衣類ばかりではない。用心に持つてゐる食物もある。女中はそれを親子の前に出して置いて云つた。「ここでは焚火をいたすことは出來ません。若し惡い人に見附けられてはならぬからでございます。あの鹽濱の持主とやらの家まで往つて、お湯を貰つてまゐりませう。そして藁や薦の事も賴んでまゐりませう。」

女中はまめ〱しく出て行つた。子供は樂しげに粔籹やら、乾した果やらを食べはじめた。

暫くすると、此材木の蔭へ人の這入つて來る足音がした。「姥竹かい」と母親が聲を掛けた。併し心の内には、柞の森まで往つて來たにしては、餘り早いと疑つた。姥竹と云ふのは女中の名である。

這入つて來たのは四十歲ばかりの男である。骨組の逞しい、筋肉が一つ〱肌の上から數へられる程、脂肪の少い人で、牙彫の人形のやうな顏に笑を湛へて、手に珠數を持つてゐる。我家を步くやうな、慣れた步附をして、親子の潛んでゐる奥へ進み寄つた。そして親子の座席にしてゐる材木の端に腰を掛けた。

親子は只驚いて見てゐる。仇をしさうな樣子も見えぬので、恐ろしいとも思はぬのである。

男はこんな事を言ふ。「わしは山岡太夫と云ふ船乘ぢや。此頃此土地を人買が立ち廻ると云ふので、國

守が旅人に宿を貸すことを差し止めた。人買を捌まへることは、國守の手に合はぬと見える。氣の毒なのは旅人ぢや。そこでわしは旅人を救うて遣らうと思ひ立つた。さいはひわしが家は街道を離れてゐるので、こつそり人を留めても、誰に遠慮もいらぬ。わしは人の野宿をしさうな森の中や橋の下を尋ね廻つて、これまで大勢の人を連れて歸つた。見れば子供衆が菓子を食べてゐなさるが、そんな物は腹の足しにはならいで、歯に障る。わしが所ではさしたる饗應はせぬが、芋粥でも進ぜませう。どうぞ遠慮せずに來て下されい。」男は强ひて誘ふでもなく、獨語のやうに言つたのである。

子供等の母はつくぐ聞いてゐたが、世間の掟に背いてまでも人を救はうと云ふ難有い志に感ぜずにはゐられらかつた。そこでかう云つた。「承はれば殊勝なお心掛と存じます。貸すなと云ふ掟のある宿を借りて、ひよつと宿主に難儀を掛けようかと、それが氣掛かりではございますが、わたくしは兎も角も、子供等に溫いお粥でも食べさせて、屋根の下に休ませることが出來ましたら、其御恩は後の世までも忘れますまい。」

山岡大夫は頷いた。「さてさて好う物のわかる御婦人ぢや。そんならすぐに案内をして進ぜませう。」かう云つて立ちさうにした。

母親は氣の毒さうに云つた。「どうぞ少しお待下さいませ。わたくし共三人がお世話になるさへ心苦しうございますのに、こんな事を申すのはいかがとは存じますが、實は今一人連がございます。」

山岡大夫は耳を欹てた。「連がおありなさる。それは男か女子か。」

「子供達の世話をさせに連れて出た女中でございます。湯を貰ふと申して、街道を三四町跡へ引き返し

の影が見えた。

「お女中かな。そんなら待つて進ぜませう。」山岡太夫の落ち着いた、底の知れぬやうな顔に、なぜか喜てまゐりました。もう程なく歸つてまゐりませう。」

ここは直江の浦である。日はまだ米山の背後(うしろ)に隱れてゐて、紺靑のやうな海の上には薄い霧が掛かつてゐる。

一群の客を舟に載せて纜を解いてゐる船頭がある。船頭は山岡大夫で、客はゆうべ大夫の家に泊つた主從四人の旅人である。

應化橋の下で山岡大夫に出逢つた母親と子供二人とは、女中姥竹が缺け損じた瓶子(へいし)に湯を貰つて歸るのを待ち受けて、大夫に連れられて宿を借りに往つた 姥竹は不安らしい顔をしながら附いて行つた。大夫は街道を南へ這入つた松林の中の草の家に四人を留めて、芋粥を進めた。そしてどこからどこへ往く旅かと問うた。草臥れた子供等を先へ寢させて、母は宿の主人に身の上のおほよそを、微かな燈火の下で話した。

自分は岩代のものである。夫が筑紫へ往つて歸らぬので、二人の子供を連れて尋ねに往く。姥竹は姉娘の生れた時から守をしてくれた女中で、身寄のないものゆゑ、遠い、覺束ない旅の伴をすることになつたと話したのである。

さてここまでは來たが、筑紫の果へ往くことを思へば、まだ家を出たばかりと云つても好い。これか

ら陸を行つたものであらうか。又は船路を行つたものであらうか。主人は船乗であつて見れば、定めて遠國の事も知つてゐるだらう。どうぞ教へて貰ひたいと、子供等の母が頼んだ。

大夫は知れ切つた事を問はれたやうに、少しもためらはずに船路を行くことを勸めた。陸を行けば、ぢき隣の越中の國に入る界にさへ、親不知子不知の難所がある。削り立てたやうな巖石の裾には荒浪が打ち寄せる。旅人は横穴に這入つて、波の引くのを待つてゐて、狹い巖石の下の道を走り拔ける。其時は親は子を顧みることが出來ず、子も親を顧みることが出來ない。それは海邊の難所である。又山を越えると、踏まへた石が一つ揺げば、千尋の谷底に落ちるやうな、あぶない岨道もある。西國へ往くまでには、どれ程の難所があるか知れない。それとは違つて、船路は安全なものである。慥な船頭にさへ頼めば、ゐながらにして百里でも千里でも行かれる。自分は西國まで往くことは出來ぬが、諸國の船頭を知つてゐるから、船に載せて出て、西國へ往く舟に換り乘へさせることが出來る。あすの朝は早速船に載せて出ようと、大夫は事もなげに云つた。

夜が明け掛かると、大夫は主從四人をせき立てて家を出た。其時子供等の母は小さい嚢から金を出して、宿賃を拂はうとした。大夫は留めて、宿賃は貰はぬ、併し金の入れてある大切な嚢は預つて置かうと云つた。なんでも大切な品は、宿に着けば宿の主人に、舟に乘れば舟の主に預けるものだと云ふのである。

子供等の母は最初に宿を借ることを許してから、主人の大夫の言ふ事を聽かなくてはならぬやうな勢になつた。掟を破つてまで宿を貸してくれたのを、難有くは思つても、何事によらず言ふが儘になる程、

大夫を信じてはゐない。かう云ふ勢になつたのは、大夫の詞に人を押し附ける强みがあつて、母親にそれに抗ふことが出來ぬからである。その抗ふことの出來ぬのは、どこか恐ろしい處があるからである。併し母親は自分が大夫を恐れてゐるとは思つてゐない。自分の心がはつきりわかつてゐない。

母親は餘儀ない事をするやうな心持で舟に乘つた。子供等は凪いだ海の、靑い氈を敷いたやうな面を見て、物珍しさに胸を跳らせて乘つた。只姥竹が顏には、きのふ橋の下を立ち去つた時から、今舟に乘る時まで、不安の色が消え失せなかつた。

山岡大夫は纜を解いた。棹で岸を一押押すと、舟は搖めきつつ浮び出た。

山岡大夫は暫く岸に沿うて南へ、越中界の方角へ漕いで行く。靄は見る／＼消えて、波が日に赫く。人家のない岩陰に、波が砂を洗つて、海松や荒布を打ち上げてゐる處があつた。そこに舟が二艘止まつてゐる。船頭が大夫を見て呼び掛けた。

「どうぢや。あるか。」

大夫は右の手を擧げて、大拇を折つて見せた。そして自分もそこへ舟を舫つた。大拇だけ折つたのは、四人あると云ふ相圖である。

前からゐた船頭の一人は宮崎の三郎と云つて、越中宮崎のものである。左の手の拳を開いて見せた。右の手が貨の相圖になるやうに、左の手は錢の相圖になる。これは五貫文に附けたのである。

「氣張るぞ」と今一人の船頭が云つて、左の臂をつと伸べて、一度拳を開いて見せ、次いで示指を竪て

て見せた。此男は佐渡の二郎で、六貫文に附けたのである。

「横着者奴」と宮崎が叫んで立ち掛かれば、「出し抜かうとしたのはおぬしぢや」と佐渡が身構をする。二艘の舟がかしいで、舷が水を笞つた。

大夫は二人の船頭の顔を冷かに見較べた。「慌てるな。どつちも空手では還さぬ。お客様が御窮屈でないやうに、お二人づつ分けて載せて進ぜる。賃銭は跡で附けた値段の割ぢや。」かう云つて置いて、大夫は客を顧みた。「さあ、お二人づつあの舟へお乗なされ。どれも西國への便船ぢや。舟足と云ふものは、重過ぎては走りが悪い。」

二人の子供は宮崎が舟へ、母親と姥竹とは佐渡が舟へ、大夫が手を執つて乗り移らせた。移らせて引く大夫が手に、宮崎も佐渡も幾緡かの錢を握らせたのである。

「あの、主人にお預けなされた嚢は」と、姥竹が主の袖を引く時、山岡大夫は空舟をつと押し出した。「わしはこれでお暇をする。慥かな手から慥かな手へ渡すまでがわしの役ぢや。御機嫌好うお越しなされ。」

櫓の音が忙しく響いて、山岡大夫の舟は見る〱遠ざかつて行く。

母親は佐渡に言つた。「同じ道を漕いで行つて、同じ港に着くのでございませうね。」

佐渡と宮崎とは顔を見合せて、聲を立てて笑つた。そして佐渡が云つた。「乗る舟は弘誓の舟、着くは同じ彼岸と、蓮華峰寺の和尚が云うたげな。」

二人の船頭はそれ切り默つて舟を出した。佐渡の二郎は北へ漕ぐ。宮崎の三郎は南へ漕ぐ。「あれあれ」

と呼びかはす親子主従は、只遠ざかり行くばかりである。

母親は物狂ほしげに舷に手を掛けて伸び上がつた。「もう為方がない。これが別だよ。安寿は守本尊の地蔵様を大切におし。厨子王はお父う様の下さつた護刀を大切におし。どうぞ二人が離れぬやうに。」安寿は姉娘、厨子王は弟の名である。

子供は只「お母あ様、お母あ様」と呼ぶばかりである。

舟と舟とは次第に遠ざかる。後には餌を待つ雛のやうに、二人の子供が開いた口が見えてゐて、もう声は聞えない。

姥竹は佐渡の二郎に「申し船頭さん、申し〳〵」と声を掛けてゐたが、佐渡が構はぬので、とう〳〵赤松の幹のやうな脚に縋つた。「船頭さん。これはどうした事でございます。あのお嬢様、若様に別れて、生きてどこへ往かれませう。奥様も同じ事でございます。これから何をたよりにお暮らしなさいませう。どうぞあの舟の往く方へ漕いで行つて下さいまし。後生でございます。」

「うるさい」と、佐渡は後様に蹴た。姥竹は舟笭に倒れた。髪は乱れて舷に掛かつた。

姥竹は身を起した。「えゝ。これまでぢや。奥様、御免下さいまし。」かう云つて真つ逆様に海に飛び込んだ。

「こら」と云つて船頭は臂を差し伸ばしたが、間に合はなかつた。

母親は袿を脱いで佐渡が前へ出した。「これは粗末な物でございますが、お世話になつたお礼に差し上げます。わたくしはもうこれでお暇を申します。」かう云つて舷に手を掛けた。

「たはけが」と、佐渡は髪を掴んで引き倒した。「うぬまで死なせてなるものか。大事な貨ぢや。」佐渡の二郎は牽紋を引き出して、母親をくる〳〵巻にして轉がした。そして北へ〳〵と漕いで行つた。

「お母あ様〳〵」と呼び續けてゐる姉と弟とを載せて、宮崎の三郎が舟は岸に沿うて南へ走つて行く。「もう呼ぶな」と宮崎が叱つた。「水の底の鱗介には聞えても、あの女子には聞えぬ。女子共は佐渡へ渡つて粟の鳥でも逐はせられることぢやらう。」

姉の安壽と弟の厨子王とは抱き合つて泣いてゐる。故郷を離れるも、遠い旅をするも母親と一しよにすることだと思つてゐたのに、今料らずも引き分けられて、二人はどうして好いかわからない。只悲しさばかりが胸に溢れて、此別が自分達の身の上をどれだけ變らせるか、其程さへ辨へられぬのである。

午になつて宮崎は餅を出して食つた。そして安壽と厨子王とにも一つ宛くれた。二人は餅を手に持つて食べようともせず、目を見合せて泣いた。夜は宮崎が被せた苫の下で、泣きながら寐入つた。

かうして二人は幾日か舟に明かし暮らした。宮崎は越中、能登、越前、若狹の津々浦々を賣り歩いたのである。

併し二人が穉いのに、體もか弱く見えるので、なか〳〵買はうと云ふものがない。たまに買手があつても、値段の相談が調はない。宮崎は次第に機嫌を損じて、「いつまで泣くか」と二人を打つやうになつた。

宮崎が舟は廻り廻つて、丹後の由良の港に來た。こゝには石浦と云ふ處に大きい邸を構へて、田畑には米麥を植ゑさせ、山では獵をさせ、海では漁をさせ、蠶飼をさせ、機織をさせ、金物、陶物、木の器、何から何まで、それ〴〵の職人を使つて造らせる山椒大夫と云ふ分限者がゐて、人なら幾らでも買ふ。宮崎はこれまでも、餘所に買手のない貨があると、此山椒大夫が所へ持つて來ることになつてゐた。

港に出張つてゐた大夫の奴頭は、安壽、厨子王をすぐに七貫文に買つた。

「やれ〴〵、餓鬼共を片附けて身が輕うなつた」と云つて、宮崎の三郎は受け取つた錢を懷に入れた。そして波止場の酒店に這入つた。

一抱に餘る柱を立て並べて造つた大廈の、奧深い廣間に一間四方の爐を切らせて、炭火がおこしてある。其向に茵を三枚疊ねて敷いて、山椒大夫は几に靠れてゐる。右左には二郎、三郎の二人の息子が狛犬のやうに列んでゐる。もと大夫には三人の男子があつたが、太郎は十六歳の時、逃亡を企てて捕へられた奴に、父が手づから烙印をするのをぢつと見てゐて、一言も物を言はずに、ふいと家を出て行方が知れなくなつた。今から十九年前の事である。

奴頭が安壽、厨子王を連れて前へ出た。そして二人の子供に辭儀をせいと云つた。

二人の子供は奴頭の詞が耳に入らぬらしく、只目を瞠つて大夫を見てゐる。今年六十歳になる大夫の、朱を塗つたやうな顔は、額が廣く顋が張つて、髮も鬚も銀色に光つてゐる。子供等は恐ろしいよりは不思議がつて、ぢつと其顔を見てゐるのである。

大夫は云つた。「買うて來た子供はそれか。いつも買ふ奴と違うて、何に使うて好いかわからぬ、珍らしい子供ぢやと云ふから、わざ〳〵連れて來させて見れば、色の蒼ざめた、か細い童共ぢや。何に使うて好いかは、わしにもわからぬ。」

傍から三郎が口を出した。末の弟ではあるが、もう三十になつてゐる。「いやお父つさん。さつきから見てゐれば、辭儀をせいと云はれても辭儀もせぬ。外の奴のやうに名告もせぬ。弱々しう見えてもしぶとい者共ぢや。奉公初は男が柴苅、女が汐汲と極まつてゐる。其通におさせなされい。」

「仰やるとほり、名はわたくしにも申しませぬ」と、奴頭が云つた。

大夫は嘲笑つた。「愚者と見える。名はわしが附けて遣る。姉はいたつきを垣衣、弟は我名を萱草ぢや。垣衣は濱へ往つて、日に三荷の潮を汲め。萱草は山へ往つて日に三荷の柴を苅れ。弱々しい體に免じて、荷は輕うして取らせる。」

三郎が云つた。「過分のいたはり樣ぢや。こりや、奴頭。早く連れて下がつて道具を渡して遣れ。」

奴頭は二人の子供を新參小屋に連れて往つて、安壽には桶と杓、厨子王には籠と鎌を渡した。どちらにも午餉を入れる樏子が添へてある。新參小屋は外の奴婢の居所とは別になつてゐるのである。

奴頭が出て行く頃には、もうあたりが暗くなつた。此小屋には燈火もない。

翌日の朝はひどく寒かつた。ゆうべは小屋に備へてある衾が餘りきたないので、厨子王が薦を探して來て、舟で苫をかづいたやうに、二人でかづいて寢たのである。

きのよ奴頭に敎へられたやうに、厨子王は樏子を持つて厨へ餉を受け取りに往つた。屋根の上、地にちらばつた藁の上には霜が降つてゐる。厨は大きい土間で、もう大勢の奴婢が來て待つてゐる。男と女とは受け取る場所が違ふのに、厨子王は姉のと自分のと貰はうとするので、一度は叱られたが、あすからは銘々が貰ひに來ると誓つて、やう〳〵樏子の外に、面桶に入れた饘と、木の椀に入れた湯との二人前をも受け取つた。饘は鹽を入れて炊いてある。

姉と弟とは朝餉を食べながら、もうかうした身の上になつては、運命の下に項を屈めるより外はないと、けなげにも相談した。そして姉は濱邊へ、弟は山路をさして行くのである。大夫が邸の三の木戸、二の木戸、一の木戸を一しよに出て、二人は霜を履んで、見返り勝に右左へ別れた。

厨子王が登る山は由良が嶽の裾で、石浦からは少し南へ行つて登るのである。柴を刈る所は、麓から遠くはない。所々紫色の岩の露れてゐる所を通つて、稍廣い平地に出る。そこに雜木が茂つてゐるのである。

厨子王は雜木林の中に立つてあたりを見廻した。併し柴はどうして刈るものかと、暫くは手を着け兼ねて、朝日に霜の融け掛かる、茵のやうな落葉の上に、ぼんやりすわつて時を過した。やう〳〵氣を取り直して、一枝二枝刈るうちに、厨子王は指を傷めた。そこで又落葉の上にすわつて、山でさへこんなに寒い、濱邊に往つた姉様は、さぞ潮風が寒からうと、ひとり涙をこぼしてゐた。

日が餘程昇つてから、柴を背負つて麓へ降りる、外の樵が通り掛かつて、「お前も大夫の所の奴が、柴は日に何荷刈るのか」と問うた。

「日に三荷苅る筈の柴を、まだ少しも苅りませぬ」と、厨子王は正直に云つた。

「日に三荷の柴ならば、午までに二荷苅るが好い。柴はかうして苅るものぢや。」樵は我荷を卸して置いて、すぐに一荷苅つてくれた。

厨子王は氣を取り直して、やう／＼午までに一荷苅り、午から又一荷苅つた。

濱邊に往く姉の安壽は、川の岸を北へ行つた。さて潮を汲む場所に降り立つたが、これも汐の汲みやうを知らない。心で心を勵まして、やう／＼杓を卸すや否や、波が杓を取つて行つた。

隣で汲んでゐる女子が、手早く杓を拾つて戻した。そしてかう云つた。「汐はそれで汲まれません。どれ汲みやうを敎へて上げよう。右手の杓でかう汲んで、左手の桶でかう受ける。」とう／＼一荷汲んでくれた。

「難有うございます。汲みやうが、あなたのお蔭て、わかつたやうでございます。自分て少し汲んで見ませう。」安壽は汐を汲み覺えた。

隣で汲んでゐる女子に、無邪氣な安壽が氣に入つた。二人は午餉を一しよに食べながら、身の上を打ち明けて、姉妹の誓をした。これは伊勢の小萩と云つて、二見が浦から買はれて來た女子である。

最初の日はこんな工合に、姉が言ひ附けられた三荷の潮も、弟が言ひ附けられた三荷の柴も、一荷づつの勸進を受けて、日の暮までに首尾好く調つた。

姉は潮を汲み、弟は柴を苅つて、一日一日と暮らして行つた。姉は濱で弟を思ひ、弟は山で姉を思ひ、

日の暮を待つて小屋に歸れば、二人は手を取り合つて、筑紫にゐる父が戀しい、佐渡にゐる母が戀しいと、言つては泣き、泣いては言ふ。

兎角するうちに十日立つた。そして新參小屋を明けなくてはならぬ時が來た。小屋を明ければ、奴は奴、婢は婢の組に入るのである。

二人は死んでも別れぬと云つた。奴頭が大夫に訴へた。

大夫は云つた。「たはけた話ぢや。奴は奴の組へ引き摩つて往け。婢は婢の組へ引き摩つて往け。」

奴頭が承つて起たうとした時、二郎が傍から呼び止めた。そして父に言つた。「仰やる通に童共を引き分けさせても宜うございますが、童共は死んでも別れぬと申すさうでございます。愚なものゆゑ、死ぬるかも知れません。苅る柴はわづかでも、汲む潮はいささかでも、人手を耗すのは損でございます。わたくしが好いやうに計らつて遣りませう。」

「それもさうか。損になる事はわしも嫌ぢや。どうにでも勝手にして置け。」大夫はかう云つて脇へ向いた。

二郎は三の木戸に小屋に掛けさせて、姉と弟とを一しよに置いた。

或日の暮に二人の子供は、いつものやうに父母の事を言つてゐた。それを二郎が通り掛かつて聞いた。二郎は邸を見廻つて、強い奴が弱い奴を虐げたり、諍をしたり、盜をしたりするのを取り締まつてゐるのである。

二郎は小屋に這入つて二人に言つた。「父母は戀しうても佐渡は遠い。筑紫はそれより又遠い。子供の

往かれる所ではない。父母に逢ひたいなら、大きうなる日を待つが好い。」かう云つて出て行つた。

程經て又或日の暮に、二人の子供は父母の事を言つてゐた。それを今度は三郎が通り掛かつて聞いた。三郎は寢鳥を取ることが好で邸の内の木立々々を、手に弓矢を持つて見廻るのである。

二人の子供は父母の事を言ふ度に、どうしようか、かうしようかと、逢ひたさの餘に、あらゆる手立を話し合つて、夢のやうな相談をもする。けふは姉がかう云つた。「大きくなつてからでなくては、遠い旅は出來ないと云ふのは、それは當り前の事よ。わたし達はその出來ない事がしたいのだわ。だがわたし好く思つて見ると、どうしても二人一しよにこゝを逃げ出しては駄目なの。わたしには構はないで、お前一人で逃げなくては。そして先へ筑紫の方へ往つて、お父う様にお目に掛かつて、どうしたら好いか伺ふのだね。それから佐渡へお母あ様のお迎に往くが好いわ。」三郎が立聞をしたのは、生憎この安壽の詞であつた。

三郎は弓矢を持つて、つと小屋の内に這入つた。「こら。お主達は逃げる談合をしてをるな。逃亡の企をしたものには烙印をする。それが此邸の掟ぢや。赤うなつた鐵は熱いぞよ。」

二人の子供は眞つ蒼になつた。安壽は三郎が前に進み出て云つた。「あれは譃でございます。弟が一人で逃げたつて、まあ、どこまで往かれませう。餘り親に逢ひたいので、あんな事を申しました。こなひだも弟と一しよに、鳥になつて飛んで往かうと申したこともございます。出放題でございます。」

厨子王は云つた。「姉えさんの云ふ通りです。いつでも二人で今のやうな、出來ない事はかし言つて、父母の戀しいのを紛らしてゐるのです。」

三郎は二人の顔を見較べて、暫くの間默つてゐた。「ふん。誰なら誰でも好い。お主達が一しよにをつて、なんの話をすると云ふことを、巳が慥に聞いて置いたぞ。」かう云つて三郎は出て行つた。

其晩は二人が氣味惡く思ひながら寐た。それからどれ丈寐たかわからない。二人はふと物音を聞き附けて目を醒ました。今の小屋に來てからは、燈火を置くことが許されてゐる。その微かな明りで見れば、枕元に三郎が立つてゐる。三郎は、つと寄つて、兩手で二人の手を摑まへる。そして引き立てゝ戸口を出る。蒼ざめた月を仰ぎながら、二人は目見えの時に通つた、廣い馬道を引かれて行く。階を三段登る。廊を通る。廻り廻つて前の日に見た廣間に這入る。そこには大勢の人が默つて並んでゐる。三郎は二人を炭火の眞つ赤におこつた爐の前まで引き摩つて出る。二人は小屋で引き立てられた時から、只「御免なさい〳〵」と云つてゐたが、三郎は默つて引き摩つて行くので、しまひには二人も默つてしまつた。爐の向側には茵三枚を疊ねて敷いて、山椒大夫がすわつてゐる。大夫の赤顔が、座の右左に焚いてある炬火を照り反して、燃えるやうである。三郎は炭火の中から、赤く焼けてゐる火筋を拔き出す。それを手に持つて、暫く見てゐる。初め透き通るやうに赤くなつてゐた鐵が、次第に黒ずんで來る。そこで三郎は安壽を引き寄せて、火筋を顔に當てようとする。厨子王は其肘に絡み附く。三郎はそれを蹴倒して右の膝に敷く。とう〳〵火筋を安壽の額に十文字に當てる。安壽の悲鳴が一座の沈默を破つて響き渡る。三郎は安壽を衝き放して、膝の下の厨子王を引き起し、其額にも火筋を十文字に當てる。新に響く厨子王の泣聲が、稍微かになつた姉の聲に交る。三郎は火筋を棄てゝ、初め二人を此廣間へ連れて來た時のやうに、又二人の手を摑まへる。そして一座を見渡した後、廣い母屋を廻つて、二人を三段の階の所ま

て引き出し、凍つた土の上に衝き落す。二人の子供は創の痛と心の恐とに氣を失ひさうになるのを、やう／＼堪へ忍んで、どこをどう歩いたともなく、三の木戸の小家に歸る。臥所の上に倒れた二人は、暫く死骸のやうに動かずにゐたが、忽ち厨子王が「姉えさん、早くお地藏樣を」と叫んだ。安壽はすぐに起き直つて、肌の守袋を取り出した。わなゝく手に紐を解いて、袋から出した佛像を枕元に据ゑた。二人は右左にぬかづいた。其時齒をくひしばつてもこらへられぬ額の痛が、掻き消すやうに失せた。掌で額を撫でて見れば、創は痕もなくなつた。はつと思つて、二人は目を醒ました。

二人の子供は起き直つて夢の話をした。同じ夢を同じ時に見たのである。安壽は守本尊を取り出して、夢で据ゑたと同じやうに、枕元に据ゑた。二人はそれを伏し拜んで、微かな燈火の明りにすかして、地藏尊の額を見た。白毫の右左に、鏨（たがね）で彫つたやうな十文字の疵があざやかに見えた。

二人の子供が話を三郎に立聞せられて、其晩恐ろしい夢を見た時から、安壽の樣子がひどく變つて來た。顏には引き締まつたやうな表情があつて、眉の根には皺が寄り、目は遙に遠い處を見詰めてゐる。そして物を言はない。日の暮に濱から歸ると、これまでは弟の山から歸るのを待ち受けて、長い話をしたのに、今はこんな時にも詞少にしてゐる。厨子王が心配して、「姉えさんどうしたのです」と云ふと、「どうもしないの、大丈夫よ」と云つて、わざとらしく笑ふ。

安壽の前と變つたのは只これだけで、言ふ事が間違つてもをらず、爲る事も平生の通である。併し厨子王は互に慰めもし、慰められもした一人の姉が、變つた樣子をするのを見て、際限なくつらく思ふ心

を、誰に打ち明けて話すことも出來ない。二人の子供の境界は、前より一層寂しくなつたのである。

雪が降つたり歇んだりして、年が暮れ掛かつた。奴も婢も外に出る爲事を止めて、家の中で働くことになつた。安壽は絲を紡ぐ。厨子王は藁を擣つ。藁を擣つのは修行はいらぬが、絲を紡ぐのはむづかしい。それを夜になると伊勢の小萩が來て、手傳つたり敎へたりする。安壽は弟に對する樣子が變つたばかりでなく、小萩に對しても詞少になつて、動もすると不愛想をする。併し小萩は機嫌を損せずに、いたはるやうにして附き合つてゐる。

山椒大夫が邸の木戸にも松が立てられた。併しこゝの年の始は何の晴れがましい事もなく、又族（うから）の女子達は奥深く住んでゐて、出入することが稀なので、賑はしい事もない。只上も下も酒を飲んで、奴の小屋には諍が起るだけである。常は諍をすると、嚴しく罰せられるのに、かう云ふ時は奴頭が大目に見る。血を流しても知らぬ顔をしてゐることがある。どうかすると、殺されたものがあつても構はぬのである。

寂しい三の木戸の小屋へは、折々小萩が遊びに來た。婢の小屋の賑はしさを持つて來たかと思ふやうに、小萩が話してゐる間は、陰氣な小屋も春めいて、此頃樣子の變つてゐる安壽の顔にさへ、めつたに見えぬ微笑の影が浮ぶ。

三日立つと、又家の中の爲事が始まつた。安壽は絲を紡ぐ。厨子王は藁を擣つ。もう夜になつて小萩が來ても、手傳ふに及ばぬ程、安壽は紡錘（つむ）を廻すことに慣れた。樣子は變つてゐても、こんな靜かな、同じ事を繰り返すやうな爲事をするには差支なく、又爲事が却つて一向になつた心を散らし、落着（おちつき）を與へ

るらしく見えた。姉と前のやうに話をすることの出來ぬ厨子王は、紡いでゐる姉に、小萩がゐて物を言つてくれるのが、何よりも心強く思はれた。

水が温み、草が萌える頃になつた。あすからは外の爲事が始まると云ふ日に、二郎が邸を見廻る序に、三の木戸の小屋に來た。「どうぢやな。あす爲事に出られるかな。大勢の人の中には病氣でをるものもある。奴頭の話を聞いたばかりではわからぬから、けふは小屋々々を皆見て廻つたのぢや。」

藁を擣つてゐた厨子王が返事をしようとして、まだ詞を出さぬ間に、此頃の様子にも似ず、安壽が絲を紡ぐ手を止めて、つと二郎の前に進み出た。「それに就いてお願がございます。わたくしは弟と同じ所で爲事がいたしたうございます。どうか一しよに山へ遣つて下さるやうに、お取計らひなすつて下さいまし。」蒼ざめた顔に紅が差して、目が赫いてゐる。

厨子王は姉の様子が二度目に變つたらしく見えるのに驚き、又自分になんの相談もせずにゐて、突然柴苅に往きたいと云ふのをも訝かしがつて、只目を瞬つて姉をまもつてゐる。

二郎は物を言はずに、安壽の様子をぢつと見てゐる。安壽は「外にない、只一つのお願でございます、どうぞ山へお遣なすつて」と、繰り返して言つてゐる。

暫くして二郎は口を開いた。「此邸では奴婢のなにがしになんの爲事をさせると云ふことは、重い事にしてあつて、父がみづから極める。併し、垣衣、お前の願はよく〳〵思ひ込んでの事と見える。わしが受け合つて取りなして、きつと山へ往かれるやうにして遣る。安心してゐるが好い。まあ、二人の穉い

ものが無事に冬を過して好かった。」かう云つて小屋を出た。

厨子王は杵を措いて姉の側に寄つた。「姉えさん。どうしたのです。それはあなたが一しよに山へ來て下さるのは、わたしも嬉しいが、なぜ出し拔に頼んだのです。なぜわたしに相談しません。」

姉の顔は喜に赫いてゐる。「ほんにさうお思のは尤だが、わたしだつてあの人の顔を見るまで、頼まうとは思つてゐなかつたの。ふいと思ひ附いたのだもの。」

「さうですか。變ですなあ。」厨子王は珍らしい物を見るやうに姉の顔を眺めてゐる。

奴頭が籠と鎌とを持つて這入つて來た。「垣衣さん。お前に汐汲をよさせて、柴を刈りに遣るのださうで、わしは道具を持つて來た。代りに桶と杓を貰つて往かう。」

「これはどうもお手數でございました。」安壽は身輕に立つて、桶と杓とを出して返した。

奴頭はそれを受け取つたが、まだ歸りさうにはしない。顔には一種の苦笑のやうな表情が現れてゐる。此男は山椒大夫一家のものゝ言附けを、神の託宣を聽くやうに聽く。そこで隨分情ない、苛酷な事をもためらはずにする。併し生得、人の悶え苦んだり、泣き叫んだりするのを見たがりはしない。物事が穩かに運んで、そんな事を見ずに濟めば、其方が勝手である。今の苦笑のやうな表情は人に難儀を掛けずには濟まぬとあきらめて、何か言つたり、したりする時に、此男の顔に現れるのである。

奴頭は安壽に向いて云つた。「さて今一つ用事があるて。實はお前さんを柴刈に遣る事は、二郎樣が大夫樣に申し上げて拵へなさつたのぢや。すると其座に三郎樣がをられて、そんなら垣衣を大童にして山へ遣れと仰つた。大夫樣は、好い思附ぢやとお笑なされた。そこでわしはお前さんの髮を貰うて往かね

ばならぬ。」

傍で聞いてゐる厨子王は、此詞を胸を刺されるやうな思をして聞いた。そして目に涙を浮べて姉を見た。

意外にも安壽の顔からは喜の色が消えなかつた。「ほんにさうぢや。柴苅に往くからは、わたしも男ぢや。どうぞ此鎌で切つて下さいまし。」安壽は奴頭の前に項を伸ばした。

光澤のある、長い安壽の髪が、鋭い鎌の一搔にさつくり切れた。

あくる朝、二人の子供は背に籠を負ひ、腰に鎌を插して、手を引き合つて木戸を出た。山椒大夫の所に來てから、二人一しよに歩くのはこれが始てである。

厨子王は姉の心を忖り兼ねて、寂しいやうな、悲しいやうな思に胸が一ぱいになつてゐる。きのふも奴頭の歸つた跡で、いろ〳〵に詞を設けて尋ねたが、姉はひとりで何事をか考へてゐるらしく、それをあからさまには打ち明けずにしまつた。

山の麓に來た時、厨子王はこらへ兼ねて云つた。「姉えさん。わたしはかうして久し振で一しよに歩くのだから、嬉しがらなくてはならないのですが、どうも悲しくてなりません。わたしはかうして手を引いてゐながら、あなたの方へ向いて、その禿になつたお頭を見ることが出來ません。姉えさん。あなたはわたしに隱して、何か考へてゐますね。なぜそれをわたしに言つて聞かせてくれないのです。」

安壽はけさも毫光のさすやうな喜を額に湛へて、大きい目を赫かしてゐる。併し弟の詞には答へない。

只引き合つてゐる手に力を入れただけてある。

山に登らうとする所に沼がある。汀には去年見た時のやうに、枯葦が縦横に亂れてゐるが、道端の草には黄ばんだ葉の間に、もう青い芽の出たのがある。沼の畔から右に折れて登ると、そこに岩の隙間から清水の湧く所がある。そこを通り過ぎて、岩壁を右に見つゝ、うねつた道を登つて行くのてある。

丁度岩の面に朝日が一面に差してゐる。安壽は疊なり合つた岩の、風化した間に根を卸して、小さい菫の咲いてゐるのを見附けた。そしてそれを指さして厨子王に見せて云つた「御覧。もう春になるのね。」

厨子王は默つて頷いた。姉は胸に祕密を蓄へ、弟は憂ばかりを抱いてゐるので、兎角受應が出來ずに、話は水が砂に沁み込むやうにとぎれてしまふ。

去年柴を苅つた木立の邊に來たので、厨子王は足を駐めた。「ねえさん。こゝらて苅るのてす。」

「まあ、もつと高い所へ登つて見ませうね。」安壽は先に立つてずん〳〵登つて行く。厨子王は訝りながら附いて行く。暫くして雜木林よりは餘程高い、外山の頂とも云ふべき所に來た。

安壽はそこに立つて、南の方をぢつと見てゐる。目は、石浦を經て由良の港に注ぐ大雲川の上流を辿つて、一里ばかり隔つた川向に、こんもりと茂つた木立の中から、塔の尖の見える中山に止まつた。そして「厨子王や」と弟を呼び掛けた。「わたしが久しい前から考事をしてゐて、お前ともいつもの様に話をしないのを、變だと思つてゐたてせうね。もうけふは柴なんぞは苅らなくても好いから、わたしの言ふ事を好くお聞。小萩は伊勢から賣られて來たので、故郷から此土地までの道を、わたしに話して聞かせたがね、あの中山を越して往けば、都がもう近いのだよ。筑紫へ往くのはむづかしいし、引き返して

佐渡へ渡るのも、たやすい事ではないけれど、都へはきつと往かれます。お母あ様と御一しよに岩代を出てから、わたし共は恐ろしい人にばかり出逢つたが、人の運が開けるものなら、善い人に出逢はぬにも限りません。お前はこれから思ひ切つて、此土地を逃げ延びて、どうぞ都へ登つておくれ。神佛のお導で、善い人にさへ出逢つたら、筑紫へお下りになつたお父う様のお身の上も知れよう。佐渡へお母あ様のお迎に往くことも出來よう。籠や鎌は棄てて置いて、樏子だけ持つて往くのだよ。」

厨子王は默つて聞いてゐたが、涙が頬を傳つて流れて來た。「そして、姉えさん、あなたはどうしようと云ふのです。」

「わたしの事は構はないで、お前一人でする事を、わたしと一しよにする積でしておくれ。お父う様にもお目に掛かり、お母あ様をも島からお連申した上で、わたしをたすけに來ておくれ。」

「でもわたしがゐなくなつたら、あなたをひどい目に逢はせませう。」厨子王が心には烙印をせられた、恐ろしい夢が浮ぶ。

「それは意地めるかも知れないがね、わたしは我慢して見せます。金で買つた婢を、あの人達は殺しはしません。多分お前がゐなくなつたら、わたしを二人前働かせようとするでせう。お前の教へてくれた木立の所で、わたしは柴を澤山苅ります。六荷までは苅れないでも、四荷でも五荷でも苅りませう。さあ、あそこまで降りて行つて、籠や鎌をあそこに置いて、お前を麓へ送つて上げよう。」から云つて安壽は先に立つて降りて行く。

厨子王はなんとも思ひ定め兼ねて、ぼんやりして附いて降りる。姉は今年十五になり、弟は十三にな

つてゐるが、女は早くおとなびて、その上物に憑かれたやうに、聰く賢しくなつてゐるので、厨子王は姉の詞に背くことが出來ぬのである。

木立の所まで降りて、二人は籠と鎌とを落葉の上に置いた。姉は守本尊を取り出して、それを弟の手に渡した。「これは大事なお守だが、こん度逢ふまでお前に預けます。此地藏樣をわたしだと思つて、護刀と一しよにして、大事に持つてゐておくれ。」

「でも姉えさんにお守がなくては。」

「いゝえ。わたしよりはあぶない目に逢ふお前にお守を預けます。晩にお前が歸らないと、きつと討手が掛かります。お前が幾ら急いでも、あたり前に逃げて行つては、追ひ附かれるに極まつてゐます。さつき見た川の上手を和江と云ふ所まで往つて、首尾好く人に見附けられずに、向河岸へ越してしまへば、中山までもう近い。そこへ往つたら、あの塔の見えてゐたお寺に這入つて隱しておもらひ。暫くあそこに隱れてゐて、討手が歸つて來た跡で、寺を出て逃げてお出。」

「でもお寺の坊さんが隱して置いてくれるでせうか。」

「さあ、それが運驗しだよ。開ける運なら坊さんがお前を隱してくれませう。」

「さうですね。姉えさんのけふ仰やる事は、まるで神樣か佛樣が仰やるやうです。わたしは考を極めました。なんでも姉えさんの仰やる通にします。」

「おう、好く聽いておくれだ。坊さんは善い人で、きつとお前を隱してくれます。」

「さうです。わたしにもさうらしく思はれて來ました。逃げて都へも往かれます。お父う樣やお母あ樣

にも逢はれます。姉えさんのお迎にも來られます。」廚子王の目が姉と同じ樣に赫いて來た。

「さあ、麓まで一しよに行くから、早くお出。」

二人は急いで山を降りた。足の運も前とは違つて、姉の熱した心持が、暗示のやうに弟に移つて行つたかと思はれる。

泉の湧く所へ來た。姉は樏子に添へてあゝ木の椀を出して、淸水を汲んだ。「これがお前の門出を祝ふお酒だよ。」から云つて一口飮んで弟に差した。

弟は椀を飮み干した。「そんなら姉えさん、御機嫌好う。きつと人に見附からずに、中山まで參ります。」

廚子王は十步ばかり殘つてゐた坂道を、一走りに驅け降りて、沼に沿うて街道に出た。そして大雲川の岸を上手へ向かつて急ぐのである。

安壽は泉の畔に立つて、並木の松に隱れては又現れる後影を小さくなるまで見送つた。そして日は漸く午に近づくのに、山に登らうともしない。幸にけふは此方角の山で木を樵る人がないと見えて、坂道に立つて時を過す安壽を見咎めるものもなかつた。

後に同胞を搜しに出た、山椒大夫一家の討手が、此坂の下の沼の端で、小さい藁履を一足拾つた。それが安壽の履であつた。

中山の國分寺の三門に、松明の火影が亂れて、大勢の人が籠み入つて來る。先に立つたのは、白柄の薙刀を手挾んだ、山椒大夫の息子三郎である。

三郎は堂の前に立つて大聲に云つた。「これへ參つたのは、石浦の山椒大夫が族のものぢや。大夫が使ふ奴の一人が、此山に逃げ込んだのを、慥に認めたものがある。隱れ場は寺内より外にはない。すぐにこゝへ出して貰はう。」附いて來た大勢が、「さあ、出して貰はう、出して貰はう」と叫んだ。

本堂の前から門の外まで、廣い石疊が續いてゐる。其石の上には、今手に〳〵松明を持つた、三郎が手のものが押し合つてゐる。又石疊の兩側には、境内に住んでゐる限の僧俗が、殆ど一人も殘らず簇つてゐる。これは討手の群が門外で騷いだ時、内陣からも、庫裡からも、「何事が起つたかと、怪んで出て來たのである。

初め討手が門外から門を開けいと叫んだ時、開けて入れたら、亂暴をせられはすまいかと心配して、開けまいとした僧侶が多かつた。それを住持曇猛律師が開けさせた。併し今三郎が大聲で、逃げた奴を出せと云ふのに、本堂は戸を閉ぢた儘、暫くの間ひつそりとしてゐる。

三郎は足踏をして、同じ事を二三度繰り返した。手のものゝ中から「和尚さん、どうしたのだ」と呼ぶものがある。それに短い笑聲が交る。

やうやうの事で本堂の戸が靜かに開いた。曇猛律師が自分で開けたのである。律師は褊衫一つ身に纏つて、なんの威儀をも繕はず、常燈明の薄明を背にして本堂の階の上に立つた。丈の高い巖畳な體と、眉のまだ黒い廉張つた顏とが、搖めく火に照らし出された。律師はまだ五十歲を越したばかりである。

律師は徐かに口を開いた。騷がしい討手のものも、律師の姿を見ただけで默つたので、聲は隅々まで聞えた。「逃げた下人を搜しに來られたのぢやな。當山では住持のわしに言はずに人は留めぬ。わしが知

らぬから、そのものは當山にゐぬ。それはそれとして、夜陰に劒戟を執つて、多人數押し寄せて參られ、三門を開けと云はれた。さては國に大亂でも起つたか、公の叛逆人でも出來たかと思うて、三門を開けさせた。それになんぢや。御身が家の下人の詮議か。當山は勅願の寺院で、三門には勅額を懸け、七重の塔には宸翰金字の經文が藏めてある。こゝで狼藉を働かれると、國守は檢校の責を問はれるのぢや。又總本山東大寺に訴へたら、都からどのやうな御沙汰があらうも知れぬ。そこを好う思うて見て、早う引き取られたが好からう。惡い事は言はぬ。お身達のためぢや。」かう云つて律師は徐かに戸を締めた。

三郎は本堂の戸を睨んで齒咬をした。併し戸を打ち破つて踏み込むだけの勇氣もなかつた。手のもの共は只風に木葉のざわつくやうに囁きかはしてゐる。

此時大聲で叫ぶものがあつた。「その逃げたと云ふのは十二三の小わつぱぢやあらう。それならわしが知つてをる。」

三郎は驚いて聲の主を見た。父の山椒大夫に見まがふやうな親爺で、此寺の鐘樓守である。親爺は詞を續いで云つた。「そのわつぱはな、わしが午頃鐘樓から見てをると、築泥の外を通つて南へ急いだ。かよわい代には身が輕い。もう大分の道を行つたぢやろ。」

「それぢや。半日に童の行く道は知れたものぢや。續け」と云つて三郎は取つて返した。

松明の行列が寺の門を出て、築泥の外を南へ行くのを、鐘樓守は鐘樓から見て、大聲で笑つた。近い木立の中で、やう／＼落ち着いて寢ようとした鴉が二三羽、又驚いて飛び立つた。

あくる日に國分寺からは諸方へ人が出た。石浦に往つたものは、安壽の入水の事を聞いて來た。南の方へ往つたものは、三郎の率ゐた討手が田邊まで往つて引き返した事を聞いて來た。

中二日置いて、曇猛律師が田邊の方へ向いて寺を出た。盥ほどある鐵の受糧器を持つて、腕の太さの錫杖を衝いてゐる。跡からは頭を剃りこくつて三衣を着た厨子王が附いて行く。

二人は眞晝に街道を歩いて、夜は所々の寺に泊つた。山城の朱雀野に來て、律師は權現堂て休んで、厨子王に別れた。「守本尊を大切にして往け、父母の消息はきつと知れる」と言ひ聞かせて、律師は踵を旋した。亡くなつた姉と同じ事を言ふ坊様だと、厨子王は思つた。

都に上つた厨子王は、僧形になつてゐるので、東山の淸水寺に泊つた。

籠堂に寢て、あくる朝目が醒めると、直衣に烏帽子を着て指貫を穿いた老人が、枕元に立つてゐて云つた。「お前は誰の子ぢや。何か大切な物を持つてゐるなら、どうぞ己に見せてくれい。己は娘の病氣の平癒を祈るために、ゆうべこゝに參籠した。すると夢にお告があつた。左の格子に寢てゐる童が好い守本尊を持つてゐる。それを借りて拜ませいと云ふ事ぢや。けさ左の格子に來て見れば、お前がゐる。どうぞ己に身の上を明かして、守本尊を貸してくれい。己は關白師實ぢや。」

厨子王は云つた。「わたくしは陸奥掾正氏と云ふものゝ子でございます。父は十二年前に筑紫の安樂寺へ往つた切り、歸らぬさうでございます。母は其年に生れたわたくしと、三つになる姉とを連れて、岩代の信夫郡に住むことになりました。そのうちわたくしが大ぶ大きくなつたので、姉とわたくしとを連れて、父を尋ねに旅立ちました。越後まで出ますと、恐ろしい人買に取られて、母は佐渡へ、姉とわた

くしとは丹後の由良へ賣られました。姉は由良で亡くなりました。わたくしの持つてゐる守本尊は、此地藏様でございます。」から云つて守本尊を出して見せた。

師實は佛像を手に取つて、先づ額に當てるやうにして禮をした。それから面背(めんはい)を打ち返し打ち返し、丁寧に見て云つた。「これは兼ねて聞き及んだ、尊い放光王地藏菩薩の金像ぢや。百濟國から渡つたのを、高見王が持佛にしてお出なされた。これを持ち傳へてをるからは、お前の家柄に紛れはない。仙洞がまだ御位にをらせられた永保の初に、國守の違格(ゐきやく)に連座して、筑紫へ左遷せられた平正氏が嫡子に相違あるまい。若し還俗の望があるなら、追つては受領(ずりやう)の御沙汰もあらう。先づ當分は己の家の客にする。己と一しよに館へ來い。」

關白師實の娘と云つたのは、仙洞に傅いてゐる養女で、實は妻の姪である。此后(きさき)は久しい間病氣てゐられたのに、厨子王の守本尊を借りて拜むと、すぐに拭ふやうに本復せられた。

師實は厨子王に還俗させて、自分で冠を加へた。同時に正氏が謫所へ、赦免狀を持たせて、安否を問ひに使を遣つた。併し此使が往つた時、正氏はもう死んでゐた。元服して正道と名告つてゐる厨子王は、身の窶れる程歎いた。

其年の秋の除目(ぢもく)に、正道は丹後の國守にせられた。これは遙授(えうじゆ)の官で、任國には自分で往かずに、掾(ぜう)を置いて治めさせるのである。併し國守は最初の政として、丹後一國で人の賣買を禁じた。そこで山椒大夫も悉く奴婢を解放して、給料を拂ふことにした。大夫が家では一時それを大きい損失のやうに思つ

たが、此時から農作も工匠の業も前に増して盛になつて、一族はいよ〳〵富み榮えた。國守の恩人曇猛律師は僧都にせられ、國守の姉をいたはつた小萩は故郷へ還された。安壽が亡き迹は懇に弔はれ、又入水した沼の畔には尼寺が立つことになつた。

正道は任國のためにこれだけの事をして置いて、特に假寧を申し請うて、微行して佐渡へ渡つた。

佐渡の國府は雜太と云ふ所にある。正道はそこへ往つて、役人の手で國中を調べて貰つたが、母の行方は容易に知れなかつた。

或日正道は思案に暮れながら、一人旅館を出て市中を歩いた。そのうちいつか人家の立ち並んだ所を離れて、畑中の道に掛かつた。空は好く晴れて日があか〳〵と照つてゐる。正道は心の中に、「どうしてお母あ樣の行方が知れないのだらう、若し役人なんぞに任せて調べさせて、自分が捜し歩かぬのを、神佛が憐んで逢はせて下さらないのではあるまいか」などと思ひながら歩いてゐる。ふと見れば、大ぶ大きい百姓家がある。家の南側の疎な生垣の内が、土を敲き固めた廣場になつてゐて、其上に一面に蓆が敷いてある。蓆には刈り取つた粟の穗が干してある。その眞ん中に、襤褸を着た女がすわつて、手に長い竿を持つて、雀の來て啄むのを逐つてゐる。女は何やら歌のやうな調子でつぶやく。

正道はなぜか知らず、此女に心が牽かれて、立ち止まつて覗いた。女の亂れた髮は塵に塗れてゐる。顏を見れば盲である。正道はひどく哀れに思つた。そのうち女のつぶやいてゐる詞が、次第に耳に慣れて聞き分けられて來た。それと同時に正道は瘧病のやうに身内が震つて、目には涙が湧いて來た。女はかう云ふ詞を繰り返してつぶやいてゐたのである。

安壽戀しや、ほうやれほ。
厨子王戀しや、ほうやれほ。
鳥も生あるものなれば、
疾う〳〵逃げよ、逐はずとも。

正道はうつとりとなつて、此詞に聞き惚れた。そのうち臓腑が煮え返るやうになつて、獣めいた叫が口から出ようとするのを、歯を食ひしばつてこらへた。忽ち正道は縛られた縄が解けたやうに垣の内へ駆け込んだ。そして足には粟の穂を踏み散らしつつ、女の前に俯伏した。右の手には守本尊を捧げ持つて、俯伏した時に、それを額に押し當ててゐた。

女は雀でない、大きいものが粟をあらしに來たのを知つた。そしていつもの詞を唱へ罷めて、見えぬ目でぢつと前を見た。其時干した貝が水にほとびるやうに、兩方の目に潤ひが出た。女は目が開いた。

「厨子王」と云ふ叫が女の口から出た。二人はぴつたり抱き合つた。(終)



お艶殺し

谷崎潤一郎

一

宵の五つの刻限に横町の肴屋の春五郎が醉拂つて跳び込んで來て、丼の底をちやらちやらさせながら、此の間銀座の役人に貰つたばかりだと云ふ、出來たてのほやほやの二朱銀を掴み出して、三月あまりも入れ質して置いた絆纒やら羽織やら春着の衣裳を出して行つた後では、いつも忙しい駿河屋の店も、天氣の惡いせゐか一人として暖簾をくゞる客は見えない。帳場格子に頬杖をついて頻りに誰やらの黃表紙を讀み耽つて居た新助は、消えかゝつたしかみ火鉢の灰を掻きながら「ほんとに寒い晩だなあ。」と獨り語のやうに云つたが、やがて片手を二三尺伸ばして、餘念もなく居睡りをして居る丁稚の耳を引張つた。

「庄どん、ちよいと起きねえか。霙の降るのに御苦勞だが村松町の翁庵まで一とつ走り行つて來てくれ。天ぷらそばを二つに、それからお前にも好きなもの

を奢つてやるぜ。」

「そりや有り難い。眼がさめて見たら己も大分腹が減つて寒氣がして居る。旦那のお歸りにならないうちに、一番お前の御馳走にならうか。」

庄太はかう云つてかひがひしく臀を端折り、下駄箱の上に掛けてあつた饅頭笠を外すや否や、降りしきる雪の中を勢よく戸外へ驅け出した。

その間に新助は帳場を片附け、土藏の戸前に錠を卸して店の大戸を締め切つた。夕方、四谷の親戚に不幸があつて主人夫婦が出て行く際に、「今夜は歸りが遲いだらう。事に依つたら明日の朝になるかも知れないから、よく戸締りに氣を附けてくれ。」と云ひ殘された言葉を想ひ出して、彼は提灯をさげたまゝ、勝手口から裏木戸を檢べ、女中部屋の梯子段を上つて、物干しへ通ふ雨戸の棧を一と通り嚴重に見廻つた。それから再び梯子段を下りて來た時、暗闇に唐草の蒲團を引き被つて好い心持ちさうに眠つて居る二人の女中の顔の上へ提灯の明りがぼんやりと落ちた。「お民どんもう寢たのか。」と、少し聲高に呼んで見たが返辭はない。彼は一段と足音を鎭めて、つめたい廊下の板の間を踏みしめながら、中庭に沿うた縁側の戸を檢べに廻つた。

縁側につゞく八疊の座敷には行燈の火影がうす赤く障子へ映つて居る。平生は主人夫婦の居間に充てられて、佛壇の前に長火鉢だの茶簞笥だのが据えてあるのだが、今夜は娘のお艶が代りに其處へ寢込んだらしい。

「あゝあの部屋の中は嘸かし暖かいだらう。」

さう考へると新助は、急に奉公人の辛さ悲しさが身に泌み〴〵と應へるやうな氣持ちがして、赤い火影を美ましげに眺めやつた。

彼は既に一年も前から娘のお艶に惚れて居るのである。お艶の方でもとうから彼を憎からず思つて居る。たとへどれ程お互ひに戀ひ憧れても、主人の一人娘では此の新助の手が届かない。己も貧乏人の悴に生れず、立派な大家の若旦那であつたなら、あの美しいお艶さんと添ひ遂げる事が出來ようものを。……新助は腹の中でこんな愚痴をこぼした。

もう四ツ半時を過ぎたであらう。寒さは家の中までもひしひしと押し寄せて、廊下に彳んだ新助は、戸の隙間から洩れて來る風に胴顫ひをしながら、懷ろで暖めた左の手に提灯を持ち換へ、痛い程凍え切つた右の指先へ頻りと息を吹き掛ける。兩脚の股がまるで他人の物のやうに冷めたく觸れ合つて居る。しかし、彼のふるへて居るのは強ち寒いばかりでもないらしかつた。

「新どんかい。」

と、お艶はその時眼を覺ましたのか、それとも前から起きて居たのか、彼が座敷の横を通り過ぎようとする瞬間に聲をかけた。さうして、圓行燈の蔽ひを開いて、廊下の方へ明りを向けたらしく、障子が前よりも赤々と照つた。

「はい私でございます。旦那のお歸りがお遲うございますから、ちよいと戸締りを見に參りました。」

「それぢやお前もまう寢るの。」

「なあに私はお歸りになるまで夜つぴて起きて居りますよ。」

を奢つてやるぜ。」

「そりや有り難い。眼がさめて見たら己も大分腹が減つて寒氣がして居る。旦那のお歸りにならないうちに、一番お前の御馳走にならうか。」

庄太はかう云つてかひ〴〵しく臀を端折り、下駄箱の上に掛けてあつた饅頭笠を外すや否や、降りしきる霙の中を勢よく戶外へ駈け出した。

その間に新助は帳場を片附け、土藏の戶前に錠を卸して店の大戶を締め切つた。夕方、四谷の親戚に不幸があつて主人夫婦が出て行く際に、「今夜は歸りが遲いだらう。事に依つたら明日の朝になるかも知れないから、よく戶締りに氣を附けてくれ。」と云ひ殘された言葉を想ひ出して、彼は提灯をさげたまゝ、勝手口から裏木戶を檢べ、女中部屋の梯子段を上つて、物干しへ通ふ雨戶の棧を一と通り嚴重に見廻つた。それから再び梯子段を下りて來た時、暗闇に煙草の蒲團を引き被つて好い心持ちさうに眠つて居る二人の女中の顏の上へ提灯の明りがぼんやりと落ちた。「お民どんもう寢たのか。」と、少し聲高に呼んで見たが返辭はない。彼は一段と足音を鎭めて、つめたい廊下の板の間を踏みしめながら、中庭に沿うた緣側の戶を檢べに廻つた。

緣側につゞく八疊の座敷には行燈の火影がうす赤く障子へ映つて居る。平生は主人夫婦の居間に充てられて、佛壇の前に長火鉢だの茶簞笥だのが据ゑてあるのだが、今夜は娘のお艶が代りに其處へ寢込んだらしい。

「あゝあの部屋の中は嘸かし暖かいだらう。」

さう考へると新助は、急に奉公人の辛さ悲しさが身に泌み〴〵と應へるやうな氣持ちがして、赤い火影を羨ましげに眺めやつた。

彼は既に一年も前から娘のお艶に惚れて居るのである。お艶の方でもとうから彼を憎からず思つて居る。たとへどれ程お互ひに戀ひ憧れても、主人の一人娘では此の新助の手が屆かない。己も貧乏人の忰に生れず、立派な大家の若旦那であつたなら、あの美しいお艶さんと添ひ遂げる事が出來ようものを。……新助は腹の中でこんな愚痴をこぼした。

もう四ツ半時を過ぎたであらう。寒さは家の中までもひしひしと押し寄せて、廊下に佇んだ新助は、戸の隙間から洩れて來る風に胴顫ひをしながら、懐ろで暖めた左の手に提灯を持ち換へ、痛い程凍え切つた右の指先へ頻りと息を吹き掛ける。兩脚の股がまるで他人の物のやうに冷めたく觸れ合つて居る。しかし、彼のふるへて居るのは強ち寒いばかりでもないらしかつた。

「新どんかい。」

と、お艶はその時眼を覺ましたのか、それとも前から起きて居たのか、彼が座敷の横を通り過ぎようとする瞬間に聲をかけた。さうして、圓行燈の蔽ひを開いて、廊下の方へ明りを向けたらしく、障子が前よりも赤々と照つた。

「はい私でございます。旦那のお歸りがお遲うございますから、ちよいと戸締りを見に參りました。」

「それぢやお前もう寝るの。」

「なあに私はお歸りになるまで夜つぴて起きて居りますよ。」

たが、雪はいまだに降つて居るのか、寢鎭まつた往來はひつそりとして何の物音も聞えない。新助は台所の緣の下から佐倉炭の塊を二つ三つ手摑みにして來て、火鉢の中へ生けて置いて、さて心細さうにたつた獨りで店の片隅へ蹲踞つて見た。かうやつて居るうちも、奥の間には娘のお艶がまんぢりともせず自分を待つて居るんだらう。など丶思ふと、彼は自分の運命が——恐らくは自分の一生を支配す可き運命が刻々に迫りつ丶ある事を感じた。早く旦那が歸つて來て下さればい丶。さうしたらあの恐ろしい誘惑も自然に消滅する譯だ。など丶云ふ風にも考へて見る。

奥の障子が微かに開いて、緣側を歩いて來る盜むやうな人の足音が聞えた時、新助は彈かれた如くはツと立ち上つて再び娘の寢間の方へ忍んで行つた。若しかして、短氣なお艶に大聲でも立てられたらば大變だと氣付いたのである。二人は丁度廊下の曲り角の、便所の前で行きあつた。

「新どん支度はい丶のかい。お金はあたしが持つて居るから、當座の事なら困りはしない。此の財布ごとみんなお前に預けて置から。」

お艶は両腕を懷ろに入れて黒繻子の襟のか丶つた胸のあたりをふくらがせながら、腹のところからすつぼりと鬱金の財布を引き拔いて、それを新助の掌へ押し付けるやうにした。中はたしかに十兩ぐらゐの重味があつた。

「あなたを伴れて逃げ出すばかりか、お金までも盜んだとなつちや、勿體なくつて罰が中ります。」からは云つたもの丶、男はやつぱり女のするま丶に拒まうともしなかつた。

「だが生憎と戸外は雪らしうございます。……私は兎に角、此のお天氣に深川まで逃げて行つたら、あ

なたは中途で凍え死んで了ひますぜ。ねえお艶ちやん、今夜でなくつても亦いゝ折があらうぢやございませんか。」

深川と云ふのは、高橋の近所の或る船宿の事であつた。そこの船頭の淸次と云ふのが十年も前から此の駿河屋に出入をして居て、お臺場の汐干狩りや兩國の川開きには毎年船を出すところから、お艶にも新助にも心易くなつて居た。盆暮れの見舞ひの外にも、淸次は時々遊びに來て、台所で酒を飲みながらいつもお艶の器量を褒めた。

「なんしろ此方のお艶ちやんと來た日にや全く橘町の小町娘さ。誰が何てッたつて江戸中にこんな器量は又と二人はありやあしねえ。から申しちや勿體ねえ話だが、若しもお艶ちやんが藝者だつたら、己だつてまだ五十には間があるし、ほんとに唯ぢや置かねえんだがなあ。」

と、剽輕な句調で口癖のやうに云ひながら、どうかするとお艶の袖をしつかりとつかんで、

「もしお艶ちやん、私が一生のお願だからちよいとまあ其處に据わつて、此の淸次に一杯お酌をしておくんなせえ。なあに長くとは申しません。ほんの一杯、たつた一杯でようがすから……」

こんな事を云つては、家族の者を笑はせた。

柳橋、深川、山谷、吉原あたりの色里に送り迎への猪牙船を操つて、茶屋酒の空氣に浸つて居た譯知りの淸次の眼には、疾うから娘と新助との人知れぬ戀仲が讀めて居たらしかつたが、平生のお喋舌りにも似ず、感心に口を噤んで長い間噯にも出さなかつた。それを始めて淸次が素ッ葉拔いたのは、たしか先月の月末の頃、柳橋の歸りにひよつこりと尋ねて來た折である。その日お艶は兩親に芝居見物

誘はれて居たが、留守番の新助と話がしたさに假病をつかつて家に殘つた。折角行くときまつたものを、お前一人の爲めに置いて行くのも可哀さうだと云つて、兩親は二人の女中を供に伴れて朝早くから二丁街へ出掛けて行つた。店には庄太が居るばかりで、大概新助はお艶の枕許へ看病のために侍つて居た。そこへ這入つて來た清次は、一杯機嫌の赭ら顏をてら〳〵光らせて、「へん」と云ひながら妙な笑ひ方をして、いきなり新助の肩を叩いた。

「新どん大さうお安くないね。誰も知るめえと思ひの外、お前さん方の間柄はとうから私やあ睨んで居たんだ。世間の奴等あ明き盲だが、此の清次をごまかさうたッてさうは行かねえよ。何も旦那に云付けると云ふんぢやねえんだから、正直に兜を脫いでおしまひなせえ。さうすれば又いろ〳〵と力になつて上げやせうぜ。なあに小町娘のお艶ちやんと役者のやうな新どんとが一軒の内に起き伏ししてりやあ、このくらゐのこたあ當り前さ。全體私やあ妙な性分でね、お前さん方のやうな若え同士が苦勞して居る樣子を見ると、是非共一と肌脫いで、どんなに骨を折つても、必ず纏めて見たいやうな氣がするのさ。」

不意を打たれて二人は輕い戰慄を覺えながら暫く顏を見合せて居たが、清次は獨りで呑み込んで何故か頻りと圖に乘つて居た。

「色の一つもしようと云ふもんがさう憶病ぢや話にならねえ。いゝから私に打ちまけてお了ひなせえ。こんな事あお前さん方の小ひさな胸に疊んで置くより、私が一番旦那に打つかつて晴れて夫婦になれるやうにお頼み申すのが何より捷徑だ。お世辭ぢやねえが新どんなら男は好いし、身情は正しいし、智慧才覺の備はつて居る立派な男だ。旦那だつてよもや否とは仰つしやるめえが。」

「それが出來るくらゐなら、清次さんを頼まないでも二人で共々旦那にお願ひ申すんです。」

新助は思はず釣り込まれて、詳しい事情を逐一彼に説明した。お艶は此の家の一人娘、自分も兩親の一人息子、さうして見ればどんなに思案したどころで、二人は到底添ひ遂げられる筈がない。

「添ひ遂げられないくらゐなら、あたしは一層死んで了ふ。」

男の述懷を聽いて居たお艶は、その時溜らなくなつてから云つたまゝ泣き倒れた。

「ようがす。ようがす。それですつかり解りました。惡いこたあ云はねえから一つ狂言を書く積りで私のところへ二人で逃げてお出でなせえ。あとは私が引き受けて、双方の親御をうまく説きつけて、きつと纏めて御覽に入れる。」

實はその晩もお互ひの間に駈け落ちの相談が持ち上がつて居たところ故、清次の言葉に勵まされてお艶は直ぐとその氣になつたが、さすがに新助は今日の今迄まだ孰方とも決心しかねて居たのである。

「今更になつてお前はいやだとお云ひなのかい。」

お艶はかう云つて、腕拱いて萎垂れて居る男の手頸を兩手に捕へて、竹の枝でも撓はせるやうに全身の重みを寄せかけながら、「承知しなければ死ぬ死ぬ。」とおどしたり揺す振つたりした。

「仕方がない。もうかうなればやぶれかぶれ、あなたの仰つしやる通りになります。」

新助は急いで店の押入れの奥の方に突込んであつた自分の葛籠の蓋を開いて、中から唐棧の綿入を引き出してそれに着換へた。此ればかりは親父の古着を仕立て直した衣類であるが、その他はみんな奉公してから拵へて貰つた品物故、勝手に持ち出しては申譯がないと考へたのである。それから彼は勝手口

の上り框に置いてある下駄箱の中から黒塗りのお艶の足駄をそつと摘み出して、可愛いゝものでも抱くやうにシッカリかゝへたまゝ再び縁側へ戻つて來た。

此の寒空にこんな姿で、まあ駈け落ちが出來る知らん、と呆れるまでにお艶は結び立ての島田も露はに燃え立つやうな辨慶縞の黄八丈へ緞子の丸帯を胸高に締めて、素足のまゝで彳んで居る。平生から藝者の眞似が大好きな彼の女は、此の際になつても足袋を穿くことがいやだつたのである。

「さあ、此處から逃げませう。」と、新助は緣側の戸袋に近い雨戸を二三尺繰り明けて自分が先へ中庭へ飛び降りたが、靜かな雪は既に二三寸も降り積つて、垣根も植え込みも便所の羽目板も布を敷いたやうに一面に白くなつて居た。彼は手さぐりで鳴居に腰掛けて居るお艶の足の踵をおさへて、雪明りに透かしながら氷の如く冷え切つた柔かな足の裏を例の足駄の臺の上へ載せてやつた。一と足毎にさくりさくりと蹈んで行く雪の音にまで胸をとどろかせて、二人はやつと裏塀の木戸口から路次の溝板を響かぬやうに傳はつて往來へ忍び出た。

空は眞黒に曇つて居たが、大粒の雪が少し小降りになつて、思つたよりも暖かであつた。一本の蛇の目の傘の柄を女が握つて、又その上を男が握つて、橘町から濱町の方へ辿つて行つた。新助は外見の優形である割りに身の丈も高く筋骨も秀いでゝ、人並よりは膂力の勝れた若者であつた。昂奮した感情の襲ひ來るまゝに、折々彼は拳に恐ろしい力をこめて痙攣的に傘の柄を握り締めたので、半ばかぢかんだお艶の右の手はうすい掌が押し潰されて了ひさうに感ぜられた。お艶は度び〳〵痛いと叫んで、「新どん、お前どうかしたの。」と、心配らしく男の方を覗き込んだ。彼の女の細い切れの長い眦は闇にも強く

光つて見えた。

新大橋を渡つた時、眞夜中の八つ時を打つ鐘の呻りが雪を吸ひ込んで死んだやうに流れて行く滿潮の大川へ、水もどよめと咆哮する如くに響いた。それまであまり口をきかなかつたお艶は、「あの鐘の音がうれしい。まるであたしたちは芝居のやうだ。」と云つた。新助は苦い顔をして、「お艶ちやんの呑氣にも呆れたもんだ。」と云ひ返した。それきり二人は默り込んで、小名木川の河岸縁にある淸次の宿へ無事に着いた。

二

「さつぱりと話を附けて了ふのには、さう性急にも行かねえからこゝ十日ばかりお待ちなせえ。まあその間は成るたけ人目にかゝらねえやうに、内の二階でたんとふざけて居なさるがいゝ。」

淸次はかう云つて、女房にも子分にも旨を含めて痒い所へ手の届くやうに世話を燒いたが、十日立つても半月立つても、別段此れぞと云ふ吉報を齎らさなかつた。

「淸次さんも忙しい體だし、事に依つたら話の具合が面白くないので、わざと私達に隱して居るのぢやあるまいか。」

そろ〳〵新助はこんな心配を始めたけれどお艶は一向平氣なもので、

「そんなに苦勞をおしでない。どうせ駈落ちしたからには、駄目なら駄目で勝手氣儘に世帶を持つたら、結句その方が仕合はせぢやないか。あたしや生れてからこんなに嬉しい事はないんだから、もう内へな

んぞ歸りたくも何ともない。」と云つた。

お艶は此處の二階へ來てから、まるで人間が變つたやうに元氣で瓢輕で大膽になつた。

二人の二階の窓の下は直ぐ石崖になつて居て、大川に續く幅の狹い堀割には、仲町、石場、櫓下、御旅辨天その他の岡場所から、粹なお客と藝者を載せた屋根船が日に何艘となく纜を解き、どうかすれば襖一重の隣り坐敷へ上り込んで、あたり構はぬ痴話ぐるひを聞かせる事さへ珍しくない。お艶はいつしか見やう見眞似にその風俗を覺え込んで、家を出る時結つて居た可愛らしい高嶋田を、四日目からは洗ひ髮の兵庫結ひに結び直して、黄楊の横櫛をゆたかな小鬢へ伊達に挿し込み、宿の上さんが寒さ凌ぎに借してくれた派手な紬のやたら縞のどてらを男のやうに引掛けて、呑めぬ煙草を無闇と呑んだ。洲崎の藝者が女郎の言葉に感染して「わたし」の事を「わちき」と云ふのを、お艶もうつかり聞き覺えて二三度それを使つた時、新助は不機嫌さうに眉をひそめて、「一體それは何處の言葉だ。」と云つた。

「なんであなたは女郎の眞似をなさるんです。私なんぞは生れてから未だ一遍も女郎買ひをした事がない。」

と威張つた。此のお艶さへ居なかつたら、彼は全く堅儀な人間で通せたのかも知れないのである。

しかし女は男の意見にあまり頓着しなかつた。現在の境遇に對する滿足が彼の女の心を殆んど有頂天に煽り立てゝ、嬉しまぎれに朝から晩まで笑ひさゞめき、三度の食事にも鰻が欲しいの鬪鷄が喰べたいのとしたい三昧の贅をならべて、三日に一度は内中の若い者まで奢つてやつた。夜は清次が氣を利かせて必ず膳に載せて來る劒菱の熱燗の銚子を、不馴れな手つきで杯に受けながら男に負けずぐびりぐびり

と飲み干した。悪酔ひをした晩などには氣が狂つたかと怪しまれる程お艶の顏は情熱に燃え、火炎のやうに體を悶えて夜中男を眠らせなかつた。二人は自分の生命が終りに近付いたかと思はれるくらゐの歡樂の前へ、否應なしに突き付けられた。

兎角するうち師走の月もだんだん押し詰まつて十五日の八幡樣の市も過ぎたが、二人は何の音沙汰にも接しない。

「今が談判最中だ。まあもう四五日辛抱しなせえ。」と、清次は顏を合はせる毎に氣の毒さうに辯解するので、それ程せつつく譯にも行かなかつた。

「清次さん、旦那樣にはまことに濟まないが、かうなつたからは駄目なら駄目で、何處かへ新所帶を持つやうにすつかり度胸を据ゑて居るんだし、決して決して短氣な眞似はしないから、話の樣子を包まず知らせて下さらないか。さういつ迄もお前さんの御厄介になつて居た日にや、何ぼ何でも心苦しい。」

新助がかう云ふと清次はいつも鷹揚に笑つて、

「なあにそんな遠慮にや及ばねえよ。それに話が面白くねえ位なら見切りを附けて了ふんだが、もう五六遍も足を運んで散々說き附けたもんだから、此の頃ぢやあ双方の親御も大分篤心が行つたやうな鹽梅しきさ。私やあいつもさう云つてやるのさ。駈け落ちとまで覺悟したものを添はせねいのはあんまり親御が捌けねえから、「うん」と仰つしやるまで二人のお身の上は私が引き受けて大事にお圍まひ申しやすツてね。だからなんにも案じるこたありやしねえや。」

と、至極氣輕に云つて除けた。いかに問題が紛糾して居ようとも、正月早々探つた揉んだでごたごた

するのは猶更縁起が悪いから、遲くも年内には片附くであらうと見當をつけて、新助はひたすら春の來るのを待つた。

お艶が持ち出した十兩の金は日々の贅澤に使ひ減らして五兩足らずになつて居た。「五兩の金で年を越すのは心細い。」と云つて、お艶は島田にさして居た銀のびら〱簪を、出入の女髮結に賴んで密かに金に換へて貰つた。さうして十七日の簑市の晩に、三分金を紙に包んで歳暮のしるしに分けておくれと、宿の者達ちに氣前を見せた。

二十日の晩の六つ時分の事である。丁度二人が夕餉の膳に向はうとして居る折に、淸次の子分の三太と云ふのが慌しく二階へ上つて來て新助に云つた。「お前さん方に喜ばせたい事がある。今親分が柳橋の川長で新助さんの親御さんと話の最中だが、いつかの事が漸う片附きさうだから私と共々船へ乘つて、早速お前に來て貰ひてえ。尤も二人一緒ぢやあ少し工合が惡いから、可哀さうだがお艶ちやんだけ留守番をして貰ひてえと云つてるんだ。ねえお艶ちやん、日がな一日喰ひ付いて居ちやあ新助さんも溜らねえから、たまに一と晩ぐれえ突つ放しても大した罰は中りませんぜ。」

「だけど何だか案じられる。」

と、お艶は急に顏色を變へて打ち萎れた。勿論嬉しい事は嬉しいけれど、ひよッとして若しや此のまゝ新助が淺草の實父の許へ引き取られでもしやしないか。さう考へると不安心でならなかつた。かね〲首を長くして沙汰を待つては居たものゝ、いざとなれば男の方もやつぱり女と同じやうな覺束ない暗疑に襲はれた。彼は第一、我ながら空恐ろしい罪を犯して、主人に詫びも入れぬうちから、どうのめのめ

と親爺の前へ顔が出されやうかえ、それが何よりも薄氣味惡く感ぜられる。「さあ大急ぎ〳〵」と三太が頻りに催促するので、新助は重い心を强ひて引き立てゝ支度もそこ〳〵に梯子段を下りて行つた。

何と思つたかお艶は直ぐに男の後を追ひ掛けて、今しも船へ移らうとする二人の袂を控へて云つた。

「三太さん、かう申しちやあまこと(ママ)にお前を疑ぐるやうで濟まないけれど、あたしや何だか氣がさしてならないから、どうぞ一緒に連れて行つておくれ。決してお前に迷惑はかけないから。」

「あはゝゝゝ、何だと思つたら馬鹿々々しい。」と、三太は既に荷足へ飛び乘つて棧橋の纜を解きながら大口開いて笑ひ出した。「お前さんはまるでだゞッ兒のやうだな。迷惑も糞もありやあしねえが、新助さんを取つて喰はうと云やあしめえし、大丈夫だから内の親分にお任しなせえな。それに第一お前さんが附いて居ちやあ、話の運びにも都合が惡いや。」

「さう云ふ譯なら坐敷へ顏を出さないまでも、蔭へ隱れて待つて居るから是非共あたしを連れて行つておくれ。どう云ふものか此の人を獨りで出すのは、今夜に限つて氣が濟まない。」お艶はそッと帶の間から一朱金を摑み出して三太の袖口へ持つて行きながら、「ねえ三太さん、たまにはあたしの云ふ事をきいてくれてもいゝぢやないか。」と云つた。

「此の間も頂いたのに、度び度びこんな事をなすつちや其れこそ私が親分に叱られる。」三太は例になくもぢ〳〵しながら金包を押し返した。淸次の下に働いて居る若者の中でも、此の男が一番幅を利かして居るので、ふだんから隨分氣を附けてやつた積りであるのに、此方の云ひ草をさつぱり聽いてくれないのが今更お艶には恨めしかつた。

「心配して下さるのは有り難いが、一緒に伴れて來たとあつちやあ折角骨を折つてくれる清次さんの顏を潰すも同然で、私が後て申し譯がない。」新助はかう云つて女を宥めたが、其の癖自分も妙に青ざめた血色をして、宵闇の刻々に迫つて來る岸邊に立つて頻りと肩をふるはせて居た。

「そんならたとへ話の模樣でどう云ふ間違ひが起らうとも、必ずもう一遍歸つて來ておくんなさいよ。」

「うん大丈夫だ。よもやそんな事はあるめえが、……」新助は強く頷いて見せた。今夜こそは兼ねての望みがかなふのだから餘程うれしい筈であるのに、彼は何だか泣き出しさうな氣持ちになつた。一層このまゝお艶をつれて、再び何處かへ駈け落ちして了つた方が、却つて氣骨が折れないとさへ考へられた。

其の日は午前中から冬に珍しい南風が吹いて、妙にぼかぼかと生暖い陽氣であつた。お艶は朝から上氣せると云つて蟀谷へ頭痛膏を貼つて居たのが、三太を捕へて押し問答をして居るうちに口惜し涙さへ涌いて來たので、半病人のやうな鬱陶しい疲れを覺えながら、泣き腫らした眼をぢつと堪へて二階の窓に凭れつゝ船の行く手を見送つて居た。二十日の月はまだ空に上らず、新大橋の火の見櫓の後ろの方から絶えず此方へ蔽ひ被さる雲の塊が、眞黑な天の半ばを浸し盡して濃い夜の幕が下界を一様に包んで了ひ、船足の早い三太の荷足はまたゝくうちに篝り火の影を川霧の底に沒して了つた。

船が小名木川の口を離れて大江のまん中へ浮び出した頃、新助は廣漠とした暗闇のうちに、自分の吸つて居る煙管の雁首がぽつりと一點赤く光るのを心細げに眺めて居たが、

「何と云ふ嫌な晩だらう。明日の天氣はむづかしいな。」と、獨り語のやうに云ふ。

「暮のうちだけ天氣にしてえが此の鹽梅ぢや危つかしいな。風が止んだから今にも雨になるだらう。」三

太は棹を櫓に代へて、舷を舐める水の面へ嘲るやうな櫓ちんの響を流しながら、「だがお艶ちやんにやあ私も少し氣の毒だつた。大方今頃は獨りてやけ酒でも呷つて居るぜ。」と云つた。

柳橋の川長と云へば當時名代の料理屋て、新助も橘町に居た時分には旦那のお供で二三度上つた覺えはあつた。三太は長年の馴染と見えて、「今夜は三津五郎にそつくりと云ふ好い男を引つ張つて來た。」などゝ、廊下て行き合つた女中に戯れて、新助にきまりの惡い思ひをさせた。川に向つた面皮普請の粋な茶座敷へ通されると、其處には清次が好い加減醉の循つた色つやをして獨り床柱に凭れて居たが、二人の顔を見るや否や、

「惜しい事をした。親爺さんは今まで待つて居なすつたが、一と足違えで歸んなすつた。新どんにや申し譯のねえ話だが、それにしてもあんまり來ようが遲かつたなあ。」

から云つて、いつになく不服らしい面持ちをしてがツかりしたやうな溜め息をついた。しかし三太がいろ／＼に辯解して、お艶の故障が這入つた爲めに川先を挫かれた事情を語ると、彼は忽ち機嫌を直して無邪氣な聲で腹を抱へて笑ひ崩れた。新助は、差し當つて親爺の顔を見る氣苦勞と、無理往生に淺草へ拉し去られる懸念が失せて、却つて胸がせいせいした。

「どうせ來たもんだから、まあ一杯やつて行くさ。」

と、清次は新助に酒をすゝめて、親爺との會見の模樣を詳細に話して聞かせた。彼は今夕大音寺前の田川屋まで客を送つて行つた序に、清島町の家を訪ねて、親爺を此處までつれ出して來て、前々からの頼みの筋を打ちくつろいで懇々と繰り返した。親爺の云ふには、主人の娘をそゝのかした伜の不埓は

許し難いが、さればと云つて駈け落ちしたきり二人が戻つて來ないのでは、猶更駿河屋の御主人に申譯がない。萬一心中でもされた日には、自分の苦痛は兎に角として、掛け換へのない一人娘をなくされたお主の家は滅びて了ふ。そこを考へれば餘り頑固な事は云ひ張りたくないとしても、何分にも主筋の駿河屋さんを差し置いて私の口から承知したとは云へた義理でない。それ故甚だ勝手な言ひ草ではあるけれど、駿河屋さんさへ胸をさすつて了見なさるお積りなら、たとへこれきり私の家は斷絶して了はうとも、お主の家には換えられないから立派に悴を婿として差し上げて了ふ覺悟である。實を云ふと、清次さんさへ中へ立たなければ草を分けても悴を搜し出して八つ裂きにしてやりたいんだが、私の胸の中を何卒察しておくんなさいと云つて親爺は男泣きに泣いたさうである。そこで淸次は一國な老人の感情をさまざまに慰撫して、お前さんさへその覺悟なら駿河屋の方は八九分通り納得させてあるんだから、私に免じて新助さんの不都合は勘辨してくれるやうにと宥め賺した。結局問題が一段落ついて話が酒になつた時分、清次はいゝ潮を見料つて今夜新助さんを此處へ呼ぶから會つてやつてくれろ、さうして互ひに無事な顔を見て安心もし、且は當人に心得違ひのないやうに親の口からようく意見をしてくれろと云ひ出した。「それでは物の順序が違ふ。」と云つて、初めはなかなか老人も承知しなかつたが、つまりは我を折つて淸次の請を容れたのださうな。しかし新助の來ようが遲かつたのと、親爺も隨分待つては見たものゝ平生から忙しい體の上に、何分大晦日を眼前に扣へてさう呑氣にもして居られず、引き留めるのを强ひて辭退してたッた今しがた歸つたばかりだと云ふ。

「どうだい新どん、親と云ふ者は有りがてえもんだなう。」

清次にから云はれると、新助はしみ〴〵勿體なさが身に應へて、盃に兩手をついたまゝ熱い涙を膝頭へこぼした。

「そりやあさうと話に身が入つて折角の酒が醒めちまつた。一番今夜は前祝ひに思ひ切り飲むとしようぢやねえか。本當ならば藝者の一人も呼びてえんだが、お前の男が好過ぎるから、又落つこちでも出來たら事だ。」

清次は新助を抑へ付けるやうにして多量の酒を矢鱈に强ひた。新助はそれほど酒を嗜むのでもないが、體格の强壯なせゐか、いくら飲んでも惡醉をしたと云ふ經驗がなかつた。彼は進まぬ心を勵まして矢繼早やに差される杯を一々淸く受けて居た。

三太が豫言した通り空はいつしかすつかり曇つて、風が止んだと思ふ間もなく忽ち大粒の雫の音がぱらりぱらりと軒先を叩いたが、見る見るうちに驀然たる大雨となつて、空と河とが一つになる程土砂降りに降り始めた。三人は激しい響きに話聲を打ち消されて、小いさな座敷が搖ぎ出すかと思はれるやうな凄じさの中に、稍暫くは差しつ押さへつして居たが、なかなか小降りになりさうもない。

「彼れ此れするともう四つだ。私あ此れから小梅まで行かなけりやあならねえんだが、此のお天氣ぢやほんとに困つたもんだなあ。」

清次は愚痴をこぼしながら消魂しく手を鳴らして女中を呼んだ。

「新どん、それぢや私は急ぐから一と足先へ駕籠で御免を蒙りやす。お前さんは三太と一緒にゆつくり飲んで歸んなせえ。」

と、捨て臺辭を殘して彼は席を外して行た。

二人はそれから半時ばかり空の模樣を見て居たが、いつまで待つても際限はなし、お艶の事も案じられるので、濡れる覺悟で歸りたいと新助が云ひ出した。三太は近所の船宿へ荷足を預けて歩いて行くから、お前さんだけ駕籠を雇つたら宜からうと云ふのを、彼は飽く迄辭退して一緒に歩いて行からうと云つた。「それもさうだな。達者な脚なら高橋迄は一とッ走りだ。此處の番傘を借して貰つて、大川端を臀つ端折りで飛んで行かう。」と三太もそれに同意した。

風のないのを幸ひに茶屋から寄越した提灯を持つて三太が先へ立ち、新助はお艶へ土産の繩でからげた折詰を下げながら、二人共下駄の鼻緒を帶へ結んで跣足のまゝで川長を出た。彼等はお互ひに口を利く事も出來ない程闇と雨とに氣を取られて、二三町行くうちにもうづぶ濡れになつて了つた。兩國橋の橋詰を右へ曲つて細川樣の邸の前まで來たかと思ふと、大川端はさすがに風があると見えて、「あッ」と云ふ間に三太は提灯を吹き消された。常から淋しい河岸通りが深夜の大雨に往來は全く絕えて火を借りるべき便宜もない。明りが消えれば闇の力は自分の體が吸ひ込まれさうに一層物凄く、雨の音さへ氣のせゐか前より激しく耳を劈いた。

「暗くつても私あ大丈夫だが新どんお前氣を附けねえよ。今夜は大分醉つて居るやうだから。」と三太が大きな聲で怒鳴つた。成る程新助は一升近い酒を呻つて、清次にも三太にも度び度び「大分醉つたらう」と危ぶまれたが、實は少しばかり陶然としたゞけで、足許の亂れるまでにはなつて居ない。彼は却つて三太の方を心もとなく感じたので、

「私は此れでも確かだけれどお前の方が餘つぽど鈍痴だぜ。」

と、一生懸命に怒鳴り返したが、水音に遮られたのか三太は何の答へもしない。暫く立つて、物の二三間も歩いた時分に、突然、

「此の醉ひどれめ何を云やあがる。」

と、新助の鼻先で不意に罵る者があつた。三太にしては少し變だと思ふとたんに冷たい刄物の鋒が彼の肩先をぴしりと斬つた。彼は即坐に身を轉したので大した負傷はないらしかつたが、鋭い爪で引搔かれたやうに右の頸筋が一面に痺れて、顏の半分を落した如く其の邊が忽ち無感覺になつた。

「手前は一體何者だ。」

新助はよろめきながら逃げる拍子にかう叫んだ。

「馬鹿野郎、己の聲が判らねえのか。親分に頼まれて手前を殺しに連れて來たんだ。」

相手はかう云つて、新助の言葉を聞き附けて猛然として追ひ縋つた。

新助は邸の土塀へぴつたりと背中を寄せつけ、番傘の柄を滅茶苦茶に振り廻して相手を二三度張り飛ばしたが、直ぐと手元へ附け込まれて何處か體の下半部をぐさりと突かれた。相手は彼を放さぬやうに左手でしつかり胸ぐらを捕へてめつた斬りに斬つてかゝつた。それから後はお互ひに夢中であつた。「うぬ」だの「畜生」だの「此の野郎だの」と獸の吼へるやうに怒號し合つて泥まみれになつて鬪かつた。新助は渾身の力を兩手にこめて、相手の右腕を捻り上げつゝ持つて居る刄物を奪ひ取らうと頻りに焦つた。死に物狂ひに暴れ廻つて組んづ解れつして居るうちに、彼は我ながら恐ろしい程勇剛になつた。三太は

餘計に醉つて居るので到底彼の膂力に敵し難く、遂に刄物を捲き上げられたが、それでも怯まず向つて來た。突嗟に新助は三太を投げ倒して馬乘りに跨りながら、腦天へ刄を突き立てゝ鼠の齧るやうに一つ所をガリガリと搩つた。相手は一と溜りもなく死んで了つた。

何故殺したのか、何故こんなに迄殘忍な所爲を遂げたか、彼は自分でよく解らなかつた。とても殺して了はなければ逃げるにも逃げられないと觀念して、半ば夢中で行つたとしか思はれない。精神上の打擊は別として、數個所の痛手を負うて居るにも拘らず、「殺人とは此れ程樂な仕事か」と訝しまれる程彼の體力は疲弊して居なかつた。「逃亡しようか自首をしようか。」と云ふ問題が直ちに彼の頭へ浮かんだが、兎も角も一と目お艶に會つてから覺悟をしても遲くはないと決斷した。つい先まで笑つたり怒つたり騷いだりした三太の肉體が、おかしいくらゐ默り込んで材木のやうに倒れて居るのを足先で蹴つて見ると、恐ろしいやうでもあり馬鹿々々しいやうでもあつた。何だか人間と云ふものがひどく巧妙な、面白味のある機械のやうに考へられた。彼は當座の發覺を豫防するため刄物と屍骸とを川へ投げ込んで、未だに激しく降り注ぐ豪雨の中を高橋さして一目散に馳けて行つた。

「親分に頼まれて殺しに來たのだ。」と三太は云つた。さうして見れば淸次は意外にも非常な惡人で、あの船宿は船頭の假面を被つた無頼漢の巢窟であるに違ひない。淸次が彼を殺さうとしたのは、云ふ迄もなくお艶を喰ひ物にする算段であらう。先刻小梅へ行くと稱して彼が出掛けたところを見ると或はお艶の身の上も既に無事ではないかも知れぬ。たとへ淸次が不在であつても、家中の者がぐるになつて謀し合はせた仕事とすれば、うつかり新助は閾を跨がれない。孰れにしてもお艶に會ふのは容易な業ではな

さうである。其れを思へば思ふ程、彼は奸佞な悪黨の罠に係つたのが口惜しくて溜らなくなり、清次に對する憎み怨みが一時に爆發した。

「一人殺すも二人殺すも同じ事だ。場合に依つたら清次の奴を叩き殺して自分も共處で死ぬばかりだ。」

新助はもうやぶれかぶれにそんな企みを起して見たが、戀ひしい戀ひしいお艶に會ふまでは如何にもして生きて居たかつた。若しも彼の女に會はれなかつたらどうしようかと考へると、清次を憎む心も失せて唯遣る瀬ない悲しさが胸一杯に充滿した。

成る可く密かに忍び込む積りで、新助は宿の二三間手前から足音を盗み、家の側面の路次へ廻つて、若しやお艶の泣き聲でも洩れはせぬかと勝手口の雨戸へ耳を押付けたが、中はすつかり寢鎮まつて誰の話聲も聞えなかつた。斯う云ふ事には究竟の天氣であるから少しぐらゐ響を立てゝも大丈夫と、彼は大膽に隅の雨戸をこぢ開ける氣で手を掛ける拍子に、何の締りもしてなかつたのか戸はする〳〵と譯もなく滑つて行つた。奥の六疊の間に行燈がぼんやりと灯つて居るばかりで、別段異變が起つたらしい形跡もない。萬一の用心に彼は臺所の流し元に掛けてある出刄庖丁を懷ろへ呑んで、拔き足差し足梯子段の上り口まで近寄らうとする刹那、

「誰だい、三太かい。」

と、囁くやうに呼び掛ける女房の聲がした。新助は同じやうに皺嗄れた低い調子で、

「えゝ、さうです。」と答へたまゝ立ち止まつた。

「どうだい、うまく行つたかい。」

續いて女房は心配らしく斯う尋ねた。彼の女は獨り長火鉢の傍に据わつて、炬燵にあたりながら、まんぢりともせず三太の歸りを待ち詫びて居たらしい。不思議な事には、毎晩次ぎの間の八疊に寢て居る筈の男たちが今夜に限つて一人も居ない。扨はお艶も何處かへ拉し去られたのではあるまいかと、新助は先づ度胸を衝かれた。

「御安心なせえやし。器用に片附けて參りやした。」

彼は三太の聲色を遣つて、障子を開いていきなり女房の眼の前へのつそりと立ち現はれた。さうしてやつぱり以前と同じやうな、寧ろ凄い程物柔かな口吻で、

「お艶ちやんは何處に居ます。」

と云つた。

「お前は新どん。」と云つたきり、女房は危く卒倒するまでに驚いたのを强ひて堪へて、何か瞞着手段を試みようと思つたが、そんな餘裕を許さぬくらゐに新助の姿は殺氣に充ちて居た。彼も今迄氣が附かなかつた事であるが、其處で始めて行燈の火に照らされて見ると、ずた〲に裂けた着物は勿論體の數個所が泥土と雨と血潮に染まつて惡鬼のやうな淺ましい形相になつて居る。新助ははツとしながら、もう人殺しを隱しては居られないと悟つた。

「新どん、お前さんはまあどうしなすつた。」

女房は漸く氣を取り直して空惚けて云つた。

「どうしたもねえもんだ。己あ三太を殺して來たんだ。お艶ちやんの居所さへ敎へてくれりやあ手前の

命は助けてやる。」
彼は庖丁を鼻先へ突き付けて威丈高になつたが、女房は面の憎い程落ち着き拂つて、
「大方二階に居るでせうよ。」
と、わざと煙管に火をつけて嘯いて見せた。
此の女は以前吉原の娼妓であつたのを、清次の先妻がなくなつた時二度目の上さんに直した者で、少し大柄ではあるが、色白の恐ろしく姿のいゝ、三十二三の年増であつた。ふだんから剛情張りと男優りを自慢にするだけ、かう云ふ際にはびくともしなかつた。それに彼の女は新助を女のやうな色男とのみ解釋して居たから、「三太を殺して來た」と云つても、唯一場の威嚇であらうと推量して、故ら弱味を示さぬやうに努めた事も事實らしい。彼は兎に角二階を一と通り檢べる積りで、其の間に女房を逃がさぬため手足を縛つて置かうとした。
「何を生意氣な眞似をしやあがる。」
女は彼を侮つてあべこべに捻ぢ倒す氣で躍りかゝつたが、殆んど悶絶せんばかりに素晴らしい力で背骨を叩かれると、脆くも半分死んだやうになつて其のまゝ新助の自由になつた。たつた一回人を殺した經驗が、人間の五體を極めて迅速に曲げたり捻つたり踏んづけたり押へ付けたりする新助の技術を非常に巧妙ならしめて了つた。彼は何の苦もなく女房の四肢を縛り上げて猿轡まで啣ませた。
提灯を携へて二階へ上つて、坐敷はもとより押入れから屛風の蔭まで隈なく搜して廻つてもお艶は遂に居なかつた。大方さうと推測しては居たものゝ愈々何處かへ勾引かされたと極まつて見れば、新助は

取り付く島のない迷兒のやうな、悶然たる暗い心に襲はれて、べそを掻きながら殆んど半狂亂に梯子段を馳せ降りた。若しやと感付いて、今度は階下の部屋と云ふ部屋を椽の下まで覗いて見ても、やつぱり居ない。

「さあ何處へ隱したか白狀しろ。拔かさなけりやあお前の命は貰つちまふぜ。」

かう云つて、彼は猿轡を解いて、女房の横頰を出刄庖丁でぴたりぴたりと平打ちにした。女は靜かに瞑目したまゝ默つて居たが、やがて細めに眼瞼を開いて、ぢろりと新助を睨まへながら、

「手前のやうな青二才に馬鹿にされて溜るもんか。殺すなら殺して御覽な。」と云つた儘再び眼を閉ぢて石のやうに動かなかつた。彼はふと、先刻女中部屋を殘して來た事を想ひ出した。圖太い女房を責檻するより下女を强迫する方が有効であると考へて早速其處へ飛んで行つた。然るに又奇妙にも、いつも三人居る女中達が今夜は一人も寢て居なかつた。或は惡事の邪魔になるので、奉公人等を豫め用達しにやつたものらしい。

何と思つたか新助はもう一度女房の傍へ取つて返して、俄かに手足の繩を解き、額を疊へ摺りつけて乞食の如く手を合はせた。

「おかみさん、全く私が惡かつたから腹も立たうが勘忍して下せえ。なんにも云はねえ此の通りだ。……此の通りだから機嫌を直して、たつた一と言あの娘の居所を敎へて下せえ。賴む、賴む。」と熱心に云つた。

「居るか居ないか搜して見たら判つただらう。わたしの知つた事ぢやあないよ。」

「此の場になつてお前のやうに空惚けても仕様があるめえ。お前たちがぐるになつて彼の娘を何處かへ連れ出したたあ、私も大概氣が付いて居る。なあお上さん、私の方ぢや先から立派に三太を殺して來たと、ちやんと白狀してるぢやねえか。何も私は彼の娘に會つてどうするの、清次さんを捕へて敵を打つのと云ふんぢやねえんだ。明日にもお奉行様へ自首する前に、今生の際に一と目でいゝからお艶ちやんに別れを惜しんで行きてえんだ。よく考へて見てくんねえ。此方でこそ恨はあるが、お前は私に何の恨もある筈はねえぢやあねえか。それが今生の頼みと云ふのを聽いてくれても惡かあなからう。此の願さへかなへてくれりやあ、たとへお白洲へ呼び出されてどんな責具に逢はうとも、決してお前や清次さんの迷惑になる事あ吐かねえ積りだ。」

「此れさ新どん、先から默つて聞いて居りやあぐるになつたの迷惑だらうのと、勝手な熱をお吹きだが何の證據があるんだい。大方人を殺した爲めにお前は氣でも狂つたんだらう。三太が何をしようとも親分の知つた事ぢやあないから、自首をするなり敵を打つなりお前の勝手にするがいゝさ。」

「それ程お前が身の潔白を云ひ立てるなら、彼の娘の居所を知らせてくれてもよささうなもんだ。全體清次さんは何處へ行つたんだ。」

女はいよ〳〵附け上つて、不敵な態度で懷ろ手をしながら、さもさも冷淡さうに云つた。

「親分かい。……此の節ぢやあ毎晩の事だものを、何處へ行つたか一々あたしが知るもんかね。お艶ちやんなら實は夕方寄席へ行くと云つて、女中と一緒に廣小路まで出掛けたつけが、歸りの遲い所から見ると、てつきり此りやあ間違ひでもあつたんだらう。」

憎々しげな挨拶を聞いて居るうちに、新助の感情は再び恐ろしい方へ廻轉した。「うぬ！　どうしてくれよう。」と、彼は腹の底で呟いた。お艶の所在を女の口から搾り出す可き方法が絶對にないと定まれば、彼は暫く自首を延期して、一と月でも半歳でも捜し出すまで待たねばならない。それまで果して彼の犯罪が發覺せずに濟むだらうか。先づ何よりも確かなのは此の女房の密告である。――

そんな事を考へて、新助はやゝ長い間茫然として佇んだまゝ、片膝立てゝ悠々として煙草を吹いて居る圖太い女の横顔を眺めて居た。

「こいつが清次の女房なんだ。引き換へにこいつを殺せば、己も無事だしお艶ちやんの敵が取れる。あの太々しい面魂は、よもや此れから殺されるとは夢にも知らずに、仔細らしく鼻を高くして威張つて居るところが面白い。此れて己が力をこめて一と締めぐツと締めつければ、忽ち屍骸になつて了ふのだから不思議ぢやないか。」

一瞬間に彼の感情は更に一層猛惡な方面へ傾いて行つた。彼は默つて足許に捨てゝある麻繩を拾ひ上げて、いきなり女房の頸襟へ卷きつけた。さうして、頭の中に想像して居た通りの事を實際にやり遂げた。

やり遂げて了ふと、今までの疲勞が發して來たのか彼は一度にがつかりした。「己は非常な罪人だ」と思つて見ると、自分の手足の皮膚の色まで急に物凄く黒ずんで居るやうな氣がした。此れから早速逐轉するにも此の血だらけな服裝では仕方がない。彼は勝手口へ行つて、素裸になつて總身の血を洗ひ落した。幸ひ押入の棚の上に、一と揃ひの清次の着換へらしいものが載せてあるのを引き摺り出して其れを

繕ひた。結城紬の綿入と羽織に、茶献上の博多の角帯で、新助には誂へ向きのいかにも堅儀な好みであつた。次ぎには用簞笥の抽き出しを開けて、金銀打ち交ぜて三兩ばかりの錢を掴み取つた。一つは自分の嚢中の乏しかつた爲め、一つは盗賊の所爲と紛らはせん爲めの計略なのである。それから彼は自分の脱ぎ捨てた唐棧の衣類を、澤庵の重石にくるんで小名木川の底深く埋めた。此れだけの處置を付ければ、自分が三太と女房とを殺害したと云ふ直接の證據は堙滅したものと、新助は不安心ながらも强ひて安心した。

戸外は雨がすつかり止んで、晴れ渡つた空に夜半の月が冴え返つて居た。彼は同じく盗んで來た文派の淺黄色の船底の頭巾を冠つて、大通りへ出る曲り角の、自身番の前を無事に通過した。

三

新助がまだ淺草の實家に居た時分、親父の緣故で度び度び本所の業平に住む博徒の金藏と云ふ男の家へ連れて行かれた。彼が凶行を果たした晩にしよう事なく便つて行つたのは其處であつた。金藏は若い頃には隨分亂暴を働いたものゝ、二三年前五十の坂を越えてから、財產も出來れば分別も出來て、商賣柄に似合はず至極穩健な、それで義俠心に富むだ寛弘な人物になつて居た。此の人ならば大丈夫と信賴した新助は、事件の概略を打ち明けた上、お艶に會つたら自首すると云ふ條件で、當分自分を匿まつてくれと申し込んだ。但し、彼は三太を殺めた事を白狀しながら、淸次の女房に關する方は全然口を拭はうとした。

「新助さん、お頼みとありやあ聽いても上げるが、私に一つ解せねえ事がある。三太を殺して眞直ぐに逃げて來たとお云ひだが、お前の體は傷だらけだのに着物がちつとも汚れて居ねえ。そりやあ全體どうした譯だ。」

その時金藏は直ぐとかう云つた。圖星を指されて新助はさすがに慄え上つた。淸次の家を逃げ出す際に、充分體を洗つた積りで居たところ、さう云はれゝば爪の先にも頸のまはりにも血が固つて殘つて居るのみか、左の小鬢の髮の毛が糊のやうに硬張つて居る。彼はとうたう包まず白狀させられて了つた。

「大方そんな事だらうと思つて居た。……それまで話が判つて見りやあ、己が立派に引き受けて、一緒にお艶さんとやらを搜してやらねえもんでもねえ。しかし前以て斷つて置くが、その娘御に會ひ次第必ず自首して出なせえよ。己にしたつて一度や二度は人を殺した時代もあるが、一遍味を覺えるとなかなかそれ限りぢやあ濟ませねえものさ。お前も元は氣の小いせえ性分だけれど、もうさうなつちやあお仕舞えだ。世の中に恐いものがねえとなりやあ、面白い事あいくらでも出來る。なあ新助さん、お前は今が肝腎な時節だぜ。ようく落ち着いて考へねえと、此のまゝずる／＼惡い方へ引き落されて飛んでもねえ人間になつちまふぜ。否でも應でも自首しろと云つたら無慈悲なやうにも聞えるだらうが、お前の命を助けたところで、お前の爲めにも世間の爲めにも、損にこそなれ、なんにも得はありやしねえ。また人死にが出來るばかりだ。」

新助には金藏の忠告の意味がよく解らなかつた。あのやうに萬事を懺悔して從來の罪を認めた以上は、自分も堅い決心があつての事だのに、此れから先の墮落に就いて危惧される可き理由がない。彼は

心から眞面目になつて、將來必ず自首する事を幾度も幾度も誓つて見せた。

新助は一旦奮ひ起つた猛獸が再び馴らされて了つたやうに、元の柔順な優男に復つた。彼にはあの晩の出來事が、まるで惡魔に取り憑かれて夢を見たやうに回想された。金藏の兄弟分にあたる武州大宮の博徒の許まで、暫くほとぼりを避けて居ようかと云ふ相談も出たけれど、斯くてはお艶にめぐり會ふ機會も失せる。それに幸ひあの晩の事はあまり評判になつて居ない。彼が逃げ込んだ明くる日の朝早く、金藏はそれとなく細川樣の土塀の前を通り過ぎたが、血潮の痕は其の夜の雨に拭ひ去られて、捨てゝ來た筈の番傘も見えず、唯川長の例の折詰めが散々に踏み潰されて殘つて居るばかりであつた。淸次の方では、寧ろ三太が兇行のついでに女房迄も殺害して、金を浚つて逃亡したものと推察して居るらしかつた。だから淸次は萬一新助に遇つたところで、驚きこそすれ告訴するやうな心配はない。——此れも金藏が懇意の船頭に手を廻して、密かに探つて來たのである。彼は早速新助の曰く附きの衣類を脫がして、有り合はせの自分の綿入を借してやつた。さうして、わざ〳〵顏に入れ黑痣をして、晝間は草履賣に姿を換へ、夜は蕎麥屋に身を窶して專ら深川の町々を徘徊させた。

兎角するうち歲も暮れて、明くれば文政八年の正月になつた。新助は毎日必ず高橋の近所を歩いて見たが、女房をなくした淸次の家は、二十日も立たぬに程なく三度目の上さんを迎へて、船宿は相變らず繁昌して居る。お艶は既に身賣りをされたに相違ないと新助は思つた。念の爲めに橋町の主家の暖簾先をこわ〳〵ながら覗ふと、氣のせゐか店の中はひつそりとして勿論娘の歸つて來たらしい樣子はない。お艶の事を苦に病んで旦那は去年から重い枕に就いたとさへ噂されて居る。彼は溜らない氣持になつ

て、もう此れからは橘町へ足を入れまいと心に極めた。

小名木川筋は當分あきらめて、江戸中の遊廓藝者屋町は云ふ迄もなく、小梅や橋場や入谷あたりの別莊妾宅のありさうな區域を隈なく尋ね廻つたが、とうたう二月の末になるまで女の在り家はわからなかつた。やがて向島の土手は櫻が咲き初めて、のどかな空には霞が浮き立ち、賣り聲高く往來を歩いて居てさへ、うらうらとした暖い日和に眠くなるやうな時候となつた。新助は陽春の廻り來ると共に、戀ひしさ辛さ悲さが激しく胸へ迫るのを覺えた。夢になりともせめてお艶に會ひたかつた。

「新助さん、お前を尋ねる女と云ふなあ、若しや仲町に藝者をして居る染吉と云ふのがそれぢやああるめえか。」

四月下旬の或る夜のこと、金藏はかう云ふ喜ばしい報知を齎して歸つて來た。話に依ると其の晩彼は二三人の子分をつれて、深川の尾花屋へ飲みに行つたが、圖らずも座敷へ呼んだ藝者の一人が、日頃新助から聞かされて居る娘の面ざしや年恰好にそつくりであつた。先づ第一に類の少い美貌ではあるけれど、上眼瞼が少し脹れぼつたくて、眉毛が男のやうに濃くて稍凄味のある趣と云ひ、笑ふ時には右の上顎にやゝ齒が露はれて其れが恐ろしく愛嬌を添へる風情と云ひ、物を言ふ時口を歪めて唇を噛む癖と云ひ、地聲が非常に婀娜つぽくて人の心をそゝるやうな色氣を含んだ調子と云ひ、凡べての特長がてつきり其れと頷かせたので、内々素情を捜つて見ると、砂村の博徒の德兵衛と云ふのが親許になつて居るのだと云ふ。ところで德兵衛と云ふ人間は、仲間うちでも擯斥されて居るくらゐの無頼漢で、船頭の淸次とは人知れず附き合つて居るらしい様子まで、殘る所なく突き止めて來た。もう此れまでに種が上れば

殆んど疑ふ餘地はない。無論新助も其れを信じた。

「大概さうだと思はれるけれど、ちつと腑に落ちねえ事もあるんだ。こんな事を喋舌つたら、いよ〳〵本物となつた時にお前は氣を惡くするかも知れねえが。……」

と、金藏は豫め前置きをして、染吉に對する土地の評判を話して聞かせた。彼の女が仲町へ出始めたのは漸く一と月半ばかり前であるが、瞬くうちに藝が達者で悧巧者で深川切つての器量好しと云ふ噂が立ち、素晴らしい賣れッ子になつて了つた。日本橋邊の呉服屋の若旦那と云ふのや、麹町の旗本の某と云ふのや、その外五六人の遊蕩兒が夢中になつて彼の女を追ひ廻し、噓のやうな大枚な金を絞られたに拘らず、まるで染吉に飜弄されて一人として望をかなへた者がない。土地の人は例の徳兵衞が彼の女にすつかり惚れ込んで居て、嫉妬のあまりお客を取らせないのだと云ふ推測を下して居る。彼の女の抱へられた藝者屋の女將は、實は徳兵衞の妾であつて、彼の資本で此の商賣を經營して居るのだが、徳兵衞と女將と染吉との間には、毎日のやうに嫉妬喧嘩が絶えなかつた。それで今から十日程前、とうたう女將は藝者屋を放逐されて、染吉が其處の姐さん株に据ゑられた。さうして彼の女は押しも押されもしない羽織師になつた。徳兵衞さんもあんまりだが、染吉も年に似合はずちいッと腕が凄過ぎる。と、專ら蔭口を叩かれて居る。

けれども世間の蔭口の如く、果して染吉が徳兵衞の自由になつて居るかどうかは疑問の存する所であると、金藏は慰めるやうに自分の意見を附け加へた。やつぱり徳兵衞も外のお客と同樣に、徒らに彼の女の機嫌を取るばかりで、焦らされて居るかも判らない。多勢の女の美望の的となつて居れば、隨分つ

まらぬ中傷を施されるものだから、噂の半分は嘘と思つても差支へない。唯金藏が座敷へ呼んだ樣子では、兎に角此れが去年の末まで質屋の娘で育つた女とは、どうしても受け取れない程人擦れがして居る。ちよいと見た所では、戀ひしい男の行くゑが知れずに惱んで居ると云ふやうな陰鬱な點は微塵もなく、始終花やかに笑ひさゞめいて、女に似げない大酒を呻る。尤も此れがやけ酒だとすれば、滿更理由が立たなくもない。

「なんにしても明日早速會つて見なせえ。一人て行つても解るやうに己が尾花屋へ話して置いたから。」

と、金藏は云つた。

德兵衞の事は氣に懸るが、其の他の話を綜合すると、どうも新助には本當らしく信ぜられた。大酒を呻るとか、人擦れがして居るとか、陰鬱でなさ過ぎるとか、其れ等は悉く墮落したお艶にふさはしい經過である。いくら外面は墮落してもいゝ。唯自分に對する節操さへ變らなければそれていゝ。新助はさう考へた。

明くる日新助は月代を剃つて風呂へ這入つて、顏の黑痣を洗ひ落し、以前の通りの小ざつぱりした姿に戾つた。一旦忌まはしい罪業を犯した心の汚點は取れないまでも、依然として彼の瞳は子供のやうに愛くるしく、晴れやかな豐かな頰は少しも靑褪めて居なかつた。萬一淸次に見附かつた場合、己れが惡事の露顯を防ぐ必要から如何なる不意討ちを喰はせないとも限らない。——かう云ふ金藏の懸念もあつて、人目に立たぬ午後の六つ時の黃昏頃に、駕籠で出掛ける手順となつた。思へば今夜染吉に逢ふのが此の世の見收めかも知れないのである。

「それでは行つて參ります。長々お世話になりました。」

いよ〳〵刻限が迫つた時、新助は兩手をつかへてしみ〴〵とした調子で云つた。

「さうだな。もう此れぎりでお前に會へねえかも知れねえんだな。それぢやあ若しや染吉がお艶さんに逢へねえときまつたら、歸つて來るにやあ及ばねえから明日にも自首して出なせえよ。お前も名殘が惜しからうが、二日も三日も引き留められると、ついつい未練に引かされて覺悟が鈍るやうにもなる。立派に自首してくれさへすりやあ、あとは己が引き受けるから、親爺さんの事あ心配するにや及ばねえ。」

金藏は自分の家へ引き取つてからの殊勝な新助の行動に照らして、此のまゝ彼を放してやつてもまさか逐轉する筈はないと信じて居た。けれどもお艶にそゝのかされた結果、情死をすると云ふ恐れはあるので、

「お艶さんに會つたら、お前は一體どうしなさる。」と尋ねて見た。

「是非とも私が意見して、橘町へ歸らせます。」

と、新助は堅く決心して居たやうに澱む所なく答辯した。

「よく云つてくれた。それてこそお前は昔の新助さんだ。」

かう云つて金藏はいくらかの金包を出して、餞別のしるしに前へ置いた。新助は四箇月間の商賣の賣溜が貯へてあるので、其れには及ばぬと辭退した。「さうか」と云つて、金藏は素直にその包を引込めて了つた。あまり金を持たせぬ方がよからうと慮つたのである。

その晩は南を帶びた生溫い風が秘めやかに吹いて、宵闇の小路を行きかふ人顏が木蓮の花の如くにほ

んのり白く匂ふやうな、闌な春の盛中の朧ろ月夜であつた。新助を乘せた四つ手籠駕は高橋通りを眞すぐに黑江町へ出て、一の鳥居を左へ曲り、仲町の尾花屋の玄關へついた。彼は市中の料理屋の酒を飮んだ覺えはあるが、此のやうな遊里の茶屋へ足を踏み入れるのは始めてゞあつた。

「業平町の親分から話のあつたお客樣」と呼ばれて、彼は頗る慇懃な待遇を受けた。通されたのは奧まつた八疊の離れ座敵で、こんもりした庭の植え込みの隙から鞍馬燈籠の火影がちらちらと瞬いて居るばかり、騷々しい歡樂の巷の裏にこんな區域もあるものかと訝しまれる程、閑靜な數奇を凝らした普請である。

「染吉と云ふ羽織に會ひたい。外の藝者は一人もいらぬ。」と、新助は冗談のやうに剛情を張つて女中に賴んだ。日本一の色男と自任する通人が、いてや名代の染吉とやらを手折つてくれんと思ひ驕つて、わざと野暮臭く姿を窶して乘り込んだかと、邪推されさうな調子であつた。

やゝ暫くして、新助が手持無沙汰に凭れて居る床柱の蔭の瓦燈口から、大型の嶋田崩しの長い項をゆらく〳〵傾げて這入つて來た染吉こそ、紛ふ方なき彼の女であつた。其の夜のお艶の服裝は濃いお納戶茶に達摩小紋の下着の上へ伊豫染めの縞縮緬の袷を纏つて、金絲で重ね菊の繡模樣をした黑繻子の丸帶を締め、石垣形の絞りの長繻袢の裾も露はにわざとお白粉をうすく塗つて、辰己切つての賣れッ妓と云はれるだけに見違へる程いなせな風俗と變つて居た。

お艶はお客の後ろつきを見るより早く、靑疊へ粘着くやうな素足の音をばた〳〵と立てゝ、急いで男の前へ廻りながら、

「おや！」
と叫んで喜びのあまり顔色をかへたが、いきなり新助の膝頭へ打突かるやうにぺたりと臀餅をついた。
「よく無事で居ておくんなすつた。あたしやお前に會ひたかつた、會ひたかつた。」
と力強く云つて膝頭をぐいぐいと衝いた。「己は此れだけの女を捨てゝ、明日自首する運命なんだ。」
――新助はその時忽ちさう考へて、命に對する鋭い執着が、むらむらと胸へ萌すのを覺えた。
忘れもしない、去年の十二月二十日の宵に別れてからの顛末を、先づ女から詳細に語り始めた。あの晩、新助が呼び出されると間もなく、「今夜は閑だから遊びに行つて來るがいゝ」と上さんは女中や若い衆を殘らず何處かへ出してやつた。宿にはお艶と女房とが留守番をしながら世間話をして居るうちに、例の大雨が非常な勢で降り出して來たが、その土砂降りの激しい最中に清次が二三人の見知らぬ男を從へて、ひどく醉拂つて歸つて來た。彼は突然物をも云はずお艶を縛り上げて猿轡を箝めた上、駕籠に打込んで砂村の德兵衛方へ淩つて行つた。無論前から計劃して居たものと見えて、砂村の方では德兵衛始め五六人の荒くれ男が面白半分に待ち構へて居た。お艶は彼等が車坐になつて大酒盛をやつて居る廣間のまん中へ引き据えられ、散々に嬲られたり嘲られたりした。けれども彼の女は、自分の生命に對してはそれ程憂へて居なかつた。此の男たちは大概自分に惚れて居る。さうだとすれば、口說いても承知をしない曉にせいぜい女郎屋へ賣り飛ばすぐらゐが關の山で、貴い寶物に危害を加へる筈はない。彼の女は斯う云ふ風に額を括つて隨分圖太く大膽に構へてやつた。殺すと云つておどかしても少しも怯みを示せなかつた。唯新助の身の上ばかりが案じられて、夜も日も寢られない程戀慕に驅られた。

すると果して推量通り、淸次はやがてとある密室へ押し込め同樣に彼の女を幽閉して、毎日毎日口說きに來た。

「己はとうからお前に首つたけ惚れて居たのさ。實あ新助を欺かして二人で驅け落ちさせたのも、みんな此方の謀さ。こんな惡事を働いたなあ云はゞお前のお蔭なんだから、どうか『うん』と云つて己の妾になつてくんねえ。願ひをかなへてくれさへすりやあ、必ず樂をさせてやる。」

かう淸次は云つた。あの晩以來の新助の境遇に就いては、いくら尋ねても明瞭な返辭をしなかつた。

「あいつかい？　あいつの事はきれいに忘れて了ふがいゝ。此の間淸島町の親爺の方へ引き渡してやつちまつたあな。」などゝも云つたが、それは嘘にきまつて居る。淸次は二人を引き取つてから、橘町へも淸島町へもまるきり空惚けて、そんな話は持つて行かぬに違ひない。お艶は十中の八九まで、もう新助は殺されたものと判斷しながら、容易にあきらめ切れなかつた。

押し込めの期間は隨分長く、暮れの二十日から二月頃まで續いて居た。淸次は始終根氣よく通つたけれど、嚇されても賺かされても、何と云つてもお艶は決して承知しない。樣子を知つて居る德兵衞が見るに見兼ねて、いろ〳〵と淸次に助言をした揚句、徒らに苦しめても無駄だと悟つたのか、漸く彼の女は押し込めだけを免がれる事が出來た。其の代り嚴重な監視の下に小間使ひの役目を勤めたり、薄氣味の惡いお世辭を云はれたりした。淸次は大いに方針を更へて、成る可くお艶の機嫌を買ふやうに努めたのである。

德兵衞と云ふ男は淸次と同じ年配であつたが、彼よりも一枚上の惡黨らしく、表面はいつも物柔かで

めつたに怒つた例がない。迂濶に觀察すると、非常に物の解つた善人のやうに見える事もある。彼は二人の間へ這入つて兩方に體裁のいゝ言を云つた。殊にお艶には、陰へ廻つてさま〴〵に同情の安賣りをした。「此の男もやつぱりあたしにおかしいのだ。」とお艶は直ぐに感付いて、わざと同情に絆された如く裝ひながら、相手を油斷されるやうに骨を折つた。隙だにあらば彼は砂村を出奔して、新助の行くゑを捜したいと企んで居た。

　或る晩彼の女は徳兵衛に酒をすゝめて繰しながら、「自分はもうふツつりと新助の事をあきらめて了つた。しかし其れにつけても今頃あの人はどうして居るだらう。」と、獨り語のやうに尋ねて見た。然るにお艶は徳兵衛の口から今迄夢にも知らなかつた驚く可き秘密をそれとなく暗示された。あの晩清次は腹心の三太に賴んで、大川端で新助を殺害させたと云ふ事、而もその三太が、何と思つたか行きがけの駄賃に清次の女房まで絞殺して金を盗んで逃げたと云ふ事、その後清次は三度目の女房を迎へたと云ふ事、――此れ等の話は、勿論徳兵衛が責任を以て明言したのではないけれど、前後の事情を考へ合はせるとどうも本當らしかつた。お艶はいよ〳〵新助を、實際にあきらめなければならなくなつた。死んだ男の意趣晴らしに、いつか一度は何等かの方法で清次を復讐してやらうと、彼の女は其の時から堅く思ひ込んださうである。

　間もなく徳兵衛は清次に對して、「とてもあの女はお前に靡きさうもない。さうかと云つてあれだけの玉を女郎に賣るのは勿體ないから、相當な値で己に讓つてくれまいか。一つ當人に因果を含めて、仲町の己の内から藝者にさせて出して見よう。」と云ふやうな事を吹込んだらしい。最初は清次も未練がまし

く不承知を唱へたが、結局我を打つて手を引いて了つた。

「どうせお前も瑕のついた體だ。一番己を助けるつもりで藝者になつて貰ひたい。」と、德兵衞から下手に出られてお艶はさすがに斷りかねた。女郎にされゝば否でも應でも節操を穢される。德兵衞はそれを救つてくれて、節操の點は保證した上藝者になれと賴むのである。若しや新助が草葉の陰で聞き知つたとて、滿更腹を立てもしまい。自分は一生橘町へは歸りたくない積りだから、獨りで暮らして行くとすれば藝者稼業が最も性に合つて居る。考へて見ると、寧ろ此方から望んでもいゝくらゐである。そこで彼の女は案外容易く快諾した。

藝者に出てから程なく一流の名を恣まゝにして、丸抱への自分から一足飛びに自前の體とまで漕ぎつけた。德兵衞から多少の融通をつけて貰つて居るものゝ、今では兎に角一軒の家の主である。自由な境遇に置かれたとなると、彼の女は又々新助が想ひ出され、内々人を使つて捜して見たがどうも解らない。それに德兵衞の話した事が、三太の事件も女房の事件も二つながら眞實であつたから、恐らく新助も殺されたものと今度はすつかり信じ切つた。此れも世の中の廻り合せと觀念して、氣樂と云つては濟まないが、此の頃では持ち前のお俠を發揮して頗る快活に我が儘に暮して居た。藝者ほど面白い商賣はない。のろい男を欺かして金を絞る程胸のすく事はない。それで昔の情夫に出會つて、明日とも云はず今夜からは自分の力で貢ぐ事が出來るのだから、こんな嬉しい事はない。――かう云ふうちにもお艶はしたゝか酒を呷つて、血が滲み出るかと思はれるまで紅く濁染んだ眦を、男の顔に注ぎながら、

「久し振りで一杯お酌をしておくんな。」

と、にじり寄つて盃を出した。

「お艶ちやん、勘忍して下せえ。己はお前に貢がれるやうな身の上ぢやあなくなつた。」

新助は近づく女の手を拂つて、急に堅苦しく据わり直した。彼は恐ろしい自分の罪の一分始終を、歡びの絶頂に達した女の鼻先へ放り付けるやうに打ち明けて了つた。

「……だから明日にも自首しなけりや、業平町へ對しても言譯が立たねえんだ。お前に會つたら死なう死なうと疾うから覺悟をして居たんだから、どうぞ赦しておくんなせえ。」

から云つて男は其處へ泣き伏した。

「死ぬと云ふならあたしも生きちやあ居ないけれど、お前は相變らず氣が小さいね。」

お艶はさまで感動した樣子もなく、、、、、酔ひどれが腰を拔かしたやうにだらしなく崩折れたまゝ、噯まじりに簡單に云つて除けた。

「もとはと云へばみんなあたしが惡いんだけれど、お前が人を殺したなあ、聞けば聞く程よく〳〵の譯があるんぢやないか。清次の上さんにしたところで、云はゞ敵を打たんだからちつとも惡かあありやあしない。いつそ私は好い氣味だと思つて居るのさ。……ねえ新どん、お前が自首をしないからつて、業平町で密告すると云やあしめえし、外に誰も知つて居る者はないんだのに、馬鹿正直な眞似をするなあ今時あんまり流行らないよ。」

「飛んでもねえ事を云ふよ。」と、新助は呆れ返つて嚴かに女の方を睨み付けたが、再び優しい調子になつて歎願する如くに說き始めた。

「成る程そりやあお前の云ふのも尤もだが、此のまゝ罪を免れちやあどうも己の氣が濟まねえ。包み隱さず自首してこそ、駿河屋さんにも業平にも濱島町の親爺にも言譯が立つと云ふものだ。實を云やあ、己はお前にも此の世の名殘りにお願がある。どうぞ一日も早くこんな稼業から足を洗つて、橘町へ歸つて下せえ。お前の事を心配して旦那は去年から煩つて居ると云ふぢやあねえか。お前の姿を見さへすりやあ喜びこそすれ、そんなにいつ迄過ぎ去つた事を根にお持ちなさる筈あねえやな。徳兵衞の方の借金だつて、旦那へ話をすりやあ直ぐにも出して下さるだらう。」

「そんな話は止しておくれ。想ひ出しても嫌なこつた。」お艶はぷいと顔を背けて、「あたしや先も云ふ通り、堅儀な人間に復るよりか結局此の方が好きなんだから、勝手にさせておくんなさいな。」

「又剛情が始まつた。己がわざ／＼かうやつて、今生の際に頼みに來たものを、聽かれねえとは情けねえぢやないか。たとへどんな惡黨でも親の恩ばかりは忘れねえのが當り前だ。それともお前は藝者稼業をして居るうちに魂までも腐つちまつたか。」

「あゝ腐つたとも、腐つたとも。父や母の事なんか、あたしや夢にも見やあしねえよ。」

かう云つてお艶は空嘯いたが、急に今度は男の背へ突伏して、激しく泣いて訴へ始めた。

「たまに會ふのに喧嘩をするなんて、新どんお前が解らないからだ。今生の際の願ならどんな事でも聽いて上げるが、あたしや決してお前に自首なんかさせやしない。死ぬと云つても死なせはしない。それも先へ寄つての事とでも云ふのか、今夜會つて明日早速自首するとはお前もあんまり薄情過ぎる。」

道理も意見も耳へ這入らぬ女の情熱に捲り倒されて、新助は言ひ解く術もなく默り込んで了つたもの

丶やつぱり彼の決心は最後まで動きさうもなかつた。女は遂に考へ直して、「そんなら無理にとは云はないから、お互ひに機嫌よくして、せめて二三日内の二階へ逗留してくれ。」とひたすらに憐みを乞ふた。

「喧嘩をしたまゝ別れちやあ、折角死ぬにも氣持が惡い。」――新助は自分の良心と女へ對する負け惜みにこんな辨解をして、お艶の賴みに讓歩して了つた。

「話をするにも此の座敷ぢやあ氣兼ねがある。お前の心の變らない間に引き揚げて、内の二階で飮むとしよう。」

お艶はひとり大喜びで、泥醉の足許も危くよろけながら立ち上り、男の手を取つて頻に促す。

二人はわざと別々に尾花屋を出て、十二軒の曲り角で落ち合つた後、ほの白い光の漂ふ朧ろ月夜の新路に睦しい影を印しながら、再びいつぞやの駈落ちのやうに妙に昂奮して歩いて行つた。八幡宮の境内の永代寺の庭に向ひ合つた、片側町の河岸通りに「蔦屋」と云ふ行燈を揚げた家が今のお艶の住居(すまゐ)である。家はさまでに廣くもないが、二三人の抱へと女中を使つて、木口(きぐち)を選んだ二階座敷の柱や建具の模様など、なか〳〵に小ざつぱりした暮らし向きらしい。格子先へ迎へに出た十五六の女の子にお艶はちよいと耳こすりして下駄を脱ぐ間もせわしなさゝうに其のまゝ男を梯子段へ導いた。

栖町の駿河屋の店に、人目を忍んで切ない逢ふ瀬を樂んで居た時代の事。小名木川緣(べり)の淸次の宿に寄寓して船頭たちに冷かされながら誰憚からぬ痴話ぐるひに夢の如く日を送つた二十日あまりの時代の事。――お艶は甘い回想に耽つて、過去の記憶を呼び起してはあまりに短かい二人の戀の果敢なさを嘆き且訴へた。

「いつぞや藝者の眞似をして「私」と云つて怒られたつけが、もう差支へあるまいねえ。」

そんな事を云ふうちに女は全然荒つぽい辰己言葉を使ひ始めて、新助が未だに堅苦しく「お艶ちやん」と呼び馴れて居るのを、水臭いと云つて批難した。今夜だけはせめて本當の亭主の積りで、「お艶」と呼んで下さいと注文した。「その代り私も「新どん」と云つちやあ濟まねえから、此れからさん附けにして上げるよ。」と云つた。

もう酒ならば澤山だと臀込みするのを、女は容易に承知せず、無理に捕へて唇へ押し入れるやうにした。さすが以前は豪酒であつた新助も、その頃は酒の味を覺えた爲めに却つて弱くなつたのか、夜の更けるに隨つて醉は次第に深く深く心身に泌み渡つた。

三日の間の逗留が互ひの戀の最後であると度胸を据ゑ、朝から晩まで平清の仕出しの料理を喰べながら何本と云ふ銚子の數を傍から傍から飲み倒して、起きる時刻も寢る時刻も滅茶滅茶にして上氣せ合つた二人は三日目の夕方迄に早やぐつたりと疲れ切つて、醒めて居るのに意識が朦朧として了つた。考へて見ると、何一つ此れぞと云つて愉快な記念は殘つて居ない。やつぱり最初の晩に尾花屋から逃げ出して來た一瞬間が、一番面白さうであつた。唯新助は今日の明け方、恐ろしい醉の力に駈られて、お艶に嫌味を列べたことをうろ覺えに覺えて居る。

「お前の口は達者になつたが、心のうちぢや昔の半分も己を思つて居さうもねえ。徳兵衛と云ふなあ金もあるし物も解るし、此の新助たあ雲泥の相違だ。早く自首してしまつた方が結句お前の仕合はせだらうが。」

「ふん人をつけ！お世辞のつもりで嫉妬を燒くなら、相手になるだけ馬鹿々々しいから止しておくれよ。から見えても、私はまだお前の外に男を一人も知らないんだから。……」

「それにしちやあ、よく徳兵衛が金を出すなあ。」

「そこがあたしの腕ぢやないか。まだ人殺しはしないけれども、惡い方ぢやあお前よりも私の方が餘つぽど上手さ。」

そう云はれると男は直ぐに滿足して、嬉しまぎれの涙聲で、「濟まねえ、濟まねえ。」と連呼した。

「己のやうな野暮臭え人間には、様子がちッとも解らねえからつい疑つて見たんだが、それだけ聞きやあ己は死んでも本望だ。」

「我が儘なんかめつたに云はねえお前だもの、たまには燒いてくれた方がいつそ私はうれしいのさ。」

男はその時つく／＼と此の女が可愛らしくて溜らなくなつた。もうどうにでもなれと云ふ様な大膽な氣分に襲はれた。

「ねえ新さん、どうせかうなりや三日も四日も同じ事た。もう半年も居ておくんな。」

こゝぞとばかりにお艶はあらん限りの言葉を悉して誘ひを掛けた。それに對して新助はどのやうな返辭を與へたか、今はつきりと記憶して居ないが、何でも極めて煮え切らない、寧ろ女の云ふまゝに引き摺られて行きさうな意志を示したやうであつた。あの時彼はたしかにそんな心持になつて居た。

それからうと／＼と一と眠りして午後の八つ時分に眼を醒まして、又々酒が始まつたのだが、どうしたものかもう其のやうな緊張した愉悦の情は、少しも胸に殘つて居ない。いよ／＼今夜が最後と云ふの

に、まだ宵の口でありながら二人共ぼんやりして了つて居る。よんどころなく醉はうと試みても、飲めば飲む程眼が暈むやうに頭痛がして、徒らに氣が重くなるばかり、歡樂の後の物悲しさがひた寄せに寄せて來る。

「新さん、お前は今朝の明け方の話をよもや忘れはしないだらうね。」

暫くうつ向いて默つて居たお艶は、ふと想ひ出して、例になく沈鬱な調子で再び男に甘へて見た。たとへ半年でなくつても、もう二日でも三日でもいゝから、今一度愉快に酒を飲み直した末別れようと繰り返し云つた。新助は又同じやうに、自分は明日白首するから、お艶は駿河屋へ歸つてくれと只管に頼む。双方が剛情を張つて互ひに一歩も讓らないので、結局は別れになつた。さうして二人とも一層激しく鬱ぎ込んだ。

「あゝつまらない、〳〵」

と、お艶は不平さうに立ち上つたが、やがて三味線を持つて來て緣側の障子をやけに開け放ち、鴨居際へ凭れて河東節をひき始めた。彼の女が自慢の婀娜つぽい聲音はふるえるやうに坐敷へ瀰漫して、二階の外の往來にも二三人が立ち停まつて耳を傾けた。「此の歌の文句がお前に解らないのか。此の淨瑠璃を聞かされてもお前は私を見捨てる積りか。」――さう云はんばかりに、女は折々恨みの籠つた眸で男の方を眄に見た。緣側の欄杆の彼方には、星の美しい夜の空が永代寺の樹立の上に展開して、お艶の姿を覗き込んで居た。

その時徐ろに梯子段を上つて、襖をすうッと開いた者がある。

「新助さんとやら、初めてお目にかゝりやす。私あ砂村の德兵衞でげす。」

極めて鄭重に頭を下げて、右手に羅紗革の煙草入を持つたまゝ坐敷の入口で挨拶する。味噌漉縞の錦仙のどてらに藍微塵の絆纏を引掛けた、成る程柔和らしいでつぷり太つた男である。

「ちよいと靜かにしておくれよ。獨り稽古の最中だわな。」

二人が初對面の口上を云ひ交はさうとする刹那、お艶は慳貪に叱言を浴びせて振り向きもせず節を續けた。

「いや氣の毒だが早速お前に用があるんだ。大した手間は取らせねえから、階下まで顏を借してくんねえ。」

德兵衞は何か眼くばせするらしく、ぎろりと女の顏を睨んだ。

「用事と云ふなあ解つて居るが、今夜は挺でも動かねえよ。大事な大事な男を置いて、行かれたものか考へて見ねえ。」

「そいつはお前の威ちげへだ。成る程其の方の用事もあるが、話と云ふなあ此處に居なさる新助さんの事なんだ。」

「お前は一體いつから此處へ來て居なすつた。會つた事もない新さんを知つて居るなあ不思議だなう。」

お艶は漸く三味線を片寄せてから尋ねた。

「つい今しがた來たばかりだが、階下で樣子を聞いて居りやあ、お前が頻りに新さん新さんと呼んで居るから、大方さうと察したんだ。何しろまあ、死んだと思つたお前さんが斯うして達者で居て下さりや

あ、お艶のためにもこんなめでてえ事あねえのさ。」

「だからあんまり邪魔をするなと云ふ事さ。話があるなら此處で聞かしておくんなね。」

「あはゝゝゝ。どうせ男を捕へたからにやあ、口説(くぜつ)はゆつくり出來るぢやねえか。決して手間は取らせねえから、ちよいと下まで來て貰ひてえ。」

新助は云ひ知れぬ疑惧の念に驅られながら、默つて二人の押し問答を傍觀して居た。初めの程はどうなる事かと私かに案じて居たものゝ、飽く迄穏かな徳兵衛の素振りに彼はだんだん心を弛めて、しまひにはお艶の我が儘を氣の毒にさへ感じて來た。人の好い新助が見て居ると、女はまるで「砂村の親分」を木偶のやうに扱つて居る。昔のお艶——今の染吉はこれ程えらくなつたのかと、内々驚かざるを得なかつた。

「おいお艶」

新助は遠慮がちな低い調子で横合から口を挾んだ。

「親分が折角あゝ云つて居なさるのに、それぢやお前の義理が濟むめえ。己の方にやあもう別段に話もねえんだから、素直に立つたらいゝぢやあねえか。」

「お前が云ふならさうしようよ。」

女は皮肉にニッコリ笑つて、珍しくも直ぐ言ふ事を聽いた。鏡臺の前で亂れた鬢の毛筋を掻き上げ、羽織の襟を直した後、

「新さんそれぢやあぢきに來るから、泣かねえやうに待つておいてよ。外の事なら立たねえんだが、お

前についての話と云ふから、捨てゝ置くのも氣がゝりだ。」

「なあに話と云つたつて、心配しなさる事ぢやあねえんだ。まあ御ゆつくりなせえやし。」

かう云ひ殘して、二人は梯子段を下りて行つた。

事に依つたら業平から自分を引き取りに來たのではあるまいか。それとも淸次が嗅ぎ付けて、あの德兵衛に强談判でも持ち込んだか。――「心配するな。」と云はれても、新助は多少の不安を感ぜずには居られなかつた。若しも第二の事情ならば、明日自首する體の事故さほど恐れる理由はないが、第一の場合であつたなら、新助はどうして金藏に辯解したらいゝだらう。「必ず明くる日自首しなせえよ。」と、業平町を別れる時に忠告された嚴肅な言葉を、彼は見事に違背して了つたではないか。

「お艶はほんとに凄い女だ。あいつに會ふと何故己はこんなに意氣地なくなるんだらう。いかなる事があらうとも、もうきつと明日の朝こそは自首して出よう。」

新助は我と我が心を勵した。

階下の相談は大分長引くやうであつた。時々煙管をはたく音が聞えるばかりで、いつも甲高いお艶の聲が少しも二階へ洩れて來ない。小半時も經過したかと思ふ頃、「そんぢや彼の人が何と云ふかちよいとお待ちよ。」と云ふ女の臺辭が始めて聞えた。するとお艶は慌しく二階へ駈け上つて、明らかに唯事ならぬ憂慮の表情を示しながら、秘密な異變を囁くやうに新助の鼻先へ顏を突き出して中腰に蹲踞つた。

「一體何だと云ふんだね。」

その樣子を見ると、とても默つて居られなくなつて、先づ新助がかう云つた。

「新さんお前……」

と云ひ掛けて、女はふと氣が付いて再び立ち上り、若しや誰かに聽き取られはしないかと襖の外や梯子段の上り口を檢査した末、更に更に微かな皺嗄れ聲で言葉を續けた。

「お前が惡事を働いて明日にも自首すると云ふ事を、あの德兵衞に打ち明けても大方差支へはなからうね。……いやだと云つても仕方がない。實はあたしの一了見で今打ち撒けて來たんだから。……」

さすがに新助は眞青になつた。既に覺悟はきまつて居ても、娑婆に居る間の交際だけは善人の仲間入りがしたかつたのである。

「そりや孰方でもいゝけれど、人に知られて外聞のいゝ話ぢやあねえから、ならう事なら知らせずに置きたかつたもんだなあ。」

「しかしね新さん、それを知らせなければ今夜のお前の命に關はる。……」

から云つて、女はもう一度襖の方へ氣を配りながら、

「先の德兵衞の相談と云ふなあ、「新助さんはお前の惚れた男だから、己に遠慮は要りやあしねえ。いつ迄でも二階へ泊めて置くがいゝ。その代りには今夜一と晩私の體を借してくれろ。」と斯う云ふのさ。何ても私を玉に使つて、少し金儲けの筋があるから、是非とも此れから向島の、芹澤と云ふ旗本の家まで一緒に來いと云ふんだけれど、あたしやお前が氣がゝりだから散々だゝを捏ねてやつたのさ。成る程お前が居なければ、今夜向島へ行く約束になつては居たが、どうも樣子が變だと思ふ。綺麗な口はきくものゝ、行く行くあたしを金て縛つて、自由にしたいのが彼奴の腹なんだから、事に依つたら私の留守に

何とかお前を誘ひ出して、殺さうと云ふ氣ぢやあるめえか。それとも又、清次の奴がお前を見掛けて、殺してくれと頼んだかとも思はれる。明日自首する人間と知つたらまさか殺すにも及ぶめえし此いつあ一層打ち撒けた方が無事だと思つて、あたしやあ喋舌つて了つたんだが、外に仕方がないぢやないか。」

「それで親分は何と云つた。」

「あの優男が人殺しをやつたのかつて、さすがの彼奴も眼を圓くして、膽を潰して居やあがつたよ。それで漸う安心して、無闇な事あしさうもねえから大丈夫さ。……だがね新さん、まあその話はそれとして、いろ／＼様子を聞いて見ると、あたしやどうしても今夜の用が外されねえ譯が出來て、やつぱり今から向島まで行かざあならねえ。……」

お艶は斯う云つて、歸りは明日の朝になるから、もう一と晩だけ泊まつてくれろと、執念深く追究した。彼の女の辯解に依ると、並のお客の座敷なら無論斷つて了ふのだが、芹澤の向島の寮だけは今夜行かないと大變な手違ひ、——金で云つたら百兩ばかりの損害になる。それだけならばまだいゝが、此の仕事と云ふのは實は徳兵衛と結托して、大分惡辣な手段を弄して、强請（ゆすり）欺瞞（かたり）も同様に金を搾り取る計劃故、一つ時間が狂つたら手筈が凡べて滅茶々々になる。——それを口實に男を引き留めたいと云ふ底意もあつて、嘘か眞（まこと）かお艶は仰山な事を云つた。

聞けば聞く程新助は女の墮落が淺ましく、昔の駿河屋の娘御が旗本を相手に强請を働かうなどゝは、どうして斯うも變つたものかと呆れ果てた。彼はもう忠告を與へる勇氣も失せて、たゞ／＼自分自身が一刻も早く危地を脱して了ひたいと焦慮した。

「それ程大事なお座敷を斷るにやあ及ばねえ。己の方の話は濟んだし、いつまで居ても同じだから、用の出來たのを幸ひにいつそ此の場で思ひ切りよく別れるとしよう。自首をするのに遲い早いは構はねえから。」

お艶は暫く萎たれがちにうつむいて、火鉢の灰を掻きながら欝々と考へ込んで了つたが、やがて何事か決心したらしく顏を擡げてきつぱりと云つた。

「さうまで堅い覺悟なら、どうも今更仕樣がねえや。本當を云やあ一日延ばしにお前を引き留め、あたしやどうにかして圓めて了ふ積りで居たが、もうさつぱりと斷念した。向島へ行くにしたつて、明日歸ると云つたなあ、あれはみいんな噓なんだから、せめて夜中の八つまで私の戻りを待つて居てお呉れ。必ず歸つて來ようから。」

男は辛うじて納得したものゝ、それでも女は危がつて、寧ろ今夜の九つ頃に、箱屋に化けて迎ひに來いと云ひ出した。新助が一も二もなく拒絕すると、お艶は非常に憤つた。私の最後の願と云ふのを、かなへてくれない道理はない。否だと云ふなら、たとへ德兵衞が何と云はうと、動くもんかと頑張り始めた。遂には德兵衞が仲裁に出て、拜まねばかりに宥めすかしてもいつかなお艶は承知せず、やつとの事で新助の方を說き伏せた。

四

德兵衞とお艶とが出て行つてから丁度一時半程立つて、九つの鐘を相圖に新助は箱屋の姿で迎へに赴

いた。向島の寮と云ふのは、秋葉神社から二三町先の寺島村の田甫に近い所と聞いて、教へられた通りの路を辿つて行つた。仲町からは一里の餘もある遠方故、中途まで駕籠に乘るやうに注意されて居たものゝ、彼は此の世の見收めに江戸の深夜の町のさまを、腦裡へ刻みつけて置きたかつたのである。

仲町の色里を一歩離れると、もう往來はひつそりとして、一軒も起きて居る家はなかつた。蔦屋の二階に三日二晩入り浸つて、極度のあくどい歡樂に魂を靡爛された新助は、人通りのない、ひや／＼とした夜半の風に寧ろ蘇生したやうな快味を覺えた。吾妻橋の袂を過ぎた時、彼は圖らずも清島町と業平の家を想ひ出した。さうして、兩方の方角を振り向きながら、「お父さんも親分も、あした自首するから赦して下せえ。」と心の内に謝罪して、遙かに手を合せた。枕橋を渡つてこんもりとした葉櫻の土手へかゝつた頃、銅色の下弦の月が中天に懸つて、何か不祥な前兆でも示すが如く大川の水に映つて居た。彼は暫く彳立して悠々たる黒い流れと空一杯の星の光を視詰めて居た。吉原へ通ふ屋根船が、折々一艘二艘づゝ、淋しい河上を山谷堀の方へしんみりと漕いで行つた。

それにしても今夜徳兵衞とぐるになつて、お艶が企んだ惡事と云ふのは何であらう。金藏親分の口から聞いた、「年に似合はず大膽な」と云ふ仲町一般の染吉に對する惡評は、扨はやつぱり本當であるらしい。新助は、自分が惡事さへ犯さなかつたらお艶と夫婦になれたものをと悔んで居たが噂の通りの妖婦だとすれば、たとへ自分は無傷であつても、やつぱり一緒にはなれなかつたのだ。さう考へれば却つてあきらめがつき易い。……彼は頻りと胸の中でこんな愚痴をこぼしながら、牛の御前の坂を降りた。

寺島村の寮と云ふのは直ぐにわかつた。旗本の侍の別莊だとは聞いて居るものゝ、餘程の金持ちと見

えて、生垣の外を建仁寺の塀で圍つた、夜目にもなか〳〵驚かれるくらゐ宏荘な構へである。裏門の戸の隙間から勝手口を覗き込むと、此の夜更に臺所の土間の雨戸が二三尺ばかり明いて居て、かすかに燈火の光は見えるが話はさつぱり洩れて來ない。

「今晩は、御免下せえやし。仲町の檢番から參りやした。」

何の締りもしてないので、彼は聲を掛けながら中へ這入つた。

「檢番から何で今頃やつて來たのだ。」

例の雨戸の隙間から、仲間らしいのが提灯と顔だけ出して、胡散臭さうに新助の樣子をまざ〳〵と照らして云つた。

「えへゝゝゝ」と、新助は無器用に笑つて「實は何でごぜえやす。染吉姐さんのお迎ひに參りやしたんて……」

「なに染吉の迎ひに來たと。ふざけやがるな此の野郎！」

皆まで云はせず仲間は大喝した。

「……手前も大方仲間だらうが、もう何も彼も曝れちまつたんだ。内の殿樣を誑かしてうま〳〵大金をせしめようたッて、さうは問屋で卸さねえや。……」

あッけに取られて新助が呆然として居ると、其の時忽ち奥の座敷で怒號叫喚の響が起つた。

「へん騙りだと！惚けた事を抜かしやがる！うぬが勝手に女に惚れて、寄越した金が何で騙りだ。」

かう云ふのは疑もなく德兵衞がたんかを切つて居るのである。

「かうぐれはまになつたからにやあ、今更隠しても追つ付かねえや。成る程あたしや此の徳兵衛と一緒になつて、お前を一杯陥めようとかゝつたのさ。だが芹澤さん、お前にしたつて欺されたなお己が馬鹿だとあきらめて、勘辨するのが當り前だあね。それともそんなに口惜しけりや、切るとも突くとも勝手におし、たとへ百兩が千兩でも貰つた金は返しやあしねえよ。」

嵐の前の静かさとでも云はうか、座敷の方は暫くしんと靜まつて、落ち着き拂つたお艶の口上が嚠喨々と聞えて居る。

そのうちに「野郎抜いたなあ!」と徳兵衛が絶叫すると、「此のさんぴんめ、生意氣な眞似をしやあがる!」とお艶が金切聲を擧げた。同時にばた/\と三四人の激しく爭ふ大騒擾が始まつた。襖を蹴る音、疊へどしんと轉る音、刃と刃がかちり/\と相搏つ音、……やがて「ひやあア」と悲鳴を放つたかと思ふと、徳兵衛の圓々と太つた顔が血だらけになつて勝手口へ駈け出して來た。續いてお艶も髪を亂して飛び出したが、後から追ひかけて來る侍にいきなり襟頸をむんづと摑まれ、大上段に振り翳つた刀の下へ引き据えられた。

新助は物をも云はず土間から跳り上つて侍の右の手頸にぶら下つた。

「腹の立つなあ尤もだが、此の女にやあ罪はねえんだ。勘忍してやつておくんなせえ。」

「手前は何だ。」

と云つて、その侍は刀を控へて振り返つた。見れば年頃三十五六の、青々とした月代の痕の美い、口鼻の秀いてた立派な男子で、煤竹色の羽二重の袷に黒天鵞絨の帯を締めた、氣品の高い風采である。

「私やあ姐さんを迎へに來た仲町の箱屋でござえやす。どう云ふ譯か存じませんが、あなたも御身分のおあんなさる御方で、短氣な眞似をなすつちやあ、却つて外聞が惡いと云ふもの。どうぞ其の刀をお收めなすつて下せえまし。」

「そんなら今夜は勘忍してつかはす。」

芹澤はどんと女を突き放して、

「手切れのつもりで金は殘らずくれてやる。向後一切足踏みは許さんぞ。」

かう云つて、すた／＼と奧の間へ這入つて了つた。

「ふん間拔けめ、來いと云つても來やあしねえよ。」

お艶は後を見送つて憎々しげに罵つた。

先の仲間は何處へ行つたかいくれ姿が見えなかつた。唯德兵衛が切り付けられた頭部を抱へて、上り框に腰掛けながら苦しげに呻吟して居た。彼は頭の他に二の腕と太股へも非常な深手を負はされて、日頃の氣丈な男にも似ず、半死半生の體で蠢いて居た。

「お艶、お艶。」

と、彼は微かに喘ぎながら呼んだ。

「傷は急所を外れて居るが、こんなに血が出ちやとても己は助からねえ。芹澤の奴を、……新助さんに助太刀を頼んで、芹澤の奴をたゝッころして、どうか讐を取つてくんねえ。」

「馬鹿な事をお云ひでない。此のくれえの傷でそんな弱音を吐くやうぢやあ、ほんとにお前の名折れに

ならあ。仲間の野郎が何處かへ駈けつけたらしいから、早く討手の來ねえうちに、あたしにつかまつて逃げておくれ。」

お艶は邪慳に德兵衛の腕を引張つて、それでもかひ〴〵しく擔ぎ上げた。

討手と聞いて新助は仰天した。此の場で捕縛せられたら、彼はどうして再度の罪を言ひ說く事が出來るだらう。さうかと云つて、二人を見捨てる譯にも行かず、彼は辛くもお艶を助けて、兩方から德兵衛の肩を擡げながら、引き擦るやうに駈け出した。

人家の稀な邸の裏の田圃路を、殆んど夢中で五六町ばかり走つて來た三人は、とある雜樹の並木の蔭へ忍び込んで先づ兎も角も息をついた。幸ひに討手の影も見えないらしい。新助は懷ろの手拭を裂いて未だに激しく出血する手負ひの傷口を縛つてやつた。三人とも孰れが負傷者だか判らぬ程に、血でべとべとに染まつて居た。

「新助さん、お前に飛んだ厄介になるなう。」

德兵衛は路端に腰掛けた女の膝に倚りかゝて、沈痛な語氣で云つた。

「……此れで內まで行けさへすりやあ己の命は助かるんだ。お前さんは命の親だ。」

「親分、ほんとにお前大丈夫かい。どうやら步いて行かれるかい。」

暫く休んでからお艶はさも情愛の籠つたらしい、親切な調子で尋ねた。

「步けなけりやあ二人で背負つて上げるから、一つ試しに立つて御覽な。」

「なあにもう確かだ。」

から云つて徳兵衛は立ち上つたが、危くよろ〳〵と蹣きかゝつて、再び女の腕に縋れた。

「おい親分、その鹽梅ぢやあとてもいけねえ。いつそあたしが斯うしてやるから一と思ひにくたばつちまへ。」

不意にお艶はよろめく男の髷を掴んで、恐ろしい地響を立てゝ大地へどたんと壓へつけた。さうして、いつの間に持つて來たのか、帶の間から剃刀を出してぎらりと男の面部へ翳した。男は危くも下からその手をしつかり支へて、必死の力で撥ね返すや否や、

「どうせ死ぬなら手前の命も貰つてやる。」

と、あべこべに出刄庖丁を振り上げて斬つてかゝる。突嗟の間の出來事に、暗くはあるし勝手は判らず、新助は狼狽しながら二人の周圍を廻つて居るうち、女の脚に絡み着いた徳兵衛の頸たまを搜りあてると、いきなり割り込んで引き放した。

「手前も大方ぐるになつて己を殺すと云ふんだらう。さあ殺すなら殺しやあがれ。」

から云つて死物狂ひの勢鋭く今度は新助に斬り掛けたが、忽ち庖丁を奪ひ取られた。その間にお艶は再び起き上り、相手の足を掬ひ投げて又も凄じい組打ちを始めた。傷いては居てもさすが男の腕力にお艶はやつぱり敵し兼ねて、とうとう仰向けに押さへつけられ、息も絶えよと懸命に襟頸を絞められた。若しも手負に今少しの餘力があつたら、彼の女はアハヤ締め殺される筈であるのに、其處まで來るとも

う徳兵衛はがッかりして了つた。

「新さんお前何をして居る。」

と、お艶は切なさうに喉を搾つて救を求めた。

「……此奴が私を締め殺さうとしてるんだよ。……今夜を幸ひ、此の徳兵衛の死に損ひをたゝんでしまやあ、あたしばかりかお前も自由になれるぢやないか。こいつを殺すにこんな好い時はありやしないんだ。……お願ひだから早く此奴を……」

頻りと絶叫して居るうちに、女の命はだんだん危險に陷るらしく、次第に次第にその聲は衰へ行つて遂にはつたり止みさうになつた。

「畜生！　あれ苦しいッ、新さんどうにかしておくれ！」

女はもう一度悲鳴を放つた。その聲が終るか終らない一刹那、新助は女の體に跨つて居る手負ひの背中へ、奪ひ取つた庖丁の鋒を突き徹した。それでも相手は未だに怯まず、新助の手元へ武者振り着いて、蹴るやら擲るやら噛むやら引搔くやら散々に暴れ廻る。彼は三太を殺す時も女房を殺す時も、こんな猛烈な抵抗を受けた覺えがない。二人は立つてばかり居なかつた、轉がつたり這ひずつたり髮の毛を捲り合つたりして人間だか獸だか判らないやうな格闘を續けた。やがて新助は殆んど偶然に相手の脇腹をぶくりと抉つた。

「や、やいお艶！　己は死んでも化けて出るぞ！」

と聲叫んで德兵衛はぶるぶると身顫ひした。同時に心臟へ二度目の刃を立てられて、「ひいッ」と鳴いて、敵の兩腕に掴つたまゝ硬張つて了つた。

「化けて出るなら出るがいゝ。態あ見やがれ。」

とお艶が云つた。

「此れで三人目だ。もう己は仕樣がねえ。……後生だから己と一緒に死んでくれ。」

體に纏ひ着いた屍體を放り出すと、新助は齒の根も合はずわく〳〵して云つた。

「何をお云ひだ。そのくらゐなら此奴を殺した效がねえよ。どうせお前も深みへ嵌まつた體ぢやねえか、此のまゝ知らん顏をして居りやあ、誰にも判りやしないんだから、いつそ圖太く世の中を渡る氣になつておくれ。あたしや死ぬのは嫌だ〳〵。」

新助はもう前後の分別もなくなつて居た。見す〳〵女に謀られたと知りながら、彼はとうたう三日に渡る剛情我慢の角を折つた。

「そんなら承知をしておくれか。うれしい、うれしい。」

と云つて、お艶は夢中で雀躍りして、有頂天に喜びながら、血潮だらけの男の胸へ跳び着いた。

死んだやうに固くなつて考へ込で居る新助を傍へ置いて、彼の女は獨り屍骸の處置をつけ始めた。「冥土へ行くのに用はあるめえ。」とお艶は屍骸の懷中へ手を挿し入れて、先づ百兩の胴卷を引き擦り出した。それから着物を殘らず剝して、小さく圓めて紐で括つた。證據となる可き物品は悉く持つて逃げる算段なのである。しまひには例の剃刀を出して德兵衞の顏を縱横に切り刻んだ揚句、泥田の中へ埋め込んだ。此れなら屍體が發見されても、到底識別される恐れはない。

其の晩遲く、二人は淋しい街路を擇んで仲町の家へこつそり歸つた。

三

其の後砂村の子分達は、徳兵衛の行くゑを物色したが、遂に何等の手がゝりもなかつた。芹澤に聞けば、成る程痛手は負はせたけれど、三人共逃げ失せて了つたと云ふ。お艶に聞けば、討手が恐さに逃げる途中でばらばらになり、それきり親分は見えなくなつた。無事に逃げてもあの負傷では、到底命は危からうと云ふ。

惡運の强い二人は立派に世間を欺き終せて、誰に憚るところなく、面白可笑しく日を送つた。惡辣と云ふ評判を受けながら、染吉の名は仲町にます〳〵高まり、全盛の榮華はいつ迄も續きさうであつた。然るに凶行の當夜から半月ばかり過ぎた或る日の朝、「御免下せえ。」と云つてひよつこり蔦屋の格子先を訪れたのは、思ひも掛けぬ業平町の金藏である。丁度長火鉢に凭れて朝酒を飮んで居た新助は、その聲を聞くと驚いて二階へ馳せ上つた。

階下ではお艶と金藏との押し問答が始まつた。「さう云ふ人は知りませんよ。」と女は飽く迄空惚けて、けんもほろゝの挨拶をする。

「居ないと云ふなら仕方がごわせん。當人にその氣がなけりやあ、家搜しをして尋ね出しても無駄な話だから、私あ素直に歸りやせう。だが染吉さん、若しも此の後新助と云ふ男に會ひなすつたらよくさう云つて下せえよ。私も男だから一旦誓約した事は、お前の方で破つても此方は必ず守つてやる。めつたに喋舌りやあしねえから安心してもいゝ代りに、それ程命が惜しければ、どうぞ以來は身を愼んで、私の顏も潰さねえやう、自分の壽命も縮めねえやう、生れ變つた人間になつて貰ひてえ。私の内を出てからも、大方ろくな事あしめえが、せめて此れから考へ直して、違つた道を蹈まねえやうにしてくれろ。

くれ〳〵も言傳をして下せえよ。……それぢやあ大きにお邪魔をしやした。」

から云つて、金藏は歸つて了つた。

「新さん、うまく行つたねえ。」

お艶は二階へ上つて來て、自分の手柄を誇つて見せたが、あまり男が鬱ぎ込んで居る樣子に、

「そんなにお前が氣になるなら、いつそ彼奴も片附けて了はうか。」

と云つた。

「己もさうは思つたんだが、なんぼ何でもあの親分を殺しちやあ、死んだ後まで天罰が恐ろしい。」

と、新助は溜息をついて首を振つた。

けれども彼の頭には、人を殺して金を盗む計劃ばかりが始終泛かんで來るやうになつた。あまたの血だらけな罪業から出來上つた夫婦の間には、やはり血だらけな刺戟がなければ互の樂しみが薄いやうに感ぜられた。彼は人間の顏さへ見れば、直ぐにその肉體の慘たらしい屍骸になつた光景を想像した。どうしてもまだ一人や二人は、彼の手にかゝつて非業の最後を遂ぐ可き者がありさうに考へられた。

其の時分、船頭の清次は商賣上の關係から、いつか再びお艶に接近するやうになつた。その船宿が非常に繁昌する上に、いろ〳〵と不正な收入もあるからして、彼は年中羽振がよく、家も立派に改築して高橋界隈での物持ちの一人に數へられて居た。船頭仲間の大親分と崇められる身になれば、もと〳〵未練のあつた所へ、もう德兵衛は死んだらしいし、それでなくても不利益な秘密を摑まれて居る弱味に引かされ、彼はさま〴〵に機嫌を取つて、多額な金をゆすられながらお艶の心を動かさうと努めて見た。

お艶は初めから腹に一物あつたので、わざと其れ程すげなく扱はず、好い加減に繰つた揚句、たんまり捲き上げて放り出さうと企んで居た。

「それ程思つてくれるのならあたしも滿更嫌ぢやあないが、あのお市つあんが居る間はどうも何だか氣が濟まねえのさ。」

と、彼の女は口說かれる度毎に云ひ逃れた。お市と云ふのは淸次が三度目の女房の事で、昔は葭町の藝者であつたのを二三年前から妾にして居て、此の間先妻が殺されると同時に內へ引き擦り込んだのである。大した美人といふのでもないが、何故か淸次は此の女に頭が上らず、浮氣をすれば些細な事でも胸倉を取つてこづき廻される。いか程お艶に憧れて居ても、お市を逐ひ出す事ばかりは到底決行出來ないらしい。

「あいつが居たつて構ふ事はありやあしねえ。いくらでも知れねえやうに出來るぢやあないか。」

と、彼は云つたが、「それではあたしが不承知だ。惚れる以上は他の女を捨てちまつて、あたしを女房にしておくれ。」と、お艶は强ひて難題を持ちかけては、淸次を手古摺らせた。

「ねえ淸次さん、お前は私に惚れて居るとお云ひだけれど、實は口先ばかりだらう。ほんとに惚れて居るのなら、お前の惡事を摑まれて居るお市つあんを殺して了ふがいゝぢやあないか。」

お艶は折を見計らつて、とうたうこんな風に唆かした。

「罪のない新さんですら殺したお前に、その位の度胸はあるだらうがね。……」

「あれは三太のした事で、己の知つた事ぢやあねえんだ。……しかしお前も近頃はえらい女になんな

すつたなう。」

から云つて清次は驚いたもの丶、彼の女の諷刺に大分心を動かしたやうであつた。

「今に見やがれ、清次夫婦を一とまとめにして昔の讐を取つてやるから。」——蔦屋の二階の寝物語に、好いた同士は折々こんな密談をして、機會の來るのを樂しみにした。新助は朝夕の外出にも氣を配つて、自分の顔を成る可く人に注意されないやうに努めた。

機會は遂にその年の眞夏の七月になつて到來した。清次は仲間の一人が召捕られた爲め、今迄の惡事が追ひ／＼露顯し始めて、近日中に家を疊み、暫く田舍へ逐轉しなければならなくなつた。此の際邪魔者のお市の奴を亡き者にするから、お艶も一緒に逃亡して貰ひたい。勿論金は有るだけ持つて、夜中窃かに船で逃げようと云ふ。——此の相談がお艶の耳へ吹き込まれると、彼の女は轟く胸を抑へて、一も二もなく承諾した。

于蘭盆が過ぎてから四五日後の夜の四つ時が、いよ／＼お市を殺害して江戸を立ち退きの刻限と定められた。その前日迄に清次はすつかり手筈を定めて、多勢の奉公人には暇を出し、家財道具を賣り片附け、「お前だけは一緒に伴れて逃げてやる。」と女房ばかりを留めて置いた。お艶の方へは當夜四つの鐘を相圖に勝手口から忍んで來てくれ。それまでにはお市の處置を附けて了ふと云つて寄越した。

かねて新助と諜し合はせて、お艶はひとりお高祖頭巾に面體を包み、約束の時を違へず例の船宿の臺所から這入つて行つた、

「こ丶だ、こ丶だ。」

と云つて、清次は奥の八疊の間に行燈をつけて仁王立ちに立つて居た。その足許に仰け反つて虚空を摑んで倒れて居るのはお市の屍骸であつた。

「今やッつけたところなんだが、大さう骨を折らせやがつた。」

彼はまだ息をせいせい切らせて居た。

「どんな顔をして居るか、ちよいと私に見せておくれ。」

お艶は悠々と行燈の心を立てゝ、女房の姿を覗き込んだ。喉をおさへられて充血したせゐか、お市の血色は生けるが如く美しかつた。苦悶の表情が寧ろ笑つて居るやうに見えて、天井を睨みつけた瞳ばかりが物凄かつた。

「戸外に船が繫いである。此奴も一緒に積み込んで沖へ出たらば沈めて了はう。……金は此れだけあるんだが……」

清次はかう云つて、五百兩の小判の這入つた重さうな叺をどさりと其處へ置いて見せた。

その時再び勝手口の戸が靜かに開いて、忍び込んだのは新助である。

「清次さん暫く。いろ／＼お艶が厄介になつて濟まねえなあ。」

「なんだ、お前は新助さんか。」

清次は眞青になつて云つた。頰冠りの手拭ひを取つて浪の前に立ちはだかつた男を見れば、源氏車に荒浪の鳴海絞りの浴衣を着て手綱染の三尺を締めた、ふッくらとした傳九郎髷の毛筋の美しい、服裝こそ窶れ紛ひもない新助である。

「察しの通り新助にやあ違へねえが、昔の己とはちいッとばかり違つて居る。お前の女房を殺したのも、三太の奴を殺したのも、みんな己の仕業なんだ。」

二た言三言交へた後に直ぐ格闘が演ぜられた。清次は手元に何の刃物をも用意して居なかつたので、忽ち切りまくられて了つた。矢庭にお艶は背後から手を伸ばして、助けを呼ばうとする清次の唇を堅く塞いだ。その間に新助は充分にしとめた。

盗んで來た五百兩入の叺は、したい三昧の贅を盡して、その年の暮れまでに悉皆遣ひ果たして了つた。恐ろしい二人の戀は丁度一年續いたのである。

「うめえ仕事にありついて、面白い正月を送りてえなあ。」

と、懐ろの淋しくなるまゝに二人は又そんな相談を囁き合つたが、生憎めぼしい事件も起らず、お艶は腕へ縒をかけてお客をたらす事にばかり努力した。

新助の女に對する愛慕の情は、自分の墮落が激しくなる程熱烈になつて、「お客をたらす」とは云ふものゝ、歸りの遲い晩などには散々嫌味を列べたりした。

「ほんとにお前は仕樣がねえ。これ程お前に惚れて居るのに、私が浮氣をするかどうか大概わかりさうなもんだが、それぢやあ商賣が出來やしねえよ。」

かう云つて、お艶はいつも笑ふばかりで、まるで相手にしなかつた。歸りの遲いだけならまだしも、

どうかすると一と晩寢ずに待たされて、明くる日の朝漸う戾る事さへあつた。それを疑つて兎や角云ふと、お艶はやつぱり平氣なもので、「藝者の座敷と云ふものはなか〳〵裏には裏がある。ましてお客を操らうとすれば、わざと醉ひ潰れた眞似をして泊るぐらゐは有り勝ちの事。それで立派に誤魔化して行く手管がなければ、とてもお金は搾れない。」――こんな事を云つて、飽く迄も自分の貞操の純潔な事を辯明した。惡人になつても根が正直な新助は、未だに藝者社會の道德の程度を一向呑み込んで居なかつた。彼の知つて居る唯一の藝者は染吉のお艶より外にないので、折々嫉妬を起しても結局彼の女を信じて居た。

女の餘所へ泊る度數はだんだん多くなるやうであつた。殊に不思議なのは、歸つて來れば昨夜は何處のお客に呼ばれて何處の座敷へ行つたとか、くど〳〵言ひ譯を試みながら、始終擧動がそはそはして少しも落ち着いた樣子がない。邪推をすれば、包むに餘る嬉しさを胸に湛へて居るやうにも思はれる。或る晩お艶はひどく泥醉して、お客の肩にだらしなく凭れたまゝ自分の家へ戾つて來た。

「新さん、此れはこの頃御贔負になるあたしの大事な旦那樣だよ。お前も滿更知らねえ顏ぢやあるめえから、お目に懸つて仲直りをして、ようくお禮をしてくんな。」

かう云つた彼の女の舌には、少し毒氣を含んで居た。旦那と云ふのはいつか德兵衛と大喧嘩をした旗本の芹澤である。あの晩一と目會つた時にも新助はさう感じたが、今夜親しく接して見れば、眼鼻立ちの凜々しい、輪廓の整つた、自然と頭の下るやうな品格の高い侍である。「扨ては萬一此の男が……」と、彼はその時何となく直覺した。

「新助とやら、過日の事は水に流して仲直りをして貰ひたい。寺島村の拙者の寮へもたまには遊びに來たがよからう。」

と云つて、芹澤は悧巧さうな薄い唇に微笑を洩らした。彼は非常に酩酊して居るらしかつた。

ひらひらと燃え立つ嫉妬を强ひて堪(こら)へて、新助はたしかな證據を握るまで默過して居た。迂濶な事を口走れば、却つてお艶からやりこめられる覺えがあるので、退引きならぬ現場を捕へてやらうと思つたのである。毎夜密かに手を廻して女の出先を探つたり、抱への藝者を買收して客の噂を聞き取つたり、一月もかゝつて檢べた揚句、新助は大體自分の推量の誤りでない事を悟つた。けれども彼の知り得たところは唯間接の證左ばかりで、どうしても現狀を取つて押さへる機會がない。女は何處までも新助を甘く見くびつて、歸つて來れば眞(まこと)しやかに跡かたもない事實を捏造し、諸方面の客筋の話をして聞かせたが、其の實彼の女は芹澤の座敷へばかりへばり着いて居た。その空々しい振る舞ひが判つて來ると、新助は業が煮えて溜らなくなり、遂に正月の三日の宵に不充分な調査の結果を材料にして厳しい詰問の矢を放つた。

「さう云はれりやあ仕方がない。お前も歳を取つたゞけにちッたあ悧巧になつたと見える。……」

頭から否定するかと思ひの外、お艶は冷眼に男を眺めて嘲けるやうに云つた。

「……成る程あたしは芹澤さんに體を賣つたにや違へねえのさ。しかし新さん、お前は藝者屋の兄いなら少しは譯を考へて御覧。いくら私が凄腕だつて口先ばかり使つたんぢやお客の金は搾れねえよ。た

とへ私が嘘をついても、其處邊の呼吸は大概樣子で知れさうなもんぢやあねえか。もと〳〵浮氣でするんぢやなし。お前に樂をさせてえばかりでこんな苦勞をして居るのに、有り難えとも思はねえで野暮臭い事をお云ひでない。知らん顏して默つて居るのが當り前さ。――もう斯うなりやあ云つて了ふが、淸次にだつて德兵衞にだつて、あたしやあ體を委せた覺えがあるんだよ。それを今迄知らなねえで居るお前の方が、餘つぽど唐變木ぢやあねえか。」

罵られて新助はカッとなつた。單にお艶の節操が不純であると云ふだけなら、彼にも我慢のしようはあつたが、彼の女の一言一句には既に徼塵の誠意をも認める事が出來なかつた。寧ろ喧嘩を吹き掛けて、破裂したまゝ物別れをしようと云ふのが、女の眞意らしかつた。

「なる程己は間拔けだつた。お前がそんな心たあ己あちッとも知らなかつた。よくも今迄欺しやがつたな。」

いきなりお艶の襟髮を取つて膝下に引き据えると、彼は有り合ふ衣紋竹で所嫌はずぴしぴしと撻つた。

擲つて居るうちに新助は、親に捨てられた子供のやうな心細い悲哀の情が、汪然として胸に塞がるのを覺えた。今夜の詰問の結果がこんな事にならうとは、……こんな慘憺たる事にならうとは彼は夢にも想像して居なかつた。女は彼の用意よりも、もつと根深く用意をして居た。此の女に捨てられたら自分は果してどうなるだらう？――そんな事まで新助はとても考へて居なかつた。

「打つなら勝手に打ちやあがれ。あたしやお前の推量通り片澤さんに惚れて居るんだ。お前のやうな唐變木にやあ、とつくに愛憎をつかして居る。」

此の一言は期待して居た文句であるが、からまざまざと宣告されると、男は我知らずハッとして衣紋竹の手を弛めた。もう取り返しがつかなくなつた――さう思ふと溜らない淋しさが込み上げて來た。

「何も云はない、己が惡かつた。此れから後は決して邪推をしないから何卒氣持を改めてくれ。もう一遍考へ直して、昔のやうに愛してくれ。」――から云ふ意味を幾度も繰り返して、新助は女の前に跪きつゝ叩頭した。それに對するお艶の答は、いつ迄立つても同一で簡單であつた。「自分の方にも都合があるから、今二三日熟慮の猶豫を與へてくれ。」と云ふのである。

「お艶殺し」はそれから二三日目に決行された。女はいつもの豪膽にも似ず、新助に最後の手段を取られる事をひどく恐れて居るらしかつた。それで内々身支度をして、三日目の夜遲く茶屋の座敷からそのまゝ姿を晦ました。かねがね油斷なく警戒して居た新助は、檢番へ問ひ合はせて出奔したと氣付くや否や、向島をさして後を追ひ掛けた。

三圍神社の鳥居に近い土手の上で、女はとうたう四つ手駕籠から引き擦り出された。お艶は新助の手先を支へながら、

「新さん後生だ、芹澤さんに一と目會はせてから殺しておくれ。」

と拜んで云つた。彼の女は斬りかけられつゝ逃げ廻つて、「人殺し〳〵」と連呼した。息の根の止ま迄新しい戀人の芹澤の名を叫び續けた

（大正三年十二月作）



現代男（一幕物）

逍遥翻案

東京からは數十里離れた或溫泉場附近の森林、うねり〳〵一筋の徑は附いてゐるが、杣人や獵師の通る路らしく、眞晝間も閴としてゐる。眞中に大きな欅の老木、其枝々が舞臺一ぱいに掩ひかぶさつて、その隙間から麗かな日光がちら〳〵さしてゐる。大空の、枝の間から見える部分は、ちり雲もない純碧。初夏の時候。

緞帳が上ると、埴輪支郎、欅の根がたに、幹に脊をもたせ、大凝りに凝つて裝釘した最新派の詩集らしいものを讀みながら腰を掛けてゐる。年齡は二十七八、洋行歸りを驚かすほどの大ハイカラ、帽子から脊廣から持物一切、あつさりと併しながら最近流行の粹を穿つた打扮。つい此近郡の、資産家の二男で、東京の某私立大學の法律科に入學して、順當なら夙に卒業する筈であつたのだが、同じ下宿の文學科生と別懇になつた結果、課業はそつちのけに、最初は新派の發句、次に新派の三十一文字、それから小說、それから氣分劇にまでも手を出し、同時に實地の觀察にも努力したので、少々健康を害し、年期も延びて、一昨年の夏やつと卒業し、それから親族の手前などもあつて、辯護士試驗を受けて見たが、都合よく及第だけ

はしたので、此春國へ歸り、小使錢に事かゝぬ身を幸ひに、まだそのまゝぶらついてゐるのである。

緞帳のまだ下りてゐるうちから、無數の小鳥の囀る聲々が聞え、それが緞帳の上るにつれて愈々かしましくなり、上りをはると林中の全景が展開される。忽然として野鳩が遠い處で啼く。と誰か何かよ一羽支郎の眞頭の上の木で囀りはじめる、他の一羽がそれに答へる。支郎はそれを見あげて

支　面白いなあ！　世話物のシーンフリードよろしくだ。ふゝ。

得意らしく微笑して、一寸の間聽耳を立てゝゐたが、また書を讀み耽ける。突如として郭公鳥が頻に呼びはじめる。暫くして支郎はまた見あげて

あゝ彼れだ！　郭公だ！…「飯炊の底叩く音や閑子鳥」！　杜鵑なんて譯するンだから話せないや、カクコウと音で訓ませりやいゝのに。…（不審さうに）どうしたらう？　もう來さうなもんだが！

首を長くして暫く下手奥の方を眺めてゐたが、又書を讀み耽る。

暫くして、奥の下手、樹木の間に、日光をうけた美しい日傘が閃然見えて、やつと十六位かと思はれる脊のすらりとした河田いよ子がやつて來る。近年まで英國に在勤してゐて、病氣の爲に歸朝し、昨年新築の別莊へ轉地して療養した甲斐もなく、空しくなつた或高等官の秘蔵娘、春になると起る持病があるので、母と共に三月初めから引續いての別莊ずまひ、英國かぶれの、一寸理窟つぽい家庭そだちではあるが、一粒種だから十分氣隨にもさせてあつて、ハイカラな、人見知りをしない割合には純撲な娘。すらりとした極輕さうな本場仕立の洋服姿がよく似あふ混種めいた顏だち。時候相當の女帽子、流行のパラソル。

娘が傍の近くへ來ると、枯枝が踏まれてポキッといふ音を立てる、で支郎は顏をあげる。すぐ立上つて、書を閉ぢて、熱心になつて、つか〳〵と進み、右の手をさし出す、書を左の手に持つたまゝで。

支　（不足らしく）晩いぢやありませんか？　（と懐中時器を見る。）

娘　（しづかに）さう？　晩くつて？

支　晩からうぢやありませんか？　三時にいらつしやる筈でしたよ。

娘　あら！　三時なんてそんなお約束しやしないわ。あたしてんでお逢ひするなんてお約束しやしなかつたわ。

支　そりやさうですとも。ですけれど、いつで

でしたらう？

娘　(氣のなさゝうに)さうでしたかねえ。

文　(熱心に)さうでしたよ。(又時器を見て)もう半を過ぎてますよ。全半時間てもの、僕ァ待惚にあはされちまつたんでさ。

娘　だつて、爲樣がなかつたもの。阿母さまに引張られちまつたの。お稽古の爲に、床の花をもう一度生けかへろつていふんですもの。

文　あなたのおかァさまは、隨分鈍物ですねえ！

娘　(目をまるくして)あら！

文　どうしたんです？

娘　(開き直つて)そんな言葉をお使ひになつても可い譯なんでせうか？

文　(平氣で)可いでせう——實際鈍物なら。(娘は又目を丸くする)。親てものは大概鈍物ですよ。僕ァとうからさう信じてゐますよねえ、生花の稽古なんか、もつと早くやらせといたが可いぢやありませんか？

朝のうちかなんかに。貴孃もまたさうおつしやれば可いのに。

娘　さうは言はれなかつたわ。とうにしなければならなかつたのを、あたし忘れてゐたんですもの。一昨日も一昨々日も吩咐けられてゐたんですけれど、つい忘れつちまつたの。

文　さう。おや仕方が無いや。(椽の方へ向きて)ねえ、こゝへいらつしやいよ、一しよにお掛けなさいよ。……好い天氣でせう？

娘　(躊躇しつゝ)腰掛けなけりやならない譯はないでせう？

文　また始まりましたね。だつて、立つてゐなけりやならない譯もないでせう。僕ァ立つてゐるのは嫌ひですよ。ですから——ね、樂にしてお話しませうよ。

(娘も文郎も腰をおろす。いよ子は椽の下の左手の芝土手に掛ける。文郎は右の芝土手に腰をすゑる。)

娘 でもね、あたし、あなたと爰に斯うやつてゐなけりやならない譯はないでせう？ それをいふのですの。こんなにしてると、何だかアノ眞實のお親交かなんかのやうぢやありませんか？

支 おや！ あなたとわたしとは、もう既に知交になつてるぢやありませんか？

小鳥の聲々が靜かに聞える。

娘 なつてませんん、正當には。紹介されたことがないんですもの。つい此森の中で、ほんの偶然の機會でお逢ひしたばかりですもの。

支 全く奇緣ですよ、天の引合せですよ。舊い頭の人に言はせりや、前世からの約束とでも言ふンでせう。

娘 でも、あたしのお母さまは、さうはおつしやらないだらうと思つてよ。

支 だからあなたのお母さんは、鈍物だと言ふンですよ。

娘 あらまた！ （と言つたが、こんどは直笑ひ出して）たつて、大概だれでもさういふでせう、初めて逢つたばかしで、お互ひに履歴も好くは知らないのに、あんなにお話なんかしちや不可い譯だつて。

支 おや／＼！ さうでせうかねえ。僕ア只道を聞いたばかりでしたよ。

娘 道を聞くのは、そりやアわるくはないのよ。けども（だん／＼打解けはじめて）それから種々な事を話しかけたでせう？——さうして此木の下へ腰かけたでせう？ それからあたしのお父さまの事や、あたしが英吉利にゐた時分の事や何か聞いたでせう？ それから、毎日々々、此木の下へ來たでせう？……丁度もう一週間前だわね。

支 して見ると、此木は、月下氷人木とでも言ふンですね。

娘 （わかりかねて）え？

支 何さ。

娘　（考へて）お母さまは何とおつしやるでせうか知ら？　若し此事が知れたら。

支　何か面白くないやうなことをおつしやりさうですか？

娘　（ふさいで）然——だらうと思ふのよ。

支　おや成るたけ知らせないやうにしといた方が可いですよ。

娘　（考へて）でもね、もし爰へ來ちやならない譯なんですなら。……ねえ、あなた、どう思つて、爰へ來ちやならない譯なんでせうか？

支　そんな事ア關はない方が可いですよ。わたしが貴嬢なら關はないね。怜悧な人間は自分がしたいと思ふことだけを考へてるンです、爲なくちやならないとか、爲ちやならないとかいふやうなことは、如何でも可いぢやありませんか？　でないと、頭腦が混雜になッちまひます。混雜になりや、無論やりぞこなひますからね。

娘　だつて、爲ちやならないと思ふことをすると、あとて以て不快アな心持がしますもの。

支　爲たいと思つたことを爲得なかつた時ほどぢやありますまい？　此世の中て以て、一等殘念だと思ふ事てのは、爲たいと思ふことを爲得なかつた場合なンです。例へばですねえ、もし僕が一週間前に、爰であなたに逢つた時に、物を言ひかけないで分れたなら、僕は終生それを殘念がつたでせう。

娘　殘念がつて？（男うなづく）ほんとに？　實際？

支　（うなづきて）然。ほんとに、實際。

男は一寸女の手の上へおのが手をのせる、女はそのまゝにしてゐる。郭公が一聲二聲こゑ高く呼ぶ。——女手を引く。

娘　（首をかしげて）此間の鳥でせう？

支郎は起上りて、娘のすぐ傍へ掛けて、木の幹へもたれる。

支　然。

娘　ウァーヅウァースの詩にあるクックーでせう？

支　然。……ね、面白いでせう？「覺束なくとも呼子鳥かな」って、あれがその呼子鳥ですよ。あなた好

……え……

娘　いゝわねえ随分。

支　いゝてせう！　併し僕がいゝてのは、芭蕉やヴァーヅヴァースとは別觀察なんです。あいつ非常に怜悧ですからね。鳥は大概馬鹿ですけれど——人間もさうだが。奴等アみんな大きくなると結婚するてせう、さうしてそれからてものは、うぢよくくと子供ばかり製造へて、それを育てあげるのと義務敎育の月謝を支拂ふのとて以て一生を滅却にしッちまふのが定例てさア。呼子鳥先生そんな愚なこたアしませんや。てんで義務敎育なんてものにやア無關係てす。赤ン坊なんか徹頭こしらへないてす！　大將、季節が來りや、此方の木から彼方の木へと飛廻つて、氣に入つた他の呼子鳥と面白さうに遊んでまさア。が、卵を生む段となると、何處か知ら他の鳥の巣へ行つて生んで來ます、無論その後始末一切先方任せなンてす。怜悧な鳥てせう！

娘　（口を尖らせて、くるり向らむきになつて）　あたしそんなことはしまいわ。あんまり自分勝手らしいもの。

支　さうてすとも、自分勝手てすとも。けれど怜悧てさあね！　家鴨もねえ、中々怜悧な鳥てすよ。（娘こちらへ向きかへる。）　けれども郭公とは方法がちがつてます。（無雜作に）　しよつちう卵を蹈潰すんてす。

娘　あら！　何てまア不器用な鳥てせう！

支　なアに。わざッとやるんてす。煖めたり何かするよりや早手廻してさ。卵を生むとてすねえ、奴茫然とした體て、片足を擧げて、警告的にクッくくと二三度啼くてす。すると飼主がソラッと駈附けて、急いて其卵を取つて鷄の巣へ入れる、鷄はみじめてさ、そいつを煖める役へ廻るんてす。僕アこれを家鴨の天才と名づけるンてす。

娘　それが天才てすッて？

支　然。天才とはてすね、——つまり——限り無き……

介を敢て他人に掛け得るの資格なンですよ。

娘　まア! あなた如何してそんなことが言へて?

支　僕が言ふンぢやない。例のそらオイッケンぢやないベルグソンが言つたんですよ。

娘　嘘よ。嘘でせう? あたし家鴨をちつとも怜悧だとは思はなくつてよ。怜悧さうに見えないもの。

支　そこが怜悧なとこなんですよ。世の中でものがさうなんでせう? 怜悧な者はわざと馬鹿のやうに見せかけてませう? さうすりや他人が油斷をする。家鴨はそこを行くんです。

娘　でもあたし、あなたの言ふやうだと、家鴨や郭公は怖いと思ふわ。それに、大概の鳥は、雛を生んで、育てたり、養つたり、それから種々な世話をしたりするのを、好くもんだらうと思ひますもの。

支　お說の通り。だから呆れるんですよ。奴等は、巣を作つたり、卵を産んだり、孵したりするので以て、大事の一生を棒に振ッちまふンです。雛が出ると、親父ア蛆を搜しに驅廻りまさア。巣の中は人口過超で以てごッたかへして、餓鬼どもは叫き立てる、亭主ア我慢がしきれなくなつて如何はしい處へ逃出す、いやもう活地獄同樣! 迚もお話にならない、たまらない有……

娘　まあ!

支　とにかく僕ア眞平です。實際馬鹿な話ですからね。……

いよ女は少しく眉に皺を寄せて、此人生觀の當否を考へつゝ、前こゞみになつてゐる——二人とも暫く無言。

ねえ、お嬢さん、そんな風にしていらしつちやアちつとも樂でないでせう? 木へもたれると好いですよ。其目的の爲にやア此木ア林中第一等ですからね。だから此木を選んだンです。

娘　(もたれかけて見て) 出來ないわ。衣がつかへるから。

支　おや〳〵、まださしてゐたんですか? しぼめたら可いでせう。

娘　さうね。(傘をしぼめて) この方が可いわ。
ぐたりと幹へもたれて、傘を芝生の上へおく。

支　ずつと好いですよ。(ほれ／＼と眺めて) 實際その方がずつと綺麗に見えますよ、傘の無いはうが。今までは傘の色が映つて何だか蒼白く見えてましたよ顔が。

娘　さう？　で今は？

支　さうですねえ、ほんのり櫻色といふ奴ですよ。非常に美しいですよ。はじめてお逢ひした時に、正に斯うでしたよ。あの時あなたア如何にお熱さうに扇子を使つてゐましたらう？　少し上氣してね。ほんとに天人のやうに綺麗でしたよ。それから貴孃の目がね、どうもツノ澄みわたつて、まるで星のやうに……いゝ頭髪ですねえ！　まるで漆の……

娘　(困つて)　埴輪さん、そんなこと言つちやいけません。

支　いけませんか？　何故です？　綺麗だといはれるのは貴孃わるい心持ぢやないでせう？

娘　(うよらしく) 然。そりやさうですけれども、男の方が若い娘にそんなやうなこと言つても可い譯でせうか？……

支　おや／＼！　また始まりましたね。

娘　二人ッきりのところで。

支　可いぢやありませんか？　眞實の事なら。あなたは實際綺麗でせう、目はその通り可愛らしいし、顔は下ぶくらで――實際でさあね、艶々して――ぱつと櫻が咲いたやうに――え？――可いぢやありませんか、さう言つたつて？

娘　後生ですから！……
と言ひかけて默る、目には涙が一ぱい。

支　(大きに心配して)　河田さん、どうしたんです？　泣いていらつしやるね？

娘　(顔をそむけて、鼻聲で)　いゝ……え。

支　いゝえ／＼。だつて涙が出てますもの。何か僕が

娘　悪いことを言ひましたか？　何がお氣にさはつたんです？　おつしやいよ。え。

大きに心配の體。

（やつと我に復りて）　何でもありませんの。いゝえ、全く。もう可いんです。只ね‥‥もうあんなこと二度とおつしやつちやあ否です。‥‥可いこと？　約束して頂戴。

かくしからハンケチを取り出す。

支　えゝ、約束しますよ‥‥是非とおつしやるなら。さ、涙をお拭きなさいよ、さ。さうしてお互に好兒になりませうよ。僕の乳母がいつても斯ういつたんですよ、昔、僕と妹とが喧嘩をして泣いてるといふと。それから「拭いてあげませうか」ッてね。

と言ひ／＼ハンケチを取りて、やさしく拭いてやる。

娘　（がくりと息を呑込みて）　ありがと。（急にハンケチを引きたくつて）　あなた、馬鹿なことを！

支　おや／＼！

いよ子は芝生を離れて、ハンケチをおもちやにしながら、あちこち歩きながら話す。

娘　ぢや貴下、折々お妹さんと喧嘩をして？

支　然、しよつちう。それから兄や弟ともね。あなたは？

娘　あたし兄弟は一人もなしなの。

支　おや／＼！　ぢや、何となく淋しいやうな心持がしたでせう？

娘　（そつけなく）　でも始終力夫さんが一しよにゐましたわ。

支　力夫さん‥‥てのは？

娘　従弟なの、町端力夫ッて。ロンドンに行かない前は始終一しよにゐましたの、宅にあづけられてゐたんですから。力夫さんのお父さんは、其時分商用で以て、臺灣の方へ往つてましたの。

支　て其人が常住あなたと喧嘩したンてすね。

娘　（目をまろくして）　あら！　いゝえ！　一度も喧嘩なんかしたことはないわ。とにかく力夫さんはしな

支　かつたことよ、あたしは時々怒つたけれど、ぢや面白かないや！　喧嘩て奴はお互ひつこでなくつちや何の役にも立たないからね。

娘　喧嘩が何かの役に立つて？

支　立ちますとも。仲直りてことが出來まさあね其お庇て？

娘　おや、その爲に貴下はお妹さんと喧嘩したの？

支　でしたらうよ多分、無論其時分にやさうと氣が附いちやゐませんでしたがね。妹を怖しくいぢめたンですよ、髪を引張つたり何かしてね。おそろしく愉快な、眞黑な頭髪でしたからね、貴孃の頭髪のやうな――おッと！　言つちや不可かつたのですね。失敬々々！　あなたも力夫さんの頭髪を引張りましたか？

娘　（笑ひ出して）引張つたかも知れないわ、稀には。

支　きつと行つたてせう。何年位一しよにゐたンてす？

娘　丁度三年。英吉利へお父さまと一しよに行くまでは一しよにゐましたの。

支　て、あなたが英國にゐた間に、手紙のやりとりをしましたか？

娘　えゝ。をり／＼。

支　今は何處にゐるんてす？

娘　東京。去年商業學校を卒業して叔父さんの社にゐなさるの。もう直に社員になるンでせうよ。

支　おや／＼、可哀さうに！

娘　（目をまるくして）可哀さうに！　何故？　お母さまはいつても、あの人は寔に仕合せな人だつてゐますわ。

支　さうでせう。親て者は、若い者が毎日社へ行きさへすりや仕合せだと思つてるものです。僕の親父だつてさうてす。

娘　あなたも毎日行くの、何處かの社へ？

支　いゝえ。

娘 （ぼつとなつて）ぢや貴下にやよく解らなくつてよ此の事は。

支 （平氣で）どうして、解り過ぎてます。だから行かないンです。

娘 ぢや貴下何をしてるの？

支 何もしません。職業は辯護士――しかもなりたてのほやほやです。

娘 辯護士？ 東京でゝせう？ （男うなづく）。何故こんなとこにゐるんですの？

支 東京にゐりやあ、親類共がやかましいから、否でも開業しなけやなりません、さうすりや名聞半分で親父やお袋が廣告して歩くから、親父への義理からでも、何か知ら訴訟事件を擔ぎ込む者があるに相違ないです。十に八九は何か知ら頼まれますさ。頼まれたりといふと、臨時代用の怪しい事務所に燻り返つて調査て奴をやらかしたり、餘興演劇へ出て來る聖德太子のやうな裝をして殺風景な法廷で屁子理窟をこねくつたり何かしなけりやならないでせう、あなたと、斯ういふ愉快な木の下でお話なんか出來やしませんよ。

娘 ですけれど、こんな風に時間を浪費なすつても可い譯でせうか？

支 （眞に呆れたらしい顔をして）時間の浪費ですつて！ かうして――かういふ愉快な木の下で――あなたとお話をしてるのが浪費ですつて？ かうしてるのが？

娘 さうぢやなくつて？

支 ないですとも！ 天氣がよくつて、空が蒼々と晴渡つてる時分に、むさくろしい事務室なんかに燻つて、面白くもない數字の計算なんかしてるのこそ時間の浪費でさあ。大切な時間を帳簿と首つ引かなんかで丸一日外へも出ないで、世の中が如何なに美しいか、如何なに面白いか、生の悦びは如何なもんだか、まるツきり味つて見ることもしな

いで以て標り返つてるのが、それが純粋の浪費です。戀人の一人も拵へてゐべき時に只もう金ばかりこしらへてゐるのが、それが即ち時間の浪費です。

娘　まあ！

支郎も立上りて、傍へよりて

支　え、さうぢやありませんか？

娘　(困つて) さうかも知れません。(と顔をそむける。)

支　あなたゞつてさう思つてませう？ だれだつてさう思つてますよ。只公然主張し得ないのみです。貴孃だつて今にさう思ひますよ。……あなたとわたしと今日から仲好しになりませうよ。ね、戀人になりませうよ。ね？ いゝでせう？

娘　(眞目になりて) 然。

支　戀人になつた以上は斯うよそ〳〵しくしてゐちや不自然ですねえ。こつちへいらつしやいよ。ね、帽子を取つちまつて、もう少し樂になさいよ。こゝへお掛けなさいよ。

娘その通りにする。支郎徐かに抱擁して

そら！ 樂でせう斯うしてると？

娘　然。(と満足げに溜息。)

支　綺麗な頭髪ですねえ！ まるで絹絲のやうだ。(と撫でゝ) 撫でられるのは不愉快ぢやないでせう？

娘　然。

支　怜悧ですねえあなたは！ (間。愉快げに笑つて) ねえ、あなたを何てつて呼んだら可いだらう？ まだあなたの名を知らなかつた。

娘　知らない？

支　然。知らせないンですもの未だ。何ていふの？ わたしは支郎。

娘　あたしいゝ子。

支　いゝ子？ いゝ子は不可いね。前世紀臭い名でさあ。五尺イヨコノなんて、昔の手拭でさあ。糸さんと呼びませうよ。だれか前に糸さんて呼んだ

がありますか？

娘　いゝえ。

支　おや、糸さんにしませう。ね、一等いとしい人だから糸さん。それから小糸佐七ね、本町二丁目の糸屋の娘ッてね。いゝでせう？

娘　（うぶらしく）あなたが好きなら。

支　おや、それは確定。（背中を撫でる。暫く無言。）からしてると、天へ昇つたやうでせう？

娘　（目を瞑りて）然。天へ昇つたやうです。

支　世界中にこんな幸福なことはないンですよ。ラヴは世界中の一等美しいことなンだからね。ね、さうおつしやいよ。

娘　ラヴは世界中の一等美しいことなンですの。

支　好兒々々！　よく言ひましたね。

と又背中を撫でる。

娘　（ふつと心附いたらしく）けども、力夫さんが怒るかも知れないわ。

衛がちく〳〵と鳴るのが聞える。

支　怒るつて？

娘　然。力夫さんもあたしを愛してるでせう？　子供の時分から愛してゐたといふンですもの。（歎息して）氣の毒だわ！

支　とんでもないこと。力夫さんは仕合せ者でさ！

娘　（駭いて）何故？

支　子供の時からと言や十年近くにもなるでせう？　わたしは僅々一週間あなたを愛してゐたばかりです……知交になつてから、たつた一週間でせう？

娘　ても力夫さんは、さういふ風に考へてはゐなかつたでせうよ。

支　（うなづいて）馬鹿だね。

娘　だつて、あたしが始終嫌つてたもの。

支　なるほど。で以て大將、片思ひを續行してたンだね。お拔けさんにやそれで以て澤山でさあ。……

小鳥のちく〳〵が聞えなくなる。

何て可愛い目だね！　はじめてあなたに逢つた時に、先づ此目に目が附いたね。だから物を言ひかけたのさ。

娘　（内気らしく）あたし宿屋へ行く道を訊いてらつしやるのかと思つたわ。

支　そりや口實でさ。道はあなた同様に知つてゐたンです。その宿から來たばかりでしたの。けれどもあなたのその柔い絹糸のやうな頭髪へ日光があたつて、その可愛らしい目が星のやうに輝いたのを見るといふと、どうしても何とか言はずにやゐられないやうになつたのでしたよ。わたしが物をいひかけたのを嬉しく思つて？

娘　然。

支　いゝ、大へんに嬉しく思つて？

娘　然。

支　好兒々々！（トだしぬけにキスする。いよ子驚いて飛退き）

娘　あら！　そんなことをしちや不可ません！（なさけなげに）不可ません！

支　不可い？　何故です？

娘　お母さまにお斷りしてからでなくちや不可ないンだものを！（ト泣き聲）。

支　お母さまにお斷りしてから？　おや〳〵！……斷るとは如何するのです？

娘　表向にお約束をして貰ふンです。

支　ぢや仲人て奴を頼んで？

娘　勿論でせう。

支　（歎息して）おや〳〵、さうしなけりやならないでせうかねえ——やつぱり。

娘　え、やつぱり？　あなたはあんまり氣が進まないやうね。

支　進みませんよ。これだけはわたし、何時でも閉口です。大嫌ひなんだ。

娘　いつでも!?（驚いて男の顔を見つめる。）

支　（平氣で）然。親達の處へ人を遣つて、正式に談判

に及ぶなんてことは大嫌ひてす。親て者は實際非常に沒常識なものてすからね。親達にはローマンスなんてことは全然分りませんからね。……ね、森の中で、あなたが一人の娘に逢ふでせう。時は五月。日はうらうらとさしてゐる。空に一點の雲もない。その娘は非常に可愛らしい。忽ちあなたが戀に落ちる。何もかも理想的、幸福づくめ。すると――どういふ譯だか――娘はお袋に話さうといふ。て、あなたがお袋に逢ふ。とお袋は直ちに、あなたの職業は何て、收入が幾らて、遺産が幾らだなぞとたづねはじめる――すつかり破毀でさ。

娘　（いよいよ解しかねて）だつてあたし解らないわ。あなたは、さういふやうなことを、前にもなすつたことがあるやうにおつしやるんだもの。

支　然、ありますよ。何度も。

娘　あら―

思はず立ずくみになる。目は怒で輝いてゐる。

支　立つてちやお話が出來ないからもう一度お掛けなさいよ。まだ早いから。

娘　（口をもぐつかせて）あなたは幾たびも前にラヴの經驗があるとおつしやるンですか？　他の方と？

支　（いかにも案外らしく）ありますとも。

娘　さうして結婚の約束をなすつたんですか？

支　いゝえ、約束はしませんせん。僕は曾て約束したことはありません。けれどもラヴは度々しましたよ。……

いよ子怒って地團を踏み、くるりとあちらを向く。

お嬢さん、どうしました？　大變腹を立ちやましたね。

娘　（憤激して）それでもあなたは――恥かしいと思はないこと？

支　（思はず起ち上りて）恥かしい？　何かです？　ラヴをするのがですか？　どういふ譯で？　無論、恥かしいとは思ひませんね。ラヴをしない位なら生きてる甲斐はないぢやありませんか？　わたしア常

住ラヴしてゐます。實際――だれか知らラヴしてゐない時はない位です。

銀 （いよ／＼憤激の體で） ぢや何故約束しないンです？ ラヴしながら婚禮の約束をしないのは不正です。

支 それはね、親がわるいのです。親てものは非常識な者だと今言ひましたらう。親が約束をさせないンです。

銀 何故ですの？

支 いろ／＼理由があります。多くは、「あの方は眞面目でないから不可い」と言ひます。或は、懶惰者だから不可いの、定收入がないから不可いの、いや、迚も彼人は我兒を幸福にしてはくれさうにないから不可いなぞと言ひます。とにかく約束までに運ばせないのてす。當人は種々ですがね、親て者はどれも同じてす。―あなたのお母さんも同断てせう？…

いよ子耐へかねて「まあ!!」と叫ぶ。

無理はないてす。あなたのお母さんを嘲弄してるのぢやありませんよ。どの親も、或は必しも間違つちやゐないンてせう。實際、彼等のはうが正しいのかも知れません。僕ァ只どういふ理てといふことを説明したのみてす。

銀 （むけ／＼とあらけなく） どういふ理といふことは解りましてよ。あなたは實際結婚しようとは望まないんてせう？

支 無論結婚なんざ望みませんね。だれだつてさうてさ、全くの馬鹿てない以上は。ラヴするのはだれても好てす、ラヴてものは愉快なもんてすからね。それから約束て奴も、海とも山ともきまらないだけに、わるくないと思ひますね、――僕ァまだ經驗しませんけれども。しかし結婚は――いよ／＼日比谷へ出張ッて奴ア――こりや全く耐らない嫌なもんてすねえ。

銀 （呆れて） ま、何てすつて！ 戀愛が好いもんてす

のに、どうして結婚が嫌なんなンてす？

支　あなたは郭公のことを忘れましたか？

娘　あら!!

支　何等の羈絆もなく、何等の責任もなく、うちようちよと囀るたてたり、わめき立てたりする餓鬼共もなくッてね。野天の生垣に於ける自由な生活。*Life and love* ― あゝ幸福な閑子鳥！　理想的の生活てさ！

娘　（憤激して）　あたしア郭公は卑むべき鳥だと思ひます。卑劣な、おそろしい、自分勝手な、いやアな、いやアな鳥だと思ひます。

支　とんでもないこッてす。そんなに惡くいつて下さるな。郭公は僕の大事の友達てす。實際僕自身が郭公の亞流なんてす。

娘　（面と向って）　あたしあなたは大嫌ひよ！　大嫌ひてす！　（と足ぶみをする）。

支　（おちついて、確信の體で）　そりや嘘てすよ。

娘　いゝえ、現實です！

支　（頭をふつて）　いゝえ、嘘です。（全く眞面目に）　人てものは一たん愛した者を決して眞實に嫌ふもんぢやありませんよ。

男は凝と女の目を見つめる。一二分の間女は憤然として男を睨み返したが、やがて俯目になると、目に涙が一ぱいになる。

娘　（ほとんど泣出しかけて）　なんて怖い人なんてす貴下は、そんなことを言ふなんて！

支　なぜです？

娘　それが本心らしいもの。あゝ、あたしなさけないわ！　（と泣出す）。

支　（全く困つて）　いとさん！　泣いてるの？　泣いちやいけませんよ。わたし泣く人を見るのは眞平です。（と肩へ手をかける。）

娘　（振拂って）　いやよ！　さはつちや厭です。そんな風にして取換へ引換へラヴするなんて！　（泣きながら）　あたしばかし愛してるンだと思つてたものを！

支　さ、あなたばかりを愛してるンですよ――今は。

娘　(涙聲で) だつてあたし貴下は他の人をラヴしたことはないンだと思つてたもの。それから貴下ア、あたしの事をいゝとさんと呼んだわ、一等いとしい人だといつたわ。

文　一等いとしい人なんてす、全く今まで出逢つた娘さんの中でゞす。全くなんです。(議論的に) それにてす、人はラヴするといふ段にはラヴせざるを得なからうぢやありませんか？ 例へばてすねえ、わたしがてす、圖らずもあなたの顔を見た、すると見た瞬間にソノ愛に落ちざるを得なかつたンです。貴下は絶對にソノ立派に見えたンです。それに天氣はあの通り素晴しかつたてせう？ だから戀に落ちざるを得なかつたんてす。

娘　(此世辭で少々怒をなだめられ、涙を乾かして) でも、あなたは、大勢の人と愛にお落になるやうだもの。

支　(からかふやうに) 可いぢやありませんか？ 一人以上の女をラヴするてのは、一人以上の男にラヴされるてのと、つまり五分々々てすよ、どつちが惡いといふこともないてせう？……力夫さんは如何てす？

娘　力夫さん？

雀がまたチタ〳〵と囀りはじめる。

支　(うなづいて) 力夫さんは貴孃を思つてるてせう？ わたしも貴孃を思つてる。そこて貴孃の戀人は同じ時に二人てすよ！ わたしは、同じ時には、僅々一人しか思つてやしません。

娘　(反抗的に) だつて力夫さんがあたしを思ふのは、あたし仕様がありませんもの。

支　わたしだつて貴孃を思ふのは、どうもしやうがありませんもの。こゝが要點なンです。解りましたか？

娘　いゝえ、ちつとも解りません。力夫さんは貴下とは全然ちがつてゝよ。力夫さんは眞實に常住思つ

てるの。

支　常住てことが眼目ですか？　おやわたしだつてさうです。

娘　いゝえ、あなたはさうでないわ。御自分にもそりや解つてませう？

支　いゝえ、わたしこそ常住思つてますよ、わたしに取つちや戀愛は殆んど職業なんですからね。

娘　いゝえ、同じ人ばッかり思つてなくちやいけませんの。

支　おや〳〵！　常住だけぢやいけないのですか？

娘　(思はず吹出して)　馬鹿らしいわ！　(と向うを向く。)

支　(やゝ安心の體で)　上等！　やつと御機嫌が直りましたね。

娘　(わざとふくれて)　いゝえ。

支　嘘をおつきなさい！

娘　いゝえ、直りません。大變に怒つてますの。

支　そりや無理です。怒つたり笑つたり一しよに出來るもんぢやありませんよ、だれにだつて。ところが、貴孃は今笑つたよ。そらね、今だつて笑つてますさあ。(娘心ともなく笑ひ顔をする。)　だから、もう喧嘩は止ませう。こんな好い日に喧嘩するのア馬鹿らしいです。仲直りをして、ね、又戀人同志になりませう。

雀の囀りが聞えなくなる。

娘　(頭をふつて)　いやです。

支　さういはないでね！

娘　(頭をふつて)　いやです。

支　ねえ、あなたはあんまり解らないよ。ラヴてものはさう無暗にうつちやるべきものぢやありませんよ。勿體ない。ラヴは世界中で最もうるはしいものです。あなた自身さういつたぢやありませんか、十分ばかり前に。

娘　いゝえ、そんなこといやしないわ。あなたがいつたわ。(と伏目になる。)

支　けれども、わたしが言つた後て貴孃もさう言つたでせう？ （やさしく眞面目に） いとさん、ね、馬鹿なこと言はないでね、ラヴになりませうよ。今のうちに。若い時ア二度ないンですよ、ラヴは若い時に限るンですよ。もう直に、貴孃もわたしも、間拔な、面白くもない中年て奴になッちまふンです、世間の野呂間連中と同じやうにね。さうなつちやもう駄目ですからねえ。少年老い易し戀成りがたしですからね。一秒だつて浪費しちやならないンですよ。蜉蝣て蟲はたッた一日の壽命しかないと言ひますねえ。朝生れて其午後中、麗々とした日光の中を河や池の上を飛び廻つてまさ、鯉か何かゞがぶりとやらうとすると、ひよいと身をかはして馬鹿にしたり、他の蜉蝣とふざけたりして。さうして夕方になるよ死ぬ。若し此蜉蝣が雨降の日に生れたらどうでせう。悲劇ぢやありませんか！

孃　（やさしく） 可哀さうだわねえ。

支　そこです！ あなたは蜉蝣を可哀さうだとおつしやるでせう？ それだのに、わたしに對しちやア怒つてばッかりいらつしやる。

孃　そりやあなたは、蜉蝣とはちがふもの。

支　ちがひませんよ。わたしも確かに蜉蝣のたぐひなンですよ。

孃　（涙ぐんだらしい聲で） そんなことがあるもんですか？ （詰問的に） どうして蜉蝣です？ それに、つい今がた、わたしは郭公だとおつしやつたぢやなくつて？

支　さ、或はわたしは、郭公兼蜉蝣てッたやうな動物かも知れませんよ。といふのは、わたしは雨降は大嫌ひですからね。おや〳〵！ 又あなたの日から雨が降りさうになりましたね、それが即ち雨降だらうぢやありませんか？ だから泣ッこなし、好兒だから。ね、わたしが拭いてあげませう。

娘のハンケチを取りて拭いてやる。娘は悲しげに笑ふ。

そら、それてよくなつた。さ、お互ひに好兒になつて遊びませうね。ね？

娘　(力なげに) 然。

支　(手をさし出して) 接吻して下さい。さうして仲好しになりませう。ね？

娘　(小さい聲で) 仲好になりませう。けれど、もう決して接吻しちやいけません。

支　おや／＼！　なぜてす？

娘　なぜても。

支　(快活に) ねえ、とにかく先の處へお掛けなさいね、ね？　仲直りをしたといふ證據に、ね。

木の方へ進む。

娘　(頭をふつて、子供のやうに) いや。

支　(失望して、ふりむいて) 嗚あ／＼！……ぢやまだ怒つてるンですね。

娘　いゝえ。(帽子を取りあげて) けども――わたし歸らなけりやならないの。力夫さんが五時の列車で來るンですから、ステーションへ迎ひに行かなけりやなりません。(手をさし出して) さやうなら、埴輪さん。

支　(手を取りて) いとさん！　力夫さんの言ふことを聞く積りてすか！

娘　(獨語のやうに) どうですか？

支　では力夫さんからお母さんへ申込むンですか？

娘　勿論よ。

支　(手を離して) やれ／＼、可哀さうに！　みじめな力夫さんだ！　それで先生のローマンスは終局になッちまふンだ！

娘　そんなことアなくつてよ。あたしがあの人を幸福にしてやりますもの。

支　成程ね。結婚は幸福かも知れない、が決してローマンスぢやなさゝうだね！

娘　まあ！

こらへかねた絶叫。くるりとあつちへ向きて去る。支郎にやりと笑つて、女の行くのを見送る、半分は面白さう、半分は苦痛らしい表情、女はとう／＼見えなくなる。すると歎息して木の方へ向き直り

支　（又膝をかけて）力夫といふ奴は惘然だ！

又書物を開いて再び讀みかける。郭公が遠くの茂みで聲高く呼ぶと、其友が應へる。支郎目を擧げて聞耳を立てる。此トタンに幕がおりる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊



舞鶴心中

近松秋江

上の巻

一

今日限りといふことて、お京が楓家から暇を出されたのは十一月の初であつた。段々若旦那との關係が皆なの目にあまるやうになつたので、多勢の男女を使つてゐる家では他の者の示しが付かぬといふので、欽之助には女中頭のお仲の口からよく納得出來るやうに父の意見を話さした。

四月の末に欽之助が東京のある私立大學の理財科を卒業して歸つた時に女中の多くは若旦那には初見參であつた。お京もその中にゐた。

まだ十六にしかならぬので客座敷の方には出さないて、奥の小間使に遣はれてゐた。

長い間の學生生活を終つた欽之助は漸と自家に居着くことの出來る體になつた

のてある。

最後に東京を引揚げて歸つた時には、妹や弟はその頃京都にはまだ稀しかつた護謨輪の俥を連らねて七條のステーションまで出迎へに行つた。

東京からの物といへばボール函の空からでも大事に仕舞つて置く女中どもにまで三越から買つて來た土産をそれ〳〵分けて與つたり、二三軒親しい處に顔出しをしたりして夜を更した。

翌朝父は自身、欽之助の寢てゐる枕頭に來て目を覺さして、出立する旅客の勘定などをさした。

楓家旅館は、春季の旅客で本館も別莊も滿員であつた。欽之助の母親は四年前四十六で腦膜炎で亡くなつたのであるが、父は本妻が存命の頃から自分の家に置いた女中に手を付けて二人の妾を持つてゐた。母親が亡くなつた後はそれらの妾達が本館と別莊とを取締つてゐた。

欽之助の眞實の同胞とては妹と弟とがあるばかりだが、異腹の弟妹は二人の母親に四人づゝあつた。東京の學校が休暇になつて久振りに京都の自家に戻つて來ると、歸る度に父の妾は赤兒を抱へて出迎るやうなことがめづらしくなかつた。

人一倍母思ひの欽之助にはそれを見るのが苦々しかつた。まして母の亡くなつたあとの吾が家は何だか居心地のよくない水臭い處のやうに思はれた。それでも父の方では息子が學校を卒業して歸つて來たのをひどく悦んで始終息子を遠くから見張るやうにして、これまで自分のして來た旅館の業務に習熟させやうとした。

帳場には古くから勤めてゐる熟練な支配人がゐて客の見立てから通す室の選定などをした。欽之助は

帳簿の元締めと金錢の出納をしてゐる外に爲ることがなかつた。
金地に群青の笹を描いた大きな衝立を置いた玄關の横に折れた小い部室に欽之助と支配人は電話機などの載せられた書卓を中に挾んで向ひ合つてゐた。
そこから廣い玄關の土間が見通しの利くやうに壁に六角形の小窓が切つてあつた。
綺麗に頭の手入れなどをして、羽二重絞りの帶など締めて欽之助は遊びながら家業の手傳をするのが仕事であつた。
歸つた當座は猶豫をしてゐた徴兵檢査のことなどで落着く間もなかつた。その方は一寸した吃の癖があるので免役になつた。彼は今年二十五であつた。五月の初には東京の學校の卒業式があるので自家に二十日ばかりゐてまた東京に出て行つた。五年の間學校で机を並べて特別に親しくしてゐた友達と名殘を惜しんで鎌倉や江の島などに遊んだりして一週間ばかりゐて、歸途にはまた名古屋の友達の處を訪ねて開催中の共進會の見物などをして其處でも二三日遊んだ。名古屋から戻つて來ても欽之助は暇な身體を持て餘して日を消した。閑氣な楓家の家族は殆ど交る〳〵のやうに伊勢參宮、大和めぐり、和歌の浦といふやうに京都の附近を遊び廻つたり、家中で變つた料理などを食べに行つたりして日が經つた。
欽之助は夜京極などを散歩する時妹や弟と一緒によくお京を連れて歩いた。何時の間にか二人は多勢の目を忍ふやうになつてゐた。
欽之助が東京から歸つてから間もない時分お京が
「私若旦那好きや」

と言つたのが、多勢の女中達のわらひ草になつた。

「まあ、まあ。お京どんは油斷なりまへんえ。」

いづれもお京よりは年かさの女中達はさう言つて呆れた。

女中達は二階の一室に多勢で一處に寢ることになつてゐた。十二時すぎて家の中が寢靜まつてから年かさの女中がよく寢入つてゐるお京をつゝき起して

「さあ、お京どん若旦那の處においきんか。みんなもう寢てしまはゝつたえ。」

さう言つて目を覺ましてやると、

「さうどつか。もうお仲はん寢やはりましたか。」

よく寢てゐたお京は、目を覺し〱階下の欽之助の寢室に忍んで行つた。

たまに起き番の女中などに見付かることがあつても若旦那のことだから一同默つて奥やお仲の手前だけを隱してゐた。

二

けれどもそれは何時までもお仲などにも知られずにはゐなかつた。お仲に知られゝばお仲の口からまた父の耳に入るのは分つてゐる。父はそれを知つてゐても知らぬ顔を裝ふてゐるらしかつた。親がわが家に置いた女中に手を附けて、それを二人までも妾にしてゐるのを目にしながら、自分がまたさういふことを仕出來してゐるといふのが欽之助には心苦しかつた。父が自身でもその缺點を知つてゐてそれが爲に息子の自分に何にも言ひ得ないでゐると思へば、父の心が氣の毒でもあつた。

お仲にしてもまたさうであつた。彼女も自身の身分を考へれば主人筋の若旦那に向つてさういふことについては何とも言ひ難かつた。

　妹の芳子ばかりは欽之助に向つてお京と手を切るやうに勸めた。欽之助は一方ならぬ妹思ひ、芳子はまた一方ならぬ兄思ひてあつた。母親が亡くなつてから亡き母に對する彼等の追慕の情は一層二人を親しがらせた。

　ある晩欽之助は妹や弟と京極の方を散歩して歸つた後一と間に入つて親しい雜談に夜を更したあとで妹の芳子は欽之助に向つてお京と手を切るやうに忠告した。

「兄さん、あんなもの、奇麗に手を切つておしまひやすな。」

「何も知らん癖に默つといて。」

と、欽之助は答へたが、家中の者が一同でお京をよくない者のやうに言つて疎じてゐるのを思ふと、まだ十六の小いお京が多勢の中で一人嬲られてゐるのが可哀さうであつた。それにお京はこの二三日身體の加減が惡いと言つて寢てゐた。

　欽之助は自分がお京とさういふ仲になつてゐるのを自分で氣を咎めてゐないではないが、父の妾とはいひながら雇はれ者のお仲やお八重などの口からお京と自分との間がうるさくなつたと思へばそれが不快てあつた。

　さうなくてさへ近頃欽之助はなにかにつけて神經の興奮するやうなことがあつた。

十一月の初てあつた。欽之助は朝から頭痛の氣持て、自分の室に定めてゐる四號室に寢てゐると三四

日前から我儘なことをいつて女中を困らしてゐる滯在の客が、その日もまた何か無法な叱責でも言つたらしく、受持ちの女中の泣く聲がしたので、彼は耐りかねて起上つて、今にも客に立退きを請求しようとしたが、父はそれを制して彼を宥めた。

「客がどんな無理なことをいふても商買と思ふて勘忍せんならん。」

「いくら商買やかて、餘りに侮辱してゐる。立退いて貰ふ。」

「まあ〳〵、そんなこと言はんとき。此方から事を荒立てるはようない。そしてお前も何處かへ行てちいと保養でもして來たらえゝやろ。みんなを連れて舞鶴にでも行て遊んで來いや。」

さう言つて父は慰めた。本來彼は旅館といふ商買を好まなかつた。腰の低い父が玄關の間の柱に凭つて坐りながら客の出入り毎に女中どもと同じやうに頭を下げて辭儀をするのを家業と心得てゐるのが自分の氣に染まなかつた。さうして聽てはそれを自分が襲いで行かねばならぬのが名狀し難い屈辱であつた。

客は、そんな標緻の惡い女中の給侍では御飯が食べられないから代りに藝者を呼んで來いとか、料理が不味いとか勝手放題なことを言つて受持の女中を困らせてゐるのが、一つ〳〵帳場に通じてゐた。するとまた女中が廊下で泣いて行く聲が寢てゐる欽之助の耳を鋭く刺戟した。赫とし易い欽之助は氣六ケ敷い客に難題をいはれて悔しい〳〵目に逢つてゐるのが、自然にお京を不憫に思ふ悲しい愛情に移つて行つた。

人目を忍ぶには都合の好い廣い家ながら、家中にお京とのことがぱつとなつてからは、二人は一つ家の中にゐながら思ふやうに逢つて話をすることが憚られた。彼が客のことで憤慨したのもその奧底には

お京とのことに關係した不平が絡んでゐるのが、父にはよく解つてゐた。けれども父は流石にそれをば露はに口に出すことを遠慮して丁どさういふことがあつたのを機會に暫く欽之助に家を留守にさして、その間にお仲から角の立たぬやうにお京に暇を與ることにしようと思つたのである。

欽之助もそれと察したので、早速翌日舞鶴に行く決心をすると芳子や小い弟などゝ一緒に行くことにして、序に芳子には斷然お京を思ひ切ることを打明けた。

三

その夜もまた遲くお京は欽之助の部屋に來た。

「明日舞鶴に行かはつて、いつお歸りやすの。」

「一週間ほど居たら戻つて來る。……それよりなあ、お前に聽いてもらふことがあるんや、自家で一同が喧しいことをいふて仕樣がないよつてお前も此家にゐてはつらひ思ひをするばかりやさかい、一遍此家を出て行てとくれ。さうして姉さんかお父さんの處にでも行てゐとくれ。」

欽之助は體よく別れ話を持ち出した。

「そんなえゝようにいふて、若旦那、私が厭におなりやしたんどすやろ。」

「さうやないけどお前も此家にゐてはつらい〳〵いふてゐたやろ。そやよつて自家では都合が惡いさかい、外にゐて逢ふ方がえゝと思ふからさういふのや。」

欽之助は、口では斯う言つてゐるものゝ、いろ〳〵に思ひ亂れてゐた。眞實ならこれ限り思ひ切つて女と別れてしまひたかつた。既に妹の芳子に「お京とは別れる」と斷言した時には全くその決心を語

つたのであつた。どうせ妻にする氣のない女と何時までも關係してゐるのは双方の爲に善くないことだ。乾度別れねばならぬ。さうして別れるなら是非今の内に別れてしまふ。と、思つてゐるのであるが、さていよ〳〵思ひ切らうと思へば、なか〳〵容易く思ひ切られなかつた。

寢物語りにお京に因果を含めて、明日限り自分の家を暇を取らすやうにいつてゐる心の奥底には體よく言つて女と切れやうといふ薄情な量見も秘んでゐるのであるが、その實今自分の口で女に言つてゐる通り、これ限りになつてしまふことはどうしても忍びなかつた。

「姉さんの處へ行てゐいとおいひやしたかて、楓屋の家暇を出されたら、私行く處あらしまへん。私が此家を暇を出されましたら私に何や惡いことでもあるのや思ふてお母はんにまたきつう叱られます。」

お京には眞實の兩親は無かつた。詳しい素性は誰れも餘り知つてゐる者はなかつた。生母はたしか祇園で藝者をしてゐてお京を産んだのであるが、實父になるその客が何んな人間であつたかお京はもとより知らない。さうして其の母親は後に加茂川が何處かへ身を投げて死んでゐるのを發見された。その時お京はまだ二つか三つであつたのを、扇職人の今の養父が拾ひ兒同樣にもらつて來て大きくしたのであつつた。養父母は元から金にするつもりでお京を育てたのであるから、何處かへお京の身を賣つて纏まつた金に代へたいのであるが、お京はそれを嫌つて自分から口を求めて茶屋奉公をしい〳〵またしては身賣りを勸める養父の處を一時免れに逃げてゐた。最初暫く万亭に小女を勤めてゐて、後に楓家へ出更つて來たのであつた。

「ほしたらまたお父はんが身を賣れいふて、喧しう言ふやろしなあ。」

欽之助もそれを知つてゐるので、自分の家を出て行つた後のお京の身の上を思ふと、此のまゝ打棄つてしまふのが可哀さうでならなかつた。

「そやから僕が舞鶴から歸つて來るまで暫く姉さんの處にでもいといてといふのや。」

「ほんならさうしますよつて、きつとゞすせ。私捨てられたら怨みますせ。」

話は、それからそれへと名殘はいつまでも盡きなかつた。二人は曉近くなるまで話しつゞけてゐた。

お京が出て行つてから微睡としたと思ふ間もなく、欽之助は早く起上つて支度をそこ〳〵に妹弟四人づれて二條驛から舞鶴の別莊に立つた。

京都の西郊は　丁度今鮮麗な秋の色に寂しく彩られてゐた。汽車は嵯峨野を過ぎてやがて隧道を一つ通りぬけると、保津川の絶壁の上を駛つてゐた。繪に見るやうな深い杉木立に燃るやうな紅葉の點綴した嶮岨な山と山とに狹められた溪の底を青く澄んだ清流は岩に激して白い泡沫を飛ばして流れてゐる。芳子や小さい弟達は皆な車窓から顏をその方に出して、見馴れた景色ではあるが、飽かぬ奇景に聲を立てゝ悦んだ。欽之助は、自分達の連中で殆ど車室を獨占してゐる二等室の腰掛の上に凝乎と身を凭せながら一人遣る瀨のない哀愁に胸を塞がれてゐた。僅かばかりの他行とはいひながらお京と緣を切つて出て來たことが、これ限り遠く京都を去つてしまふやうな悲しい感情をそゝつた。先刻玄關を出る時多勢で見送つた中にお京も後の方から此方を見ながら眼顏で別離を告げた、その悄然とした姿が何時までも强く眼に殘つてゐた。

今日、自分の出た後でお仲に體よく因果を含められて家を出て行くてあらう　奉公人とはいひながら

楓家にゐれば、兎も角も派手な生活の中に立ち交つて陽氣な一日〳〵が經つて行くのに、今日からはまた見る影もない裏長屋に佗しく燻つてしまはすのが慘めてならなかつた。

行末妻にするといふ當のない戀をするほど果敢ないことはなかつた。本來情に脆い欽之助はお京の前にもまだ中學校に行てゐる時分からさういふ女があつた。京極邊で雜貨店をしてゐた娘を多勢の競爭者と張り合ふて自分の物にした。それならば親達も知つてゐて、強て楓家の總領の嫁にして出來ないこともなかつたのであるが、女の養母が眼先の利慾に、深い思慮もなくまだ親がゝりの欽之助を袖にして初は本人の厭がるのを無理に納得さして外國人の工業家の妾にした。欽之助はその時初めて男女の間の思ふまゝにならぬ苦しい味を知つた。その後彼は東京の學校に行き、女も外國人に從いて東京に住居することになつて、二人はその西洋人の目を忍び〳〵逢引を續けてゐたこともあつたが、仕舞にはそれが主人に知られて嫉妬心の強いその男は二人の間を制く爲に、九州の方の鑛山に從事することになつたのを幸に女を遠くに連れて行つてしまつた。一時思ひつめてゐたその戀も、外國人の旦那といふ水が注されてからは徒に愛情の涸れた、欲望を充たすに過ぎなかつた。

欽之助にはさういふ經驗があるから、お京との關係のどうせ終を全うしない日のあることを覺悟しながら、尚ほどうしても別れねばならぬ哀れさに惱まされた。

さうして欽之助が思ひ沈んでゐる間に汽車は今忽ち隧道の暗に隠れたかと思へば、また忽ちにして隧道の上に現れ、三十分斗の間に保津川の峽谷を通りぬけると、龜岡の平地に出た。山の中に開けた聚落には最う深い秋が來て、寂しくなつた田圃の切株に弱い日がさし渡つてゐるのが滅入るやうに一入うら

しさを誘ふた。窓外の眺望はます／＼人里を遠ざかつて汽車は秋の色に滿ちた山と山とを分けて進んだ。
忍ひ疲れた欽之助は空蟬の形骸に等しい身體を妹弟と一緒に汽車から船に運ばれてその日の正午ごろに舞鶴の別莊に着いた。海には風が出て波が高かつた。皆んな海岸に遊びに出て行つた後で欽之助は獨り連夜の睡眠不足の疲れて點燈頃までぐつすり熟睡した。
夕飯の後は妹弟と一處に雜談に夜を更して床に就いたが、他の者の寢靜まるにつれて欽之助は獨り眼が冴えて、女と別れた後の物足りない寂しに襲はれて遲くまで眠ることが出來なかつた。
翌日は海が凪いだので一同で釣に出て、晝飯に戾つて來ると、京都の家から電話が掛つて朝鮮の貴族の一行が來泊して多忙だから直ぐ歸つて來るやうに言つて來た。お京のことを始終念頭に忘れかねてゐた欽之助はその報知を得たのを却つて好い機會にしてそゝくさ支度をして妹や弟を後に殘して獨り夕方の汽車で立つた。

四

お京は、昨夜欽之助から堅い約束の言葉を聽いて覺悟をしてゐた通り、みんなが立つた後でお仲から、一時暇を取つて宿へ下るやうに言ひ渡された。
「あんたはんにえらいお氣の毒どすけどなあ、坊々ももう大けうおなりだし、奥でもあんたはんにゐてもらはんでも手は足りますよつて暫く家へいんどいておくれやす。」
かう言はれて、お京は少許の衣類や頭の道具などを取纏めて、その日の暮れ方に楓家から出て昨夜欽之助と相談をして置いた姉の家に行つた。

姉といつてもやつぱり眞實の姉ではないので、今の養父の姪が洛外の大黑町で僅かばかりの青物や荒物などを商つてゐる男に嫁いてゐた。そこがお京の請人になつてゐた。

「まあ、お京はんやないか。今時分どうおしたんえ？」

冷い風に寂しく暮れた場末の店頭に立つて近處のお內儀に物を賣つてゐた姉は不意に訪ねて來たお京を見て不思議さうに聲を掛けた。

「私、楓家はんから暇をもらうて來ました。」

二人になつてからお京は口ごもりながらいつた。

姉がその理由を訊かうとするのをお京はたゞ顏を紅く染めるばかりで明かに答へかねてゐた。

「若旦那が自家にゐんと、他で家を持たしてやるいふとくれはりますさかい、ちよつとの間姉さんの處に行て、おいてもろたらえゝいふてくれはりますさかい……若旦那今日舞鶴の別莊に行かはりましたけど、直き歸つて來やはりますかい、ほしたら此家へ訪ねて來てくれはります。」

「まあ、あんた、そんなことしてどうするつもりやな」

姉は呆れた顏をしていつたが、强ゐてそれに就いて訊かうとはしなかつた。

お京は自分と一處に俥に載せて來た柳行李と風呂敷包を隅の方におしよせて、二三日其家に置いてもらふことにした。

欽之助は舞鶴から門の晩遲く歸つて來ると、翌日は午前中朝鮮の貴族の案內をして人車を連ねて方々

歩き廻り、午後からそれを見送りかた〳〵大阪まで行つた。序に暫く會はない東京の同窓の知人を二三人訪ねたりして夜の八時頃に京都に歸つた。

昨夜から忙しかつたので、つい氣が間切れてゐたが、一人きりになるとお京のことが思はれた。さうして五條で京阪電車の停車場を出るとそのまゝ、お京の行つてゐる筈の大黑町の姉の處を訪ねて行つた。

お京は果して其處に來てゐた。

「まあ、まあ。若旦那どすか、ようおこしやしておくれやしたえなあ。お京はんがも永いことお世話さまになりまして。」

姉は欽之助に初對面の挨拶をした。

「この人もなあお養父はんが、いろ〳〵無理なことを言ははりますさかい、氣の毒や思うて私も心配して居りますのどつせ。昨日遲うになつて不意と來とくれはつたよつて、わけを聞くとこれ〳〵やちうて。どうぞまあえゝやうに賴みますさかい。」

「えゝ、私も此の人が可哀さうやよつて、出來るだけどうかしやうと思ふてゐます。」

「それでもあんたはんも直き奧樣お貰ひやへんといけまへんのどすやろ。」

ちよつとした浮戯な心から離れ難い關係になつたのが、段々眞面目な相談に進んで行くのが欽之助には苦痛であつた。彼には亡母の生前から話があつた神戸でやつぱり一流の旅館の親類の娘と許嫁になつてゐた。

「それもさうどすけど、かうなればこの女の事も放つてはおきませんさかい。」
暫くたんな話をした後姉は留守をお京に頼んでおいて洗湯に行くといつて外に出た。亭主もまだ外から戻つて來なかつた。
二人ばかりになると、火鉢の傍に並んで坐つてゐたお京は嬉しい顔をして男を見ながら
「よう來ておくれやした。」
優しく笑つて言つた。その言葉尻が泣聲になつて白い面にさつと濃い紅が潮した。と思つたら、堪えかねたやうに涙をハラハラと溢した。
欽之助は、俯向いて赤い襦袢の袖口で眼をおさへながら啜泣きをしてゐるお京の頸筋の搖れるのを見たまゝ默つてゐた。
「何處かちつちやい借家か好ゝ明き間てもないやろか。」
稍々あつて欽之助は元氣をつけるやうにいつた。
「……さうどす。何處かえゝ處探さんなりまへん。」
お京も漸く涙の顔を上げた。
二人は家の者の留守中、家を持つ樂しみなどをそれからそれへと語つてゐた。

五

二三日して欽之助は用事の暇にまたお京を訪ねて、二人て大黒町から建仁寺町の裏通りや五條坂の方の閑靜な處を見て歩いた。けれど何處にも俄に思ふやうな處がなかつたので、姉の近所に間借りをする

ことにして、お京は一人で其處に移つた。
欽之助は、自宅の用事を濟してから毎晩のやうに、夜遲く皆んなの寢靜まるのを待つて密と家を忍び出てお京の處に行つた。

裕福な仕舞た家や大きな老舖などの多い中京の冬の夜は最う十二時近くなると、何處の家でも早く大戸を下してゐるので、古風な家並の建ちつゞいた街區は寂しく更け靜まつてゐた。欽之助は麩屋町の家を出て三條の通りを眞直に東に歩いて、心急々大橋を渡つて行くと、頬を切るやうな冷い風が川上から颯と吹いて來た。夕涼みの夏の床は、遠い夢の跡のやうに寂しく取拂はれて、暗い河原に痩せ細つた川瀨の音が夜の靜けさを破りつゝ流れてゐる。比叡山も東山も遠くの夜の暗に晝間の懷かしい姿を沒して、唯點々と小高い中空に寺々の燈火の瞬きしてゐるのが覺束なさゝうに望まれるばかりである。橋の上から眺めると、丁ど芝居の書割りのやうに參差として立ち並んだ向岸の二階に、處々まだ寢ぬと見えて岸に立つて大きな枯柳の枝越しに凍たやうな火影の映つてゐるのが見えた。

ぞく／＼と肌に浸み徹る夜風ながら、欽之助はお京が待ち煩らうてゐるであらうと思へば、寒さもさまで苦にならぬのであるが、橋を向へ渡ると勸めるまゝに辻車に飛び乘つて、縄手通りから大和大路を一直線に大黒町に走らすのである。

さうして曉方まで殆ど微睡ともさせられいで朝五時頃に起きて歸つて來ると、正午になつて三時間も四時間も晝寢をすることがあつた。

どうかして少し行かないでゐると、すぐお京の氣嫌が惡かつた。一度二三日間をおいて行くと、お京は

入口から懷中に手を挿入れたまゝ火鉢の傍の柱に凭りかゝつて蹲ぎ込んでゐた。欽之助が上つて行つても默つて口さへ利かなかつた。

『どうしたんえ？』欽之助は氣嫌を取るようにいつたが、それでも默つてゐた。

欽之助は凝乎と對手の顏と見ると其處に落着いてから結び始めた丸髷の頭髮が櫛をあてぬと思はれて、がくりと根の緩んだ髷に白い物が溜つて、平生は平面の豐頰とした顏が汚れて小く見えた。

欽之助はまたかと思ひながら、自分も暫く默つてゐたが、やがて氣嫌を取るやうに、

『なんや、そなんに氣に入らん顏をして』

といひながら笑ひかけた。

『あんたはん、私の處に來るのがもう厭になつたんどつしやろ。そんなんやつたらもう來てもらはんとよろしい。』お京は突如こんなことをいつた。

欽之助は意外の思ひをしながら、

『なに言ふてんのや、そなことといふたかて、自家が忙しうて、毎日〱此處へ來られへんやないか。』

『あんたはんは家におゐやすと、そら賑やかて面白うおつしやろけど、私は一人やさかい此處に靜つとしてゐると寂しうて〱叶ひまへんわ。』

『ふん、寂しいことは寂しいやうけれど、そら堪えて辛抱して貰はんならん。何時までもこんなにしときやへんよつて。』

欽之助が斯うしてお京に小い家を持たして遣く金の出處といつては別に無かつた。僅かに自分の小遣

の中から辨ずるので、まだ親係りの身ではさういふ秘密の小遣の出處がなかつた。思ふやうになるものならば、まだ年の稚いお京を獨り置いて水仕事をさしたり、寂しい目をさせたりしたくはなかつた。さういふ不如意を思ふにつけ、家で少しも不自由といふことを知らずに毎日笑ひさゞめいて面白い日を立てゝゐるお仲やお八重を初め彼等と父との間に出來た異腹の弟妹などの幸福な境涯に引比べてお京が可哀相であつた。そして自身の身さへ哀れに果敢なく思はれた。

欽之助の考では、自分はどうせ餘り遠くない内にかねて許嫁になつてゐる神戸の政子と結婚をすることになる。結婚をして自分の身が固まつてしまへば金錢上の自由も出來て來る。さうすればお京の事も少し自分の思つてゐるやうにしてやられる、それを考へれば政子との結婚を急ぎたいのであるが、欽之助にはまた彼だけに種々な氣苦勞もあつた。自分が結婚をする前に兄の責任としても妹の芳子を嫁けてしまはねばならなかつた。その頃芳子はある溫泉場で顏を見知つた大阪のある病院に勤めてゐる醫學士との間にぼつ／＼縁談が持上つてゐた。

彼はそんないろ／＼な華やかな話の間に日の過ぎて行く自家の者を想ひ浮べてゐた目でまたお京の凋れてゐるのを見ると拗ねてゐるのが、ひとしほ慘めなやうに思はれた。

欽之助で始めて男といふ者を知つたお京の稚い心には唯男に傍にゐてもらひたいより他に欲も得もなかつた。朝まだほの暗い時分に欽之助が起きて歸ると、直ぐその日が暮れて夜が來るのが待たれるばかりであつた。

それを二日も三日も來てくれなかつたので、若い心の一と筋に思ひ焦つて、此度來たかて口も利いて

やらへん。といふ氣になつてゐたのであるが、それが今來て傍に坐つてゐられると、不思議に男の力に滅入つた心を引立てられて、お京は柔かい嬉しい心持ちに身體を包まれてゐるやうで、氣嫌を惡くしてゐた顏を上げて欽之助の顏を見た。すると、まだ楓家の家にゐる時分から、時々厭なことをいふお仲さんや、妹の芳子さんや、その他多勢の自分より年上の女子衆のゐる中で、それ等の目を忍び〳〵逢つてゐた若旦那の獨り優しかつたことが思はれて、今見ると矢張りその優しい若旦那である。

『ほゝ、お寒おしたやろ。』

さう言つて、お京は漸と身體に勢が付いたやうに姿態を取直した。そして火鉢に炭を繼いで、茶を煎れたりした。

やがてお京は立ち上つて押入れの中から蒲團を取出して寢床をのべた。深々と底冷えのする室の中に、欽之助が好みて新調した綿の柔らかさうな友染めれんすの夜具の炬燵の形に高く盛れ上つたのに、電燈の光が美しく映えてゐた。

六

間もなくその年を暮れてお京は十七、欽之助は二十六の春を迎へた。二人の關係は同じやうに續いて日が經つた。すると一月の末時分になつてお京の身體の樣子が違つて來た。若い男女は最初は不安の中に惑うてゐたが、どうしてもそれに違ひなくなつた。

欽之助にはそれが胸に枷を置いたやうに思はれた。お京はそれが爲に自分の身が確かになつたやうにも思はれたが、どうかすると、それよりも賴りない心配の方が先に立つて欽之助つ顏を見ると氣を回し

て怨んだり泣いたりするやうなことが多くなつた。

　それに伴れて欽之助にはいろ〳〵考へることがあつた。假令外に隱して置くにしても今までの通り殆ど毎晩のやうに夜家を明けてゐては、何時かは自家の者に分らずにはゐない。もう既に多勢の女中や下男などには、若旦那は今夜もまたお京さんの處。といふことが知れてゐるのであるが、餘人ならぬ欽之助のすること故彼等は互の秘密話にはすることがあつても、愼み深く口を噤んで女中頭のお仲や、妹の芳子などの耳には入らぬやうにしてゐた。

「若旦那は好えお方や。」

お京のやうな關係のない他の多勢の女中達でも皆ないつてゐた。

「若旦那に、また何か買うてもらをやおへんか。」夏季暇な時分身體を持て餘してゐるやうな時に女中達の間にさういふ相談が始まると、たれかゞ帳場の欽之助の處に行つて

「若旦那、今日は、まあ、きつう暑いことやおへんか。」さういふと、

「うむ、暑いやらう。」

「暑うて、睡うて、睡うて仕樣がおへんわ。」

「うむ、睡いやらう。ほんまに睡むいやろ。」

「睡うおす。何か買うとくれやすな。」

かういつて請願むと、

「あゝ、買うてやろ。何が好い。」

「何てもよろしいわ。若旦那は好え物買うとくれやす。」

「ほんなら菓子買うといて内證やて。」

と、いつて内の者やお仲などの見て居ない間に五十錢銀貨を一つ出した。

何につけてもさういふ風なので女中達も若旦那の事ならお京との事をも氣を利かして奥へは秘するやうにしてゐる。

朝早く欽之助がお京の處から戻つて來ると、勝手口から家内の樣子を覗ひ〳〵其處に居合す女中に

「どうや？」と、訊ねて、

「あ、まだ寢てはります。』女中が確めるのを待つて、秘と廊下を忍んで、階下の自分の部室にはいつて、昨夜から寢てゐたやうにして、また寢直すのであるが、どうかすると、既う奥でも起きてゐる時分に歸つて來ることがあつた。ある寒い朝であつた、しかも霙まじりに降る雨の中を傘を翳して欽之助は歸つて來た。毎時のやうに勝手口から覗いて家内の具合を訊かうとすると、間惡く丁度お仲が其處に來かゝつた。其處にゐた女中はそれと見ると、自分の身體でお仲と若旦那との間に陰をするやうにして、胸の處で小さく掌を振つて目配せした。欽之助はそのまゝ傘て身を隱して靜ゝ身をかはした。さうしてお仲が用を達して奥に引込んで行くと

「今、早う〳〵。」

彼はその間に家に入つた。『まあ、若旦那が、寒い寒い雨の中を……』と、女中達はさう言つて欽之助を痛しがつた。そんなことは稀しくはなかつた。

そんなだから早晩これが芳子やお仲に知れずにはゐない。彼等に知れゝば父にも知れる。自家の者に知れてはまた面倒である。それにお京が今のやうな身體になつては、これから先き自分の秘密が一層複雜になつて來る。

これまで影の形に伴ふやうにして常に互の胸の内を語り明してゐるのは妹の芳子であつた。それが、お京といふ秘密の女が出來てから、欽之助は妹の心から遠かつて行つた。それが芳子には不滿であつた。今まで自分のものであつてお京の爲に取られた兄の胸の中に、どうかして入つて來やうとする妹は、欽之助に取つては最も避けねばならぬ邪魔に思はれて來た。欽之助は卒先して妹の縁談を進めた。その縁談は早く纏つて芳子は五月に醫學士と結婚した。それにつゞいて欽之助の結婚式も、祖父が自分の目の明いてゐる間に是非にといふので、此の秋の末を待つて行ふことに相談が定つて來た。

その頃お京は大黑町から、欽之助の自宅にずつと近い高倉御池をちよつと上つた、狹い露路の中の長屋に移つてゐた。欽之助はその目と鼻との處を今までの通りお京の家へ通ふてゐた。暫くの間無事な日が續いてゐた。

中の卷

一

間もなくまた暑い夏が循つて來た。それは欽之助とお京とに取つては思ひでの多い、明後々日が祇園祭の夜宮の七月の二十日であつた。彼は昨夜もお京の處に泊つて未明に歸つて來て例のやうに階下の自

分の部室に入つて一度寢直して、七時頃に目を覺した。

「若旦那ちよつと。」

お仲が、今朝飯を終つた欽之助を呼んだ。

「あんたはんにちよつと」と、いひながらお仲は先に立つて廊下傳ひに人目を避けた奥の方の一室に案内して行つた。

「私からなああんたはんに、またこんなお話をしても、どうぞ悪う取らんとおいておくれやす。昨日なあ、誰れや知らん、まあ、怪體な、お父さんの處へこんな手紙をおこした人があるのんどつせ。あんたはん知とおゐやすのと違ひますか。ちよつと一遍讀んど見ておくれやすな。」

お仲は優しく言ひつゝ一通の封書を懐中から取出して欽之助に渡した。

欽之助は、なんや？と、怪みながら、それを手に取つて表裏を返して見たが、その筆蹟は自分にも少しも心當りがなかつた。「手紙の意味は

貴下の御子息欽之助さんが關係してゐられるお京といふ女は性質の善くない女で、近頃妊娠してゐるのも、それは欽之助さんの眞實の子ではない。あの女は御子息の目を忍び、役者と關係をしてゐる。腹にゐる子はその役者の子である。あんな女と御子息と永く關係してゐられるのは宜しくない。

かういふ匿名の密告書てある。

欽之助は、それを讀み〳〵手が慄えて、一時に胸に錘を置いたやうに厭あな心持ちになつた。

「それをお見やして、お父さんもさつう心配しとおゐやすのどす。」

お仲は、對手の氣色を窺ふやうにしていつた。

欽之助は表に不審の色を浮べつゝ、心は疑惑の暗に包まれたまゝ暫く默つて考へ込んでゐた。

「それ、ほんまどすやろか。誰が、そなこと書いたんどつしやろ。そやけど、これにいふたあることがほんまどしたら、まあ、お京さんも恐い女やおへんか。お父さんも、さういふとゐやすのどす。あんたはんもこの十一月には政子さんと結婚をおしやすのやよつて、そのつもりでゐて貰はんならん。そら、せんどもなあ、お京さんのやうな女があつても、ちよつとも構やへん、そなこと喧しういふやうなお嫁さんやつたら、來てもらはんでも可えいふとゐやしたんどつせ。そやけどこの手紙をお讀みやして、こんな惡い者に關係してゐてはどむならんさかい、あんたはんの方でもよう考へと見やすやうにと、そない言ふておゐやすのどす。」

默つて聽いてゐる欽之助の頭には種々な思想が混雜に群がつた。一體誰れが斯んな手紙を越したのだらう。さうしてお仲の話の口振では父もお仲も自分が外にお京を隱してゐることを夙に氣付いてゐたらしい。それにしてもお京が自分の目を盜んで、そんな惡いことをしてゐるだらうか。この手紙によつて强ひて疑へば疑はれぬこともない。もしこれが眞實であつたなら、一と思ひに彼女を棄てゝしまふ。去年の秋楓家から出す時にも寧そ綺麗に別れてしまふか。と、幾度考へ直したか知れなかつたのを、矢張り未練が殘つてゐて、後日の難儀と知りつゝも、どうしても思ひ切ることが出來なかつた。今まで父やお仲の手前を巧みに隱しおませてゐるとばかり思つてゐたのに、それがいつの間にかすつかり分つてゐ

しくいふやうな嫁なら來て貰はいて好えと言つてゐたといふけれど、父の身にしては自分がお京を外に圍うて置くのを不可とは言ひ難からう。またお仲にしても、何の事はないお京と自身とは同じ境遇である。それ故に父もお仲も自分のしてゐることを知つてゐて知らぬ風を裝うてゐたのである。父は口でこそお仲にそんなことを言つてゐても、それは本心で言つてゐるのぢやなからう。自分だつて妻の外にお京のやうな女があるのはいづれに對しても愛情が眞實にならなくて自分で不愉快だ。神戸の政子は好きでもないが、厭でもない。あの純潔な政子と結婚をするのにお京があつては何だか將來の永い自身の今後の一生の幸福が取留めもなく散亂されるやうな氣がする。……

こんなことを、それからそれへと考へ惑うてゐると、欽之助の胸の隅には、お京に對して薄情な心持ちが密んでゐるのが、またしても自分ながらあり〳〵と認められた。

「あんたはんも、後てお靜にようお考へやしてお見やす。」

欽之助が惡い顏をして何時までも默つてゐるのでお仲は慰めるやうに言つた。

「僕が惡かつた。よう考へて決心するさかい。あんたから、お父さんに、心配せんとおいてもらふやうによう言ふといておくれやす。」

欽之助は素直に答へた。

二

その日は一日家にゐたが、父が何も斯も知つてゐながら、自身面と向つては何事も言はず、さも〳〵そんなことは關知らないやうに平常の通りにしてゐるのが欽之助には宛も眞綿で首を縊めてゐられるや

う て何とも言へない壓迫を感じた。さうして日が暮れるのを待つてお京の處に行つた。
麩屋町の通りからお池を西に折れて高倉通をちよつと上つた左側の狹い露路を入ると、その狹い露路を、また半分に仕切つた板塀が立つてゐて、その左側に五軒つゞきの低い長屋がある、その三軒目にお京は一人で住んでゐるのである。六疊と四疊半との二間に沿ふて僅に體の通れるばかりの細い土間があつて、便所の横の狹いじめ〳〵した庭は前の家の大きな土藏の剝げた壁で日の目も見られなかつた。
外から入つて行くと、むうつとするやうな晝間の火照のまだ殘つてゐる暗い部室でお京は電燈の紐を鏡臺の上に引張つて行つて、鳴海絞りの浴衣の肌を脫いで眞白い皮膚を出しながら湯上りの化粧を凝らしてゐた。

「ほ、おこしやす。」
「はう、暑。」
欽之助は急がしく扇を使ひながら熱くなつた疊の上に腰をおろした。
去年の秋始めて大黑町に家を持たしてから少しづゝても絕えず何か知ら入るに任せて買ひ調へてゐるので、狹い家の內が何となく落着いて來たやうに思はれる。欽之助は凝然と其處等を見廻した。お京が生命よりも大切な簞笥の中も一枚づゝ物の數が殖えて來た。欽之助は元來着物や帶の縞柄を見分けたりするのが好きでもあり上手でもあつた、東京に行つてゐる時分にも歸京る時には芳子や、以前に長く關係してゐた女などに三越から種々な中形などを何反も買つて來た。
「もうお夕飯お濟みやして。」

漸く化粧をおはつたお京は、まだその後を兩掌でひた〳〵顔を叩いて、尚ほその上に濡れた手拭で頬を撫で廻しながら、浴衣の肌を入れた。

欽之助は返辭をしやうともせず柱に凭れて脚を投げ出しながら、女の秘密を嗅ぎ出さうとでもするやうにお京の姿態を見守つてゐた。

餘處目に立つ六月のお腹を赤い扱帯で大きく締めた腰の周圍からぺつたりと坐つた膝前が亂れてゐるのが欽之助の嫉妬を唆つた。去年今時分まだ肩上げをして、自家にゐた頃に比べると、一つは丸髷に結つてゐる所爲もあらうが、見違へるほど大人びて來た。ちやうど一年前の祇園祭の夜宮の夜であつた。妹や弟などは多勢で表の通へ街の賑はひを見物に行つた時、平常はお京をも伴れて自分も一緒に外に出馴れてゐたのに、その晩に限つて一人家に殘つた。自分も行かなかつたから、お京をも誘はなかつた。芳子が兄さんどうしてお往やへんのどすといつて不審さうに訊ねたのを體よく何かに託けて外した心の奥には惡戯な欲望が強い力で密んでゐた。

「お京さん、僕三階に行てゐるよつて、あんた後でアイスクリームを取つて來てんか。

若旦那であつても、妹の芳子などゝ違ひ、欽之助は女中達を呼ぶにも毎時さんを付けて呼んでゐた。さうして何でもない事にでもよくお京さん、お京さんといつて、欽之助はお京に用事を命じてゐた。お京は返辭をしやうと思つて、何の氣なく欽之助の面を見ると、自分の心の影か、その時に限つてハツと可恐しいものに近づくやうで躊躇ふ氣になつたが、すぐ思ひ直して、

「へえ、へえ。」と、早口に返辭をした。

三階の凉臺に出て籐椅子に横つてゐる欽之助の處へお京はすぐ後からアイスクリームを三つ盆に載せて運んで來た。その時お京は一度降りたのにまた後で上つて來た。

縹緻からいつたら先の京極の女の方が美人であつたかも知れぬ。東京の學校に行つてゐる頃から餘分な學資をもらつてゐても茶屋遊などは餘りしない方て、非常の潔癖て感情の脆い所爲か、悲しい弱い女を見付けてはそれに深くなつた。尤もそれは彼の心持ちて對手の女をそんな者にしてしまつたのかも知れぬ。

欽之助はお京を見てゐるとそんなに好い縹緻てはないが、素直な好い毛が水氣を含んだやうに濡れてゐて、淡紅色の手絡をかけてゐるのが、色白のまるぼちやの顏によく映つてゐる。さうして整然と化粧をして見ると芳子が惡口をいつた鼻の高くなかつたり、額が少し出てゐたりするのが、そんなに邪魔にならぬ。がさういふことよりも一年の間馴染を重ねて來たといふことが自分達の體に最うどうすることも出來ない深い因縁を結んでゐるやうて、彼は絶ち難い愛着を感じた。

これが役者と關係してゐる？それが眞實だつたら、どうしてやらう。欽之助は、

「はあッ」と、太息を吐いた横になつた。

「どうおしやしたの。さつきから默つて。何をそないにしゆんどゐやすの。」

お京は甘えるやうにいつて、ぼうッとなつた顏を向けてこちらをじつと見た。

「面白うないことがあるよつて。」

「なにがそんなに面白ないのどす？」

お京は欽之助の頭の傍により添つて、上から覗くやうにして微笑んだ。
『暑いッ。』と、邪慳にいつて欽之助は、それを手で排ひ退けた。
『ほ、何をそんなに怒つといやすの。』
『何も怒つてやへんけど、僕はもうお前の處に來いでもえゝやろ思ふて。』
欽之助はさういひながら起き直つた。
『まあ、何どすいな。』
欽之助の顔が戯談でもなさゝうなので、お京は訝しさうに見守つた。
『眞實のことをいつとくれ。お前、僕に隱してゐることがあるやろ。』
『まあ、まあ。怪體な。なにを私があんたはんに隱してゐますかいな。』
『ほんまにさうやつたら、僕はなにもいはんさかい、噓いはんと、いつとくれ。隱してゐることがあるやろ。』
『何を隱してゐますかいな。その隱してるちうこと、早ういふて聞かしとくれやす。』
『ほんならいふがなあ。今朝家歸つてると、お仲がちよつと話すことがあるからいふて、僕を誰もゐん處へ呼んでこんな手紙を見せたんや。』
さういひつゝ、欽之助は今朝の手紙を取出してお京に讀んできかせた。
『お前ほんまにこんなことがあるのか。あるんやつたら、あるといふとくれ。』
『まあ、厭らしやの。だれがそんなてんごういはゝつたんやろ。私、なんぼ阿呆やかて、そんなこと

するやうな女子とあんたはんに見えますか。」

お京は恨めしさうに手紙を取上げて見てゐた。

「そら分らんな。僕が何時も此處に來て番してゐるんやないから。」

「ほんなら、あんたもさうお思ひやすの?」お京は、きつぱりといつた。

「思ふちうこともないけど、私にはお前の心が分らんさかいな。」

「そやつたら、やつぱり疑はゝんにやわ。そんなこと好えやうにいふて私を棄てやう思ふとゐやすのにちがひおへん。私のやうなせうむない者が付いてゝは政子さんと結婚おしやすのにお邪魔どつしやろ。」お京は鳴海絞りの袖てしく／＼涙をおさへて鼻を啜つた。

「政子のこと、何も今いふてやへん。この手紙、誰れが、こんなことしたか分らんけど、何かお前に惡いことがあるのやろ。……お前、よう役者の繪葉書をたんと持つてゐたやないか。」

「役者の繪葉書を持つてるのが、なんどすいな。」あんたはんもよう買うとくれやしたやおへんか。お仲さん、どうして私をそないに憎んどやすのやろ。私がやゝこと二人て死んでしまへば、あんたかて宜しいやろ。」

お京は疊に俯伏して泣いた。前の合はぬ膝先から赤いものが見えてゐる。

「そんな無茶をいふたてあかへん。」

「どつちやが無茶どす。」お京は絞るやうにいつた。

欽之助はそれをば疑ひ氣もなく[illegible]聞いてゐたが、いくら自分を惡く考へても、か[illegible]他の男のものとは信じられない。さうかといつて父やお倖などお光の手紙を企んでしたことゝも思はれない。胎兒は自分の子に疑ひはなからうとは思ふが、もとはほんの一時の怨みに手を出したに過ぎないのだから、これまでも幾度も考へ直した通り、なるべくならばこれを好い機會に手を切らう。それが可い。と、努めて心を鬼にする氣になつた。さうして今晚に限つたことではないと思つたが、

『おい、泣くのはもうお止め、泣いてゐては話が出來へん。……僕も此の手紙のとほりやとは思やへんけどなあ、どつちやにしても、お前と僕とはこれから後何時までも一處にやなられんのやよつて、やいてが出來るまでは世話をするかい、ほしたら諦めて別れとくれ。』

かういつて彼は、女に聞かすよりも自分の胸の中を口に出した。

女はそんなことは聞えぬものゝやうに泣きつゞけてゐた。彼も思ひあまつて歎息を吐くより他はなかつた。暑苦しい家の中に暫くお京の欷歔するのばかりが聞えてゐた。女に泣かれる時は男は唯默つてゐるより仕方のないものであるが、それを他から見てゐる者があるとしたら、當人は見つともないやうな、羞しいやうな、困つてゐるやうな氣持ちになるてあらう。欽之助が丁どそれてあつた。

お京は俯伏しながら、胸の中で種々なことを思つてゐると思はれて、疳の高い聲を立てゝ强か泣いた。

お京がも少し年を取つてゐるか、或は男ずれてもしてゐたら却つて始末が好かつたかも知れぬが、茶屋奉公をして來たとはいひながら、まだ本當の處女で欲も得もなかつた。自分には役者と關係したとい

ふやうな、そんなことは少しも身に覺えのないことである。單純な彼女の心には初めから欽之助を爲になる人だと思つて今のやうになつてゐるのではない。たゞ若旦那が誰れよりも一等好きだから、若旦那に逢ふのを樂しみに斯うしてゐるのである。それを赤兒を産んでいくらかお金を貰つて、それつきり戀しい人に別れてしまふ。別れてしまつて他人になつて、もう一生會はないんだと思ふと、前後の思慮もなく、只その別れて他人になるといふことが一途に情なくつて、つまらなくなつて、生きてゐる空はない。

「私、死ます。……あんたはんのやうな薄情なお方、私知らん。私死んで怨みを晴らす。」

お京は思ひつめたやうに泣聲を立てた。

欽之助は手が附けられないやうな氣がした。

「まあ、えゝわ。泣くのやめたら好えやろ。」

欽之助は女の泣くのを止めさせやうとした。

けれどもお京は、泣きながら聞いた欽之助の言葉が氣に入らなかつた。あゝいつて別れてくれといふからには若旦那の心はそのつもりでゐるのは分つてゐる。既うそんな氣になつてゐるのなら、それを聞いたゞけても棄てられたも同じことだ。それでなくてさへ此の十二月の五日には神戸の許嫁の女と結婚の筈になつてゐる。口では、なに妻は妻だ。が、お前はお前だ。政子が來たからとて、お前は今までの通りにして置くばかりぢやない、漸次もつと好くしてやると何度も聞かされてはゐるけれど、眞實の腹は分らない。

『嫁はんもらうたら、私のこと今までのとほりに思ふておくれやへん。』かう思ふと、やう／＼涙を拭きながら起き直つたのが、また後から悔しい胸がせき上げるやうに遣る瀬なく心細くなつて來て、涙は留めどがない。

若旦那と關係して楓家を出てからは、先に奉公をしてゐた時分よりも餘計に金をもらつて、それは毎月お養父さんの方に取られてゐる。今もし若旦那に別れられて、手切れ金をもらつたにしても、それもまた養父母に取上げられて、その上にまだ無理なことをいはれるに定まつてゐる。金などは貰つても貰はなくても同じことだ。

『私、どないしまへう。』

泣聲で獨言をいひながら側に欽之助のゐるのは忘れて、さも思案に暮れたやうに喪然となつて遠くを見てゐる。その目は涙に霞んで部室の電光がチラ／＼する。

その姿態を見てゐると、欽之助も元々憎く思つてゐるのではないのだから、つい誘はれ氣味にいぢらしくなつて來た。あゝさうだつた。そんなら何處へ相談の持つて行く處のない、たつた一人の女であつた。その體を自分が自由にして、こんなに丸髷に結はして、あんなに大きな腹になつてゐるのだ。

そんな考が浮んで來ると、先刻はあまりに泣かれて厭な心持になつてゐたのが、今度はまたわけもなく可哀想になつた。もし自分が棄てたら、それから先きどうなるであらう。欽之助の頭にはフと骨屋町の貧しい家で世智辛く朝から扇の骨を削つてゐる女の養父母の生業に窶れて人間らしい艶の失せた姿や、暫くそこにゐてまた新しい奉公口のあるのを待つてゐる見すぼらしいお京の形が見えた。自分との

縁が切れたら此度はどんな男にこの丸髷に結つた色白の身體を任すことだらう。今こんなに身も世もないやうに泣いてゐても、その内にはまた他の男に、丁ど今自分に心を打込んでゐるやうに靡いて行くてあらう。別れてしまへばさうなつても仕方がない。けれどもこんなに泣くのは自分が好くつて、よくつて泣いてくれるのだ。欽之助は、お京の姿態を見てゐる間にまた甘い悲しさに胸を引締められるやうな心持ちになつた。

「そやさかい、その好きな役者の處へゐたらえゝやないか。」

彼にはまだ嫉みと疑ひとが殘つてゐた。そして可哀さうな女をもつと泣かして焦らして見ねば氣が済まなかつた。

「私、もあんたはんの心よう解つてます。」

お京は泣き〳〵言つて、ついと立ち上つて、そのまゝ何處かへ出て行かうとした。

「おい、何處へ行くのや」

「どこへ行たかてよろしいやおへんか。」

「こら、待て。」

欽之助は、後を追ふて立ち上つた。

「そこ、放しとくれやす。」お京は、欽之助が掴んだ浴衣の袖を振り放さうとして踠いた。

今夜のやうな話をした時ばかりではない、何か人に言はれて腹が立つたことがあると直に私死んで怨みを晴らすといふのが稚いお京の癖であつた。

[illegible]

して元の處に連れて來て坐らした。

「そなこと無いのやつたら、それてえゝやないか。」さういつて汗を拭き〳〵、まあ何というてことになつたかと心の中て歎息した。

「ほ、よういはるゝえ。あんたはん、今私に別れて欲しいおいひやしたやおへんか、もどないなつたかて構やしまへん。私死にますさかい。」

「お前は何やいふと、すぐ死ます死ます、いふけど、そんな自暴いふたら、あかへん。」

欽之助はその夜お京を一人置いて自家に歸ることが出來なかつた。

三

昨夜夜中殆ど眠らないで漸くの思ひて女の氣嫌を取直した欽之助は朝早く戻つて來て毎時の通りぐつすり寢直した。一寢入して八時頃に眼を覺すと昨日から土用に入つた京都の暑さは格別て、朝からじり〳〵と照りつけた。彼は睡眠不足やら、手紙の一件からの煩悶やらて、頭は重いし自家にゐて父やお仲と顏を會はすのが不愉快てたまらなかつた。それて俄に思ひ立つて大阪から神戸の方に行つて見る氣になつた。暫く振りに政子の兄にも會つたり、大阪の芳子に會つて昨日からの事情を打明けて相談をしたらまた何とか好い智惠も出たり氣も晴れるだらうと思つて出掛けることにした。

明け放した車窓から靑田の上を渡つて來る風がそよ〳〵と疲れた頭を吹いた。今朝起きたまゝまだ

飯前であつたので食堂車に入つて行つて二三品食べる物を取つてサイダを飲みながらまた昨日からのことを思ひつゞけた。

先刻から傍の食卓に凭つて頻りにビールを飲んでゐた坊さんと、若い西洋人とは大阪の手前で出て行つた。大阪を發車すると此度は丁ど自分と同じ年頃の粋な浴衣がけの若い男が透綾を着た藝者らしい女と入つて來た。

二人仲好さゝうにひそ／＼と話をしてゐる様子では宮島から別府あたりへでも行くのらしい。いづれも親達の目を盗んですることであらうと、さういふのを見るにつけ欽之助はそゞろに自分の今の身が思はれた。かうして汽車に乘つて旅行らしい氣持ちになつて見ると昨日自家でお仲にいはれて厭な思ひをしたり、昨夜徹夜お京の氣嫌を直すのに手古摺つたりした苦しみは漸次忘れたやうに薄らいで、たゞ矢張りお京が可愛さうなものに思はれた。神戸に行つて政子や兄に會つて見やうといふのも、そんなら會つてどうすると定まつた思慮もないのだが、お京とはどうしても別れなければならぬやうでもあり、さうかといつて無殘に棄てるのも忍びないやうな氣もする。許嫁の政子はどんな調子の女で、どんな風姿をしてゐたか、かねてよく知つてゐるわけだが、尚ほよく見なほしたら、それが爲にお京のことで千々に碎けてゐる胸に決心がつくかも知れぬ。

神戸の家では海岸通りの本館と諏訪山の別館とで盛大に營業をしてゐる。その日は兄も妹も別館にゐて久し振りに訪ねた欽之助を歡待してくれた。政子はお京

ことを知らぬ身に對して少しも愛情が起らなかつた。兄と話してゐる座敷にも出て來た。欽之助は格別厭とは思はぬがその實て不幸といふな顏をしてゐる。

もとから同情心が深くつて小說などを耽讀してゐる上に女といふものをも相應に知つてゐる欽之助には、政子のまだ生な苦勞なげな處が何だか物足りなかつた。そして自分がこの女と結婚しないでも政子は決して幸福に事を缺かない、親もあれば兄弟もある、富もある。といふことが彼の情を惹かなかつた。それに比べるお京はどうしても慘めである。可哀さうな稚い女を因果を含めて手を切り、さうして此の幸福さうに生きてゐる政子を妻にすると考へると欽之助は堪らないやうにわけなく哀れてあつた。

そんなことが始終頭の中に往來してゐるので、何か話して見たいやうな心持ちて神戸までやつて來たのが、さて何も話すことがないので、泊つて行けといふのを強て斷つて呆然其家を辭して歸つた。さうして大阪の妹の處に寄つた。芳子の家は天王寺の近くにあつた。訊ねて行つて見ると、その日芳子は丁ど欽之助と行き違ひに京都に行つた留守であつた。

その晚は何處かへ泊るつもりて出たのであるが、神戸では何だか氣が落着かないし、たゞ芳子に會つて少しも早く頭の中のもや〱を打明けたら胸がいくらか透くやうに思はれて、暮方に氣の進まぬわが家へ戻つて來た。

『まあ、兄さん。行き違ひになりまして。そやけど早うおしたえなあ。』

芳子は懷かしさうに奧から出て來た。

『今日はきつう暑うおしたやろ。繁さんにお會ひやして。政子さんも御機嫌よろしうおすか。』

『ぶん、會ふた。皆機嫌え丶。どや、お前のとこも皆機嫌え丶か。』

芳子が嫁いてからまだ二た月ばかりにしかならぬのであるが、彼等は互に長く會はなかつたやうに思はれた。

その晩は奥の座敷で父の淨瑠璃の稽古上げがあつたので、二人は隣座敷でそれを聽きながら久しぶりに打解けた話しをして親しい夜を更した。

いづれも六疊の次の間を控へた落着いた十疊の二た間を鍵の手に長い回縁がつゞいてゐて狹いながら數奇を凝らした閑濕とした庭の樹陰から涼しい風が通うて、端近に座を占めてゐる浴後の白衣の肌に心地よく觸れた。軒に吊した岐阜提燈の灯影も淸らかである。

『政子にも會ふたが、相變らず小供て仕樣がないなあ。僕はもう政ちやんの結婚を斷はらうかと思ふてる。』

欽之助は氣のなさゝうにいつた。

『何故どす?』

『何故といふわけもないが政ちやんは、あんまり淸淨すぎるし、僕はあんまり感情が荒びすぎてゐるやうな氣がする。』

『そなことおへんわ。そら兄さんはあなたは男どすもの。政子さんの淸淨なのは女子として當然どす

[illegible]出した時を最後にお京のことは奇麗に思ひ切つたことにしてゐるので、今度は關係をつけてゐることを認るのは、假令妹に話すのであつても極りが惡かつた。

「そら兄さんがさうお思ひやすのやつたら、ようわけを話して暫くお延しやしたら、よろしいやおへんか。まだ何方も遲いのやないさかい、そんなに急がんかてよろしいわ。」

かういつた芳子が、その日に大阪から京都の實家まで兄に會ひに來たのにも理由があつた。芳子の嫁いてゐる醫學士とは、最初何處かの温泉場で兩方で顏を見知つたのがもとで緣談が調つたのであるが、さて行つて見ると聞合したのとは相違があつて、大分借金などのあるのが分つた。小口のものは芳子の持ち合せで始末をしたが、段々返濟期に差迫つた巨額の請求書が來たりした。結婚前から長く關係してゐるらしい女と芳子に秘して手紙の往復を續けてゐるのも發見された。

夫の留守の間に密と探し出して披いて見たその女からの手紙によると、今の妻と結婚をしてゐるのは、單に借金を返す爲てある、それが濟めば離別をするといふやうなことさへ夫から言つてやつてゐるのが判斷された。

尤も夫は夫の方でいろ〳〵な面白くないことがあつたらしい。第一同僚や友人などから金滿家とはいひながら、しかも旅館營業をしてゐる家の娘をもらつて、それで贅澤な生活をしてゐると評されるのも面目ない。それにさも〳〵金のある處から嫁づいて來たことの思はれる芳子の派手な遣り方も夫には思

はじくなかつた。さういふことから夫婦の心持ちが漸次に喰ひ違つて來てゐた。

『兄さん、結婚といふものは、よう考へてするものどつせ。』

『何故や？お前こそ。』

『私、しみ〳〵さう思ひますわ。』

芳子は今日俄に思ひ立つて兄に會ひに來たわけを一と通り話したが、これも端ない嫉妬がましいことを口にするのを恥ぢて流石に知らぬ女と夫が書信を遣り取りしてゐることだけは包んでその晩は言ひ出しかねた。

『その借金は何んぼほどあるんや？』

『さうどすなあ、三千圓ほどもありまつしやろ。』

『何や、それくらいの金やつたら、そんな心配せんとおいたらえゝやないか。後で僕、お父さんとよう相談して出して貰うてあげるさかい。女といふものは、一旦嫁ついたら、もう其處を出て歸るちうやうな考を起しては、どむならん。』

妹思ひの兄の優しい言葉に芳子は賴母しさを感じたが、借金のことよりも氣の濟まぬのはその夫のことであつたけれど、

『私、厭どすけど、お父さんに一遍案じよう話して見とくれやす。』

と、浮ぬやうにいつてその話しはそれで切れた。

『[illegible]』
『お父さんのは、『面白うおへんわ』』芳子が笑つた。
其處へ弟の欽之助が入つて來た。彼等は三人が亡くなつた母の一つ腹から生れて來たのである。
『靜にしてお聞きいな。』
欽之助は一心に聽き入つた。彼は遊戲は何でも好きて、球突なども巧みであつたが、音樂は小說と同じやうに大好きて自分でもマンドリンを彈いて、東京の學校にゐる頃よく朋友のお母さんなど〻長唄の合奏をしてゐた。
『あの面白さを見る時は。おつと、よし〳〵。染殿そなたと某が、去年の初秋七夕の座敷踊をかこつけて、忍び逢ふたを思ひ出す。』
急調な三味線に伴れて美しい滑るやうな聲音が晴やかな一間に鳴り渡つた。それとともに大きな紙燭の灯影がゆら〳〵と搖れて座敷の隅を取廻はした金屏風の表が明く輝いた。
不斷から極めて感傷的な性質な處へ以つて來て昨日からのことで、ひどく神經が興奮してゐるので、凝乎と聽いてゐる欽之助は漸々歌曲の進むに伴れて、物悲しいながらも樂しいやうな夢幻の世界にでもすうつと持ち上げられて行くやうな快い氣分になつて來た。六かしいことでもわけなく出來るやうに思はれたり、苦しいことでも少しも苦にならぬやうな心地がして來た。
『アイと、お傻が、とも〳〵に。暫し此世を假蒲團、薄き親子の契りやと枕に傳ふ露涙、夢の浮世と諦

めて、更行く鐘も哀れそふ。」といふ濕やかな節廻しの合の手の處になると、彼は、絶えず胸の底に蟠つてゐる不快な感じが嘘のやうに一時忘れられて、お京のことがそんなに苦にならぬばかりか自分達も丁ど、今語つてゐる浄瑠璃の中の男女のやうに悲しい美しい境遇にゐる人間のやうに思はれた。

そして與次郎の道化た仕草や詞の處になると一緒にどつと笑つた。

欽之助は終の猿舞しの處の合の手を特に面白がつて、自分でも口拍子を取つて聽いてゐたが、やがて一段濟むと、浮々した調子で書齋から帝國文庫の近松の浄瑠璃集を取つて來た。

「お前達近松をよう讀んど見や。」

さう言つて、三人枕を並べて寢床に横はりながら遲くまで芳子や弟にそれを讀んで聞かした。

欽之助の眼が疲れて本を措く頃になると、少し前から靜かにしてゐた芳子も好郎も微睡となつてゐた。

「もう寢てんの、早いなあ。」

妙に頭の靜まつて來た欽之助は、何だかもつと浮戯けて見たやうな氣持ちになつてゐた。そして靜つと手をやつて、藍の輕い蒲團を胸の處まで掛けてゐる芳子の手をちよいと指先で突いて見た。

「ふゝ厭どつせ。兄さん、眼覺して。」

と、いつてゐたが、欽之助が徒戯をやめぬので、それが芳子からまた好郎の方にも傳はつて行つた。さうして後にはみんなしてキヤア〳〵笑ひながら他の寢やうとする枕を取つて遠くの方へ投げたりして、とう〳〵十二時過ぎるまでも目を覺してゐた。

合さなかつた。

一人になつて見ると欽之助は矢張りお京のことが考へられた。そして成るべくなら、さつぱりと手を切つてしまふに如くはないやうに思はれる。夜になつてまた行つて見る氣で日の暮れるのを待つてゐた。外は夜宮で三條の通は特に賑やかである。丁度出掛けやうとする處へ中學校の時分から一番親しくしてゐる栗田といふ友達が久し振りに入つて來た。

「やあ、長いこと。」

「滅切り、暑うなつたやおへんか。」

「お變りおへんか。」

「おほきに……。どうどす、今暇やつたら、一緒にそこらブラ〳〵歩いて屏風でも見やうやおへんか。」

「そやなあ、歩いてもえゝが。」と、言つて欽之助はちよつと考へてゐたが「僕少し君に聞いてもらひたいことがあるのや。他に用がないのやつたら、ちよつと上つてんか。」

急しさうに少し吃りながら言つて、彼は栗田を誘ふて例の三階の涼臺に連れて出た。

栗田は欽之助よりは年も一つ上であるが、確乎した男で、まだ二人が中學校に行つてゐる時分、何方かの家に遊びに行くと、行つた先のお母さんは、よく二人に牛肉などを取つて御馳走をしてくれた。欽之助が途中何かの事情の爲に一年後になつて、栗田は先に卒業すると矢張り東京のある私立大學の商科に入つた。それからは以前ほど二人の顔を合はす機會は少くなつたが、ちよつと氣性の變つた栗田は、

亡くなつた欽之助の母親が育ちの好い京都風の優しい婦人であつた處に懐しい記憶が殘つてゐるので、自然父がその亡母の生前からさういふ風であるのに多少反感を持つてゐるし、楓家に行つても以前ほど面白くないから、二人がまた京都に歸るやうになつても、あんまり交通はしなかつた。

欽之助は其處にある籐椅子を栗田に勸めて、自分も腰を掛けた。

よく見ると欽之助は不愉快な顏をしてゐるので栗田は、不思議に思ひながら、

「何や。話といふのは？」

突け〳〵と蟠りのない口を利く彼は訊ねた。

「僕、實は内の女中に關係してゐるんやが、もう手を切らうと思ふてるがどうしたらえゝやろ？」

彼は腹に思つてゐるほどにはない、口ではさう困つてゐさうもなさゝうに淡白にいつた。

「そら、面白いこつちやないか。女中て、何れや？」

「うむ、つまらん女や。自家に今ゐるのと違ふ。外にゐよる。」

「それや君が手を切る氣ならわけないことやないか。」

「處がさうやないのや。女が喧ましうて、なか〳〵別れやうと言ひ居らんので叶はんのや。」

「そんなんやつたらそのまゝ外に圍うて置いたらえゝやないか。君のお父さんかて同いこつちやないか」

「いや、そらあかん。僕はそれは不贊成や。」

さういつて、欽之助は男が女に戀する樂みは妻を持つまでのことで、妻を持つて後も尚ほ他の女に關

女と別れる時である。

といふ意見を粟田に向つて話した。それは一つは彼が亡母の面白からぬ心の内をよく知つてゐて、亡くなつた人に對する悲しい同情から、自分は斷じて父の眞似はしまいと決心してゐたからでもあつた。

『そやけど、その話は君が直接に遣つては甘く行かんやろ。誰れか然るべき人間を仲に立てゝ話してもろたらえゝやろ。もしさうする氣があるんやつたら僕でよければ僕が話してもえゝけど、他に誰れか適當な人間があるやろ。』と、いつて粟田は考へてゐたが、『けどそんなことわざ〳〵他人に頼まんかて、いつそ君のお父さんがえゝやないか。君のお父さんは、よくさういふ事の譯の解つてゐる人で吾々よりも技倆がある。兎に角一遍お父さんに打明けて話して見たらどうどす。』

『親爺に言はんかて、親爺はもうちやんと知つてる。』さういつて、欽之助は、一昨日一通の無名の密告書が父の許に來た事情を語り『親爺は、妾のあるのを喧ましういふやうな嫁やつたら來てもらはいでも好えいふてるさうや。けどそれは親爺がさばけた風を裝ふていふんて、ほんまに解つてゐるのやない。僕は不賛成や。妻を迎へて尚ほ他の女子と關係するのは罪惡や。また親爺がその意見を直接に僕に話さんのは、親爺自身に弱點がある爲に自分にいはんとお仲に話をさすのやと思ふと親爺に對して氣の毒にもなる。僕は何も親爺に面當てに自家の女と關係したのやない。唯自然にさうなつたゞけや。そら親爺の身になつて見ると不賛成やかて不賛成やとはいひ惡いやろ。言ひにくいのは尤もや。僕はそれを思ふと氣の毒やよつて、親爺を煩はさんと僕自身で解決するつもりや。もしまた親爺が直接に僕に話するやうやつたら、きつう叱らんと優しう意見してもらいたい。あんな知つてゝ知らん顏をしてゐられるのは

眞綿で首を締められるやうで痛うて叶はん。僕、平生家の親爺のすることを見てると恐うなる。料理番など何かぶつくさ言ひよると、そんな者は出て行けと、ばあつと放り出しといて、自分で下りて行て、さつ〱と庖丁執つて料理をしよる。そんな風やから、默つといてどんなことを始めるか分らへん。」

こんな會話をしてゐる處へ弟の好郎は如露を以つて上つて來て、物見に置き並べた數多の盆栽に熱心に水を注いだ。それで二人ははたと口を噤んだ。

「好郎さん大變熱心やな。」

「うむ、好郎はこの頃植物を熱心に研究してゐるんや。」籐椅子に凭れかゝつた欽之助は氣を換へていつた。

やがて好郎は水を注ぎおはるとまた默つて降りて行つた。

「それやつたら、お仲さんかお八重さんに話してもろたらどうや。あの友達かて同情がある譯や。君自身が、向に相對の話では颯々と解決が付きにくいやろと思ふ。」

栗田は、暫く默つた後でまた口を切つた。

さういふと欽之助は、

「お仲やお八重、あんな奴等にそんなことといふのは不權式だ。」語氣荒く一言の下に排斥した。

それでまた二人とも稍暫く沈默してゐたが、

「こんな時にお母はんが生きてゐるのやつたら何もいふことないのやがなあ。」

粟田は、一緒に表に出て見やうぢやないかと誘つたが、欽之助は、ちよつと他に用があるからといつて出なかつた。さうして少し後れて一人で外に出た。外は夜宮で多勢の人通りだ。深い愁に沈んだ欽之助は家々の表に飾られた珍藏の金屏風も技巧を凝らした生花も立ち止つて見る氣はしないで、自分一人だけが世の中の面白いことや樂しいことゝは遠く懸絶れてしまつたやうな心地になつて、往來の喧騒を聾者のやうな心地で聞きながら、とぼ／＼とお京の家に歩いて行つた。

歩く道々、幾度か考へ直したことをまた思つて見ても、お京とはさつぱりと別れてしまつたに越したことはない、それは明かに分つてゐる。ぜひさうせねばならぬ。が、ぜひさうせねばならぬのであるけれども、誰れを見ても戀の上では他人ばかりの世界に唯一人心の底に深く馴染んだお京とこのまゝ別れて、明日の日から他人になつてしまふのだと思ふと、欽之助には餘りに男と女との現世の縁が薄いものゝやうで、たゞ哀れつぽくて耐らない。お京と今まで優しく解け合ふてゐた、秘密の心や體の關係は、懐かしい亡母のかたみの芳子にも求められない。まして神戸の政子に對しては少しもさういふ心持ちは起らない。別れやうと思へば思ふほど果敢なくて仕樣がない。別れる方がいゝにきまつてゐる女が、別れやうと思へば、どうして斯う厭な氣持になつて、胸が迫るのであらう。そんなら家も親の顔も棄てゝしまつてお京と公然一處になつたら、どうだらう。と、ふつと空想して見たがそれはしたくない。けれども悲しい思ひをして別れたくない女と何故別れねばならぬのであらうかと思ふと人間が窮屈でなら

ぬ。畢竟生きてゐればこそ色々下らぬ世間體があつたりして一旦深い關係になつた女とまた他人になつてしまはねばならぬ。』それが何ともいへず物足りない。

そんなことを考へてゐると欽之助はどうしていゝか、わけが分らなくなつた。さうして昨夜遲くまで妹や弟に讀んできかした近松の「曾根崎心中」や「天の網島」の中の男女が生きてゐては所詮遂げられぬ戀を死んで後の未來永劫までも續けやうとしたのを道理あることゝ思つた。生中肉體が存在すればこそ悲しい別離を見なければならぬ。肉體さへ滅してしまへば戀する心と心とは自由に永久に一緒になつてゐられるのだ。

お京の家に行つて見ると、餘處の女は皆な賑やかな夜宮の街に出て歩いてゐるのに、お京ばかりは何處にもゆかずに家にゐた。

『街賑がどすやろ。私外に出て見たうても出られしまへん。一緒につれといておくれやす。』此の間買つてもらつた浴衣を縫つてゐた覺束ない針の手を留めて、懷かしさうにさう言つて、欽之助を見上げた。

『ふん、出てもえゝけど、僕何や知らん氣が鬱いて、氣がふさいて叶はん。』さういつて欽之助はどかりと腰をそこに落した。

『また旦那さんかお仲さんに何かおいはれやしたんどすか。』

お京は心配さうに欽之助の曇つた顏容を見まもりつゝ訊いた。お京とても心は少しも浮かぬのだか、さうかといつて誰れに打明けて聞いてもらふやうな者もないので稚い思案て吾れと吾が心を引き立てゝ

ゐるより他はなかつた。ほんとに考へれば考へるほど、自分ほど頼りの無い者はない。御飯を食べるにも何をするにも獨りきり斯んな寂しい月日を送つてゐるのは何をあてにさうしてゐるのやろう。唯若旦那一人の心を生命の綱とも思ふてゐればこそやないか。それに若旦那に此の間のやうなちよつとも自分て覺えぬ怪體なことをいはれてはほんまに自分の立つ瀬がない。こんなんやつたらいつそ一と思ひに死んでしまうた方がえゝ。

『いんえ。それから何も言ひへんけど、お父さん唯默つてそんなこと、ちよつとも知らんちうやうな顏をしてゐられるのが、何かいはれるよりも氣がづゝなうて〳〵叶はんのや。』お京には死ぬるといふことは恐ろしくも何ともなかつた。

『私のやうな者が附いてゐるさかい、あんたがそんな心配おしやすのや思ふと、私も氣の毒で、氣の毒でほんまにどないしたらえゝやろ思ひますわ。』

一昨夜は思ひもかけぬ疑ひを言ひかけられたのでお京は眞氣になつて腹を立てたが、あれから獨りになつて若旦那の心をしみ〴〵と考へて見れば、全く氣の毒でもあつた。

『今更そんなこといはんかてえゝ。』

欽之助は打消すやうにいつた。

『なんぼ考へたかて同じことや。』欽之助は獨語のやうにいつて『どうや、ほんなら一緒に出て見やうか』

『出て見とうおすわ。』

それでもお京は嬉々として其處らに散かつた仕事のしさしをとり片付けて箪笥から派手な中形を出し

て着た。それも欽之助がわざ〳〵東京に誂文して取寄せた品であつた。着物を着更へてもう一遍鏡臺の前に坐つて見て、それから立上つたお京の姿はすらりとして背が高かつた。

遠くの街から單調な懷かしい祇園囃しの鉦や笛の音が喚るやうに響いて來た。

そして出かけやうとしてゐる處へ、ガラ〳〵と表の格子の明く音がしたので、お京はそのまゝ行つて見ると、

「欽之助が來てゐるやろか？」

と、聲を掛けて入つて來たのは、どうして此處を聞いて知つたか、思ひ掛けない父の欽造であつた。

「お越しやす。へえ、おこしやしてゐやはります。」

お京は、おど〳〵しながら、さういふより他にいひやうがなかつた。欽之助は聲を聽いてすぐそれと分つたが、もうどうすることも出來なかつた。

欽造は、つか〳〵と奧に通つて欽之助が其處にゐるのを見ると突如頭から

「阿呆め、大抵にして目を覺ましよらんか。」

と、叱りつけながら、隅の方に極まりわるさうに小さくなつてゐるお京を振返つて少し聲を和げて

「お京、長いことやな。……お前も家の欽之助を大切にしてくれるのは難有いがな、これも最う此の十二月には嫁を持たすことになつてるよつて、何時までも、いつまでもそんな極道さしとけんさかい、え丶加減にして諦めとくれ。」

さういつてまた欽之助の方に向つて、

「あの手紙をよう見たやろ。こんな者に係り合ふてゐたらどむならん。お前は騙されてゐるのが氣が付かんか。吾々のやうな古い者はもう仕様がないが、新しい教育を受けたお前達はもつと確乎してもらはんとあかへん。……」

さういふ父は何處までも差出人の分らぬ手紙に書いてある通りを眞實と思ひ込んでゐるらしい。

それを靜と聽いてゐるお京は、もう〳〵一と思ひに死んでしまひたくなつた。

「お京、お前もそのつもりでゐとくれ。今後一切欽之助を此處へおこすことならんよつて。」……

「ほんまに旦那さまに申わけおへんどす。」お京は啜り泣きしながら一と言いつた。

「せうむない。此女にはまた後でえゝやうにするさかい、お前も一緒にお歸りいな。」

「えゝ」

と、欽之助は澁々返辭をしたが、起たうとはしなかつた。

「さあ、歸らう〳〵。」

「僕、ちよつと後から歸ります。」

「そんなことといはんと一緒に往の。」

欽造は無理やりに自分と一緒に連れて歸らうと言ひ張つた。

さうなると欽之助も子供ではないから先刻から、頭ごなしに阿呆呼ばりをして怒鳴りつけられてゐたのが、恐い、極りが惡いといふのを通りこして親父ながらも辱かしめられたやうな感じがして勃然となつた。親ならば、そんなにがみ〳〵言はんともつと優しく言つてくれてもよさゝうなものだ。何も阿呆お

やの極道ぢやのといはんかて、自分とてもいつまでも愚たらなことでは楓家といふ京都一流の旅館の名に對しても耻かしい、父に對しても濟まぬ。どうか父には餘計な心配をさせぬやうに自分で始末をして女と綺麗に別れてしまひたいと、いろ／＼と胸を碎いてゐるのを察しもしないで智惠の足りないものゝやうに口汚く罵られるのが痛いやら情ないやらで、腹が立つ。こんな時になるとまたしても死んだ優しいお母さんが懐かしくなる。それを思ふと生きてゐる父親よりも、亡くなつたお母さん丶傍にゆきたい

……

性來感情の激し易い欽之助は、こんな考へが、むら／＼と頭に浮んだ。

『往ますいふたら、直き往ます。』強く言つた。

『さうか、それてはきつと戻りいな。』さういつて置いて欽造は、一足先に歸つて行つた。

お京はそれを格子口まで送つて、急いで欽之助の傍に戻つて來ると

『旦那さんが、あんなにきつうおいひやすのやさかい、あんたはんにもう來てもらはれしまへん。私もう死んでしまひます。』聲を上げていひながら、そのまゝ其處に突伏した。

『やゝこがあんたはんのと違ふか違はんか私死んだらよう解ります。』さういつて強く泣いた。

欽之助は、それを見てゐると、こんなに、誰にも明かさず、廣い世界に二人きりで互に心配し合つて胸を痛めてゐながらも、それでもせめて氣を晴らさうと思つて、嬉しさうにいそ／＼と夜宮の賑はひを見に出やうとして樂しんで着物も着更へ、頭髮も綺麗に撫で付けてゐたものをと、父の仕打ちの悔しさが思はれるとゝもにお京のさめ／＼と泣いてゐる姿形のいぢらしさが一入募つた。さうしてこんな可愛い

て泣いてゐるお京の背を撫でて、

『もうそんなに泣かんとおいや。私も死ぬよつて、お前もほんまに一緒に死んどくれるか。』

お京は泣きやめなかつた。

『さ、もう泣かんと、僕も死ぬから一緒に死の。』

欽之助はきつぱり決心した聲でいつた。

お京はそれを聽くと泣顏をあげて、

『ほんまどすか。噓と違ひますか。ほんまに死んどくれやすか。』

『何で噓いふかい。ほんまに死の。』

『さうどすか。ほんまに私と一緒に死んどくれやすか。』

さういつて、お京は涙で赤くなつた眼で、まぶしさうに欽之助の顏をじつと注視つて、嫣然と何ともいへない寂しい笑ひを洩らした。

『死ぬ、死ぬ方がえゝ。死ぬのはちよつとも痛いことない。お俊傳兵衞やかて、小春治兵衞やかて皆んな心中したのやさかい。』

さういつて欽之助も寂しく微笑んだ。

しかしさうして二人の心が心中することに決つてしまふと、先達てから重荷を背負つたやうに苦しかつた欽之助の胸は一時に輕くなつた。

「ほんなら、親父あんなに喧しういふよつて、今夜は自家往なんとわるいさかい、一遍いて支度して來るよつて、お前もちんと支度して待つといや。」

「さうどつか、ほんなら、どうぞさうしとくれやす。明朝早うに來とくれやすや。」

お京は欷歔しながら殘り惜しげに欽之助を格子口まで送つた。

外はまだ群集の出盛る最中である。欽之助は何といふことなく昔懷かしい夜の燈にしめやかに輝く金銀の屛風の立ちつらなつた街を歩いて行くと、太い紺房て絞つた家々の定紋を染め出したまん幕や、目の覺めるやうな美しい毛氈の色や綺麗に飾られたその店頭に坐つてゐる男や女などが、何時か自分が其處にゐても、今は永く忘れてゐたある遠い時のことを思ひ起さしめるやうて、もう一度其處へ早く行つて見たいやうな氣がした。そして先刻歩いた時とは全く違つた落着いた悲壯な心持になつてゐた。

自分を信賴して今ては、これまで父自身でしてゐたことを何も斯も自分に任せてゐる、その心を察してゐればこそ不孝な行ひをしてはならぬと、お京の處に行くのもつらい思ひをして隱れ〳〵行つてゐた。それをばあんなに蓋も身もなく突き曝いて、恥かしめられては、もう父に對する人情は索めてしまつたばかりてない。さういふ自身が自分以上の行跡をしてゐるのぢやアないか。

さう思ふと、欽之助はどうしても死んて、後て皆んなに悲しがらせてやる。といふ決心を抑通さずにはゐられなくなつた。

自家に歸ると自分の簞笥の中から着更の單衣を取出して目立たぬやうて小形の手提ゲ鞄の中に入れて

五

翌朝、銀行の執務時間の始まるのを待ちかねて、欽之助は金庫の置いてある部室に入つて行つて、その中から預金の通帳を取出した。そして三條烏丸角の第一銀行支店に行つて三百圓引出して懷中に入れ、一旦また自家に戻つて通帳を元の處に納め、夜昨用意して置いた鞄を持つと、そのまゝ家を出てお京の處に行つた。人目が多ければ多いだけに誰もそれに氣のつく者がなかつた。

お京は昨夜 あれから獨りきり稚い胸をいためながら覺悟を決めて待つてゐた。

早速あり合ふ信玄袋の中にお京の上等の夏物ばかりをあるだけつめて、そこ〳〵に其邊を片付け、二臺の俥を呼んで來て、それに乘ると幌をおろして道を急がした。やがて俥を南禪寺に行く道を祇園の方に回つて、石段下の、とある寫眞屋の處で止めさして、二人はこの世の名殘に一緒に並んで寫眞を映した。それから南禪寺の境内にある楓家代々の墓に參つた。

そこには四年前に死んだ母の墓碑がまだ新しく立つてゐた。この春亡くなつた祖父の眠つてゐる頭の上には土がこんもりと盛り上げられて、白木に記した戒名の墨の跡が鮮かに讀まれた。

「これが今生の京都の見納めや、よう見ときいや。」

「ほんまに、さうどすえなあ。」

そんなことをいひつゝ二人はやゝ暫く、人氣のない綠の木陰に立つて涼しい松風の音を聽きながら餘念なく若王子から銀閣寺の方の山を眺めつゞけてゐた。それから二人はまた車に乘つて直に二條驛に走らした。

妹の芳子は大阪から出て來た二十二日の晩會つたきり、二十三日はかけ違ふて一日顏を合はさず、二十四日も朝から兄の姿を見なかつた。その日の晝頃外の出先から電話が掛つて來て、芳子に一人て寂しからうけれど、友達と一緒に飯を食べるから、晩には歸るから待つてゐるようにと言つて來たのを、女中が聞取つてゐて、後になつて知つた。けれども二十四日は夜になつても兄は遂に歸つて來なかつた。

その翌日も一日待つてゐたけれど晩になつてもやつぱり歸らなかつた。それで家の者も、ぢや昨日からの友達と一緒に何處かへ遊びに行つたのだらうといつて放つてゐた。が、その夜遲くなつてもまだ歸つて來ないので、時々欽之助の使ひをしてお京の家をよく知つてゐる下女をやつて訊ねて見さすと、入口は閉まつて家は留守になつてゐた。すると何處かの人が二十四日の朝二人を二條驛で見たといふ話も傳はつた。それで欽之助の部室を見たが別に變つたこともない。金庫を調べて見ると預金の通帳で三百圓受取つたことが始めて分つた。

「ほんならお京さんと一緒に何處かへお行きやしたんどつしやろ。」

「阿呆やなあ。心配せんとおいたらえゝ。それだけ皆んな使ふて、金がないやうになつたら、また歸つて來よる。」

父はさういつて棄てゝ置かした。

下の巻

二人の者は、首尾よく知人にも會はず、祇園祭りに賑ふ京の街を後にして、二十四日の午後、二條驛から汽車に乘つて舞鶴の海岸へと志した。

初めは伊勢の方にしやか、それとも、つと遠く宮島か或は沼津か鎌倉か、金のある間はこの世の名殘りに遊び暮して、その上で死ぬことにしやうとそのつもりで女の衣類なども餘分に用意して出たのであるが、一旦覺悟をきめると、そゞろに死ぬのが急がれて、追手のかゝるのも氣がゝりになり、また淺間しい死骸となつてからの後始末のことなどをも考へて、やつぱり舞鶴の自分の家の別莊に行つて、心を落着け、海に身を投げることにした。

欽之助は千筋大名の絹上布の單衣に紺博多の角帶をしめ、絽の鐵無地の羽織をつけて麥藁帽子をかぶり、お京は上等の薩摩上布の荒い黑絣に白地に墨繪の芭蕉の葉を大きく染め出した羽二重の丸帶を涼しさうにしめ、結ひなほしてゐる暇のなかつた丸髷を念入れて取繕らうて緋の手がらをかけてゐた。それが仲よく二人並んで一つ膝掛の上に腰をかけてゐる樣子は、いかにも樂しい若夫婦の避暑旅行のやうで、餘處目にはどうしても、これが明日をも待たぬ心中にゆく死出の旅路にゐるものとは見えなかつた。

やがて列車が京都の郊外をめぐり、藪疊みの蔭を駛せ、花園、嵯峨の停車場を過ぎてこれから龜山隧道に進み入らうとすると、欽之助に寄り添ふてゐたお京は忽ち男の肩に凭れかゝつて泣き崩れた。

今までは汽の窓から、夏木立の間に十七年の間見馴れた、諸方の山の形や寺々の高い屋根や五重の塔などが見えてゐたが、もう此の隧道を向にぬけてしまへば、再びそれらは見ることは出來ぬ。さすがに覺悟はしてゐるものゝ、ずつと前に龜岡から保津川を舟で下つたことがあるばかり、生れて京都の土地よ

り外に遠く出たことのないお京は隧道の暗に入るとさすがにはりつめてゐた氣が、にはかに弛んで悲しさが一時に込上げて來たのである。

それを欽之助に窘められたり慰められたりしてゐる間にいくつもの隧道をぬけたり、目の覺るやうな碧い深淵の上を通つたりして、美しい保津川の峽谷を向へ出放れてしまふと、お京には始めて見る、知らぬ山や田がつゞいてゐた。そして淋しい山の裾に藁屋根の家が二三軒立つてゐて、大原女のやうな風俗をした赤いものを身に着けた若い田舍の女が青田の畦に立つて何かしてゐた。お京は引入れられるやうな心地で白布で眼をおさへおさへそつちの方を見てゐた。

二

楓家の別莊は舞鶴の街から海の上をまだ一里あまりも乘り出した香崎の海岸にあつた。その晩二人はわざとすぐ別莊の方には行かずに舞鶴の街の旅宿に泊ることにした。

やがて女中の案内する風呂へつゞいて入つて、今朝から汗や汽車の煤煙に汚れた體を流して來ると食膳を運んで來た。

「私ら勝手に食べますよつて、給侍よろしおす。」

さういつて女中を遠ざけたが二人とも進んで箸を取るほど空腹を覺えなかつた。

お京は湯上りの浴衣姿で化粧袋から懷中鏡を取出して濡れた前髮や鬢をなほしてゐた。

「あんたはん御飯おあがりやへんのどすか。」煙草を吹かしながら横になつてゐた男の方を振返つた。

「私も欲しいことおへんわ。」

これまで欽之助は、お京の處に行つても大抵夜遲く行つて朝早く歸るので、落着いて一緒に膳に向ふやうなことは滅多になかつた。

「大事おへんか。ちよつとお邪魔をさして戴きます。」

さういつて、番頭が宿帳を持つて入つて來た。

欽之助はそれに自分で妻京と記した。

「番頭は宿帳を受取りながら

「へえ、おほきに。……明日は宮津の方へでもお越しになりますので？」

かういつて訊ねたけれど

「いゝえ。」と、欽之助はたゞ頭を振つた。

暫くして女中が膳を下げに來た時に、女は男の膝の上に丸髷の頭をおしつけて泣いてゐた。二人が驚いて、はつと飛び退くと、入つて來た女中は間のわるさうな顏をして膳の方を見たが、少しも箸をつけた樣子はない。

「あゝまだちよつとお早うおしたか。」

「えゝ、もうよろしおす。どうぞ引いとくれやす。」お京は外方向いたまゝ細い聲でいつた。そして女中が行つてしまふと、

「そんなことおいひやして、あんたはん、また政子さん、や家のことや思ひだしとゐやすのどつしやろ。」

『なんも政子や家のこと思ひだしとやへんけど、晩にはかへるいふといたんやさかい、後で芳子がさいたらさぞ落膽するやろ思ふて、ちよつとさういふて見たんや。』

『私、神戸の政子さんだけにはほんまに濟みまへんわ。芳子さんやかて、どなたやかて皆んな私一人を惡いやうに思ふとゐやすのやもん、私が、どんなに怨まれますやろ思ふと死んでも恐うなるわ。』

『死んだあとでは誰が怨んだかて、構やへんやないか。私とお前と二人で死ねば、それほど心丈夫なことはないやないか。』

『さういふとくれやすと嬉れしおすけど、わてえ、あんたはんにほんまにお氣の毒やわ。』

『なんで？。』

『私、生きてゐたかて、貧乏人の娘やけど、あんたはんは良えとこの若旦那やさかい、生きておゐやしたら、どんな面白いことでも、これからたんと出來ますよつて。』

『今更そんなこといふたてあかへん。もうそんなこといはんとおき。金がなんぼあつたかて仕樣があらへん。それよりも愛する者の心と愛する者の心と　、一緒になつて離れずにゐると思ふたら、それほど樂しいことはない。何十萬圓の金よりも貴いのや。』欽之助は自分の意見を洩らした。

『そないいふとくれやすと、私なほのこと濟んまへん。どうぞ勘忍しとくれやす。』

お京はまた男の膝に顏を伏せて、力を込めて忍び音に泣きつゞけた。

欽之助も柔かいその背をじつと抱へて泣いた。

さういつて、欽之助は熱い頬を女の豐かな鬢にすり寄せた。

「若旦那！……あんたはん！……」

お京は胸の底から小い聲を出した。

「ふん、なんや！……なんや！……」

二人は顔と顔とをぴつたり押しつけた。そして何も斯も忘れて、自分の肉體が互の肉體にこのまゝ溶けて消えこんで仕舞へばいゝといふ氣になつた。

蚊帳の中に入つてからも短い夏の夜のやがて明け白む時分までも尚ほ語りつゞけてゐた。

三

そして翌日の午頃になつて、わざと自分の名をいはず、別莊の番人の處へ電話をかけさして、もし誰れか來てゐるものはないかと訊いて見た。けれども誰れも來てゐないといふ返辭であつた。それで安心して其方へ渡つて行つた。

「六さん、また來た。」

外から元氣よく聲をかけつゝ欽之助は海岸から石段を上つて來た。

「おゝ、若旦那でございますか。」

別莊番の六藏は早速出迎へた。そして欽之助の後から從いて來た美しい丸髷姿のお京の方へ不思議さうにちよつと目をやつた。

「よう來ておくれやした。今日はえらい暑うおましたやろ。京都では、どなたはんも別にお變りおまへんどすか。」僕實な言葉で改めて挨拶した。

「あゝ、皆な無事や。どや、六さんも氣嫌えゝか。」

「へえ、私もお陰さんで。……暫くまた此方に御逗留だすか。」

「あゝ一週間ほどまた世話になるよつて、どうぞ頼んます。」

そこから舞鶴の入江は、湖水のやうに一眸に見渡された。

初めて海といふものを見るお京は、先刻此方へ渡つて來る窮窟な通舟の日蔽ひの隙間から碧凄く澄んだ水がちらりと眼に入つた時、慄然として、その中へ引込まれるやうな恐怖に襲はれたが、別荘の縁側に立つと海の上を渡つて來る寒いほど涼しい風が、ハラ〳〵と鬢の後れ毛を吹きなぶつた。

入江の周圍を取卷いて、段々遠くの方に行つて高くなつた山と山とに鎖された輝く水の上を白い小形の蒸汽船が黒い煙を揚げて緩く滑つて行つた。それは宮津の方に出て行くのであつた。對岸の小山の裾に雛段のやうに切開かれた畑の傍に家が五六軒立つてゐるのが頼りなさゝうに見えた。

「まあ、まあ。好え處どすえなあ。」

餘念もなく海の上を見てゐるお京には此處が自分の生命を棄てる恐しい場所といふやうな心持ちはしなかつた。

淺い潮水は別荘のすぐ下の岩疊みを輕くなぶるやうに洗つてゐた。

そこらの磯ふちを歩いて見た。人家はその邊になかつた。

「六さん。鰡網を引くよつて、手傳つてんか。」

欽之助は座敷の物置きから網を取出して來た。

夕刻その網をあげて見ると、尺八寸ばかりの大きな鰡がかゝつてゐた。

「あ、ほんに大けなんどすなあ！」

お京は子供のやうに悦んだ。欽之助はそれを提げて歸ると自分達で料理つて、夕飯は樂しさうに快く食べた。

四

夜は早くから奥の八疊に入つて襖を閉めたまゝ外になかつた。

二人は、いつまでも盡きぬ名殘りを惜しみつゝ、夜の更けるをまつて、やがて眞夜中と思ふころ寢床を起きいてゝ欽之助は玄關脇に寢てゐる番人夫婦の目を覺さぬやうに靜と足音を忍んで二人の穿物を取つて來て、緣側に置き、それから雨戸を音のせぬやうに一枚繰つた。外は眞暗である。

お京は小紋形の鳴海絞りの寢衣に上に靑と赤との碁盤の華美模樣を織つた伊達卷を堅く締めなほし、欽之助は白毛斯綸タオル織の單衣の上に鼠縮緬の扱帶を卷き、自分は昨日舞鶴の宿て女中に買つて來さした一反の晒木綿を取上げお京は晝間締めて來た羽二重の丸帶と緋縮緬の扱帶とを一緒にして抱へ緣側から庭先に出て、小礫の上をザクリ〳〵と靜に踏みながら海端に降りて行つた。そして晩にそのつもりて波打際に繋いておいた別莊所有の猪牙舟の處に歩いて行つて、それに先づお京を乘せると自分もつゞ

いて乘り、なれた手付で櫓を操つて、やがて五六町沖へ漕ぎ出した。
月のない時分である上に、夜になつて雲が出て來たと思はれて星屑さへも見ることが出來ぬ。空も海も一面に墨を流したやうに黑み渡つて居る中に、たゞ遠くの沖に漁火の影が暗間の底に見えたり隱れたりしてゐる。風が死んでゐるので、波は壓付けられたやうに靜つてゐるが、それでも鹽氣を含んだ冷い夜風がひや／＼と氣味惡く寢起きの肌に觸れた。
「もうこゝらてよろしいがな。私恐いわ。」
欽之助も、昨夜舞鶴の旅宿で書置きに書いて置いた通り、死んだ後では二人一つ處に葬つてもらいたいので、死骸を引上げてもらふ都合からも、あんまり沖の方へは行きたくなかつた。
彼はそこらて櫓を漕ぐ手をとめて、その櫓を舟の上に引揚げた。そして女の傍に行き、
「何も恐いことあらへん。僕と一緒にゐるんやもの。」
さういつてお京をいたはりつゝ、互に體と體と犇と抱き合ひたる上を、持つて來た羽二重の帶で卷き、その上を白木綿の晒布を解いて、グル／＼と幾重にも卷きつけ、その端をお京の背で十文字に固く結び、尙ほ未來永劫離れじと欽之助の右の手とお京の左の手とを緋縮緬の扱帶で強く括り合はした。
お京は身を顫はして男の肩に喰入るやうに泣きついた。
欽之助はそれを左の手で確と抱へて
「かうしてお母さんの處に行かう。」

三

六藏は夜中にふと目が覺めたので次の間を通つて便所に行かうとすると、隣の六疊の襖が二寸ばかり開いてゐて、ランプの燈は消えてゐるのに蚊帳がひどく吹き捲くられてゐるのが微明にもよく見えた。不思議に思ふて窺いて見ると縁側の雨戸が一枚明いてゐて、そこから磯臭い濕つぽい夜風が颯と吹き込んでゐる。蚊帳の中を透かして見ると二人の寢てゐる姿は見えぬ。

戸の明いた處から顏を出して

『若旦那はん！若旦那はん！』

庭の方を透して呼んで見たが其邊に居さうな樣子はない。

自分の部屋に戻つて婆さんを呼び覺して

『若旦那、寢苦しいよつて外へ涼みにでも出たんやろか、家にゐやはりやへん。』

『さうかい、今時分涼みに出やはりやへんやろになあ。』

六藏は表の入口を明けて石段を降りて行つて波打つ際に立つて見渡した。海も空も眞暗である。小山の麓に沿ふた軍港に往ふ里道を東に行つたり西に行つたりして見たが、人のゐさうな氣配もせぬ。舟の置いてある處に行つて見ると、果して舟がない。さうかうしてゐる内に短い夏の夜はいくらか微白くなつて來た。海の上を透して見てゐると、人の乘つてゐない小舟が一艘波に揺られて岸の方に流れ寄つて來た。まちかねてよく見るとそれはまぎれもない別莊の舟て、櫓はちやんと上げてあるが、中に男女の下駄六が脫ぎ棄てゝあるばかりてあつた。

藏は、それを見るとアッとばかりに驚天した。

その朝早曉、舞鶴の漁夫が十名ばかり香が崎の沖合に鰤を漁するために地引網を引くと、その網の目にまだ生きてゐるとしか思へない綺麗な男女の死骸が抱き合ひたるまゝ引きあげられた。(をわり)

此廣告に依り御申越の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

高島米峰氏著

店頭禪

三宅花圃序　與謝野晶子跋
平塚雷鳥跋　西川文子跋
定價金八拾錢　郵税八錢

反響叢書第二編
平塚明子氏新著
定價金八拾五錢

評論集

現代と婦人の生活

現代百科文庫

宗教叢書

各編拾錢

△既刊

●大聖釋尊　江部鴨村著
●神道綱要　西川光次郎君
●シヤクンタラ　森田草平著
●俳聖芭蕉　岡本默骨著
●天理教の信仰　廣池千九郎著
●カラマゾフ兄弟　森田草平譯

△近刊

●親鸞と法然　村上專精著
●宗教改革　谷本富著
●心理學的宗教　福來友吉著
●近代思想と宗教　柏原祐義著

東京本郷元町二丁目
日月社
振替東京二八九一四

(中付七の一)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



圖書雜誌大賣捌

國威伸張の新年を迎へ茲に店員一同一層恪力奮勵業務の進展を相圖り可申候に付倍舊之御引立奉懇上候 謹言

大正四年一月元旦

東京市京橋區元数寄屋町三ノ四

合資會社 **北隆館書店**

電話新橋 特長 一四三九番 一七八八番 一七八九番

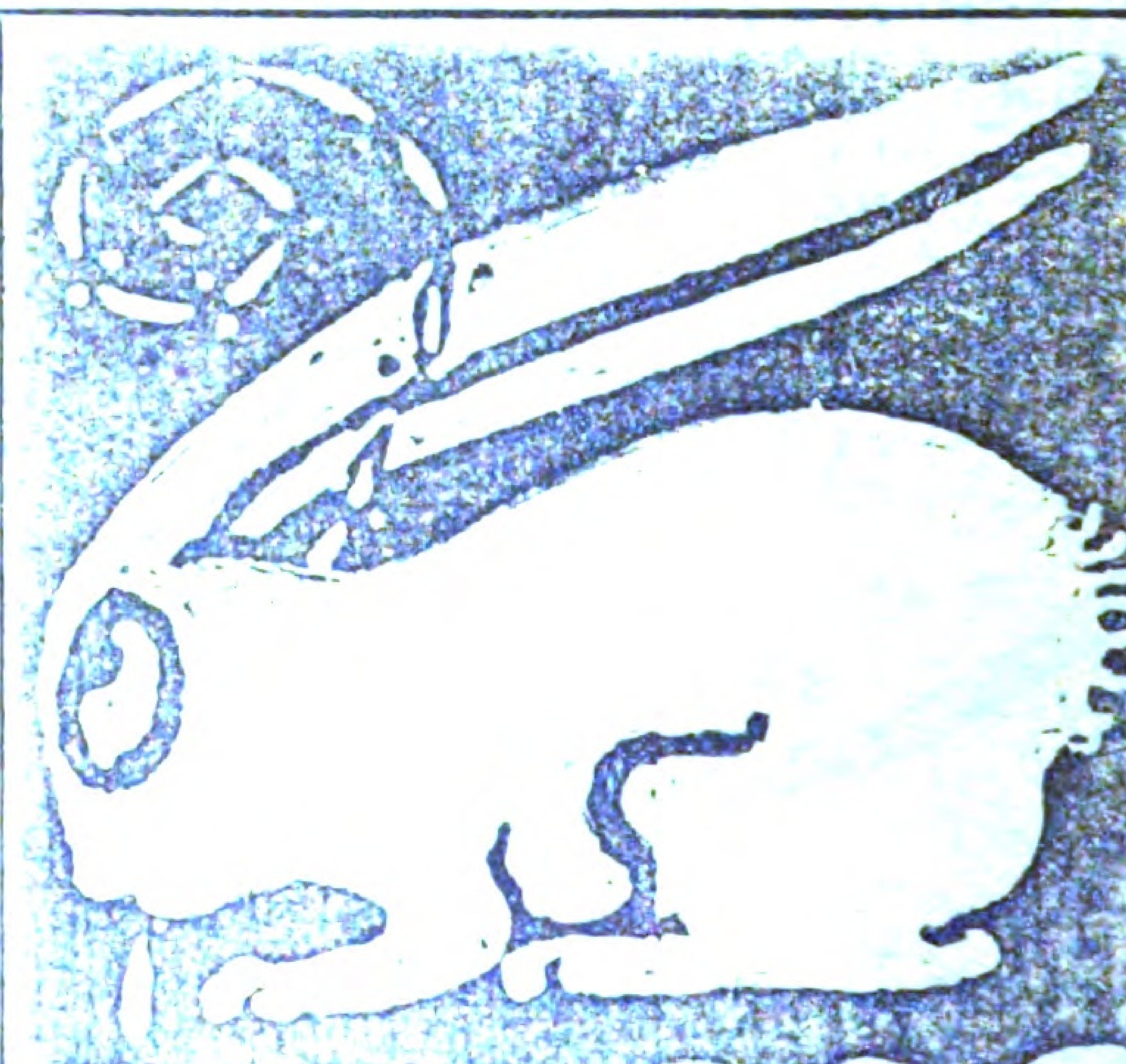
振替貯金口座 七五〇番

大正四年

書籍 雜誌

卸賣及小賣

目録、取引規定 往復はがきにて御申越を乞ふ



上田屋書店

東京神田裏神保町

振替東京三〇八六番

電話本局三八二八番

圖案應用者 教育者研究者の好侶伴

月刊 **圖案新集**

定價一冊 金三十錢 送料不要

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞

第拾期新學期開講會員大募集▶速成壹ケ年卒業

本會顧問

前司法大臣 岡部子爵
前帝國大學法科教授 寺尾法學博士
法律取調委員 戸水法學博士
帝國大學文科教授 建部文學博士

本會講師

東京地方裁判所判事
東京地方裁判所判事
東京地方裁判所檢事
司法省監獄局檢事

霜山法學士
西鄕法學士
海野法學士
長谷川法學士
土居法學士

津田法學士
宮島法學士
杉山法學博士
布野法學士
藤瀨法學士

中島法學士
村松文學士
中村文學士
武藤文學士
相原文學士

各種 文官公吏 試驗 學科 通信 講義

本會は各種普通文官▲裁判所書記▲警察官及各所の公吏任用試驗に必要なる學科を通信教授す講義は全文振かな付且つ難解の字句には註釋を付したれば小學卒業の學力あれば了解し得故に本會を卒業すれば必らず受驗就職し得べし

本會の卒業生は各府縣の普通文官▲裁判所書記▲警察官等の試驗及第者の最も多數を占め居れる事は何れの試驗官も確認せらるゝ所也

各種文官受驗用として本會講義錄が如何に諸官廳に重視せらるゝかを見よ

今回其會發行の講義錄を閲讀したるに國民教育に裨益する處多きは勿論殊に裁判所書記及普通文官等の試驗を受くる者の最良師友たるものと認め當課員の參考に供し度候に付毎號一部御寄贈相成度此段及御依賴候也

玄庶發第三號
貴會發行之講義錄當廳に備へ置き當廳吏員に閲覽爲致度候に付毎號壹部宛御寄贈相成度此段及御依賴候也

貴會御發行の講義錄當省圖書閲覽室に備へ置き當省吏員に閲覽爲致度候に付壹號より拾貳號迄全部御送附相成度此段及御依頼候也

貴會御發行の講義錄當課員に閲讀せしめ度候に付毎號壹部御寄贈相成度此段及御依賴候也
三月廿四日

見本附 會則無

東京市麴町區永田町二丁目 普通文官養成會

(中付七の七)

(付中七の八)

戯曲

大河のほとり（四幕）

田山花袋

人物

鈴木龍耳　田舎醫師
同　おかね　龍耳の妻
鈴木銑太郎　醫學生、おかねの弟
同　おせん　女學生、銑太郎の妹
小林てる子　女學生
吉田三郎　銑太郎の友人
杉山老人　小林てる子の保證人
巡査
同じ巡査の妻
田舎の旅館の亭主
中村某　鈴木せんの保證人
校長
船頭二人
老婆
教頭、女教師、男教師、女學生大勢其他

時　大晦日に近い十二月の二十三日

所　雪の深いある北國の田舍

第一幕

雪に閉された田舍のある醫師の二階の西洋間、下に診察室、茶の間等を豫想して、主人龍耳の居間兼書齋。ソファや寢椅子は室の隅に置いてあつて、書棚には醫書などが一杯入つてゐる。これはこの家の主人龍耳が古い大きな家に増築したもので、室内の調度はまだよく整つてゐない。室の中央に大きなテイブル、その向ふに、椅子が二三脚無造作に並んでゐて、暖爐には火が暖かに燃えてゐる。奥にドア、それを明けると、藥局と茶の間との間に下りて行く階級がある。

一方の窓しか明いてゐないので、室内の光線は少し薄暗い。戸一には雪の降つて、をり〳〵サラサラと窓に當る音がする。暖爐の火が暖かに鳴る。

おかね、龍耳相對して、暖爐の前の椅子に腰をかけてゐる。

おかね　今朝は寒いですね。

龍耳　また吹くかもしれない。何うも冬は閉口だ。これから三月(みつき)は丸で穴の中に入つてるやうなものだからな。(ふと言葉を改めて)おせんは歸つたか。

おかね　え、さつき歸りました。何うせ學校に行つてゐたつて仕方がないからッて言つても、是非歸つて行かなければならない用があるつて言ふんですの。正月が來ても田舍は舊だから、面白くないんでせう。銑太郎も頻りに留めてゐましたけれど、それより兄さんもゐらつしやいよ。東京のやうなことはないだらうけれど、田舍にゐるよりは面白いからなんて言つてゐましたよ……。矢張、母さんが亡くなつてから、家に歸つて來ても、昔のやうに面白くないのでせうよ、屹度。

龍耳　母さんは可愛がつてゐたからな。母さんが昨年亡くなつた時は、傍て見てゐても可哀相だつたからな。一緒に死んで行きたいなどと言つてゐたからな。一時は心配したか、それでも此頃は元氣がよくなつたんで安心してゐるよ。お前もよくしてやらなければいけないよ……。兎に角、この鈴木の家は私達が親の代りをしてやらなければならないんだから。お前のお父

さんには、私はどんなに世話になつたか知れないんだから。

おかね　まア面倒を見てやりませうよ。（立つて窓から外を見てから）あれももう來年の四月には卒業しますからね。さうすると、何處かいづれ學校に出るやうになるんでせうが、成たけ近い所に口があると好いと思ひますよ。元氣な子てね。此頃ぢやもう母さんの亡くなつた時分のことなんか忘れたやうに、キャッキャッ騷いでゐますよ。昨夜なんか、銑太郎や何かと活動寫眞の眞似なんかして、それは賑やかでしたよ。十二時か打つても、まだ炬燵の傍で騷いでゐるんですもの。

龍耳　あの位の中は元氣なものだね。（考へて）銑太郎は何うしたえ？

おかね　下にゐましたけ……

龍耳　おせんも肝心だが、あれも注意してやらなくちやいけないよ。今度、歸つて來て、話を聞いて見ると、大分新らしずきなやうなことを言つてるぢやないか。田舍になんか歸つて來るのはイヤだツて言つてたよ。外國行の郵船の醫師になるんだなんて言つてゐたよ。それも好いけれど、私の考では、何うか免狀を取つたら、此方に來て此處でやつて呉れると好いんだがね。亡くなつた先生にも、銑太郎が大きくなるまで、私達が代つてやつてゐますが、屹度、この家をつがせるやうにするからツて、あの枕元で言つたんだからね。あんまり東京染みて呉れない方が好いんだがね。この鈴木の家は、もう五代も此町でお醫師さまで通つてゐるんだからね。

おかね　さうですとも

（後のドア開く、藥局生入り來る。）

藥局生　ちよつと先生にお目にかゝりたいと申して參つたものが御座りますが――

龍耳　患者かえ。

藥局生　何でも來て頂きたいやうな話です。橇を持つて迎へて來たやうな風です。

龍耳　さうかえ、今すぐ行く。

藥局生と共に退場

おかね　（中央の暖爐のある所に來て椅子に腰かけて獨語のやうに）おせんは成長くなつた。父さんや母さんがゐたら、何んなにお喜びになつたかしれない。本當にお母さんはおせんを可愛がつてゐらしつたんだから……。學校の方も成績が好いといふ話だ。それに、まア、女の友達なんてあんなに仲が好くなるもんだらうか。この夏來た照子さん、あの人から手紙が來るにも、來るにも、毎日二度も三度も來るぢやないか。そして、まア、仲の好いことと言つたら、一緒に逢ふと抱きついたり何かしてゐるんだよ。寄宿舍にゐるし、面白いことがあると見える……。銑太郎も、東京染みない中に早く一人好いのをさがして置いてやらなければならない。本當に、昨年の冬來た時から比べると、大變にわるく開だか、東京(あつち)にわるいものでも出來たかも知れない。此間も手紙を私の手から引奪くるやうにして取つた……確かに女の名だつた。

主人入場

おかね　（立上つて迎へるやうにして）何でした？

龍耳　行つて來なけりやならない。何でも糖田の金持の家だが。主人が急病で、昨夜から苦んでゐるんださうだ。寒いけど、行かなくつちやならない。稼業だ。

おかね　糖田？　大變ですね。何だか、天氣が變になりさうですね。（窓の外を見て）橇がもう來てるんですか。

龍耳　うむ、來てる。

おかね　大變ですね。

龍耳　何アに仕方がない。

おかね　ぢや、すつかり仕度をしなけりやー・

覗くやうにして）銑ちやん、銑ちやん。

返事が下て聞えて、二階の階梯を上つて來る氣勢がする。やがて其處から、丈の高い米琉の羽織に綿入を着た二十五六の髪を分けた男が入つて來る――

龍太郎 兄さん、これから出かけるんですか？

銑 耳 ちよつと行つて來なけりやならないから、あとを頼まうと思つて。

銑太郎 私になんか何にも出來やしませんよ、代診のかはりなんか――

龍 耳 でも、まア、あとを頼むよ。何アに、患者は澤山來やしないから。

銑太郎 何處です、行くのは？ 糖田？ 大變ですね、三里ありますね。この寒いのに……。だから、田舎の醫師なんか厭だッて言ふんです。昔から親父が出かけて行くのをよく見たけれど、三里も橇で、イヤなこッた。それから思ふと、船の醫師なんか暢氣で好いですよ。上海、香港、ボンベイ、マルセイユ、ロンドン、何處へだッて行つて見られるんですからな。こんな雪の中に埋れなくたつて好んですからな。何んなめづらしいものでも、何んな旨いものでも、何でもするんですからね。ひろびろとした海、青い、海明るい日の光……。

龍 耳 そんなことを言つては困るよ。

銑太郎 だッて仕方がないぢやありませんか。田舎に埋れては、本當に、生効がありやしません。一寸、歸つて來て、十日ゐるにさへ、うんざりして了ふんだから。これも東京なら、夜は明るいし、自働車は通るし芝居は明いてゐるし、何處へ行つたッて面白いことは澤山あるんですけれど、田舎ぢや仕方がない。日が暮れると、もう何の家でも戸をぴつしやり閉めて、音も立てずに寢て了ふんですからね。田舎に一生埋れては本當に人と生れた効がない。

おかね そんなことを言つて、お前、お父さんのあとは何うするんだえ？

銑太郎 兄さんに頼むんです。

おかね　だつて、お父さんの亡くなる時、あれほど言つたんぢやないか。

銑太郎　だつて仕方がない。姉さんと兄さんにやつて貰ふんですよ。

おかね　あんなことを言つてゐる。去年までは田舍に歸つて來るのを樂みにしてたぢやないか、お前。

銑太郎　去年は去年、今年は今年ですよ。それは田舍は面白いと思へば面白いでさ。おせんなぞと一緒に無邪氣なことを言つて遊んでゐれば、のんきでさ。しかし、本當に、姉さん、若い身空で田舍に埋れてゐられやしませんよ。若い中は世の中に出て面白いことをしなけりやなりませんよ。田舍は隱居でもしてから、やつて來る處ですよ。

おかね　だッて、お前、父さんだッて、祖父さんだッて、皆な若い時から、この町でお醫者をして、そして年を取つて行つたんぢやないか

ても田舍に埋れてはゐられない。

二人の話してゐる間、主人はいろ〳〵醫者の道具を揃へたり、外出する準備をしてゐる。

主人　それぢや賴むよ。

銑太郎　え、

主人退場、主婦つゞいて退場

銑太郎　(一人になり、今まで主婦の腰をかけた處に來て、煖爐に當りながら)寒い……何うも寒い……また吹くかも知れない。でも、兄さんは中々やり手だ。この町では、五人醫者がゐるが、今では兄さんに敵ふものはないらしい。この二階だッて、皆な兄さんが建てたんだ。去年來た時はまだ出來てゐなかつた。あれでも田舍ではハイカラな醫師なんだ。(室内を見廻して)あのソアアだッて立派なもんだ。本だッて、田舍の醫者にしては持つてゐる方だ。(ふと思ひ出したやうに)おせんはもう何處まで行つたらう。停車場まで行き着いたかしら。もう行き着い

のに、いくらとめても言ふことをきかなかつた。來年の四月の卒業の實科を少しして置かなけりやならないと言つて、何うしても言ふことを聞かずに歸つて行つた。矢張、母さんやお父さんがゐないからさびしいんだらう。家に歸つて來ても張合がないんだらう。無理はない、僕だッて、矢張さうだもの……父さんでもゐればもつと我儘をしてゐられるんだけれど、せめて母さんでも生きてゐて呉れれや好かつた。しかしそんなことを言つたつて仕方がない。家の方は、兄と姉とがしつかりしてゐて呉れるから、寧ろ自分のかねての願ひを遂げるには好都合だ。故郷、故郷になどあこがれてゐるやうでは駄目だ。故郷はもう自分に取つては他郷になりつゝある。唯、おせんが頼りなく思ふだらう。私も東京に行かうかしらなどとよく手紙で言つてよこしたが、あれは田舎で獨立して、そして、後に良縁を求めるより他に仕方がない。東京に行つたつて仕方がない。なァに、今に、好い夫を持つやうになりさへすれば、自然さういふさびしさも消えて亡くなつて了ふに違ひない。(考へて)眞佐子、眞佐子、人の妻になつた眞佐子、僕の心も知らないで人の妻になつた眞佐子、お前さへ僕の傍を離れずにゐて呉れたなら、僕も甘んじて田舎の醫師になつたかも知れない。しかしもうお了ひだ。お前はいつの間にか、人の妻となつて、小さい兒に乳房をふくませてゐるではないか。僕は海に行く、一人で海に行く、ひろい世の中にこの失戀の傷を醫しに行く。(雪の窓に當る音サラサラと聞える)故郷、故郷、なつかしかつた故郷、今はもうおせんの他には、何の思をひく羈絆もなくなつた。雪の中の櫟、夜の炬燵、さういふものももう何の意味もなくなつた……

二階をけたゝましく上つて來る足音がしたと思ふと、やがてドアが音を立てて明いて、物に驚いたおかねの半身が顯はれる。おかねは一通の手紙を持つてゐる。顏は蒼青に昂奮してゐる。

おかね　銑ちやん、大變……(かう言つて、銑太郎の前に來る)

銑太郎　何うしたの?

おかね　この手紙を御覽（手紙をわたして）今ね、兄さんを送り出してね、茶の間に來て茶でも飲まうと思つてゐると、其處の室の隅にこの手紙が落ちてるぢやないか。着物の間にあつたのが、兄さんの着物を出したもんだから落ちたと見えるんだがね。それから、何氣なしに讀んで見ると、大變だよ、銑ちやん。おせんちやんの歸つて行くのが不思議だと思つたら、死ぬ約束だよ。

銑太郎　死ぬ約束？　誰から來たんだえ、一體？

おかね　てるちやんといふあの仲の好い――

銑太郎　てるちやんッて、あの小林（かう言つて、手紙を讀み始める。主婦はその間も氣が氣でないといふ風に立つたり居たりしてゐる）

銑太郎　（半は讀み、半は言ふ）ふむ、何だッて？　かうして見てゐる日の光も雪も何も彼も明日は見えなくなるで御座います。いやなものやいやな人は皆な私達の眼の前から消えて行つて了ふのです。二人して一緒に體嬉しいでせう。私は屹度貴女が停車場に來てゐて下さることを信じてをります。ね、本當にね、誓つてね、何んなに嬉しいでせう。この世の中の嬉しさにもこれほど嬉しい悲しいことはないでせう。綺麗な清淨な童貞！あの世に行つたら、二人して女夫星になつて、毎晩あの森の上に出て輝きませう、ね、ね、この綺麗な雪のやうな眞白な私達の生涯‥‥。本當かな、本當なら、これは大變だ。

おかね　本當ですよ、何だか歸つて行きやうが大變だと思つてゐたんですよ。今朝歸る時にも「姉さんもう私歸つて來ませんよ」ッて言つて行きましたよ。私こんなことゝは知らないから、卒業までは歸つて來ないと、唯何となく思つたんだがね。

銑太郎　本當かしら？本當なら大變だ（立上つて）さう言へばさうかも知れない。昨夜もあんな元氣にして、無邪氣なことを言つてゐたが、一昨日の夜中にひとりで

押つけるやうにしてゐた。涙が頬から流れてゐた。

おかね　本當なんだよ。それに違ひない。その證據には、昨日庫の中で、せつせと洗濯物なんかしてるから、今時分、何うしたの、あとで好いぢやないかッて言ふと、でも、あんまり汚くなつたから洗つて行くッて言つてゐたがね。ちやんとその積りでゐたんだよ。何も彼もあとをすつかり綺麗にして行つたよ。

銑太郎　それは大變だ。

おかね　兄さんが行かない中だと好かつたがねえ。

銑太郎　かうしちやゐられない。（かう言つたが、また手紙をひるがへして見て）これは一體、何時出したんだ。二十八日、昨日だ。さうすると、今日停車場で落合ふ約束をしたんだ。そが停車場まで、小林が學校の寄宿舍から迎へに來てたんだ。早くわかつてよかつた。まだ大丈夫だ。姉さん。僕はすぐ行かう。

おかね　さうしてお呉れ。

銑太郎　困つたことをして呉れたもんだな。そんなに交情が好かつたのかね。

おかね　それはさうどころぢやない。手紙だッて一日に二度も三度も來る。それは並の交情ぢやなかつたんだから……。それにしても、そんなことがあるものかね。

銑太郎　それはある（考へて）ぢや、僕はすぐ行かう。一刻もかうしちやをられない。停車場まで橇を二人曳で頼んで下さい。今朝行つたのは何時だね。六時、八時の汽車で行つたんだ。七時何分の上りがあるから、その汽車で、小林が來たんだ。よし、よし、停車場まで行けばわかる。早く、早く、姉さん。

主婦は入つて行く

銑太郎　さう言へば、確かに様子が變だッた。さういふ覺悟をきめてゐたんだ。人知れず泣いて、人知れず最後の別れをつげて行つたんだ。（卓の上の手紙をもつ一度くり返して見て）明日はもうこの世の中を見ないでも好いのです。何んてまア、悲しい、嬉しいことでせう。ね、ね、本當にね。屹度よ。私がすつかりあなたのものに

なると同じやうに、あなたもすつかり私のものになつて下さるわね。ね、ね。うん、かうしちやをられない。一刻もかうしちやをられない。妹を殺してはならない。

から言つて立つて考へてゐたが、やがて銑太郎は手紙を持つたまゝ急いでドアを排して出て行く。雪がさらさらと窓に當る。一間しんとする。幕。

第二幕

川に近い田舍の旅館の二階の一間、八疊の眞中に炬燵がしてあつて、木綿の四布蒲團がかけてある。室の隅には古い机が置いてあつて、そこに硯箱が載せてある。右は廊下で、そこから下へ下りて行く階梯がついてゐる。兩方は障子がしめきつて、隣は六疊の間になつてゐる。襖には田舍廻りの繪師の書いた南畫の拙い四季の山水が張りつけてある。右に寄つた床の間には同じく古い布袋の幅物がかけてあつて、花の何も生けてない花瓶がさびしさうに置かれてある。夜はしんとしてゐる。何處からともなく水の音がきこえる。それは古い驛の街道を眞直に行つたところに流れて行く大きな川の水の音である。そこに橋がある。をり／＼橋を渡る車の音が聞えてそして

第一場

釣ランプが眞中に吊してある。女學生二人――一人はおせん、十八才、一人は小林てる子十九才、二人さし向ひに炬燵に當つてゐる。おせんは突伏してゐる。炬燵板の上には、茶器が載せてある。一時間ほど前、二人は其の炬燵板の上に茶椀やお椀を並べて、汚ない前垂をしめた下女の置いて行つたおはちから夕飯を盛つて食つた。やがて下女は來てそれを下げて行つた。

てる子がちよつと相圖をすると突伏してゐたおせんが吃驚したやうに頭を擧げる。

おせん　何うしたの。

てる子　何でもないけど……音がするわ。隣に誰か來やしない。

おせん　(耳を欹てゝ)誰も來やしない。誰も來やしない。

てる子　さうかしら、(耳を欹てゝ安心したやうに)さうね、來やしないのね。

おせん　(また突伏して了ふ。ランプがチラチラする。氣が附くと、おせんは泣いてゐる)

おせん　でも悲しいもの。

てる子　悲しいのが嬉しいんぢやないの。私は嬉しい。これでもう何も思ひ殘すところはないわ。これで、いやなものや腹立したものや恨めしいものや、さういふものが何も彼もなくなつて了ふんですもの。明日からは綺麗な淸淨な身になれるわ。(考へて)でも、貴女はさうぢやない。

おせん　(突伏してゐながら頭を振る)

てる子　おせんちやん、顏を上げて下さるな。私本當に、本當に、貴女によつて心が救はれたんですよ。貴女とお友達にならない前は、私は一度だつて嬉しいと思つたことはないんですもの。私の幼い時分、私の父さんは家出をして了つた。私、微かに覺えてゐるのよ、父さんの顏を……。母さんは、私を可愛がつて呉れたけれど、今の父さんを母さんが持つやうになつてからも、私を可愛がつて呉れたけれど、私はちつとも母の愛といふものを覺えなかつたわ。何處に行つても、私の周圍には、私を本當に心から愛して呉れた人はなかつたのよ。今の養父だつてさうよ。母への義理で私を可愛がつて呉れるんですからね。母だッて、氣兼をしながら私を可愛がつて呉れるんですからね。何處へ行つたつて、私は陰ばかり通つて來たやうなものよ。學校に來てからだッて、よく大きな人逹にいぢめられて壁の處に行つて泣いたわ。

おせん　(顏を擧げて)何て、世の中には悲しいことが多いんでせうね。

てる子　悲しいことはかりぢやないわ。汚いことばかりしてお互に生きてゐるのがこの世の中だわ。それを私が世の中で、嬉しい、心から嬉しいといふ愛を覺えたのは貴女のお蔭よ。貴方ばかりよ。停車場に、もしか貴女が來てゐなかつたら、何うしやうかと思つたわ。

おせん　私は、私は、誰も思はないけども、兄さんのことを考へると淚が出てよ。私、本當に兄さんにだけは、お暇乞をして來たいと思つたんですけど……それ

も出來ないし、本當に、悲しい悲しい思ひをして別れて來たのよ。家を出てからね、何遍となく家の方を振返つて見たのよ。涙が出て涙が出て仕方がなかつたわ。

てる子　本當に停車場で貴女の姿を見た時は、私は嬉しかつたわ。あんな嬉しいことがこの世の中にあるだらうかとまで思つたわ。おせんちやん、堪忍して頂戴よ。

おせん　（涙を流して）何も堪忍することはないわ。私も嬉しいんですもの。私達が今立派なことをしやうとしてゐるんですもの。星になつて輝きませうね。

てる子　本當ね。嬉しい。

二人は手を堅く握り合ふ。奥である物音がする。二人は慌てゝ手を引く。

てる子　何に、今のは。

おせん　何でせうね。誰か來たんぢやないかしら？

てる子　（耳をすまして）でもわかるわけはないわ。貴女たんだし、私だつて、舍監にことはつて來たんだから。

おせん　それはさうね。

てる子　あの舍監の卑やしい汚い顏ももう明日からは見なくつても好いわね。私達の汚ない體を雪が淨めて呉れるのね。

足音がする、次第に近くなる。

おせん　ほら？

てる子　誰か來た。

階梯を上る音がする。

てる子　さつきの下女よ。

おせん　さうね。

てる子　びつくりした。

廊下に添つた障子が明いて下女が顯はれる。襷をかけて前垂をしめた丸く肥つた二十六五の女が手には宿帳と硯箱とを持つてゐる。

下女　何うか、はア、宿帳をつけてください。

てる子　宿帳？

だすか。

てる子　（宿帳を受取りながら）明日は七時に立つつもりですから‥‥一番の汽車に間に合はせるつもりですから、（おせんと顔を見合せて）明日の朝までの勘定を今して下さるやうに言つて下さいな。

下女　勘定なんか、今でなくつても‥‥。

てる子　でも、明日は早いから、今、しておく方が好いから。

下女　さうですか、それぢやさう言つてして貰ひやさ？　朝は早いと寒いでな。二番で行く方が好いだがな。

てる子　でも、急ぐから‥‥（かう言つて、宿帳を書いてわたす。下女はそれを持つたまゝ障子しめて廊下の方へ出て行く。その足音の微かになるのを聞いて）

てる子　明日は、明日の朝は。

おせん　明日の朝は？

再び手を堅く握り合ふ。

停車場で落ち合つて、汽車に乘つて、此處まで來る間のことが今しも二人の胸に歴々と浮んで見えた。二人の學校のある町は雪に包まれてゐた。二人は其處で自分達の學校の屋根を遠くから望んだ‥‥。汽車の中には二人達の同じ學校の下級の生徒が一人乘つてゐた‥‥。

てる子　あの人が停車場で下りてよかつた。

おせん　本當ねえ、何か口をきかれやしないかと思つて、私、隨分心配した。

てる子　あの人の名知つてゝ？。

おせん　知らない。

てる子　何でも、下山とか何とか言ふのよ。町の人よ。でも、本當に、此處を氣がついたのは好かつたわ。此處なら誰もわかりやしない。それに。此處が一番好い。流が急だから、すぐ海に流れて行つて了ふわね。海に、清い海に。

おせん　清い海に、明日の朝は清い廣い海に‥‥。

てる子　貴女が氣がついたのね。昨年の春修學旅行に來たッて言ふのを貴女が思ひ出したのね。さう言へばあの時分はまだ貴女を知らなかつたわ。皆なして來た

けども、私は一人ぼつちで、面白くも何ともなかつた。丁度、あの時、あの向ふの橋の上で、皆して揃つて川を見ましたけね。西川先生が、これが日本の三急流の一つだなんて、生徒に教へましたつけね。あの時、貴方の組では、この向ふの茶屋に休んでゐましたね。

おせん　あの時分のことが思ひ出されますね。まだ無邪氣でしたわね。世の中にこんな嬉しい、こんなかなしいことが澤山に澤山にあらうとは思ひもかけませんでしたね。まだ、あの頃は母さんが生きてゐましたから……。

てる子　でも、貴女は親の愛ッていふことを知つてゐらつしやるから好いわ。私なんかの今迄の生活はそれは淋しいものよ、悲しいものよ。もしか、貴女が停車場に來てゐて下されなかつたら、私、一人でさびしく死なうと決心してたのよ。

おせん　（再び炬燵の上に顔を突伏す）

てる子　何うかしたの？

おせん　（頭を振つて）い丶え。

てる子　でも……。

おせん　少しかうして置いて頂戴。私、考へなけりやならないことがあるから……。

てる子　（炬燵から出て、そこらをあちこちと歩く。障子を明けて外を見たりする。吹いて來たと見えて、風の雪を雨戸に打つける音がサラサラ聞える。室の中のランプが微かに動く。やがて立つてゐた身を動かして、靜かに突伏してゐるおせんの方を見る）

てる子　鈴木さん。

おせん　（顔を擧げる）

てる子　（僅かに傍に寄つて來て、情に堪へないやうに體を寄せて）鈴木さん、本當に堪忍して頂戴。

おせん　私、今、母さんのことを考へてゐたのよ。母さんの死んだ時のことを。母さんは死ぬ時まで、私のことを心配して、いろいろなことを兄さんだの姉さんだのに頼んで下すつたのよ。でも、もう、明日は母さんやお父さんのところへ行けると思ふと、嬉しいわ。

（傍に置いてあつた信玄袋の中から母親の寫眞を出してじつと見入る）。

てる子　私にも見せて頂戴（手に取つて見て）貴女の母さんには、私、たつた一度お目にかゝつたことがあるきりだけれど、今でも、ちやんとあの時のことを覺えてゐてよ。去年の春の休みでしたかね。母さんはいろいろ御馳走して下さいましたね。本當に貴女の母さんは私の母さん。本當よ、私は、今だッて、生の母親のことなんか何とも思つてゐやしませんよ。貴女の母さんの方がぐつと戀しいわ。一緒に、明日はお目にかゝることが出來るわねえ。母さん、屹度喜んで下さるわ。何ッてまア嬉しい淨い美しいことでせう。明日はこんなところにゐなくつても好いんですね。何も彼もこんな汚ないイヤな世の中から離れて、二つの美しい魂ばかりになつて、そして廣い碧い海に行くんですね。

おせん　本當ですね。唯、兄さんが心がゝりだけれど兄さんばかりは泣いて下さるだらうと思ふけれど、兄さんだッて、國にはゐないんですもの。東京から、船のお醫師になつて、遠い國に行くッて言つてゐるんですもの。私は何も思ひ殘すところはないわ。でも、ね小林さん、姉さん、この二三日の冬休みの間ほど悲しいことはなかつたわ。丸で、こんなことは素振にも見せなかつたのよ。毎晩、炬燵の傍で、皆して、お正月のことだの來年のことだのを話したの。活動寫眞の眞似をするなんて言つて、私と兄さんとキヤツキヤツて言つて無邪氣に騷いでゐたのよ。相變らずおせんさんはのんきだなアなんて、兄さんは知らないから言つてゐるんですよ。私の心持を誰も知らない、貴女より他には知つてる人がないと思ふと、悲しくつて悲しくつて仕方がなかつたわ。私は、夜、一人で起きて、貴女にあげる手紙を書いて、そして泣いたわ。それから、あとにいろいろんなものを殘して置きたくないと思つて手紙や日記を燒いたり、汚れたものをすつかり洗濯したりしたわ。それもね。家の人達にわからないやうにと思つてね。庫の中にバケツに水を汲んで行つて、そ

してこつそり洗つたのよ。そこへ、兄さんが入つて來て、何をしてるんだえ?ッて言はれた時には、すつかり秘密が知れて了つたかと思つたわ。私ね、明日歸るのに、餘り汚れてゐるからッて言ふと、何もこんな寒いところでしないでも好いぢやないかッて、それでも疑はずに出て行きましたけれどね。

てる子　貴女の兄さんには、とう／＼お目にかゝることが出來なかつたわね。

おせん　やさしい兄よ。よく氣のつく兄よ。貴女にも逢つて頂きたかつた。

てる子　でも、先々月でしたね。そら、あなたの兄さんのところに林檎を送るんだッて言つて、學校から一里ほど行つて、百姓家をたづねて、林檎を買つて來ましたつけね。何處をさがしてもなくッてね。やうやく探した家には、頑固な爺さんがゐましたつけね。

おせん　さう／＼さうね。

かはりがはり持つて歸つて來ましたつけね。重かつたわね。あちらこちらの山が紅葉で、空が碧くつて綺麗でしたね。

おせん　兄さん、あのお禮を言つてゐましたよ。

てる子　兄さんに一度お目にかゝりたかつた……。（てる子考へに沈む、暫くしてから）あゝあゝ、それにしても、長い長い學校の寄宿生活！　いやないやな寄宿生活！　私は小學校がすむとすぐ來て、何んなに辛く悲しかつたでせう。誰だッて、私のことなんか考へて呉れるものはないんですもの。それに、私は舍監の機嫌などを取ることが出來ない氣質なんですもの。私の級のものは、皆な私の敵よ。あゝ、しかし、もう……それも……（間）卒業して學校を出たからと言つて、何が世の中に面白いことがあるでせう。生徒を教へて毎日勤めに出て、下宿して何が面白いことがあるでせう。

てい子　明日の朝の分まで？

下女　え、その中に入つて居ります。

てる子、帯の間から小さながま口を出して、錢を勘定して下女にわたす。

下女　難有う御座います。（辭義をする）明日は七時にお起し申せばよう御座いますかね。

てる子　えゝ。

下女　では、もう朝が早う御座いますから、床を敷きませうかね。

てる子　え、何うぞ……。

下女出て行く。

てる子　（小聲で）疑はれるとわるいから、床を敷いて貰つて、寢たふりをしてゐませうね。

おせん　（默つて點頭く）

廊下の隅の押入に入つてゐる蒲團や掻巻を下女の出す氣勢がする。

トサンと四布蒲團を落したらしい音。

下女、蒲團を抱えて入つて來る。

下女　何う敷きませうね。寒いから、炬燵に入つておやすみなさる？

てる子　（おせんに）さうしませうね。

おせん　えゝ。

下女　（蒲團を持つて來ながら）寒いからな。炬燵なしぢや、足が冷えて寢つかれやしない。（一つを右に一つを左に敷かうとする）

てい子　別に敷かないでも好いわ。一つで好いわ。一緒に寢ますから。

下女　でも、一つぢや寒かんべい。

てる子　一つの方が好いの。その代り、敷蒲團を厚く重ねて敷いて下さい。

下女　さうかな、中よく寢る方が暖かで好いかな。

奥の方に向けて、炬燵をまくつて蒲團を布く。夜着の上に四布蒲團を一枚かけて、船底枕を二つ置く。

下女　それぢや、おやすみなさい。もう何も用はないかな。

てる子　もう何にも‥‥。

下女　おやすみ。

　下女出て行く。

てる子　(下女の足音の廊下に消えて行くのを見送るやうにして)もう何時?

おせん　(小さな女持の時計をちよつと見て)もう十時すぎよ。

てる子　もうさうなるの?

おせん　早く夜が更けるわね。

てる子　ぢや、ね、十二時頃まで、寢た振りをして起きてゐませうね。そして、さつき見て置いた、下の裏の便所の傍から‥‥。便所に行くふりをして行きませうね。あそこの雨戸はぢき明くし、そこから、木戸を明けると、ぢき通りに出られるから。

おせん　(點頭く)

てる子　もし見附つて、耻をかくやうなことがあるとそれこそ大變だから。それこそ世の中に顔向けが出來

おせん　本當ねえ。

てる子　でも、誰も氣が附いてゐないから大丈夫だわ。十二時すぎれば、もう通りを歩いてゐる人もないにきまつてゐるから。通りから、川の橋のところまではもうぢきだから。わけはないわ。

おせん　さうねえ。

　外には雪の雨戸に當る音がする。

おせん　雪が降つてるのね。

てる子　吹いてゐるらしいわ。

おせん　雪の中を通つて、あの橋の上に行つて、あの清い碧い水の中に‥。そして明日は海に遠い海に‥。

てる子　こんな淨い綺麗な一生が世の中にあるでせうか。いくら長く世の中に生きてゐたツて、こんな美しい清い心持を味ふことが出來るでせうか。何んなすぐれた小説にも、長い間の歴史にも何處にもない。

おせん　本當ねえ。(感情が昂つて來たやうに)私書置を一つ

てる子　お書きなさい、今の中に……。

おせん、立つて、室の隅にある硯箱を持つて來る。

てる子　ペンで御書きなさいな。

おせん　でも、インキが……。

てる子　私、持つてゐる。（から言つて、信玄袋の中から小さな紫をインキの壺を出して、互燵板の上に置く。葷だのなでし子だの刷つてある小さな紙と矢張綺麗な小さな四角な封筒を出しそこに置く。）

おせん　難有う……（ちよつと手に取つて見て）綺麗ね。

てる子　私も書くわ。

二人は暫し默つて、ペンを取つて、頻りに書く。

おせん（書きかけて、首を傾げて考へる。溜息がひとり手に出る）。

てる子　何うして？

おせん　何うもしないけど……。

また二人が默つて書く。外を大きな聲をして通つて行く人の氣勢がする。

てる子（おせんがペンを置くのを見て）出來て？。

おせん　旨く書けない。

てる子　ちよつと見てよくつて？。

おせん　ええ。

てる子（取つて讀む）好いわ。これで好いわ。私達は明日は遠い遠い海に行きますから、何うかあとをさがさずに置いて下さいまし。本當だわ。悲しんでは下さいますな。私達は清い清い美しい心を持つて、滿足して、あの世に行くので御座いますから。本當だわ。私もさう書かうと思つてゐたところなの。（それを傍に置いて、またペンを取つて頻りに書く。）

おせん　突伏してゐる）

てる子（書きかけたのを破つて棄てゝ）私なんか誰にもやる人はないわ。思ひ出して貰はうと思ふやうな人は何處にもゐないんですもの。母さん、父さん（段々激して來て）母さん、何故、あの時、今のお父さんを持つて下さつた？　あのお父さんをお持ち下さるなら、何故死んで下さらなかつた？何故持つて下すつた？　何んなに、お困りになつたつて、私と二人きりならば、私は何ん

なに苦勞したとて、母さんを助けて、假令貧しくとも樂しい世の中が送れましたのに‥‥。母さん、母さんは私の本當の父さんの愛を忘れて、他の人の胸にお縋りなさつた。それがくやしい、それが悲しい、それが恨めしい。母さんには虚僞でも何でも、縋る人が出來た。しかし、私は、私は、何うすればよかつたのでせう。私には縋る人がない、縋る愛がない。父さん、本當の父さん、七歳の頃まで私を可愛がつて下すつたお父さん、何んなに世の中がつらくたッて、私といふことを何故忘れて下すつた？母さんを棄てゝも、何故私といふものを一緒に棄てゝ下すつた？ 私は、私は、そのため、何んなに苦しい汚い暗いさびしい世の中を渡つて來たでせう。（涙がてる子の頰を流れ落ちる）父さん、本當の父さん！

おせん　（それにつれて昂奮して）　姉さん、私、私がゐるぢやありませんか。私が姉さんを唯一人、唯一人愛してゐます。何うか、悲しまずに、泣かずに‥‥‥（手を握つただけでは滿足が出來ないやうに、二人はすり寄つて、互にしつかり抱きついて、暫しはそのまゝでゐる。二人の頰から同しやうに涙に流れる）。

おせん　姉さん！。

てる子　おせんちやん。

おせん　本當に、明日からは、女夫星になつてね。

てる子　本當にね、嬉しいわ。

二人は顏を見合せる。ランプがチラつく。

暫くすると、二人は勞れたやうに沈默する。大きな感激のあとにやつて來た沈默がつゞく。やがて、てる子はおせんから離れて、

てる子　寢たふりをしてゐませうね。

おせん　えゝ。

てる子　ぢや、寢ませう。

おせん　えゝ。

二人はさつき下女の敷いて行つた蒲團の中に入る。しつかり抱きついて、心と心と、涙と涙と、體と體とを一つに合せて了つたやうに。舞臺はしんとする。てる子の枕向に寄た机と束髪と白い襟とが見える。二人は何も言はずに、唯、抱きついてゐるらしい。暫くして欷歔の

音が斷續する。外の窓に當る音、遠くで川の流れる音。
突然、下で話聲がする。誰かがやつて來る氣勢がする。つゞいて階梯を上る音が高くきえる。廊下近く、劍の音がして、一人の巡査、年の頃三十一二、制服を着けて、劍をぢやらぢやらさせて、宿屋の亭主と一緖に障子をあけて入つて來る。亭主は肥つた頰鬚の濃い五十位の男。

てる子　おせん（驚いて起上る）

巡　査（室の眞中に立つて）コラ、お前達は縣の師範の生徒か。

てる子（逃けやうとしても逃けられぬのを見て）はい。

巡　査　今日、停車場で待合せて、そして此處に來たのか。

てる子　はい。

巡　査　一人は小林照、一人は鈴木せんと言ふのか。

てる子　はい。

巡　査（亭主に）何時頃此處に來て投宿したのだ？

亭　主（廊下から障子の中に入つて）今日の三時頃て御座いますべ。

巡　査　今、縣の本署から尾花澤の分署へ電話がかゝつて、そこから保護の願ひが此方に來たんだ。若いものは仕方がない。無分別のことをしては仕方がないぢやないか。

亭　主　一體何うといふ？

巡　査　詳しいことは知らないが、二人で、此處に來て、自殺をしやうと言ふのださうだ。

亭　主（驚いた體）自殺？　何かわるいことでも……。

巡　査　いや、何、わるいことといふてはないが、兎に角、無分別なことをしては困る。兎に角、明日の朝まて、此方で保護をして置けといふ分署からの命令だ。（二人に）もう寢てたのか？

てる子　はい。

巡　査　お前達は、親兄弟があるんだらう。

二人は默つてゐる。

巡　巡　師範の生徒て、これから人の先生にならうといふ身て、さういふ無分別をするといふ法はない。兎

に角命令だ。(亭主に)兎に角、保護して置かなければならんから、明日の朝、向ふから迎へに來るまでは保護して置かんければならんから、駐在所に一緒に來るやうに——

てる子　おせん　何にも、無分別なことなんか致しませんですから……

巡査　イヤ、それでも、此處には置けない。兎に角駐在所まで……。

二人は小さな鳩のやうに、何うして好いかわからないやうに震へてゐる。これで捉つて、これか世の中に知れては、誰にも顔向けか出來ないといふやうに——

巡査　兎に角仕度をしなさい。(主人に、廊下のところにつゝいて上つて來た上さん、女中の方を向いて)　別にあやしいとは思はなかつたのか。

亭生　別に……

巡査　三時頃、二人で入つて來たのか。

かつたのだて。

上さん　(四十五六のこわれた髮をした女、廊下から室の中にちょつと入つて來て)　三時頃、私と女中で店にをりやすと、二度も三度も家の前をこゝの二人のあねさまが行つたり來たりしてゐますて、お泊りになんなさるなら、お泊んなされッて聲をかけやした。そするとな、喜んて入つていらしつてな。それから、お風呂と御飯をすまして、さつき床を敷いて上げやした。

巡査　別に變つたことはないか。變だと思つたことはないか。

上さん　何にもありやしねえ。今、あんたが入つて來てそれを聞いて、びつくりしてゐる位たでな。

上さんと女中とは何かこそ〳〵話しながら、二人の方をじろじろ見る。

巡査　まア、兎に角、駐在所まで來るやうに。詳しいことは知らないが、兎に角、明日の朝までは保護し

上さん（プカプカと室の中に入つて、二人に）ぢや、あねさま、旦那があゝおつしやるんだから、まア、ちよつくら行つて來さつし。

止むなく二人は身の廻りのものを持つて、巡査や上さんや亭主に保護されて室から出て行く。

てる子（おせんに）しつかりしませうね。心配することはないから……。

おせん（默つて點頭く）

一同退場

第二場

舞臺すつかり變る。田舍の駐在所の光景、大きな街道に面して、入口に何々村巡査駐在所といふ札かゝつてゐる。中に入ると、土間。その向ふに、小高い板敷があつて、そこに古いテイブル一脚、周圍に一脚の椅子と長い腰掛とが置いてある。瀬戸の大きな火鉢に火が活々と起つてゐて、テイブルの傍の本箱には戸籍だの届書だのの厚い帳面が入つてゐる。法令大全なども見える。そこから奥の居間とを劃る間にところどころ破れた障子が二枚閉てあつて、中から薄暗いランプの光が、此方のテイブルの上に吊してある五分のランプの光と雜つて微かにさしてゐる。奥には、巡査の家族が住んでゐるらしく、をりをり赤兒の啼聲などがする。下手、小さな木戸、此處等田舍に特有の便所が遠く微かに見立てゐる。屋根には雪、その向ふに高い竹を編んだ垣。卓の横の長い腰掛に、てる子、おせん並んで腰を掛けてゐる。テイブルの下に火の起つた火鉢がある。巡査が足をそれにかけてゐるのが見える。

亭主、上さん、女中　それでは歸つて好うかんべいか。

巡査　歸つて好い。

亭主　ぢや、何か御用がおあんなしたら、誰かよこして下され。

巡査　よし、よし。

上さん　あとて迎へに來ませうか。

巡査　よし、よし、此方から何とか言つてやる。

亭主、上さん、女中、皆な出て行く。

巡査（言葉をやさしくして）まア、寒いからおあたり。

てる子、おせん　難有う。

巡査（奥に向つて）おい、おい。

細君（年の頃二十五六、髮をぞんざいに束ねて、今年の秋頃生れ

た赤兒を結附けに負つてゐる。半身を明けた障子からあらはして、じろじろ娘達の方を見ながら）何にか、用？

巡査　寒くつて仕方がない。炭を少し持つて來て置け。

細君　其處にないの？

巡査　もうこれつきりだ。（炭取を細君の方にやる）

細君　（面倒くささうな顔をして奥に入つて行つたが、間もなく別の炭取に一杯炭の入つたのを持つて來る）　熱があるんでやかましくつて仕方がない。仕方がないから、負つちやつた。寢起きの故か、何だかぞくぞくする。

巡査　寒い、本當に寒い。（火鉢に炭をつぐ、細君の背の子供泣く）泣かせないやうにしなくつちやいけないよ。

細君　でも、泣くんだもの。（再ひ娘達の方をじろじろ見ながら、障子をあけて、奥に入つて了ふ）

巡査　何うしてそんなことを考へたんです？

てる子　別に、さういふ譯でも....。

巡査　[illegible]ら、さう言つて來てあるんだから。（テイブルの上にある紙にかきつけた字を見て）鈴木せんッて言ふのは？。

おせん　私で御座います。

巡査　縣の師範の五年生？

おせん　さうで御座います。

巡査　何も私が寒いのに貴女方に御說法をしたいと言ふ譯ぢやないがね。何うして、そんなことをしやうとしたんです。何か譯があることなんですか。

・おせん　てる子　（頭を振る）

巡査　この若い多望な身で、師範の生徒て、もう來年は人の子供の上に立たうと云ふ名譽ある身で、何うしてさういふことを思ひ立つたんですか。名譽ある學校の疵にもなることといふことは知つてゐるでせう。（間）實はさつき尾花澤の分署から電話がかゝつて來て其町の旅籠屋に、鈴木せんといふものと小林てるといふものが泊つてゐる筈だが、それを取押へて與れ。そ

明日まで保護して置け。かう縣の警察から電話をかけてよこしたといふことなんだ。師範の校長から頼んだものらしい。

てる子、おせい（顔を見合はす。何處から知れたらうといふ疑惑の樣。）

てる子　校長さんから警察に頼んだんで御座いませうか。

巡査　よくわからないけれど、さうらしい電話だッた。

てる子　本當に校長さんでせうか。（校長さんなら、もう學校に知れ渡つてゐる。學校で大騒ぎをしてゐる。町にも知れ渡つてゐる。何故もつと早く實行したかつたらうといふ心持。）

てる子（おせんに）何うしてわかつたでせう。

おせん　本當にね……。

てる子　では、もうすつかり私達のことは、校長さんにも、誰にも、彼れにもすつかり知れわたつて了つたんですね。

おせん　何うしませう。

巡査　知れたッて好い。かうして貴女方が生命を助つたといふことは、何よりも幸福です。何うして、さういふ不量見な考を起したか、それにはいろいろ譯があることでせうが、自殺が罪惡だと言ふことを貴女方は知らないことはないでせう。教育ある貴女方が知らないことはないでせう。貴女方は親や兄弟があるてせう。親や兄弟の嘆きばかりではない。かういふ不孝をかけて、貴女方は好いと思つてお出でゝすか。それは死なゝければならないことがあつたんでせう。しかし何んなことがあつてもさういふ量見を持つてならないといふことを貴女方はよく知つてゐる筈です。自殺して、人間が何になります。何の樂みがあります。何んなに苦勞をしても、人間は生きて、子供をそだてゝ、そしてこの世の爲めに盡さなければならないんです。人間は生きてゐるのが樂みです。何んなことをしても生きてゐなければなりません。そんな考は捨てゝ了は

なくつてはいません。

二人は默つて低頭いてゐる。

道德から言つたつてさうだ。親や兄弟や多くの人達に迷惑をかけて、多くの人から變な眼附で見られて、それで貴女方は好いと思ひますが。校長さんや先生やさういふ人達がさういふことを敎へましたか。貴女達は藤村操のことなんかを考へたんぢやありませんか。あんなことは、道德上から言つても、何から言つても馬鹿々々しいわるいことです。それに、貴女方はまだ若い。何んなことでも出來るぢやありませんか。何んな幸福でも何んでも求められるぢやありませんか。親や兄弟や先生に心配をかけて、そんな不量見なことをするよりも、もつと立派なことがいくらもあります。もつとしなければならないことが澤山あります。現に貴女方はかうして早く見附け出されたから、生命をなくなさいで濟んだもの丶、この事が世の中に知れて、さい。學校の名譽にも關するし、貴女方の家名にも關するし、その影響は一通りぢやありません。

二人は愈々低頭れて考へる。

しかし、すんだことをとやかう言つたつて仕方がない。そんな不量見は思ひ直して、もうそんなことをしないやうになさい。わかりましたか。

二人點頭く。

奥で赤兒の啼く聲、巡査は立つて其方に行く。

てる子　（小聲で）何うしませう。

おせん　何うしませう。

てる子　校長さんから電話がかゝつたのでは、もう學校で誰も知らないものはないでせう。……これでは居られない、顏向けが出來ない……何うしませう。

おせん　では、兄さんにももう知れてゐる。何うしませう。

てる子　（思詰めたやうに）生きてゐられない。生恥を晒し

めせうね、覺悟をね。好い？

おせん （點頭く）

巡査入り來る。

巡査 （椅子に腰をかけて）わかりましたか。私の言つたことがわかりましたか。私は決してわるいことは言はない。明日は校長さんが皆なと迎へに來るだらうから、その時は、耻かしいなんて思はないで、心を改めて、おとなしく歸つて行くやうにしなければいけませんぞ。よう御座いますか。

てる子 難有う……。

巡査 （おせんに）あなたもよくわかりましたか。

おせん 難有う……。

巡査 ぢや、旅籠屋に歸し上げても好いんだけれど、明日の朝まで保護するやうにとの命令だから、奥に、狹い一間があるから、そこに明日の朝まで休んで御出なさい。今、旅籠屋に蒲團を取りにやつたから。

てる子 大丈夫で御座います。

巡査 大丈夫だらうが、兎に角、命令だから、さうして貰はなければ困る。寢てからも猶よく二人で考へて見なさい。いろんな人に心配をかけたり迷惑をかけたりして、そんな不量見を起して好いか、わるいか。おい寒い、寒くなつた。えらい吹きになつた。（炭取から炭を火鉢につぐ）一體、何うして、そんなことを考へたんだ？ これが男と女となら、よく世の中にもあることだが、女と女で、何うしてそんなことを考へたんだ？ 何かわけがあるかね。（少し笑つて）さう言へば、女同志で心中するといふことも偶には聞く。何かおもしろい深い譯があるのかな。

二人默つてゐる。

それとも何かつらいことでもあつたのか。世の中に生きてゐられないといふやうな――

二人頭を振る。

言はないぢやわからない。言つてきかせても好いなら言つて聞かせなさい。

二人矢張默つてゐる。

奧で物音。旅舍の女中や僕が蒲團をかついで來た樣子、細君と話をする聲なども聞える。

巡査　持つて來たか。

細君　（障子の中で）持つて來ました。

巡査　ぢや、そこにそれを敷け。炬燵に火がある筈だな。

細君　（顏を出して）貴方は？

巡査　俺は起きてる。（間、二人の方に向つて）おや、休んだら好いだらう。休んでゆつくり考へて見なさい。

てる子　（頭を下げる。おせんに）ぢや貴女。

おせん　ぢや、失禮ですけど……。

二人は腰掛けから立上る。てる子を先に、おせん後からつゞく。二人とも障子に添つた奧の入口から悄然として入つて行く。

巡査　（一人になる）寒くつてたまりやしない。折角寢たところを起された。これだから巡査なんかイヤだと思つてゐても、食つて行かなけりやならないんだから。……それにしても、こんなイヤな役はやめやうやめやうと思つて、もう何年になる。（數へて見て）巡査なんかやめやうやめやうと思つてもう六年になる。情けない生活だ。（障子の方を向いて）おつる、おつる。

細君　（赤兒を負つたまゝ入つて來る）何か用なんですか。

巡査　もう寢たか。

細君　え、休んだやうです。（小聲で）一體、何うしたんです？

巡査　なあに、人騷せな。女同志で心中する處だつたんだよ。

細君　あの女學生達が——

巡査　さうよ。この寒いのに、川にはまつて死なうなんて物好きな奴もあるもんだな。

細君　あんな無邪氣な何も知らないやうな顏をしてゐて……。

もしものことがあつちや、學校の名譽にかゝはるからな。

細君　何處の人なんです？

巡査　一人は米澤の方のもんて、一人は庄内のもんだッていふ話だ。

細君　でも、思ひ返したんですか。

巡査　俺がよく言つてきかせてやつたから……。まア、寒くつても、人間二人助けたと思へばあきらめがつく。（細君の背に負つた赤兒を見て）坊主寢たか。

細君　（振返るやうにして）今日は風邪を惹いたか何かして、やかましくつて仕方がないんですよ。やうやう寢た。

巡査　もう下して寢かす方が好い。

細君　貴方は？

巡査　俺は起きてる。あれだけ言つてきかせたから大丈夫だと思ふけれど、命令だから、もしものことがあると困るからな。

細君　大變ですね。（間）それぢや、床は何うして置きませう。私の方へ持つて來て敷いて置きませうか。

巡査　うむ、さうして置いて呉れ。

細君　大變ですね。この寒さぢや、火でもドンドン起さないでは、とても凌がれませんよ、炭はありますか。

巡査　（炭取を見て）ある、澤山ある。

細君　一體、何時です？

巡査　（本箱の上の六角時計を見て）一時半だ。

細君　寒いさかりですね。吹いてますから、明日はまた大變ですよ。

巡査　まア、早く寢る方が好い。

細君　ぢや、私、先に坊やをねかしますよ。……寒かつたら、此方に來る方がよう御座んすよ。二人は落附いてゐるやうですから大丈夫ですよ。

巡査　うむ、よし。

細君入つて行く。

巡査　（炭を火鉢につぐ。外では、雪の雨戸に當る音がさら〳〵する。新聞を取つて、ひろげて見る。新聞の陰から巡査の髭の濃い顔が見える。またサッと風と雪の音がする）　おゝ寒い。寒いのは無理はないな、もう二時だ。まア、仕方がない、人間の若い命を二つ取留めたんだから……。

第三場

同じ處、巡査が眠をしてゐる。火鉢の炭は大分灰になつてゐる。法令全書の半分開いたのが卓の上に置かれてある。あたりはしんとしてゐる。

てる子奥からそつと入場

巡査　（眼をさまして四邊を見廻して、其處にてる子の靜かに出て來るのを見附けて）　何處へ？　何處へ行く？

てる子　ちよつと厠(はばかり)に……。

巡査　便所か、さうか、（大きく欠びをして）　知つてるかね、便所を、そこを行つて、戸を明けると、すぐだ。

巡査はランプを持つて立つて、てる子のあとについて、上手の木戸を明けてやる。てる子靜かに戸外に出て行く。雪は大分積つたらし

巡査　おう寒い。

てる子　（暫くして用を足して出て來た樣子、銘仙の着物に蒼白い顔がちよつと見える。出て來て）　何うもお氣の毒さまで御座いました。

巡査　わかつたかね。

てる子　難有う。

てる子、元來た道を通つて、卓の傍にある腰掛の傍を通つて、靜かに奥の間に入つて行く。

巡査　（ランプを元のところに吊して）　寒い、寒い、實際寒い。ちよつと間に寝て了つたと見える。もう三時半だ。かれ是一時間寝た。（くしやみをして）あゝ風邪を惹いたやうだ。（火の灰になつたのを見てそれを火箸で掻き廻して）　すつかり消えちやがつた。實際、寒い、寒い。かうして起きてゐちや體がたまらない。夜が明けるまでは、まだ二時間半ある。（あくびをすると共に睡魔が襲つて來たやうに卓の上にぐつたり顔を落したが、暫くしてまた不意に眼を覺して）　大丈夫

あれほど言つたんだから、もう過失はありはしない。かう寒くつちや、とてもいかん。とても體がつゞかない。向ふに行つて見張つてゐたッて大丈夫だ。便所に出て來る位だから、大分落附いて考へ直したと見える。大丈夫だ、大丈夫だ。何しろ、かう寒くつちや仕方がない。

巡査椅子から立つて、ワクワク戰へながら、ちよつと奧の方を見て安心したやうな風で、障子を明けて、閉めて、細君の寢てゐる一間に入る。

あとはしんとする。

第四場

てる子を先に、おせんあとからつゞく。

ソツと知れないやうに、音のしないやうに、四邊を見廻して、腰掛の傍を通つて、下の土間の方に下りて來る。

てる子　（おせんの手を引くやうにして）静かに、静かに‥‥

おせん　姉さん‥‥

てる子　静かにおしなさいよ。此處で見附けられるともう目的を達することが出來なくなるから。

おせん　姉さん‥‥。

てる子　悲しいけれど、嬉しい。神樣のおたすけ。（段々上手の方に歩いて來て）おせんちやん、しつかりなさい。校長さんに知られて、新聞に恥をさらされて、そして生きてゐられますか。おせんちやん、神のたすけ。好い鹽梅に、おまはりさんは寢て了つた‥‥。早く、早く。おせんちやん、明日は、海に、ひろい海へ。恥辱も苦みも悲しみも何もない、廣い清い海へ。嬉しい、悲しい。

おせん　姉さん‥‥。

てる子　そこから、便所から、垣が一つある。それを越すと、もうひろい街道ですから、橋まではもうすぐだ。

おせん　姉さん、母さんや父さんのところへ、海へ。

てる子　何も彼ももうこれで好い。苦しいこともない、悲しいこともない。世の中の汚ないものも見ないでも

好い。情ぶかいやうで實は情も何もない今の父さんや母さんの顏を見ないでも好い。本當に、神のおたすけ。私達の死ぬことが神の思召にかなつてゐることはこれでも解る。ねえ、おせんちやん。一緒に、一緒に、何時までも何時までも一緒に、かう手を合せて、かう體を合せて、そして永久に森の上にかゞやきませうね。神さまは屹度私達を、私達の淨い美しい童貞を嘉していつまでも、いつまでも空にかゞやかして下さるわね。

おせん　一緒にね。

てる子　何ッてまア美しい淸い二人の生涯でせう。塵も曇もない、美しい花のやうな美しい雪のやうな二人の生涯！

二人抱きついて泣く。

てる子　（體を離して）もう泣くのはよしませうね。今日からは、もう二人の體は一つの體、とこしへに離れることの出來ない二人の魂、體は離れ離れになつても、

おせん　いつまでも、いつまでも....。

てる子　（またおせんを抱きしめて）可愛い可愛い私の妹、私の妹！　美しい花！

おせん　姉さん、姉さん....

赤兒の啼く聲。

てる子　（キッとなつて）早く早く、おまはりさんが眼をさまさない中に、早く早く、早く行きませうね。

おせん　早く川へ、海へ。

てる子　（おせんの手を曳きながら、足袋跣足のまゝで、厠の方へ行く木戸のところに行つて、戸をあける。雪は風につれてサッと吹き込んで來る。室内のランプの光に照り添つて、雪片がチラチラする。便所から垣にかけて雪が一二尺も積つてゐるのが夜目にもそれとわかる）。早く早く....。

おせん　姉さん....。

二人は吹頻る雪の中に入つて行く。二人が厠のところから、三尺ばかりある高さの垣を飛び越えて、彼方に出て行かうとしてゐるのが微かに見える。二人を招くやうな川の瀨の音がする。

つ。赤兒がまた啼き出す。細君の恐怖聲で、それをすかしてゐる氣勢が障子の中でする。本箱の傍の六角時計の針は五時十分のところを指してゐる。夜明はもう程ないと見えて、何處かで寺の鐘の音がする當然、障子の戸が明く。發作のやうに、巡査は立つて上つて來る。奥へ行く。暫くして出て來る。

巡査　おつる、おつる！

細君　（恐怖聲で）何です？

巡査　逃げた、逃げた！

細君　（寢卷姿で、其處から此方へ入つて來て）何んですッて？

巡査　逃げた、逃げた。

細君　本當？

巡査　本當にも何にも、奥にはもう二人ともゐない。今、何だか人の聲がすると思つてうとうとしてゐたんだが、あの時逃げて行つたんだ。今だ。今だ。ついさつきだ（慌てゝ）早く早く、提灯をつけて呉れ。また其處らにぐづぐづしてゐる。

細君　提灯は何處にありましたッけねえ。

巡査　押入の中にある。

細君が提灯をさがす中に巡査は制服のまゝで寢てゐた上に劍を吊る

巡査　何うしたの？　早くしろ。

細君　蠟燭が少しかありません。

巡査　新しいのが本箱の抽斗の中にある。早く早く、

漸くつけた提灯を持つて、慌てゝ巡査は土間に下りたがふと氣が附いて厠の方へ行つて見て、そこからまた引返して、街道の方へ出て行く。劍がガチャガチャ鳴る。

赤兒の啼聲、幕

第三幕

第一場

第二幕の終の場と同じく、村の駐在所の光景。もういつか朝になつてゐる。六角時計の針は九時二十分の處を指してゐる。雪はまだ盛に降つてゐるらしい。

筒袖の老婆、巡査の細君、旅館の亭主。

老婆　（[illegible]）何うしたべ？

細君　何うしましたかな。

亭主　まだ上らねえかな。

細君　若い人には本當に困つて了ふ。ほんのちよつ

との間、ほんにちよつとの間だがね。そこの便所の處からぬけ出して行つたんだが、あの高い垣を越して行つたんだよ。すぐ、追かけたんだけれど、もう間に合はない。

老婆　何んの因縁で、そんな眞似をしたんだかな。それで橋から飛込んだんけえ。

亭主　まだ暗かつたから、よくわかんねかつたんべが、何でも、橋を越して、向ふの崖へ行つて、暫らく歩いてゐたッて言ふこッたつけ。飛込んだ時は、もう夜が明けてゐたッて言ふことだつけ。

老婆　可哀相なことをしたもんだな。（亭主に）お前さんとこへ泊つたんけ。

亭主　昨日泊つたんだが、此方へ蒲團届けて安心してゐると、今朝、その話しぢやねえか。つゝ遁げて、河へ飛込んだッて言ふ話ぢやねえか。

老婆　何うしても死んだんだんべな。

細君　（亭主に）宅ぢや何うしてゐるの？

亭主　何うしたかな。さつき、大勢、川の縁て人足や船頭達を集めて、焚火なんかしてゐたつけかな。この雪ぢや、とても急には死骸は揚らなかんべ。

老婆　それでも死骸はわかつたんかな。

亭主　何でも、向ふの岸にあるッて言ふこんだ。何でも、もうすこしさつき、舟を出してゐたつけ。

（巡査入來る）

巡査　おゝ寒い、寒い。（老婆や亭主が挨拶するのを見向きもせずに、細君の方に行く。）

巡査　寒くつて仕方がない。

細君　あがりましたか。

巡査　まだ中々あがりさうもない。まア、何しろ、腹が減つた。一杯、飯ゞ食はなくつちや何にも出來ない。

（巡査、細君と一緒に奥に入る）

老婆　まだ、親類だゝちは來ねえんか。

亭主　もう追つけ來べゝ。一番の気車で來る筈だか

老婆　さぞびつくりすべいな。

亭主　こつちで保護して置く筈だつたで、まさか、そんなことはあんめいと思つてゐるだでなア。おつたまげべいよ。

老婆　見張つてゐても、死ぬ氣ぢや、何うもなんねえしな。これも因縁だなア。

亭主　本當だよ。

老婆　まだ若いんか?

亭主　十八に十九だとよ。

老婆　ふうん(同情に堪へないやうに)何うしてそんなことをしたんべな。

(巡査奥から出てゝ來てそしてまた傍目を振らずに出て行く。引違ひに、銑太郎、おせんの保證人の中村といふ四十男入り來る。)

銑太郎　遲かつた、遲かつた……もう死んだのは確かなのか?

亭主　死んだのは死んだど。お前さん、親類の衆かね。

銑太郎　何といふこつた。あれほどしつかり保護を賴えで置いたのに、何のことだ。莞爾した、あの妹の顏を見ることが出來ると思つて喜んで樂んで來たのに。小言は言ふまい、若い心の過失だから、深くは責めまい。笑つてつれて歸らうと、かう思つて來たのに……。中村さん、何うしたら好いんでせう。こんな悲しいことが世の中にあるでせうか。それにしても、本當に死んだのか、死んだとは思へない。若い娘の保護を引受けて置いて、それで遁がすとは……。見す〳〵川に赴かしめるとは——中村さん、中村さん。

中村　それで死骸は?

亭主　今、引揚げてゐるんでごわすべ。

銑太郎　巡査は?

亭主　今、川に行きやした。

銑太郎　それで一體、何うしたんだ?

亭主　詳しいことは知らねえが、昨夜、電話がかゝつたとかで、こゝのおまはりさんが、十一時過ぎに此處につれて來て、あとで此處にとめるからと言つて、

蒲團を取りに來て、それから今朝、身を投げたといふことを聞いたと……(問) 何でも今朝の五時頃、ちよつとの間に、そこから遁げ出して行つたんだとせ。(岡の方を指さす)。

銑太郎 (感慨胸に集るといふ風で)、運命だ。死なゝけりやならなかつた運命なんだ。(昨日、手紙を見て慌てゝ飛出して來た時以來のことを思ひ出すやうにして) あの時、二人の買つた切符を、あの停車場で聞かなかつたことが抑もの過失だ。あの時、切符の行先をつきとめて、すぐつぎの下りでやつて來さへすれば、殺さなくつても好かつたのだ。あの時慌てゝ、學校の方ばかり氣になつてゐて、學校でまごく してゐる中に時間が經つて了つたんだ。此處に來てゐることをたしかめた時には、もう下りのあの終列車が立つて了つた後だッたのだ。中村さん、御宅に泊つて、のんきな顏をして、安心して、今朝寢てゐる中に、妹は川に行つたんです。中村さん、何う

中村 本當にこんなことが起つてゐやうとは、夢にも思はなかつた。それにしても、保護してゐたものゝ不注意は許されない。

銑太郎 何うしても死んだとは思はれない。あの妹が死んだとは思はれない。(頭を振る) そんなことがありはしないかと思つて、汽車の中でも、學校でも、何んなに氣がわくわくしてゐたことだらう。學校で、昨日妹を見かけた人があるといふので、舍監や何かを賴んであちこちとさがして貰つてゐる間も、氣が氣でなかつた。漸く、私のあとから來てた義兄が、停車場で買つた切符の行先を突留めて、その電話で、警察に賴んで、此處の旅籠屋にゐるといふことを確めて、安心してゐたのは愚だッた。死ぬやうに運命つけられてあつたんだ。

巡査佩劍のまゝで入來る

銑太郎、中村、默つて巡査の方を見る。巡査は自分の不注意に自分から固く立つことといふ風で、わざと調子重く傲然として卓の方に行く)

巡査　何うもこの吹きで自由にならんで困つとる。しかし、もう上つた。君は親類ですか。

銑太郎　兄です。鈴木せんの兄です。昨夜、電話で保護をお願ひして置きました兄です。

巡査　何うも止むを得んことで……。ちよつとの間に取遁して了つた。

銑太郎　もう二人とも上りましたか？

巡査　上つた。もう、ちき、此處へ運んで來る筈だ。

銑太郎　一體今朝の何時頃ですか。

巡査　五時少し過ぎた頃だ。すぐ追かけたけれど、まだ暗くつて、何方に行つたか更にわからん。近所のものを起してさがしてゐる中に、飛込んで了つた。

銑太郎　何處から遁げたのですか。

巡査　そこの便所からだ。あの高い垣を飛越えて、そして通りの方へ出て行つたのだ。女の業にしては、隨分思ひ切つた仕業だ。

銑太郎（巡査の不注意を責めるわけにも行かない風で、中村に）何うも仕方がない。何うも仕方がない。死んで了つたあとでもつて、騒いで見たッて仕方がない。僕がわりいんだ。儀が停車場で切符の行先を突留めなかつたことがわりいんだ。その爲め妹を殺して了つた。妹を、最愛の妹を……。父さんや母さんがあれほど可愛がつて死ぬ時もあれほど私に頼んで行つたあの妹を。故郷を去るにつけても、妹より他に何も心殘りのないほど最愛の妹を……。中村さん、こんな悲慘なことが世の中にまたとあるでせうか。

中村（默つて愁を含んでゐる。）

俄かに通の方に人聲がして、人足、船頭、大勢の人達が戸板をかついで、此方にやつて來る。最初にてる子の死屍、つゞいておせんの死屍。新しい蓆の下から、ひつたりぬれた銘仙の着物の裾やら、よごれた白足袋などが見える。かついで來た人足は、二つの戸板を土間の一隅に並べる。

戸外には、大勢の群集、いろいろなことをがやがや饒舌つてゐる。

銑太郎、中村、老婆、つゞいて巡査、皆なその死屍の傍に行く。巡査の細君も障子を明けて此方を見てゐる。

一人の船頭 (四十位の髪の濃い男)己ア、何年にもなるが、こんなことは見たことはねえ。こんな可哀相な死人を上げたことアねえ。(同) 何でも、橋の向ふの崖のところから飛込まうとして、それを一度止して岸まで下りて、そして川に入つたんだべ。さつきまで、ちやんとあねさまの足跡が殘つてゐたゞ。可哀相なことをしやしたよなア。死屍けえ? 死屍は川の三町ほど下のところへ流れて寄つてゐたゞ。この吹きだて、探すのに大變だつた。何處をさがしてもねえだで、此處の川は流が急だで、何處か、はア、遠くへ流れて行つたかも知れねえと思つた位だッた。それに、やうやうさがしたところが崖でな。岩の下のところになつてゐてな。河が渦を卷いて早いだ。舟を寄せやうとしても何うしても寄らねえ。こつちのあねさまの (てる子の死屍を指して)「着物が岩にかゝつて流れずに淀んでゐたんだが、そこまで中々舟がやれねえ。二度も三度も流され

平と呼ばれた船頭、 あそこが流が一番早えところだから[illegible]。よく流されねえでゐたよ。

最初の船頭 それから、やつとのことで、帯に解いて平公の三尺と一緒に結んで、そして岩の角に引かけて舟を寄せた。

老婆 こつちのあねさまも、その近くにゐたんかね。

平と呼ばれた船頭、 すぐ傍の處に流れ寄つてゐたゞ。

老婆 仲がまア、何んなに好かつたんべい。死んで一緒に離れなかつたんだなア。まア、何ッて言ふこんだんべ。こんな若い身空で、こんなに美しいあねさまで。

最初の船頭 ほんになア、何んて言ふてつたか。

銑太郎傍に近づく。 ㊫

銑太郎 (默然として死屍を見てゐたが) おい、誰か人工呼吸をして呉れるものはな[illegible]か。人工呼吸を。

群集の中より一人の男飛び出す。

男 己れが知つてる。俺が知つてる。もう何時間經

俺が海軍で、軍艦に乗つてゐた時分、五時間經つた奴を生かしたことがある。何れ、何れ……。

男、おせんの死屍の傍に寄つて人工呼吸を施す。

男　旨く行くと、呼吸をふき返すよ。俺は軍艦で、現にやつたことがあるんだから……。（頻りに死骸に人工呼吸を施す。戸外の群集もいつとなく土間の中に押寄せるやうに入つて來てゐる。）

巡査、群集の方に、

巡査　こら〳〵さう大勢入つて來ちやいかん。いかんと言ふのに……。

銑太郎　（男の人工呼吸をするのを頻りに見てゐたが）醫師は何うした？

亭主　今、來やすべい。

銑太郎　（到底蘇生の望みのないを見て取つて）あゝあゝ駄目だ。駄目だ。萬事お終ひだ。（おせんの死骸の方に體を曲げて白い笑を含んだ顔をじつと見て、人工呼吸をやつてゐる男に）やア、難有う、何うせ、駄目だ。もう生きかへる望みはない。魂はもう遠くに行つたのだ。清い清い純潔なる魂はもう天に行つた。おせん、おせん、兄さんが此處に來てゐるのを知つてゐるか。世の中の汚れたことも、辛いことも、樂しいことも何も彼も知らずに天に行つた靈魂、世の中の戀も何も知らずに去つて了つた靈魂、兄さんは、お前ばかりが賴りで、お前ばかりがいつも心がゝりの種であつた。夫を持つたお前の姿をも僕は描いた。子供を持つたお前の姿をも想像した。兄さんは、何うせ遠くに行く身、海の上に浮んで何年經つて故鄕に歸つて來るかわからない身、お前ばかりをはさぞ淋しいだらう心細からう、賴りなからうと思つてゐたのに…………昨日はあゝして無邪氣なことを言つてゐたお前が、かうして今日逝つて了はうとは、夢にも、夢にも思はなかつた。一昨日（おとつひ）の夜、お前があんなに無邪氣で、あんなに元氣で、あんなに快活でゐたその心の中にかういふ悲しい種が蒔かれてあつたとは少しも知らなかつた。淨い美しい若い魂、世の塵にも何にもけがれない

童貞の魂！ 人間は何うせ一度は死ぬのだ。苦しい思をして、悲しい思をして、心も身も汚れに汚れてそして終には死んで行く身だ。お前は汚れずに死んだ。お前の死は決して徒爾はない。（間を置いて）お前は、事業のやうにして死に赴いた。そしてまたお前の死は免れることの出來ない運命のやうであつた。でなければ、何故僕は切符の行先をあの停車場で突留めなかつた？ でなければ、何故、僕は保護を頼んで安心して朝おそくまで寢てゐた？（死屍の帶の間から半分出かゝつてゐる白い紙片を取つて） あ、こゝに、書置がある。父さんと母さんの寫眞がある。亡くなつた父さんも、母さんも、あの時寫したこの寫眞が、かうして娘の帶の間に挾まれて水にぬれやうとは思はなかつたでせう。（書置をちよつと見て） 海へ、海へ。ひろい海いお前は流れて行く積りであつたのか。林の上に毎晩かがやいて、兄さんを見てゐる。何といふ無邪氣な綺麗な者を抱いてお前は死んで行つたのか。（堪らないやうに、額を兩手で蔽つて）この世の中に、こんな純潔なことが想像されやうか。世の中の人は、死に對しては、いかなる犠牲をも拂つて生きやうとするのに……。自由な精神、獨立な精神、世には、魂を削つてさへ生きてゐる人達が多勢あるのに：：人間の一番恐れる死にさへ、笑つて飛込んで行つた若い魂！

傍では、てる子の死屍の傍で海軍にゐた男が頻りに人工呼吸を施してゐる。巡査は戸内に入つて來やうとする群集を制してゐる。

老婆　本當に何んなだんべい。

亭主　可哀相なことをしたよなア。

銑太郎　（中村に）しかし、いくら言つたつて仕方がない。中村さん、かういふ悲しいことはまたと世の中にありませうか。學校でも、かういふ空氣が二人の間に釀されつゝあつたことを知らなかつた。校長も教員も舍監もそんなことを少しも知らなかつた。自分の預つてゐる生徒がある日こつそりと出て、そしてかういふ悲慘なことをするのをも知らなかつた。（急に思ひ附いたやうに

今まで人工呼吸を無益に施してゐたてる子の死屍の傍に行つて、じつとそれに見入つて）小林てる子、妹の手紙に何遍書いてあつたか知れない小林てる子、この冬の休暇には是非兄さんに逢つて頂きたいと妹が絶えず言つてよこした小林てる子、（更に深くじつと見入つて）一二年經てば、今から一二年經てば、苦しいがしかし樂しい戀の心を知ることが出來たでせうに……。家庭の樂しみと苦しみとを嘗めることが出來たでせうに……。しかし、戀も、家庭も歸するところは死だ、死だ。（てる子の死顔の美しいのをじつと見て、自分を棄てゝ去つた戀人を思ひ出したやうに）かういふ人もあるのに、かうして深く童貞の淸さを守らうとする人もあるのに……。

群集少しく動搖する。それを分けて、校長てる子の保證人杉山老人、龍耳

校　長（八字鬚、洋服姿、年齡四十二三）飛んでもないことになりましたな。

死屍の方に近寄る

校　長　やア、これは……（間）こんなことは少しもしらなかつた。こんな不幸が一晩の中に起らうとは夢にも知らなかつた。（間）困つたことになりましたな。（間）（中村に）ふん、さうですか。朝の間に、ちよつとの間に……不注意ですな。あれほど保護を賴んで置いたのに、それは不注意ですな。（巡査の方を見て、更に銑太郎に）困つたことになりましたな。今日は以後さういふことのないやうに、懇々お話しするつもりで參りましたに……。

銑太郎　何うもすみません。いろいろの御心配をかけて。（龍耳の姿を見て、急に其方に行つて）兄さん、おせんはもうこんなになつて了ひました。私がわるいんです。私が氣がきかなかつたんです。

龍　耳（死屍の傍に寄つて）ウム、殘念なことをした。私が糠田にさへ行かなければ……（間）殘念なことをした。

銑太郎　いゝえ、私がわるいんです。

龍　耳　昨夜の電話で、私もすつかり安心してゐたんだが……。

杉山老人（てる子の死屍を見て感慨へ堪へないといふ風）長生を

すると、悲しいことを見るもんぢや。しかし、かうしてこれの最期を見やうとは思はなんぢや。不仕合せな子ぢや。不仕合せな子ぢや。何一つ仕合せな樂しい思ひをせずに死んで行つた子ぢや。

銑太郎　（獨語のやうに）運命といふものはわからない。我々は皆なこのわからない運命に引張られて、あやつられて、生きたり死んだりしてゐるのだ。今度のことだッて、皆なさうだ。皆な運命だ。たとへ、僕が昨日早く此處まで來て、首尾よくこの二人を助けたにしたところが、二人は矢張いつか死んで行つて了つたかも知れない。十八歳で、世の中を知らずに死んで行くのも、八十まで生きて死んで行くのも、皆んなその人々の運命だ。大きなものゝ前に立つては、代々は何うすることも出來ないのだ。人間の淺い知慧では料り知ることが出來ないのだ。

杉山老人　（矢張獨語のやうに）いくら年を取つた人間でもいくら經驗をつんだものでも、かういふありさまに出會しては駄目ぢや。何故死んだか、何故かういふ光景が、この世の中に現はれて來たか、それは私にもわからない。私はこれの唯つた一人の味方ぢやつた。誰も彼も皆なこれのことを思つたものはなかつた。本當の父親もさうぢや、母親もさうぢや、今の父親もさうぢや。私はこれの本當の父親の友達ぢやつた。心を許した友達ぢやつた。今は生きてゐるか死んでゐるかわからないが、私よりも年下で、好い快活な怜悧な男ぢやつた。家庭や妻や子供の爲めに自分の自由を奪はれるのには、餘り獨立した男ぢやつた。今は、何處にゐることやら……。何處にゐて、お前に顏も性質も氣分もそつくりなこの娘が、かうして死んで行つたのを夢に見てゐるやら……。年を取つて、かういふ悲しいことに出會さうとは思ひもよらなかつた。この子ばかりは、何うかして立派にしてやりたい。行衞をかくした友達のためにも、この子だけは自由に獨立が出來るやうにしてやらうと思つた。私はこ[illegible]

つた子ではなかつた。淋しかつたらう、冷めたい悲しい生活であつたらう、冷めたい悲しい生活であつたらう。とても若い身には堪へられない生活であつたらう。何も彼もわからない。經驗も知慧も何も役には立たない、大きなもの、人間より大きなものに向つて立つては……。あゝそれにしても、何といふ悲しい深い運命ぢややら……。

巡査部長入り來る

部長　何うした？何うしたぢや。

巡査　つい、ちよとの間に取逃して了ひまして。

部長　かう、かう大勢人を入れては仕方がないぢやないか。

巡査前方に行つて、群集を追ふ。老婆を始め、近所の人達は皆な出て行つて了ふ。さつきから障子をあけて見てゐた巡査の細君も中に入る。巡査申譯のないやうな顔をして此方に來る。

部長　何時死んだんぢや。

部長　火邊に伴れて來て置いたのか。

巡査　そこにつれて來て、奥にねかして置いたのですが、明方に便所に行く振りをして……。

部長　それで逃がしたのか。

巡査　ほんのちよつとの間に……。すぐ追かけたんですけども、夜は暗し、路はわからず、雪は吹いてゐるもんですから。

部長　さうか……（佩劍を鳴して、死屍の傍に行く）醫師は來たか。

巡査　もう參るでせう。

部長　早くせんではいかんぢやないか。

龍耳（さつきからおせんの眼をあけたり、脈を見たりしてゐたが）もう駄目です。もうすつかり冷却して了ひました。

校長（部長の方に近寄つて）貴方は尾花澤から？。

部長　左様。

校長　私は縣の師範の校長です。（更めて挨拶をして）失禮いたしました。いろいろ御配慮を願ひましたが……。

部長　（丁寧に）イヤ、ねつから行屆かないで、折角の保護が無駄になつて、何とも御氣の毒の至りに堪へません。何年生ですか。

部長　五年生です。

部長　可哀相なことをしましたな。（間）こんなことは學校にはよくあるんですかな。

校長　私の學校には、今までこんなことはなかつたんで御座いますが、何うも困つたことです。

部長　（巡査に）兎に角、かうやつて置いても仕方がない。醫師を呼んで來るやうにそれから御遺族の方にも。

巡査外の方へ行く。

第二場

第二幕の旅館屋の二階の間、二人のゐた八疊と次の六疊との間の襖を明け放して、其處に布團の周圍に、銑太郎、龍耳、校長、杉山老人、中村などゐる。

中村　何うもあの巡査の不注意だ。何う考へて見ても、あの巡査の不注意だ。

校長　部長が來てから、すつかりへこたれて了つた。

いあつさへ注意して呉れゝば、あんなことはなかつたのだ。

銑太郎　（入つて來た女中に）もう棺は出來たのか。

女中　何うなつたかな。

銑太郎　ちよつと見て來て呉れ。（出て行く女中を見送つて龍耳に）あの女中ださうです。飯の給仕をしたり床をとつてやつたりしたのは。

龍耳　ふん、（考へて）何うしても、私は亡くなつた父さんや母さんに濟まないやうな氣がして仕方がない。糖田にさへ行かなければ好かつたんだ……。

銑太郎　私がわりいんです（黯然とする）こゝに二人がゐたと思ふと、何とも言はれない氣がします。

校長　（銑太郎に）平生仲の好いといふことはきいてをりましたけれど、手紙などは絶えず取かはしてゐたのでせうな。

銑太郎　手紙は澤山あつたやうで御座います。終には毎日二通も三通も來たことが御座います。（中村に）御存

じの通り、別に何一つ事情ッて言ふものはないんですからな。（考へて）しかし、何うせ、死ななけりやならない運命だつたかも知れません。今度止めても、いつか死んだかも知れません。てなければ、こんなに運わるく死ぬやうになつて行くことはないだらうと思ひますから……。

中村　巡査が何か説諭したッて言ひましたが、あれがわるかつたんですな。ソッとして置けば好いのに、何か言はれたもんですから、これは生きて居られないといふ風に思ひ詰めて行つたんですな。

校長　中學教育を受けたものが、巡査の説諭など耳に入りませんからな。

銑太郎（獨語のやうに）何も彼も過ぎ去る、過ぎ去る。どんな悲哀も、どんな悲痛も、皆な過ぎ去つて、あとには唯時ばかりが殘る。一體、新しい自覺とか、生命の統一とか、自覺とか言つてゐる世の中に、かういふ不思議な悲しい事件があるんだから。かういふ思ひもかけないことが起るんだから……。過ぎ去る、過ぎ去る！　何も彼も過ぎ去る。かういふ光景も明日になり明後日になれば、もう何ともなくなつて了ふのだ。（自分達の生活が思出すまいとしても思ひ出さるゝといふ風）父の死んだのが――母の死んだのが――。

中村、校長、龍耳、棺の出來たか否かを見に出て行く。

杉山老人（六疊から八疊の方に來て）時は過ぎ去る。本當に貴方の仰有る通りだ。時は過ぎ去る。いかなものも過ぎ去る。私などももうこの世の中にはゐなくなるんだ。辛いことにも。悲しいことにも私は何遍出合つたらう。世の中の推移(うつりかはり)にも何遍辛い思ひをしたらう。しかし、さういふものは皆すぎ去つて了つた。しかし、私は今度のやうな悲痛に逢つたことはない。今度のやうな不思議を見たことはない。私はあのてる子をあまやかすまいと思つて、腹では同情してゐたが、決して表には同情の言葉をかけてやらなかつた。だが、聞いて下さい、可哀さうな子ぢやつたぞ。愛といふものを少しも知ら

なかつたやうな子ぢや。本當の父親には七歳の時に別れたが、その私の友達である父親も決してあれのことを思はぬではなかつたぢや。家出をするにも、行衛不明になるのも、皆なそれ相當の理由があつたぢや。今ゐる母親だッてさうぢや。子供の事を思はぬのではないのぢや。しかしな、世の中には辛い義理があるぢや。若い心ではちよつと飲込めないやうなことが澤山に澤山にあるぢや。若い心では二人のやうに死なゝければならないほど思ひ詰めた突き詰めたことも、年を取ると、何のこともなく平氣でゐることが出來るのぢや。人間はさういふ風に出來てゐるのぢや。しかしその思ひ詰めた突きつめた跡、その跡が私の一生にも澤山に殘つてゐるが、その跡が辛いぢや。いつそ死んだ方がどれほど幸福だかと思ふことは何遍も何遍もあつた。二人のやうに死んで了ひたいことが何遍もあつた……。あのてる子の母親から、さつき電報が來た。ユカレヌと唯かう書いてあつた。普通に言へば、薄情ぢや。さういふ家庭に育つた子だから、つむじまがりの、人見知りの、頑固な子だと言ふだらう。親の責任だと言ふだらう。しかし、私はさうは思はなんだ。ユカレヌといふ四字の電報の中に限りのない悲哀を汲んでやることが出來るのぢや。……私は何よりも、何よりも、てる子が可哀さうぢや。てる子が死ぬほど思ひ詰めた心持がよくわかる。

銑太郎　では、てる子さんにさそはれて妹が死んだと仰有るんですか。

杉山老人　さうは言はない。しかし、さう言つても好いほど、暖かい愛情に餓えてゐたのぢや。あれの父親と言ふのも、情に激しい男ぢやつた。今の母親を妻に持つ時のことなどもわしは知つてゐるが、その時のことが思ひ出される。あゝ、過ぎ去つた、過ぎ去つて了つた。跡ばかり殘る。

銑太郎　本當に世の中には悲しい跡ばかり殘る。

杉山老人　しかし、貴方などはこれからぢや。悲しい

辛いことはこれからいくらあるかわからない。卑しい仕事に對して怒ることもあるだらう。細かい心の波にたゞよはされて、いつそ死なうかと苦しむやうなこともあるだらう。それを人間は忍耐しなければならない。生きるために人間は忍耐しなければならない。そして生きてゐて、その生きてゐるといふことが實際は何てもないのぢや。生きてゐなくつても好いのぢや。二人のやうに死んで了つても好いのぢや。ところが、それがわからない。私のやうに、年を取つて見なければ、その生きてゐなくつても好い理由はわからぬぢや。謎のやうなもんぢや。

（老人立って歩きながら、）

さうは言ふものの、老人のやうに、または多くの世の中の老人のやうに、生きてゐなくつても好い理由がわからないで、二人のやうに死んで了ふのは可哀相ぢや。何もわからずに、何も知らずに死んで行くのは可哀相ぢや。何が可哀相と言つて、それが一番可哀相ぢや。私はそれを思つて、さつき死骸を見た時には、涙が出た。

鋭太郎　わからないことが澤山に澤山にある世の中ですな。

杉山老人　あゝつまらないことを饒舌つた……。年寄のよまい言と思つて下さい。私はこれから、あの子の死骸を今日の夕方に、燒場に持つて行つて、そして燒いて了へば、それでもう昔の友達に對する友誼はすむのぢや。何うかして、その友誼、出來ないながらも、あの子を獨立させて、生の父や母に對する誤解を解くことの出來るやうな年に達せさせたいと、唯、そればかり思つてゐた。そればかり願つてゐた。學校の寄宿舍で、誰一人友達がなくなつて、四面か皆な敵で、愛に饑えて、（言ひかけて考へて）校長からも舍監からも度々あの子に就いての忠告を私は受けたぢや。しかし校長や舍監などには、そんなことがわかりはしまい。唯、質（たち）がわるい、質がわるいとばかり言つてゐるのぢや。だ

から、私はそんな忠告は此方の耳から此方の耳に通したきりぢや。今考へると、それがわるかつたのぢや。寄宿舎の生活が何んなに冷めたい、何んなに利己的なものであつたかといふことが今わかつた。あの人達のやつてゐる教育は世間のいふ通り一遍ぢや。まア、しかし、そんなことを今此處に貴方に言はなくつても好いことぢや。世間は何處をふり向いて見ても、皆な通り一遍のものぢや。深い辛い悲哀や貴い力強い感激や何時までも底深く殘つてゐる跡や、さういふものも、一人々々見れば皆な持つてゐるのだけれど、そんなことを一々思つたり考へたりしては生きてゐられないのぢや。通り一遍でなくては生きてゐられないのぢや。……まア、しかし、これで私の昔の友達に對する友誼は終つた。もう死んだか生きたかわからないが、しかも長い間私の頭に殘つてゐる友達ぢや。

銑太郎　では、何うしても一緒に葬るといふことは出來ませんか。

杉山老人　貴方のお言葉は感謝する。さう申しては失禮ぢやが、貴方はお若いにも似合はず情の深い物のよくお分りになる方ぢや。そのお志は感謝する。てる子も感謝してゐるでせう。しかし、世の中はさうしたものではない。貴方の村に持つて行つて一緒に葬るといふ譯には行かない。私は一人で、今晩、燒場に持つて靜かに友達のことで考へませう。

銑太郎　何うしてもさうしなければなりませんか。離れ離れに葬るのは情けないやうな心持が致しますが。

杉山老人　さうして下さい。あれも却つてその方を望むでせう。それにしても、かうして殺したのが惜しい。いくら知つたつて知り榮のない世の中だけれど、あれでも獨立させて、自分の好む生活をさせて見たかつた。「をぢさんの仰有つた通りです」と言はせて見たかつた。言はせて見たところで仕方がないやうなものではあるが……。

銑太郎　（感慨に堪へないやうに）かう言ふ場合に、昔の人はこれも何かの縁だとよく言ひます。平凡な言葉ですが、實際さうしか思はれません。これ何かの縁です。かう言ふより他仕方がありません。多い學生の中で二人が相知つて、相愛して、さうして、かういふことになるといふのは——。

杉山老人　不思議ぢや。神ぢや。何んな目に見えないものがあつて、何んな人の知らない神や佛のやうな力があつて、そしてかういふ因緣を生んで來るんだかわかりませぬぢや。人間なぞといふものは、何年生きてゐても、私のやうになつても、さういふことは少しもわからないほど小さいあはれなものぢや。貴方なども、今に、段々さういふことがお解りにならうけれど、幾年生きてゐたッて、人間にはさういふことはわからないぢや。……私がかうして貴方にお目にかゝつて、此のことがなければお目にかゝる機會があるかないかわからない私がかうしてお目にかゝつて、かういふお話をするといふのも不思議ぢや。

校長入場

校長　（銑太郎に）今、部長に大に談判してやつて來ました。部長も申譯がないと言つてゐました。手續書を取るなんて言つて居りました。（杉山老人に）貴方の方の棺ももう大抵出來上つてをりました。

杉山老人　難有う……。

校長　（銑太郎に）何うも出來たことは仕方がない。不幸としてあきらめるより他に仕方がないとして、これがぱつと世の中に知れたり、れい／＼しく新聞にでも書かれたりすると、學校のためにもなりませんし、貴方方のお家の名譽にも關することですから、豫めさういふことのないやうに、部長にも頼んで來ました。

銑太郎　何うもいろ／＼……。

校長　で、何うなさいますか。今、向ふで、御兄さんとも話したんですが、今夜はお通夜をなすつて、明日の朝御引取りになりますか。

鐵太郎　さうですな……。

校長　實はさうなさるつもりで、學校にもちよいと電報を打つて置きました。（杉山老人に）貴方の方は？

杉山老人　私はこれから行つて、棺につめて、今夜焼いて了はうと思ひますぢや。

校長　庄内の方からは何方もお出になりませんか。

杉山老人　さつき出て來られないと言つて參りましたぢや。矢張、生みの母親と言つても、今では人の妻でその人の子供もある身分ぢやで、思ふやうにも參らんとも見えるぢや。

校長　では、明日骨にしてお國の方へでも……。

杉山老人　さうしてやらうと思つてゐますぢや。（立つて廊下の方に行く）ほ、また大降りになつて來た。（獨語のやうに）思ひ出せば、もう昔のことぢや。友達と私とこの川のこの橋をわたつて、よく庄内の方へ行つたものぢや。そこに舟着があつて、庄内の方へ出る舟が客をやうにして見て）ある、ある。矢張苫舟が待つてゐる。昔のやうに待つてゐる。私とあの友達とあの舟に乘つて庄内まで行つた時に、友達は私にあの話をした。あのてる子の母親の話を……。あゝもう昔ぢや。遠い遠い昔ぢや。あの夜は苫舟の中に小さくなつて、寒さにふるえて、私はまんじりともしなかつた。それを、今、かうして友達の娘の最期をこの川の中に見やうとは思はなんだ。川ばかりぢや、永久に若いのは川ばかりぢや。川は昔の通り靜かに巴渦を卷いて流れてゐる。人間の世の中に、何んなことがあらうが、何んな悲哀が、あらうが、何んな困難があらうが、何んな生死があらうが、そんなことは知らぬ顔で、いつまでもいつまでも若く流れてゐる。若い娘がこの川で二人相抱いて死んだなどといふことは、一年と經たぬ中に、誰も口にも上さぬやうになつて了ふのぢや。この川がさういふ悲しい葬臺になつたことなどは、誰も知つてゐるもの

然の舞臺の上に種々な跡ばかりを殘して死んで行くのぢや。‥‥（吹雪の凄しく荒れるの見ながら）あゝ、また吹いて來た。これでは燒場に行くのも大變ぢや。少しやんで臭れれば好い。

銑太郎 （同じく其處にやつて來て）また降つて參りましたな。（考へて）あ、綺麗な川、美しい川、妹達の死ぬには適當した美しい川だ。これから長い年月、この川の雪の眺望は常に私の眼の前に離れずにゐるだらう。何處に行つても、山に行つても、海に浮んでも、熱帶地方の椰子の葉蔭に佇立んでも、ロンドンの賑かな都會の巴渦の中に逍遙つても、此の川の雪の眺望と妹達の淸い短い一生とは忘れずに私の胸に浮んで來るだらう。あゝ何といふ悲しいことだらう。何といふ淸い人生の事實だらう。（老人と並んでじつと見入る）

二人沈默

銑太郎 では何うしても此方(こちら)で‥‥。

杉山老人 難有う、御厚意は感謝しますぢや。しかし、さうする方が死んだものの爲めの供養になるぢや。（間）明日は行つて母にして今は母でない女の歎きを私は見るのぢや。その歎きを見るのが今からつらい。（思直して）どれ、棺が出來たさうぢや。行つて納めて參らうぢや。

銑太郎 私も御一緒に參りませう。

二人退場、幕

第四幕

縣國のある町の大なる停車場のプラットフオム。柱が處々に立つてゐて、前には、レールが長く通してゐる。レールを越して、向側の小さなプラットフオム。すべて雪中の景、その向ふには、雪で眞白に蔽はれた畠や川や人家を隔てゝ、高い山の連亘が美しく見渡される。吹雪は今では大分靜かになつてはゐるが、二三日來の暴れで、あたり一面に眞白になつて、全く雪國の趣を呈してゐる。向ふに外套を耳まで冠つた車掌が急いで通つて行くのが見える。朝、十時少し前。

第一場

女學生 三人續いて來入る

甲 益佳さん、まだ誰も來てないわねえ。

乙 早かつたのね。

丙 寒いわねえ。少し步かなくつちや體が氷つて了ふわ。

乙 山田さん、隨分大袈裟ね。

丙　だッて、本當ですもの。おゝ寒い。（明放したブラットフォムに吹いて來の雪風に身をふるはして）何時なの？　一體此處につくのは？

甲　十時十分とか十五分とか言つたわ。

乙　（時計を見て）おや、もう皆な來さうなものね。

丙　でも、本當に可哀相だわねえ。

乙　本當ね、何うしてそんなことをなすつたでせうね。小林さんがわりいのよ、乾度。あの人は誰にだッて、よくは言はれてゐなかつたから。鈴木さん、人が好いもんだから、小林さんの言ふなりになつたのよ。

甲　本當ねえ、鈴木さんは可哀相だわねえ、本當にあの人のことを考へると、涙が出てよ。私、昨夜すつかり聞いて泣いちやつた。新聞に出てゐたのね。誰でも知つてるのね。校長さんのことが出てゐたのね。

乙　舍監のことも出てゐたわ。餘り平生喧しいからとか何とか出てゐたわね。それに監督がわるいからだとも言つてあつたわ。

なつてゐるんですッてね。本當の父さんは、行衞不明で死んだか生きたかわからなんですッてね。私、新聞で始めて知つたわ。

丁戊の女學生入來る。

丁　戊　お早う。

甲乙丙　お早う。

互に丁寧に辭儀する

丁　まだ先生は來ない。

甲　まだよ……。

戊　大變よ、町では評判よ、何處でもその噂をしてるわ。可哀相だッて言はない人はないわ。

乙　私、休みだから、何うしやうかと思つたのよ。だけど、何うせ、町にゐるんだからと思つたから、來たの、寄宿舍に殘つてゐる人はたんとゐないんでせう。

戊　それでもかなりゐるわ。何でも四年と五年とで寄宿舍にゐるものは皆な來る筈よ。町にゐる人にもなるたけ出るやうにッて言つてたでせう。

丁　[illegible]

乙　本當ねえ。

戊　もうおきお正月なのに……。本當よ、小林さんがわりいのよ。あの人は此前にも變なことがあつたツていふ噂よ。

甲　さうなの……。新聞でいろんなことを書いてるわね。オメだとか、何とかいろいろ書いてあつたわね。

皆々笑ふ。

丙　（笑ひの靜まるのを待つて）二人一緒の川岸の岩にの處に死んでゐたんですツてね。小林さんの着物の袖が岩にかゝつて……。

乙　さう……、さう言へば、あそこ知つてるわ。あの橋のところでせう。飛込んだところは向ふ側らしいのね。去年、皆なして修學旅行に行つたところよ。あのお辨當を食べたところらしいわ。

甲　さうらしいのね。私も、新聞を見てさう思つた。

戊　（丁に）鈴木さんの仲の好い人は、皆な國に歸つて了つてゐるわね。

丁　……、……

（考へてさう〳〵町田さん、あの人ゐるでせう、此度）

戊　それから清浦さん、川上さん、池田さんも、仲が好かつたわね。

皆で話してゐる間を、車掌が行つたり來たりする。雪がさつと吹き込んで來る。

第二場

女教師二人、男教師三人、あとから女學生大勢入來る。

甲乙丙丁戊　お早う。

女教師　お早う……。

男教師　（背廣の制服に厚い外套を着てゐる。一人の女教師に）校長さんは昨夜歸つて來たんですか。

女教師　この汽車で、御一緒にお歸りになる筈です。

男教師　小林てるの死骸は？

女教師　小林さんのは、燒いてお國に持つていらつしやつたさうです。

男教師　（もう一人の男教師に）氣の毒なことをしましたな。

話しかけられた男教師　本當に氣の毒なことをしました。

鈴木の方は殊に氣の毒ですな。何でも駐在所の巡査の疎漏のために死ぬやうになつたつて言ふことですな。

もう一人の男敎師　餘り眠むいので、ちよつと寢た間に逃げ出したんださうですな。

男敎師　しかし、無理はありませんよな、死なうと覺悟したものを、夜一夜番をしてゐるといふとも大變なことですからな。（女敎師に）敎頭さんはお見えにならない？

女敎師　もうお見えになるでせう。さつき途中でお目にかゝつたんですけれど、ちよつと寄道をして行くところがあるからつて言つてお別れしたのですよ。

男敎師（時計を見て）少し遲れたかな。

もう一人の男敎師　此處ですれちがひになるんでせう。もう五分すぎましたな。

男敎師　冬は何うしても遲れ勝ちですな。

敎頭、あとから町田まさ子といふ女學生入り來る。

一同（挨拶する）

甲乙戊（まさ子を取卷く）お氣の毒でしたわね。

まさ子（默然として）私、何うしても本當に出來ませんの……。だつて、お正月には一緒に歌留多をして遊びませうねッて約束したんですもの。

甲　本當にお氣の毒よ。

まさ子（女敎師に）先生、本當に鈴木さん、この汽車で來るのですか？

女敎師　えゝ。

まさ子　私は何うしても本當に思はれない。つい此間お別れする時だッて、ちつともそんな風はなかつたんですもの。

遠くから聞えて來る汽車の響、下りが先づ入つて來る。一杯雪をためた排雪機、すさまじく煤烟を漲らしたエンジン、屋根には高く雪が積つて、濡れた客車の窓から、旅客の顏がチラチラする。やがて止まる。向ふの方で戸を開ける音、乘客の下りる音、先きに行つて機關車から白い烟が呼吸をつくやうにぱッ〳〵颺る。

續いて上りの汽車の近づいて來る響、女學生、男敎師、女敎師皆な其方の方を見る。一人の車掌レールのすぐ上のところに立つて、頻りに危險を警戒する。響次第に次第に近くなる。近くなる。やがて轟然として雪をわけて入つて來る汽車、煤烟、エンジン、曇つた客車の窓、旅客の顏。

汽車とまる。

女學生、女教師、男教師、一同皆々後の列車の方へと行く。教頭はあとから靜かにつゞく。

客車のすぐあとについた貨物車の中から校長の顔見える。銑太郎の顔見える。女學生が大勢その前に行つたと同時に、校長はヒラリと其處から下りる。銑太郎も下りる。

男教師　(聲を擧げて)　整列！

女學生一同皆前に並ぶ。

校長　(教頭に)　今日は御苦勞でした。あそこに……この方が鈴木さんの兄さんです。

教頭　(禮をする、近寄つて)　何うもこの度は。何とも……。

銑太郎　(禮をかへして)　何うも難有う御座いました。(そこに並んでゐる男女教員に)　何うも皆さまお見送り下さいまして難有う御座いました。

まさ子　(つかづかと貨車の前に進む)　鈴木さんが其處に、其處にゐらつしやるんですか。

銑太郎　難有う……。

まさ子　(棺をのぞくやうにして)　まア、何ンて言ふことでせうね。(泣崩折れる)

女學生皆涙を飲む。

先程まで女學生達の隅の方にゐた茶色の中折を冠つた二十八九の學生風の男、銑太郎の親友吉田三郎、つかづかと前に進む。

銑太郎　(それを見附けて)　ヤア、君。

吉田　(激して)　とう／＼こんなことになつたんだつてね、君。一昨日、君は安心してゐたから大丈夫だと思ふてゐたんだよ、君。僕は驚いちやつた――。

銑太郎　難有う……何うもこれも運命だよ。

吉田　何と言つて好いかわからないよ、君。こんな事件が君の妹の身の上に起らうとは夢にも思はなかつたよ。現實が何うの、理想が何うのツて言つてゐる中に、かういふ事實が若い少女の手に由つて實行されるんだからね。(激して)　僕なんか、徒にかうしてゐる時ぢやないよ。空論に捉はれてゐる時ぢやないよ。

銑太郎　(同じく激越な調子で)　難有う。僕も教へられるところが多かつた。死といふことを僕は痛感したよ。妹は徒らには死ななかつた。此間も言つた通り、僕は愈決心したよ。故郷には、故郷には、もう何も思ひ殘すところがなくなつたよ。僕は今からは自由な體だ。妹

のことを考へて、故郷は捨て難いやうな氣がしてゐたがもうそれもなくなつた。僕はいよ〳〵海に浮ぶよ。船の人になるよ。（杉山老人のことが思ひ出されて來たやうに）人生はまだ我々にはわからない。わからないことか非常に多い。我々はそれを解釋しなければならない。新しく解釋して、新しく生きなければならない。

吉田　本當だ。僕も昨夜一晩寢ずに考へたよ。

銑太郎　世の中には悲慘なことが澤山にある。君、僕は昨夜、もう一人の方の死屍を老人と一緒に燒場に持つて行つて燒いた。それほど悲慘な感激を受けたことはなかつた。君、君、一昨日此處を出かけて行く時には、此方はまださう雪が積つてゐなつかたけれど、今日歸つて來て見ると、一面の雪だ、眞白の雪だ。一夜の中に雪の世界になつて了つた……。

發車の時刻近づく。

校長　それでは此處で御免を蒙ります。君、忘れずにゐて呉れ給へ。このシーンを。この人生の一光景を。

發車の汽笛。

男教師　（手を擧げて）禮！

女學生大勢頭を下げる。中には聲を飲むものがある。

汽車靜かに動き始む。

銑太郎　難有う御座いました。（吉田と顏を見合せてゐたが、段々汽車の動くにつれて、獨語のやうに）もう思ひ殘すことはない。これで妹を父母の傍に葬つて了へば、それで故郷には思ひ殘すところはない。海へ、海へ、不可解の海へ、不可解の人生へ！

汽車速力が早くなる。やがて構内を出て行く。

女學生一同頭を上げる。

甲　可哀相ねえ。

乙　お氣の毒ねえ。

戊　兄さんは、本當に何んなでせう。

まさ子　（ハンカチーフを顏に當てゝ）鈴木さんは死んで了つた！　鈴木さんは死んで了つた！

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

■近代思潮叢書■

■生田長江氏著　■一月一日新刊發賣

第一編

ニイチエ 超人の哲[illegible]

フリードリツヒ、ニイチエに關する述作[illegible]喧傳せらるゝ時代は過ぎぬ。今やいさましく最近思想の[illegible]流に掉して汪洋たる[illegible]海に乗り出でむとする新生活の憧憬者等にとりて壯烈なる彼の思想と人格とは最も嚴肅なる最も眞摯なる研究攻窮の題目たらずんばあらず。本書はニイチエの第一の發見者紹介者たるゲオルヂ、ブランデス氏の一八八九年より一九〇九年に至る前後四回の論文に基礎を置き、本邦に於ける随一のニイチエ學者たる生田長江氏が新たなる洞察と熱情とを以て執筆せられたるもの少くとも、近時思想界の一事件たるを失はざるべし。敢て高級の諸君に一讀をすゝむ。

クロース製美本
菊半截貳百五十頁
定價金五十錢
郵送料金六錢

■岩野泡鳴氏著　■一月十五日出版發賣

第二編

悪魔主義の思想と文藝

平凡卑淺なる思想に沈洵して隨眠を貪りつゝある時、淺皮なる常識、卑俗なる感情、平板なる技巧を蹂躙して、深刻なる勝利の凱歌を奏せんがため『悪魔主義の思想と文藝』は出でたり、而して米にポー、佛にボードレール及びヱルレーヌ、英にスヰンバーン及びワイルドを産めるのみならず苟も近代文藝及び思想界の大天才と稱せらるゝものゝ一人として悪魔主義の洗禮を受けざるはなし。然るに我が文壇及び思想界は依然として舊套を脱せず、平板單調なる傾向を追蹤し文藝及び思想界を卑俗化せんとす。この時に當り、著者二百餘日を費し、心血を絞りて今やこの書成る。我が文壇及び思想界に裨益する處少なからざるべし

クロース製美本
菊半截貳百五十頁
定價金五十錢
郵送料金六錢

東京小石川區
■雑司ケ谷町百番地

天弦堂發行

■振替貯金口座
■東京貳九五五九番

[illegible]
仝　京橋區尾張町　東海堂
仝　京橋區元數寄屋町　北隆館
仝　京橋區西紺屋町　良明堂
仝　日本橋區本石町　至誠堂
大阪市北區梅田町　盛文館
仝　東區京町堀　太華堂
仝　東區瓦町　東枝支店
京都市七條停車場前　三共社

○定價　金貳拾五錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國	以上郵稅共
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢	
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢	

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御註文の方は內國は金四圓二拾五錢外國は金五圓九拾五錢の割となる

廣告取次店　博報堂、弘報堂、正路喜社、一星社
金蘭社、万年社、秀逸堂、信賴社

本號特價金六拾錢　郵稅金四錢五厘

[illegible]央公論社とし拂渡局を東片町局と指定あ[illegible]
なし
一振替貯金　口座は東京三十四番なり
一郵劵代用　必ず一割增の事
一集金郵便　の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
一金一圓迄　金六錢（集金委託料
一金五圓迄　金七錢　及送達料共）
一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正三年十二月廿三日印刷納本
大正四年一月一日發行　（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　高木酉三

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地
中央公論社
電話㊄下谷九一一九
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
...bscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including
...d at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matt...